

# 荒砥諏訪西遺跡 II

《中・近世遺構編》

# 荒砥諏訪遺跡

昭和58年度県営圃場整備事業荒砥北部  
地区に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書

2002

群馬県教育委員会  
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



# 荒砥諏訪西遺跡 II

《中・近世遺構編》

# 荒砥諏訪遺跡

昭和58年度県営圃場整備事業荒砥北部  
地区に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書

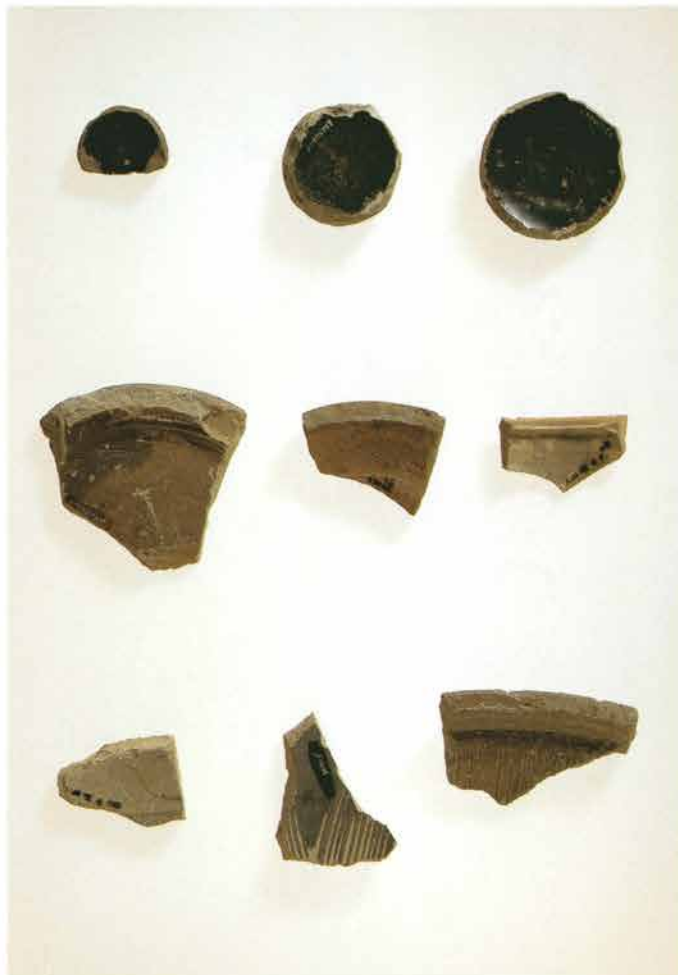
2002

群馬県教育委員会  
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

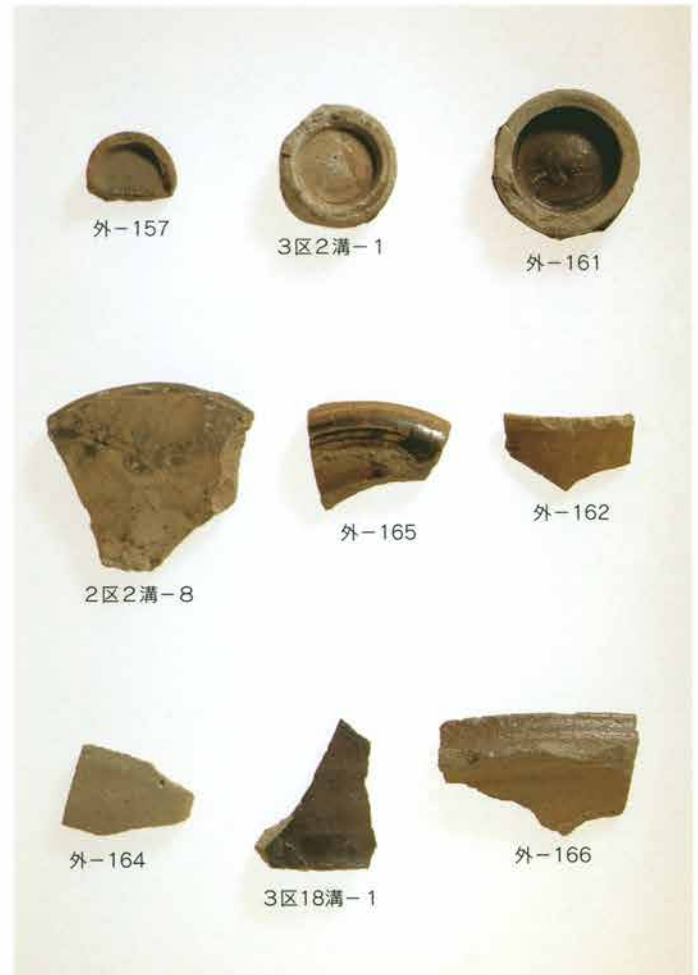




荒砥諏訪西遺跡陶磁器



荒砥諏訪西遺跡陶磁器





# 序

前橋市の旧荒砥地区では、昭和56年度から国道50号の北側地域を対象にした県営荒砥北部圃場整備事業が始まり、平成3年度まで行われました。圃場整備の対象になった地域は、県内でも有数の埋蔵文化財密集地で、多くの埋蔵文化財が記録保存の発掘対象となりました。

当事業団では昭和56年度から59年度に対象となった事業地内における埋蔵文化財の発掘調査を行いました。本来なら発掘調査後、直ちに報告書を刊行する予定でしたが、諸般の事情により、平成5年度から整理作業を開始し、これまでに6遺跡、8冊の調査報告書を刊行いたしました。

平成14年度には、昭和58年度に発掘調査を実施した荒砥諏訪西遺跡・荒砥諏訪遺跡の整理事業を実施し、ここにその報告書を上梓することとなりました。

荒砥諏訪西遺跡は、古墳時代から中・近世にかけての複合集落遺跡で、検出した遺構・遺物は膨大な数量でした。平成12・13年度を第1年次とし、古墳時代の竪穴住居とその出土遺物を対象に報告書の発刊をおこないました。今回の報告は、その続刊となるもので、中・近世の遺構・遺物を中心に古墳時代の畠・古墳、浅間B軽石下の水田などの報告が主な内容となります。赤城山南麓地域における中・近世の遺跡動向を研究する上で貴重な資料を新たに加えることとなりました。

発掘調査から報告書刊行まで、群馬県農政部土地改良課、前橋土地改良事務所、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、地元関係者の皆様には、一方ならぬご指導、ご協力を賜りました。厚く感謝の意を表します。

最後に、本報告書が、地域の歴史解明のため、多くの人々によって有効に活用されることを願い序といたします。

平成15年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
理事長 小野宇三郎





# 例 言

1. 本書は1983（昭和58）年度の県営圃場整備事業荒砥北部地区に伴う荒砥諏訪西遺跡、および荒砥諏訪遺跡の発掘調査報告書である。荒砥諏訪西遺跡については、その第2分冊である。
2. 荒砥諏訪西遺跡は、群馬県前橋市荒口町899番地を中心としている。遺跡名は、遺跡のある旧村名である「荒砥（あらと）」に、字名の「諏訪西」を付して「荒砥諏訪西」とした。また、荒砥諏訪遺跡は前橋市荒口町726番地を中心に所在した。遺跡名は、従前の「荒砥」に、字名の「諏訪」を付して「荒砥諏訪遺跡」とした。
3. 発掘調査は、群馬県農政部、前橋土地改良事務所・群馬県教育委員会の委託により、（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。両遺跡の発掘調査時の組織体制は次のとおりである。

期 間 1983（昭和58）年10月4日～1984（昭和59）年3月24日

管理・指導 小林起久治、白石保三郎、松本浩一、近藤平志、細野雅男

事務担当 国定 均、笠原秀樹、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏

（（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団職員）

野島のぶ江、吉田恵子、吉田笑子、並木綾子、今井もと子（同補助員）

調査担当 鹿田雄三（同調査研究員、現 県立伊勢崎東高等学校教諭）、

藤巻幸男、小島敦子、斉藤利昭、徳江秀夫（同調査研究員）

4. 発掘資料の整理および報告書の作成は、群馬県教育委員会の委託により、（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。整理・報告書の作成期間・体制は次のとおりである。

期 間 2002（平成14）年4月1日～2003（平成15）年3月31日

管理・指導 小野宇三郎、吉田 豊、神保侑史、萩原利通、巾 隆之、植原恒夫、西田健彦

事務担当 小山建夫、高橋房雄、須田朋子、吉田有光、森下弘美、田中賢一（同事業団職員）

今井もと子、内山佳子、若田 誠、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子、

松下次男、吉田 茂（同補助員）

編 集 徳江秀夫（同事業団職員主幹兼専門員）

本文執筆 檜崎修一郎（専門員）一第4章、飯森康広（主任調査研究員）一第5章第2節、徳江秀夫一左記以外

遺 構 写 真 調査担当者

遺 物 写 真 佐藤元彦（同事業団職員主幹兼係長代理）

遺 物 観 察 徳江秀夫（中・近世土器類の生産地・年代については大西雅広（主幹兼専門員）に教示を得た）

保 存 処 理 関 邦一（同事業団職員）、土橋まり子（同嘱託員）、小材浩一（同補助員）

器 械 実 測 田中富子、富沢スミ江、伊東博子、岸 弘子（同補助員）

遺物整理・ 桑原恵美子、須田育美、高梨房江、小池 縁、嶋崎しづ子、高橋初美、木暮芳枝、

図 面 作 成 馬場信子、儘田澄子、新井雅子、丸橋富美子、田中のぶ子、田中富美子、阿久津裕美、

石井伸彦、泉 悦子、今井千秋、狩野 真、狩野 勝、黒沢美弘、齋木洋子、船藤秀子、

高野淑江、竹鶴小百合、三橋博之、山本千晶、金井隆明、国安真美、小池次男、桜井次男、

白石満美子、竹之内芳明、角田 修、土井洋子、本所智子、三浦 尚、矢部素子、

山岸洋一、吉尾千鶴、吉田圭子（同補助員）

委託関係 (株)測研

5. 石材同定にあたっては飯島静男氏（群馬県地質研究会会員）にご教示を得た。
6. 発掘調査および本書の作成にあたり、下記の諸氏よりご助言を得た。記して感謝の意を表したい。  
井上唯雄、鹿田雄三、関口巧一、前原 豊（敬称略）  
群馬県農政部土地改良課 群馬県農政部前橋土地改良事務所 荒砥北部土地改良区 群馬県教育委員会  
なお、整理作業において事業団職員の原雅信、藤巻幸男、小島敦子、岩崎泰一、大西雅広、檜崎修一郎、飯森康広から助言を得た。
7. 出土遺物は一括して群馬県埋蔵文化財センターおよび(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が保管している。

## 凡 例






1. 本調査に用いたグリッドは、調査区全体をカバーできるように、100mの大グリッドを設定し、その中を5×5mの小グリッドとした。グリッドの呼称は100mの大グリッドを独立した単位とし、北西コーナーの交点をa-0とし西から東方向に0から19まで、北から南方向にaからtまでとし、Pa-1のように呼称した。
2. 本書における遺構番号は、調査時に付されたものをそのまま使用している。このため欠番が生じている。
3. 遺構図の中で使用した北方位は、すべて磁北を使用している。
4. 本書で使用した国家座標は日本測地系によるものである。
5. 遺構図・遺物図の縮尺は、原則として以下のとおりである。縮尺の異なるものが併載される場合は、それぞれにスケールを付した。

遺構図 畠 1：100 井戸 1：60 土坑 1：60 溝断面図 1：50

遺物図 土器 1：4 土器拓影 1：3 石器・石製品 1：3 大型石器 1：6

小型石器、古銭拓影 1：1

6. 遺物番号は本文・挿図・表・写真図版と一致する。
7. 図中で使用したスクリーン・インレタは以下のとおりである。

遺構図 古墳の床石部分  浅間B軽石堆積層  焼土   
遺物図 陶磁器の施釉部分  煤付着部分 

8. 遺物の重量の計測にあたっては6000gまでは1g単位、20kgまでは50g単位、20kg以上は100g単位の秤を使用して計測した。
10. 各地図の使用は以下のとおりである。  
第1図 国土地理院発行、20万分の1地勢図（長野・宇都宮）  
第2図 前橋市土地改良事務所発行、県営圃場整備事業荒砥北部地区計画概要  
第3図 『群馬県史』通史編1付図を簡略化した『荒砥上ノ坊遺跡I』第5図を修正して使用。  
第4図・第6図・第7図・第127図・第128図 前橋市発行、昭和49年測図現形図47  
第5図 国土地理院発行、2万5千分の1地形図（大胡）  
第8図・第129図 前橋市発行、平成10年測図現形図47

# 目 次

口 絵	
序	
例 言	
凡 例	
目 次	
挿図目次	
表 目 次	
写真目次	
第 1 章 調査の経過と遺跡の概要	
第 1 節 調査に至る経過	1
第 2 節 遺跡の立地と環境	3
第 3 節 発掘調査の方法と経過	10
第 2 章 荒砥諏訪西遺跡の調査	
第 1 節 検出された遺構と遺物	13
第 2 節 古墳時代の遺構と遺物	13
第 3 節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物	37
第 4 節 中・近世以降の遺構と遺物	51
第 5 節 遺構外出土の遺物	158
第 6 節 古墳時代竪穴住居出土の遺物（補遺）	178
第 3 章 荒砥諏訪遺跡の調査	
第 1 節 発掘調査の方法	179
第 2 節 検出された遺構と遺物	181
第 4 章 分 析 荒砥諏訪西遺跡出土人骨	196
第 5 章 調査成果と整理のまとめ	
第 1 節 調査の成果	198
第 2 節 荒砥諏訪西遺跡 2 区中世屋敷に関する予察	201
参考文献	203
遺物観察表	205
写真図版 荒砥諏訪西遺跡	P L 1～P L 43
荒砥諏訪遺跡	P L 44～P L 48
報告書抄録	
付図 1. 荒砥諏訪西遺跡 2 区の遺構	2. 荒砥諏訪西遺跡 3 区の遺構
3. 荒砥諏訪西遺跡 2 区の掘立柱建物(1)	4. 荒砥諏訪西遺跡 2 区の掘立柱建物(2)
既刊 『荒砥諏訪西遺跡 I』《竪穴住居編》	

# 挿 図 目 次

第 1 図	荒砥諏訪西遺跡・荒砥諏訪遺跡の位置 …… 1	第 37 図	4 区検出の遺構 ……46
第 2 図	県営圃場整備事業荒砥北部地区と 昭和58年度工事区 …… 2	第 38 図	4 区 1・2 号土坑 ……47
第 3 図	群馬県中央部の地形と荒砥諏訪西遺跡 ・荒砥諏訪遺跡 …… 3	第 39 図	4 区溝(1)と出土遺物 ……48
第 4 図	荒砥諏訪西遺跡・荒砥諏訪遺跡周辺の地形… 4	第 40 図	4 区溝(2)と出土遺物 ……49
第 5 図	荒砥諏訪西遺跡・荒砥諏訪遺跡周辺の 遺跡分布 …… 6	第 41 図	4 区溝(3) ……50
第 6 図	荒砥諏訪西遺跡調査区の設定 ……10	第 42 図	1 区検出の遺構 ……53・54
第 7 図	荒砥諏訪西遺跡調査区的位置(調査時) …11	第 43 図	1 区土坑(1) ……56
第 8 図	荒砥諏訪西遺跡調査区的位置(現状) ……12	第 44 図	1 区土坑(2) ……57
第 9 図	古墳時代前期の住居と畠の位置 ……14	第 45 図	1 区土坑(3) ……58
第 10 図	2 区畠(1) ……15	第 46 図	1 区土坑(4) ……59
第 11 図	2 区畠(2) ……16	第 47 図	1 区土坑・溝(1)出土遺物 ……60
第 12 図	2 区畠(3) ……17	第 48 図	1 区溝出土遺物(2) ……61
第 13 図	3 区畠(1) ……19	第 49 図	1 区溝出土遺物(3) ……62
第 14 図	3 区畠(2)と出土遺物 ……20	第 50 図	2 区掘立柱建物柱間計測図(1) ……66
第 15 図	浅間C軽石下凹凸面(1) ……22	第 51 図	2 区掘立柱建物柱間計測図(2) ……67
第 16 図	浅間C軽石下凹凸面(2) ……23	第 52 図	2 区井戸(1) ……70
第 17 図	浅間C軽石下凹凸面土層断面 ……23	第 53 図	2 区井戸(2) ……71
第 18 図	2 区185号土坑埋設土器(1) ……23	第 54 図	2 区井戸(3) ……72
第 19 図	2 区185号土坑埋設土器(2) ……24	第 55 図	2 区井戸出土遺物 ……73
第 20 図	3 区円形周溝状遺構 ……25	第 56 図	2 区土坑(1) ……80
第 21 図	3 区 1 号墳(1) ……26	第 57 図	2 区土坑(2) ……81
第 22 図	3 区 1 号墳(2) ……27	第 58 図	2 区土坑(3) ……82
第 23 図	3 区 1 号墳出土遺物 ……28	第 59 図	2 区土坑(4) ……83
第 24 図	3 区 1 号墳掘り方 ……28	第 60 図	2 区土坑(5) ……84
第 25 図	3 区 2 号墳 ……29	第 61 図	2 区土坑(6) ……85
第 26 図	3 区 2 号墳土層断面 ……30	第 62 図	2 区土坑(7) ……86
第 27 図	荒砥諏訪西遺跡の古墳分布 ……30	第 63 図	2 区土坑(8) ……87
第 28 図	3 区 2 号墳と出土遺物 ……31	第 64 図	2 区土坑(9) ……88
第 29 図	3 区 2 号墳掘り方 ……32	第 65 図	2 区土坑(10) ……89
第 30 図	3 区 3 号墳と出土遺物(1) ……34	第 66 図	2 区土坑(11) ……90
第 31 図	3 区 3 号墳出土遺物(2) ……35	第 67 図	2 区土坑(12) ……91
第 32 図	3 区 3 号墳出土遺物(3) ……36	第 68 図	2 区土坑(13) ……92
第 33 図	6 区浅間B軽石下水田出土遺物 ……38	第 69 図	2 区土坑(14) ……93
第 34 図	6 区浅間B軽石下水田、中・近世溝 …39・40	第 70 図	2 区土坑出土遺物(1) ……94
第 35 図	6 区浅間B軽石下水田、中・近世溝土層断面 ……………41・42	第 71 図	2 区土坑出土遺物(2) ……95
第 36 図	5 区検出の遺構と土層断面 ……43・44	第 72 図	2 区溝(1) ……97
		第 73 図	2 区溝(2) ……99
		第 74 図	2 区溝(3) ……101
		第 75 図	2 区溝(4) ……103
		第 76 図	2 区溝(5) ……104

第77図	2区溝(6)……………	105	第111図	3区溝出土遺物……………	154
第78図	2区溝(7)……………	108	第112図	遺構外出土の遺物(1)……………	163
第79図	2区検出の溝……………	109	第113図	遺構外出土の遺物(2)……………	164
第80図	2区溝出土遺物(1)……………	110	第114図	遺構外出土の遺物(3)……………	165
第81図	2区溝出土遺物(2)……………	111	第115図	遺構外出土の遺物(4)……………	166
第82図	2区溝出土遺物(3)……………	112	第116図	遺構外出土の遺物(5)……………	167
第83図	2区溝出土遺物(4)……………	113	第117図	遺構外出土の遺物(6)……………	168
第84図	2区溝出土遺物(5)……………	114	第118図	遺構外出土の遺物(7)……………	169
第85図	2区溝出土遺物(6)……………	115	第119図	遺構外出土の遺物(8)……………	170
第86図	2区溝出土遺物(7)……………	116	第120図	遺構外出土の遺物(9)……………	171
第87図	3区1号掘立柱建物……………	117	第121図	遺構外出土の遺物(10)……………	172
第88図	3区井戸(1)……………	120	第122図	遺構外出土の遺物(11)……………	173
第89図	3区井戸(2)……………	121	第123図	遺構外出土の遺物(12)……………	174
第90図	3区井戸(3)……………	122	第124図	遺構外出土の遺物(13)……………	175・176
第91図	3区井戸(4)と出土遺物……………	123	第125図	遺構外出土の遺物(14)……………	177
第92図	3区墓坑……………	124	第126図	古墳時代竪穴住居出土遺物……………	178
第93図	3区土坑(1)……………	130	第127図	荒砥諏訪遺跡調査区の設定……………	179
第94図	3区土坑(2)……………	131	第128図	荒砥諏訪遺跡調査区的位置(調査時)……………	180
第95図	3区土坑(3)……………	132	第129図	荒砥諏訪遺跡調査区的位置(現状)……………	181
第96図	3区土坑(4)……………	133	第130図	荒砥諏訪遺跡検出の遺構……………	182
第97図	3区土坑(5)……………	134	第131図	1号方形周溝墓(1)……………	183
第98図	3区土坑(6)……………	135	第132図	1号方形周溝墓(2)……………	184
第99図	3区土坑(7)……………	136	第133図	2・6号方形周溝墓(1)と出土遺物……………	185
第100図	3区土坑(8)……………	137	第134図	2・6号方形周溝墓(2)……………	186
第101図	3区土坑(9)……………	138	第135図	3号方形周溝墓……………	187
第102図	3区土坑(10)……………	139	第136図	4号方形周溝墓と出土遺物……………	188
第103図	3区土坑(11)……………	140	第137図	5号方形周溝墓……………	189
第104図	3区土坑出土遺物(1)……………	141	第138図	1～3号溝……………	190
第105図	3区土坑出土遺物(2)……………	142	第139図	4号溝……………	191
第106図	3区検出の溝……………	143	第140図	5～7号溝……………	192
第107図	3区溝(1)……………	145	第141図	1号土坑……………	193
第108図	3区溝(2)……………	147	第142図	遺構外出土の遺物(1)……………	194
第109図	3区溝(3)……………	149	第143図	遺構外出土の遺物(2)……………	195
第110図	3区溝(4)……………	152			

## 表 目 次

第1表	周辺遺跡の概要……………	7・8	第7表	遺構外出土の縄文土器一覧……………	161
第2表	各調査区の概要……………	13	第8表	遺構外出土の中・近世土器一覧……………	161
第3表	水田面積一覧……………	38	第9表	遺構外出土の縄文石器一覧……………	162
第4表	1区土坑一覧……………	55	第10表	遺構外出土の土師器・須恵器一覧……………	162
第5表	2区土坑一覧……………	74	第11表	遺構外出土の石器一覧……………	162
第6表	3区土坑一覧……………	125			

# 本文中写真目次

図版1 3区3号墳にかかわる石碑(調査前) ……33

図版2 3区1号墓坑出土火葬人骨 ……197

## 写 真 目 次

### 荒砥諏訪西遺跡

PL1-1 2区1~4号畠(北から)

2 2区5号畠(北東から)

3 2区6号畠(北から)

4 2区6号畠(北から)

5 2区7号畠(北から)

6 2区6号畠土層断面(南西から)

7 2区6号畠土層断面(南から)

8 2区5号畠土層断面(北西から)

PL2-1 3区1号畠(東から)

2 3区3号畠(北から)

3 3区4号畠(南西から)

4 3区4号畠サク状溝土層断面(東から)

5 3区浅間C軽石下凹凸面(北から)

6 3区浅間C軽石下凹凸面(北から)

7 3区浅間C軽石下凹凸面(北から)

8 3区浅間C軽石下凹凸面(北から)

PL3-1 3区1号墳遺物出土状況(南から)

2 3区1号墳遺物出土状況(西から)

3 3区1号墳遺物出土状況(南から)

4 3区1号墳掘り方(南から)

5 3区2号墳(南から)

6 3区2号墳(南から)

7 3区2号墳(南東から)

8 3区3号墳(北から)

PL4-1 4区全景(東から)

2 5区西側部分(北西から)

PL5-1 4区1号溝(南から)

2 4区2号溝(南から)

3 4区3号溝(南東から)

4 4区3号溝遺物出土状況(北東から)

5 4区1・2号土坑(北西から)

6 5区西側部分(西から)

7 5区中央部分(南西から)

8 5区東側部分(北から)

PL6-1 6区浅間B軽石下水田(南から)

2 6区浅間B軽石下水田(北東から)

3 6区浅間B軽石下水田(南東から)

PL7-1 6区浅間B軽石下水田No44(南から)

2 6区浅間B軽石下水田No26(南西から)

3 6区浅間B軽石下水田No35(南西から)

4 6区浅間B軽石下水田No6(北西から)

5 6区1・2号溝(北東から)

6 6区5号溝土層断面(南西から)

7 6区東西トレンチ土層断面(南から)

PL8-1 1区2・3号土坑(北東から)

2 1区1号土坑土層断面(北東から)

3 1区4号土坑(東から)

4 1区9号土坑礫出土状況(北東から)

5 1区5・6号土坑(北から)

6 1区10号土坑礫出土状況(南東から)

PL9-1 1区13号土坑遺物出土状況(北から)

2 1区16~19号土坑(南から)

3 1区23・26号土坑(南から)

4 1区24号土坑(東から)

5 1区28~32号土坑(南東から)

6 1区29~32号土坑(北西から)

7 1区28~32号土坑(北東から)

8 1区33号土坑(西から)

PL10-1 1区全景(南東から)

2 1区5号溝(南東から)

3 1区1号溝(北から)

4 1区3号溝(東から)

5 1区1・2号溝土層断面(南東から)

6 1区3号溝土層断面(東から)

PL11-1 2区全景(北から)

2 2区3号溝南側部分(北から)

3 2区3号溝東側部分(北から)

4 2区南側部分(西から)

5 2区東側部分(北西から)

PL12—1	2区185号土坑埋設土器 (南から)	4	2区大溝遺物出土状況 (北東から)
	2 2区185号土坑埋設土器 (南から)	5	2区大溝遺物出土状況 (北東から)
	3 2区1号井戸 (西から)	6	2区1号溝 (南から)
	4 2区6号井戸 (北から)	7	2区1号溝土層断面 (南から)
	5 2区2号井戸土層断面 (東から)	PL18—1	2区3号溝 (西から)
	6 2区4号井戸土層断面 (南から)	2	2区3号溝 (北から)
	7 2区7号井戸土層断面 (南西から)	3	2区2号溝 (南東から)
	8 2区10号井戸土層断面 (西から)	4	2区3号溝土層断面 (東から)
PL13—1	2区1号土坑 (西から)	5	2区3号溝土層断面 (南東から)
	2 2区2号土坑 (西から)	PL19—1	2区4・7号溝 (西から)
	3 2区3号土坑 (西から)	2	2区4・7号溝遺物出土状況 (東から)
	4 2区4号土坑 (西から)	3	2区4・7号溝 (東から)
	5 2区7号土坑 (東から)	PL20—1	2区5号溝 (北から)
	6 2区10・266号土坑 (西から)	2	2区6号溝 (南から)
	7 2区11・101号土坑 (西から)	3	2区9号溝 (西から)
	8 2区12号土坑 (南東から)	4	2区10号溝 (北から)
PL14—1	2区15号土坑 (東から)	5	2区12号溝 (北から)
	2 2区51号土坑 (北東から)	6	2区13号溝 (北から)
	3 2区170号土坑 (西から)	7	2区15号溝 (東から)
	4 2区180号土坑 (南から)	PL21—1	3区4・5号井戸 (北東から)
	5 2区182号土坑 (東から)	2	3区3号井戸土層断面 (南から)
	6 2区184号土坑 (西から)	3	3区1・2号井戸土層断面 (南東から)
	7 2区186号土坑 (東から)	4	3区9号井戸 (西から)
	8 2区188号土坑 (南から)	5	3区11号井戸 (南東から)
PL15—1	2区190号土坑 (南から)	6	3区10号井戸 (東から)
	2 2区191号土坑 (南から)	7	3区11号井戸土層断面 (南東から)
	3 2区192号土坑 (西から)	8	3区15号井戸 (北西から)
	4 2区193号土坑 (南西から)	PL22—1	3区8号土坑 (東から)
	5 2区194号土坑 (南から)	2	3区15号土坑 (東から)
	6 2区195号土坑 (南東から)	3	3区32号土坑 (東から)
	7 2区196号土坑 (東から)	4	3区34号土坑 (東から)
	8 2区197号土坑 (北から)	5	3区49号土坑 (東から)
PL16—1	2区201~207号土坑 (南東から)	6	3区49号土坑 (西から)
	2 2区211号土坑 (東から)	7	3区50・51号土坑 (西から)
	3 2区213号土坑 (西から)	8	3区51号土坑 (東から)
	4 2区214号土坑 (東から)	PL23—1	3区53号土坑 (東から)
	5 2区215号土坑 (北から)	2	3区56~59号土坑 (東から)
	6 2区216号土坑 (北東から)	3	3区60号土坑 (東から)
	7 2区218・219号土坑 (北から)	4	3区62号土坑 (東から)
	8 2区225号土坑 (西から)	5	3区84・85号土坑 (東から)
PL17—1	2区大溝・1号溝 (東から)	6	3区98号土坑 (南東から)
	2 2区大溝・1号溝 (西から)	7	3区101号土坑 (東から)
	3 2区大溝 (東から)	8	3区102号土坑 (東から)

P L 24—1 3区122号土坑（南東から）  
 2 3区123号土坑（南から）  
 3 3区124号土坑遺物出土状況（北から）  
 4 3区136号土坑（北から）  
 5 3区142号土坑遺物出土状況（南東から）  
 6 3区144・145号土坑（南東から）  
 7 3区146号土坑（東から）  
 8 3区147・148・217号土坑（北西から）  
 P L 25—1 3区149号土坑（北東から）  
 2 3区154号土坑（南から）  
 3 3区157号土坑（東から）  
 4 3区158号土坑（南東から）  
 5 3区163号土坑（西から）  
 6 3区164号土坑（東から）  
 7 3区168号土坑（西から）  
 8 3区79・171号土坑（北西から）  
 P L 26—1 3区176号土坑（南から）  
 2 3区177号土坑（南東から）  
 3 3区177号土坑遺物出土状況（東から）  
 4 3区180号土坑（北西から）  
 5 3区187号土坑（北東から）  
 6 3区189号土坑（南西から）  
 7 3区1号墓坑（東から）  
 8 3区2号墓坑（南西から）  
 P L 27—1 3区1～3号溝（北から）  
 2 3区2～4号溝（北西から）  
 3 3区7号溝（東から）  
 P L 28 2区土坑・4区溝・3区古墳出土遺物  
 P L 29 3区古墳・1区土坑出土遺物  
 P L 30 1区土坑・溝出土遺物  
 P L 31 2区井戸・土坑・溝出土遺物  
 P L 32 2区土坑出土遺物  
 P L 33 2区溝出土遺物  
 P L 34 2区溝出土遺物  
 P L 35 3区井戸・土坑出土遺物  
 P L 36 3区土坑・溝出土遺物  
 P L 37 遺構外出土の遺物  
 P L 38 遺構外出土の遺物  
 P L 39 遺構外出土の遺物  
 P L 40 遺構外出土の遺物  
 P L 41 遺構外出土の遺物  
 P L 42 遺構外出土の遺物  
 P L 43 遺構外出土の遺物・古墳時代竪穴住居出土の遺物

荒砥諏訪遺跡

P L 44—1 1・2号方形周溝墓（北東から）  
 2 1号方形周溝墓（北東から）  
 3 1号方形周溝土層断面（南から）  
 4 2号方形周溝墓（北東から）  
 5 2号方形周溝墓遺物出土状況（西から）  
 P L 45—1 2号方形周溝墓土層断面（北から）  
 2 2号方形周溝墓土層断面（南から）  
 3 6号方形周溝墓（北から）  
 4 6号方形周溝墓土層断面（東から）  
 5 4号方形周溝墓（北西から）  
 6 4号方形周溝墓遺物出土状況（西から）  
 7 4号方形周溝墓土層断面（南から）  
 8 4号方形周溝墓土層断面（西から）  
 P L 46—1 3号方形周溝墓（北から）  
 2 5号方形周溝墓（北東から）  
 3 5号方形周溝墓（北から）  
 4 5号方形周溝墓土層断面（東から）  
 5 1～3号溝（北から）  
 6 1・2号溝（北から）  
 7 3号溝（北から）  
 8 3号溝土層断面（南から）  
 P L 47—1 4号溝（南から）  
 2 5号溝（北から）  
 3 5号溝（北から）  
 4 5号溝土層断面（南から）  
 5 5号溝土層断面（南から）  
 6 1号土坑（南から）  
 7 1号土坑土層断面（南から）  
 P L 48 出土遺物



## 第1章 調査の経過と遺跡の概要

### 第1節 調査に至る経過

#### (1) 県営圃場整備事業と発掘調査の経過

ここに報告する荒砥諏訪西遺跡は、群馬県前橋市の東南部、旧荒砥村地域で実施された県営圃場整備事業荒砥北部地区に伴って発掘調査された遺跡の一つである（第1図）。

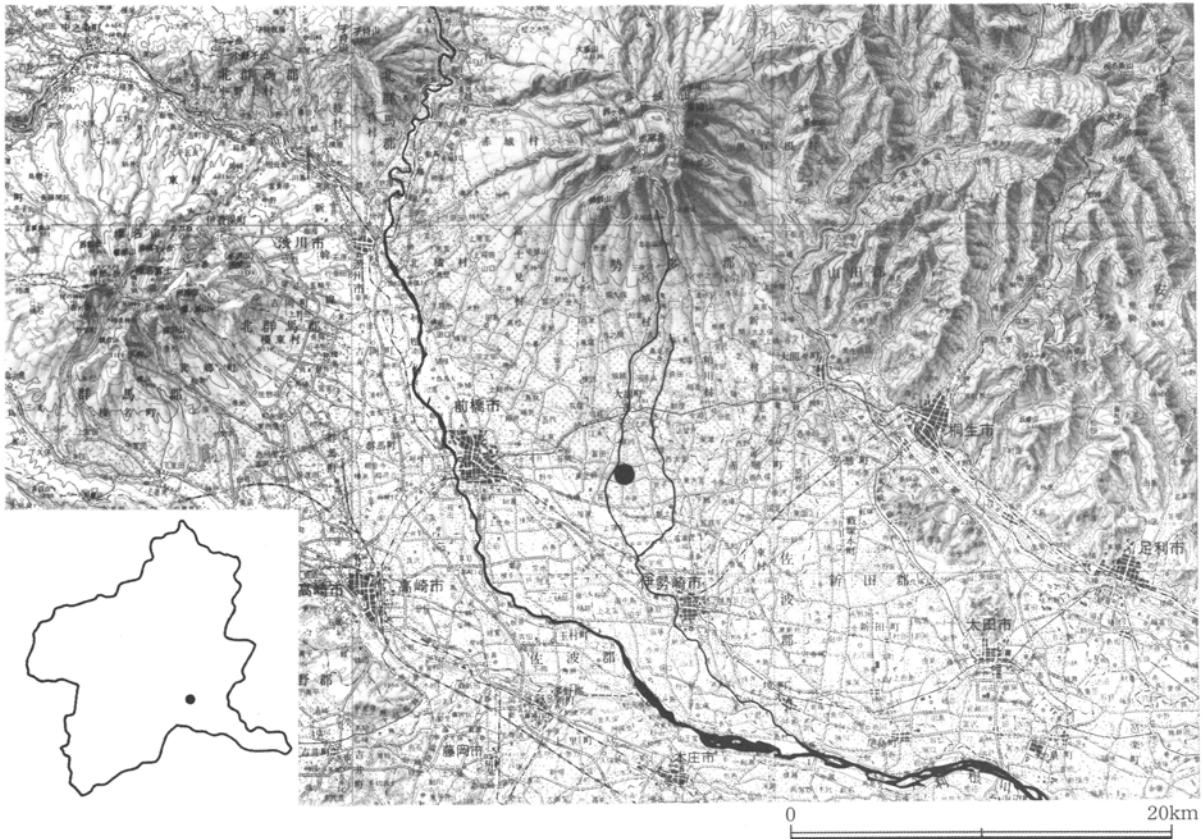
荒砥北部地区において圃場整備事業が実施されたのは1981（昭和56）年から1991（平成3）年にかけてのことであり、その範囲は、旧荒砥村地域の内、荒口町、荒子町、泉沢町、下大屋町、西大室町、二之宮町にまたがる地域で、総事業量の対象面積は821haに及んだ。

圃場整備事業の対象地内には多数の古墳群や女堀遺跡をはじめとした周知の遺跡が多数存在し、古く

から考古学的に著名であり、注目されてきた地域である。

荒砥北部地区の圃場整備事業が実施されるにあたっては、群馬県農政部と群馬県教育委員会との間で、文化財の保護を前提とした協議がなされた。その結果、埋蔵文化財の包蔵地が圃場整備事業の対象区域から除外することが不可能であり、かつ、事業の実施により埋蔵文化財が破壊される区域においては、事前に発掘調査を実施することとなった。これらの地域における発掘調査は、原則として、新たに計画される道・水路や低・台地の切土部分を対象とすることで合意された。

発掘調査は、圃場整備事業の進捗に合わせて、1981（昭和56）年度から、1984（昭和59）年度まで群馬県埋蔵文化財調査事業団が対応してきたが、調



第1図 荒砥諏訪西遺跡・荒砥諏訪遺跡の位置



第2図 県営圃場整備事業荒砥北部地区と昭和58年度工事区

査量の増加に伴い、1982（昭和57）年度以降の発掘調査は、事業団と群馬県教育委員会が分担し、1984（昭和59）年度以降の調査は、群馬県教育委員会と荒砥北部遺跡群調査会に引き継がれ、1991（平成3）年度で全て終了した。

荒砥諏訪西遺跡・荒砥諏訪遺跡を調査した1983（昭和58）年度は、県営圃場整備事業荒砥北部地区の第4工区、荒口町・荒子町地内が事業対象地域であった（第2図）。この年は、荒砥諏訪西遺跡のほか荒砥宮田遺跡、荒砥諏訪遺跡、諏訪遺跡、諏訪西遺跡、柳久保遺跡、川籠皆戸遺跡、堤東遺跡が発掘調査されている。

本書で報告する荒砥諏訪西遺跡は古墳時代から中・近世までの複合集落遺跡である。調査は、切土部分・新設の道・水路部分を対象とした6箇所の調査区で、その面積は、試掘調査分の5,700㎡を含めた36,620㎡となった。

荒砥諏訪遺跡は、荒砥諏訪西遺跡の東側、標高110m前後の洪積台地上に位置する遺跡で、新設の道・水路部分を対象に1,930㎡の調査を実施し、方形周溝

墓・溝・土坑を検出した。

群馬県埋蔵文化財調査事業団は、荒砥北部地区で調査をした荒砥大日塚遺跡以下8遺跡について群馬県教育委員会の委託を受け、1993（平成5）年度から整理事業を実施しており、本年度は、その第9年次にあたる。これまでに6遺跡8冊についての発掘調査報告書を刊行している。荒砥諏訪西遺跡については、既に『荒砥諏訪西遺跡Ⅰ』を刊行している。

## （2）調査に至る経緯

調査を開始するに先立ち、工事行程との調整を図り、発掘調査区とその対象面積を確定することを目的に分布調査を実施した。

分布調査は、5月から7月に調査担当3名が第4工区全域を踏査し、遺物分布の地点、密集度、種類、時期などを記録した。

次に、分布調査の成果をもとに試掘調査が実施された。荒砥川に面したA・B・C工事対象地では分布調査時、広範囲にわたり古墳時代の土器片の散布が見られ、集落の存在が充分想定された。このため、後に荒砥諏訪西遺跡の2区、3区として調査を実施した地点は切り土工事対象地であったので、20m間隔に1箇所の割合で東西方向に平行するトレンチを配置し、大型掘削重機による試掘調査を実施した。調査にあたっては遺構および遺物包含層の有無、遺構確認面の深さ、軽石を主とした土層の堆積状況を把握、記録した。

その結果、表土下に竪穴住居、あるいは溝、土坑などの諸遺構、あるいは浅間B軽石の堆積が確認された。この時点で、遺構未確認部分については調査対象地から除外した。

これらの事前作業を基礎資料として前橋土地改良事務所と協議を重ねた。その結果、当初予定していたA・B・C工事区内の全ての調査対象地域について事業団の体制だけでは工事予定期間に調査を終了することが困難な状況が生まれた。そこで、C工事区については群馬県教育委員会文化財保護課が担当し、A・B工事については事業団が対応することとなった。

第2節 遺跡の立地と環境

(1) 遺跡の位置と地形

荒砥諏訪西遺跡及び荒砥諏訪遺跡は、群馬県前橋市の東南部、荒口町に位置し、JR両毛線の駒形駅から北北東に約3.7kmの距離にある。

両遺跡は、群馬県の県央部東側に位置する赤城山南麓に形成された火山麓扇状地端部にあたる。山麓を流下する荒砥川、神沢川、宮川、江龍川などの河川や台地端部からの湧水により火山麓扇状地に樹枝状の開析が進み、台地と沖積地が複雑に入り込む地形が形成されている。特に、荒砥北部地区では帯状の沖積地が発達し、起伏に富んだ地形が広がっている。荒砥川以西は同じ赤城山の山体でも基底に大胡火砕流が堆積する面である(第3図)。

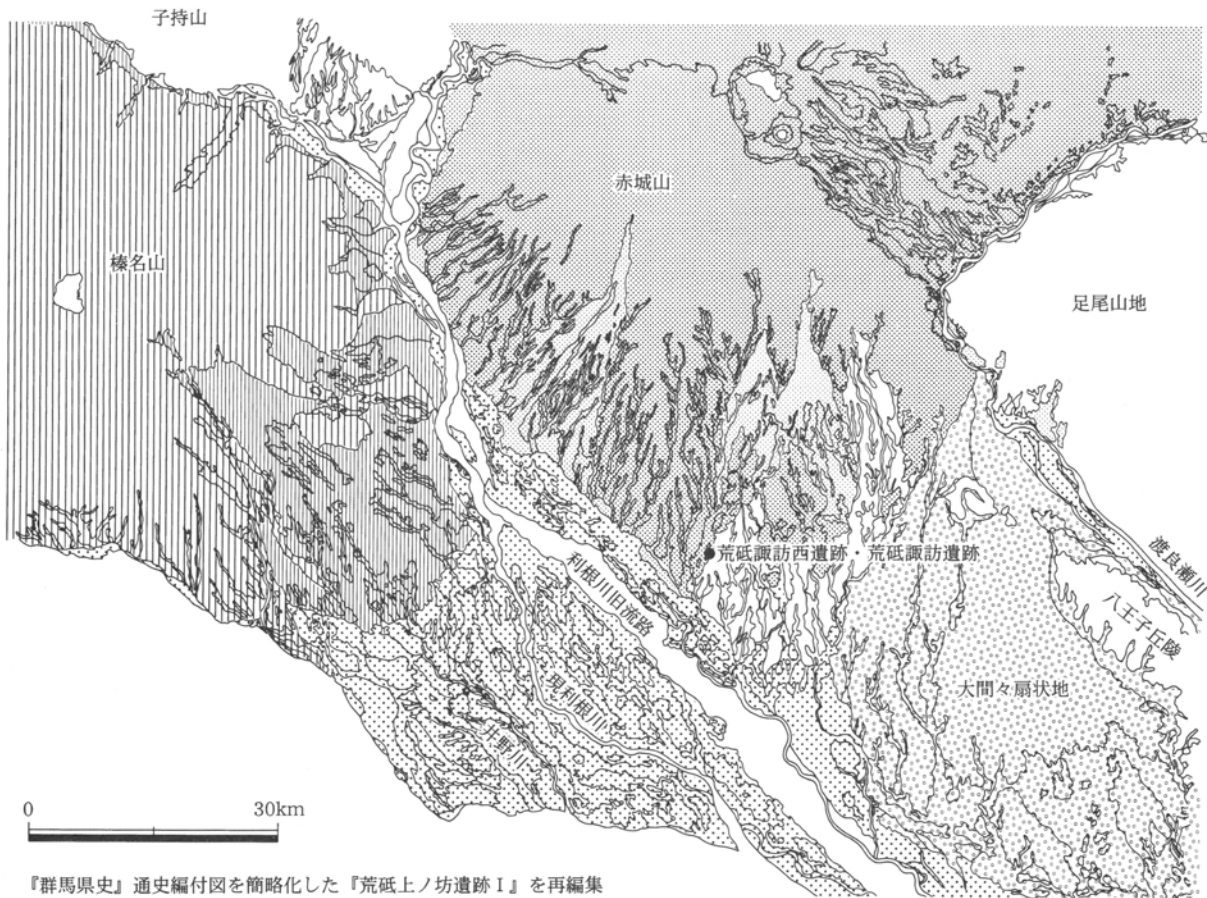
両遺跡周辺の基盤層は赤城山起源の泥流層である。地表面はローム台地の原形面、砂壤土からなる

微高地、沖積地に分類される。ローム台地に付随して存在する微高地は、縄文時代早期から前期にかけて、赤城山の山体が降雨災害等によって崩壊し、河川の運搬作用の結果、流速が衰える山麓端部に再堆積することにより形成されたと考えられている。

また、両遺跡は利根川の支流、荒砥川の左岸に位置する。荒砥諏訪西遺跡は、すぐ南側に位置する荒砥宮田遺跡が半島状の延びたローム台地上に位置するのに対し、砂壤土の二次的堆積により形成された微高地にある。標高は102~104mを測り、南側に向かって緩やかに傾斜している。今回の調査区は微高地の南端から中程にあたる。遺跡地の東西両縁には沖積地が延びている(第4図)。

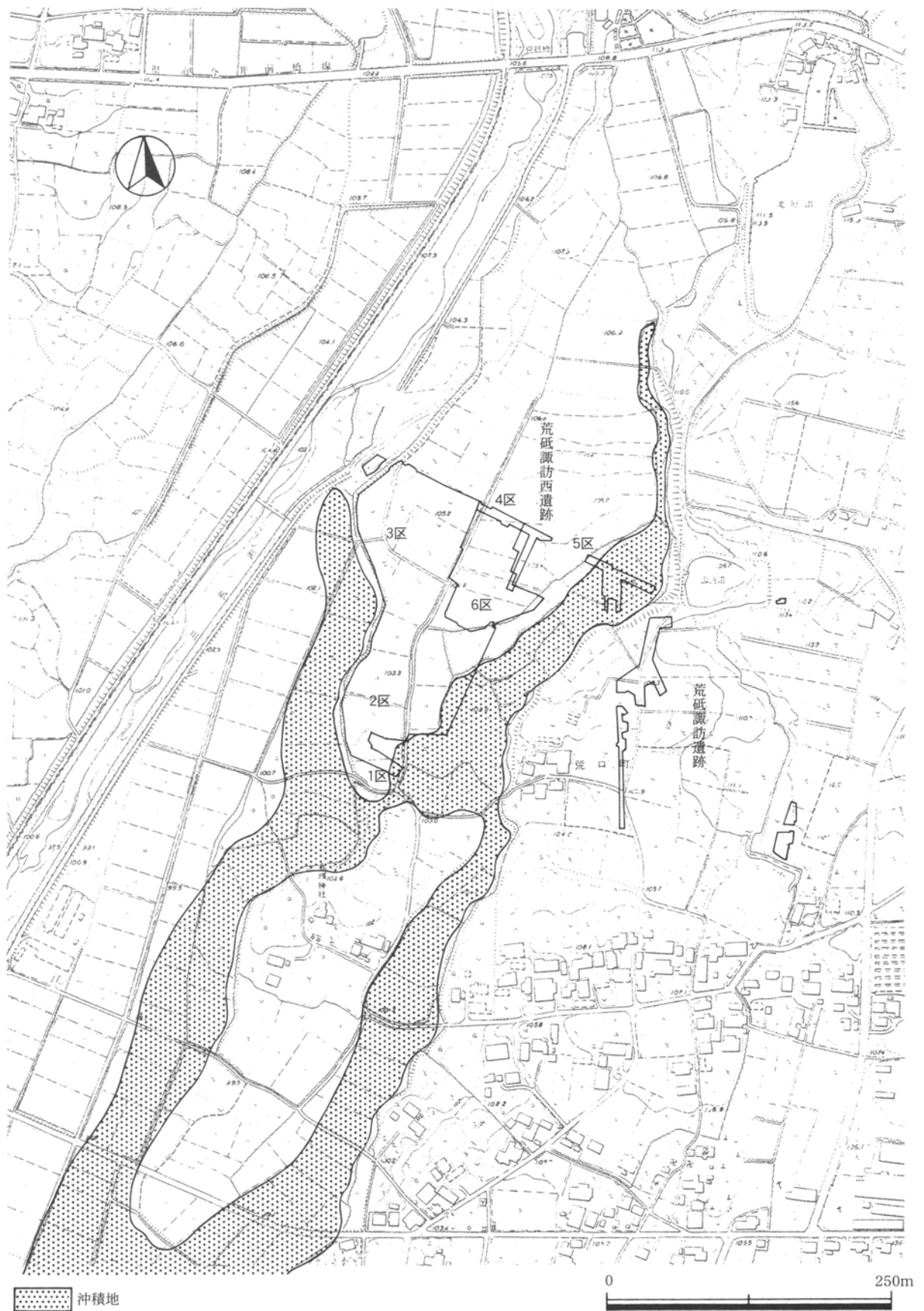
(2) 周辺の遺跡

ここでは荒砥諏訪西遺跡で検出された遺構・遺物を理解するために周辺の歴史的環境についてふれておきたい。概観する範囲は、荒砥地域とこれに隣接



『群馬県史』通史編付図を簡略化した『荒砥上ノ坊遺跡I』を再編集

第3図 群馬県中央部の地形と荒砥諏訪西遺跡・荒砥諏訪遺跡



第4図 荒砥諏訪西遺跡・荒砥諏訪遺跡周辺の地形

する大胡町南部、荒砥川右岸の桂萱地域の一部を含めるが、荒砥川以西については現時点では地域内の遺跡分布の在り方を正しく反映させるほどの調査事例が知られていない（第5図）。

弥生時代中期後半の住居は、荒砥前原遺跡、荒砥島原遺跡、頭無遺跡、荒砥北三木堂遺跡、荒口前原遺跡で検出されている。後期になると、荒砥前原遺跡、鶴ヶ谷遺跡群B区、梅木遺跡、北山遺跡で住居の検出が報告されている。これら弥生時代の遺跡は、沖積地を臨む台地縁辺や微高地上に立地しており、居住域に接した沖積地の一部を生産域とする小規模な集落が形成されていたと考えられる。

古墳時代初頭から前期の集落は、弥生時代後期の遺跡分布からは一転、きわめて濃密な分布状況を呈し、荒砥地域のほぼ全域におよんでいる。その分布は、大胡町域にもみられ茂木山神II遺跡、上ノ山遺跡、中宮関遺跡などが調査されている。遺跡の立地は、小河川の流域ごとにほぼ一定の間隔をおいて集落が形成されている。そしてこれらは、小河川に沿って、あるいは、小河川の合流点を臨む台地縁辺や沖積地の谷頭周辺に立地していることが確認されている。当該期の集落は、小河川の流水や谷頭からの湧水に依拠して生産域を維持していたと思われる。

荒砥諏訪西・荒砥諏訪遺跡の周辺には近接して、荒砥宮田遺跡（集落、方形周溝墓1基）、諏訪遺跡（方形周溝墓群）が位置する。上流域には北原遺跡、丸山遺跡が、下流域には荒砥前田II遺跡、荒砥北原遺跡が、対岸には宮下遺跡があり、多数の住居が検出されている。

生産域の調査事例としては、二之宮千足遺跡や二之宮宮下東遺跡で浅間C軽石に埋没した水田が検出された。また、荒砥天之宮遺跡G区や荒砥宮川遺跡の微高地上では浅間C軽石を鋤込んだ畠が確認されている。荒砥上ノ坊遺跡では浅間C軽石に埋没した畠が検出されている。

この時期の集落には近接して周溝墓が築造される事例が多い。これらの遺跡では居住域とはその占地を区別し、群在する状況が普遍的に見られる。その

中、上縄引遺跡1基、阿久山遺跡1基、堤東遺跡1基、中山A遺跡1基、東原B遺跡4基の合計8基、前方後方形周溝墓が検出されている。この他、荒砥川以西の富田高石遺跡でも1基検出されている。

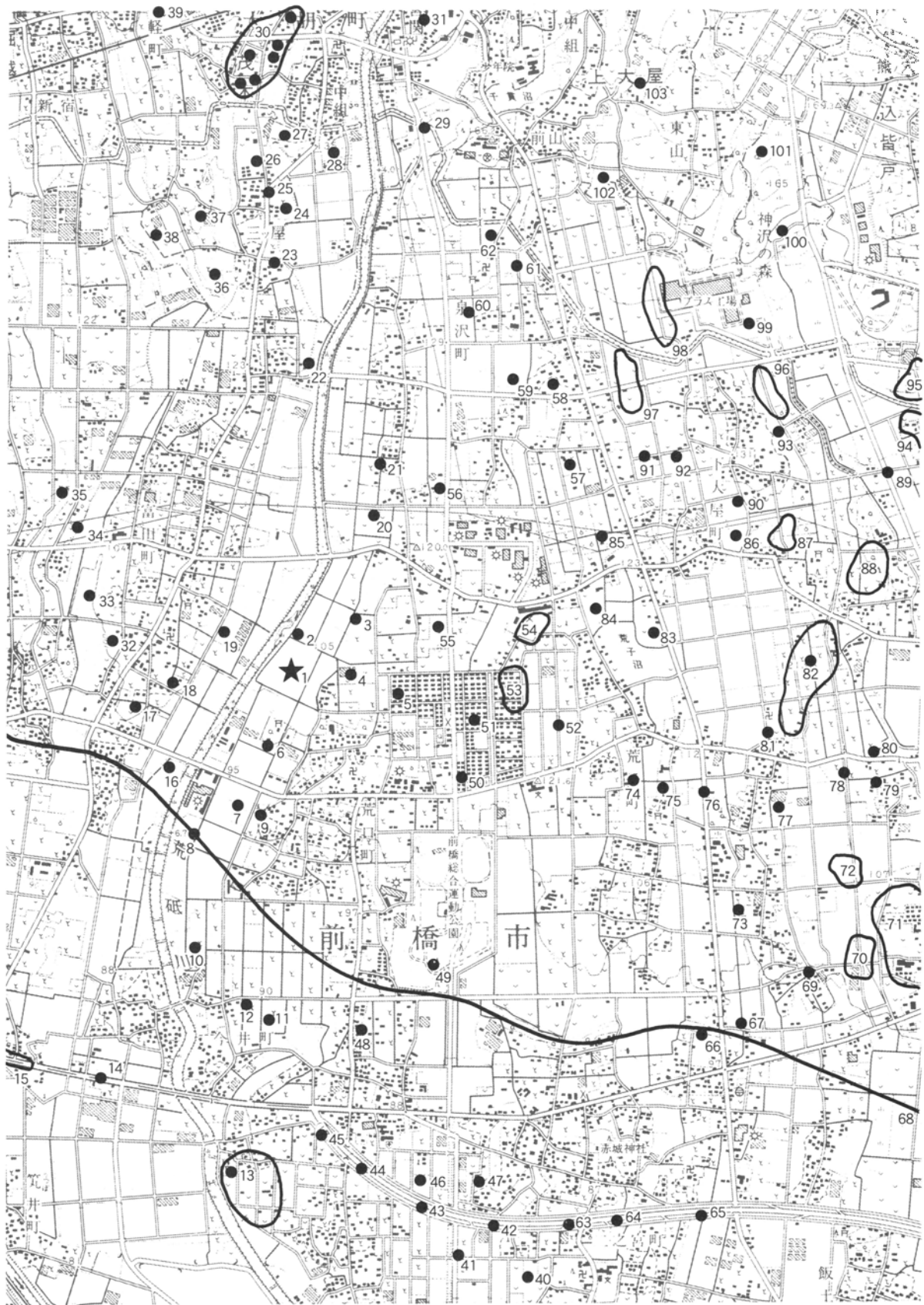
上記のように、荒砥地域における前期の集落や周溝墓の検出例は、他地域に対して遜色のないものではないが現在のところ前期古墳の存在は知られていない。前橋天神山古墳や華蔵寺裏山古墳が本地域を包括しえる地点にある大型古墳といえようか。本地域における前方後円墳の出現は、5世紀後半の今井神社古墳の築造を待たなければならない。

前期の集落のうちの多くは中・後期に継続し、「伝統集落」となる。中・後期になると前期からの集落は占地の範囲を多少変えながら継続する。諏訪西遺跡も群馬県教育委員会調査部分で居住の継続性が認められている。それとともに新たな地点に「第一次新開集落」の形成がなされる。荒砥天之宮遺跡や荒砥北三木堂遺跡などに代表される集落である。こういった集落変遷の背景には従来からの河川灌漑の整備とともに荒砥天之宮遺跡で検出された溜井の掘削に見られる湧水を人為的、かつ積極的に利用するといった灌漑土木技術の導入とそれに支えられた生産域の拡大があったと考えられる。

中期の集落としては宮川上流域に丸山遺跡、北原遺跡、柳久保遺跡群や、荒砥川流域に荒砥宮田遺跡、荒砥前田II遺跡のように前期から継続する遺跡と宮川下流域の荒砥北三木堂遺跡や荒砥天之宮遺跡のように5世紀後半になってから集落の形成が開始された遺跡がある。

また、荒砥荒子遺跡や梅木遺跡、丸山遺跡では、5世紀代、首長層の居宅と考えられる方形区画遺構が検出されている。このような遺構の存在は古墳に見られる被葬者の多様性が居住施設にも現れたものと思われる。

荒砥諏訪西遺跡では6世紀の集落を検出しているが本遺跡の周辺で同時期の集落が形成された遺跡としては荒砥宮田遺跡、荒砥北原遺跡、柳久保遺跡群、大久保遺跡、北原遺跡、丸山遺跡、新山遺跡などを



第5図 荒砥諏訪西遺跡・荒砥諏訪遺跡周辺の遺跡分布



第1表 周辺遺跡の概要

No	遺跡名	弥生		古墳			奈平		中世	近世	その他の遺構	遺跡の概要
		中後	前住墓生	中住墓生	後住墓生	住	住生					
1	荒砥諏訪西遺跡		◎ □		○○			□	○	○	溝、土坑	本報告書の遺跡 荒砥諏訪西遺跡に北接 県教委調査方形周溝墓13基 荒砥諏訪西遺跡東側台地上 前橋市教委調査
2	諏訪西遺跡		○	○	○						時期不明古墳2	
3	諏訪遺跡		□								As-B以前の溝	
4	荒砥諏訪遺跡		□								As-B以前の溝	
5	諏訪遺跡										As-B以前の溝	
6	荒砥宮田遺跡		◎ □	○	○○	○	○ □	○	○	○	縄文前期住居	方形周溝墓2  上畠 中世墓坑  今井神社古墳他、古墳3調査  古墳時代中期の方形区画溝  富田宮下遺跡とほぼ同一遺跡 古墳11  古墳時代中期居宅  縄文後期住居 中・近世道状遺構 縄文中期住居 縄文中期住居 縄文中期住居  古墳7  縄文前期住居  旧石器  平安須恵工房跡、窯跡 古墳住居3 縄文中期住居 縄文中・後期住居  溜井  As-C下水田以降7期の水田  奈良溜井、特殊井戸 平安小鍛冶、中・近世道路 状遺構  中世墳墓 縄文前期住居、古代炭窯 旧石器、縄文早期 旧石器  古代須恵器窯跡
7	荒砥前田遺跡							□				
8	荒砥前田II遺跡		◎	○				○	○	○		
9	荒口前原遺跡	○						○				
10	荒砥北原遺跡		□	○	○						縄文前・中期住居、As-B	
11	荒砥北三木堂遺跡		○ □		○○	○	○	○	○	○	上畠	
12	荒砥北三木堂II遺跡		□						○	○	中世墓坑	
13	今井神社古墳群			○	○			○			縄文中期住居	
14	今井白山遺跡		○	○	○	○	○	○	○	○		
15	筑井八日市遺跡			○○				□				
16	富田細田遺跡							□	○			
17	宮下遺跡		◎	○	○○	○	○	○	○	○	中世墓坑、寺院	
18	東原遺跡							○	○		中世墳墓群、寺院	
19	おとうか山古墳			○	○							
20	北原遺跡		◎ □	○	○			○				
21	丸山遺跡		◎ □	○	○							
22	稻荷前遺跡				○							
23	山神遺跡				○	○			○	○	縄文後期住居	
24	小林遺跡				○	○	○	○	○	○	中・近世道状遺構	
25	茂木山神II遺跡		○		○	○	○	○	○	○	縄文中期住居	
26	諏訪東遺跡							○			縄文中期住居	
27	西小路遺跡				○					○	縄文中期住居	
28	上ノ山遺跡		○ □	○	○				○	○		
29	下宮関遺跡			○								
30	天神風呂遺跡群			○	○	○					縄文前期住居	
31	中宮関遺跡		○					□				
32	富田西原遺跡		○	○					○	○	旧石器	
33	富田高石遺跡		○ □	○	○				○	○		
34	富田漆田遺跡			○ ◎	○	○	○ □	○			平安須恵工房跡、窯跡	
35	富田下大日遺跡							○			古墳住居3	
36	稻荷窪A地点遺跡				○○	○					縄文中期住居	
37	稻荷窪B地点遺跡				○			○		○	縄文中・後期住居	
38	大日遺跡							○	○			
39	茂木大道下遺跡							○	○	○		
40	荒砥天之宮遺跡			○	○	○	○ □				溜井	
41	荒砥宮川遺跡	○	○ □ ?		○○	○	○ □					
42	二之宮千足遺跡		□	□	□	○	○ □	○			古代小鍛冶、中世墓坑	
43	二之宮洗橋遺跡				○	○	○					
44	二之宮谷地遺跡				□	○	○ □				奈良溜井、特殊井戸	
45	今井道上道下遺跡				○	○	○	○	○	○	平安小鍛冶、中・近世道路 状遺構	
46	荒砥洗橋遺跡				○	○	○ □			○		
47	荒砥宮西遺跡				○	○	○					
48	荒砥大日塚遺跡		○		○	○	○ □					
49	鶴ヶ谷遺跡群	○	○	○	○	○	○				中世墳墓	
50	下鶴谷遺跡							○	○		縄文前期住居、古代炭窯	
51	柳久保遺跡群		◎	○	○○	○	○	○	○		旧石器、縄文早期	
52	頭無遺跡	○			○	○	○				旧石器	
53	中鶴谷遺跡				○○	○	○					
54	荒子小学校校庭遺跡				○	○	○				古代須恵器窯跡	

第1章 調査の経過と遺跡の概要

No	遺跡名	弥生				奈	平	中	近	その他の遺構	遺跡の概要
		中後	前住墓生	中住墓生	後住墓生						
55	大久保遺跡				○	○					
56	新山遺跡		□	○	○						方形周溝墓2、古墳3
57	向原遺跡				○	○					
58	東原西遺跡			○							
59	東前田北遺跡			○	○				中・近世塚		
60	寺前遺跡			○							
61	寺東遺跡			○							
62	谷津遺跡			○	○○			○	○	縄文中期住居	方形周溝墓2、泉沢谷津遺跡と同一遺跡
63	二之宮宮下西遺跡				○	○	○	○	○	中・近世墓坑	
64	二之宮宮下東遺跡		□		○	○	○○	○			
65	二之宮宮東遺跡						○□	○	○	古代小鍛冶	Hr-FA下水田以降7期の水田
66	荒砥上ノ坊遺跡		◎□□	○	○	○	○			縄文前期住居、As-B上島	方形周溝墓4
67	元屋敷遺跡						○			古墳住居16	
68	女堀						○			古代未完成用水路	
69	葭沼遺跡						○				
70	上蛭沼遺跡									弥生住居1、古墳住居15、古墳1	
71	天神山古墳群				○						古墳39を調査
72	西大室丸山遺跡				○						古墳時代巨石祭祀
73	荒砥荒子遺跡			○	○	○	○□				古墳時代中期居宅
74	荒砥中屋敷I・II遺跡		○		○		○□			平安小鍛冶、As-B以前の溝	
75	荒砥下押切I・II遺跡				○○	○	○				
76	舞台西遺跡				○						古墳4、埴輪円筒棺1、甕棺1
77	舞台遺跡			○	○						舞台1号墳を含む古墳3
78	稲荷山II遺跡						○		○		
79	地田栗III遺跡		○	○	○						
80	富士山I・II遺跡				○		○		○	近世塚	直径38mの円墳
81	下境I・II遺跡		○	○	○			○		中世寺院、中世墓	
82	阿久山古墳群				○						古墳22調査
83	堤東遺跡		□				○			平安小鍛冶	方形周溝墓2(前方後方形1)
84	川籠皆戸遺跡		□				○				
85	上西原遺跡						○	○		基壇建物、掘立柱建物	勢多郡衙と付属寺院と推定される遺跡
86	北田下遺跡		○				○				
87	明神山遺跡		◎□		○		○				
88	伊勢山古墳群				○						伊勢山古墳を含む古墳16
89	水口山遺跡		□		○						方形周溝墓2、古墳11
90	中畑遺跡						○				
91	村主遺跡		◎		○	○	○		○		
92	中山A・B遺跡		◎□		○		○				方形周溝墓2(前方後方形1)
93	阿弥陀井戸道上遺跡		○								
94	大稲荷遺跡				○					古墳住居10	
95	小稲荷遺跡		□		○○						
96	山王遺跡		○	○	○		○				
97	東原A・B遺跡		◎□				○				方形周溝墓17(前方後方形4)
98	上諏訪山A・B遺跡					○		○			
99	大道遺跡		◎		○		○			縄文後期住居・配石遺構	
100	上横俵遺跡		□		○		○			平安炭窯	方形周溝墓6、古墳27
101	熊の穴・熊の穴II遺跡		◎		○○		○			旧石器、縄文前期住居	古墳17
102	上大屋下組遺跡		○							縄文前期土坑	
103	上大屋天王山遺跡		○					○			

住は住居、墓は墓域、生は生産域を表す。古墳の項、墓の□は方形周溝墓、□は円形周溝墓、○は古墳を、生の□はAs-C下の島を表す。平安の項、生の□はAs-B下水田、□は818年洪水層下の水田、○は島を表す。



あげることができる。古墳時代前期の集落は各河川の上流域に多く展開していたものが、中期になると上流域では減少、下流域の増加がみられ、居住域の範囲も拡大しているとの指摘がある。その傾向は6・7世紀になるとさらに強くなるという。宮川下流では荒砥洗橋遺跡、荒砥宮西遺跡、二之宮谷地遺跡などで6世紀になり集落の形成が開始される。

古墳の動向をみると、6世紀になると、大室古墳群に前二子、中二子、後二子の3基の前方後円墳が築造される。小円墳は、5世紀後半に富田町東原古墳群や大胡町上ノ山古墳群をはじめ群集墳の形成がはじまり、6世紀、7世紀と小地域ごとに立地、形成内容を変化させながらその形成が進行している。

本遺跡では微高地上の6区で浅間B軽石下水田面を検出した。荒砥地域では浅間B軽石に埋没した水田は、多数の遺跡で調査事例が報告されており、浅間B軽石が降下した1108(天仁元)年の時点では、沖積地の大半が水田化されていたと考えられる。

女堀は、荒砥地域を東西方向に横切る用水遺構で、調査結果から掘削工事が途中で中断されたことが確認された。堀の排土下からは畠が検出された。女堀は、この畠の直下に堆積する浅間B軽石の降下により被害を受けた欠水地帯の農耕地、灌漑設備を復興することを目的に計画されたものと考えられる。

中・近世の遺跡、遺構の中で城郭としては、大室城、大室元城、赤石城、新土塚城、荒子の砦などの存在が知られる。本遺跡の南側1.6kmには今井城がある。荒砥川の右岸に築かれており、南北70m、東西60mの本丸と外郭、腰郭、寄居山と呼ばれる櫓台、堀、戸口の存在が確認できるとされる。その本城である大胡城は、本遺跡の北方4.0kmの荒砥川右岸の丘陵上に築城された並郭式の平丘城で、廃城前、近世初期には一辺約80mの正方形に区画された本丸を中心に7つの曲輪からなっていたとされる。

また、本遺跡から南東2.5kmの上武道路関連の調査においては、二之宮町地内で複数の館の存在が確認され、二之宮環濠遺跡群として認識されている。二之宮赤城神社は、良好な堀と土塁の存在から一辺70

mの内郭と東西最大150m、南北125mの外郭からなる館の後身と考えられている。その西南350mには二之宮宮下西遺跡が位置し、二重堀の一部と戸口が検出され、一辺75~100m四方の主郭部と南側に副郭を有する構造の館が存在したと考えられている。二之宮宮東遺跡からも中・近世の堀・建物遺構が複数検出されたがこの中には12~14世紀に至る間に造られた礎石立の建物跡と池を有する庭園が含まれている。二之宮宮下東遺跡でも中世後半の館の一部が検出されている。また、今井道上道下遺跡では「あづま道」をはじめとした中・近世の道跡を検出した。大胡町域の上ノ山遺跡では溝に取り囲まれた竪穴住居、掘立柱建物、土坑が検出されており、近世の所産と考えられている。

中世の墳墓を検出した遺跡としては、宮下遺跡、鶴ヶ谷遺跡、下境I遺跡、荒砥北三木堂遺跡が知られる。宮下遺跡は、本遺跡の西方、荒砥川右岸の台地東縁に位置する遺跡であるが、3群からなる59基の中世墓群が検出されている。これらは五輪塔や板碑、骨蔵器を伴い、骨片の出土がみられる。51号墓では貞和四(1349)年の紀年銘がある板碑が出土しており、墳墓群全体が14世紀代の所産とされる。

鶴ヶ谷遺跡では、20基の墓が検出された。うち2基が骨蔵器を伴い、その他は素掘りの墓坑であった。板碑を伴う4号墓からは北宋銭が出土、14世紀代の所産と考えられている。

下境I遺跡では古墳の前庭を再利用して墓域が形成され、骨蔵器、五輪塔、板碑が出土している。板碑に文和三(1354)年、あるいは康安元(1361)年の紀年銘がみられる資料があることから、墳墓群の造営は、14世紀中頃から後半と考えられている。

荒砥北三木堂遺跡では、12基の火葬墓あるいは火葬跡を検出、焼骨片とともに北宋銭が出土している。

東前田遺跡では塚の調査が実施されている。

小島田八日市遺跡では出土品の中に石臼(粉挽き臼・茶臼)・石鉢・五輪塔の未製品、磨き石と報告された砥石の存在することが荒砥諏訪西遺跡の出土品と共通しており、注目される。遺跡内で石製品が製

## 第1章 調査の経過と遺跡の概要

作されていたことが考えられている。

大胡町の茂木山ノ前遺跡では樽に埋納されて備蓄銭約3万枚が、上大屋中組遺跡でも土坑（竪穴と報告）から43種942枚の古銭が出土している。

### 第3節 発掘調査の方法と経過

#### (1) グリッドの設定

荒砥諏訪西遺跡の調査実施にあたっては第6図に図示したよう荒砥宮田遺跡を含めた調査区全体を一辺100mの方眼でカバーし、南側から北側に向かってA区、B区と順次R'区まで合計19区画の大グリッドを設定した。今回報告の荒砥諏訪西遺跡にかかわる区画はKからR'区に相当する。

大グリッド設定の基点には荒砥宮田遺跡1区内にあった圃場整備の工事用杭を利用した。南北基本線には新設道路支道34号の西縁を、これに直交する東西基本線には耕道25-1の北縁を充てている。南北基線と国家座標の南北ラインとの偏角は東に約26度である。大グリッドの中には一辺5mの方眼を設定、これを小グリッドとした。

グリッドの呼称は、大グリッドを独立した単位とし、北西隅に基点を設定し、その点をa-0とし、小グリッドは東西軸にアラビア数字を付し、西側から0から19まで、南北軸にアルファベットを付し、北側からaからtまでとし、第8図の凡例のように大グリッド（アルファベット）小グリッド（アルファベット-数字）でBa-0のように呼称した。

#### (2) 発掘調査の経過

1983（昭和58）年度の荒砥北部圃場整備事業に係わる埋蔵文化財調査は、荒口町、荒子町にわたる第4工区が対象となった。

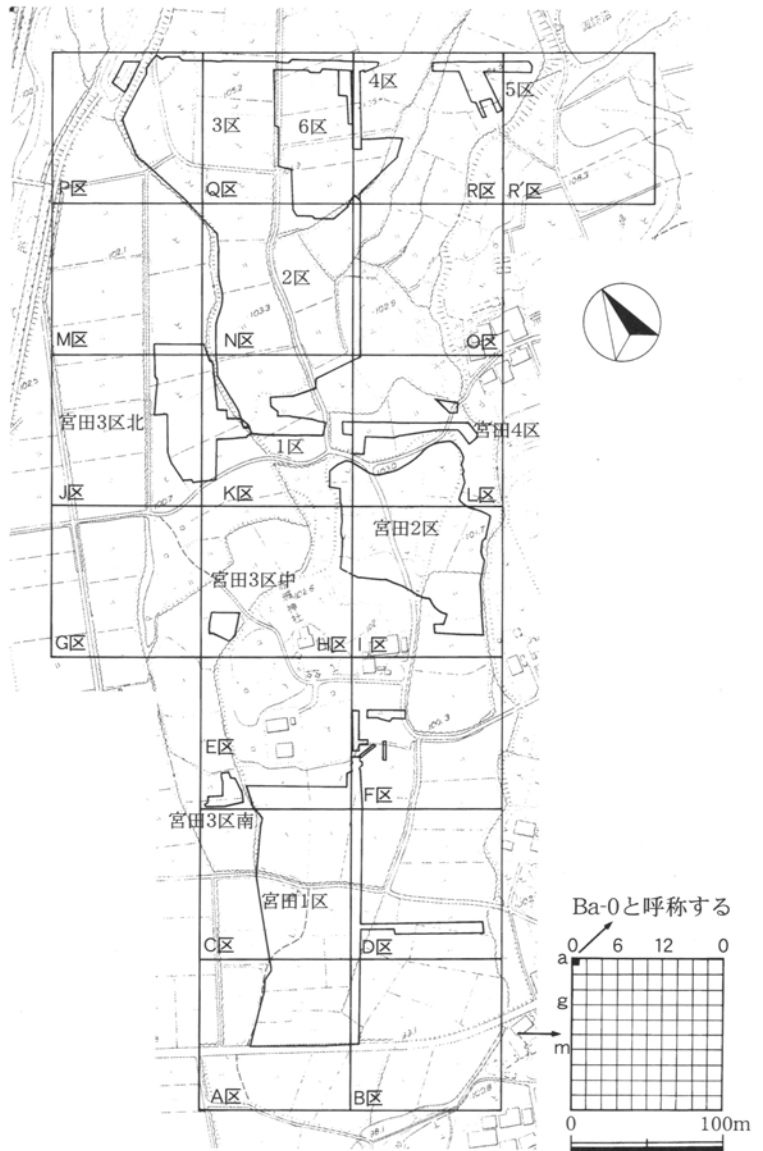
前年度の実態を踏まえ、本格的な調査実施前に、分布調査、試掘調査を計画・実施し、工事行程と埋蔵文化財調査の進捗が整合性を有し、双方が円滑に進行するよう協

議が重ねられたが、圃場整備対象面積が95.5haと膨大であったことなどの諸要因が重なり、充分な環境の中での調査実施には至らなかった。

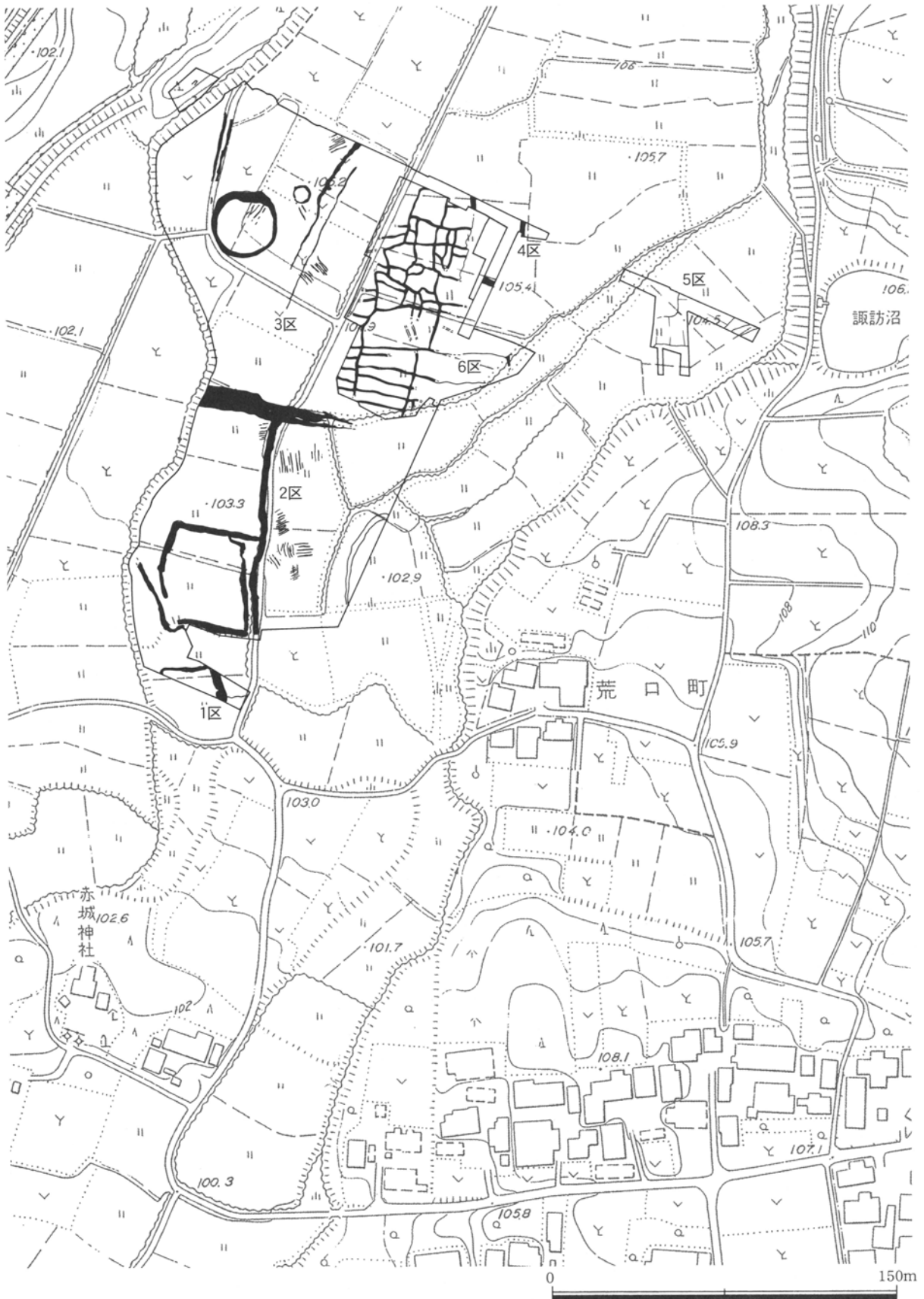
主な経過は、以下のとおりである。

荒砥諏訪西遺跡・荒砥諏訪遺跡の調査は、施工計画に基づき、第4工区の圃場整備対象地域内全域の分布調査を行うことから始まった。分布調査は、5月11日から17日の間実施され、7月上旬までにその成果が整理された。

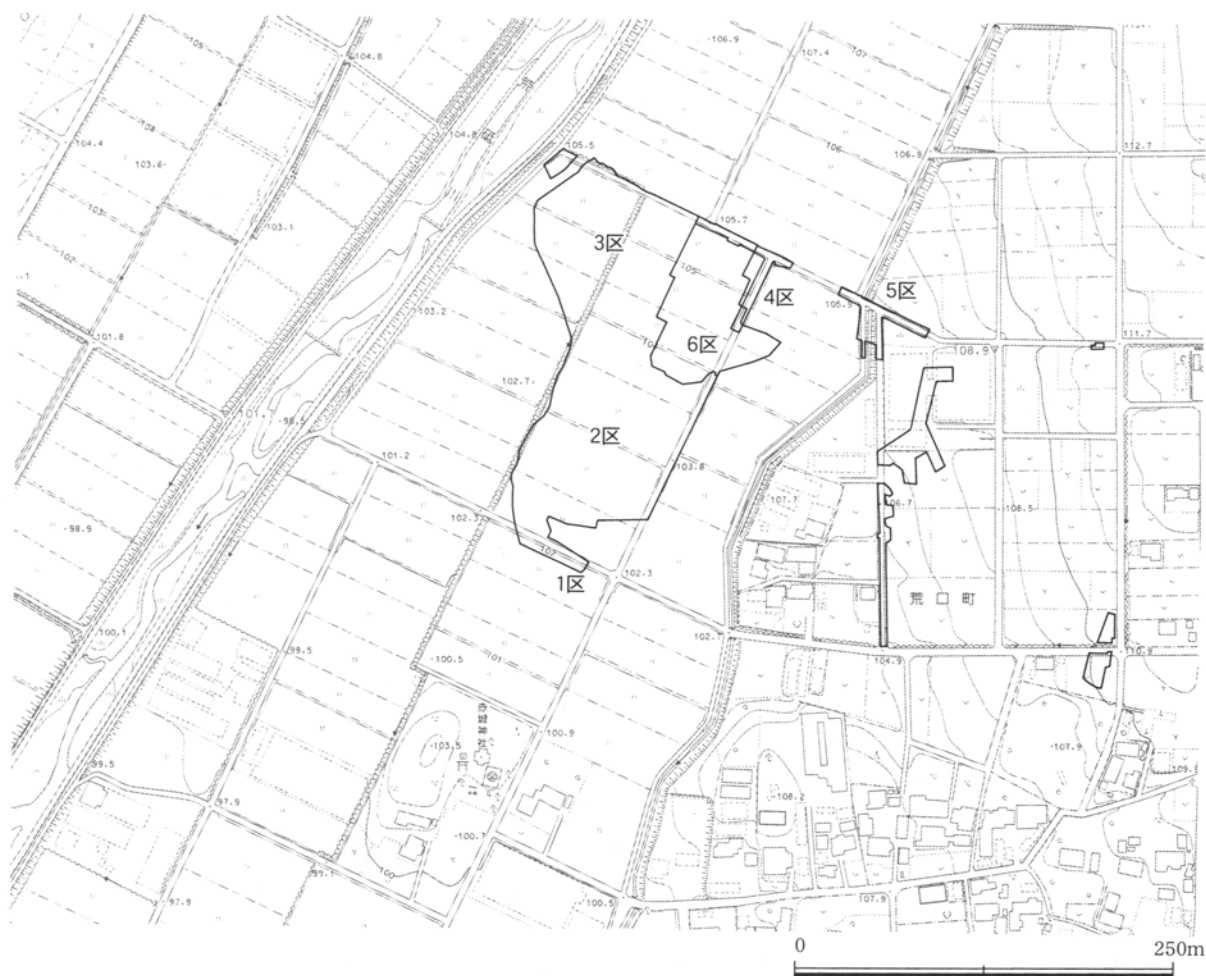
7月8日に調査事務所を設営し、調査担当者3名で、7月13日から8月2日までに、調査区の確定のための試掘調査を実施した。引き続き、8月23日か



第6図 荒砥諏訪西遺跡調査区の設定



第7図 荒砥諏訪西遺跡調査区の位置（調査時）



第8図 荒砥諏訪西遺跡調査区の位置（現状）

ら荒砥宮田遺跡部分の表土掘削・除去作業を開始した。調査は、10月6日からの開始である。

10月1日からは荒砥諏訪西遺跡部分の表土掘削・除去作業を開始し、21日から調査を開始した。以後、11月24日まで荒砥宮田遺跡と平行して荒砥諏訪西遺跡の調査は進行した。また、10月28日から12月15日までは荒砥諏訪遺跡の調査も合わせて実施された。

荒砥諏訪西遺跡の調査は、切土部分の2区・3区の調査から始められ、11月5日から6区の水田および溝群の調査が、11月9日から南側の道・水路部分にあたる1区の調査が、12月12日から北側の道・水路部分の4区・5区の調査がそれぞれ実施された。荒砥諏訪西遺跡の調査は、2月3日をもって全て終了し、荒砥宮田遺跡の調査に移行していった。

その後、2月13日には荒砥宮田遺跡の調査も全て終了し、2月21日に調査事務所を撤収、3月24日ま

での間に図面・写真の整理、土器洗浄・注記など基本的な整理作業を実施、当該年度の調査を終了した。

### (3) 遺跡の基本土層

荒砥諏訪西遺跡の調査区域は、その大半がロームの二次堆積である砂壤土性の微高地上にあたる。耕作による土壌攪乱は下位におよび、遺構の確認は、浅間B軽石下から水田面を検出した6区を除き、黄褐色土上面の1面である。この土層の下位に縄文土器包含層である灰色土と黒褐色土の混土層が堆積していた。1・2区の東辺部および5区は、東側の荒砥諏訪遺跡が立地する台地縁辺を南流する湧水起源の無名河川によって形成されたと考えられる沖積地内にある。堆積土中には上層から浅間B軽石、榛名ニッ岳渋谷テフラ(Hr-FA)、浅間C軽石の堆積が確認できた。微高地上の標高は、102から104m、沖積地は、1区で102m、5区で102mであった。

## 第2章 荒砥諏訪西遺跡の調査

### 第1節 検出された遺構と遺物

今回の発掘調査においては古墳時代から中・近世にかけての遺構が検出された。調査面積は、トレンチ調査分の5,700m<sup>2</sup>を含め36,620m<sup>2</sup>である。

竪穴住居は1区から3区の微高地西側を中心に古墳時代前期43軒、後期17軒の合計60軒を検出した。この他の古墳時代の遺構としては畠11地点、古墳3基、円形周溝状遺構1基、土器を埋設した土坑1基を検出した。畠は、2・3区の11地点で畝間の掘り込みと考えられるサク状遺構を検出した。掘り込みの埋没土中に浅間C軽石を混在することから古墳時代前期の竪穴住居群との関連が考えられる。

平安時代の遺構としては微高地の東側部分、6区で浅間B軽石層下から水田面と畦畔を検出した。また、4区で浅間B軽石を覆土とする溝6条を検出している。

中・近世の所産と考えられる遺構、あるいは時期の判然としない遺構としては1区から3区にかけて掘立柱建物16棟、井戸29基、墓坑2基、土坑513基、溝89条、多数の小穴が検出された（調査区別の数量は第2表参照）。

5区では堆積土層中に浅間B軽石、榛名二ツ岳

川テフラ(Hr-FA)、浅間C軽石がそれぞれ堆積する埋没谷および旧河道を検出した。

この他に遺構に伴わない遺物として縄文土器・石器、土師器、須恵器、陶磁器、軟質陶器、土師質土器皿、石製品等が出土している。

調査で出土した資料は、60×37×15cmの遺物収納箱に59箱、68×48×34cmの収納箱に9箱、57×35×30cmの収納箱に5箱である。

本報告の中で資料化し、本文中に掲載した資料は合計505点である。資料の内訳は土器358点、鉄器・鉄製品27点、石器・石製品120点である。

### 第2節 古墳時代の遺構と遺物

#### (1) 畠

#### 2区 畠

調査区の中央から東側寄りの部分で畠跡と考えられるサク溝の列群を7地点で検出した。

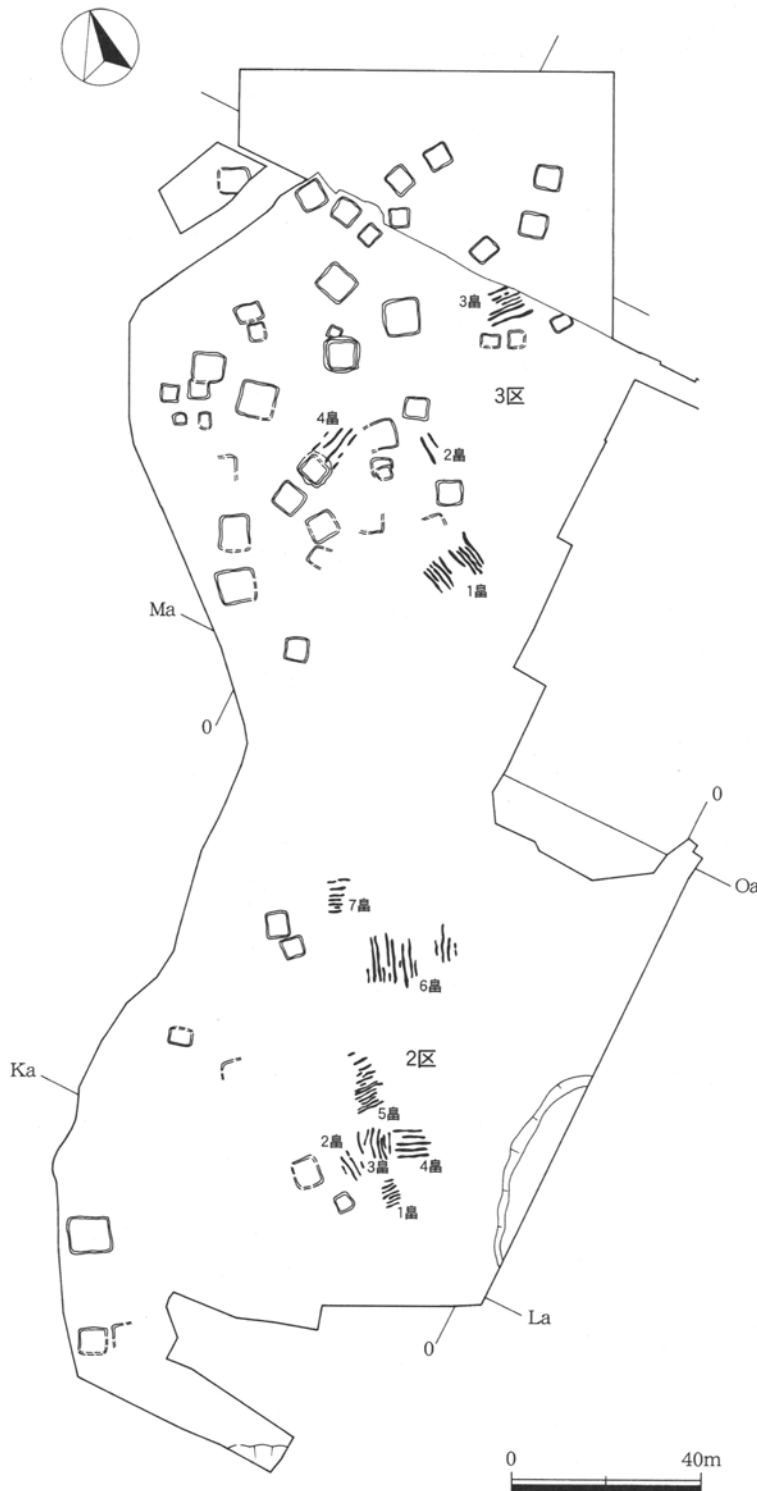
これらは、近世以降の溝、土坑と重複するものの古墳時代前期の竪穴住居と重複関係にあるものではなく、1号、あるいは2号畠と3号住居が近接状況にあるのみである。

7地点のサク溝列の方向は、1・4・5・7号畠が、東西、2・3・6号畠が、南北方向を基本とす

第2表 各調査区の概要

※「荒砥諏訪西遺跡1」第3表との齟齬はこれをもって正とする

区	竪穴住居	掘立柱建物	井戸	土坑	溝	畠	水田	古墳	その他
1区	2	0	0	33	5	0		0	浅間B軽石堆積面38m <sup>2</sup>
2区	9	15	15	247	26	7地点		0	浅間B軽石堆積面272m <sup>2</sup>
3区	49	1	14	231	41	4地点		3	円形周溝状1、墓坑2、浅間C軽石下凹凸面
4区	0	0	0	2	6	0		0	
5区	0	0	0	0	0	0		0	As-B埋没谷、旧河道
6区	0	0	0	0	15	0	浅間B軽石下5,060m <sup>2</sup>	0	
合計	60	16	29	513	93	11地点440m <sup>2</sup>	浅間B軽石下5,060m <sup>2</sup>	3	



第9図 古墳時代前期の住居と畠の位置

るが少しずつ方向が異なっている。各溝列が、重複関係にある部分は少ない。

サク溝列の間隔、サク溝個別の幅、深さは、各畠の項中に記載したとおりである。

サク溝列の確認面は、淡黄色土で、耕作時の上面は既に削平されており、畝の形状は、不明である。各サク溝の記録は、検出時の状況を基礎としている。従って耕作範囲も不確実であるが、サク溝の検出端部を結んだ範囲を積算すると1号畠15.5㎡、2号畠18.8㎡、3号畠32.1㎡、4号畠35.3㎡、5号畠49.7㎡、6号畠21.8㎡、7号畠121.8㎡となる。

サク溝は、畝間である。サク溝個々の断面は皿状を呈していた。鋤跡などの耕作痕は検出できなかった。サク溝内の埋没土は、浅間C軽石を多量に含む黒色土であった。この土層の状況から畠の時期は、不確定な部分を含むが古墳時代と考えられ、前期の可能性が高い。耕作物は不明である。

1号畠 (第10図 P L 1)

位置 Nr・s-15

形状 サク溝6列を検出した。検出長は短く、最長で3.88mを検出した。サク溝の方向は細部で異なる。サク溝の間隔もばらつきが大きく0.50mから1.15mであった。サク溝個々の幅もばらついており、その幅は、0.18~0.33m、残存深度は、0.05~0.09mである。

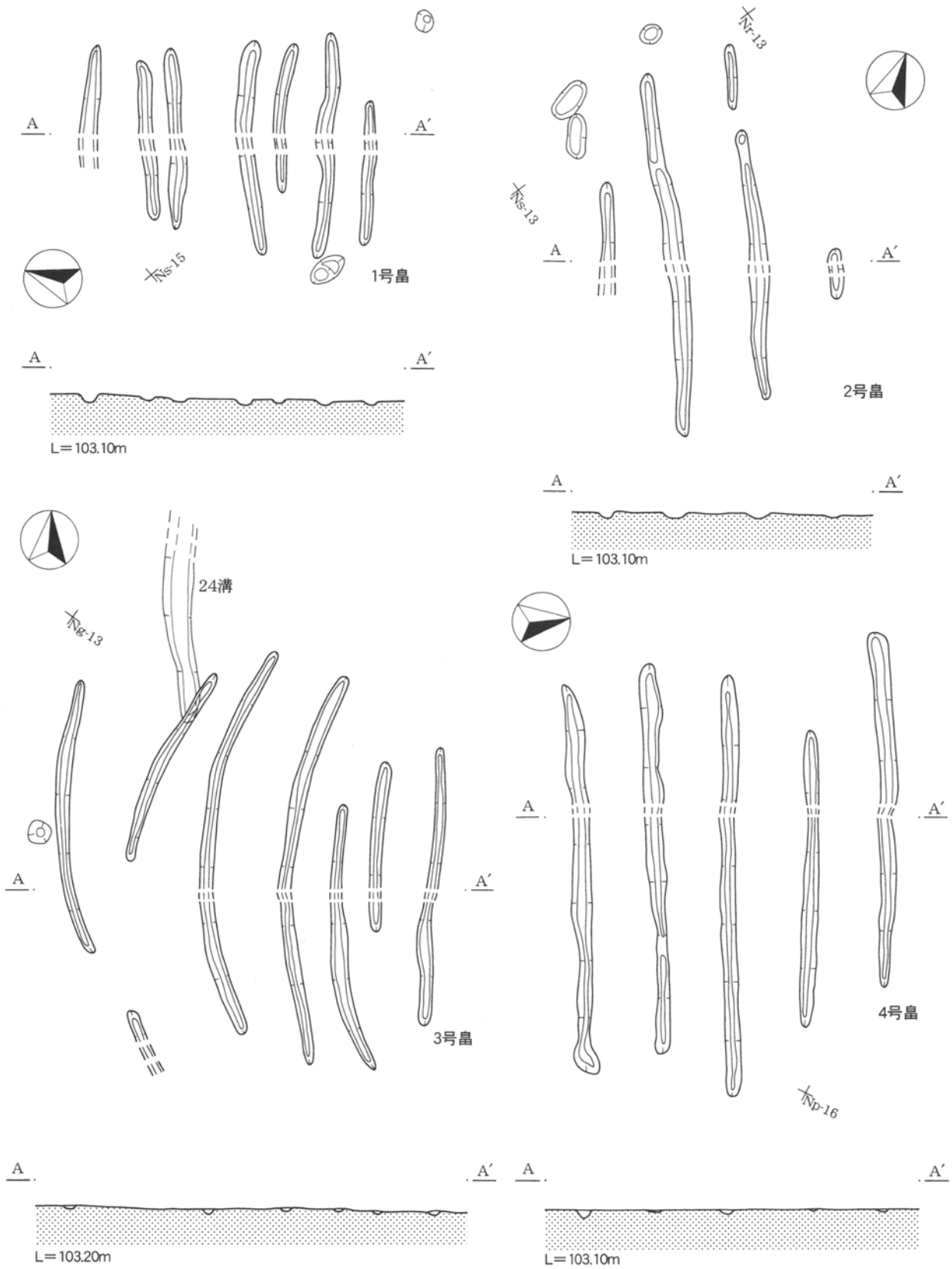
面積 15.5㎡ 方位 N-74°-E

所見 2区の最も南側に位置しており、2・3号畠とはサク溝の方向が異なる。

2号畠 (第10図 P L 1)

位置 Nr-12・13

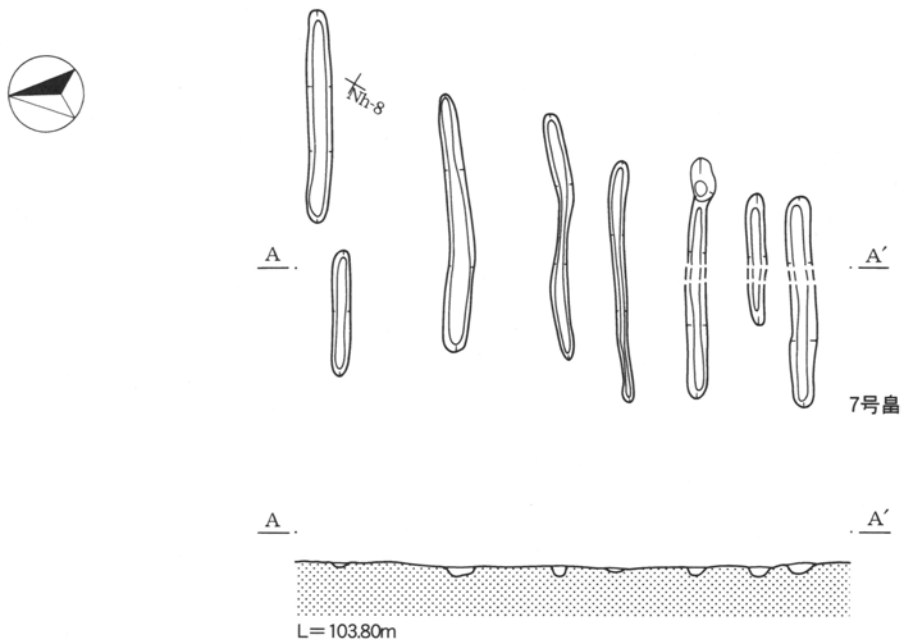
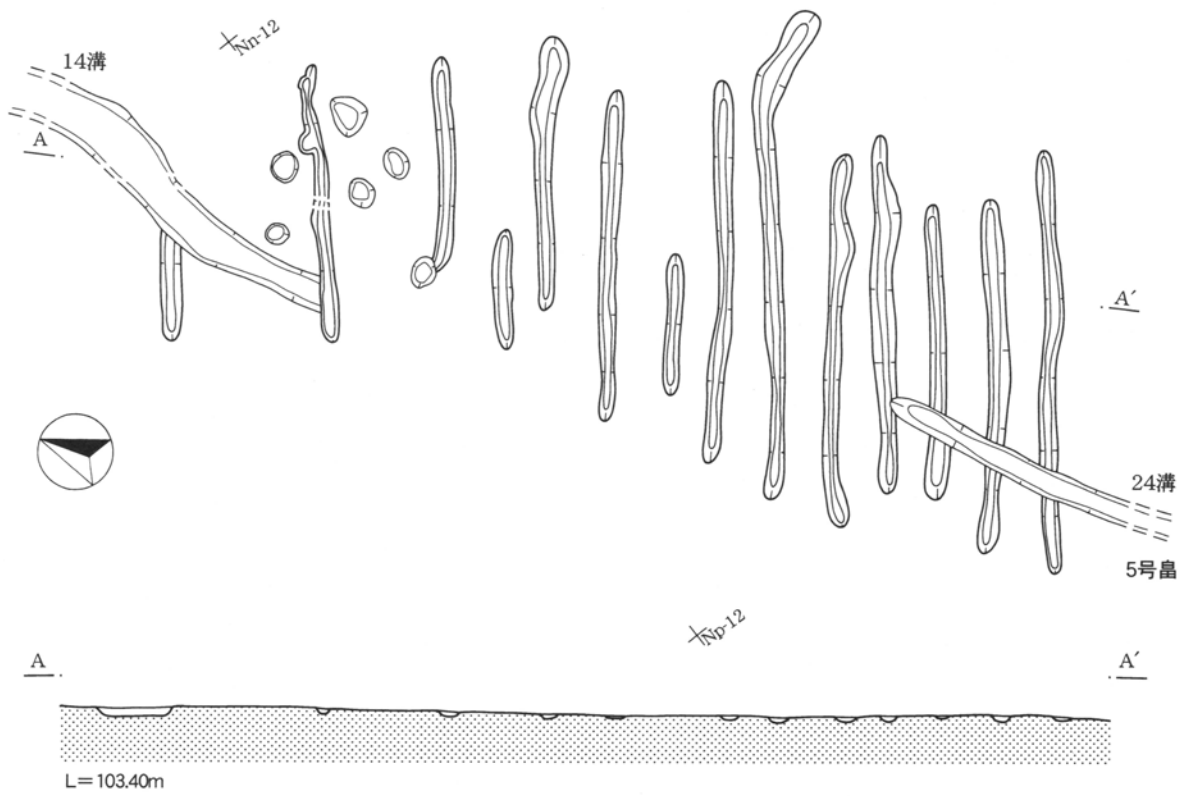
形状 サク溝4列を検出した。西側から2・3列目を除いた3列は、削平著しかった。検出長は、最長で6.23mである。サク溝の間隔は、1.18~1.55mである。サク溝の幅は、0.20~0.32m、残存深度は、0.02~0.09mである。



サク溝埋没土(4~7号畠の埋没土も同様)  
 黒色土 As-Cを多量に含む。

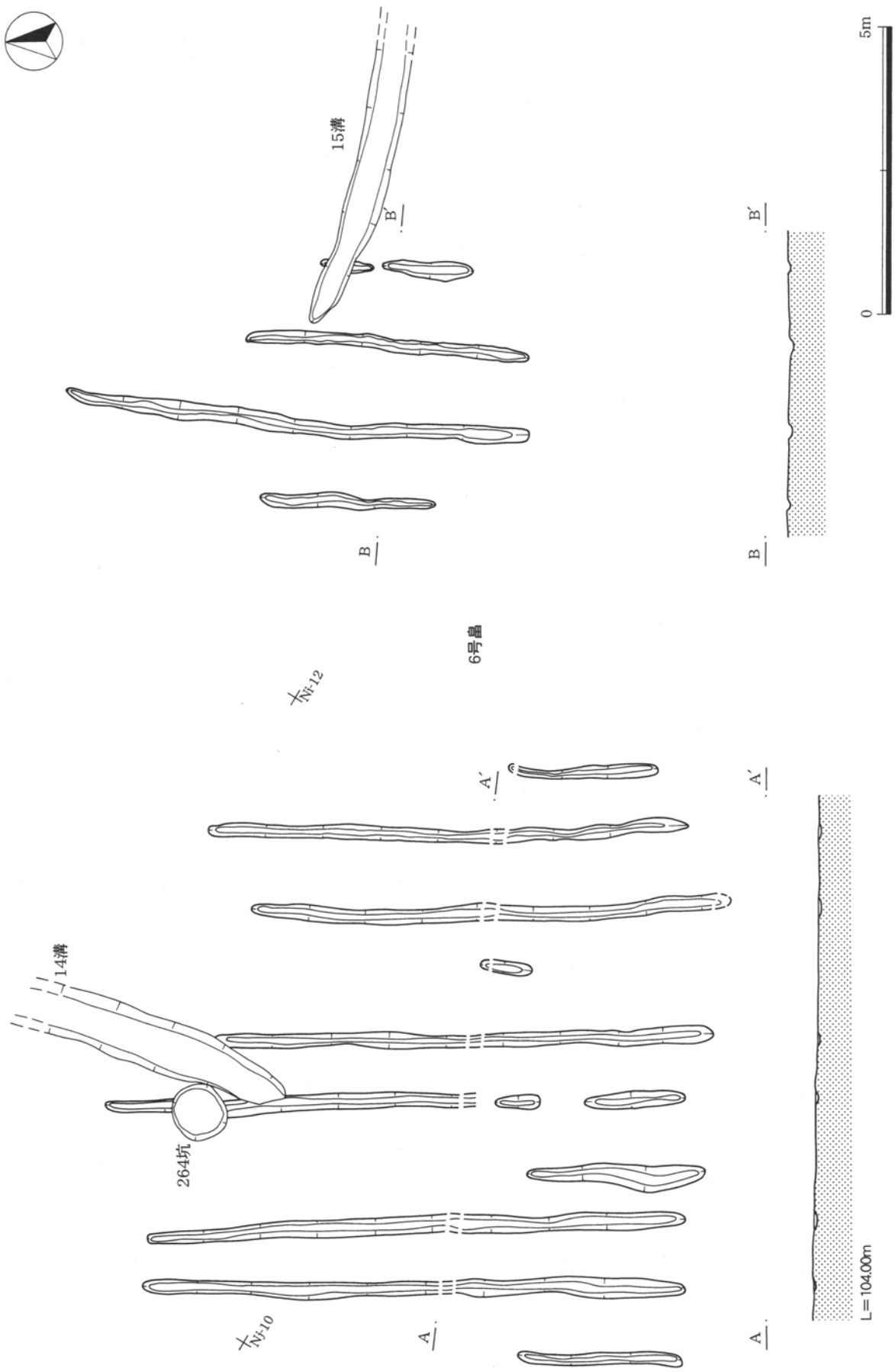
第10図 2区畠(1)

第2章 荒砥諏訪西遺跡の調査



第11図 2区島(2)





第12図 2区島(3)

## 第2章 荒砥諏訪西遺跡の調査

**面積** 18.8㎡ **方位** N-25°30'-W

**所見** 東側に3号畠が方位を同じくして広がる。

### 3号畠(第10図 P L 1)

**位置** Np・q-13

**重複** 24号溝に先行する。

**形状** サク溝7列を検出した。全体に西側に張り出し、弧状を呈している。西側から3列目の検出長は、6.89mである。サク溝の間隔は、0.66~1.32mである。サク溝の幅は、0.20~0.24m、残存深度は、0.02~0.07mである。

**面積** 32.1㎡ **方位** N-1°-W

**所見** 東側に方向をほぼ90度異にして4号畠が広がる。

### 4号畠(第10図 P L 1)

**位置** No-15・16、Np-16

**形状** サク溝5列を検出した。ほぼ直線的に延び、比較的整然としている。北側3列目の検出長は、7.25mである。サク溝の間隔は、1.22~1.50mである。サク溝の幅は、0.26~0.30m、残存深度は、0.015~0.07mである。

**面積** 35.3㎡ **方位** N-85°30'-W

### 5号畠(第11図 P L 1)

**位置** Nn-11・12、No・p-12・13

**重複** 14・24号溝に先行する。

**形状** サク溝14列を検出した。サク溝は、ほぼ直線的に延びる。北から3列までは広い間隔を保つが、それ以南は0.55~0.87mの間隔で存在する。サク溝の幅は、0.18~0.30m、残存深度は、0.02~0.1mである。

**面積** 49.7㎡

**方位** N-70°-E

**所見** サク溝の間隔は、1・7号畠に類似する。

### 6号畠(第12図 P L 1)

**位置** Ng-12、Nh-12・13、Ni-10・11・12、Nj-11・12

**重複** 14・15号溝、264号土坑に先行する。

**形状** 西側10列、東側4列を検出した。東西両群の間隔は4.5mである。検出状況は、個々のサク溝によ

り異なるが、方向は、ほぼ一定で直線を指向している。サク溝の間隔は、0.88~1.49mである。個々の幅は、0.21~0.33m、掘削深度は、0.02~0.08mである。

**面積** 21.8㎡

**方位** N-0°-E

**所見** 2単位の可能性も考えられる。

### 7号畠(第11図 P L 1)

**位置** Nh・i-7

**形状** サク溝7列を検出した。検出長は、短い、比較的整然とした状況である。北側から5列目が長さ3.20mを検出した。サク溝の間隔は、0.68~1.70mとやや統一性に欠けている。サク溝の幅は、0.18~0.33m、残存深度は、0.03~0.14mである。

**面積** 121.8㎡

**方位** N-89°-E

**所見** 2区の最北端に位置する。南西側7.5mに位置する6号畠とはその方向をほぼ90度異にする。

### 3区畠

調査区の中央から東側寄り部分の4地点でサク溝の列群を検出した。2区の畠が竪穴住居群とその占地を若干隔っていたとは異なり、3区の畠は住居と近接して検出されている。

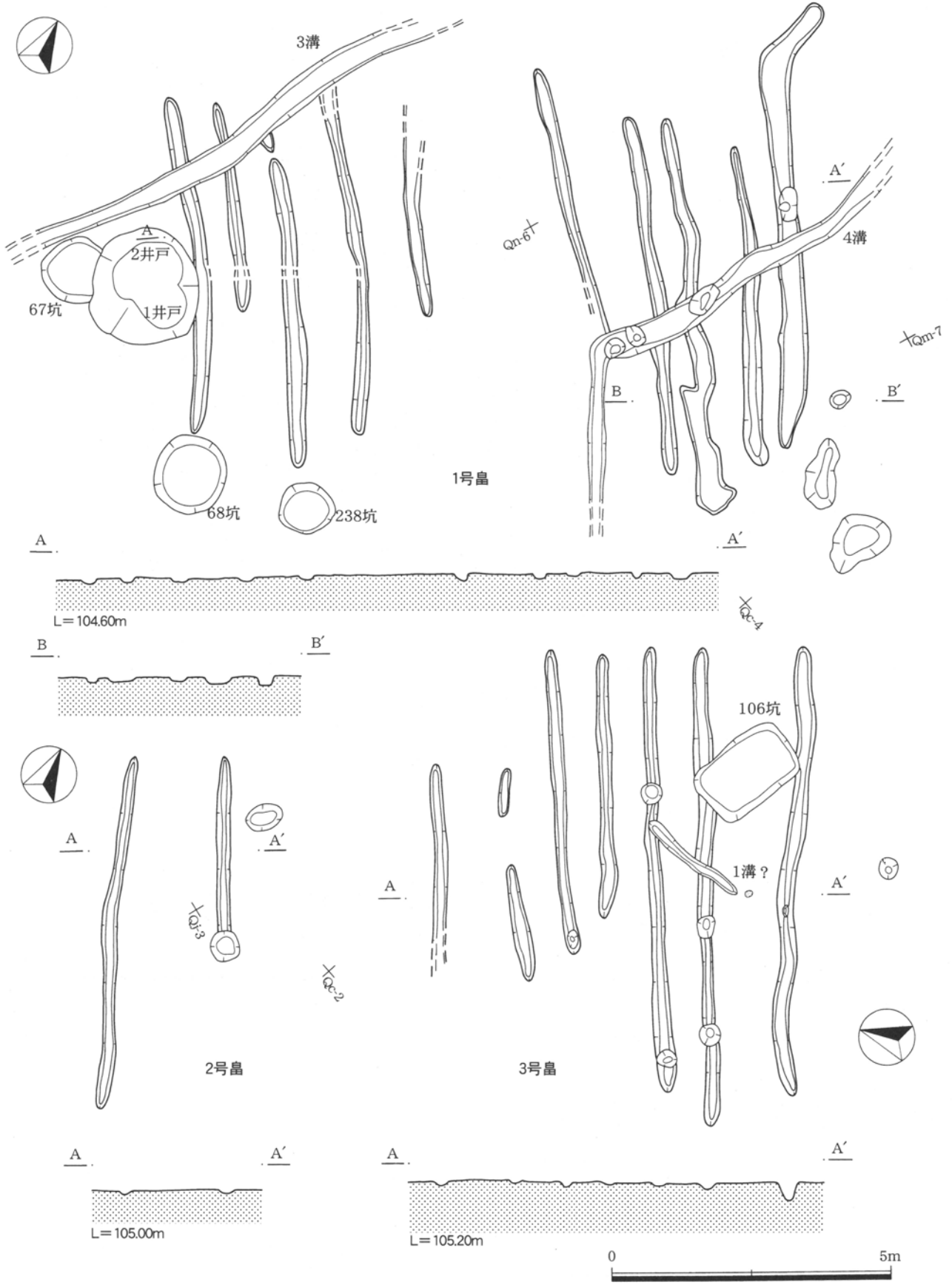
サク溝の確認面、サク溝個々の形状、埋没土は2区のそれと共通している。個々の情報については以下のとおりである。

現状で確認できたサク溝の範囲は、1号畠55.2㎡、2号畠10㎡、3号畠40.3㎡、4号畠39.7㎡である。

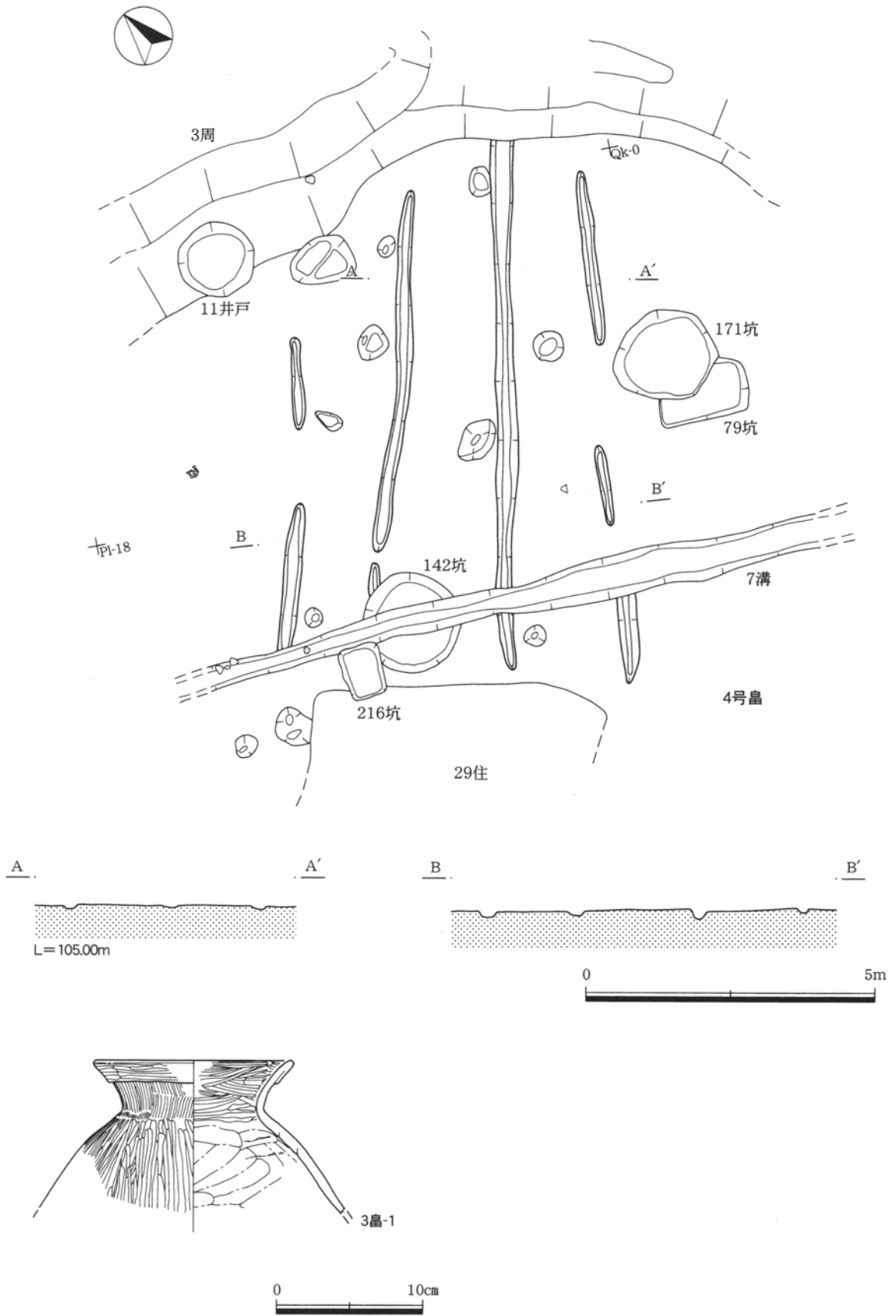
調査区北端で検出した3号畠は、サク溝の一部が調査区域外に及んでおり、竪穴住居とともに畠も3区北側の微高地上にその範囲を広げていたものと考えられる。

また、4号畠は、古墳時代前期の29号住居と重複している。サク溝は、29号住居の埋没土を掘り込んでいる。このことから4号畠は、29号住居廃棄以降の時期の所産と考えられる。

2区の畠同様、耕作物は不明である。



第13図 3区墓(1)



第14図 3区畠(2)と出土遺物

1号畠 (第13図 P L 2)

位置 Nm・n-5・6

重複 3・4号溝、1号井戸に切られる。その他小穴とも重複する。

形状 サク溝10列を検出した。5列と6列の間は、その間隔がやや開いている。北側から1列・3列は、やや形状が乱れている。サク溝の間隔は、0.7~1.29mである。サク溝の幅は、0.19~0.42m、残存深度は、0.1~0.12mを測る。

面積 55.2m<sup>2</sup>

方位 N-34°-W

所見 5列ずつの2単位である可能性もある。

2号畠 (第13図)

位置 Qj・k-2

重複 10号住居、円形周溝状遺構が近接する。

形状 サク溝2列を検出した。西側のサク溝の検出長は、6.32mである。2列の間隔は、1.82mである。サク溝の幅は、西側が0.23m、東側が0.27mである。残存深度は、西側で0.05~0.06m、東側で0.065~0.08mである。

面積 10.0m<sup>2</sup>

方位 N-28°-W

3号畠 (第13・14図 P L 2)

位置 Qb~d-2~4

重複 1号溝の一部である可能性のある溝状遺構、106号土坑、小穴に先行する。

形状 サク溝7列を検出した。比較的整然としている。南側から2列目の検出長は、8.56mである。サク溝の間隔は、0.80~1.45mである。その幅は、0.22~0.29m、残存深度は、0.01~0.32mである。

面積 40.3m<sup>2</sup>

方位 N-72°-E

遺物 最西端のサク溝内から壺(1)が出土している。(観P207)

所見 北端は調査区域外に及んでいる。

4号畠 (第14図 P L 2)

位置 Pk・l-18・19

重複 29号住居と重複する。住居より後出する。3

号墳、7号溝には先行する。

形状 サク溝4列を検出した。西側から3列目は、長さ9.06m以上である。サク溝の間隔は、1.50~1.83mである。その幅は、0.18~0.31m、残存深度は、0.02~0.13mである。

面積 39.7m<sup>2</sup>

方位 N-42°30'-E

所見 重複関係から29号住居が廃棄、ほぼ埋没した後、畠地化したことがわかる。

(2) 浅間C軽石下凹凸面

(第15~17図 PL 2)

3区の調査区北西部分から4区西側にかけて、埋没土中にAs-Cの純層が堆積する凹凸面を検出した。凹凸面の分布する範囲は、南北両端の距離が、約62mである。3区北端は、調査区域外にまでその分布が及んでいると思われる。土坑状の凹凸面総数約160基を数えたが、Qグリッドのcからgと5から8ラインの範囲内とQグリッドのjからmラインと6から8ラインの範囲内に特に集中する傾向にある。

古墳時代前期の竪穴住居と近接する位置関係にはあるが直接の重複関係にあるものは無い。

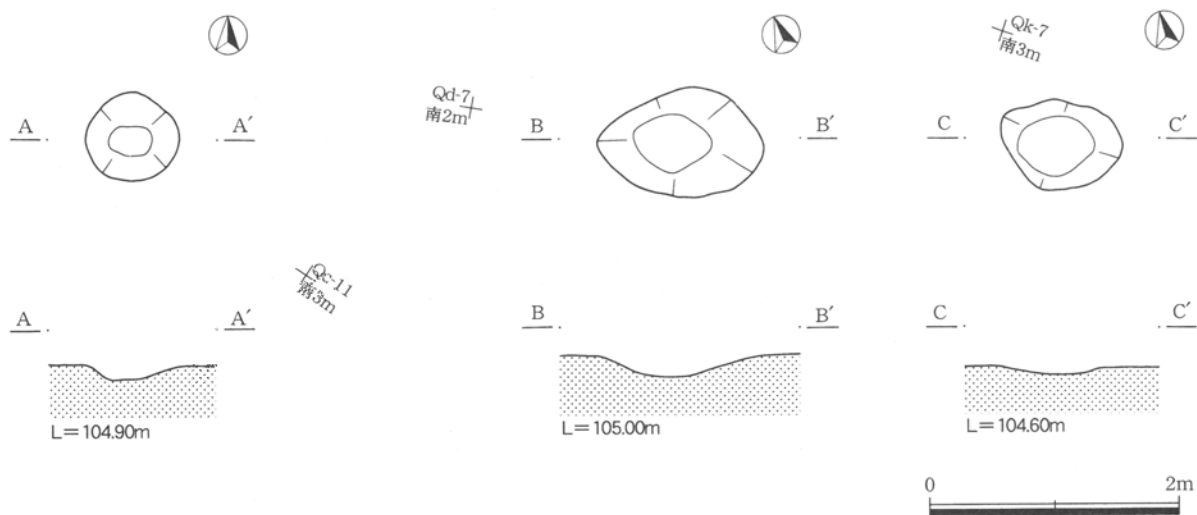
凹面部分の規模は、長さ0.42~1.56m、幅0.41~0.90m、残存深度0.06~0.11mである。2・3個が連結し、アメーバー状を呈したものもある。

確認面は、表土下約0.70mに堆積する黒褐色土上層である。浅間C軽石はこの層中の凹部に堆積していた。検出状況からは、これらの凹凸面が、人為的な掘り込みであるか否かを断定することは困難である。もし遺構であるとすれば、個々について独立した遺構として考えるよりも、畠作の荒耕し時の旧地表面の起伏が、浅間C軽石降下により残存したと理解することも可能であるが、これと対応する浅間C軽石降下時の竪穴住居の存在についての検討が必要となってくる。本遺跡で調査した古墳時代前期の竪穴住居40軒のうち、いずれの住居の埋没土中からは浅間C軽石純層の堆積は見られず、出土土器の様相

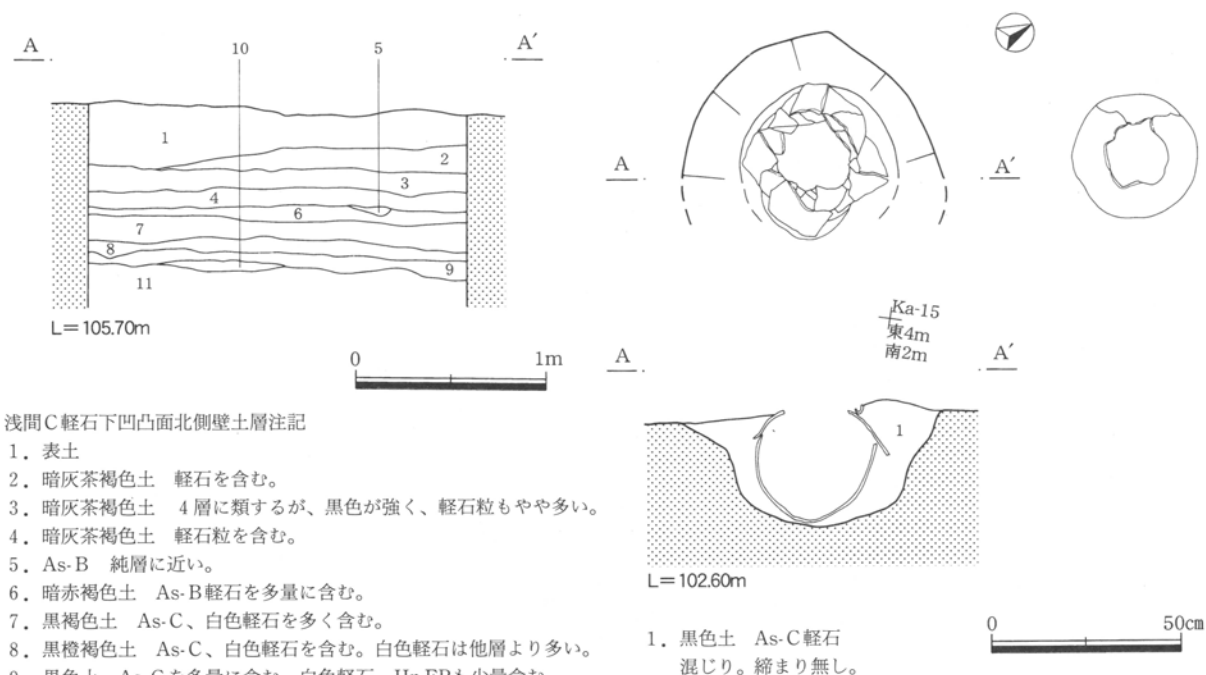


第15図 浅間C軽石下凹凸面(1)

も比較的新しい様相を帯びたものが主体的であった。



第16図 浅間C軽石下凹凸面(2)



浅間C軽石下凹凸面北側壁土層注記

1. 表土
2. 暗灰茶褐色土 軽石を含む。
3. 暗灰茶褐色土 4層に類するが、黒色が強く、軽石粒もやや多い。
4. 暗灰茶褐色土 軽石粒を含む。
5. As-B 純層に近い。
6. 暗赤褐色土 As-B軽石を多量に含む。
7. 黒褐色土 As-C、白色軽石を多く含む。
8. 黒橙褐色土 As-C、白色軽石を含む。白色軽石は他層より多い。
9. 黒色土 As-Cを多量に含む。白色軽石、Hr-FPも少量含む。  
As-Cは底部で部分的に純層に近い所がある。
10. As-Cの純層
11. 黒褐色土 軽石粒を少量含む。地山。

1. 黒色土 As-C軽石混じり。縮まり無し。

第18図 2区185号土坑埋設土器(1)

第17図 浅間C軽石下凹凸面土層断面

第2章 荒砥諏訪西遺跡の調査

(3) 埋設土器

2区185号土坑 (第18・19図 P L 12・28)

位置 Kb-14

形状 直径0.6mの平面円形状の掘り方内に直径33cmの口縁部が現存しない壺を埋置、これに別個体の壺を蓋として重ねている。蓋とした壺は、現状、大型破片2片となっている。原形は一個体で合わせ口

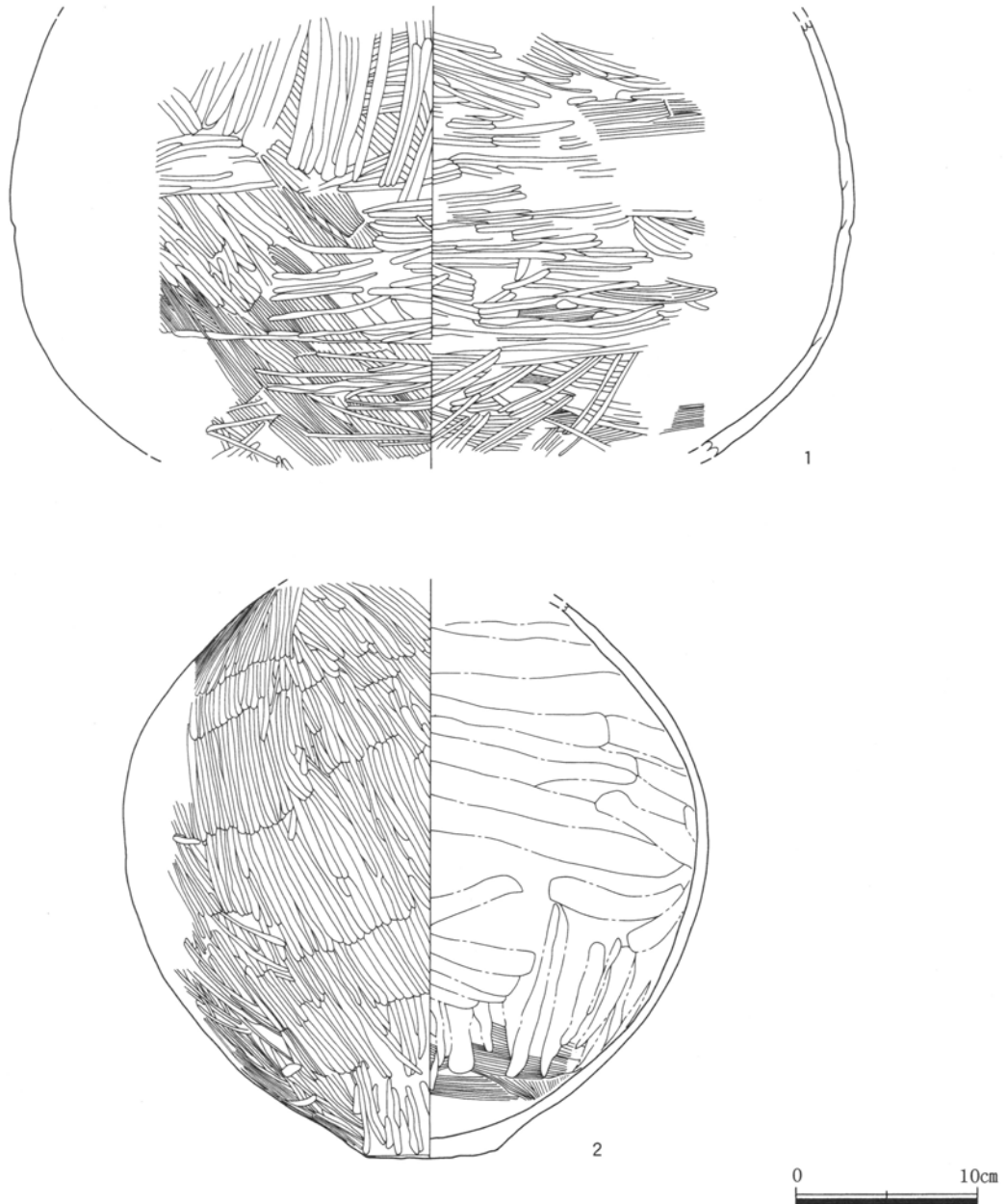
状を呈していた可能性もあるが原形は不明である。

方位 N-8°-W

埋没土 掘り方の残存壁高は32cm、浅間C軽石混じりの黒色土を埋没土としている。

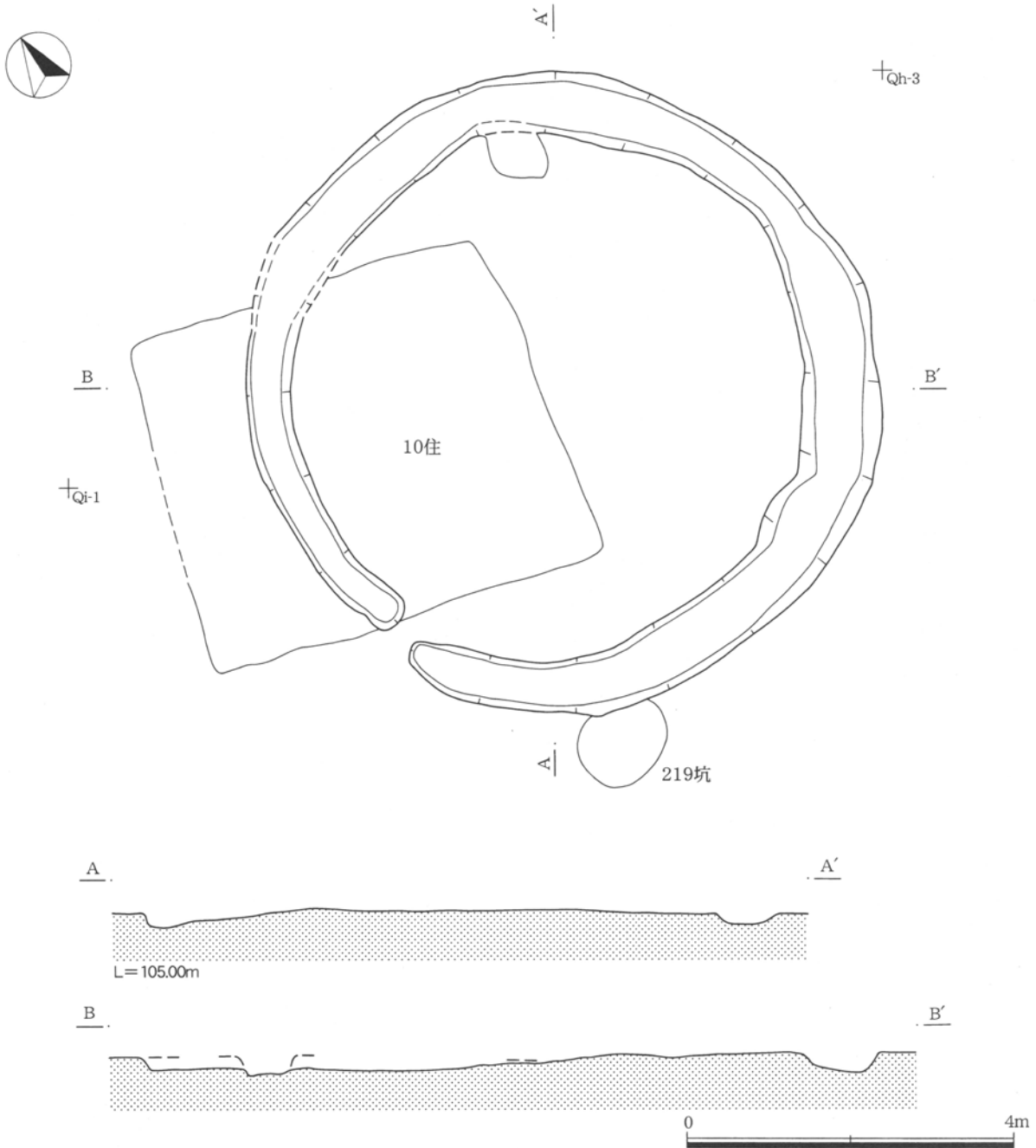
所見 古墳時代前期の所産と考えられる。骨片等の出土はないものの壺棺墓の可能性が考えられる。

(観P207)



第19図 2区185号土坑埋設土器(2)





第20図 3区円形周溝状遺構

(4) 円形周溝状遺構

3区1号円形周溝状遺構 (第20図)

位置 Qi-2 を中心に位置する。

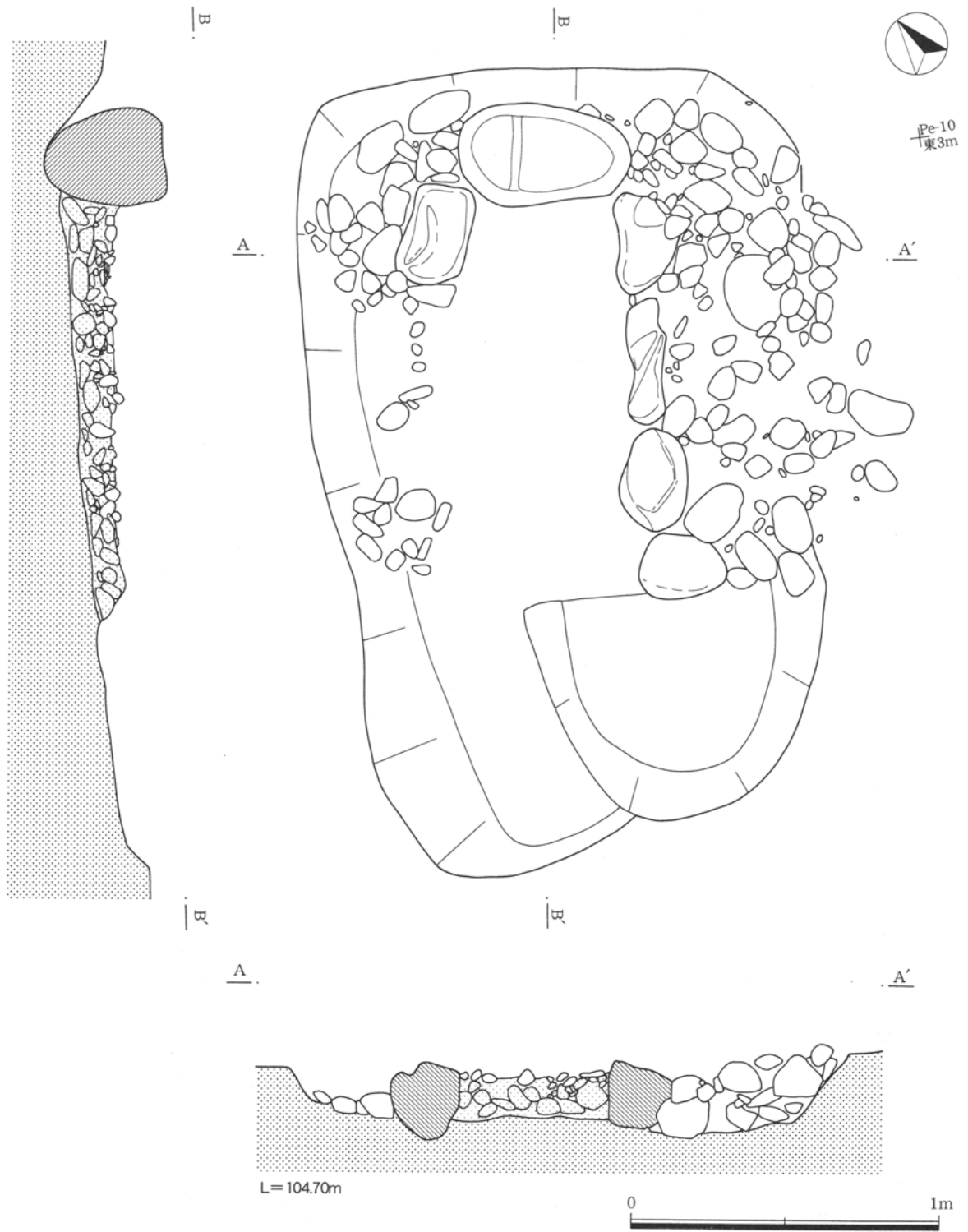
重複 199号土坑に先行する。10号住居より後出する。

形状 平面形はほぼ正円形を呈するが、南西部分は開放し、わたり状を呈している。周溝を含めた規模は、南北7.57m、東西7.52mを測る。周溝の上幅0.60~1.00m、下幅0.42~0.60mである。断面形はレ

ンズ状を呈している。残存壁高は0.05~0.28mである。

埋没土 浅間C軽石を多量に含む暗褐色土が上・下位ほぼ同質に堆積している。

所見 古墳時代前期の10号住居より後出である他には出土遺物もなく詳細な掘削時期は不明である。形状は、他遺跡で検出される円形周溝墓に類似する形状であるが主体部の検出もなく墳墓とは確定しえなかった。



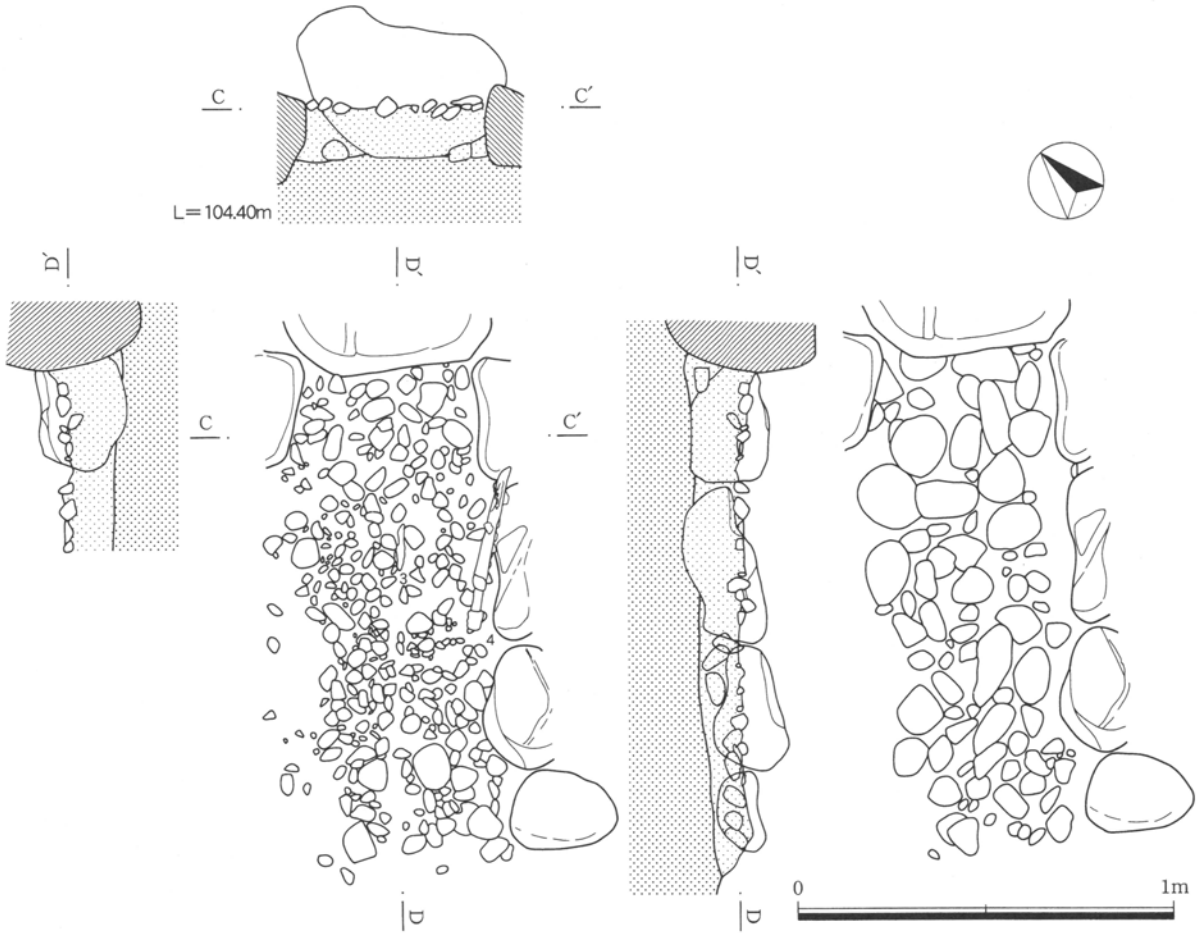
第21図 3区1号墳(1)

(5)古墳

古墳は、遺跡の北寄り、3区で3基検出した。これらの古墳は、調査時にはいずれも既に削平されていた。北接する諏訪西遺跡でも諏訪西遺跡2号墳を調査しているが、本遺跡の3区1・2号墳との関係

は、わずか3・4mの距離であった。

本遺跡周辺の古墳分布についてみると『上毛古墳綜覧』には現在の荒口町に7基が掲載されている。今回調査した3区3号墳は、『綜覧』掲載の字諏訪西905番地所在の荒砥村第330号墳小塚である。調査前、



第22図 3区1号墳(2)

古墳検出地点の農道脇にはこの古墳の発掘にかかわる石碑が建てられていた(図版1)。『綜覧』によれば諏訪西909番地には第329号墳小塚が、諏訪西905番地先には第331号墳小塚の記載があるが、今回調査の古墳との関係は不明である。第329号墳は、『群馬県遺跡台帳Ⅰ』によると1949(昭和24)年に盗掘を受け、人骨・直刀・金環・玉類が出土したとされる。また、同台帳には字諏訪西地内に所在した大道古墳の記載もあり、横穴式石室を主体部に有する円墳であったとされている。また、本遺跡の南方、荒砥宮田遺跡2区においても自然石乱石積の横穴式石室を主体部に有する古墳を1基調査している。

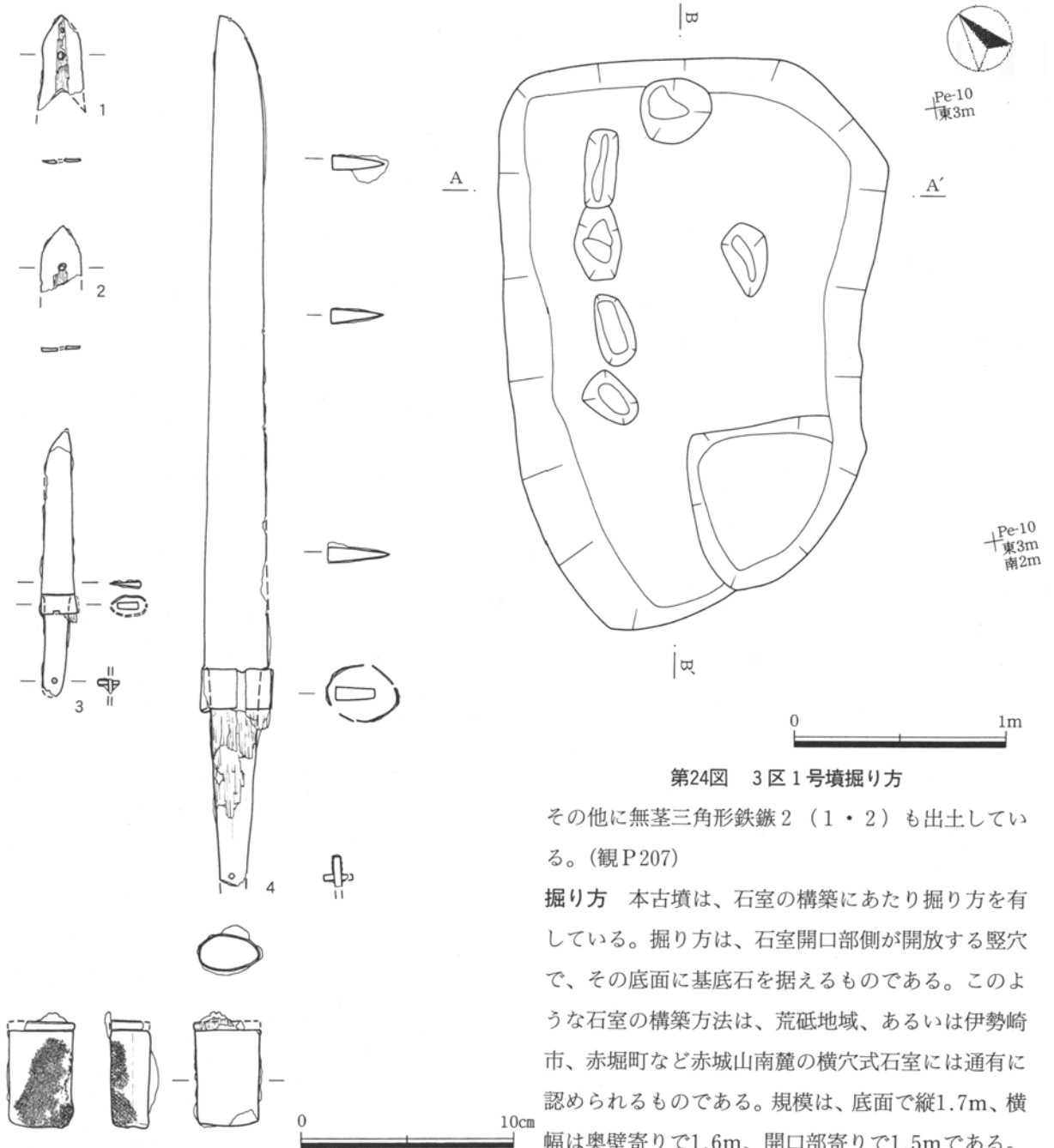
3区1号古墳(第21~24図 P L 3・28)

位置 Pd-9・10

重複 北側約6mに2号墳が位置する。

墳丘と外部施設 削平が進行していたため盛土は全く残存しなかった。周堀の存在も確認できなかった。

石室開口部前にはその中心を右側に寄せて半円状の浅い掘り込みがあり、前庭の遺構が存在していたものと考えられる。規模は、長さ0.73m、短軸0.98m、残存深度0.15mである。埴輪は検出されていない。  
**主体部の構造** 壁材に輝石安山岩の自然石を積み上げた横穴式石室である。各壁とも基底石一段のみの残存である。左壁は、最も奥壁寄りの一石が残存するだけであったが、右壁の置き方からみると石室の平面形は、無袖式であったと考えられる。規模は、全長1.29m、奥壁際の幅0.44mである。奥壁は、一石構成で横0.55m、高0.39mの大礫を据えている。右壁は入口部から奥壁までの間を4石により構成するものでここにも大礫を平置している。入口部の礫は、入口方向に平の面を向けて据えられている。両側壁の石材は、奥壁に寄せかけるように礫が置かれており、石室構築時の手順が観察できる。床面には羨道と玄室を区切るような石材の使用は無く、床面



第24図 3区1号墳掘り方

その他に無茎三角形鉄鏃2（1・2）も出土している。（観P207）

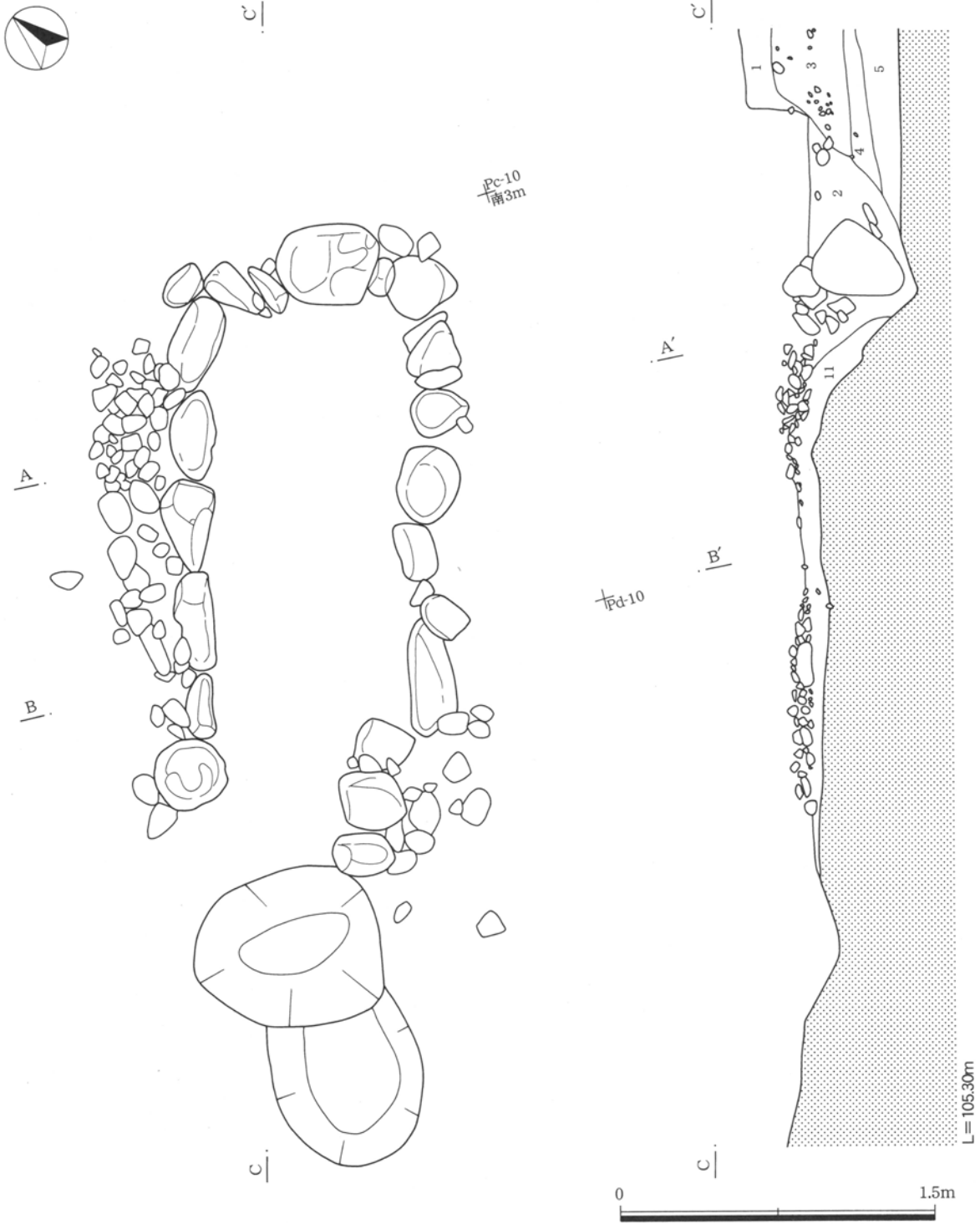
**掘り方** 本古墳は、石室の構築にあたり掘り方を有している。掘り方は、石室開口部側が開放する竪穴で、その底面に基底石を据えるものである。このような石室の構築方法は、荒砥地域、あるいは伊勢崎市、赤堀町など赤城山南麓の横穴式石室には通有に認められるものである。規模は、底面で縦1.7m、横幅は奥壁寄りで1.6m、開口部寄りで1.5mである。残存壁高は0.15～0.20mである。掘り方平面に対し石室はやや西側に寄って設置されている。底面には奥壁、および左壁の3石、右壁の1石、基底石の設置面を調整するための小穴が残されている。基底石と掘り方法面の間には裏込として床面の最下層に敷かれたものと同規模の礫が不規則に置かれていた。

**所見** 小型の横穴式石室である。埴輪の樹立が無いことから7世紀代の築造と考えられる。

第23図 3区1号墳出土遺物

の高さはほぼ一定である。床石は、二段の構造となっており、掘り方底面に0.10～0.20mの小礫を一面に舗石状に敷きつめ、さらにこの上に0.02～0.05mの玉石状の礫を重ねている。石室の開口方向はS-40°30'-Wである。

**遺物** 玄室内、右壁寄りの床面上から小刀(4)が切先を奥壁方向に向けて出土した。また、玄室内、中央、奥壁から0.47mの床面上から刀子(3)が出土。



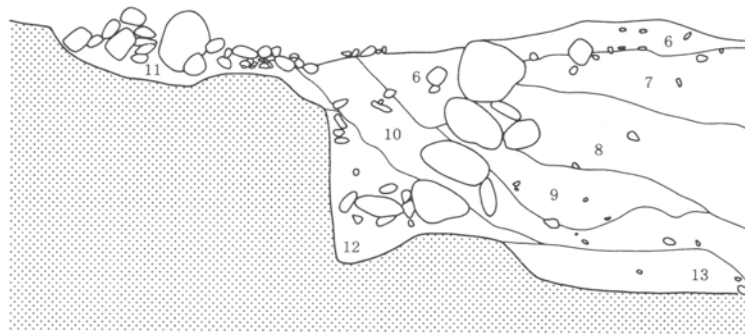
第25図 3区2号墳

3区2号古墳(第25・26・28・29図 P L 3・28)  
 位置 Pc・d-9  
 重複 188号土坑によって切られている。  
 墳丘と外部施設 墳丘は、削平が進行し、盛土は一切残存していなかった。周堀も検出されなかった。  
 石室開口部前には狭い皿状の掘り込みが2箇所検出

された。前庭状の遺構と考えられる。埴輪は検出されなかった。  
 主体部の構造 輝石安山岩の自然石を積み上げた横穴式石室である。石室の中軸線から右側は側壁の石材3段がずり落ちた状態で検出され、原形を保っていなかった。これは、地割れの影響による可能性が

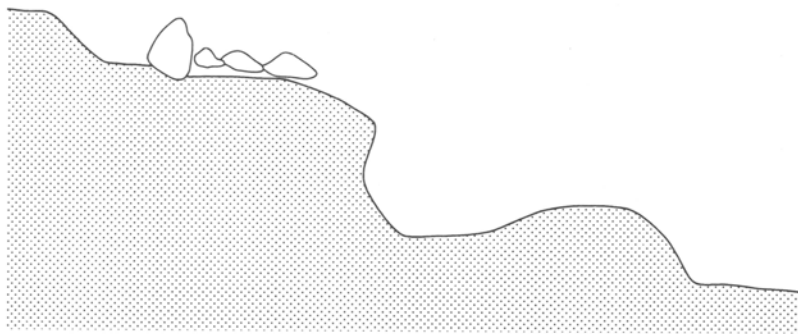
第2章 荒砥諏訪西遺跡の調査

A. A'



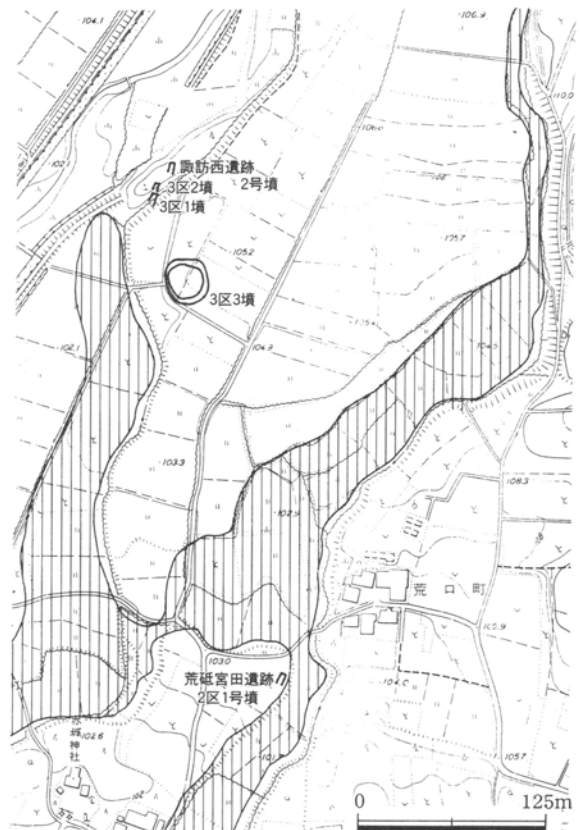
L=105.30m

B. B'

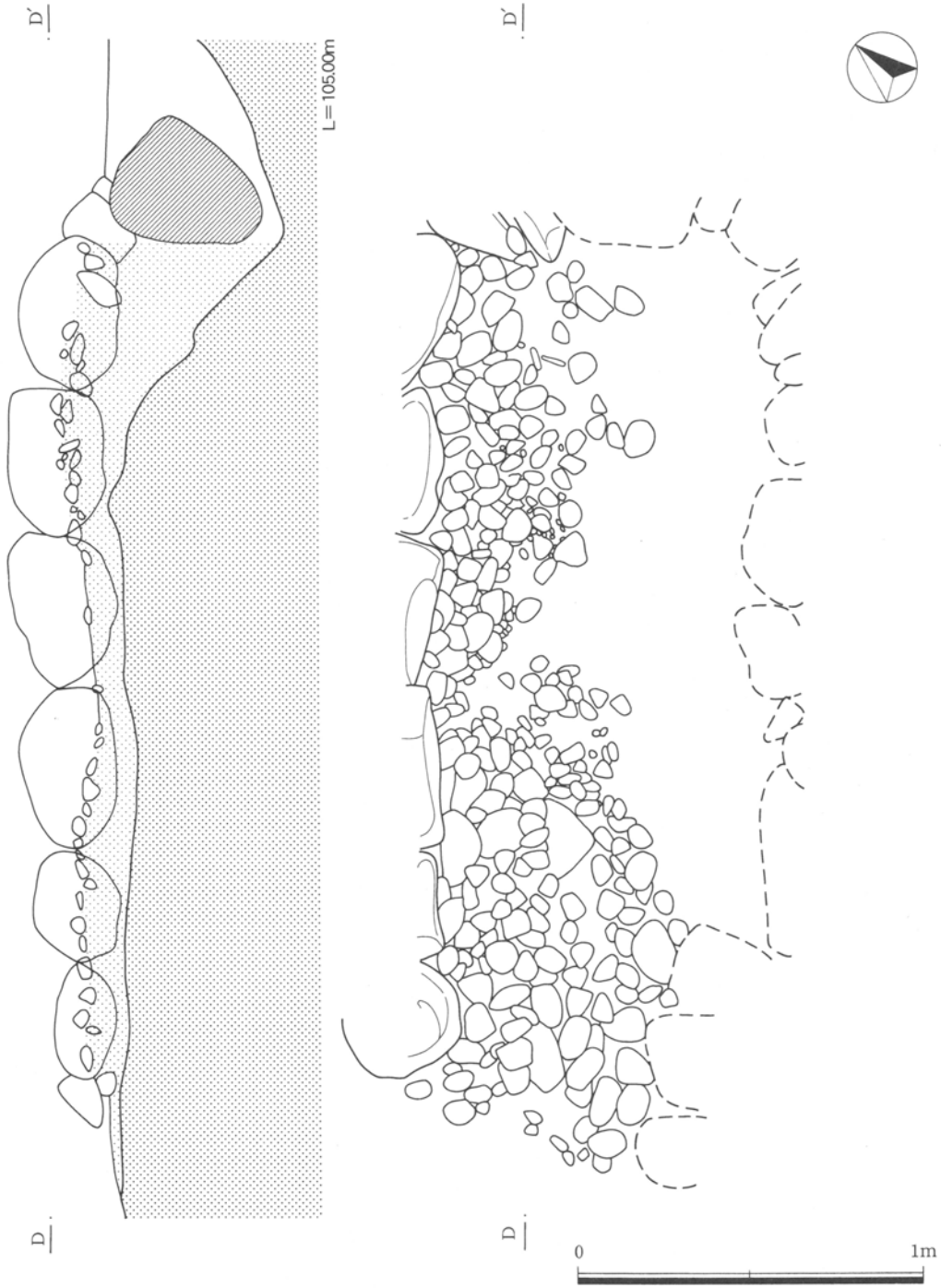


1. 黒褐色土 礫を多く含む。
2. 暗灰褐色微粒砂層
3. 暗灰褐色微粒砂 多量の礫を含む。
4. 暗灰褐色微粒砂
5. 暗灰白色微粒砂
6. 暗灰白色微粒砂 小石を含む。
7. 黒褐色土 軽石(白色・灰白色)を含む。
8. 黒褐色土 軽石は少なく、黒色が弱い。
9. 黒褐色土 軽石は8層より少なく、黒色も弱い。
10. 黒褐色土 9層に類するが、軽石はごくわずかで、礫を多く含む。
11. 暗褐色土 暗灰白色土微粒を含む。地山より黒色が強い。
12. 黒褐色土 9層に類するが、暗褐色土の小ブロックを少量含む。
13. 暗灰白色微粒砂 小石を多く含む。地山。

第26図 3区2号墳土層断面

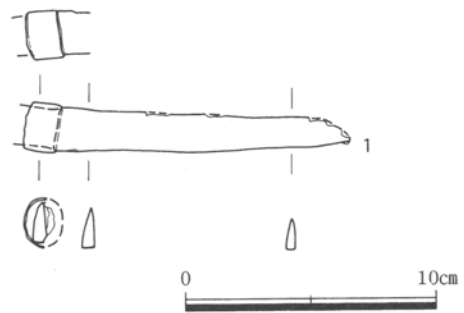


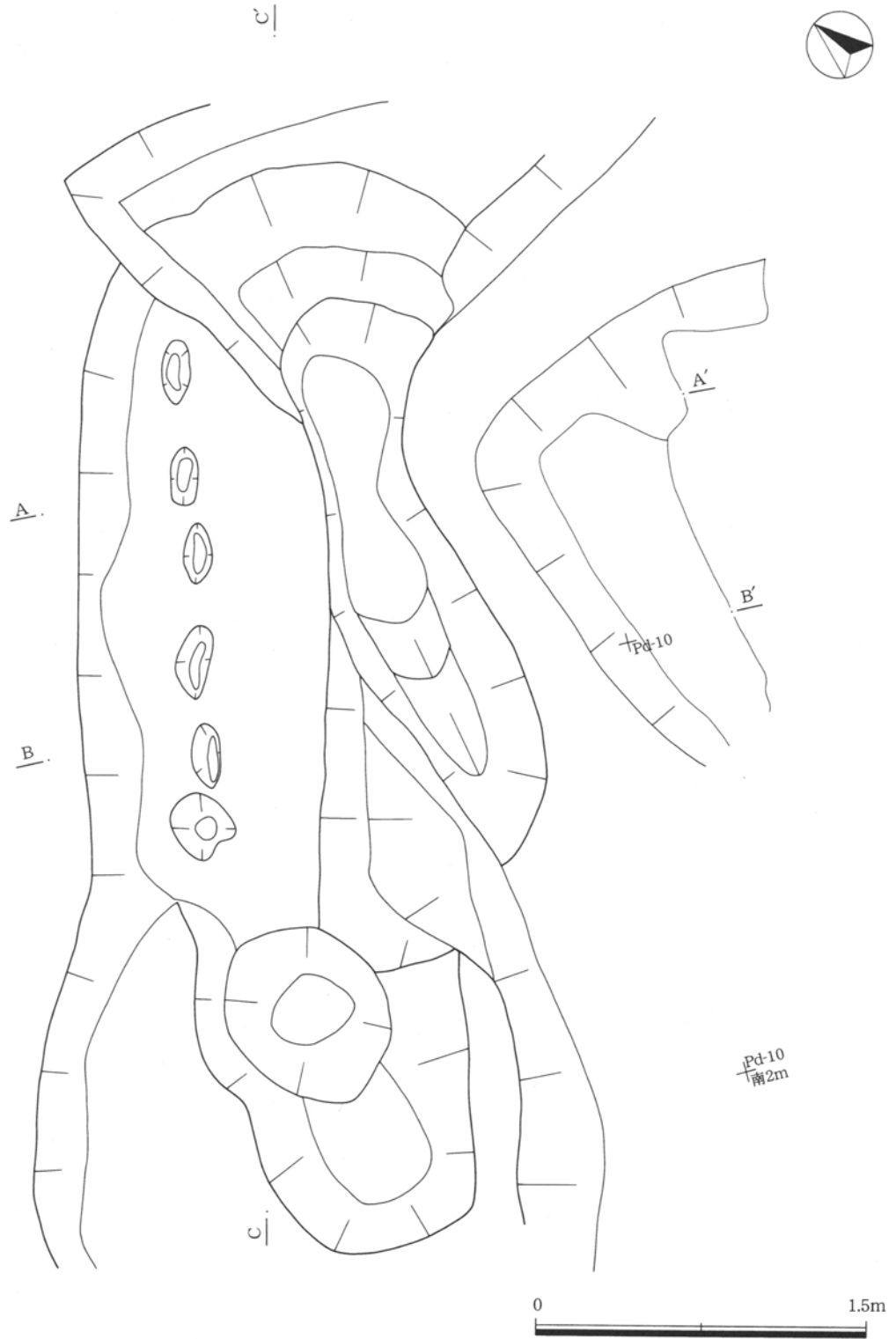
第27図 荒砥諏訪西遺跡周辺の古墳分布



第28図 3区2号墳と出土遺物

考えられる。石室の平面形は、左側壁の石材の並びから袖無型を呈していたものと想定される。規模は、長さ2.35mを測る。幅は、奥壁寄りで0.65m以上、入口部寄りで0.53m以下である。石室は、各壁面とも基底石のみの残存である。奥壁は、幅0.51m、高さ0.43mの大礫を据え、左側壁との間隙に小礫を補充するものであるが地割れの中に深く沈み込み、東





第29図 3区2号墳掘り方

側にずれていた。左側壁は、6石が確認された。横長の礫の平の面を内側に向けて置いている。一番手前の礫は厚さを有し、他の5石と礫の据え方が異なることから、羨道入口にあたる用石と考えられる。このことから、左側壁は完存していたものと思われ

る。右側壁は、前述のとおり原位置から大きく東側に石材がずれ落ちているが、開口部寄りで検出した3石は、床石の状況からその移動は少ないものと思われる。

床面は、ほぼ水平が保たれている。床石には1号



墳ほどの差はないものの、礫の大きさに大小が認められることから、底面近くに大型の礫を置き、その上に玉石状の礫を敷きつめたものと考えられる。開口部から奥壁方向に0.63mの位置に長さ0.20mの礫3個が並べられていた。これらが羨道と玄室を区別する間仕切の列と考えられる。

石室の開口方向はS-48°-Wである。

**遺物** 奥壁寄りの左隅床面から刀子(1)を出土した。(観P207)

**掘り方** 本古墳も、石室の構築に際し、石室開口部側に開放する竪穴状の掘り方を設けている。その全様を検出できなかったが、石室左側壁の外方約0.20~0.30mの位置に掘り方法面を検出している。側壁とこの間には長さ0.10~0.20mの礫が詰められていた。掘り方底面はほぼ水平であるが、左側面、基底石下には石材を安定的に据えるための小穴が6箇所検出されている。

**所見** 埴輪の出土がみられないことから7世紀代の築造と考えられる。

### 3区3号古墳(第30~32図 P L 3・28・29)

**位置** Pm-19を中心に位置する。

**重複** 4・5・7・8号の各住居、7号溝、50・51号土坑をはじめとする多数の土坑と重複する。住居よりは後出、溝、土坑よりは先行する。

**墳丘と外部施設** 墳丘は、全て削平され、盛土は、一切残存しなかった。周堀は墳丘を一周していたと



図版1 3区3号墳にかかわる石碑(調査前)

考えられるが、西側から南側については、住居の調査の都合と上位からの削平を受けたため検出されなかった。墳丘の規模は、南北29.0mを測る。東西は、28.0mと推定される。周堀の残存は、不良で、壁高は0.20m前後である。上幅は、1.30~2.15m、下幅0.60~1.80mを測る。断面形はレンズ状で、底面に平坦面は無かった。

**埋没土** 榛名ニッ岳伊香保テフラと考えられる白色軽石をまばらに含む黒褐色土が堆積する。

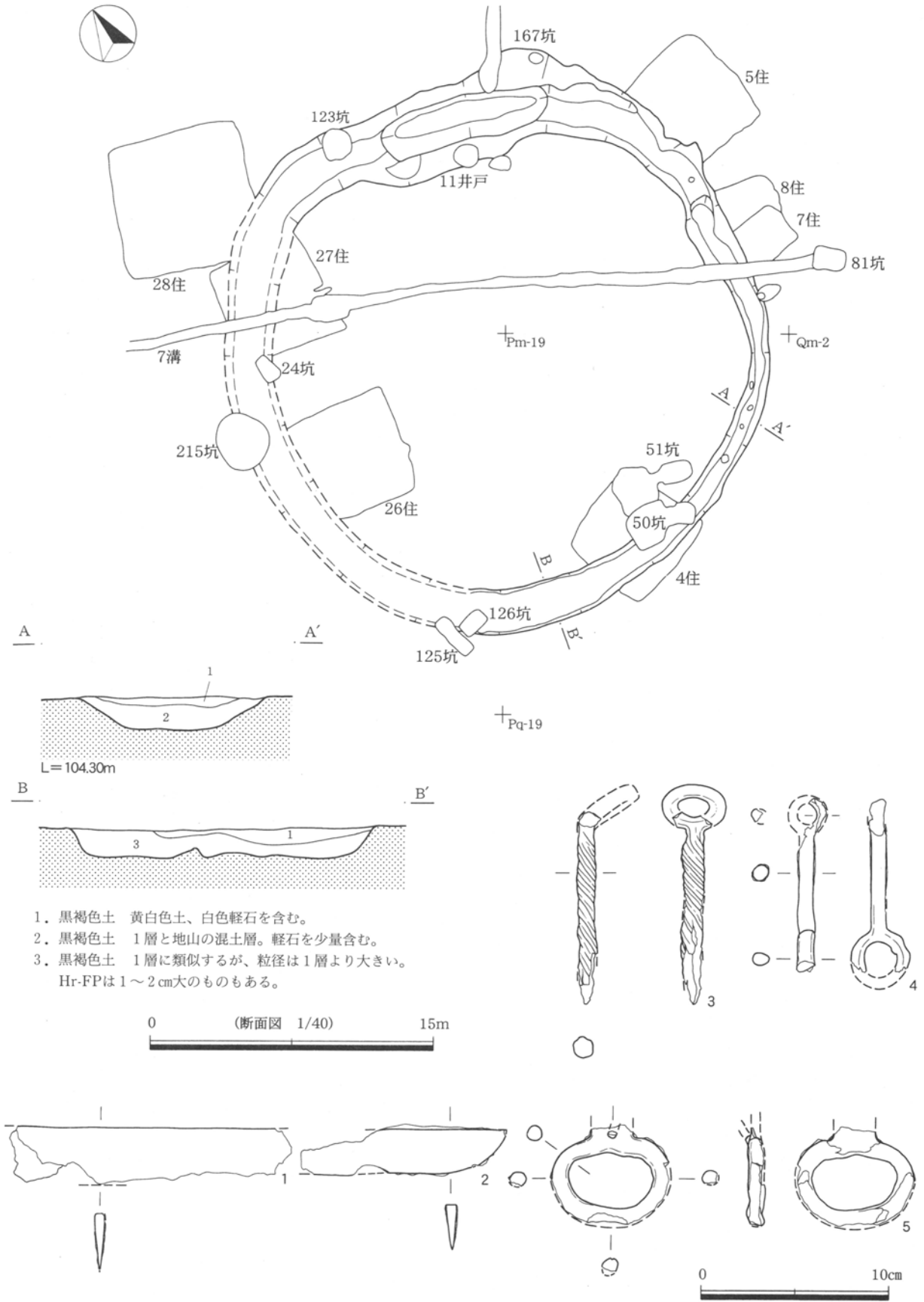
**遺物** 周堀数箇所の埋没土中から須恵器片(6~35)を検出していた。26号住居調査中に攪乱土中から出土した鉄製品、直刀破片(1・2)、馬具轡(3~5)は、本古墳に副葬された可能性が高いことから本項に掲載した。埴輪は、出土していない。

(観P208・209)

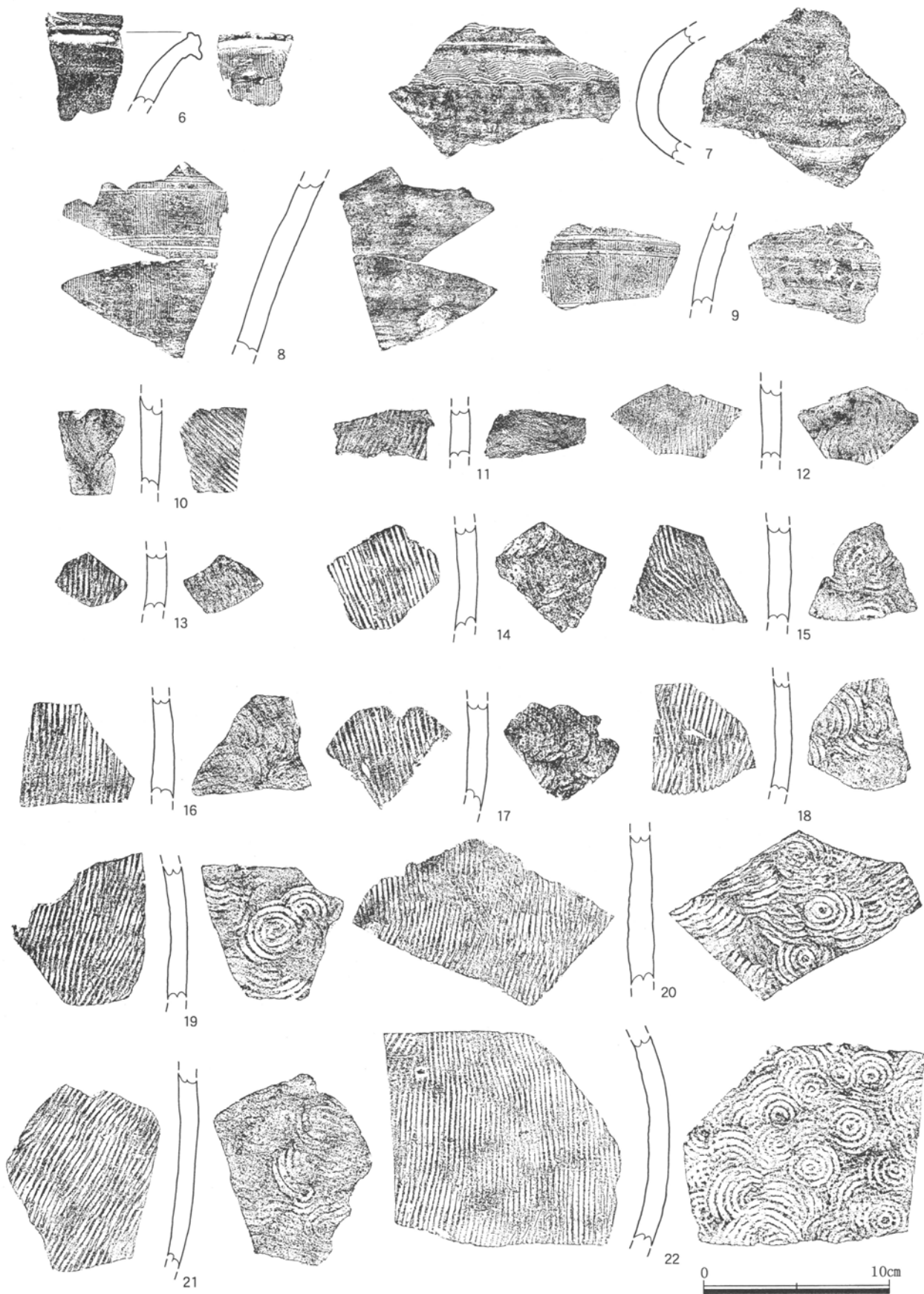
**所見** 埴輪が存在しないこと。出土遺物の形状から7世紀前半の築造の可能性が考えられる。

**備考** 調査前、本古墳の調査地点近くに石碑が建立されていた。この石碑の碑文により、本古墳は、江戸時代安政年間に発掘が行われ、鏡・馬具などが出土したことが確認できる。石碑は、現在、遺跡地南側に鎮座する赤城神社境内に移されている。碑文は以下のとおりである(判読は、吉澤学「群馬県古墳関連碑文雑記」による)。

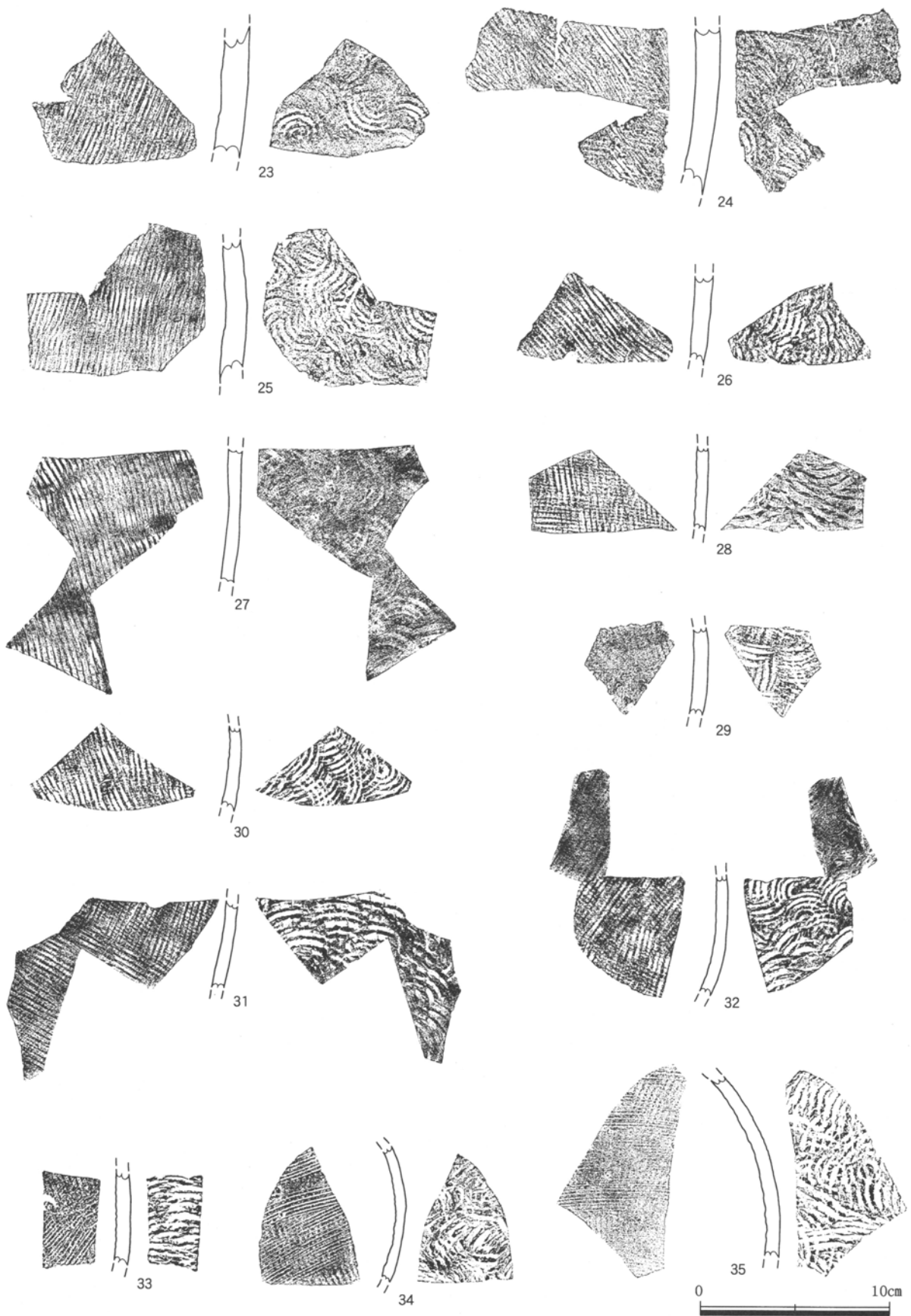
上州勢多郡荒口邨野潤林疎小邱相接草茂而露湛雀噪而  
 煙宿田兮飢馬村童捕魚野趣如畫余友阿部耕讀堂其家農  
 好讀書每耕自此古之帶姪真畎畝中之雅人也今茲安政四  
 季丁巳四月某日荷鋤逍遙乎村西田畝鋤響而風淒雲屯而  
 草薰忽思墾闢田中之高処以為桑畝遂自揮犁鑿之其土黃  
 壤沙礫碌碡更掘五六尺石橫而如林傍有古鏡及器械數枚  
 土蒸色變不識其為幾千年外物耕讀子諦視之鏡半朽而如  
 半月形劍多折而無室馬鏡之具空纜帶金光知是古昔王侯  
 貴人英魂老魄之所宿焉耕讀子憐而廢埋之建碑而記之嗚  
 呼世降鄉僻况荒叢野田之中遺茲神物一頭一晦蓋亦冥冥  
 之中有使之者也耶



第30図 3区3号墳と出土遺物(1)



第31図 3区3号墳出土遺物(2)



第32図 3区3号墳出土遺物(3)

### 第3節 古墳時代から平安時代の遺構と遺物

#### (1) 水田 (第33～35図 P L 6・7)

水田は、南北方向に延びる微高地の東側部分、Q・Nグリッドの9ライン以東で検出された。この調査区は、調査時6区と呼称した。

検出した水田の総面積は、5,060㎡である。南北方向はQnの17ラインで103.5m、東西方向はQmラインで82mを測った。本調査区の西側、3区部分においては、上層からの土壌攪乱により検出されていないが、当初の水田面の範囲は、6区の西方あるいは北方の調査区域外に及んでいたものと考えられる。水田面は、現地表土下0.50～0.60mのところは0.05～0.10mの厚さで堆積した浅間B軽石層の下位から検出した。水田面における土層の堆積状態は第35図のとおりである。

#### 水田の地形

水田面の形成された微高地は、北から南に向かって緩やかに傾斜している。また、その幅は、6区北端で約220mを測り、両側縁は東面する沖積地に向かって傾斜しており、水田面は、微高地上の起伏を平坦に造成して形成されたものと考えられる。標高は、北端Qb-1グリッドで105.00m、南端Nc-17グリッドで103.70mである。両者の比高は、1.3mである。東西の高低差は、西端Qp-10グリッドで104.30m、東端Rp-4グリッドで104.05mで、0.25mである。各水田区画内においても5～9cm前後の高低差がみられる。

#### アゼの走向と区画

各水田を区画するアゼの幅に大差はない。大アゼはなく、小アゼのみを検出した。アゼは、黒褐色土を盛りあげて形成されているが、土圧により偏平化している。また、一部、削平を受け高まりのない部分もみられた。アゼの規模は、上幅0.22～0.32cm、下幅0.50～0.90cm。水田面との比高は3～11cmである。断面形は、偏平なかまぼこ状を呈していた。

アゼの走向についてみると調査区の南西部分、No.1からNo.11の区画が比較的整然としている。No.6

からNo.11の区画の東側、および西側のアゼは南北方向に連続した走向がみられる。また、No.5、No.11の区画の北側、およびNo.7区画・No.9区画の北側のアゼも東西方向に連続している。検出状況からは南北のアゼが区画のための主たるアゼとなっていたことが想定される。

アゼの走向と地形の関係をみるとNo.6区画からNo.11区画では東西アゼが等高線に平行して走向しているのに対し、南北方向は等高線に直交して走向することを基本としており、水田区画は東西に長軸を有する長方形区画を基本としている。アゼの方向は、No.6区画からNo.11区画の東側の南北のアゼが、N-20°-E、西側の南北アゼが、N-17°-E、No.7区画北側の東西アゼが、N-72°-W、No.11区画北側の東西アゼが、N-80°-Wである。

これに対し、北側半分は、アゼがスムーズに連続した走向となる部分が少ない。形状は変形になり、その面積が小規模な区画が多数である。

水田区画は、各区画内で5～9cm前後の高低差を有している。これは北半分の小区画でも南西部分の長方形区画においても片寄った状況は認められない。北半分は小区画に区分することにより生じる高低差を小規模に是正した結果であろう。

中央南側寄り、及び南東部分ではNo.AからNo.Dの区画にみられるように大区画の状況で各区画が検出された。これは区画のアゼが土圧による偏平化したためその確認が困難になったり、後世の削平により検出できなかった可能性も充分考えられる。

#### 水田の面積

水田は区画全体を完全に検出したものが27面検出された。これに不完全なもの17面前後の合計44面前後を検出した。これらの区画個々の面積、規模は第3表に示したとおりである。

一区画の面積は、No.23区画の12.5㎡からNo.39区画の178.1㎡までの較差が生じている。

アゼ上の埋石は、4箇所検出された。1箇所目は、No.16区画東端の南北アゼ状である。アゼの東西両縁に1個ずつ長さ15cmほどの礫が埋められてい

第3表 水田面積一覧

No	面積	長	短	辺	辺	形状	No	面積	長	短	辺	辺	形状
1		—	—			長方形?	23	12.5	(5.10)	2.30	2.80		長方形
2		—	2.90	3.20		長方形?	24	39.5	7.55	8.00	3.85	5.40	台形
3		—	4.10			長方形?	25	99.7	12.40	5.25	9.45		不整形
4		—	4.50			長方形?	26	109.1	12.10	7.30	10.70		不整形
5		—	3.90			長方形?	27	18.9	7.10	3.50	3.10		不整形
6		—	—			長方形?	28	76.4	9.80	8.00	8.60		不整形
7	(98.8)	22.90	4.30			長方形	29		6.80	2.70			不整形
8	116.2	23.50	4.30	5.90		長方形	30		9.90	10.30	5.65		台形?
9	117.6	24.30	3.29	6.20		長方形	31	19.5	3.60	5.50	4.60		台形
10		25.20	4.30	5.30		長方形	32	21.1	10.05	1.85			不整形
11		24.30	2.30	2.60		長方形	33	18.3	6.40	2.65	2.80		長方形
12		—	2.20	2.75			34	18.5	4.35	5.05	3.70	3.95	台形
13		—	8.70				35	17.5	5.10	5.80	3.00	3.40	台形
14		—	3.60				36	74.8	7.45	10.00	8.20	9.05	台形
15		—	6.60				37	30.4	6.10	6.95	4.45	4.80	台形
16		6.30	3.40				38	14.9	6.20	2.30	2.90		台形?
17	104.9	6.70	11.40	11.50	10.80	台形	39	178.1	12.20	15.10	11.80	13.80	台形
18	27.2	7.10	5.30	3.70	4.60	台形	40	(108.9)	12.20	13.10	8.50	9.20	不整形
19	12.8	5.60	1.50	2.85		台形	41	40.0	5.20	12.68	5.40	1.30	不整形
20	23.6	7.50	2.00	3.60		台形	42		6.05	2.37			長方形?
21	24.0	7.60	2.25	4.30		不整形	43		—	—			
22	34.1	14.70	1.60	3.10		長方形?	44		5.10	—			

た。また、この2磔の北側7cmのアゼ両縁にも同規模の磔が1石置かれていた。2箇所目は、No.26区画北東隅近くの東西アゼ南縁に、3箇所目は、No.30区画南東隅近くの東西アゼに、4箇所目は、No.44区画南西隅に、それぞれ1石ずつみられた。

取配水の方法

今回検出した水田にはこれに伴う水路等の灌漑施設が検出されなかった。そのため水田への取水方法は不明である。例えば東側沖積地からの取水を仮定すると、この沖積地における浅間B軽石直下の黒色土層上面の標高は、102.8mで、No.42区画の水田面の標高104.6mと1.8mの比高がある。この標高差を克服し、東側沖積地を流水する小河川から取水をすれば地形的にみて相当の距離、上流から用水路を掘削し通水するか堰等の施設が必要となる。また、

各区画への配水については水路の検出がないことから、高位区画から低位区画へ順次懸け流される方法が取られていたと考えるが、水口がNo.6区画とNo.7区画の間の東西アゼに1箇所検出されているだけであることから断定することは困難である。耕作痕や足跡については検出されていない。遺物は、高台付

碗(1)・須恵器杯(2)が出土している。

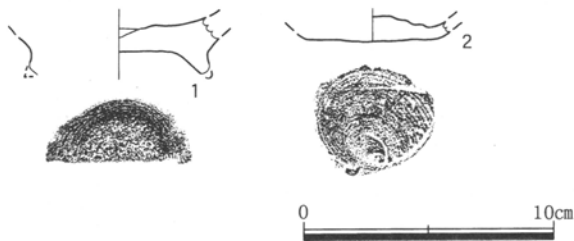
(2)浅間B軽石下の調査

本遺跡の調査においては6区水田のほか、1区、2区、5区の各区で浅間B軽石の純堆積層を検出した。

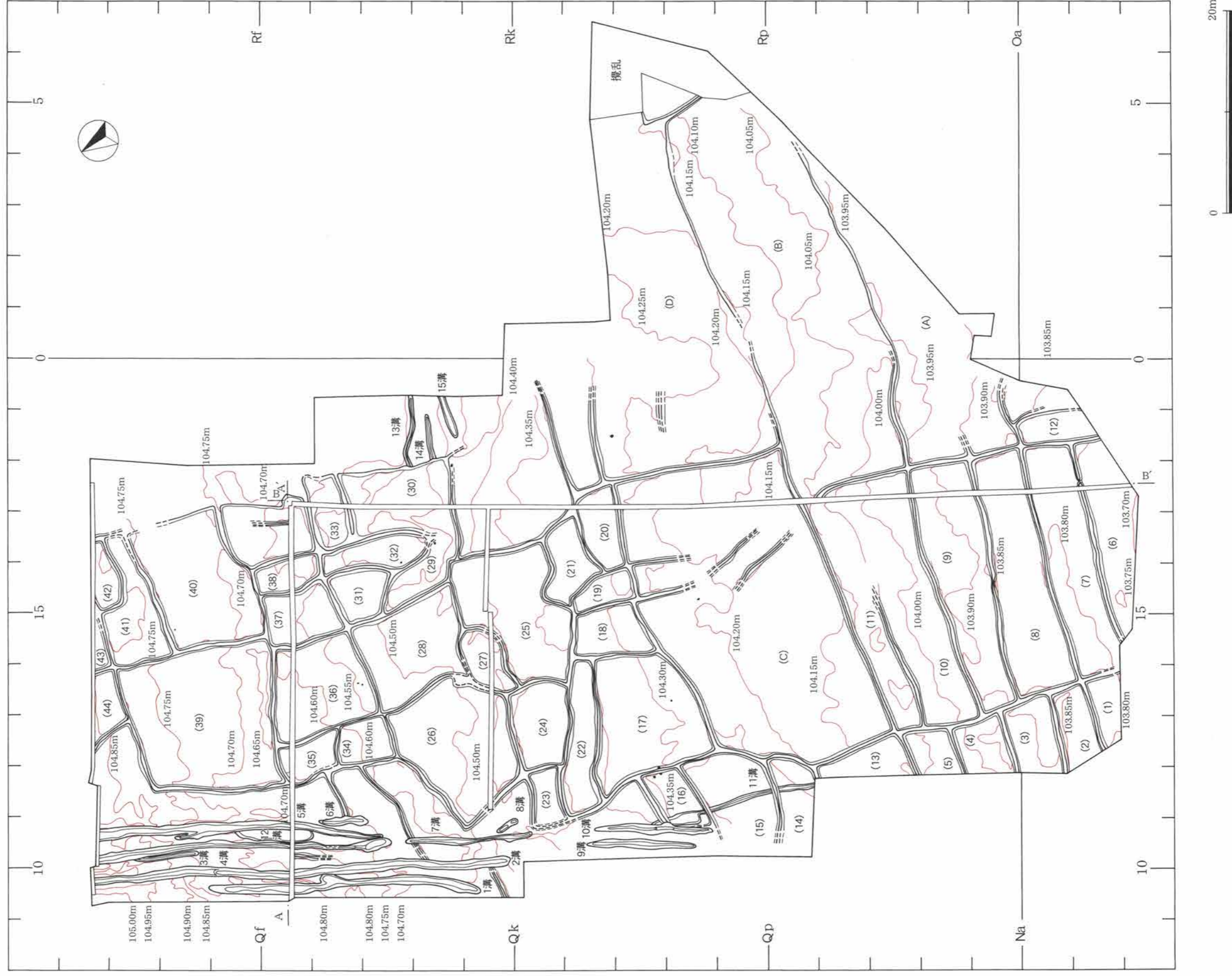
5区の調査(第36図 P L 4・5)

5区は、東西方向の新設道路とこれから分岐し南方向に延びる道路とこれに平行して延びる用排水路部分の調査である。浅間B軽石の純層は、調査区西端から18m東側に寄った地点から約38m、調査区東端から11.60m西側寄りまでの間に堆積している。浅間B軽石下の面を精査、水田遺構の確認することを目的とした。

この地点は、狭い谷地形を呈しており、調査前、水田耕作がおこなわれていた部分である。また、水



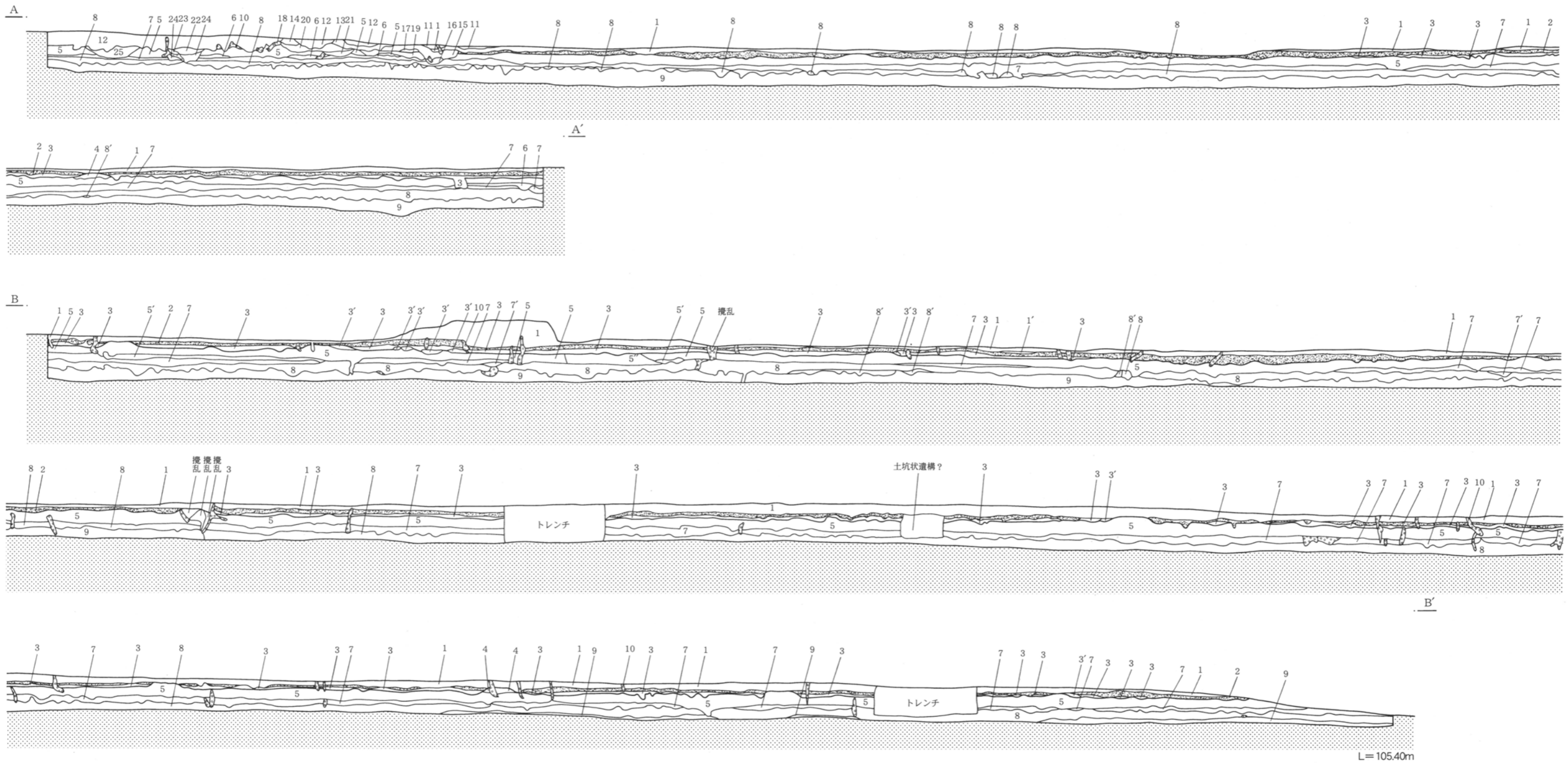
第33図 6区浅間B軽石下水田出土遺物



第34图 6区浅間B軽石下水田、中・近世溝





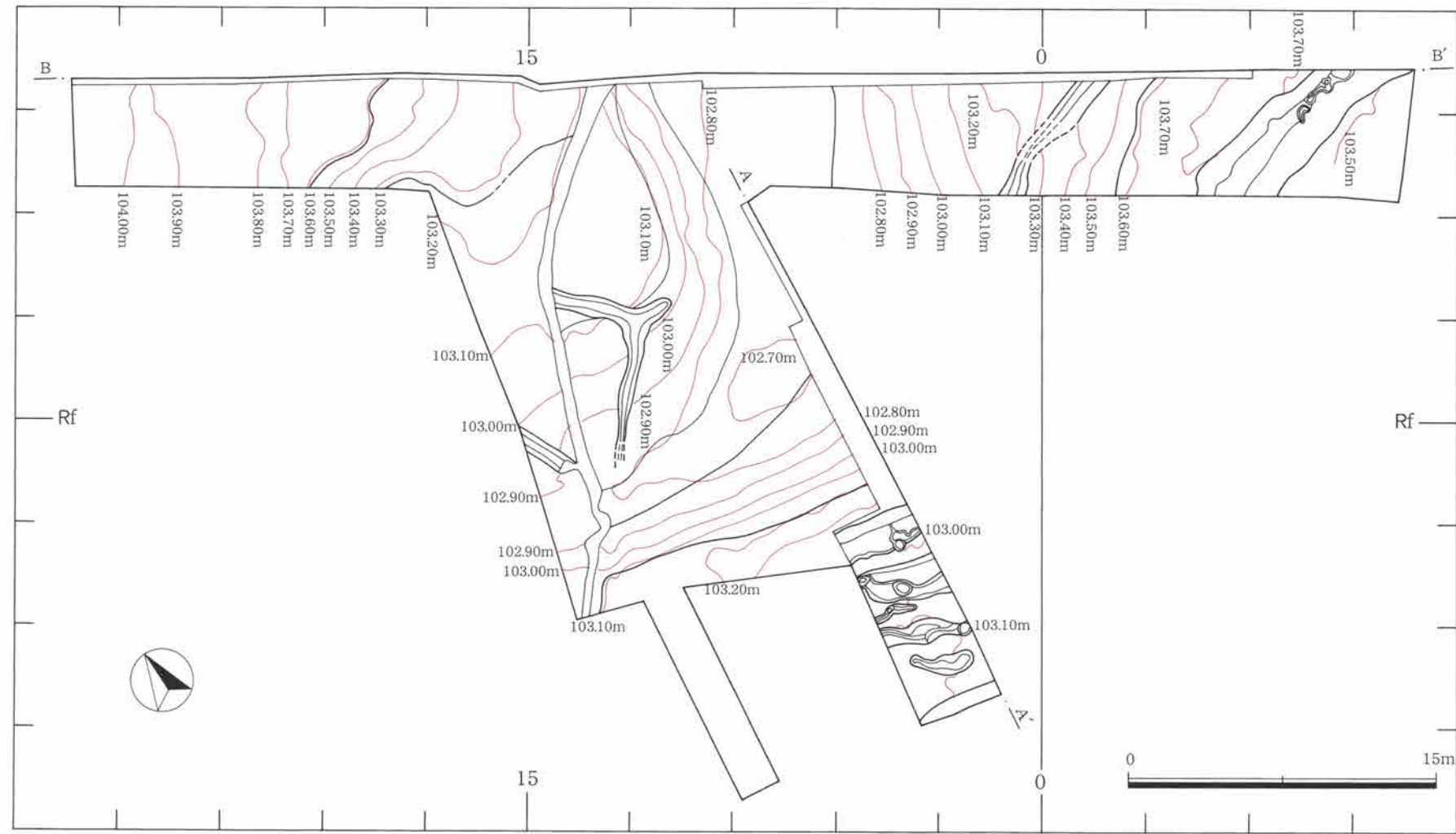


- |                                  |   |   |
|----------------------------------|---|---|
| 1. 褐色土                           | 7. 黒色土  | 15. 褐色土と砂層の互層 11層に類似するが、砂粒の量が少ない。5号溝埋没土 |
| 1'. 褐色土                          | 8. 黒褐色土 粘質。                                       | 16. 褐色土 As-Bを斑状に含む。5号溝埋没土               |
| 2. As-B純層                        | 8'. 黒褐色土  | 17. 褐色土と砂層の互層 11層と同様の層。砂層はほとんどAs-Bからなる。 |
| 3. 茶褐色土 As-Bに鉄分が著しく凝集している。       | 9. 黒褐色土 黄褐色土を斑状に含む。Hr-FP、As-Cを含む。                 | 18. 褐色土と砂層の互層 17層に類似する。                 |
| 3'. 茶褐色土                         | 10. 茶褐色土 鉄分凝集著しい。植物根の影響による土壌攪乱か。                  | 19. As-Bと褐色土の混土層 粒子荒く、締まり有り。            |
| 4. 黒褐色土 アゼの盛土。                   | 11. 褐色土と砂層の互層 褐色土は直径3~8mm大の砂粒を多く含む、砂層にはAs-Bを多く含む。 | 20. 褐色土 As-B、砂粒をブロック、あるいはラミナ状に含む。鉄分凝集。  |
| 5. 黒褐色土 水田耕土。粘性に富み、Hr-FPの軽石粒を含む。 | 12. 褐色土 As-B、Hr-FPと考えられる白色軽石、砂粒を多く含む。砂質。          | 21. 褐色土 20層に類似する。4号溝埋没土                 |
| 5'. 黒褐色土                         | 13. 褐色土 As-B、砂粒をブロック状に混入する。12号溝埋没土                | 22. 褐色土とAs-Bの混土層 軟質。2号溝埋没土              |
| 5''. 黒褐色土                        | 14. 褐色土 下に厚さ2cmほどのAs-B、砂粒の層を有する。                  | 23. 褐色土 12層に類するが、鉄分凝集がより著しい。2号溝埋没土      |
| 6. 黒色土                           |   | 24. 黒褐色土とAs-Bの混土層 2号溝埋没土                |
| 7. 黒色土 As-Cを多量に含む。               |   | 25. 褐色土とAs-Bの混土層 22層に類似する。1号溝埋没土        |

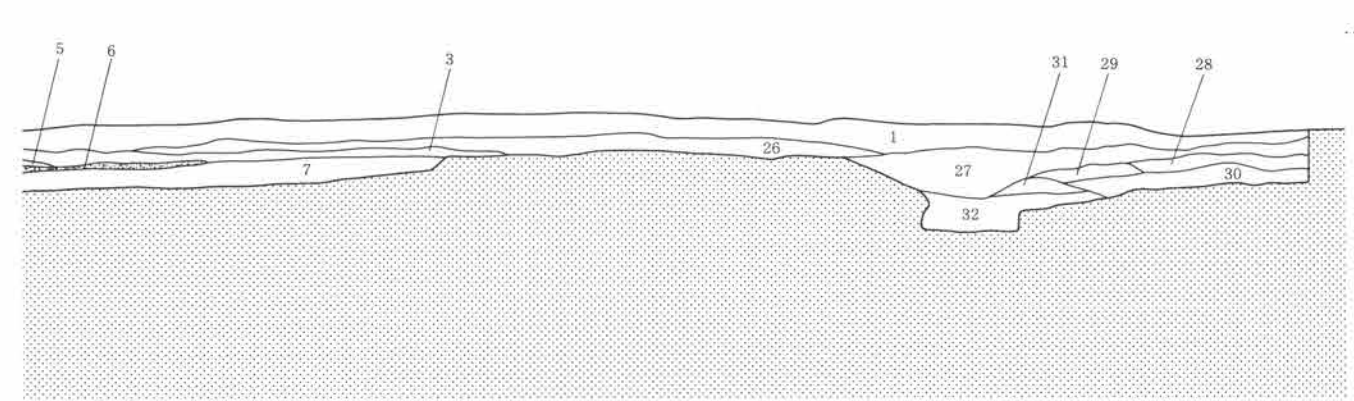
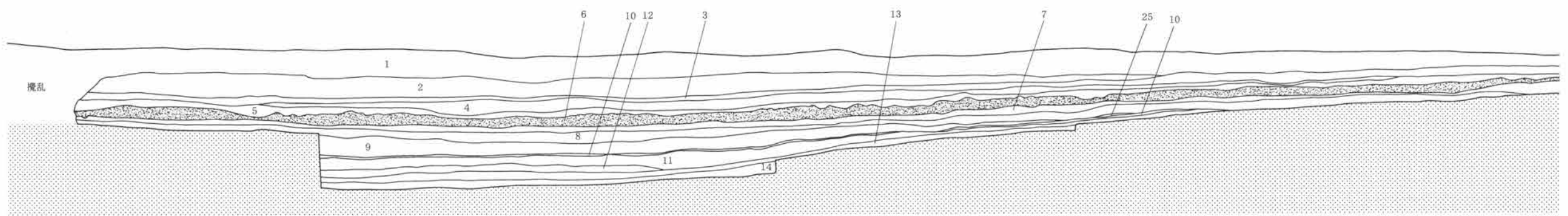
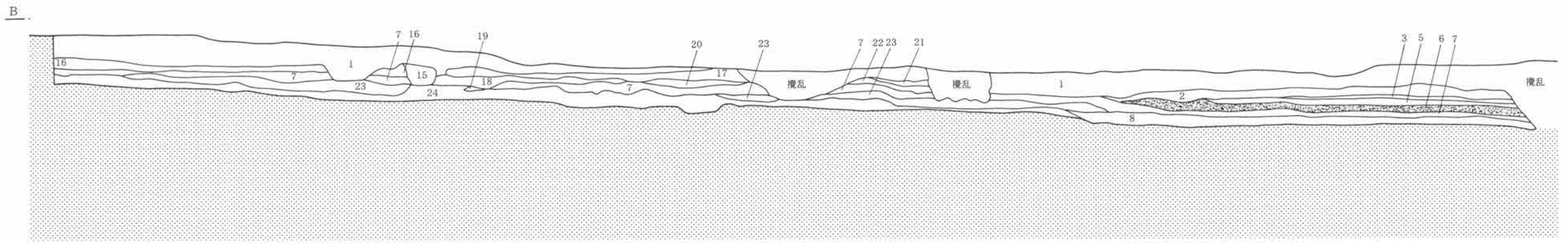


第35図 6区浅間B軽石下水田、中・近世溝土層断面

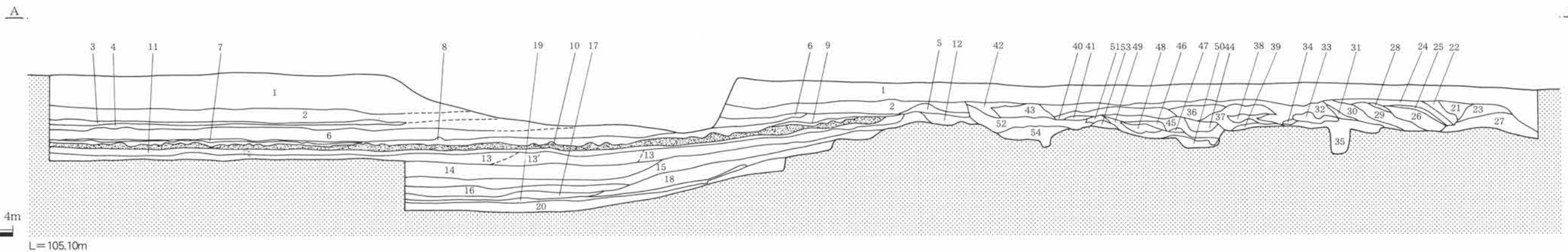




- |  |  |                          |
|--|--|--------------------------|
| 1. 表土  | 17. 黒色土 As-Cを主体とした黒色粘土の混合層。                    | 39. 砂礫互層                 |
| 2. 灰褐色土 As-A、黄土色土粒を含む。締まり有るが、さらさらしている。           | 18. 灰褐色土 As-Cと黒色粘土ブロックの混合層。さらさらしている。鉄分凝集がみられる。 | 40. 褐色土 砂礫、細砂ブロックが多量に入る。 |
| 3. 茶褐色土 白色軽石粒、黄色土粒を含む。締まり有り。                     | 19. As-C                                       | 41. 褐色細砂層                |
| 4. 茶褐色土 3層より暗い。白色軽石粒、黄色細砂のブロック(2~5cm)、斑鉄を含む。     | 20. 黒色粘土層                                      | 42. 褐色砂層                 |
| 5. 褐色細砂層   | 21. 黄色粗砂                                       | 43. 褐色細砂、黄色粗砂の互層         |
| 6. 暗灰褐色土 斑鉄、As-C、BPを含む。さらさらした層。                  | 22. 黄灰色粗砂層                                     | 44. 黄褐色粗砂                |
| 7. 暗灰褐色土   | 23. 黄灰色粗砂層                                     | 45. 褐色細砂層                |
| 8. 茶褐色土 As-Bに鉄分凝集している。                           | 24. 灰褐色砂層                                      | 46. 黄色粗砂                 |
| 9. As-Bの灰層                                       | 25. 褐色砂層                                       | 47. 黄色粗砂                 |
| 10. As-B   | 26. 褐色細砂層                                      | 48. 黄色粗砂                 |
| 11. 黒色粘土層  | 27. 黄白色砂層                                      | 49. 暗褐色細砂層               |
| 12. 茶褐色砂礫層                                       | 28. 黄褐色細砂                                      | 50. 灰色細砂、黄色粗砂の互層         |
| 13. 灰色粘質土 As-C、Hr-FPを含む。わずかに酸化鉄を含む。粒土やや粗い。       | 29. 褐色細砂層                                      | 51. 黄白色粘土ブロック主体と細砂       |
| 13'. 灰色粘質土 Hr-FPを多量に含み、砂質。鉄分凝集がみられる。             | 30. 黄色・褐色砂層の互層                                 | 52. 褐色土 細砂。              |
| 14. 暗色粘質土 As-C、Hr-FPを含む。                         | 31. 黄色粗砂                                       | 53. 褐色細砂層                |
| 15. 暗色粘質土 As-C、Hr-FP、Hr-FAブロックを含む。鉄分凝集がみられる。     | 32. 褐色土 砂礫、細砂、黄土粒が入る。                          | 54. 灰色砂礫層 淡褐色粘土ブロックが入る。  |
| 16. 黒褐色粘質土 As-C、Hr-FAを帯状に厚さ0.5~1cm、長さ10cmにわたり含む。 | 33. 砂礫互層                                       |                          |
|  | 34. 砂礫互層                                       |                          |
|  | 35. 砂礫互層                                       |                          |
|  | 36. 砂、細砂、礫の混合層                                 |                          |
|  | 37. 褐色砂層 砂礫がブロック状に入る。                          |                          |
|  | 38. 砂礫層  |                          |



- |   |  |
|---|--|
| 1. 表土                                   | 17. 茶褐色土 As-Bがブロック状に入る。                  |
| 2. 褐色土 鉄分凝集有り。白色軽石粒を含む。                 | 18. 褐色土 細砂、粗砂を含む。                        |
| 3. 茶褐色土 As-Bを含む。鉄分凝集有り。締まり強い。           | 19. 黒褐色土 ブロック状に混入。                       |
| 4. 褐色土 As-Bを多く含む。鉄分凝集みられる。締まり有り。        | 20. 褐色土 細砂、粗砂をブロック状に含む。                  |
| 5. 黒褐色土 As-Bを多量に含む。鉄分凝集みられる。            | 21. 褐色土                                  |
| 6. As-Bに伴う灰層                            | 22. 茶褐色土 5mm前後の白色軽石粒を含む。締まり有り。鉄分凝集。      |
| 7. 黒褐色土 As-C、Hr-FPを多く含む。粘性有り。ぼそぼそとした土層。 | 23. 茶褐色土 As-C、Hr-FPを含む。やや粘性有るが、さらさらした土層。 |
| 8. 褐色土 As-C、Hr-FP混じり。粘性、締まり有り。          | 24. 褐色土 黄白色軽石粒を含む。締まり有り。                 |
| 9. 黒色粘質土 わずかにHr-FPまたはAs-Cを含む。           | 25. 黒色粘質土                                |
| 10. Hr-FA                               | 26. 茶褐色土 鉄分凝集層。                          |
| 11. 黒色粘質土 わずかにAs-Cを含む。                  | 27. 褐色土 斑鉄、白色軽石粒、黄土粒を含む。締まり有り。           |
| 12. 黒色土 As-Cの二次堆積。                      | 28. 灰色砂礫層                                |
| 13. As-C                                | 29. 灰色砂礫層                                |
| 14. 黒色粘質土                               | 30. 褐色細砂、黄色粗砂、礫の互層                       |
| 15. 灰褐色砂礫層 ラミナ状堆積。                      | 31. 褐色細砂層                                |
| 16. 茶色土 As-Bを多量に含む。                     | 32. 砂礫層 灰色砂礫と褐色細砂の互層。                    |



第36図 5区検出の遺構と土層断面



田の東側、荒砥諏訪遺跡の立地する台地との間には無名河川の流路があった。

5区の基本土層は、①表土、②褐色土、③黒褐色土、④浅間B軽石、⑤黒色粘質土、⑥褐色土（浅間C軽石・榛名ニッ岳伊香保テフラ（Hr-FP）軽石粒を混入）、⑦黒色粘質土、⑧榛名ニッ岳渋川テフラ（Hr-FA）、⑨黒色土（浅間C軽石混入）、⑩浅間C軽石、⑪黒色粘質土の順である。

浅間B軽石は、Rb-17グリッドにおいて、表土から1.1m下位に0.1~0.15mの厚さで堆積していた。レンズ状の堆積で、東西両端に向かって徐々にその位置を高めていた。榛名ニッ岳渋川テフラ（Hr-FA）は、表土下1.75mに厚さ0.02mが堆積している。浅間C軽石は、表土下2.0mに厚さ0.10~0.15mの純層が堆積していた。

浅間B軽石下面の検出状況であるが、西端から約30mの地点に最深部があり、これから東西両端に向かって緩やかに立ち上がっていた。そして、この検出面上ではRd-15・16グリッド内に上幅0.3~0.95m、下幅0.08~0.48mの溝状遺構がみられる。また、Rf-15グリッドにも同様の溝状遺構が掘り込まれている。規模は、上幅1.1~1.2m、下幅0.35m、残存壁高0.03mを測る。埋没土は、黒褐色土である。

さらに、調査区東端地点で東西方向の溝が、傾斜地に沿うように掘り込まれている。長さ8.52mを検出、規模は、上幅2.5~3.2m、下幅0.5~1.1mを測った。断面形は、北端で上半が大きく外傾して立ち上がっている。下半は、箱形を呈している。残存壁高は0.9mである。底面には流水に起因する小穴が多数みられた。埋没土は、表土直下から確認できる。上層に褐色土、中・下層には砂礫が層をなしている。掘削時期は不明である。この溝から西側10mのRb-0グリッドにおいても走向方向を同様とする溝が検出された。

南方向のトレンチにおいては調査区南端において、流水により生じた蛇行する落ち込み、小孔を伴う溝の底面が複数検出されている。土層の埋没状況から、2mほどの幅で北から南に5、6回の掘りか

えし、あるいは、流路を移動させた溝の集合であることが確認できた。埋没土は、表土直下に堆積しており、中には砂粒・砂礫の層を含む。これらの形成時期については不明である。

#### 1区の調査（第42図 P L 10）

1区は、遺跡地南部分に新設される東西方向の道路部分を調査対象地としたものである。この東側は、荒砥宮田遺跡4区として調査されている。調査区の東端における調査前の地目は、水田であった。

調査の結果、Ki-16、Kj-k-15・16グリッドにおいて、2区・3区の位置する北側から南北方向に延びる微高地の縁辺を検出した。北西から南東方向に緩やかに傾斜している。南東隅では堆積土中に浅間B軽石純層が堆積していたため、軽石下面の精査を行った。が、水田遺構のアゼなどは検出できなかった。調査面積は38㎡である。

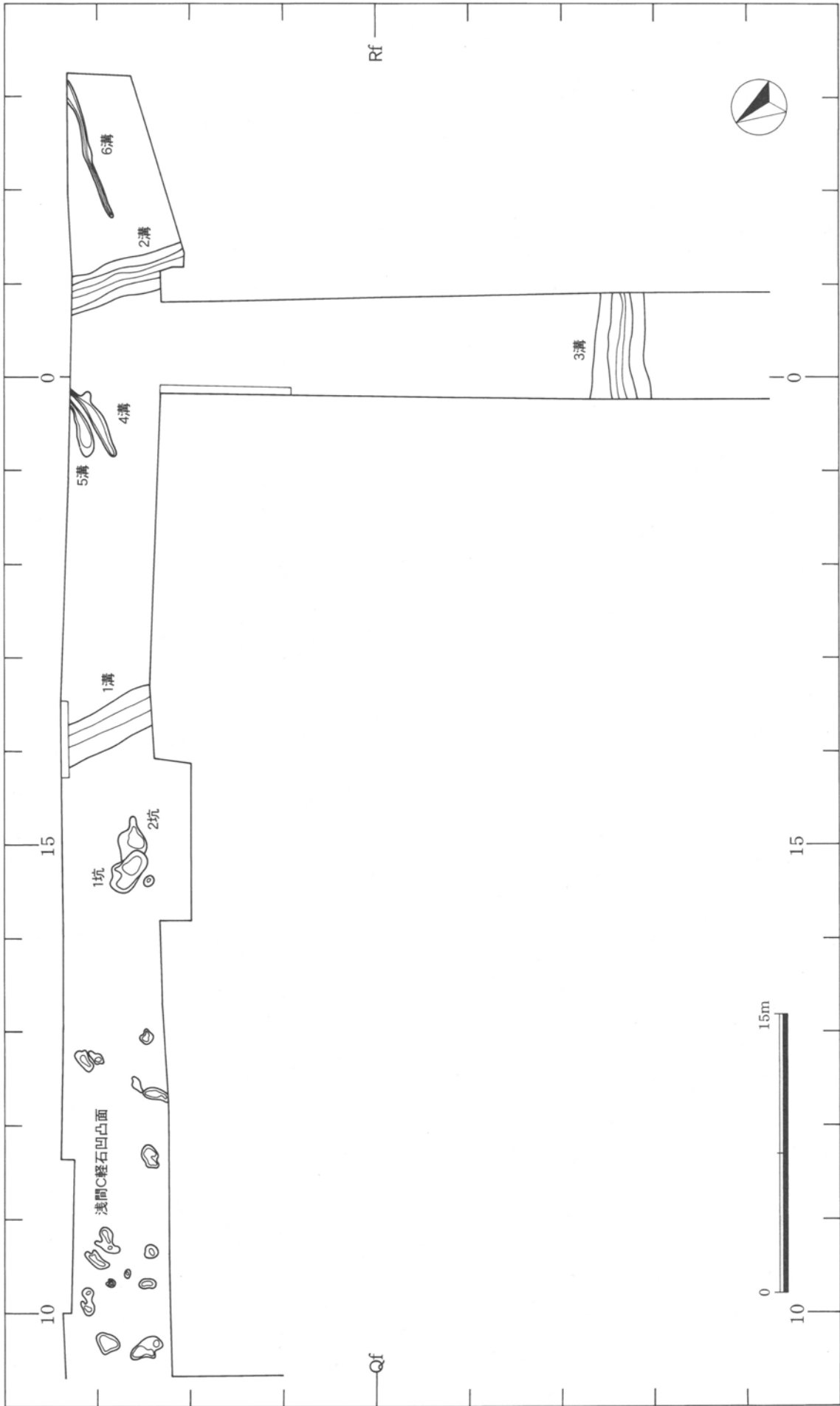
なお、浅間B軽石は、荒砥宮田遺跡4区においてもその堆積が確認されている。軽石直下の黒褐色土層上面の堆積レベルは、1区の同層と約40cmの比高差を有していた。

#### 2区の調査（付図1 P L 11）

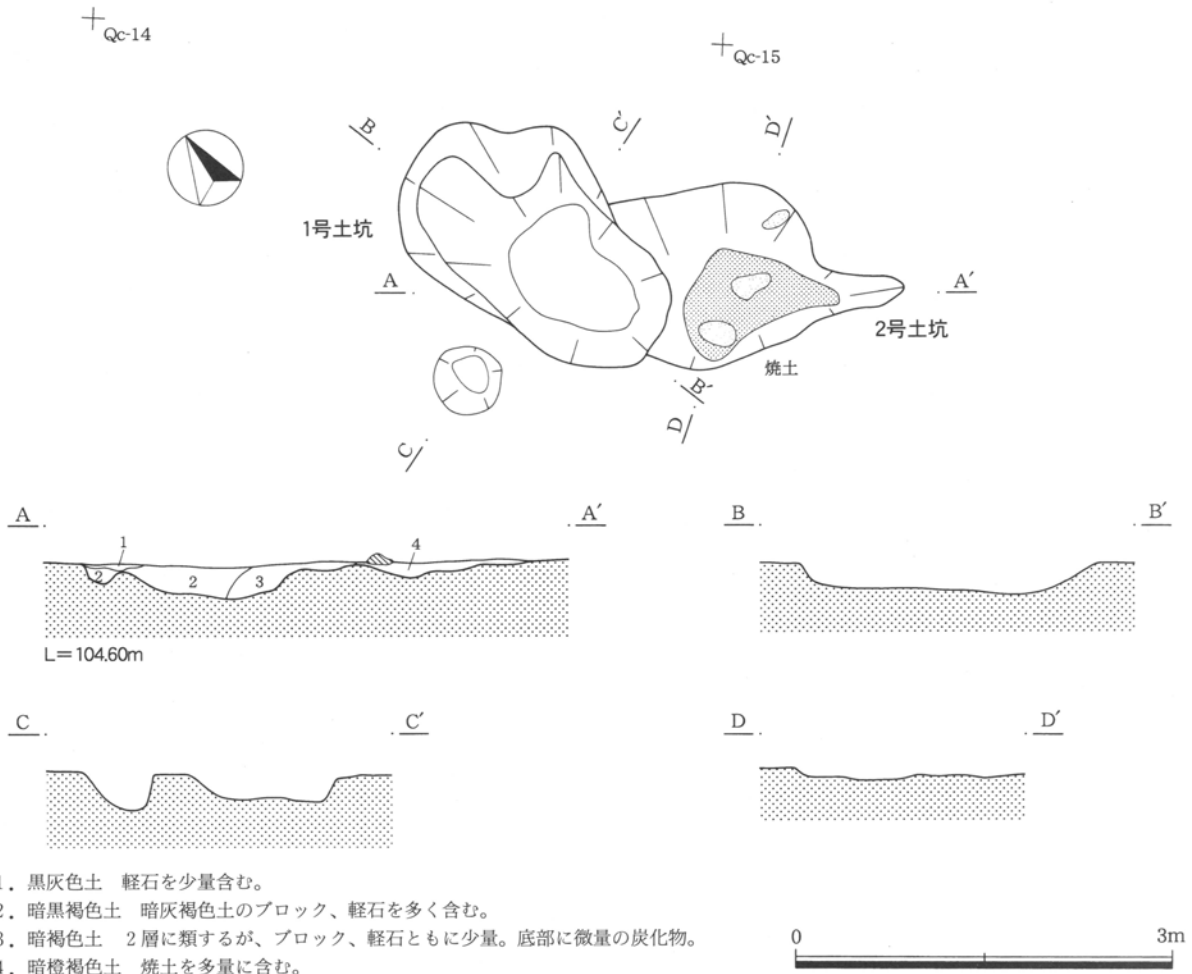
調査区東縁、Ok-0~Os-0、Nl-19~Ng-19グリッド部分で南北方向に延びる微高地東縁辺とこれに続く沖積地を南北約40mにわたって検出した。東から西に弧状に入り込む沖積地の堆積土中には浅間B軽石の純層が堆積することが確認されたため、これを除去し、約272㎡の範囲において水田遺構の有無を調査した。

堆積土は、①表土、②茶褐色土（一部に褐色土）、③暗褐色土、④浅間B軽石（灰も堆積）、⑤黒褐色土と続いていた。表面下1.3mまで土層の堆積状況を確認したが榛名ニッ岳渋川テフラ（Hr-FA）、浅間C軽石の純層は確認されなかった。

調査の結果、微高地上の遺構確認面と浅間B軽石下の黒褐色土層上面との比高差は、No-19グリッドの東側地点で約0.15cmであり、これより東側方向に平坦面が3m程続いていた。ただし、畦畔、あるいは導排水路施設は未確認である。黒褐色土の堆積が、



第37図 4区検出の遺構



第38図 4区1・2号土坑

比較的平坦であることから水田が存在していた可能性はあるものの断定するには至らなかった。

(3) 土坑

4区1号土坑 (第38図 PL5)

位置 Qc-14

重複 2号土坑より後出、6区浅間B軽石下水田に先行する。

形状 長円形を基本とするが不整形を呈している。長軸2.42m、短軸1.58mを測る。残存壁高は0.25mである。浅い皿状の掘り込みを呈する。

方位 N-22°-W

埋没土 暗褐色土が堆積している。

所見 詳細な時期は不明である。調査時に竪穴住居に伴う掘り方の可能性を指摘する所見があるが断定するに至らなかった。

4区2号土坑 (第38図 PL5)

位置 Qc-14・15

重複 1号土坑に先行する。6区水田に先行する。

形状 不整形である。舌状に突出する部分が一部にみられる。掘り込みは皿状を呈する。残存壁高は0.15mを測る。長軸0.15cmほどの礫が3個出土している。

方位 N-80°-W 埋没土 焼土を多量に含む暗褐色土が堆積している。

遺物 杯の破片を出土している。

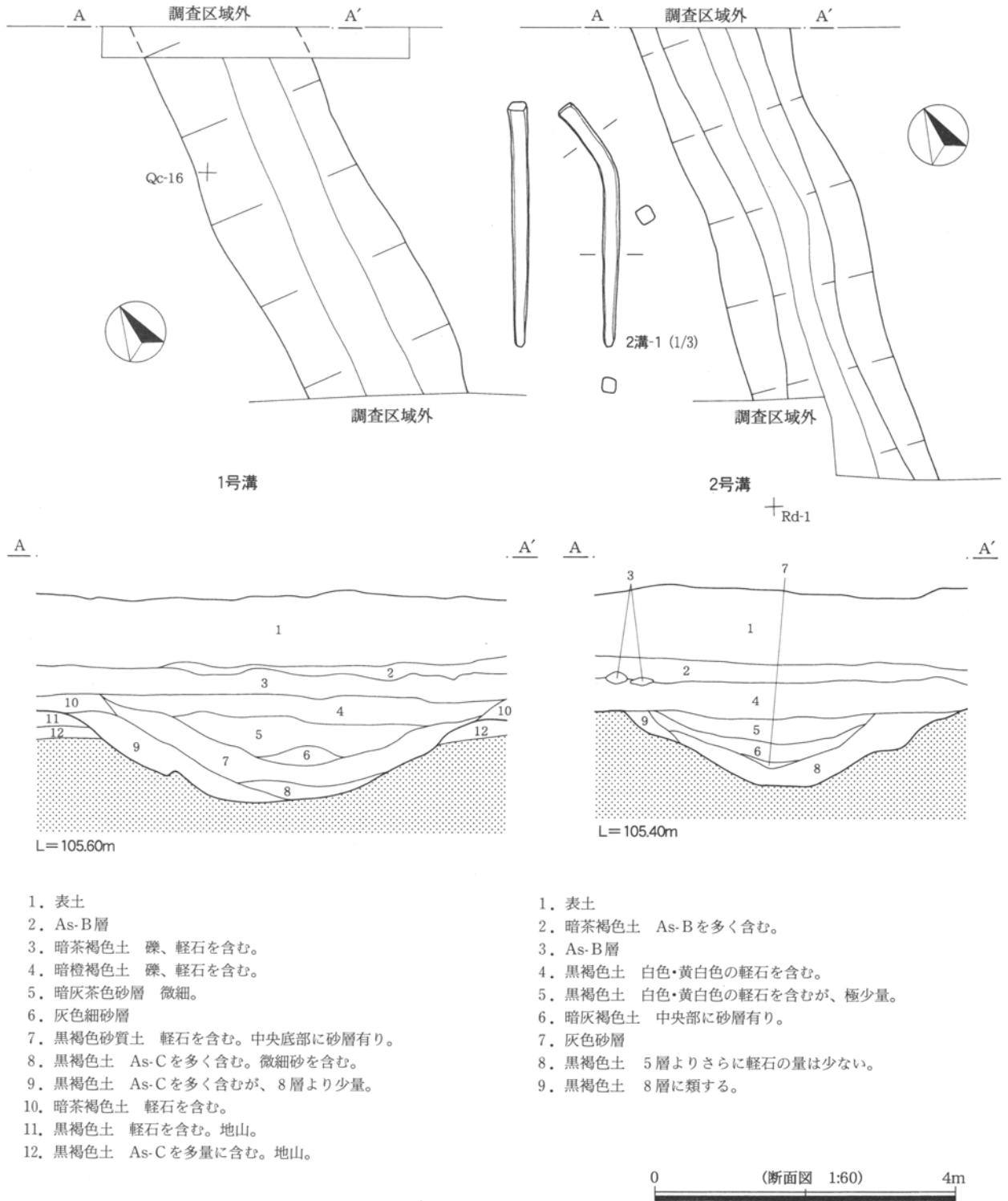
所見 時期は不明である。1号土坑同様、竪穴住居の掘り方の可能性が指摘されている。

(4) 溝

4区1号溝 (第39図 PL5)

位置 Qb-15~Qc-16

重複 6区水田に先行する。



1. 表土
2. As-B層
3. 暗茶褐色土 礫、軽石を含む。
4. 暗橙褐色土 礫、軽石を含む。
5. 暗灰茶色砂層 微細。
6. 灰色細砂層
7. 黒褐色砂質土 軽石を含む。中央底部に砂層有り。
8. 黒褐色土 As-Cを多く含む。微細砂を含む。
9. 黒褐色土 As-Cを多く含むが、8層より少量。
10. 暗茶褐色土 軽石を含む。
11. 黒褐色土 軽石を含む。地山。
12. 黒褐色土 As-Cを多量に含む。地山。

1. 表土
2. 暗茶褐色土 As-Bを多く含む。
3. As-B層
4. 黒褐色土 白色・黄白色の軽石を含む。
5. 黒褐色土 白色・黄白色の軽石を含むが、極少量。
6. 暗灰褐色土 中央部に砂層有り。
7. 灰色砂層
8. 黒褐色土 5層よりさらに軽石の量は少ない。
9. 黒褐色土 8層に類する。

第39図 4区溝(1)と出土遺物

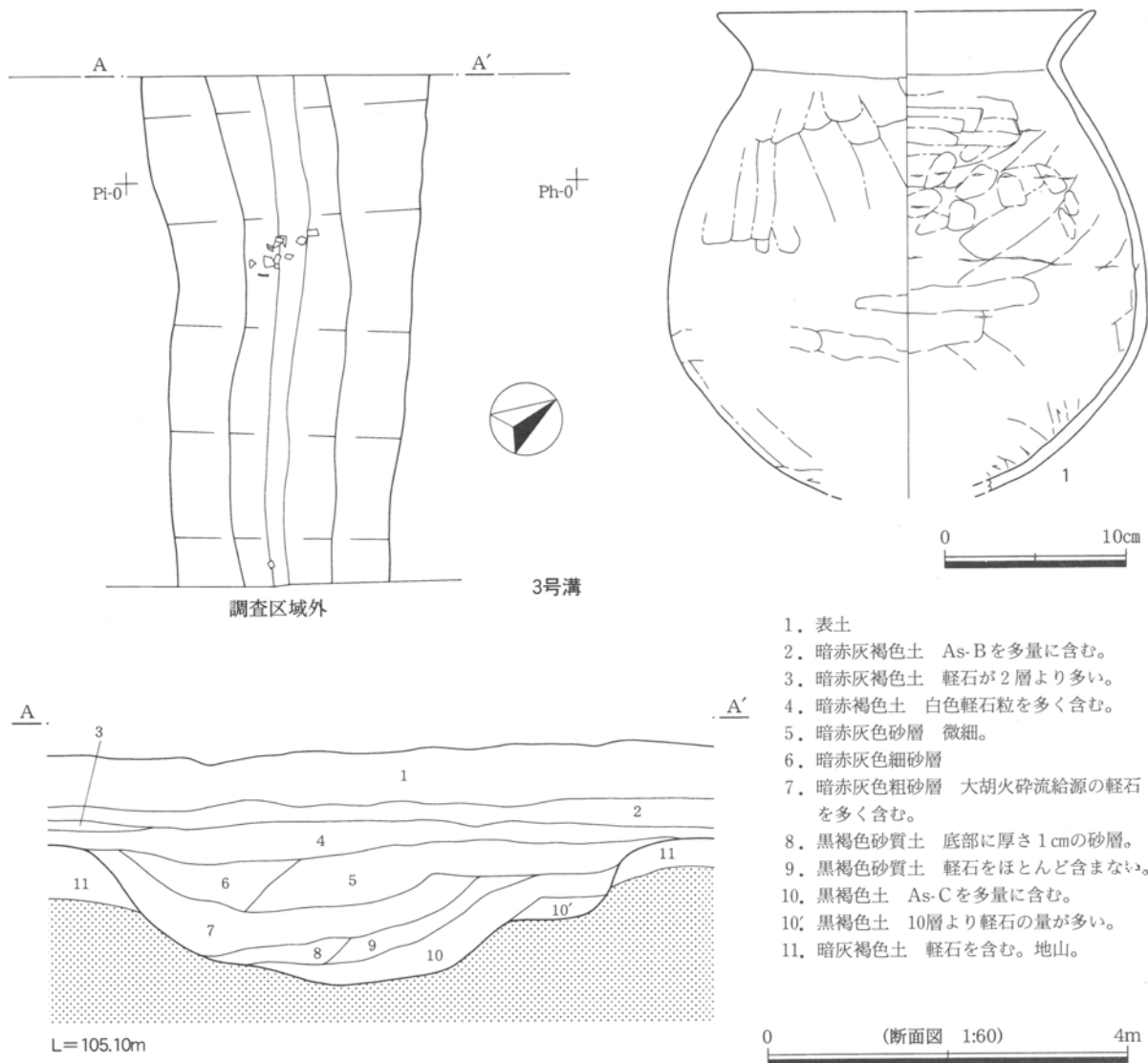
**形状** 道路新設部分の調査であったため部分的な検出で全体像は確認できない。長さ5.12mを検出、真北方向にほぼ直線的な走向をとっている。断面形は大きく外傾ぎみに立ち上がる。底面は、レンズ状を呈する。規模は上幅2.05m、下幅0.65mを測る。残

存壁高は0.72mである。

**方位** N-7°-E

**埋没土** 上層に褐色土が、下層に黒褐色土が堆積する。中位から下位にかけて砂層が堆積していることから水流のあったものと考えられる。本遺構が完全





第40図 4区溝(2)と出土遺物

に埋没した後、浅間B軽石が堆積している。

**所見** 水路である。浅間B軽石降下時には完全に埋没しており、中世以前の掘削である。

4区2号溝(第39図 P L 5・28)

**位置** Rb-0~Rc-1

**重複** 6区水田に先行する。

**形状** 部分的な検出のため全体像は確認できないが、ほぼ直線的な走向である。長さ6.52mを検出した。壁面断面形は、斜め上方に向かって外傾著しく立ち上がる。上幅は、1.92~2.00m、下幅は、0.30~0.35mを測る。残存壁高は、0.43~0.50mである。

**方位** N-15°-E

**埋没土** 上下両層に黒褐色土が堆積している。中層

には砂層が堆積しており、水流があったことを示している。覆土中に浅間B軽石純層のブロックが散見される。

**遺物** 鉄釘(1)が出土している。(観P210)

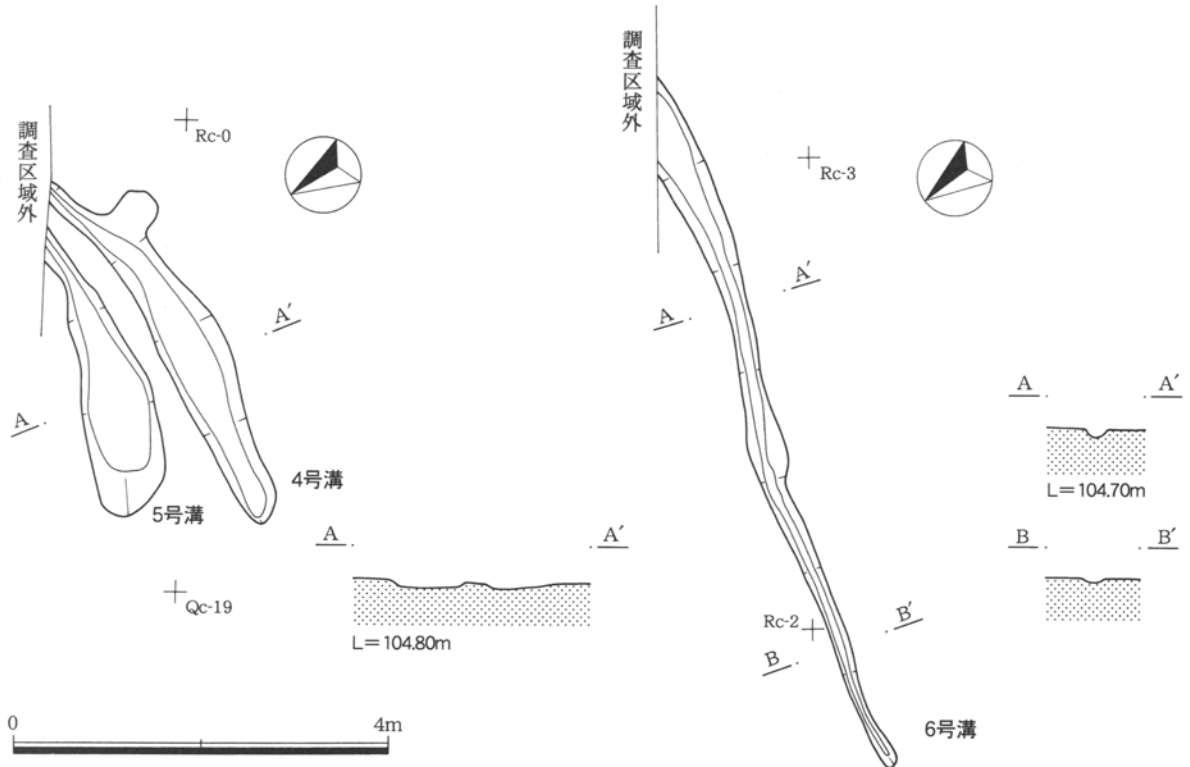
**所見** 水路である。覆土中に浅間B軽石の堆積が存在することから浅間B軽石降下以前の掘削と考えられる。

4区3号溝(第40図 P L 5・28)

**位置** Qh-19~Rh-0

**重複** 6区水田に先行する。

**形状** 一部分の検出のため全体像は確認できなかったが、ほぼ直線的な走向である。長さ5.60mを検出した。上幅は2.85~3.00m前後、下幅0.27~0.32m



第41図 4区溝(3)

である。断面形はレンズ状を呈し、残存壁高は0.52～0.59mである。

**埋没土** 上・中層には砂層が堆積、最下層には黒褐色土が堆積していた。 **方位** N-54°-W

**遺物** 検出部分の中央からやや西寄り、底面から13～24cm離れて土師器甕(1)が破片の状態で出土している。(観P210)

**所見** 水路である。詳細は不明であるが、浅間B軽石降下以前の掘削である。出土土器の年代観は古墳時代後半である。

4区4号溝(第41図)

**位置** Qb-19～Qc-19

**重複** 6区水田に先行する。

**形状** 長さ4.22mを検出した。東端は、調査区域外に延びる。規模は、上幅0.18～0.70m、下幅0.06～0.43mを測る。残存壁高は、0.04mである。

**方位** N-88°-W

**埋没土** 浅間C軽石を多く含む。

**所見** 浅間B軽石降下以前の遺構である。溝状を呈するが、2区・3区で検出された畠、あるいは本遺

構から西側に点在する不整形の落ち込み遺構との関連性も考えられる。性格は特定できなかった。

4区5号溝(第41図)

**位置** Qb-19

**重複** 6区水田に先行する。

**形状** 長さ3.08mを検出した。東端は、調査区域外に延びる。規模は、上幅0.22～0.76m、下幅0.08～0.62mを測る。残存壁高は0.04mである。

**方位** N-77°-W **埋没土** 不明である。

**所見** 浅間B軽石降下以前の遺構で、溝状を呈するが掘り込みは判然としない。性格も特定できない。

4区6号溝(第41図)

**位置** Rc-1～Rb-2

**形状** 弱く蛇行しながら東西方向に延びる。東端は未調査区中に延びている。西端は、上層からの削平を受けている。長さ7.6mを検出、上幅0.12～0.48m、下幅0.04～0.32m、残存壁高0.1m前後を測る。

**方位** N-77°-W **埋没土** 不明である。

**所見** 掘削時期は不明である。

## 第4節 中・近世以降の遺構と遺物

## (1) 1区の遺構と遺物

## 小穴 (第42図)

1・2号溝の西側、3・4号溝の南側にやや集中する傾向が見られる。グリッド名で言えばKj-12である。何らかの施設の痕跡と考えられるが掘立柱建物、柵列等のような規則性はなかった。

小穴の規模は、上端の直径13~44cm、下端の直径11~34cm、深さ13~79cmで、個々のばらつきが大きく、規則性は認められなかった。

## 土坑 (第43~47図 P L 8・9・29・30)

調査区内から34基の土坑を検出した。

形状は、2・3・7・11・13~15号土坑が、平面長方形である。規模は、長軸約1.30~1.50m、短軸0.80~1.0mとほぼ同規模であった。同じ平面長方形の土坑でも25・28・33号土坑は、その規模がやや大型で、他遺跡で竪穴状遺構として報告されているものと同様である。柱穴、炊飯施設等は検出されなかった。17・18・22・24号土坑は、入口施設を有するもので地下式(土)坑と称せられるもの同様の形状を有するものである。17号土坑は、主室部がほぼ正方形を呈しており、幅広の入口部が付設されていた。主室部は、底面から直立して立ち上がった壁面が75cmほどでドーム状に丸みをなして天井部へ続く様子がみられた。18号土坑は、主室部から低い段差をもって入口部へ移行するが、そこに間仕切り状の小溝が検出された。24号土坑は、長方形の主室部と入口部を接続する短く狭い連絡状の掘り込み部分がみられる。主室部は、地山を掘り残した天井部があったことが埋没土の観察から理解できる。9号土坑は、長軸を有し、溝状を呈している。1・21号土坑は、平面円形であった。

遺物の出土した土坑は、9・18・23・25号土坑で、18号土坑の土師器埴は、混入の可能性が高い。9号土坑からは石臼が出土した。23号土坑からは古銭3枚(元豊通寶、寛永通寶、不明)が出土しており、江戸時代の墓坑の可能性が高い。25号土坑からは、

土師質土器皿、軟質陶器内耳鉢、常滑産の陶器大甕、軽石製品、手づくね土器が出土している。いずれも中世の所産である。(観P210・211)

土坑個々の情報は、第4表のとおりである。

## 溝

5条を確認した。3号溝は、Kh-8グリッドで東西方向の走向が隅をなして南北方向となるが、端部は調査区域外に及んでいる。南北方向に直線的に延びる1・2号溝との関係は不明である。方形区画状を呈していたと仮定した場合でも、本調査区が微高地南端にあたることからその区画が大区画とはなり難いと考えられる。

1・2号溝の走向は、ほぼ同一で、切り合い関係は、2号溝が先行する。2号溝は、Kj-13グリッド内でわたり部分を有する。地山を掘り残した橋状施設の存在が想定できようか。

3・4号溝の関係は、3号溝が4号溝に先行している。土坑との切り合いは、1号溝が、12・14号土坑より後出、2号溝が、12・15号土坑より後出、14号土坑に先出、3号溝が20・21号溝より後出と、溝より土坑の掘削が遡る事例が少なくない。

1区と2区の溝の関係については、1区1・2号溝と2区5号溝の関係が注視されるが、両調査区の間が約20mの間隔を有しており、その関連性の検討は困難であった。

5号溝は、調査区南東隅の沖積地への縁辺に掘削された溝で、浅間B軽石の堆積層を切って、直線的に延びている。

個々の状況については以下に記述する。

## 1区1号溝 (第42・47~49図 P L 10・30)

位置 Ki-12~Kh-14

重複 12・14号土坑、2号溝と重複する。いずれの遺構より後出である。

形状 長さ13.73mを検出した。南端の掘り込みは立ち上がり有している。断面形状は、斜め上方に大きく外傾して立ち上がる形状で、確認面から50cmほど下位の部分に弱い稜を有していた。上端は、土層断面で約2.9mの幅が確認された。下端は、0.50~0.86

## 第2章 荒砥諏訪西遺跡の調査

mを測った。残存深度は、最深で0.6mである。

**方位** N-12°-W

**埋没土** 灰褐色土、灰色粘質土、灰黄色砂質土が堆積する。また、これに大・小の礫が含まれている。明瞭な流水の痕跡はみられないことから区画溝と考えられる。

**遺物** 土師質土器皿(1・2)、軟質陶器内耳鍋(3・4)・内耳鉢(6~8)・片口鉢(5)、須恵器(9)、板状鉄製品(10)、砥石(11~13・15)、石臼(16)、五輪塔(17・18)、板碑(19)、縄文土器、縄文時代敲石・打製石斧?が出土している。

(観P211・212)

**所見** 出土遺物の年代観から15世紀代の掘削と考えられるが、詳細な時期は不明である。

### 1区2号溝(第42図 P L 10)

**位置** Kj-12~Kh-13

**重複** 12・15号土坑に後出、14号土坑、1号溝に先行する。3号溝よりは後出であろうか。

**形状** 長さ14.00mを検出した。1号溝の西側にこれとほぼ平行して掘削されている。Kj-13グリッド内で幅0.8mほどのわたり部分を有している。断面形は、上方に向かって外傾する台形状を呈している。規模は、上幅1.5m、下幅0.20~0.38mである。残存深度は、最深で0.64mである。

**方位** N-9°-W

**埋没土** 上層から中層には砂壤土ブロックと灰褐色粘土ブロックの混土層が堆積する。流水の痕跡は確認できないことから区画溝と考えられる。

**所見** 1号溝に先行して掘削されていることから中世の所産と考えられる。が、遺物が全く出土していないため詳細な掘削年代は不明である。

### 1区3号溝(第42・49図 P L 10・30)

**位置** Ki-11~Kk-8

**重複** 12号土坑に後出、20・21号土坑、2・4号溝に先行する。10・13号土坑との前後関係は不明である。

**形状** 述べ21.07mの長さを検出した。Ki-11グリッドから西方向に約18.6mは東西方向に走向を取

り、Kk-8で隅をなし、南北方向に変換して約2.5mで調査区域外に及んでいる。規模は、上幅0.50~1.70m、下幅0.16~0.76mを測る。残存深度は、最深で0.63mである。

**方位** N-85°-W、N-28°-E

**埋没土** 灰褐色粘質土、褐色土、灰白色砂質土が堆積している。流水の痕跡は確認できない。

**遺物** 軟質陶器を出土する。(観P212)

**所見** 軟質陶器を出土することから中世以降の掘削と考えられる。

### 1区4号溝(第42図)

**位置** Ki-11~Kj-11

**重複** 9・10号土坑・3号溝に後出する。10号土坑との前後関係は不明である。

**形状** 長さ約4.00mを検出した。両端は10・11号土坑との重複で判然としないが3号溝とほぼ平行する走向であるが3号溝がほぼ埋没した後に掘削されたものと考えられる。

**方位** N-83°-E

**埋没土** 灰褐色粘質土・灰褐色土が堆積している。流水の痕跡は認められない。

**所見** 遺物の出土が無く、詳細な掘削時期は不明である。中世以降の所産と考えられる。

### 1区5号溝(第42図 P L 10)

**位置** Kj-16~Kk-15

**重複** 浅間B軽石の純層を切っている。

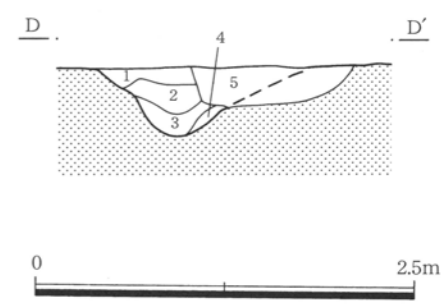
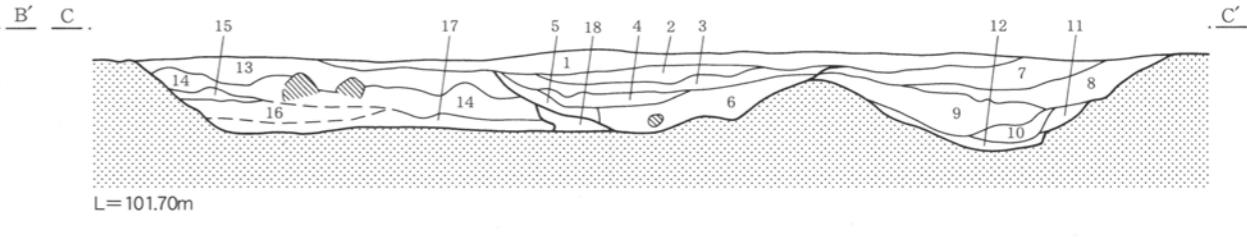
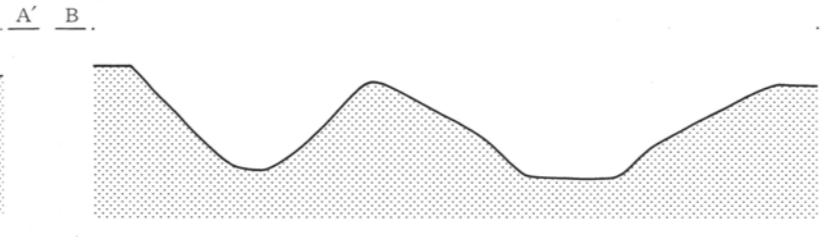
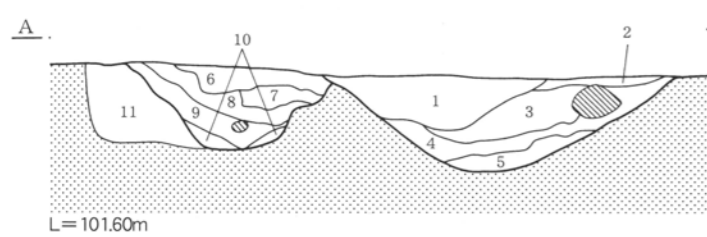
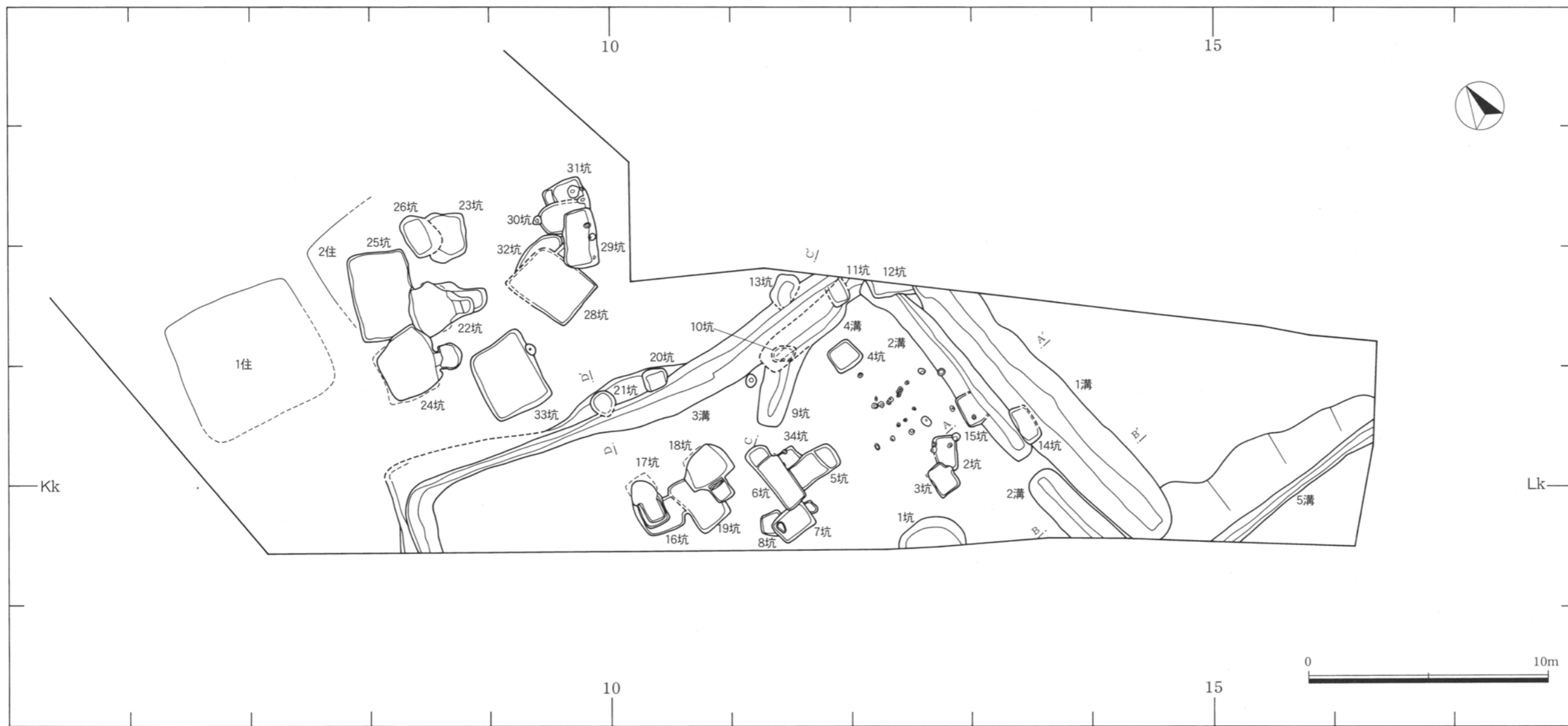
**形状** 長さ7.87mを検出した。検出面における上幅は約1.0~1.2m、下幅は0.14~0.26mである。

**方位** N-85°-E

**埋没土** 不明である。

**遺物** 調査時に軟質陶器1片出土の記録がある。

**所見** 中世以降の掘削と考えられるが詳細な掘削時期は不明である。



- A-A'土層注記
1. 灰褐色土 細かい白色軽石粒とローム粒を多く含む。1号溝埋没土
  2. 灰褐色土 1層に多量の砂壤土ブロックを含む。1号溝埋没土
  3. 灰褐色粘質土 砂壤土ブロック、細かい白色軽石粒を含む。1号溝埋没土
  4. 灰色粘質土 白色軽石粒と5層の小ブロックを含む。1号溝埋没土
  5. 灰黄色砂質土 1号溝埋没土
  6. 砂壤土ブロックと灰褐色粘土ブロックの斑状堆積土 2号溝埋没土
  7. 斑状堆積土 6層より砂壤土ブロック多し。2号溝埋没土
  8. 灰色土 砂壤土の小ブロックと、白色軽石粒を含む赤褐色粘質土の小ブロックを少量含む。2号溝埋没土
  9. 灰色土 白色軽石を含む赤褐色粘質土小ブロックを多量に含む。2号溝埋没土
  10. 灰黄色砂壤土 締まり有り。2号溝埋没土
  11. 褐色土 ロームブロック、赤褐色粘質土小ブロックを多量に含む。15号土坑埋没土

- C-C'土層注記
1. 灰褐色土 細かい白色軽石を含む。
  2. 灰色粘質土 赤褐色粘土の小ブロックを斑状に多量に含み、細かい白色軽石粒を含む。4号溝埋没土
  3. 砂壤土小ブロックと灰色粘質土の斑状混土層 4号溝埋没土
  4. 灰褐色粘質土 細かい白色軽石粒を含む。4号溝埋没土
  5. 灰褐色土 砂壤土ブロックを含む。4号溝埋没土
  6. 灰褐色土 黄白色の砂壤土を含む。4号溝埋没土
  7. 灰褐色粘質土 砂壤土ブロックを含む。3号溝埋没土
  8. 灰褐色粘質土 白色軽石粒を含む。3号溝埋没土
  9. 褐色土 砂壤土ブロックを含む。3号溝埋没土

10. 褐色土 9層よりブロック少ない。3号溝埋没土
11. 砂壤土ブロック 3号溝埋没土
12. 灰白色砂質土 3号溝埋没土
13. 灰褐色粘質土 細かい白色軽石粒を含み、赤褐色粘土の小ブロックを含む。9号土坑埋没土
14. 灰褐色粘質土 13層に似るが、赤褐色粘土が少ない。9号土坑埋没土
15. 褐色土 灰層を挟む。9号土坑埋没土
16. 灰褐色土 細かい白色軽石粒を含む。9号土坑埋没土
17. 灰色粘質土 砂壤土ブロックを含む。9号土坑埋没土
18. 10号土坑埋没土

- D-D'土層注記
1. 黒灰色土 細かい白色軽石粒。3号溝埋没土
  2. 砂壤土と黒灰色土の混土 3号溝埋没土
  3. 灰黄褐色土 細かい白色軽石粒を含む。3号溝埋没土
  4. 砂壤土ブロック 3号溝埋没土
  5. 灰褐色土 砂壤土小ブロックと細かい白色軽石粒を含む。21号土坑埋没土

第42図 1区検出の遺構

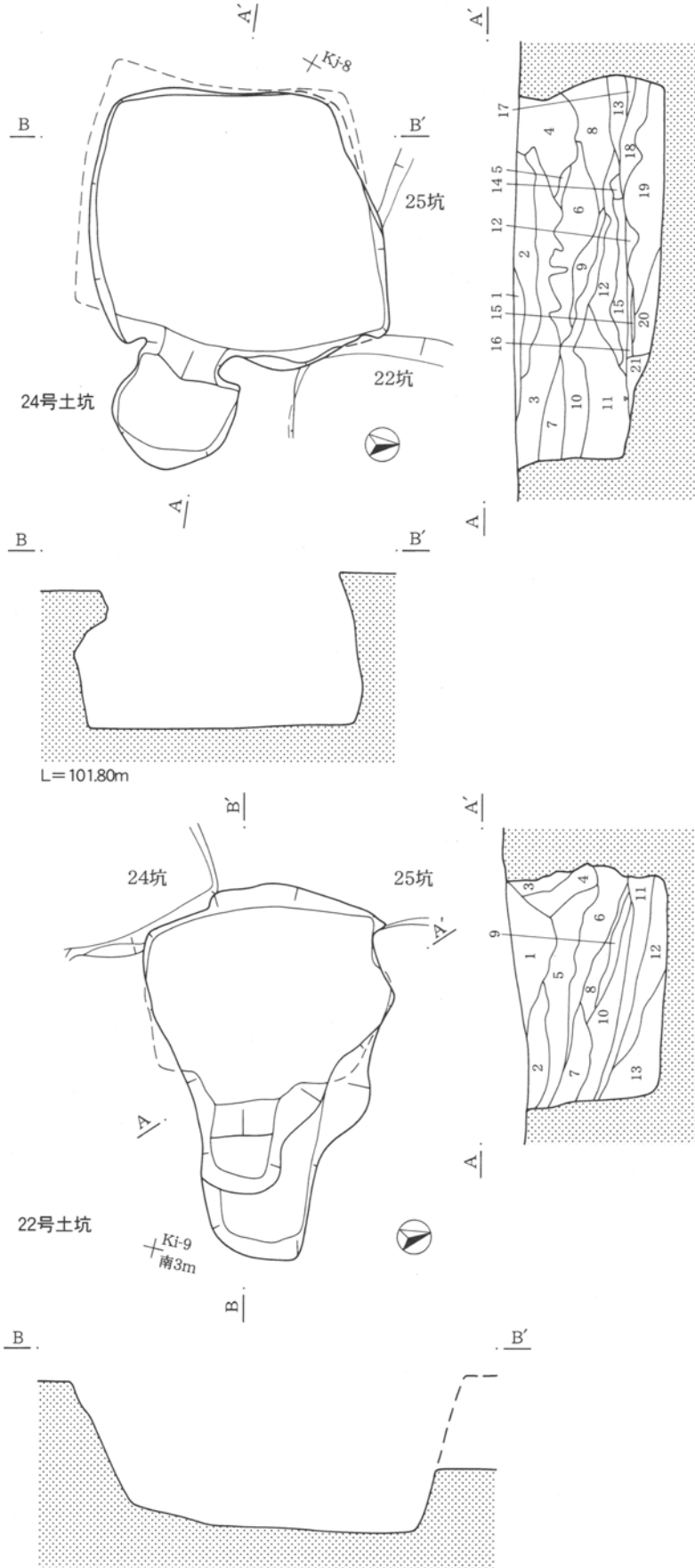


第4表 1区土坑一覧

No.	グリッド	平面形状	長軸方位	規模、深さ	出土遺物	備考	挿図	写真
1	Kk-12	円形	不明	273×<125>/103		井戸の可能性もあるか。	46	8
2	Kj-12	長方形	N-32°-E	143×96/28.5		→3坑、小穴	45	8
3	Kj・k-12	長方形	N-3°-W	128×100/55		2坑→	45	8
4	Ki・j-11 ・12	正方形	N-85°-E	100~120×115/ 55			44	8
5	Kj・k-11	長方形か	N-88°-E	<205>×118/55.5		底面に小さな段がつく。→6坑、 34坑	46	8
6	Kj・k-11	長方形か	N-5°-W	307×106/57		中位で短軸狭くなる。5坑→、 7・34坑	46	8
7	Kk-11	長方形	N-83°-E	162×116/41		6・8坑、小穴	46	8
8	Kk-11	不整形	不明	110×104/20	石臼	7坑、小穴		8
9	Ki・j-11	隅丸長方形か	N-47°-E	<282>×108~140/ 47		礫、多数出土。→10坑、4溝		8
10	Ki・j-11	隅丸長方形か	N-60°-W	98×53/65		礫、多数出土。9坑→、→4溝		8
11	Ki-11	長方形か	N-6°-E	<90>×82/38		3・4溝		
12	Ki-12	不明	不明	<194>×<105>/32		1~3溝		
13	Ki-11	隅丸長方形か	N-63°-E	<132>×100/52		3溝。礫出土		9
14	Kj-13	長方形	N-7°-E	<154>×<82>/25		1・2溝		
15	Kj-12・13	長方形か	N-7°-E	143×<73>/54		→2溝、小穴		
16	Kk-10	長方形か	N-78°-W	170×<140>/47		→17坑、19坑		9
17	Kj・k-10	正方形(突出部)	N-8°-E	218×118/120.5 108		16坑→	44	9
18	Kj・k-10 ・11	長方形(突出部)	N-0°-E N-4°-W	242×200/117 81	土師器埴	19坑→	44	9
19	Kj・k-10	不整形	N-4°-W	240×160/55		16・18坑		9
20	Kj-10	長方形か	不明	<92>×100/48		3溝→		9
21	Kj-9・10	円形	N-10°-E	<86>×96/23.5		3溝	46	
22	Ki-8	長方形(突出部)	N-72°-W	348×220/151.5 90		24・25坑	43	
23	Kh・i-8	不整形	N-27°-E	174~202×<148>/ 84.5	銭3(元豊通寶、 寛永通寶、不明1)	礫、多数出土。→26坑	44	9
24	Ki・j-8	長方形(突出部)	N-84°-W N-71°-W	344×276/138.5 104		22・25坑	43	9
25	Ki-7・8	長方形	N-24°-E	365×250/92.5	土師質土器皿、軟 質陶器内耳鉢、常 滑甕、軽石製品、 土師器手づくね	2住、22・24坑	45	
26	Kh・i-8	長方形	N-8°-E	180×<98>/61		2住、23坑→	44	9
28	Kh・i-9	長方形か	N-16°-W	300×230/50		29・32坑		9
29	Kh・i-9	長方形	N-26°-E	214~238×110~ 140/66		28・30・32坑、小穴	45	9
30	Kh-9	隅丸方形か	N-74°-W	214×<128>/47		29・31坑、小穴		9
31	Kh-9	長方形	N-73°-W	168×70~100/50		30坑、小穴		9
32	Kh・i-9	長円形か	N-70°-E	360×<121>/47		28・29坑		9
33	Ki・j-8 ・9	長方形	N-3°-E	292~316×258/ 28.5		小穴	45	9
34	Kj-11	長方形か	不明	<74>×<74>/23		5・6坑、小穴		

凡例

1. 規模については、形状の特徴を表す点を計測したが、数値に20cm以上の開きがある場合は最大値と最小値を記した。なお、項目中の数値は、長さ×幅/深さの順番に記してある。平面形状が、長方形(突出部)の場合、幅は上段が主室部の、下段が突出部の計測値である。〈〉内の数値は残存長を表す。深さは残存深度である。
2. 備考中にある遺構名は当該土坑と重複関係にある遺構である。なお、→3坑は当該土坑が3号土坑に先出、3坑→は、後出のことを、無印は前後関係が不明な関係であることを表す。
3. 上記表記については第5表、第6表も同様である。

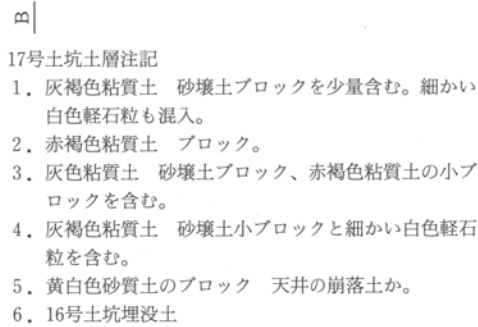
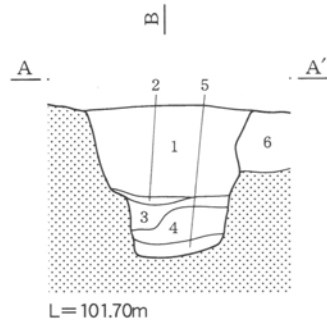
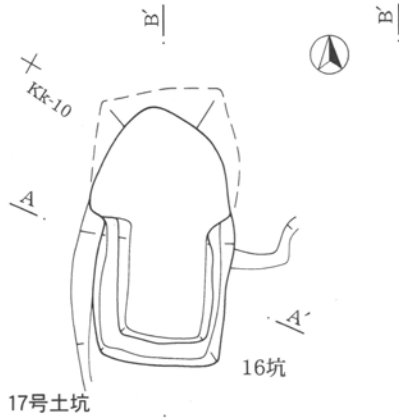


- |  |  |
|--|--|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 耕作土</li> <li>2. 黒色土 As-Cを多量に含む。</li> <li>3. 黒褐色土 As-Cとローム粒を含む。</li> <li>4. 灰褐色粘質土 細かい白色軽石粒を少量含む。</li> <li>5. 4層と6層の混土層</li> <li>6. ロームブロック、灰白色粘質土ブロック、灰褐色粘質土ブロックの斑状混土層</li> <li>7. 黒褐色土 砂壤土小ブロックを含む。やや砂質。</li> <li>8. 灰褐色土 黄色砂壤土の小ブロックを多量に含む。</li> <li>9. 灰褐色粘質土 細かい白色軽石粒を含む。</li> </ol> | <ol style="list-style-type: none"> <li>10. 灰褐色土 白色軽石粒、砂壤土粒を含む。</li> <li>11. 黒色土 白色軽石粒、砂壤土粒を含む。</li> <li>12. 灰褐色土 砂壤土の大ブロックを含む。</li> <li>13. 黒色土 砂壤土粒とAs-Cを混入。</li> <li>14. 砂壤土ブロック</li> <li>15. 灰粘質土 細かい白色軽石粒を含む。</li> <li>16. 砂壤土ブロック</li> <li>17. 灰褐色土</li> <li>18. 灰褐色土</li> <li>19. 灰黄色砂質土 天井の崩落土</li> <li>20. 黄灰色砂質土 天井崩落以前の埋没土</li> <li>21. 黄褐色土 天井崩落以前の埋没土</li> </ol> |
|--|--|

0 2m

第43図 1区土坑(1)





17号土坑土層注記

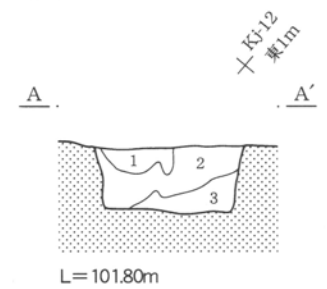
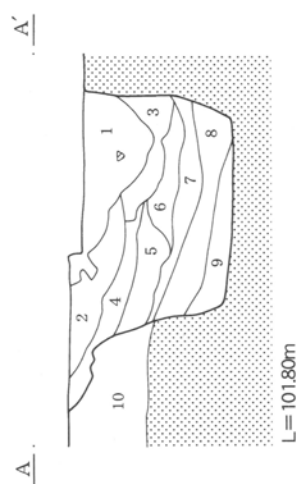
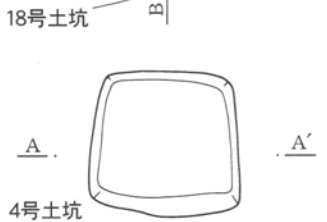
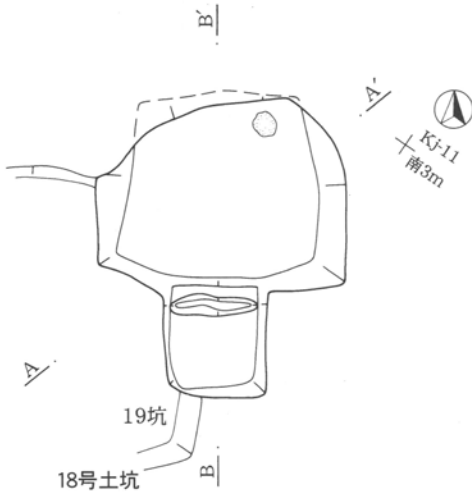
1. 灰褐色粘質土 砂壤土ブロックを少量含む。細かい白色軽石粒も混入。
2. 赤褐色粘質土 ブロック。
3. 灰色粘質土 砂壤土ブロック、赤褐色粘質土の小ブロックを含む。
4. 灰褐色粘質土 砂壤土小ブロックと細かい白色軽石粒を含む。
5. 黄白色砂質土のブロック 天井の崩落土か。
6. 16号土坑埋没土

18号土坑土層注記

1. 灰色粘質土 砂壤土ブロックを極少量含む。
2. 白色砂質土小ブロックと1層の小ブロックの斑状混土層
3. 灰色粘質土 1層より砂壤土ブロックを多く含む。
4. 2層より白色砂質土小ブロックの少ない混土層
5. 4層より更に白色砂質土小ブロックの少ない混土層
6. 灰褐色土 白色の細かい軽石粒を多量に含み、砂質土のブロックを含む。縮まり有り。
7. 灰色粘土 黄白色砂質土ブロックを含む。
8. 灰色粘土 砂壤土小ブロックと褐色粘土小ブロックを含む。縮まり無し。
9. 灰色粘土 地山の灰黄色砂質土ブロック(大)を含む。天井の崩落土
10. 19号土坑埋没土

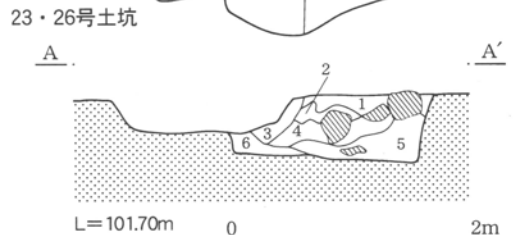
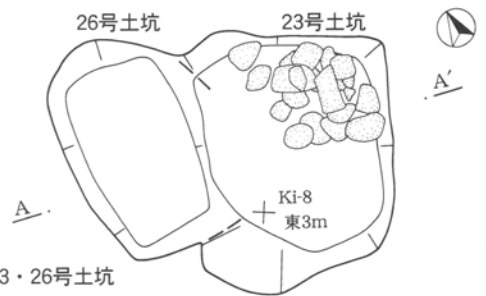
23号土坑土層注記

1. 黒色土 As-Cを混入する。
2. 灰褐色粘土ブロック
3. 黒色土 砂壤土ブロックを含む。As-Cも混入。
4. 黒色土 3層に灰褐色粘土粒を含む。
5. 褐色土 砂壤土ブロックと少量の白色軽石粒を含む。縮まり無し。
6. 黒色土 黄色砂粒と白色軽石粒を含む。



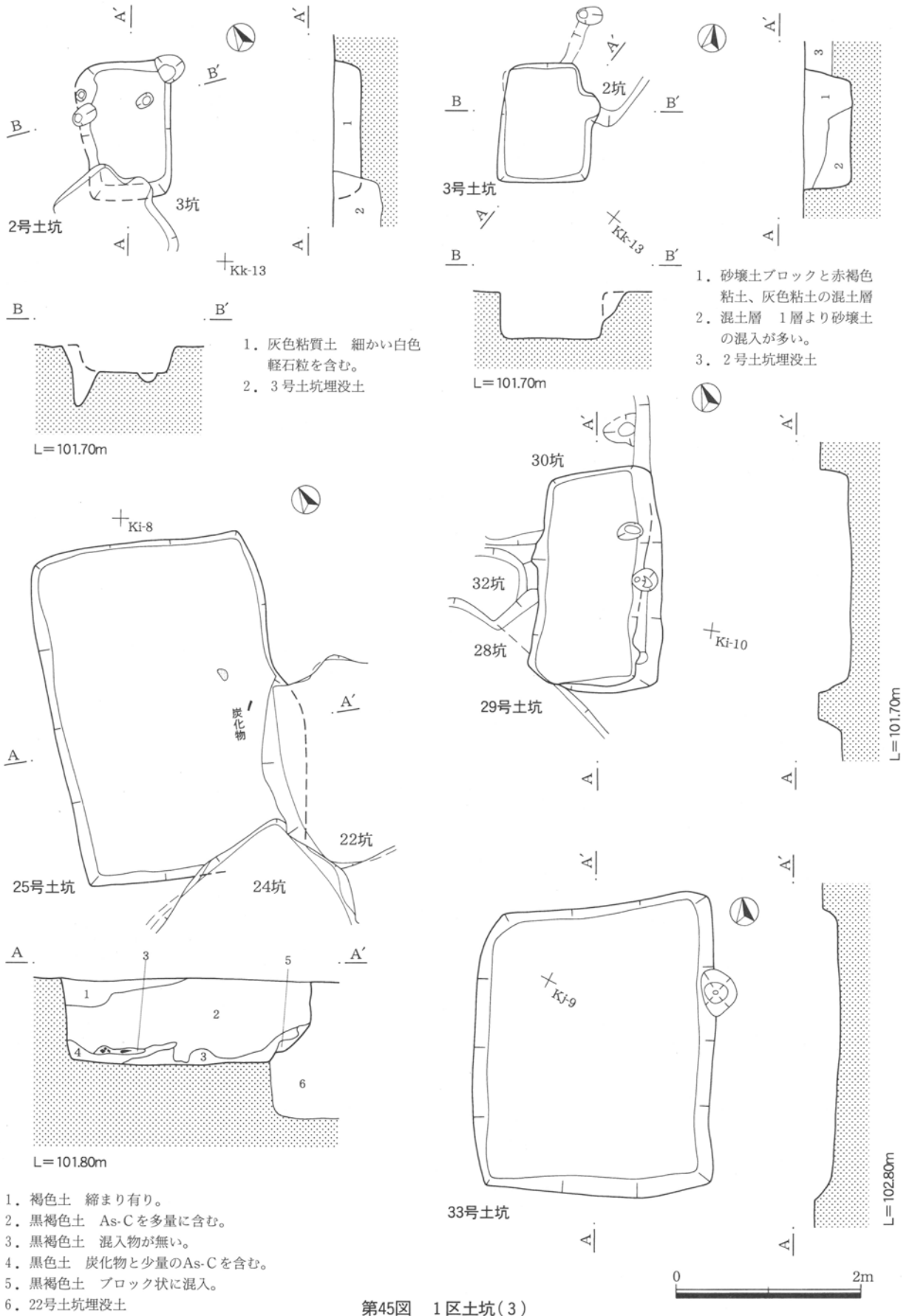
4号土坑土層注記

1. 白黄色砂壤土小ブロックと灰色粘土小ブロックの斑状混土層
2. 砂壤土小ブロックの斑状堆積土
3. 砂壤土小ブロックの斑状堆積土 2層に灰色粘土小ブロックを少量含む。

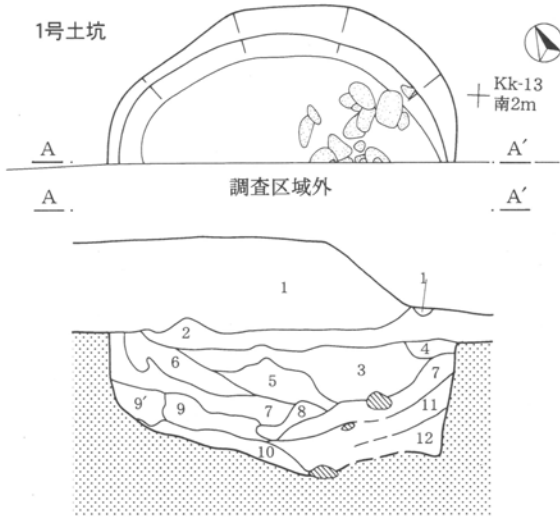


第44図 1区土坑(2)

第2章 荒砥諏訪西遺跡の調査

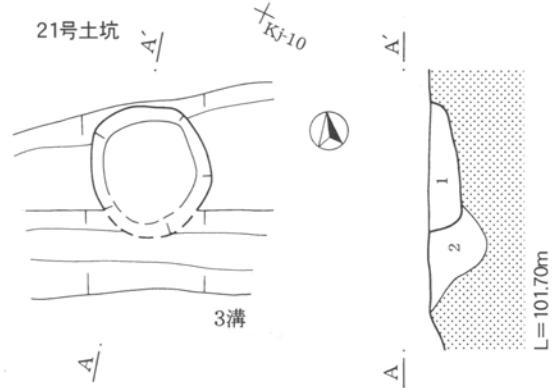


第45図 1区土坑(3)

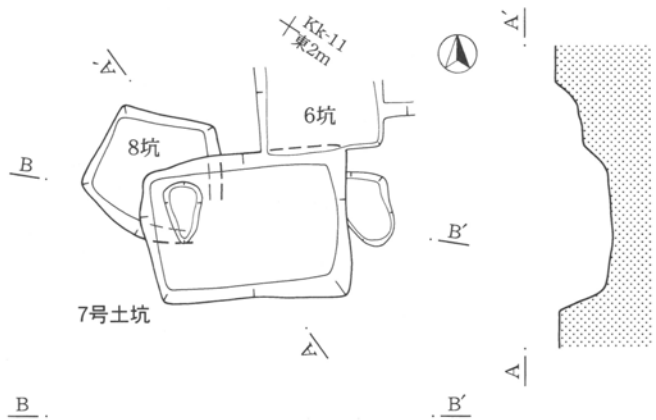


L=102.40m

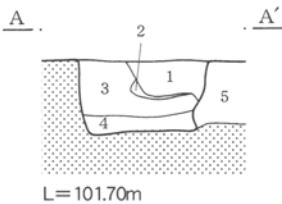
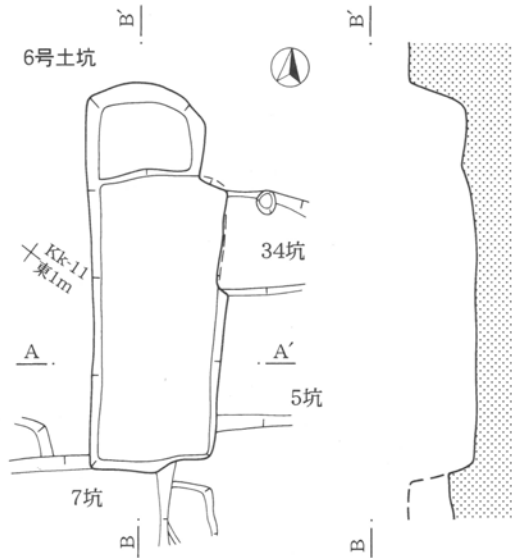
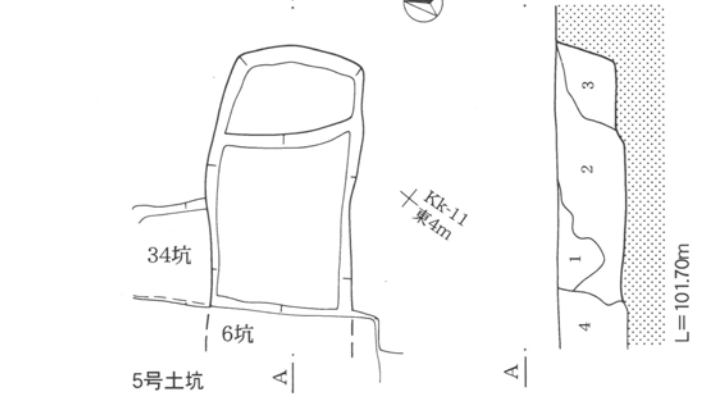
1. 灰褐色土 耕作土。下層に鉄分凝集。
2. 灰褐色土 白色軽石粒をわずかに含む。
3. 灰褐色土 黄褐色土の小ブロックを含む。
4. 黄白色土 ブロック。
5. 褐色土 黒色増す。黄褐色土粒を含む。
6. 灰褐色土 3層に類似するが、混入物少ない。
7. 褐色土 5層に類似するが、黒色は薄れる。
8. 褐色土 黄褐色土の小ブロックを含む。
9. 黄褐色土の小ブロック主体と褐色土の混土層
- 9'. 黄褐色土の小ブロックと褐色土の混土層
10. 褐色土と灰白色粘土の混土層
11. 茶褐色土
12. 茶褐色土



1. 灰褐色土 砂壤土小ブロックと細かい白色軽石粒を含む。
2. 3号溝埋没土



L=101.70m



L=101.70m

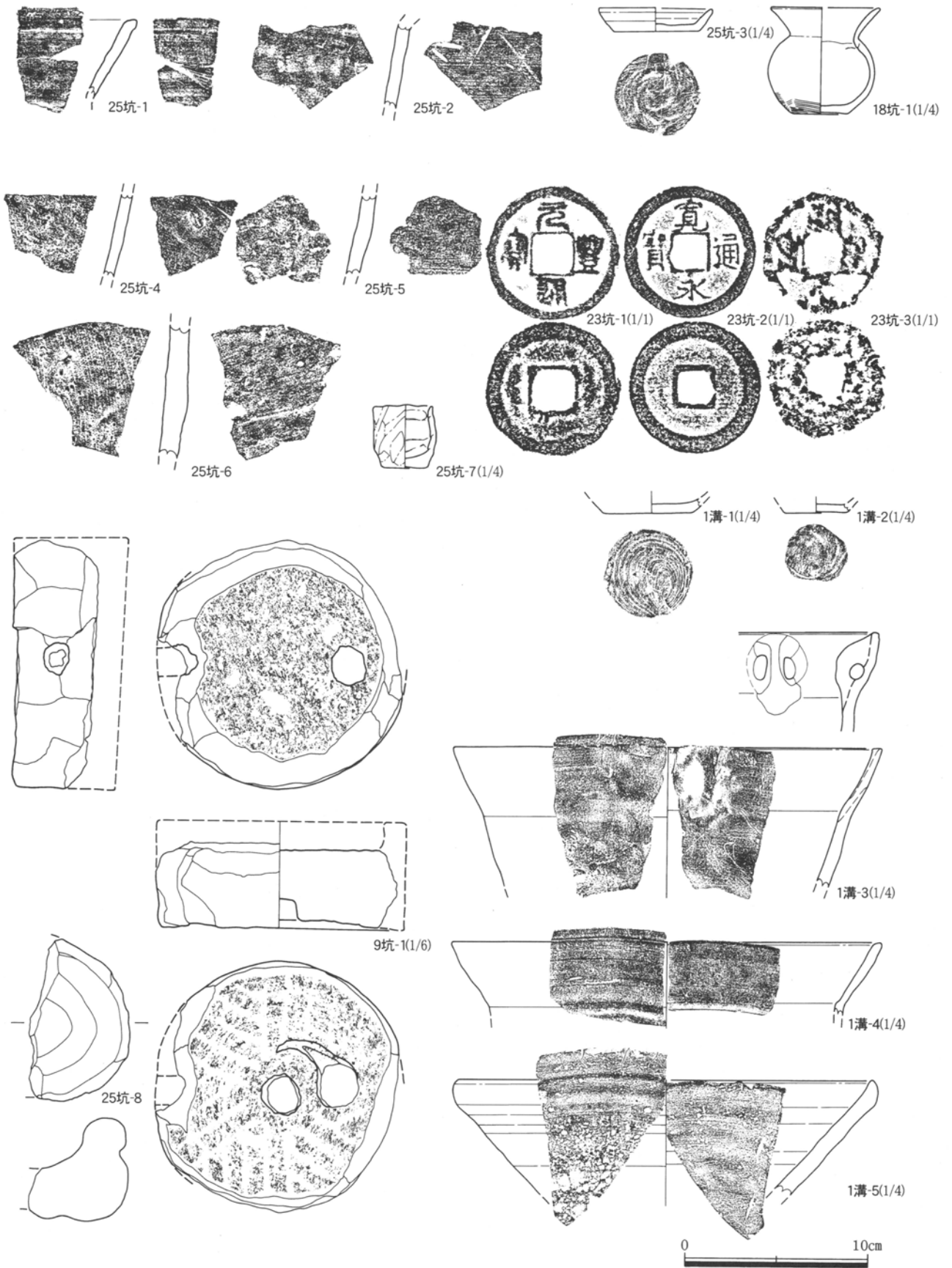
1. 灰褐色土 砂壤土ブロックを含む。縮まり無し。
2. 灰と焼土の層
3. 砂壤土ブロックと、細かい白色軽石粒の入った灰褐色粘質土ブロックの斑状混土層
4. 灰褐色粘質土 砂壤土小ブロックを含む。
5. 5号土坑埋没土

1. 灰褐色粘質土 砂壤土小ブロックを少量含む。
2. 砂壤土小ブロックと、細かい白色軽石粒の混じる灰褐色粘質土小ブロック、赤褐色粘土小ブロックの斑状混土層
3. 斑状混土層 2層より砂壤土小ブロックを多く含む。他の遺構?
4. 6号土坑埋没土

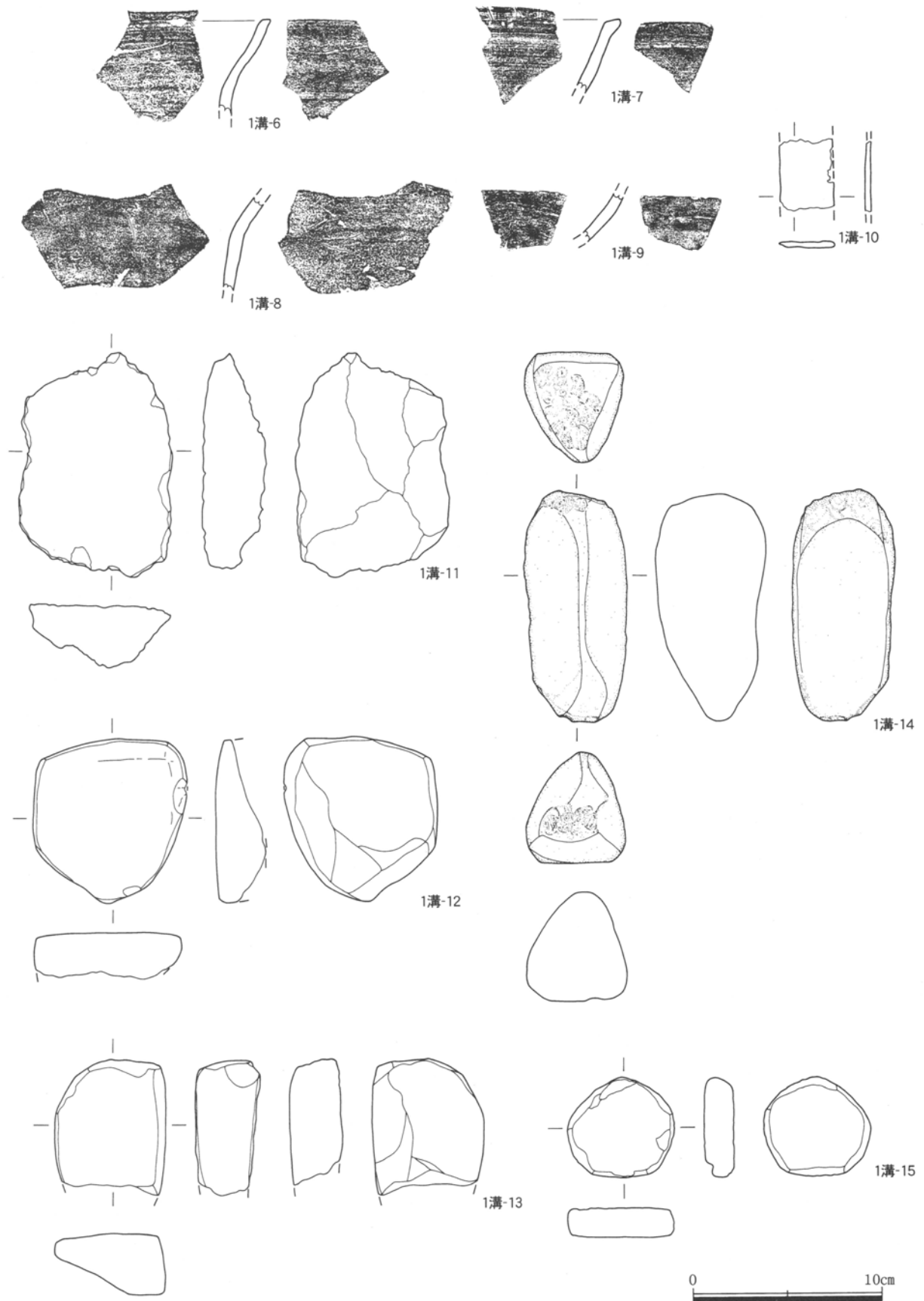
第46図 1区土坑(4)



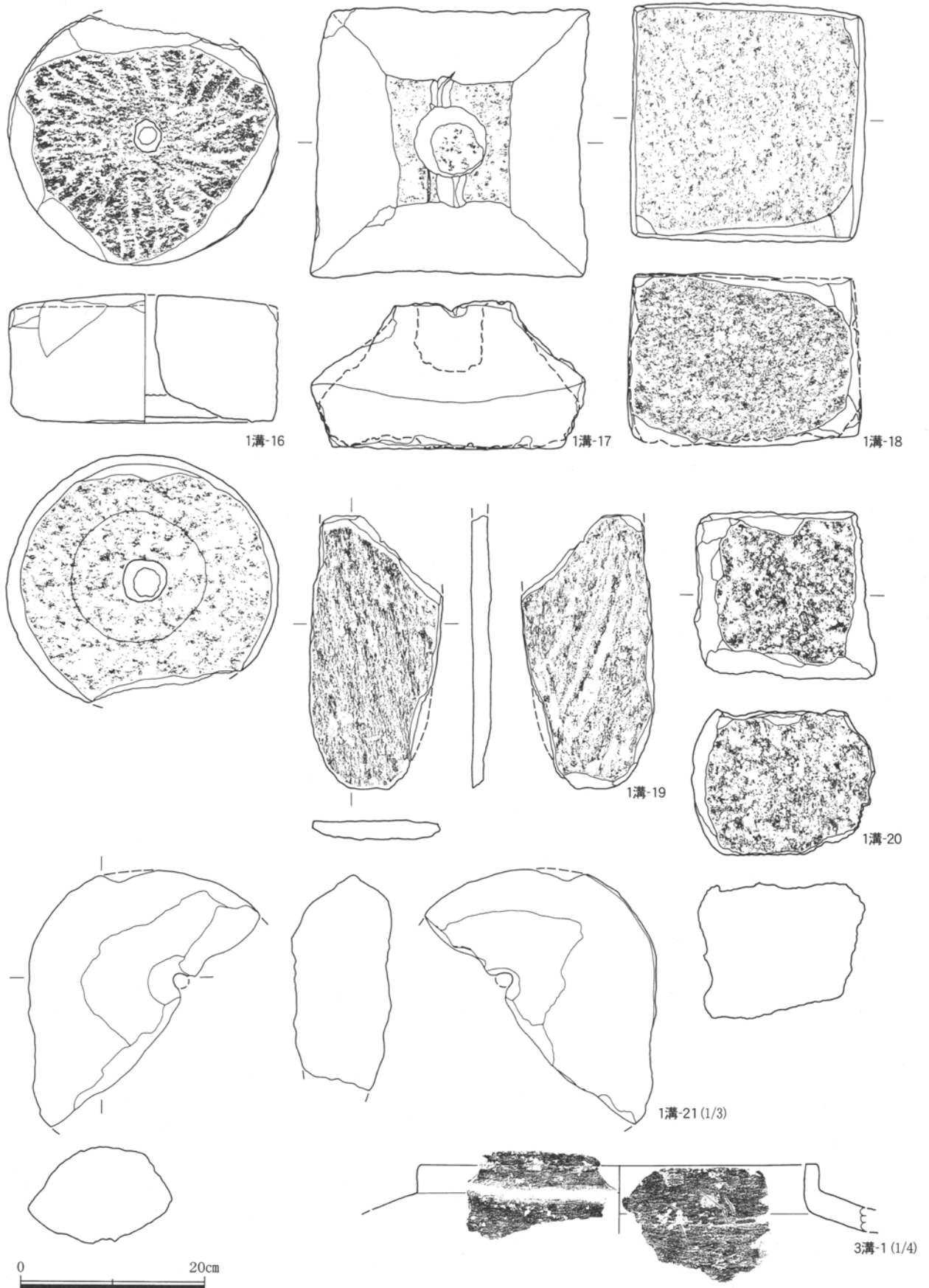
第2章 荒砥諏訪西遺跡の調査



第47図 1区土坑・溝(1)出土遺物



第48図 1区溝出土遺物(2)



第49図 1区溝出土遺物(3)

(2) 2区の遺構と遺物

**掘立柱建物**

多数の小穴群の中から15棟の存在を確認した。柱穴以外の施設は全く検出されていない。出土遺物も皆無である。いくつかの遺構同士で梁行、桁行の方向に共通性が見受けられるが、重複関係にある掘立柱建物同士の前後関係は不明な点が多い。詳細については第5章第2節を参照願いたい。また、付図中の遺構図においては重複あるいは近接する土坑、小穴については省略して柱穴の配置を提示した。掘立柱建物と土坑の関係については明確な関連性を見出し得ることは困難であった。

**2区1号掘立柱建物(第50図・付図3)**

**位置** Kb-7を中心に位置する。方形区画の中央寄りにある。

**重複** 5・7・9号掘立柱建物、4号溝と重複する。北側に軒を接して2号掘立柱建物がある。

**形状** 3×2間(南列9.80×西列4.50m)の東西棟である。東側に幅1.75mの庇が、西側にも幅0.62mの庇が付く。南列ではP7の位置が内側に入り、柱穴列が乱れている。

**長軸方位** N-72°-E

**柱穴** 柱穴掘り方は円形・四角形で、直径(一辺)0.29~0.62m、残存深度0.31~0.74mである。

**所見** 北側の2号掘立柱建物と梁行・桁行の方向を等しくしており同時存在の可能性が考えられる。

**2区2号掘立柱建物(第50図・付図3)**

**位置** Nt・Ka-6を中心に位置する。1号掘立柱建物の北側にある。

**重複** 5・7号掘立柱建物と重複する。土坑の重複は24基を数える。

**形状** 南北棟の建物とも見えるが3×1間の東西棟が2軒、南北に連結した状態と考えられる。個々の規模は、南側が3×1間(東列3.93×南列6.55m)、北側が3×1間(東列4.10×南列6.60m)である。北棟は北列に幅1.00mの庇が付く。南北方向の全体の長さは、東列10.07m、西列9.90mである。

**長軸方位** N-17°-W

**柱穴** 柱穴掘り方は円形を基本とし、直径0.32~0.66m、残存深度0.14~0.85mを測る。

**2区3号掘立柱建物(第50図・付図3)**

**位置** Ns・t-8を中心に位置する。方形区画の中央やや北東寄りに位置する。

**重複** 6・8・12号掘立柱建物と重複する。土坑の重複は40号土坑をはじめ7基である。

**形状** 3×2間(西列7.40×南列3.80m)の南北棟である。東側には2間分、長さ4.66m、幅1.50mの庇が付く。さらにその東側に2×2間(2.25×2.90m)の出張が附属する。西側にも全辺に渡り、幅約1.00mの庇が付く。南半には1×2間(2.55×2.90m)の出張、あるいは庇によって連結する建物がある。P4とP12の間にはP13があり、棟の北側を区切っている。

**長軸方位** N-14°30'-W

**柱穴** 柱穴掘り方は円形と四角形の混在で、直径0.24~0.63m、残存深度0.14~0.61mである。

**所見** 東西庇により東西両側に付属建物を連結している。

**2区4号掘立柱建物(第50図・付図3)**

**位置** Nq-7を中心に位置する。3号溝の北側に位置する。

**重複** 11号溝、204号土坑をはじめとした4基の土坑と重複する。

**形状** 3×1間(南列4.54×東列2.02m)の東西棟である。桁行の南北両列とも東側の柱間が広く開き、南列は柱穴が1本欠ける。また、南北列とも東側寄りの一部に庇あるいは出張が付く。南側は長さ3.06m、幅0.70~1.00mである。北側は、長さ2.28m、幅1.10mである。

**長軸方位** N-80°-E

**柱穴** 柱穴掘り方は円形と四角形の混在で、直径0.23~0.47m、残存深度0.04~0.53mである。

**所見** 3号溝を隔てるが長軸の方位は1~3号掘立柱建物と共通している。

**2区5号掘立柱建物(第50図・付図3)**

**位置** Ka・b-6を中心に位置する。

## 第2章 荒砥諏訪西遺跡の調査

**重複** 1・2・7・9号掘立柱建物、4号溝、12号井戸と重複する。土坑の重複は第15号土坑をはじめとした25基である。

**形状** 1×4間（北列4.30×東列9.91m）の南北棟である。東西両列の南側2間分には出張が付く。東側のそれは長さ5.50m、幅1.80m、西側で長さ4.80m、幅1.40mである。また、これらを含めた南辺には幅0.88～1.34mの庇が付く。

**長軸方位** N-13°30'-W

**柱穴** 柱穴掘り方は円形を基本としており、直径0.30～0.60m、残存深度0.25～0.74mである。

**所見** 6号掘立柱建物の軸線の方向と等しい。

### 2区6号掘立柱建物（第50図・付図3）

**位置** Nt-8・Ka-8を中心に位置する。

**重複** 3・8号掘立柱建物が北側に棟を接して位置する。4号井戸と重複する。土坑は48号土坑をはじめ5基が重複している。

**形状** 5×1(2)間（南列6.98×東列3.56m）の東西棟であるが、梁行寸法は、東西両列で著しく異なる。また、中央にP15が存在することからP2とP11、P4とP9、さらにP14、P15、P16を結ぶ仕切りがあり、内部に4つの間取りが存在していたものと考えられる。西側には幅0.80mの庇が付く。

**長軸方位** N-82°-E

**柱穴** 柱穴掘り方は円形と四角形の混在で、直径0.23～0.54m、残存深度は0.17～0.94mである。

### 2区7号掘立柱建物（第50図・付図3）

**位置** Ka・b-6を中心に位置する。

**重複** 1・2・5号掘立柱建物、4号溝、12号井戸と重複する。土坑の重複は13基である。

**形状** 5×1間（南列9.91×東列4.29m）の東西棟である。南側は西側寄りの4間分に長さ7.80m、幅2.09mの庇が付く。さらにこの南側に幅1.50mの庇が付いている。また、主屋の南側東端の4間は長さ2.10m、幅3.13mの出張を伴っている。P4は底面に扁平な礎を据えていた。

**長軸方位** N-70°-E

**柱穴** 柱穴掘り方は円形で、直径0.28～0.70m、残

存深度0.22～0.86mである。

**所見** 1・2号掘立柱建物とその方位を若干変えており、構築時期が異なると考えられる。

### 2区8号掘立柱建物（第51図・付図4）

**位置** Nt-8を中心に位置する。

**重複** 3・12号掘立柱建物、46号土坑と重複する。南側に6号掘立柱建物が位置する。

**形状** 4×1間（南列4.03×東列2.23m）の東西棟である。柱間の間隔が若干ばらつくが比較的整然としている。

**長軸方位** N-65°-E

**柱穴** 柱穴掘り方は円形で直径0.27～0.55m、残存深度は0.08～0.79mである。

**所見** 長軸方位は7号掘立柱建物と近似する。

### 2区9号掘立柱建物（第51図・付図4）

**位置** Kb-7を中心に位置する。

**重複** 1・5号掘立柱建物、61号土坑と重複する。

**形状** 2(3)×1間（東列2.54×南列4.18m）の東西棟である。北列は途中の柱穴が1本である。南列も柱間が等間隔では無い。南側に幅1.40mの庇が付く。

**長軸方位** N-65°-W

**柱穴** 柱穴掘り方は円形が多数で、P9が四角形である。直径は0.26～0.72m、残存深度は0.28～0.91mである。

**所見** 長軸の方位は10・11号掘立柱建物のそれと一致する。

### 2区10号掘立柱建物（第51図・付図4）

**位置** Ke-8を中心に位置する。

**重複** 14号掘立柱建物、10号土坑をはじめとする14基の土坑と重複する。方形区画の南西部分を占める。

**形状** 主屋は1×2間（北列3.34×東列4.17m）の南北棟であろうか。これの東側に1×1間（2.14×2.53m）の出張が付く。南側にも幅約1.9mの庇状の部分が取り付き、間口を大きく開けている。西側には1×2間、幅2.51mの付属部分が連結している。細かな間取りがなされているが、建物全体の規模は、東西9.16m、南北3.90mである。



**長軸方位** N-29°-E

**柱穴** 柱穴掘り方は円形で、直径0.27~0.58m、残存深度0.31~0.63mである。

**所見** 複雑な様相を呈した掘立柱建物遺構である。

**2区11号掘立柱建物(第51図・付図4)**

**位置** Kd-11を中心に位置する。方形区画の南東部分を占める。

**重複** 14号掘立柱建物と19基の土坑と重複する。

**形状** 7×2(1)間(南列12.08×東列2.97m)の東西棟である。北列の柱穴の位置は外側にややはずれている。南列のP12、P13の位置も列上をややはずれている。また、西側から2本目のP3、P14は、P17を介して間仕切りを行っている。これを境に東側5間分は南側に、西側2あるいは3間分は北側に庇を付けている。

**長軸方位** N-60°-W

**柱穴** 柱穴掘り方は円形に一部四角形が混在する。直径は0.23~0.63m、残存深度0.11~0.78mである。

**所見** 10号掘立柱建物と方位をほぼ同じくしている。

**2区12号掘立柱建物(第51図・付図4)**

**位置** Ns-9を中心に位置する。

**重複** 3・8号掘立柱建物、6号溝と重複する。

**形状** 西側の1×3間(西列7.47×南列3.31m)の棟と東側の1×3(2)間(東列6.80×南列3.70m)の棟、南北2棟が連結した形状であると考えられる。全体に柱間の間隔が広く開いている。東棟の北西隅の柱穴は、6号溝との重複による影響のためか検出されなかった。

**長軸方位** N-20°-W

**柱穴** 柱穴掘り方は円形を基本としており、直径0.23~0.61m、残存深度0.07~0.68mである。

**所見** 6号溝と重複、3号溝とも近接しており、方形区画の存在を意識していない占地状況が認められる。

**2区13号掘立柱建物(第51図・付図4)**

**位置** Kc-6を中心に位置する。

**重複** 4号溝と重複している。

**形状** 3(2)×1間(南列5.30×東列4.35m)の東西棟である。南列東側の柱穴1本が検出できなかった。北東隅の欠出も4号溝との重複の影響と考えられる。

**長軸方位** N-45°-E

**柱穴** 柱穴掘り方は円形で、直径0.30~0.88m、残存深度0.37~0.62mである。

**所見** 14号掘立柱建物と長軸方位を等しくしている。が、方形区画の溝の走行とは異なっている。

**2区14号掘立柱建物(第51図・付図4)**

**位置** Ke-9を中心に位置する。

**重複** 10・11号掘立柱建物と重複する。

**形状** 3×4間(北列3.00×東列3.98m)の南北棟を主屋にその東西、北側に出張が付いている。西側のそれは、長さ4.70m、幅3.07mの1間分西側に広がり、西列中央はさらに幅0.70mで張り出している。北側は、幅1.30m張り出しが付く。東側は、幅1.48mを測る。

**長軸方位** N-48°-E

**柱穴** 柱穴掘り方は円形で、直径0.20~0.45m、残存深度0.15~0.79mである。

**所見** 付属部分が多く複雑な構造の建物である。

**2区15号掘立柱建物(第51図・付図4)**

**位置** Nt-11を中心に位置する。

**重複** 1・6号溝と重複する。

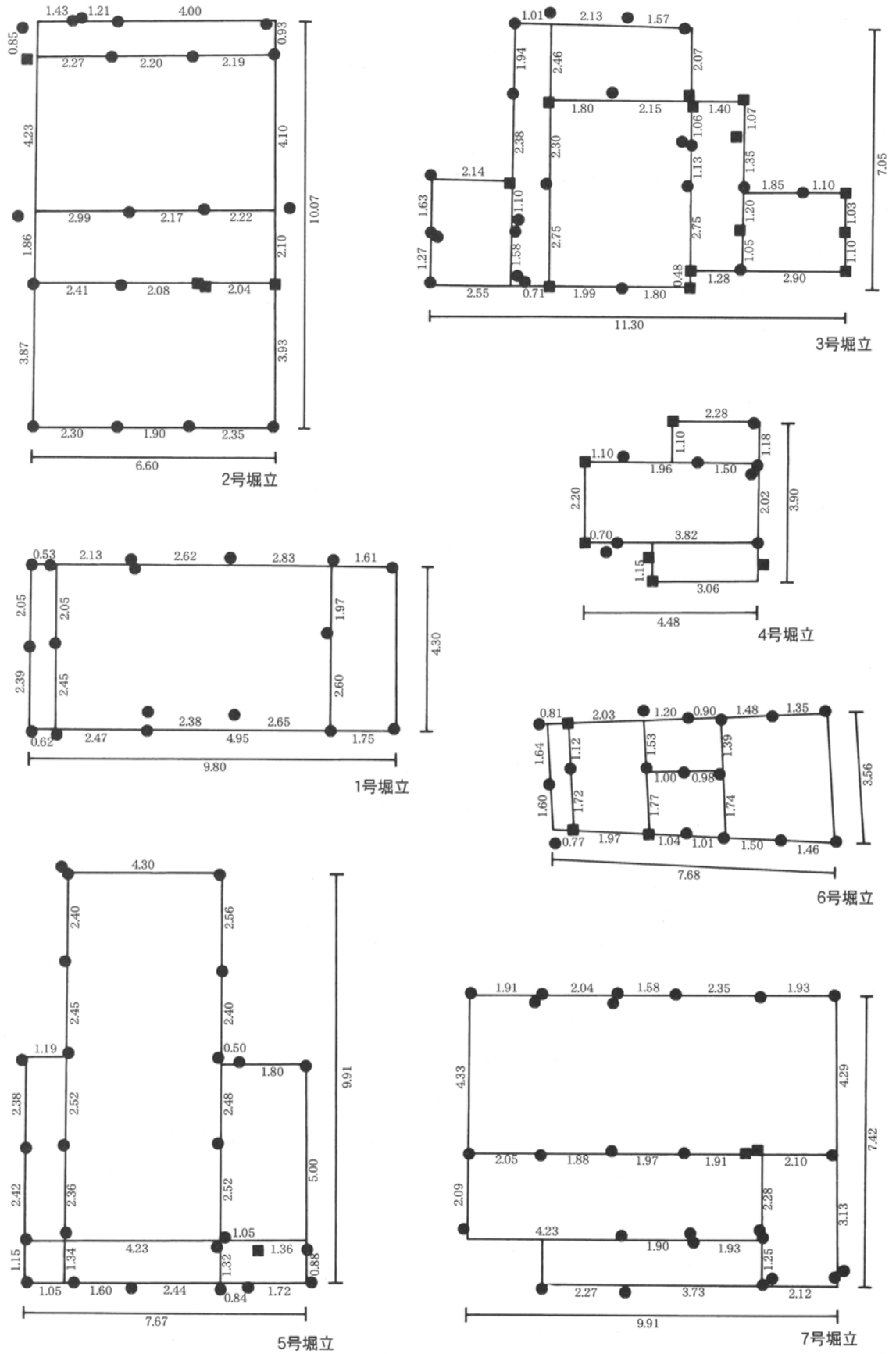
**形状** 4×2間(南列5.31×西列3.24m)の東西棟と考えられる。南北両列とも未検出の柱穴の存在が想定される。各列とも柱穴の位置は少しずつずれている。東側に幅0.80mの庇が付く。

**長軸方位** N-84°-W

**柱穴** 柱穴掘り方は円形を基本としている。直径0.18~0.67m、残存深度0.18~0.81mである。

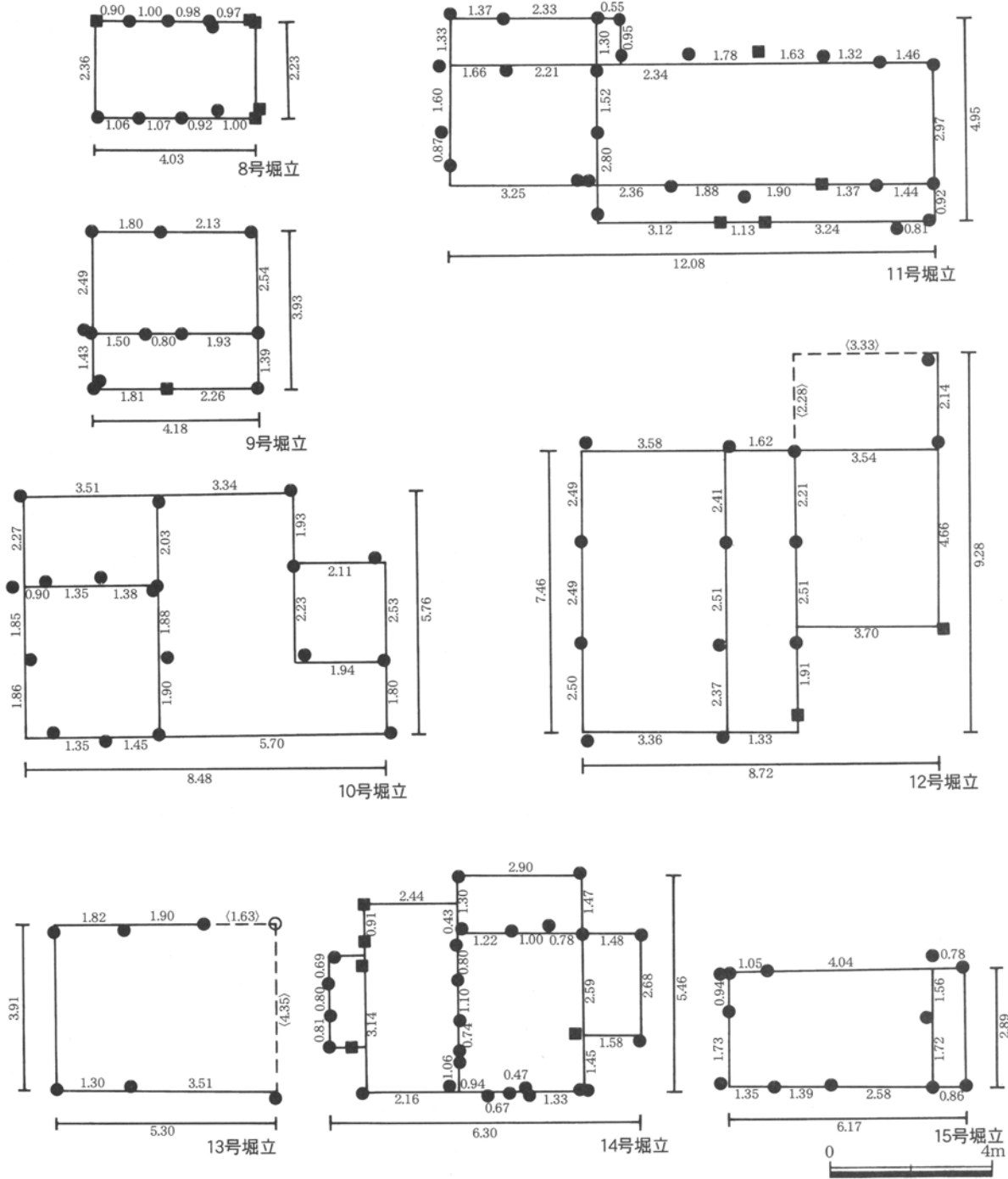
**所見** 他の掘立柱建物と長軸方向が若干ずれている。方形区画を意識していない占地であることから全体の中では後出の遺構であろうか。

第2章 荒砥諏訪西遺跡の調査



第50図 2区掘立柱建物柱間計測図(1)





第51図 2区掘立柱建物柱間計測図(2)

小穴群 (付図1 P L 11)

2区における小穴の検出は、2・3・5・6号溝によって方形に区画されたその内側に集中して検出された。この状況は、井戸、土坑の分布と同様であり、同じ2区においても3号溝北辺以北、あるいは1号溝以東については極めて散漫な状況にある。実際、小穴集中部分では掘立柱建物の存在が確認されており、これら小穴群も建物遺構の柱穴を構成して

いたものと想定されるものの、その配列に規則性を見出し得るものはなかった。

なお、区画内の小穴、土坑の検出状況を見ると、東辺の1・6号溝、北・西辺3号溝、南辺2号溝と大型の土坑、あるいは井戸が重複関係にあるものの柱穴、小型土坑と各溝が重複することは少なく、むしろ溝の立ち上がりから1～2mの範囲には遺構の空白地帯が存在していたようにも見える。区画の内

## 第2章 荒砥諏訪西遺跡の調査

側に土塁状の遺構があった可能性も考えられる。

また、6号溝の西縁から西側約3m前後、あるいは7号溝の北縁から5m前後においても小穴の検出数が少ない地点が認められる。空間利用の相違が原因と考えられるがその具体像については不明である。

小穴は、検出数800本を数えたが、土坑との重複関係にあったものも当然存在したと思われ、実数はこれを上回ることは改めて記するまでもないことである。

小穴は、調査時における埋没土の識別が完全でなかったため整理作業時に平面形、掘削深度を参考に建物遺構の存在を検討した。そのため小穴どうしの同時性についての検証はほとんど行っていない。

小穴の平面形は、円形を基調とするものが多数である。この他に四角形を基調とするものが見られるが全体の中では客体的である。ただしこの小穴の掘り方の各辺の向きは、掘建柱建物の方向とほぼ同一方向であることは注意される点であろう。

深さは、20cm前後から120cmに至るまで多様であったが、深さ60cmを越す穴が84本確認された。

平面形や掘削深度を対象に建物遺構の摘出につとめたがその全てを把握するまでには至らなかった。

### 井戸

2区からは合計15基の井戸を検出した。調査の都合上、完掘されたものはない。そのため出土遺物を伴う遺構は、1号と7号井戸のみである。そのため、7号井戸の掘削時期が中世と考えられる他は詳細な掘削時期は不明である。

#### 2区1号井戸(第52・55図 P L 12)

位置 Ns-4・5

重複 3号溝と重複する。

形状 平面形は、南北方向に長軸を有する長円形で、長軸2.20m、短軸1.80mである。壁面は、1.31mまで確認したが、未完掘である底面に向かって徐々にその径を狭めている。南・北壁は、オーバーハングしていた。東縁上位は段をなすが、別遺構と重複している可能性も考えられる。

方位 N-27°-E

埋没土 上・中層は茶褐色土、灰褐色土が色調、混入物を変え、厚さ30~50cm程ずつ層をなして堆積する。

遺物 小型土師器甕破片(1)を出土する。

(観P212)

所見 出土土器は、混入と考えられる。詳細な時期は不明である。

#### 2区2号井戸(第53図 P L 12)

位置 Ns-4・5、Nt-5

形状 平面形は、東西方向に長軸を有する長円形で長軸1.60m、短軸1.26mを測る。壁面は、0.92mまで確認、未完掘である。掘り方は、東西壁が若干の傾斜を有している。

方位 N-84°30'-W

埋没土 上層に灰褐色土が、その下位に暗褐色土が堆積する。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

#### 2区3号井戸(第53図)

位置 Nr-8

重複 3号溝と重複。前後関係は不明である。

形状 平面形は、東西に長軸を有する長円形で、長軸1.20m、短軸1.10mを測る。壁面は、0.61mまで確認、未完掘である。底位に向かって徐々に径を狭めている。

方位 N-73°-W

埋没土 暗褐色土が堆積、混入物、色調により分層できた。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

#### 2区4号井戸(第53図 P L 12)

位置 Ns-9

形状 平面形は、ほぼ円形である。直径は、0.80mを測る。壁面は、ほぼ垂直に掘り込まれている。深さ0.76mまでを確認したが、未完掘である。

方位 N-85°-E

埋没土 灰褐色土、暗褐色土が堆積する。上面から0.2m下位に灰褐色土と灰の混土層が認められた。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

2区5号井戸

位置 Nq・r-11・12

重複 1号溝と重複するが前後関係は不明である。

形状 確認面での平面形は、南北に長軸を有する長円形である。長軸1.64m、短軸1.30mを測る。未完掘である。

方位 N-17°-E

埋没土 不明である。

所見 中・近世以降の掘削と考えられるが詳細な時期は不明である。

2区6号井戸 (P L 12)

位置 Ns-11

重複 1号住居と重複するが住居に後出すると考えられる。

形状 平面形は、長円形を基本としていたと考えられるが確認時は不整形である。掘削深度は、記録漏れであるが掘り込みの平面形状は中位にいたっても上面と同様である。

方位 N-37°-E

埋没土 不明である。

所見 中・近世以降の掘削と考えられるが、詳細な時期は不明である。

2区7号井戸 (第53・55図 P L 12・31)

位置 Kb-9

重複 4号溝と重複するが前後関係は不明である。

形状 平面形は、ほぼ円形である。東西軸の長さは、2.30mである。断面形は、確認面から1.80mを検出したが、未完掘である。上位1.50mは漏斗状に外傾して立ち上がる。これ以下は若干のあぐりがみられるがほぼ垂直に掘り込まれている。

方位 N-48°-E

埋没土 灰褐色土、暗褐色土が堆積、この層中に石製品、自然礫が多数混入していた。

遺物 軟質陶器内耳鍋 (1・2)、五輪塔水輪 (7)、石製品 (3)、縄文時代石器凹石 (4・5)・磨石 (6) が出土している。(観P212・213)

所見 遺物の特徴から中世の遺構と考えられる。

2区8号井戸

位置 Kb・c-10

形状 平面形は、ほぼ円形を呈する。直径は、0.86mを測る。下位では長円形となり、南北方向に長軸を有する。未完掘である。

方位 N-11°-E

埋没土 不明である。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

2区9号井戸 (第54図)

位置 Kc-7

重複 78号土坑と重複する。前後関係は不明である。

形状 平面形は、円形を基本とする。規模は、検出時の長軸方向で1.08m、短軸方向で1.00mを測る。壁面は、深さ0.95mまでを検出したが未完掘である。掘り込みは下位に向かって徐々に狭めている。

方位 N-0°30'-W

埋没土 不明である。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

2区10号井戸 (第54図 P L 12)

位置 Nr-4・5

重複 162・234・251号土坑と重複する。前後関係は不明である。

形状 平面形は、長円形を基本としていたと考えられる。規模は、長軸は3.24m以上、短軸2.78mである。壁面は、1.56mまでを検出したが未完掘である。断面形の上位は、大きく傾斜し漏斗状を呈していたと考えられる。

方位 N-8°-W

埋没土 灰褐色土、暗褐色土が約30~40cmの厚さでレンズ状に堆積している。中位には大型の礫が混入している。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

2区11号井戸

位置 Kf-8

重複 2号溝と重複するが前後関係は不明である。

形状 2号溝との重複により形状は乱れているが、平面形は、長円形を基本としていたと考えられる。規模は、検出時の長軸方向で1.32m、短軸方向で0.

82m以上である。未完掘である。

方位 N-80°-E 埋没土 不明である。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

2区12号井戸

位置 Ka・b-6

重複 72・164号土坑と重複する。

形状 下位の状況から、平面形は、隅丸長方形と考えられる。規模は、南北方向が1.28m以上、東西方向が1.24mである。未完掘である。

方位 N-2°-E

所見 詳細な掘削時期は不明である。

2区13号井戸

位置 Nq-8・9

重複 3号溝と重複するが前後関係は不明である。

形状 平面形は、円形を基本としていたと思われる。直径は0.88mである。掘り込みは、南壁がやや傾斜を有し、北壁がほぼ垂直状を呈している。未完掘である。

方位 N-33°30'-W

埋没土 不明である。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

2区14号井戸

位置 Nt・Ka-8・9 重複 小穴

形状 平面形は、隅丸長方形を基本にすると思われる。南壁は、小穴と重複し、変形している。規模は、南北方向0.90m、東西方向0.85mを測る。未完掘である。

方位 N-8°30'-E 埋没土 不明である。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

2区15号井戸 (第54図)

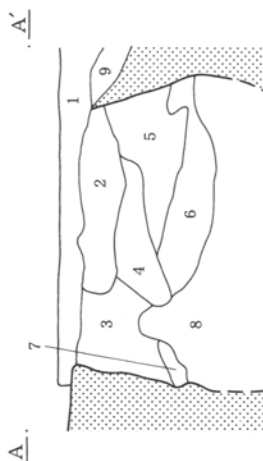
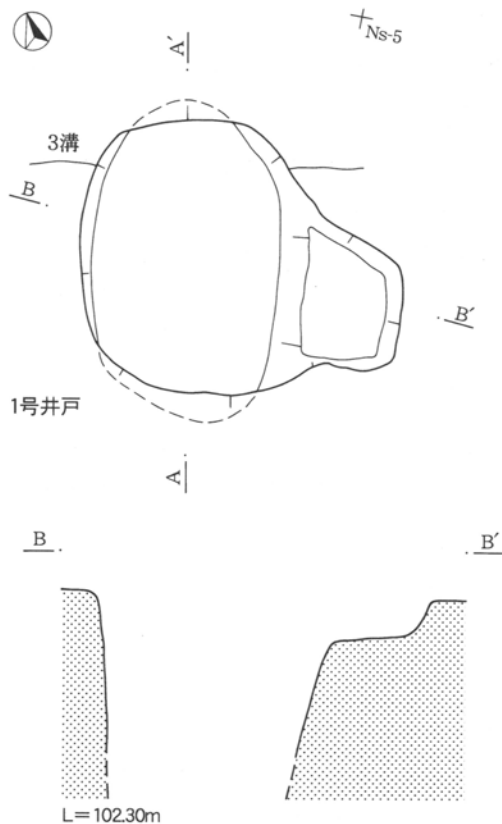
位置 Nk-7

重複 8号住居と重複、住居より後出と考えられる。

形状 平面形は、長円形を基本とする。規模は、長軸方向0.88m、短軸方向0.80mを測る。掘り込みは、ほぼ垂直で、深さ1.36mまで確認したが、未完掘である。

方位 N-33°30'-E 埋没土 不明である。

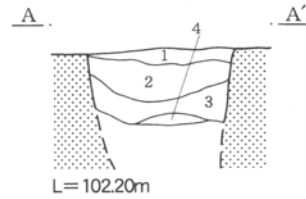
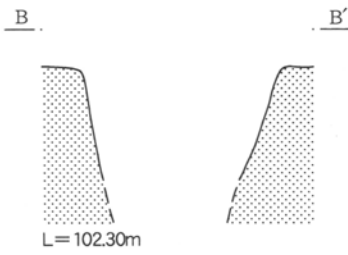
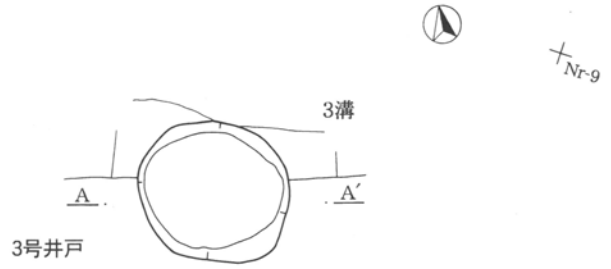
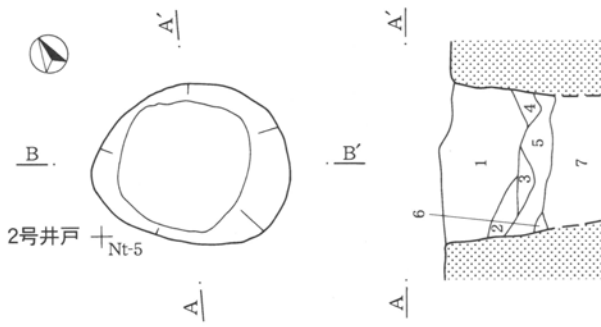
所見 詳細な掘削時期は不明である。



1. 褐灰色砂質土 白色軽石粒、砂壤土小ブロック・粒子を含む。
2. 茶褐色土 大粒の白色軽石粒をまばらに含む。やや黒色強い。
3. 茶褐色土 大粒の白色軽石をまばらに含む。灰褐色土粒も含む。
4. 茶褐色土 大粒の白色軽石をまばらに含む。
5. 茶褐色土 大粒の白色軽石をまばらに含む。茶褐色土の小ブロックを含む。黒色強い。
6. 暗褐色土 灰褐色土粒を含む。
7. 灰褐色土 ブロック。
8. 灰褐色土 灰白色砂壤土のブロックを多く含む。
9. 茶褐色土 白色軽石粒を含む。3号溝埋没土

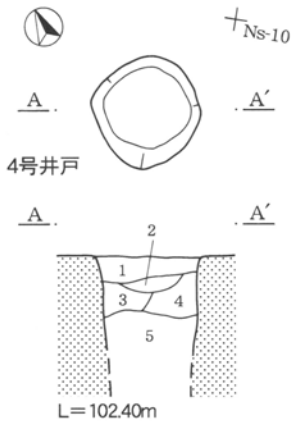
第52図 2区井戸(1)



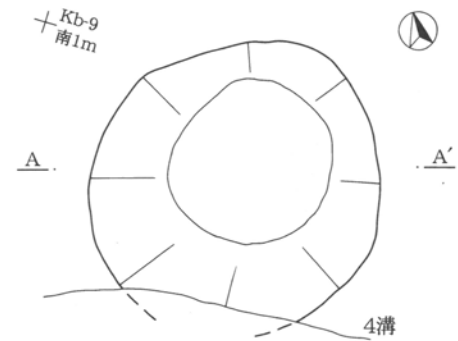


1. 灰褐色土 砂質。軽石を混入。
2. 灰褐色土 灰白色砂質土の小ブロックを多く含む。
3. 灰褐色土 茶褐色土の小ブロックを含む。
4. 灰褐色土 茶褐色土のブロックが大きくなる。
5. 暗褐色土 茶褐色土のブロックを多く含む。
6. 灰褐色土 2層に類するが、灰色が薄い。ブロック状に混入。
7. 暗褐色土 混入物は少なくなり、黒色増す。

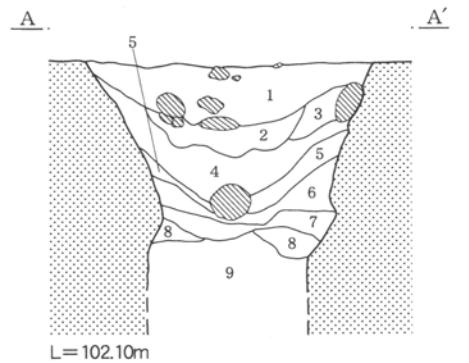
1. 暗褐色土 軽石をやや含む。
2. 暗褐色土 白色軽石は1層よりも目立つ。
3. 暗褐色土 灰褐色土の小ブロックを含む。
4. 暗褐色土 黒色が強くなる。



- 4号井戸土層注記
1. 灰褐色土 砂粒が多く、軽石も多く含まれる。
  2. 灰褐色土と灰の混土層
  3. 暗褐色土 4層に類するが、灰褐色土のブロックも目立つ。
  4. 暗褐色土 茶褐色土の小ブロックが含まれる。
  5. 暗褐色土 茶褐色土、灰褐色土のブロックが多くなる。



7号井戸

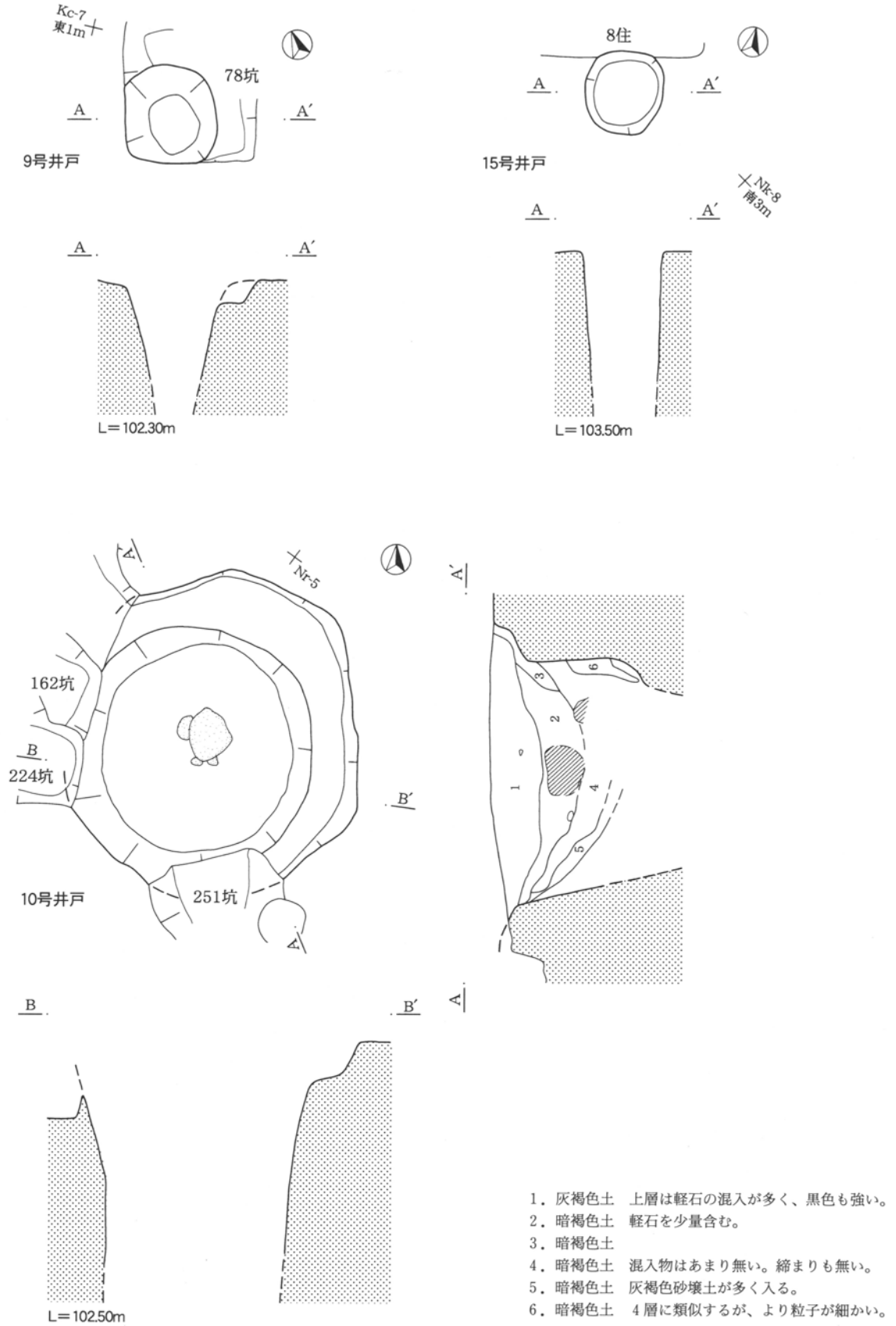


- 7号井戸土層注記
1. 灰褐色土 砂粒、軽石を多く含む。
  2. 暗褐色土
  3. 暗褐色土 茶褐色土が縞状に入り込む。
  4. 暗灰褐色土 締めり無し。軽石はまばらに含まれる。
  5. 茶褐色土 締めり無し。
  6. 暗灰褐色土 4層に類する。
  7. 暗灰褐色土 灰色が強くなる。
  8. 灰褐色土 茶褐色土のブロックが混入。
  9. 暗褐色土 茶色が強い。



第53図 2区井戸(2)

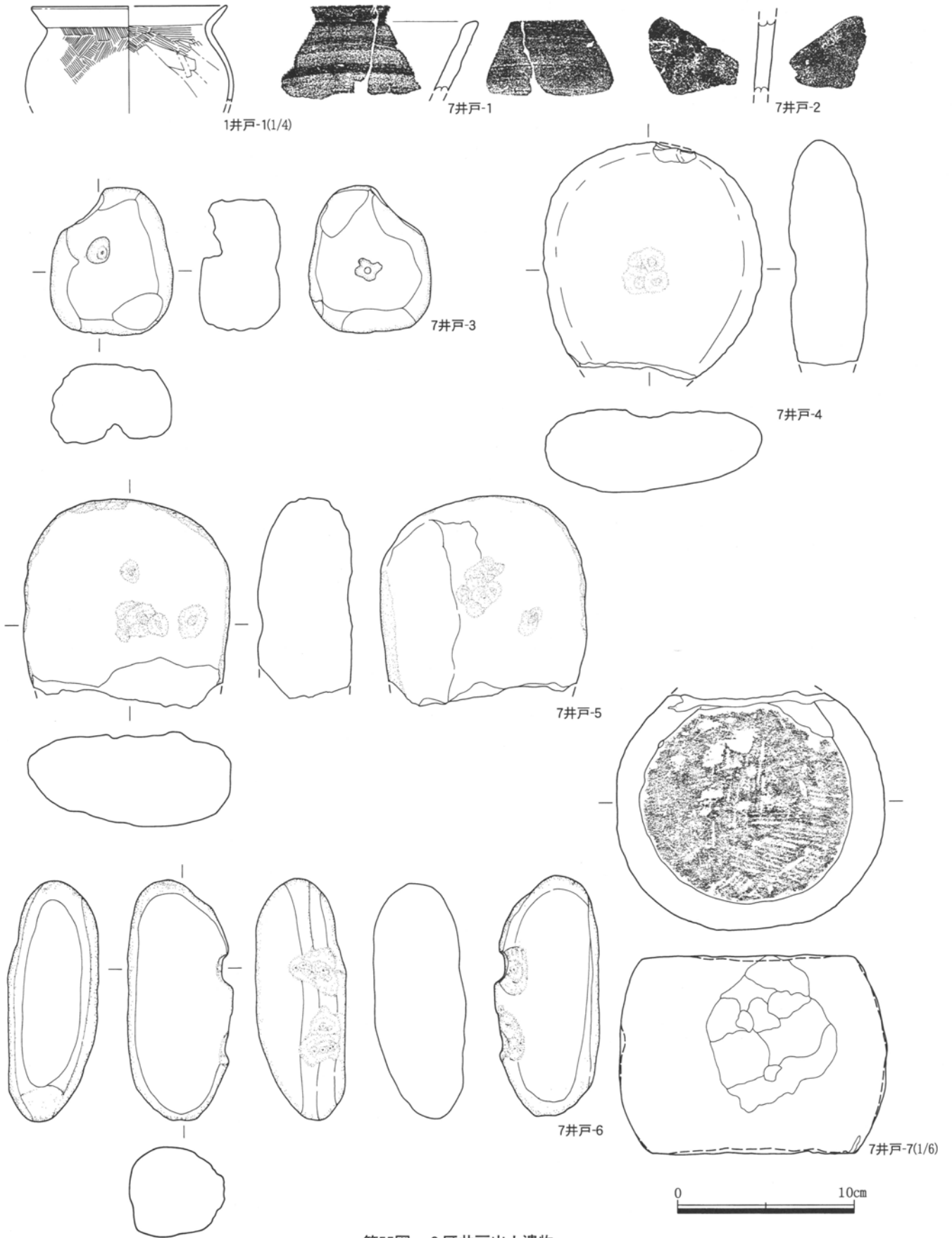
第2章 荒砥諏訪西遺跡の調査



第54図 2区井戸(3)

0 2m





第55図 2区井戸出土遺物

第2章 荒砥諏訪西遺跡の調査

土坑 (第56～71図 P L 13～16・31・32)

2区においては247基の土坑を検出した。このうち185号土坑は、埋設土器を伴い、古墳時代前期の所産と考えられることから本項からは除いて報告した。

分布状況を見るとその粗密に著しい差異が生じている。1～3号溝により方形に区画された範囲内には2区全体の検出数の75%にあたる186基が分布していた。これに対し、2区調査を南北にほぼ2分する1号溝の西側、かつ、東西方向の溝である3号溝北辺の北側部分では3号溝寄りに203・204号土坑をはじめとする一群のまとまりがみられるものの、Nグリッド内では激減、稀薄な分布状況をみせている。さらに1号溝東側部分では調査面積約4,200㎡中に27基という状況である。

個々の形状については、1区同様の状況がみられる。入口の突出部を有する形状の事例は、13基を検出した。主室部の形状は多様で、長方形、隅丸長方形、方形、隅丸方形、円形、長円形、不整形の形状が存在する。その内8基が3号溝西側あるいはその延長線上に位置し、いずれも入口部を主室部の東方向に向けていることは、3号溝の走向あるいは1～3号溝による方形区画との関わりある土地利用とそれに伴う施設配置があったことが想定される。この他の入口部付土坑としては、区画内では51号土坑が、区画外では5号溝の西側に7号土坑が存在する。3号溝北辺に接しては162・203・224号土坑が位置している。225号土坑は、周辺の土坑の分布が稀薄であ

り、区画から遠く隔たった位置にある唯一例となる。

この他、平面形では形状の整然としたものでは長方形を基調とする事例が多数存在する。1号溝以東では円形基調の事例がやや目立っている。規模は前述の入口部付土坑が主室そのものも比較的大型である事例が多数である。

1～3号溝による方形区画内で検出した土坑は、長軸方向が各溝の走向とほぼ平行、あるいはほぼ直交するものが大半で、45度ずれるものは少数である。これは土地利用上の一定の基準線として溝の走向が意識されていたことによると考えられる。ただし、このことにより溝と全ての土坑群の共伴関係を述べるものではない。

これらの土坑の掘削時期については、その大多数が遺物を共伴していないことから機能、掘削時期を提示することは極めて困難である。何らかの遺物を出土したものは18基にとどまった。出土遺物は、土器では土師質土器皿、軟質陶器の内耳鍋・片口鉢、陶器の片口鉢、陶器皿・甕、石製品では砥石・すりこぎ状製品・石鉢、鉄製品では釘、古銭である。

遺物個々の年代は、4・12・51・76・101・156・164・207・226号土坑出土土器が、14世紀後半から15世紀代、3・96・111・204号土坑出土土器は、中世であるがいずれの遺物も破片資料である。また、170・203号土坑の出土遺物は、元来、重複した古墳時代前期の竪穴住居に所属したものである可能性が高い。(観P 213～215)

第5表 2区土坑一覧

No.	グリッド	平面形状	長軸方位	規模、深さ	出土遺物	備考	挿図	写真
1	N t-4・5	長方形(突出部)	N-60°-W	468×250/95 130	砥石	→3溝	57	13
2	K a・b-4 ・5	長方形(突出部)	N-64°-W N-70°-W	355×336/84.5 95		→3溝、小穴	57	13
3	K b・c-4 ・5	長方形(突出部)	N-67°-W	352×336/74.5 82	土師質土器皿、片口鉢、縄文	75坑、→3溝、4溝→	58	13
4	K c-4・5	長方形(突出部)	N-80°-W N-70°-W	370×288/97 114	陶器片口鉢、不明石製品	5・88坑、→3溝	56	13
5	K c・d-5	長方形	N-5°-W	246×115/68		4坑、6坑→	64	
6	K c・d-5	長方形	N-3°-W	<202>×<94>/59		→5坑、89坑	64	
7	K e・f-4 ・5	長方形(突出部)	N-3°-E	324×226/44.5 76		2住	56	13
8	K e-6	不整形	N-71°-W	415×90～160/107		93坑		

## 第4節 中・近世以降の遺構と遺物

No	グリッド	平面形状	長軸方位	規模、深さ	出土遺物	備 考	挿図	写真
9	K e · f - 6	不整形	N-84°-W	314×176~265/57			68	
10	K f - 6 · 7	長方形(突出部)	N-81°-E	<193>×120~170/ 118		→266坑	59	13
11	K f · g - 7 · 8	長方形(突出部)	N-13°-W	322×270/116 140		2 溝	59	13
12	N t - 5	長方形(突出部)	N-84°-E	312×243/104	片口鉢、砥石	13坑、小穴	60	13
13	K a - 4 · 5 N t - 5	長方形か	N-79°-W 不明	258×<113~152>/ 85.5		5 掘、12・14坑		
14	N t - 5 K a - 5	不整形	N-22°-E	213×94/29		5 掘、13坑		
15	N t - 5 · 6 K a - 5 · 6	長方形か	N-72°-W	<200>×<175>/52		2・5 掘、16~18坑	14	
16	K a - 5 · 6	長方形か	不明	<110>×184/52		2・5 掘、15坑		
17	N t - 6	長方形か	N-21°-E	<152>×104/54		2・5 掘、15・18・19坑		
18	N t - 6 K a - 6	不明	不明	<216>×<106>/50		2・5 掘、15・17・19坑		
19	N t - 6	不整形	不明	115×<34~70>/13		2 掘、17・18・20坑		
20	N t - 6	長方形か	N-64°-W	178×105/42		2 掘、19・21坑		
21	N t - 6	長方形か	N-22°-E	104×82/23		2 掘、21坑		
22	N t - 5	不整形	N-22°-E	110×103/55			68	
23	N s · t - 5 · 6	長方形	N-41°-W	144~164×105/69		2 掘、24坑→		
24	N s · t - 5 · 6	長方形か	N-73°-W	<35~120>×94/28		2 掘、23坑		
25	N s - 6	長方形	N-72°-W	122×100/14		2 掘		
26	N s - 5 · 6	不整形	N-24°-E	84~127×56~85/ 10.5		→27坑、2 掘		
27	N s - 5	長方形	N-68°-W	148×92/43.5		26坑→		
28	N s - 5	隅丸長方形	N-30°-E	160×102/13		3 溝	66	
29	N s - 6	不整形	N-30°-E	135×125/30		252坑		
30	N t - 6	長方形	N-63°-W	178×112/33		2 掘、31坑		
31	N s · t - 6 · 7	正方形	N-79°-W	194×72/19		2 掘、30・32坑		
32	N s - 6 · 7	長方形	N-19°-E	172×112/19.5		2 掘、31坑		
33	N s - 7	隅丸長方形	N-5°-W	133×80~108/52		→253坑		
34	N s - 7	不整形	N-14°-E	208×122/61.5		→35坑		
35	N s · t - 7	長方形	N-29°-E	130×80/24.5		34坑→		
36	N t - 7	不整形	不明	<185>×56~80/ 15.5		37坑、2 掘		
37	N t - 7	不整形	不明	<144>×133/14		2 掘、36・38・39坑		
38	N t - 7	長方形か	不明	<90>×<70>/13		2 掘→、37坑→、39坑		
39	N t - 7	長方形	不明	<124>×110/21.5		2 掘→、37坑、38坑→		
40	N t - 7	隅丸長方形	N-25°-E	<64>×58/22		3 掘、41坑		
41	N s - 7	長方形	N-20°-E	<142>×78~105/ 66		3 掘、40・42坑		
42	N s · t - 7 · 8	不整形	不明	<78>×<54>/42.5		二重の掘り方 41坑		
43	N r · s - 8	不整形	N-4°-W	152×<26~55>/20		44坑、小穴		
44	N r · s - 8	長方形か	N-9°-E	180×93/45		12掘、43坑		
45	N s - 8	隅丸長方形	N-18°-E	130×90/23		3・12掘		
46	N t - 8 · 9	隅丸長方形	N-65°-W	106×74/10.5		8・12掘		
47	N s · t - 9	不整形	N-76°-W	118×103/29		3・12掘		
48	N t - 9	長方形	N-79°-W	258×114/34		6 掘	64	
49	N t - 9 · 10	長方形	N-6°-E	160×95/23.5		6 掘、50坑→		
50	N t - 9 · 10 K a - 10	隅丸長方形	N-6°-E	<98>×62/9	人骨出土の記録	6 掘、→49坑		
51	N s · t - 10	長方形(突出部)	N-57°-E N-47°-E	252×148/84 65	片口鉢		59	14
52	N s · t - 10	長方形	N-83°-W	170×124~147/ 15			64	

第2章 荒砥諏訪西遺跡の調査

No.	グリッド	平面形状	長軸方位	規模、深さ	出土遺物	備考	挿図	写真
53	N s・t-11	不明	N-11°-E	<114>×<40~90>/ —		6溝		
54	N r-10・11	長方形	N-11°-W	96×91/10			64	
55	N r-11	長方形	N-76°-E	101×56/12				
56	K a-10・11 K b-11	不整形	N-78°-W	<213>×104/41		57坑、7溝、小穴		
57	K a-10・11 K b-11	隅丸長方形か	不明	<80>×94/32		56坑		
58	K a・b-10	不整形	不明	<30>×<26>/24		59坑→		
59	K a-10	不整形	不明	112~140×94/26		→58坑		
60	K b-8	長方形	N-63°-W	116×78/27				
61	K b-7・8	隅丸長方形	不明	113×70~90/10.5		1・7掘		
62	K a-9	不整形	N-10°-W	83×73/53			68	
64	N t-8	隅丸長方形	N-23°-E	106×76/15.5		3・6掘		
65	K a-7・8	不整形	不明	248×56~94/23.5				
66	N t-8	長方形	N-77°-W	113×63/45		3掘		
67	K a-7	長方形	N-16°-E	162×132/47.5		2・7掘		
68	K a-7	円形	N-35°-E	70×68/45.5		2・7掘		
69	K a-7	不整形	N-60°-E	63×52/17		2・7掘		
70	K a-7	円形	N-50°-W	55×53/9.5		1・2・7掘		
71	K a-6	不整形	不明	90~126×110/24	石製品	2・5・7掘		68
72	K a・b-5 ・6	長方形	N-8°-E	<233>×108/30.5		5・7掘、12井、小穴		
73	K a-5	長方形か	N-26°-E	143×92/16.5		5掘、74坑		
74	K a-5	不整形	N-27°-E	75×32~56/25.5		5・7掘、73坑		
75	K b-5	長方形	N-3°-E	183×170/48.5		3坑、10掘		
76	K b-5・6	長方形	N-5°-E	174×124/51	陶器杯・椀	5・7掘、249坑、4溝		
77	K b-6	長方形	N-74°-W	228×130/41		5・7掘、4溝		
78	K b・c-7	長方形	N-13°-E	158×135/32		→9井、小穴		
79	K c・d-7	不整形	不明	<62>×100/20		80坑、7溝		
80	K d-6	隅丸長方形	N-85°-W	152×120/72		79坑、7溝		
81	K c-7	不整形	N-21°-E	65×56/13				
82	K c-6・7	正方形	N-30°-E	116×104/38		13掘		
83	K c-6	不整形	N-4°-E	113×65~92/39		13掘		
84	K c-6	長方形	N-29°-E	195×100/77		底面は段をなす。13掘		64
85	K c-5	不整形	N-14°-E	<145>×86/12		→86・87坑、小穴		
86	K c-5・6	円形	N-70°-E	124×103/33		13掘、85・87坑		
87	K c・d-5 ・6	長方形か	N-12°-E	156×116/16		13掘、85坑→、86坑		
88	K c・d-4 ・5	長方形	N-7°-E	162×118/77.5		4坑、3溝		
89	K d-5	隅丸長方形か	N-41°-W	<113>×65/52		6坑		64
90	K d-6	隅丸方形	N-74°-E	54×48/40				67
91	K d-6	長円形	N-83°-W	114×50/26		9掘		
92	K d-7	隅丸長方形	N-2°-E	131×106/23				67
93	K e-6	不整形	不明	<175>×108/48		8・94坑		
94	K e-6	不整形	N-7°-W	130~174×110/ 50.5		93坑		
95	K d・e-7	隅丸方形	N-86°-E	115×96/38	土師質土器皿、縄文	96坑、10掘		67
96	K e-7	隅丸長方形か	N-5°-W	100×68/26		95坑、10掘		67
97	K e-7	不整形	N-12°-E	116~142×98/29		小穴		
98	K e・f-7	長方形	N-82°-W	193×110/34		10掘		64
99	K f-7	円形	N-6°-E	86×74/35		10掘		
100	K f-8	長方形	N-86°-W	115×88/51				64
101	K f・g-8 ・9	隅丸長方形	N-80°-W	256×228/55	軟質土器内耳鍋	礫、多数出土。5溝		67 13
102	K e-7・8	正方形	N-87°-W	90×88/38		10掘		67
103	K e-7	長方形	N-85°-W	134×111/48		10掘		64
104	K d・e-7 ・8	長方形	N-87°-W	238×96/18		10掘、105坑		65

第4節 中・近世以降の遺構と遺物

No.	グリッド	平面形状	長軸方位	規模、深さ	出土遺物	備考	挿図	写真
105	Kd-7	不整形	N-83°-W	102×80/31		10掘、104坑	65	
106	Kd-7	長方形	N-84°-W	<184>×48~72/29		107坑		
107	Kd-7	長方形	N-6°-E	162×50~70/48		106坑		
108	Kc・d-7 ・8	不整形	N-76°-W	195×113/62		底面に段差有り。		
109	Kd-7・8	長方形	N-88°-W	150×93/52			65	
110	Kd-7・8	長方形	N-74°-W	188~210×120~144/60	打製石斧	10掘	68	
111	Kd・e-8	長方形	N-85°-W	110×58/32	土師質土器皿	10掘	65	
112	Ke-8	不整形	N-79°-W	94~128×101~121/22		10掘		
113	Ke・f-8 ・9	不整形	N-87°-W	130×65~90/25		小穴	69	
114	Ke-8	不整形	不明	94×36~72/14		10掘		
115	Ke-8	長方形	N-4°-W	92×63/46		10掘		
116	Ke-9・10	長円形	N-20°-E	334×200~270/33		10掘		
117	Ke-9	不整形	不明	<140>×<110>/46	銭(咸平元寶)	14掘、118・121坑。121坑と同一の可能性もあるか。	65	
118	Kd・e-9	不整形	不明	<100>×<85>/20		14掘、117・121坑	65	
119	Kd・e-9	不整形	不明	<80>×<70>/-		14掘、120坑→、121坑	65	
120	Ke-8・9	長方形か	不明	<90>×124/25		14掘、119・121坑	65	
121	Kd・e-9	長方形か	N-2°-W	300×157/43		14掘、117~119坑、→120坑	65	
122	Kd-9	長方形	N-74°-W	86×51/16		14掘	65	
123	Kd-9	不整形か	不明	148×75~96/28		14掘	65	
124	Kd-8	不整形	不明	<80>×50/30		14掘、125坑→		
125	Kd-8	長方形	N-15°-E	143×100/57.5		14掘、→124坑		
126	Kd-8・9	長方形	N-20°-E	166×94/57				
127	Kd-9	長円形	N-90°-E	76×45/62				
128	Kd-9	隅丸方形	N-1°-E	52×52/22			65	
129	Kc-9	長方形	N-4°-E	90×76/54		小穴		
130	Kc-9	不整形	N-9°-W	92~131×75/16				
131	Kc-9・10	隅丸長方形	N-48°-E	133×95/12.5		小穴		
132	Kd-10	長方形か	N-15°-E	132×90/57.5		133坑		
133	Kc・d-9 ・10	長方形	N-11°-E	130×104/59.5		132・136坑、小穴		
134	Kd-9・10	不整形	N-78°-E	120×70/37.5		135・237坑		
135	Kd-10	長方形	N-78°-W	124×94/25		134坑		
136	Kd-9・10	不整形	不明	154×<48>/45		133・237坑		
137	Kd-10	長方形	N-11°-E	117×98/17		11掘		
138	Kd-10	不整形	N-37°-W	46×32/10		11掘		
139	Ke-10	隅丸長方形	N-7°-E	115×86/33		11掘		
140	Ke-10	長方形	N-21°-E	101×74/27		11掘		
141	Kd・e-10	隅丸長方形	N-79°-W	85×56/19		11掘		
142	Kd・e-11	不整形	N-0°-E	<66>×65/18		11掘、143坑		
143	Kd・e-11	隅丸長方形	N-8°-E	118×90/39		11掘、142坑		
144	Kd-11	長方形か	N-2°-W	214×82/20.5		11掘		
145	Kd-11	不整形	不明	<128>×95/18.5		11掘、146坑		
146	Kd-11	長方形か	N-7°-E	<132>×98/22		11掘、145坑		
147	Kd・e-12	長方形か	N-5°-E	136×85/2		小穴		
148	Kd-12	長方形	N-88°-W	90×64/8			66	
149	Kc-10	長方形	N-84°-W	145×87/24				
150	Kb-11 Kc-10・11	不整形	N-82°-W	128×70/21.5		151坑	65	
151	Kc-11	不整形	不明	<105>×66/17		150・152坑		
152	Kc-11	不整形	不明	130×48/29		151坑		
153	Kc-11	不整形	N-83°-W	195×180/29				
154	Kd-10・11 Kc-10	不整形	N-75°-W	110×89/47				
155	Kc-11	隅丸長方形	N-13°-E	69×38/-		礫を出土。	68	
156	Kb・c-11	不整形	N-7°-W	102×92/52	陶器皿			
157	Kb-11	円形	N-69°-W	62×60/9				

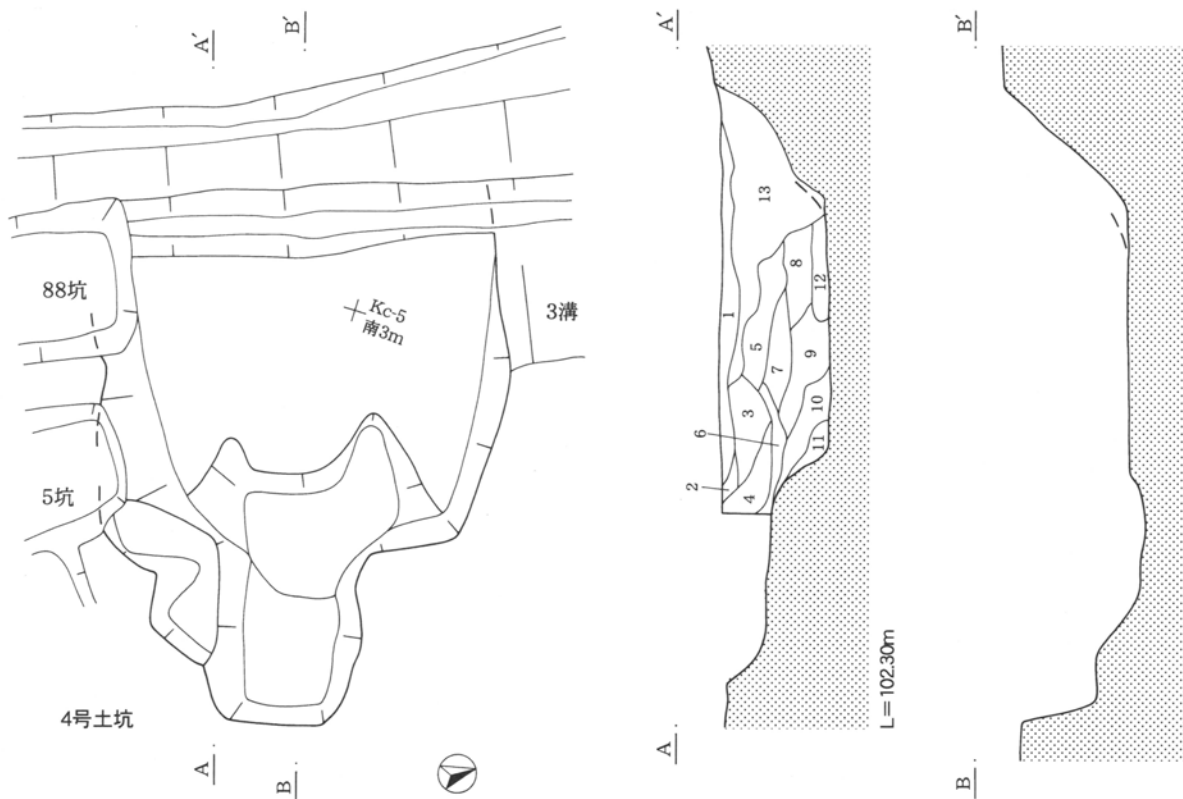
第2章 荒砥諏訪西遺跡の調査

No.	グリッド	平面形状	長軸方位	規模、深さ	出土遺物	備考	挿図	写真
158	K b-11	隅丸長方形	N-75°-W	92×52/21		小穴	67	
162	N q・r-4	長方形(突出部)	N-57°-W	<360>×296/105.5		10井	61	
			N-43°-W	100				
163	K a-6	不整形	不明	116×94/25.5	砥石、釘、棒状鉄製品	2・5・7掘	68	
164	K a・b-6	長方形か	N-75°-W	220×132/59.5	軟質陶器、陶器皿	1・5・7掘、12井	66	
167	K a・b-4	長円形か	N-45°-E	<110>×80/37		3溝、礫、出土。		
170	K b-2・3 K c-2	長方形	N-70°-E	212×122/142	土師器甕・台付甕・器台		66	14
171	N q-5・6	隅丸長方形(突出部)	N-42°-E	418×306/97.5		小穴	60	
			N-33°-E	80				
180	K c-15・16	円形	N-16°-E	112×102/9				14
181	K c-16	円形	N-32°-W	82×76/25			69	
182	K c-15	円形	N-31°-W	99×96/10			69	14
183	K b-16	長方形か	不明	<81>×<75>/5				
184	K b-15	長円形	N-27°-W	76×73/13				14
186	K a-14・15	円形か	N-12°-W	105×101/21				14
187	K b-14	円形か	不明	<86>×<80>/16				
188	K a-14・15	円形	N-52°-W	126×111/20			69	14
189	N t-16	不整形	不明	106×180~100/34		小穴		
190	N s-13	不整形	N-87°-E	92×50~72/13				15
191	N s-13	円形か	N-86°-W	85×70/6				15
192	N s-13・14	円形	N-19°-W	110×105/20				15
193	N s-14	円形	N-36°-W	61×60/14				15
194	N s-14	不整形	N-7°-W	105×94/21			68	15
195	N r-14	長円形か	N-30°-E	148×104/37				15
196	N p・q-12	円形	N-17°-W	113×111/16				15
197	N q-12	円形	N-37°-W	118×108/7		小穴		15
198	N m-12	円形	N-70°-E	107×90/10			69	
199	N m-12	円形	N-82°-E	101×92/9				
200	N l・m-10 ・11	円形	N-13°-W	<106>×100/-		14溝		
201	N p-6・7	不整形	不明	220~260×<233>/79		203・259坑	62	16
202	N p-7・8	不整形	不明	306×<80~185>/445		4掘、203坑、11溝	62	16
203	N p-6・7 N q-7	長方形(突出部付か)	N-2°-W	<258>×363/86	土師器罎・杯、打製石斧	7住、201・202・204・206坑、11溝	61	16
204	N q-7・8	隅丸長方形か	N-49°-E	300×268/62	須恵器甕、常滑甕	礫出土。4掘、203坑→、205・206坑、11溝、7住	62	16
205	N q-7	不整形	不明	<85>×<82>/39		4掘、204坑	62	16
206	N p・q-7	不明	不明	<124>×<116>/-		4掘、203・204坑、11溝、小穴	62	16
207	N q-7	不整形	不明	216×148/57	軟質陶器片口鉢	4掘、208・212坑、7住	62	16
208	N q-7	不明	不明	73×<56>/11		小穴	62	
209	N q・r-7	長方形か	N-22°-E	<127>×102/20.5		207坑、小穴	62	
210	N q・r-7	長方形か	不明	<80>×88/44		210坑、小穴	62	
211	N q-6	長方形	N-70°-W	135×100/67		209坑、3溝	62	16
212	N q-6・7	不明	不明	<220>×<90>/-		7住、212坑、小穴	62	
213	N q-4・5	隅丸長方形	N-2°-E	175×83/27		7住、207・211坑、小穴	67	16
214	N p-5・6	隅丸長方形	N-26°-W	205×94/25				16
215	N o-5	長方形	N-75°-W	110×98/19.5				16
216	N o-5	不整形	N-42°-W	98×66/13.5		小穴		16
217	N n-6	長円形	N-65°-E	127×70/13			69	
218	N o-4	長方形	N-73°-W	153×105/40.5				16
219	N o-4	長方形	N-0°-E	100×65/12.5		6住、219坑		16
220	N n・o-6	円形	N-72°-E	118×105/24		6住、218坑	69	
221	N m・n-6	不整形	不明	54~124×50~95/14				
222	N m-6	不整形	N-16°-W	100×78/4				
223	N l・m-6 ・7	長方形	N-26°-E	124×72~96/6			66	

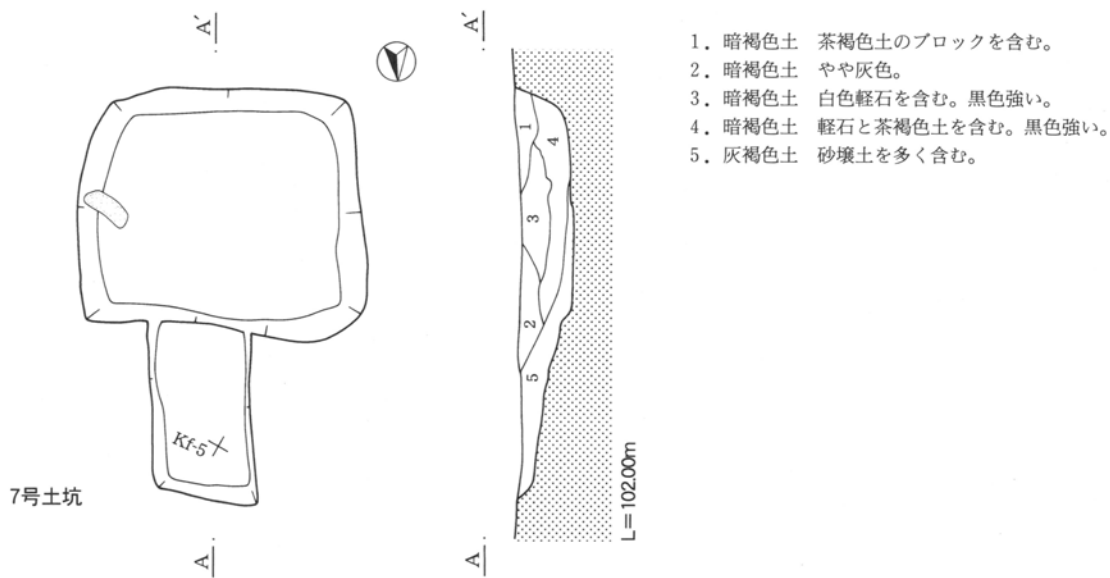
第4節 中・近世以降の遺構と遺物

No.	グリッド	平面形状	長軸方位	規模、深さ	出土遺物	備 考	挿図	写真
224	N r - 4	長方形(突出部)	N-80°-W	218×205/98 82		10井、3溝		
225	N m - 7	隅丸長方形 (突出部)	N-80°-W	217×234/125.5 90			60	16
226	N n - 8	不整形	N-48°-W	80×42~66/15.5	軟質陶器片口鉢	小穴		
227	N p - q - 10	円形	N-18°-W	128×120/16		小穴		69
228	N p - 8・9	隅丸長方形	N-58°-W	164×54~74/19				69
229	N m - 10	円形か	N-13°-W	81×81/13				69
230	N l - 10・11	不整形	不明	310×100~156/ 24.5		小穴		
231	N l - 11・12	円形	N-62°-W	126×107/20		小穴		
232	K h - 7	隅丸長方形か	N-54°-W	183×103~147/ 68				
234	K e - 4	長方形か	N-86°-W	270×66/17		2住		
235	K d・e-10	不整形	N-86°-E	85×50/10		11・14掘		
236	K d - 9・10	長方形	N-30°-W	86×54/16				66
237	K d - 9・10	長方形か	N-13°-E	178×116/54.5		134・136坑、小穴		
238	K b - 9・10 K c - 10	不整形	N-15°-E	160×50~88/48		7溝、小穴		
239	K d - 8	長方形	N-3°-E	130×70~108/ 50.5				
240	K c - 8	長方形	N-9°-E	140×98/51		小穴		66
241	K b - 12	長方形	N-9°-W	230×<228>/18		6溝→		
242	K a - 11	不整形	N-89°-W	<122>×<102>/31		243坑、6溝		
243	K a - 11	隅丸方形	N-87°-W	74×70/119		242坑、6溝		
244	N t - 11	隅丸長方形か	N-84°-W	<185>×<60>/-	石鉢	6溝、小穴		
245	N t - 11	長方形か	N-8°-E	100×60/-		15掘、6溝		66
246	N t・K a - 10	不整形	不明	146×60~112/ 47.5		15掘		
247	K a - 10	不整形	N-44°-W	89×74/41				
248	N t - 9	不整形	N-82°-W	89×67/83		6掘		
249	K b - 5・6	長方形	N-9°-E	126×67/14		5掘、76坑、4溝、小穴		
250	N s - 4	不整形	N-66°-W	<100>×<98>/-		3溝		
251	N r - 5	不整形	不明	<132>×<105>/-		10井、3溝、小穴		
252	N r・s-5 ・6	不整形	N-17°-E	162×116/52		29坑、3溝		
253	N s - 7	不整形	N-85°-W	<121>×60/15		33坑、小穴		
254	N q - 7 N r - 6・7	長方形か	N-75°-W	164×<102>/16		3溝		
255	N r - 9	不整形	N-10°-E	364×<140~234>/ 18		12掘、256坑、6溝		
256	N r - 9・10	不整形	不明	390×<126>/22		12掘、255・257坑、6溝		
257	N r - 9・10	不整形	不明	<250>×<100>/14		小穴		
258	N q・r-10	長方形か	N-19°-E	<94>×60/12		256坑、6溝		
259	N p - 6・7	隅丸長方形か	不明	72×<63>/14.5		3溝		62
260	N k・l-8	隅丸長方形	N-78°-W	158~193×97/776		→201坑		67
261	K b - 14	円形か	N-86°-E	0×58/10				
262	N t - 17	長円形	N-13°-E	89×70/11				
263	N k - 10	長円形か	N-58°-E	98×82/9				
264	N i - 10	円形	N-61°-E	96×90/26				
265	N h - 11・12	長円形か	N-68°-W	75×58/4		14溝、6畠		
266	K f - 7	正方形か	N-72°-E	<108>×108/84		10掘、10坑→		13

第2章 荒砥諏訪西遺跡の調査



- 1. 灰褐色砂質土 斑鉄の有る白色軽石粒を含む。
- 2. 黒色土 白色軽石粒を含む。
- 3. 褐色土 砂粒と白色軽石粒と砂壤土小ブロックを含む。縮まり無し。
- 4. 褐色土 3号溝の埋没土より砂壤土のブロックが大きい。
- 5. 黒色土 砂壤土の小ブロックと白色軽石粒を含む。
- 6. 褐色土 3号溝の埋没土より砂壤土のブロックが大きく、黒色。
- 7. 黒褐色土 多量の黄灰色土の小ブロックを含む。
- 8. 黒褐色土 白色軽石混じり。縮まり有り。
- 9. 黒色土 灰褐色小ブロックと白色軽石粒が斑状に堆積。
- 10. 黒褐色土 褐色土のブロックを含む。白色軽石粒を混入する。
- 11. 砂層
- 12. 褐色土 白色軽石混じり。縮まりが有り、粘質。
- 13. 3号溝埋没土

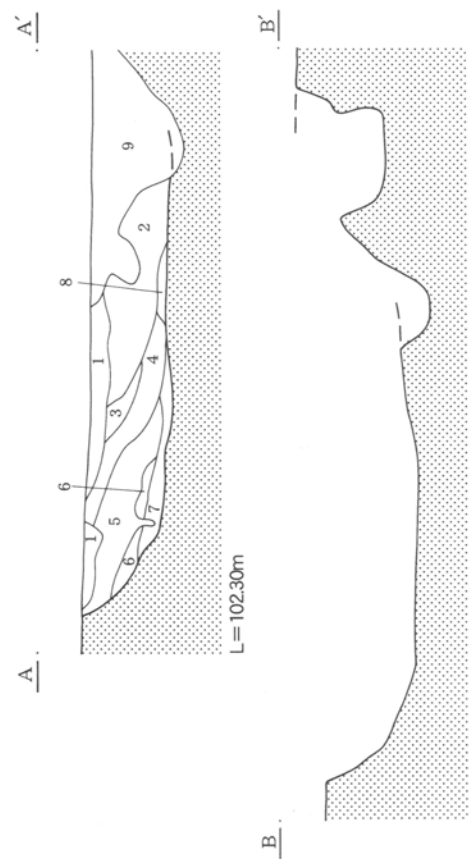
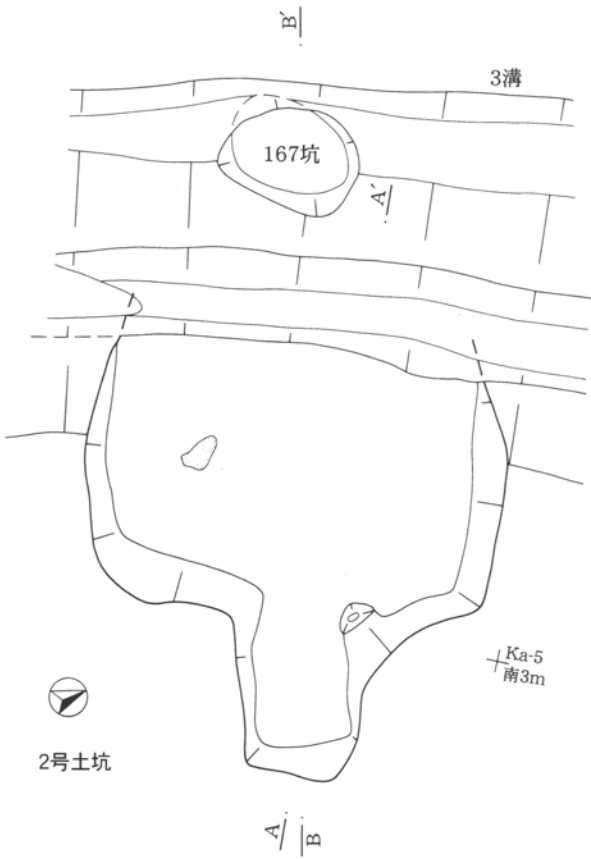
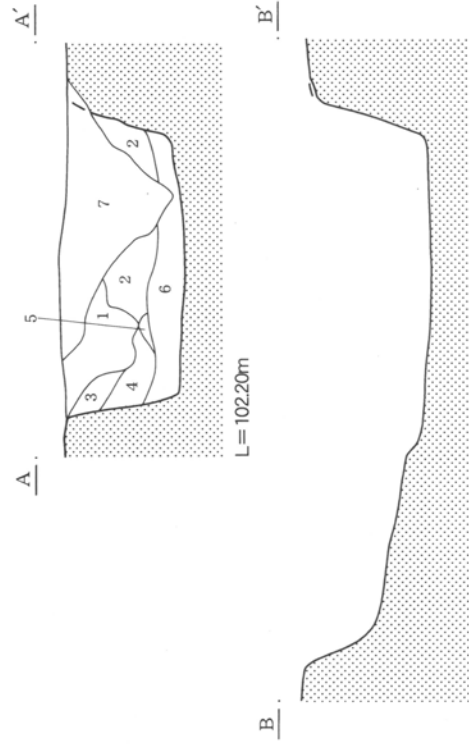
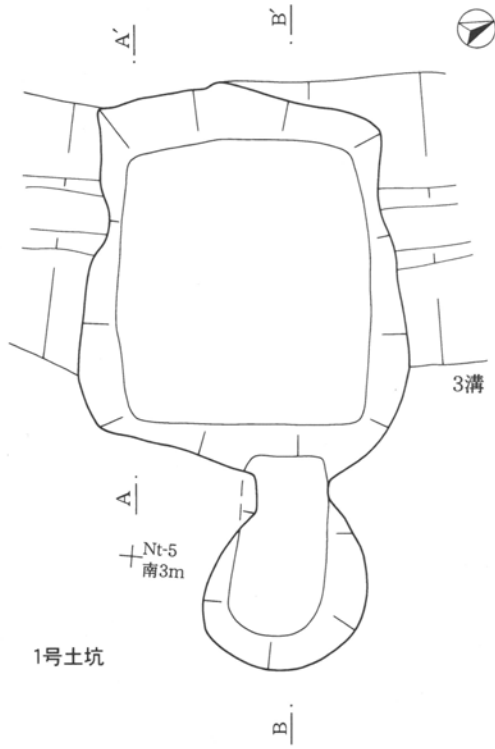


- 1. 暗褐色土 茶褐色土のブロックを含む。
- 2. 暗褐色土 やや灰色。
- 3. 暗褐色土 白色軽石を含む。黒色強い。
- 4. 暗褐色土 軽石と茶褐色土を含む。黒色強い。
- 5. 灰褐色土 砂壤土を多く含む。



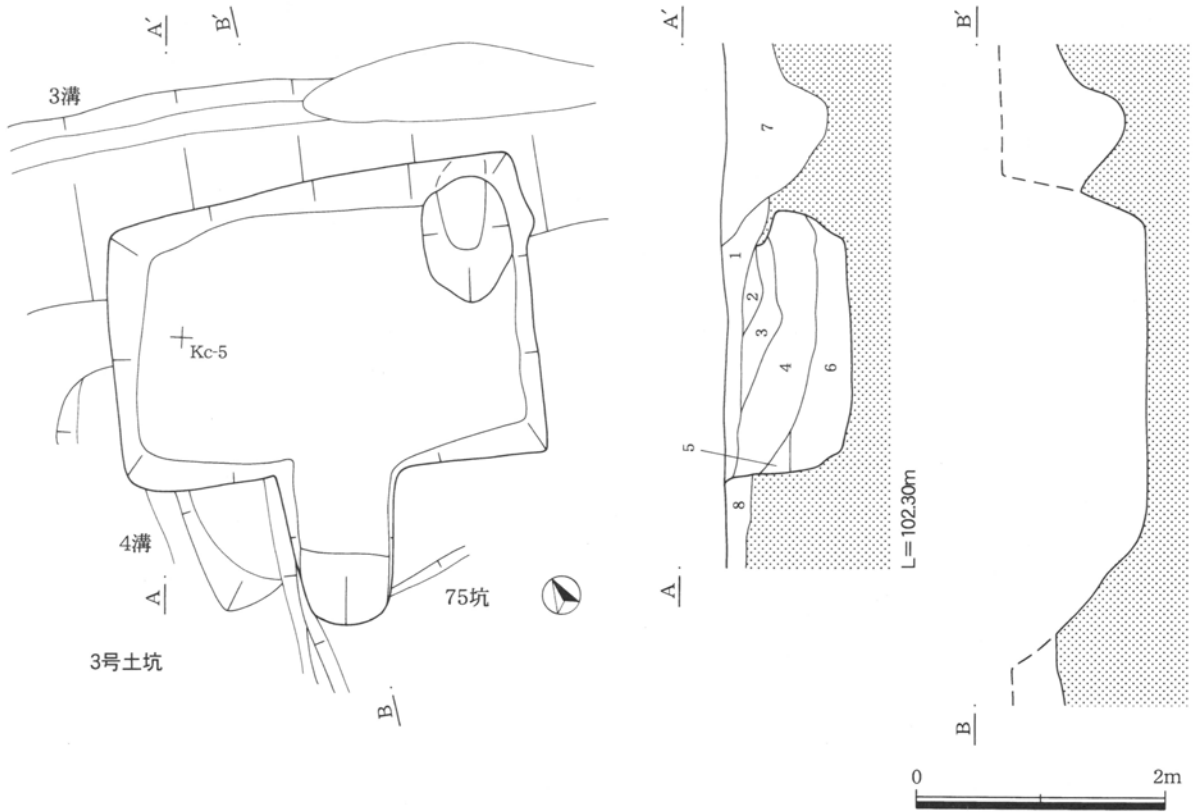
第56図 2区土坑(1)





第57図 2区土坑(2)

第2章 荒砥諏訪西遺跡の調査



1号土坑土層注記

1. 黒色土 As-Cと締まりの無い灰白褐色土の小ブロックを含む。
2. 黒褐色土 白色軽石粒を含む。締まり有り。
3. 黒褐色土 地山の灰白色砂ブロックを少し含む。白色軽石粒が混じる。
4. 黒褐色土 地山の灰白色砂ブロックを多く含む。白色軽石粒が混じる。
5. 黒褐色土 ブロック状に混入。
6. 灰白色砂質土 白色軽石粒と黒色土のブロックを含む。
7. 3号溝埋没土

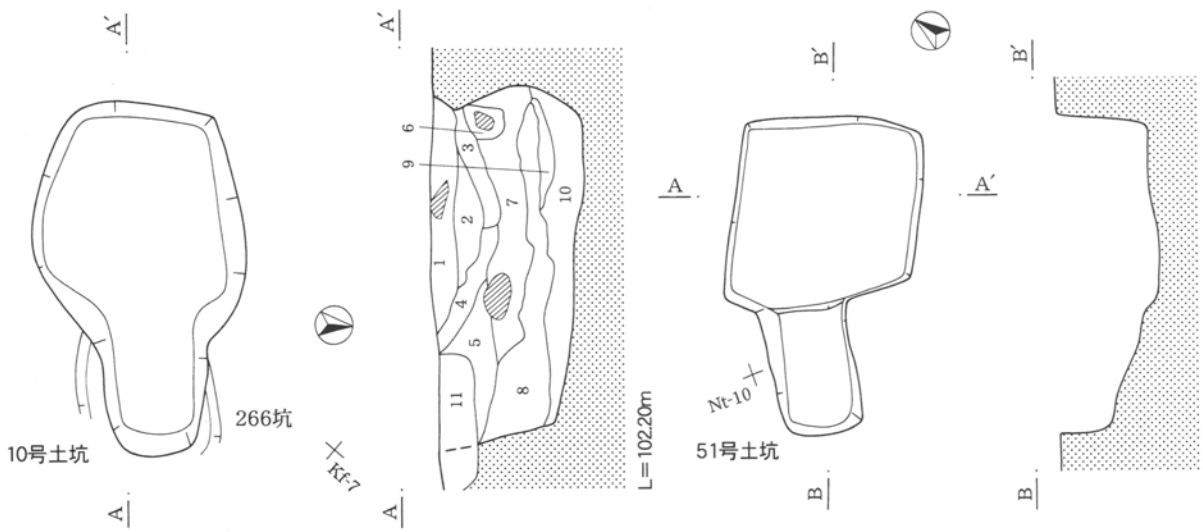
2号土坑土層注記

1. 灰褐色砂質土 鉄分凝集がみられる。
2. 黒色土 白色軽石粒を含む。
3. 茶褐色砂質土 白色軽石粒と砂壤土小ブロックを少量含む。
4. 黄色砂壤土ブロック、褐色粘土ブロック、灰色粘土ブロックの混土层
5. 黒褐色土 白色軽石粒を含み締まり有り。
6. 砂粒
7. 黒色土 白色軽石粒を含む。
8. 茶褐色砂質土
9. 3号溝埋没土

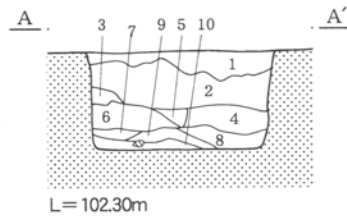
3号土坑土層注記

1. 茶褐色土 白色軽石粒を含む。締まり有り。
2. 褐色土 細かい白色軽石粒と、締まりの無い灰黄色土を含む。
3. 細かい白色軽石粒を含む灰褐色土と、締まりの無い灰黄色土の斑状堆積土
4. 褐色砂質土 白色軽石粒と地山の灰黄色砂質土粒を多量に含む。
5. 灰褐色土と灰黄色土の斑状堆積土
6. 黄色砂壤土ブロック、褐色粘土ブロック、灰色褐色土ブロックの斑状堆積土
7. 3号溝埋没土
8. 4号溝埋没土

第58図 2区土坑(3)



1. 灰褐色砂壤土
2. 暗褐色土 砂質。
3. 灰褐色土 4層に類似する。
4. 黄茶褐色土の小ブロックと1層の混土層
5. 灰褐色土 茶色味有り。
6. 灰褐色土
7. 暗褐色土 締め無し。白色軽石粒を少量含む。
8. 暗褐色土 やや灰色味有り。
9. 灰白色砂質土と暗褐色土との混土層
10. 灰白色土と暗褐色土との混土層 大ブロック。
11. 266号土坑埋没土

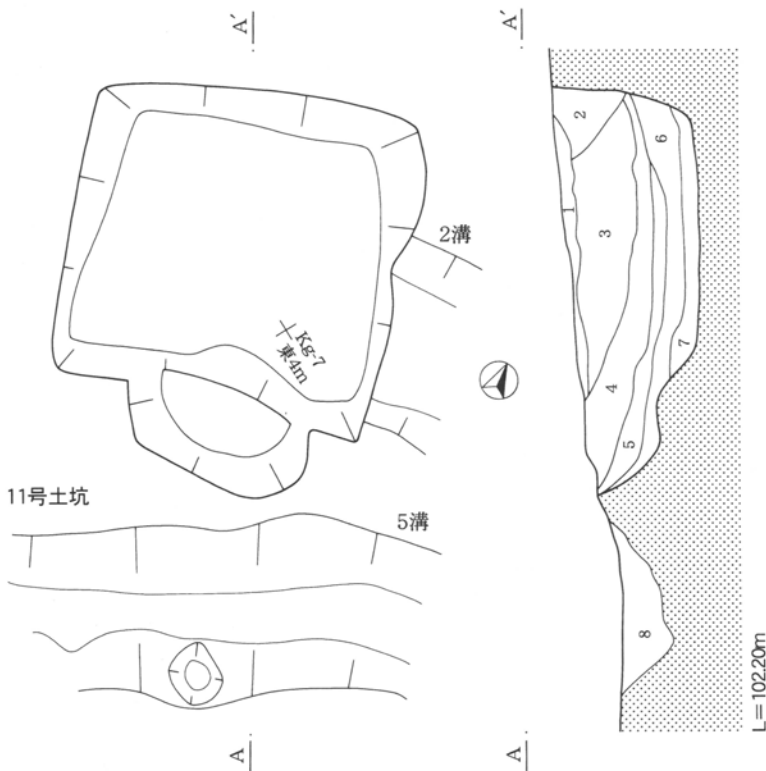


51号土坑土層注記

1. 灰褐色土 白色軽石を多く含む。やや鉄分が凝集する。
2. 暗褐色土 軽石をまばらに含む。
3. 灰褐色土 ブロック状に入り込む。
4. 暗灰褐色土 灰褐色土の小ブロックを含む。
5. 黒褐色土 軽石を含む。ブロック状に混入。
6. 暗褐色土 灰白色土の小ブロックを含む。
7. 暗灰褐色土 暗褐色土と灰褐色土の混土層。
8. 暗褐色土と灰褐色土の小ブロック同士の混土層
9. 暗褐色土 6層に類似。ブロックの混入が多くなる。
10. 灰褐色土 細砂質。

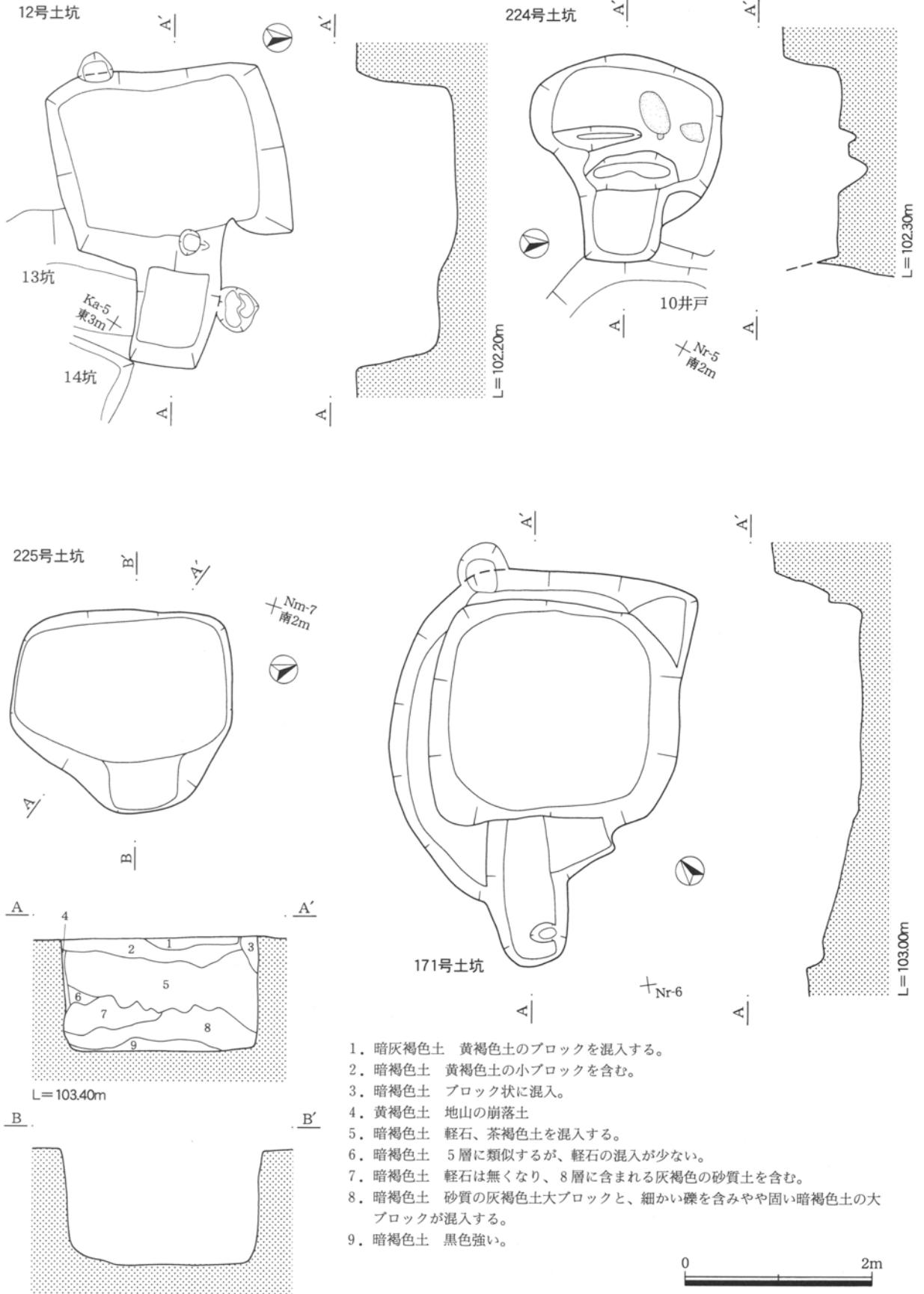
11号土坑土層注記

1. 暗褐色土 軽石を多く含む。黒色味有り。
2. 黒色土 砂質。
3. 灰褐色土 軽石を多く含み、砂質。
4. 茶褐色土と茶色土ブロックとの混土層
5. 暗褐色土 締め有り。
6. 暗褐色土 5層に類似。茶色強い。
7. 黒褐色土 小ブロック。締め有り。
8. 5号溝埋没土

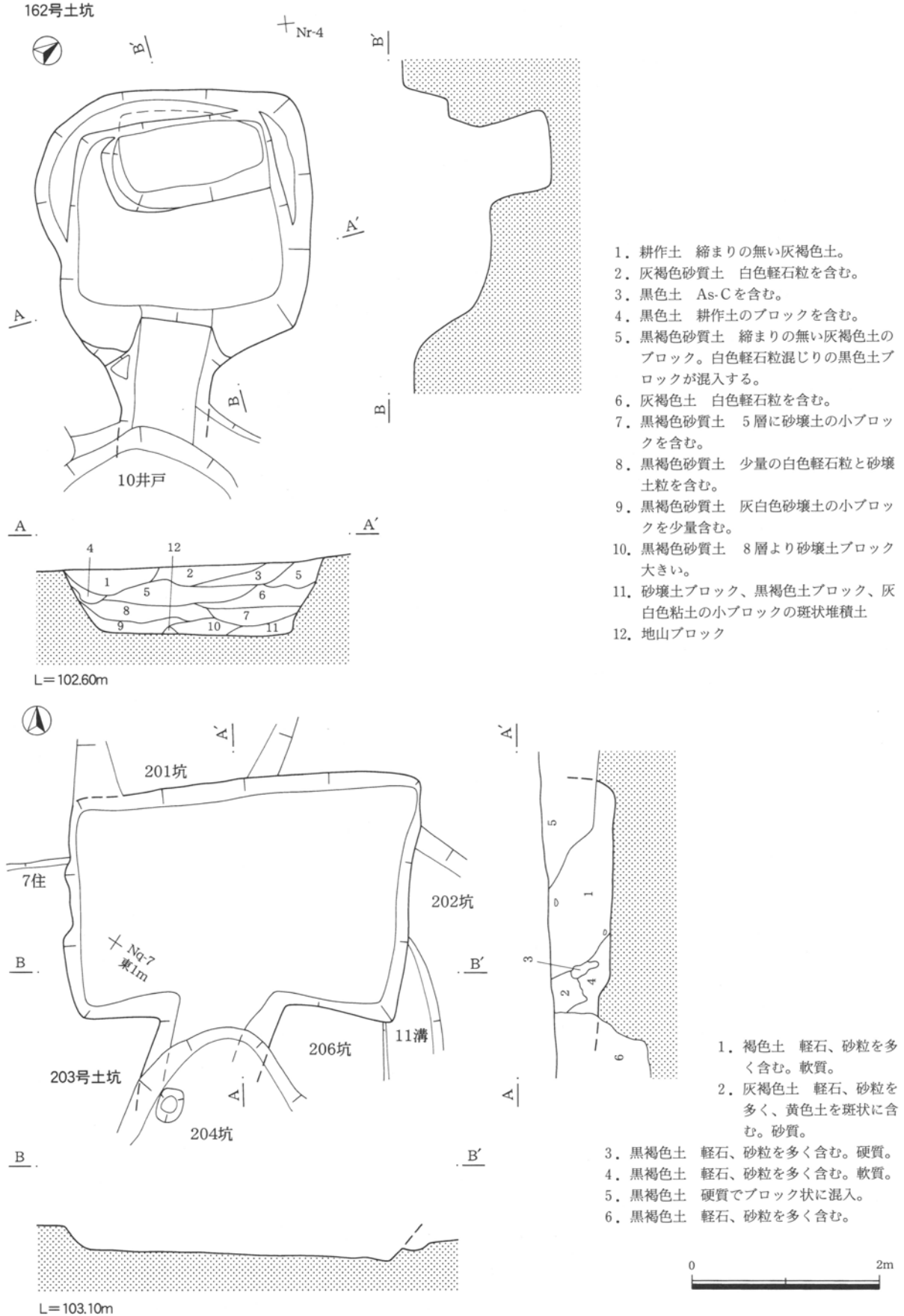


第59図 2区土坑(4)

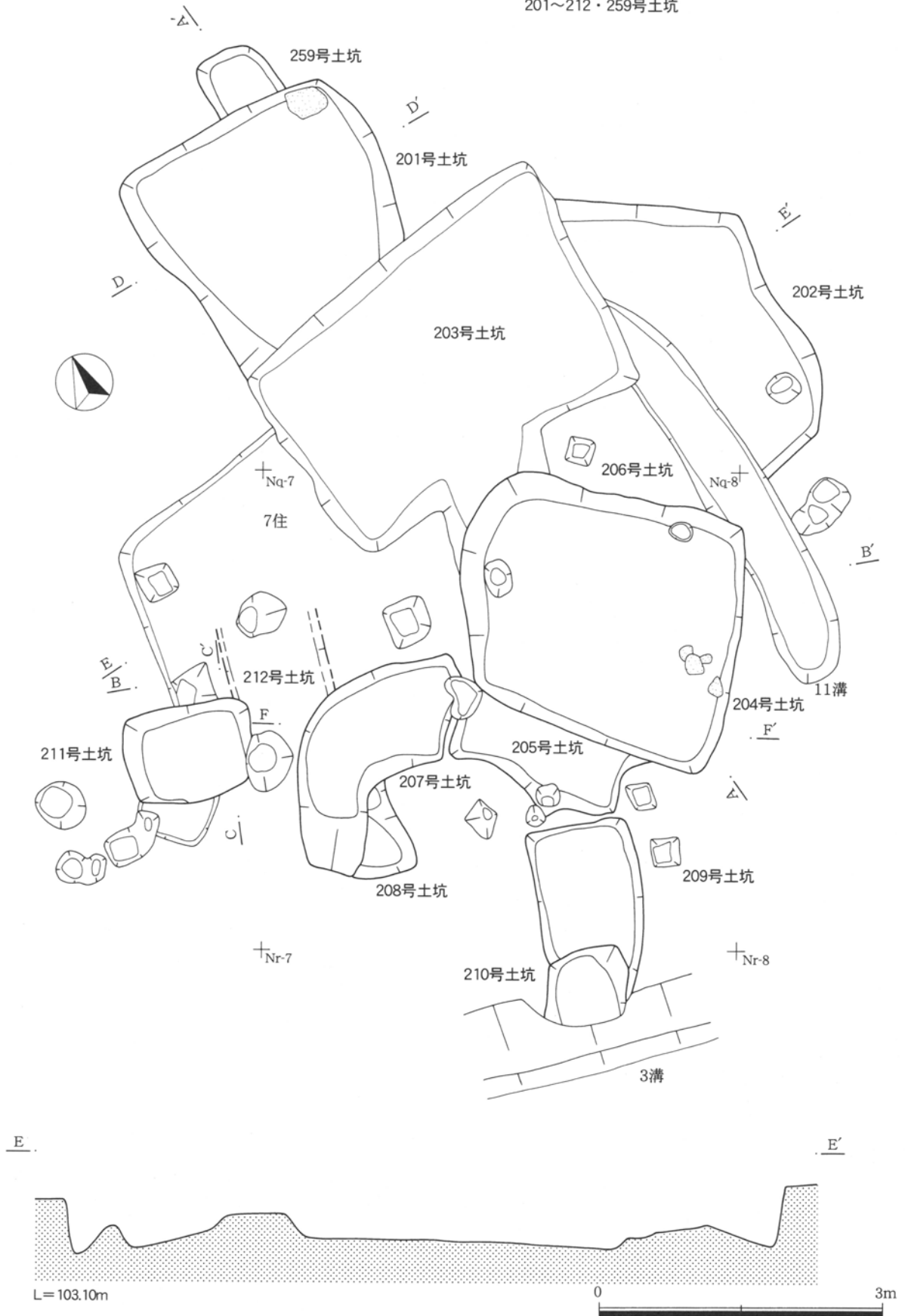
第2章 荒砥諏訪西遺跡の調査



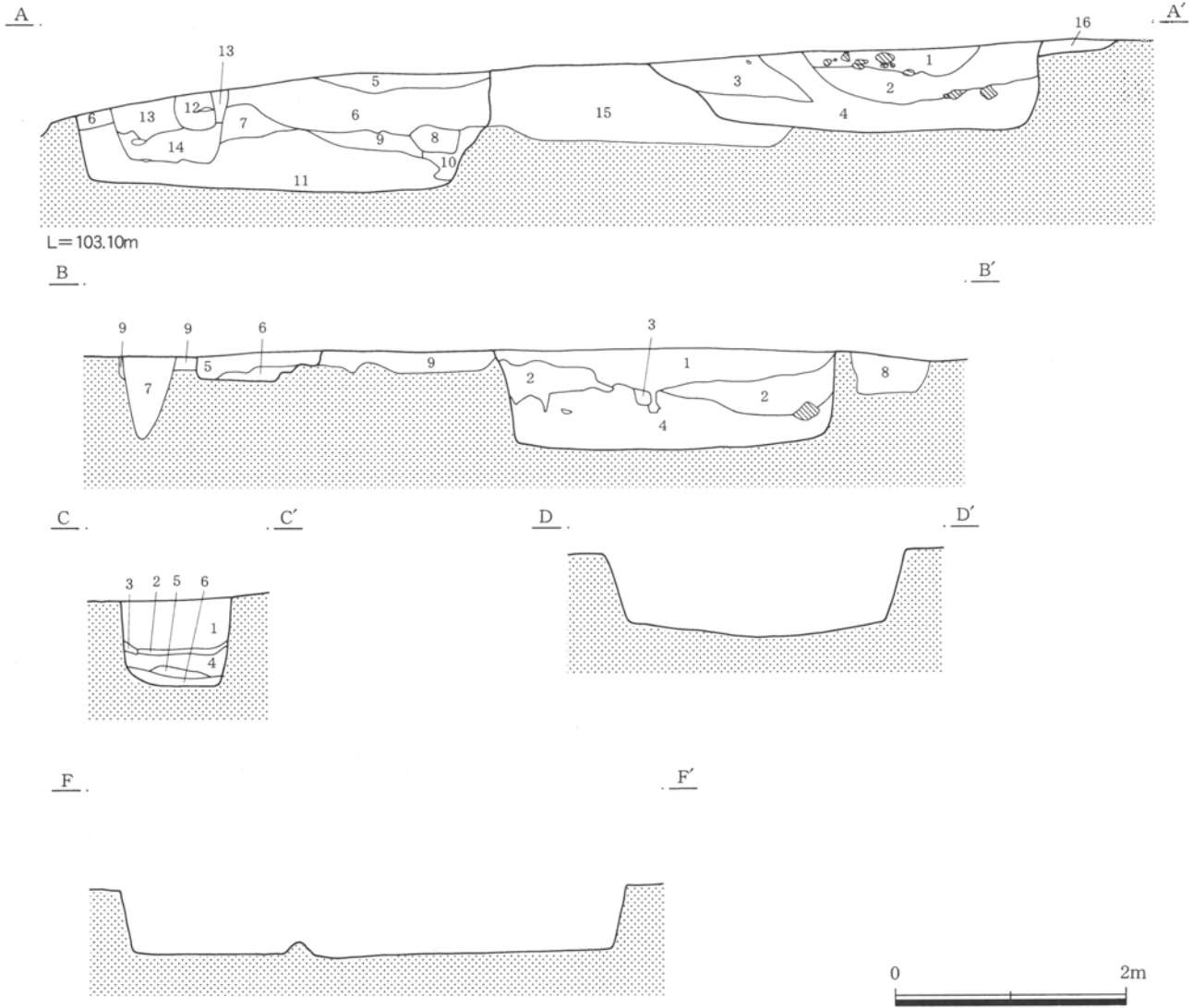
第60図 2区土坑(5)



第61図 2区土坑(6)



第62図 2区土坑(7)



A-A'土層注記

1. 灰褐色土 軽石、砂粒を多く、黄色土を斑状に含む。砂質。201号土坑埋没土
2. 黄褐色土 軽石、砂粒を少量含む。軟質。201号土坑埋没土
3. 黄褐色土 軽石、砂粒を多く含む。砂質。201号土坑埋没土
4. 黒褐色土 軽石、砂粒を多く含む。軟質。201号土坑埋没土
5. 黒褐色土 204号土坑埋没土
6. 灰褐色土 軽石、砂粒、As-Bを多量に含む。204号土坑埋没土
7. 褐色土 軽石、砂粒、As-Bを多量に含む。部分的に黄灰色土ブロックを含む。204号土坑埋没土
8. 黒褐色土 軽石、砂粒、赤色粒子を少量含む。軟質。204号土坑埋没土
9. 黒褐色土 8層と同質だが黒色が強い。204号土坑埋没土
10. 黄褐色土 軟質。204号土坑埋没土
11. 黒褐色土 As-C、Hr-FP、赤色粒子を多く含む。204号土坑埋没土
12. 灰褐色土 As-B、砂粒を多量に含む。205号土坑埋没土か
13. 灰褐色土 As-B、砂粒を多量に含む。205号土坑埋没土か
14. 褐色土 部分的に黄灰色土ブロックを含む。205号土坑埋没土か
15. 203号土坑埋没土
16. 259号土坑埋没土

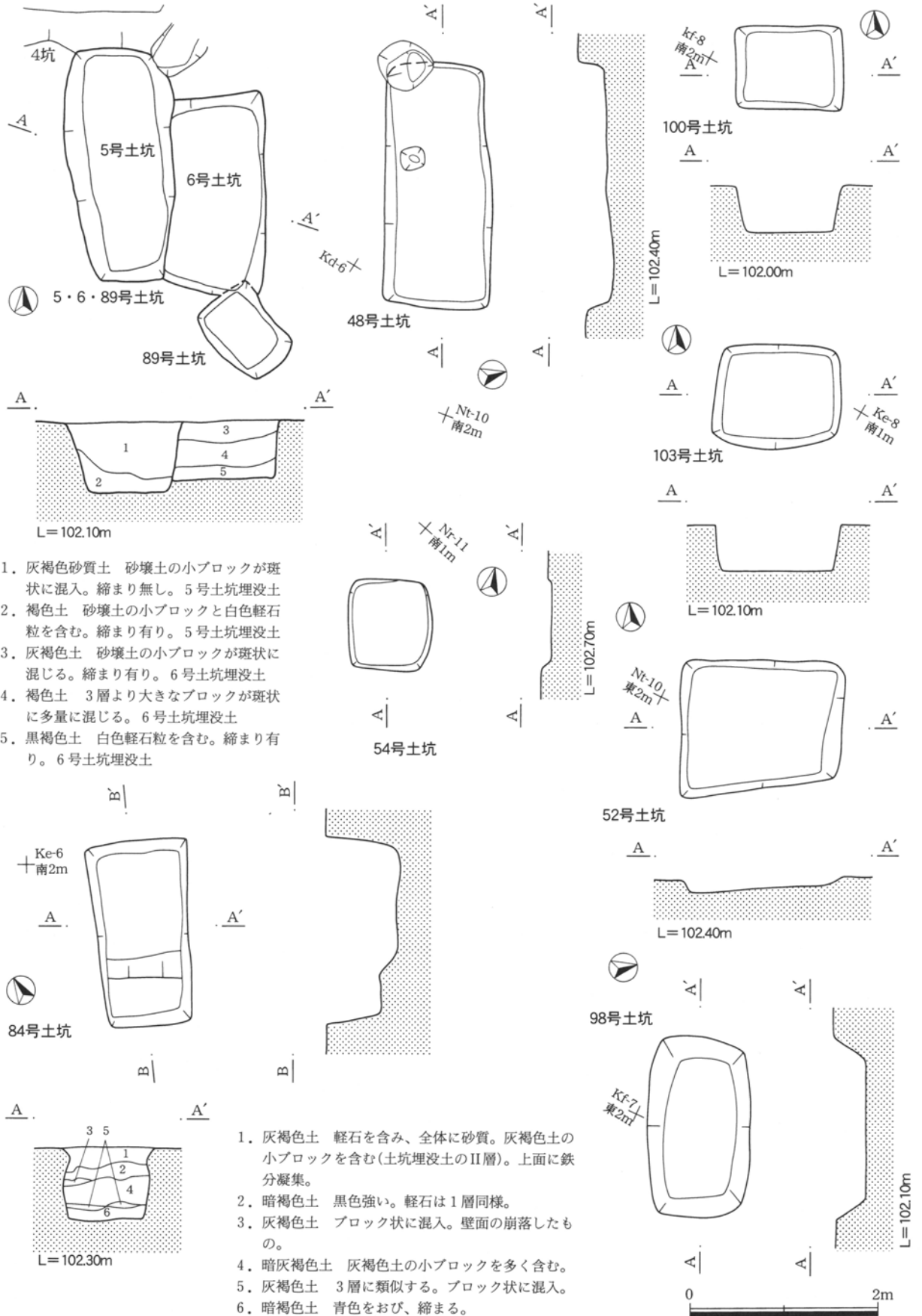
B-B'土層注記

1. 灰褐色土 軽石、砂粒、As-Bを多量に含む。204号土坑埋没土
2. 褐色土 軽石、砂粒、As-Bを多量に含む。部分的に黄灰色土ブロックを含む。204号土坑埋没土
3. As-B ブロック状に混入。204号土坑埋没土
4. 黒褐色土 As-C、Hr-FP、赤色粒子を多く含む。204号土坑埋没土
5. 灰褐色土 9層と同質だが、黒色が強い。212号土坑埋没土
6. 灰褐色土 212号土坑埋没土
7. 黒褐色土 小穴内。黄灰色土を斑状に含む。
8. 11号溝埋没土
9. 灰褐色土 As-Cを少量、砂粒を多く含む。7号住居埋没土

C-C'土層注記

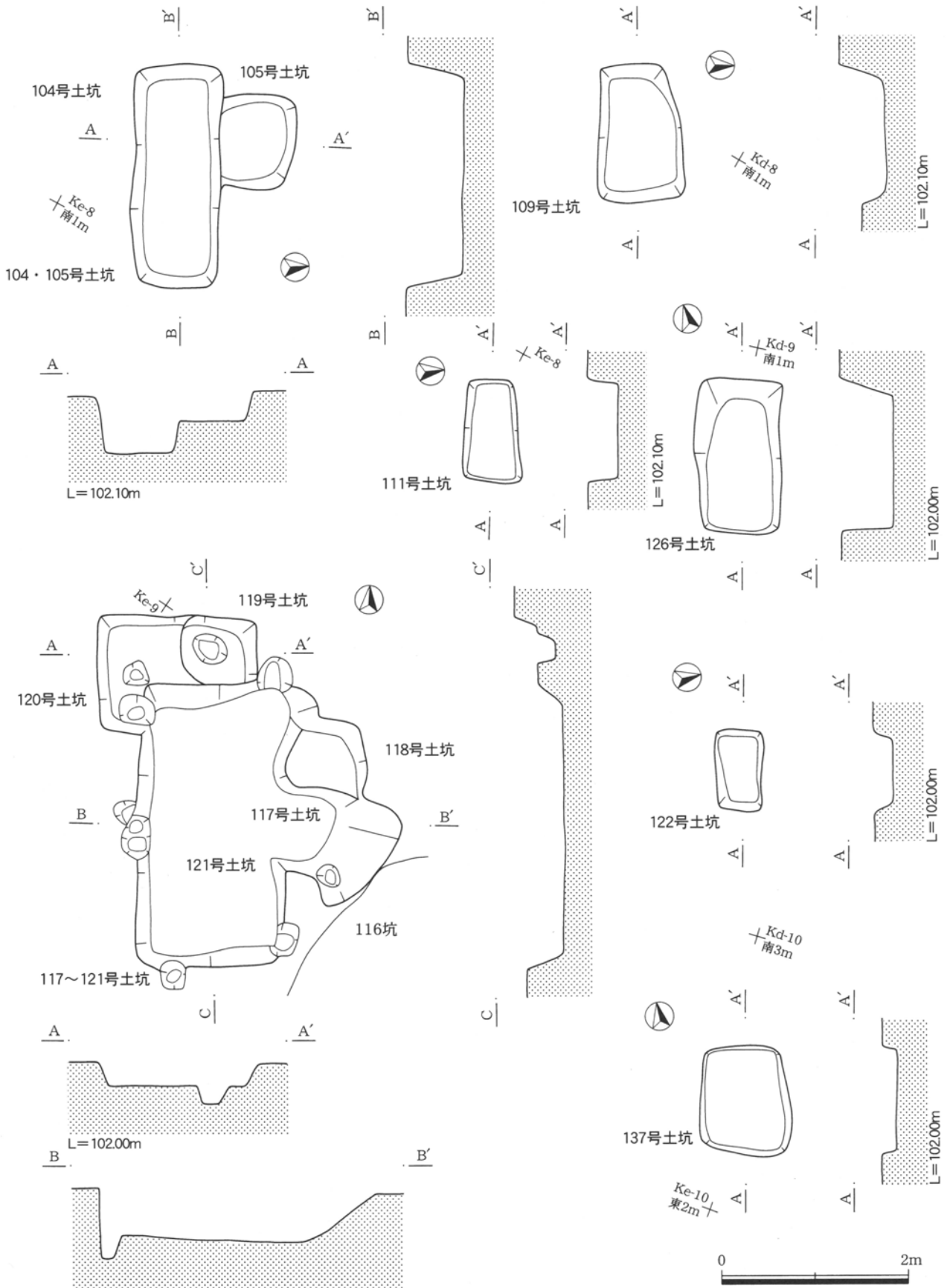
1. 暗褐色土 白色軽石をまばらに含む。
2. 白色混入物 灰か。薄い層をなす。
3. 灰褐色砂質土 ブロック。
4. 暗褐色土 1層に似るが、軽石が少なくなる。
5. 暗褐色土 6層の灰白色砂質土が含まれる。
6. 灰白色砂質土 暗褐色土を混入する。

第63図 2区土坑(8)



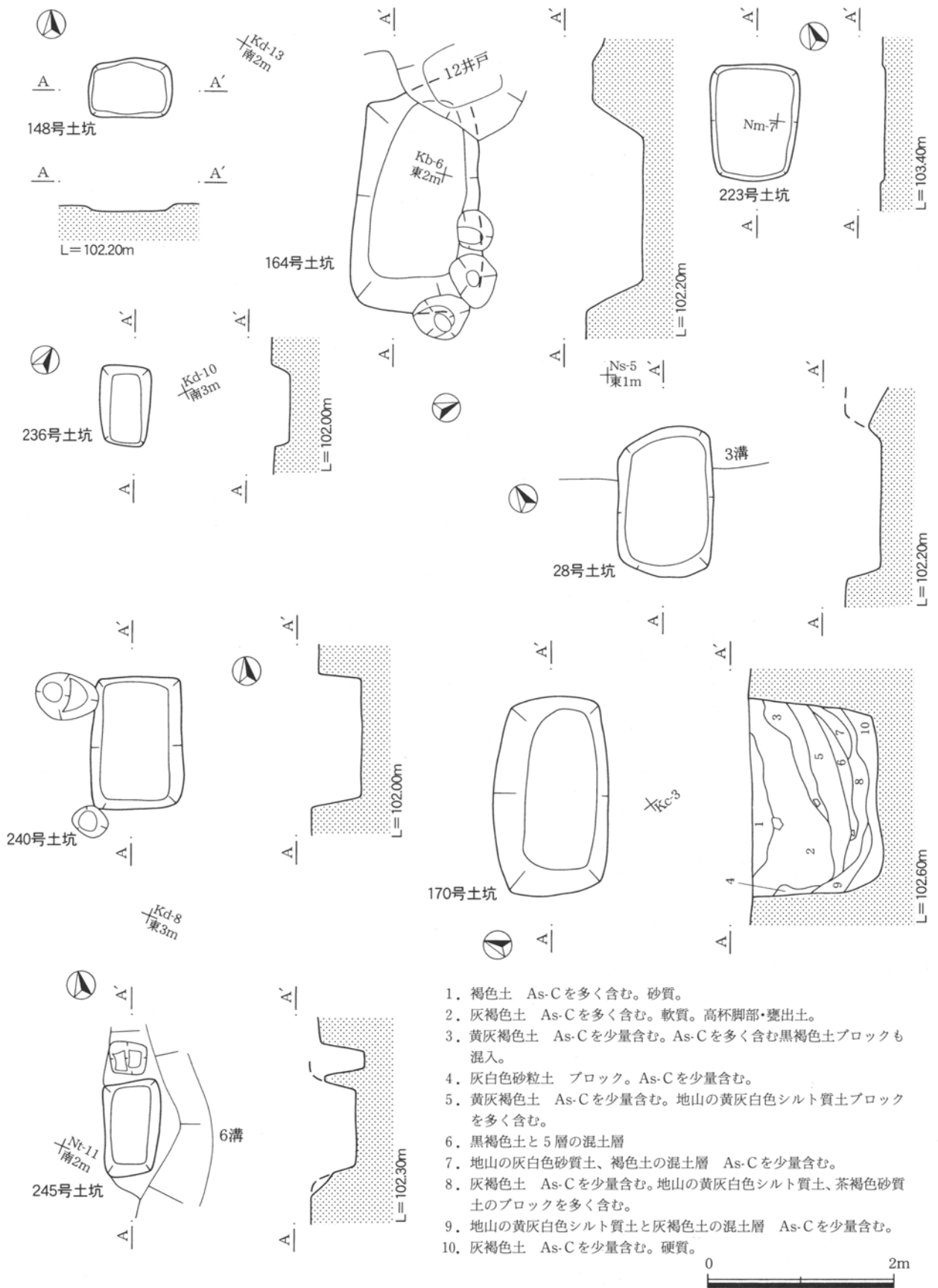
第64図 2区土坑(9)



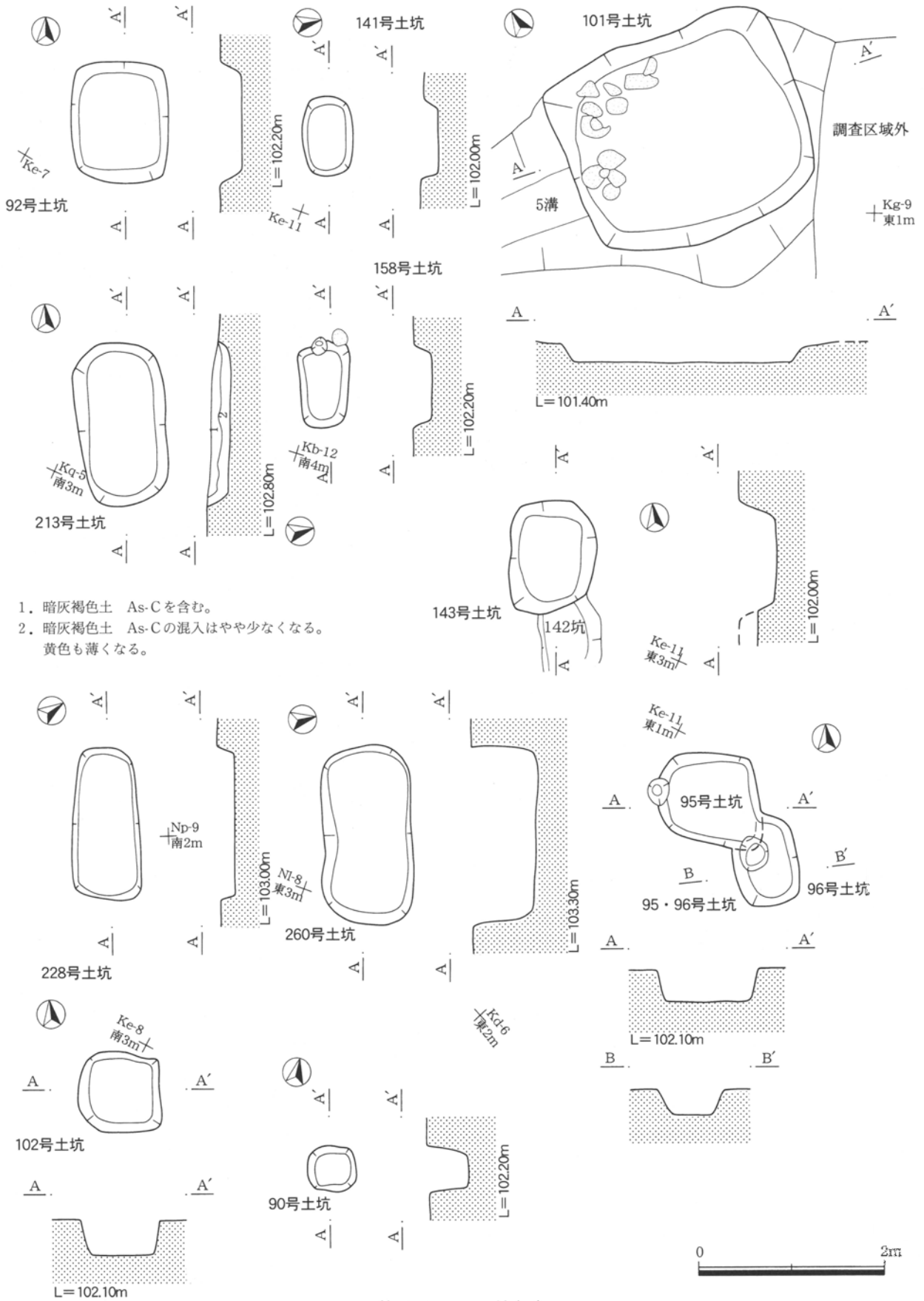


第65図 2区土坑(10)

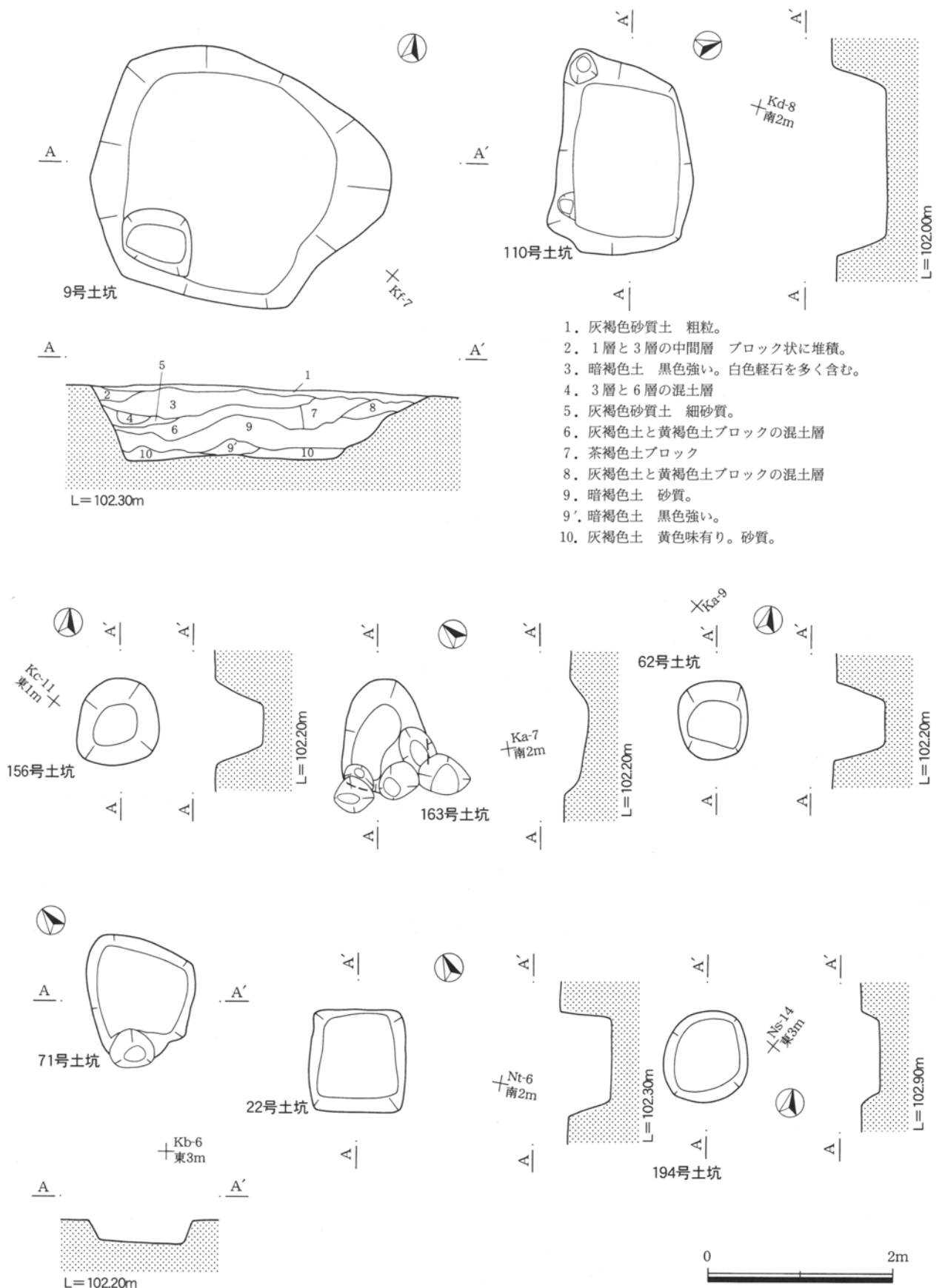
第2章 荒砥諏訪西遺跡の調査



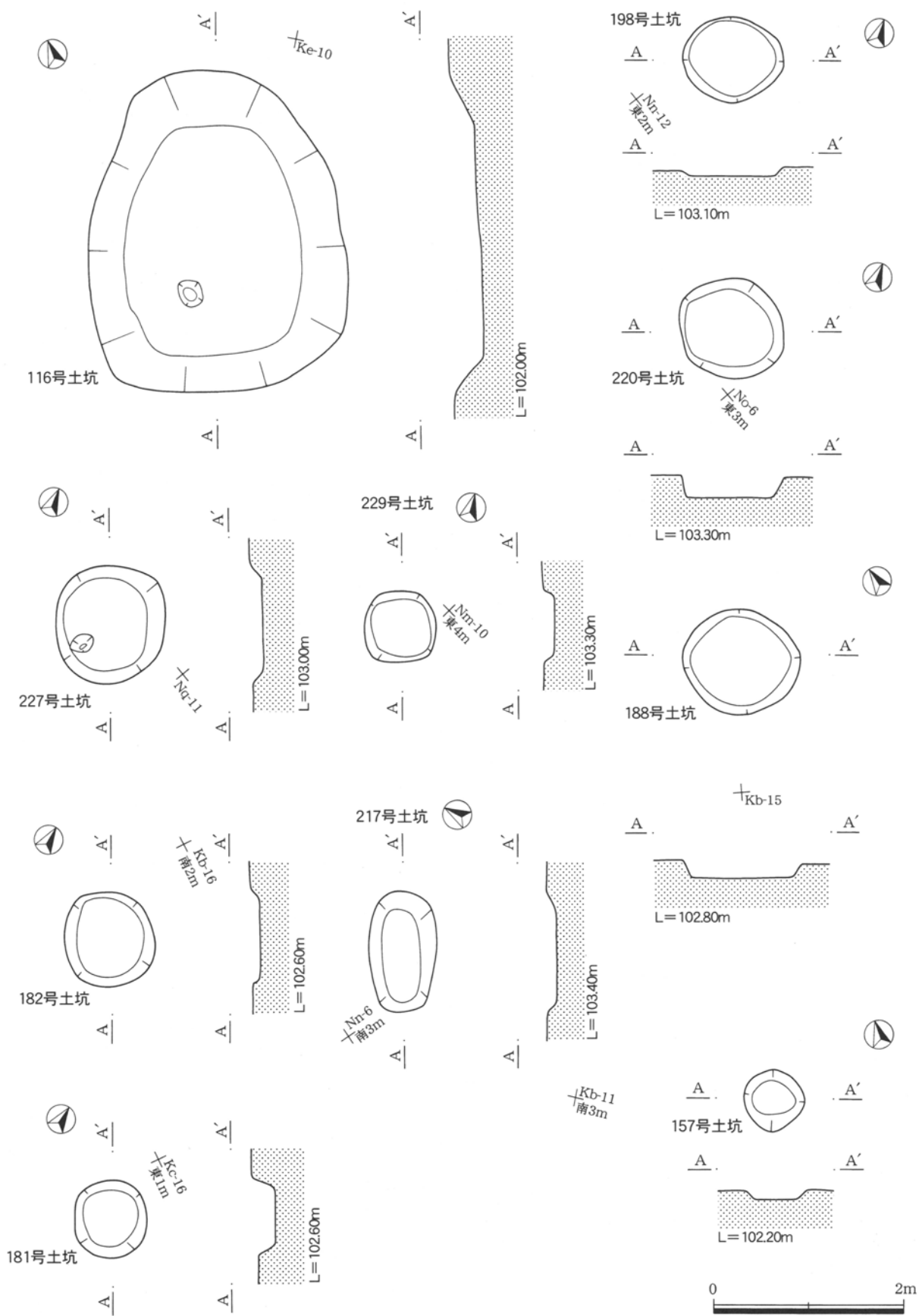
第66図 2区土坑(11)



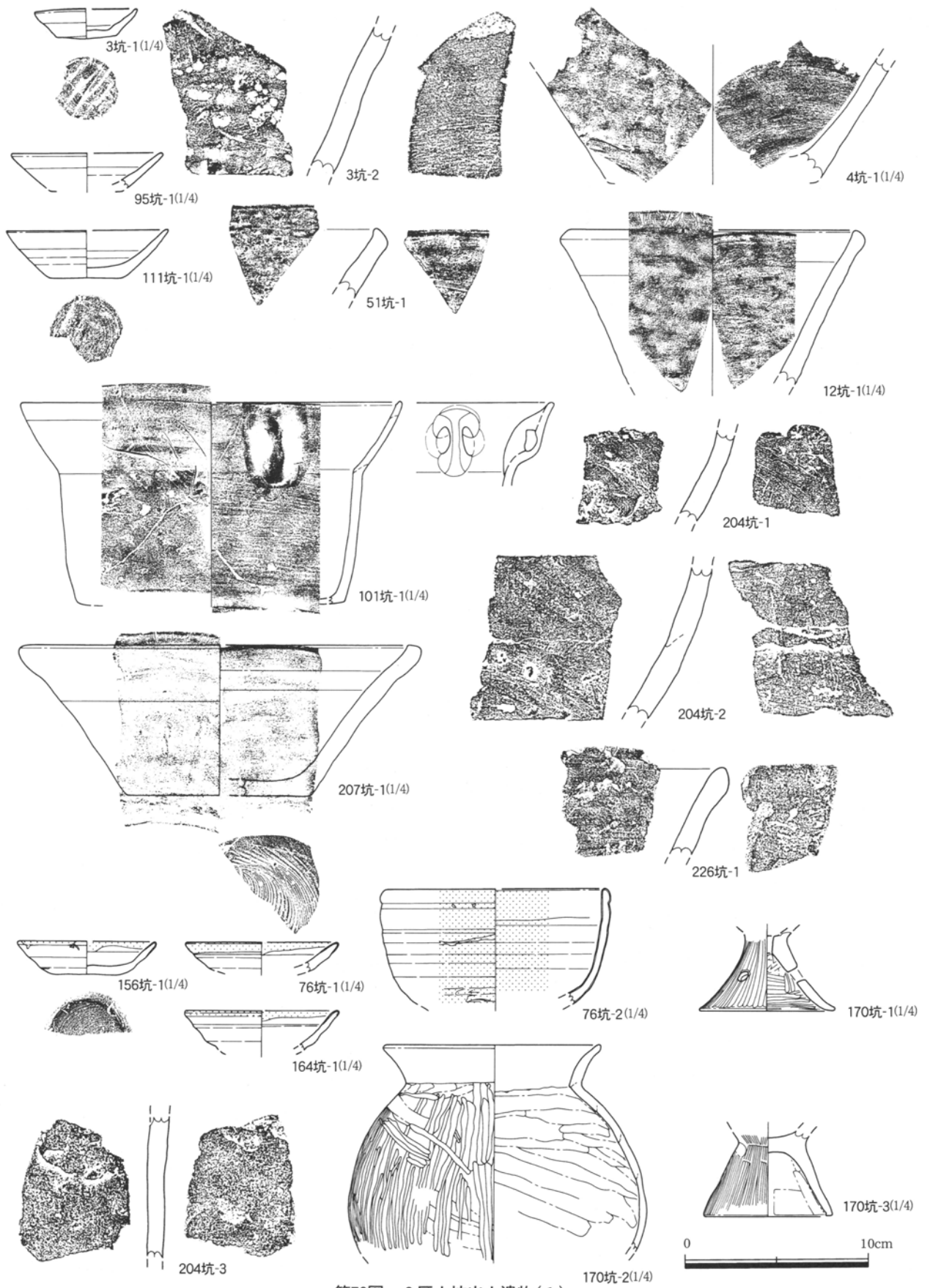
第67図 2区土坑(12)



第68図 2区土坑(13)

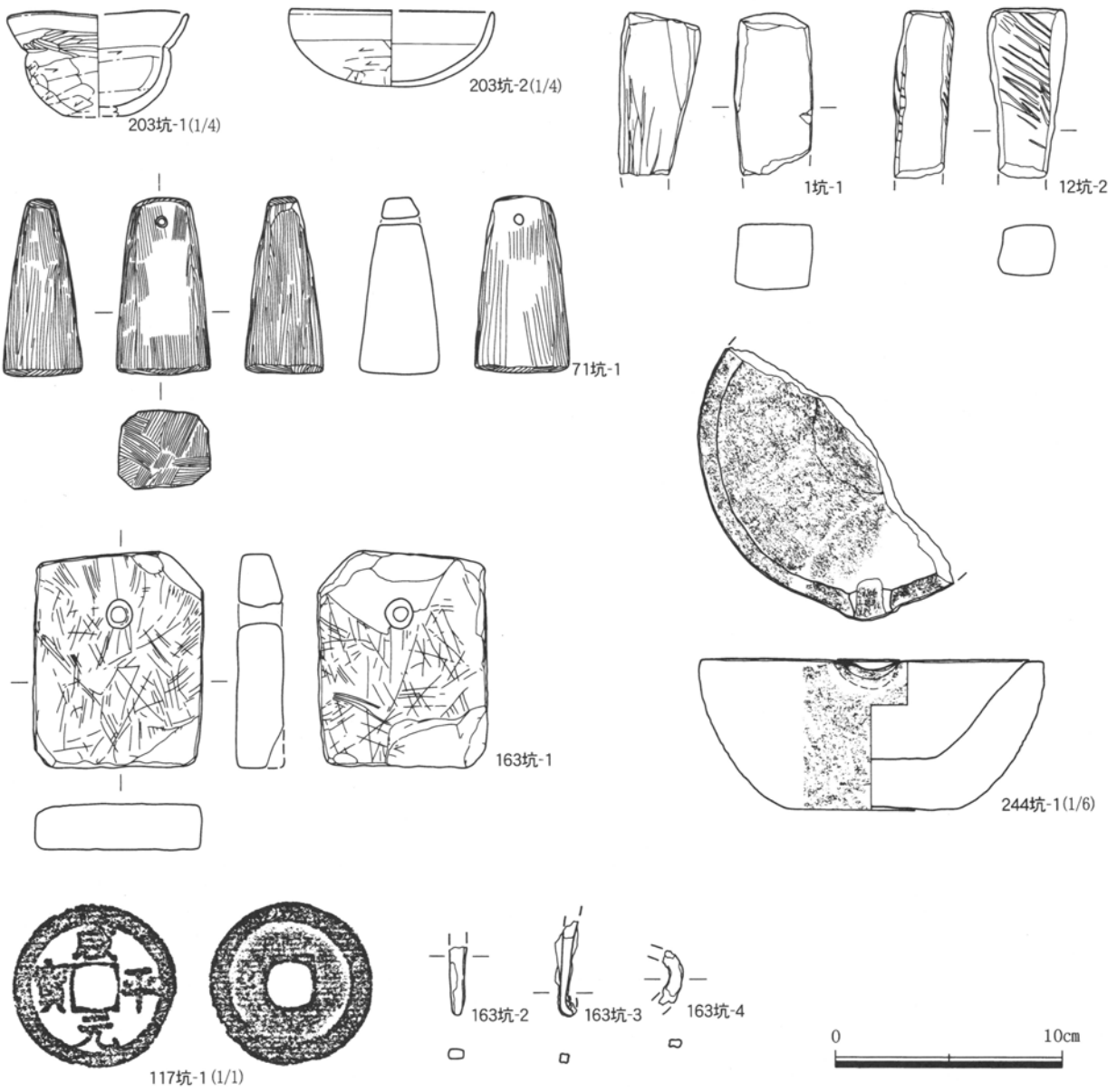


第69図 2区土坑(14)



第70図 2区土坑出土遺物(1)

第4節 中・近世以降の遺構と遺物



第71図 2区土坑出土遺物(2)

## 溝

2区と3区の調査区は、調査時に大溝と呼称した東西溝を境に便宜的に調査区を区分したものであるが、2区ではこの大溝を含め26条の溝を検出、調査した。調査時の遺構の認定は大溝と26号溝までであり、27号溝以降の10条は、整理作業時に補足、認定したものである。17号から21号溝は大溝、あるいは1号溝の一部と考えられるが両者に識別するための根拠が認められず番号の追加を行った。

大溝は、水路で、その流路を漸次、南側に移動させていたことが埋没土の観察から確認されている。部分的な検出であるため、調査区内では取水点、送水点については未確認であるが、周囲の地形の状況から考えると荒砥諏訪遺跡の位置する洪積台地の縁辺をめぐる狭小な沖積地を流下していた小河川から取水、あるいは台地縁辺からの湧水（溜井）導水が行われたと考えられ、堰等の灌漑施設の存在も想定する必要がある。

1号溝は、大溝の南縁に重複する溝でNg-8グリッドでほぼ直角に屈曲、南北方向の溝となり、Ke-14グリッドで立ち上がっている。南端の状況から流水は考えられないものの埋没土の状況からある時期滞水があった可能性も考えられる。この1号溝に対し、3号溝は、カギの手状に接し、南側の東西溝の2号溝とともに方形の区画が形づくられている。3号溝の西辺南端と2号溝の西端との間は約11.5mの間隔で開放されているが、この西側にこれを塞ぐよう5号溝が南北方向に延びている。1～3号によって方形に区画される部分の範囲は、内法南北約37.5m、東西約38mを測るものである。内部は、2区の他地点に比較して土坑、あるいは小穴が極めて集中する状況にある。4号溝・7号溝は、前後関係にある溝であるが区画内を細分する状況が認められる。

なお、2号溝・3号溝北辺の走向は、大溝とほぼ一致している点を記しておく。

10号溝は、1号溝とほぼ走向間隔を一致しており、これと関連した区画溝と考えられる。

その他、流水の確認あるいはその可能性のある溝は10号・14号である。他の各溝は、土地区画あるいは耕作に係わって生じた遺構と考えられる。

2区1号溝（付図1・第72・80図 P L 17・33）

位置 Ne-15～Ke-14

重複 1号住居、大溝、3号溝より後出する。9・14・15号溝、5号井戸との前後関係は不明である。17号溝とは走向をほぼ等しくするが同一遺構との断定は困難であった。

形状 Ne-15グリッドからNg-8グリッドまでは、N-73°-Wの方向に約34.9mの間、ほぼ直線的に延びている。東端での検出規模は、幅0.29mであるが徐々にその幅を広げている。Ng-8グリッドで方向をN-14°-Eの方向に変換、ここから約43.60m直線的に掘削されている。この間の上幅は、2.54～3.35m、下幅0.25～0.55mと大きな変化はない。Np-11グリッドで東側に約3.08m程直角に屈曲、南方向15.60mのNs-12グリッドで先と同様の長さで今度は西側に屈曲している。これ以南の長さは、約31.70mで、Ke-14グリッド内に南端があり、ここで立ち上がっている。

検出長はのべで127.47mを測る。断面形は、上方に向かって大きく開く逆台形でA-A'セクションで顕著なように底面から0.36mほど弱い稜をもっている。規模は、A-A'セクションで上幅2.60m、下幅0.42m、残存壁高1.02mを測った。底面は、北から南に向かって徐々に低くなる。北東端での標高は103.06m前後、南端での標高は101.10mである。

方位 N-73°-W、N-14°-E

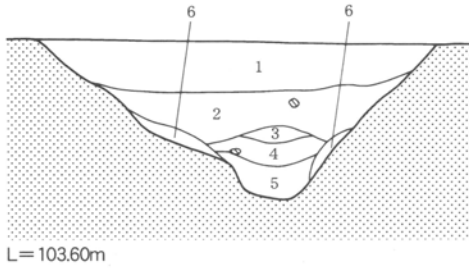
埋没土 上層に灰褐色土が堆積、以下は土層断面の記録地点により異なるが、中層から下層にかけて砂粒の堆積が多く観察されている。ただし、南端が立ち上がっていることを考えると砂粒の堆積を流水によるとするより滞水の結果と考えたい。3号溝との関係は、本溝が後出と思われるが、上層の土層の堆積からは、3号溝が完全に埋没した後に本溝が掘削されたものではないことが理解できる。

遺物 土師質土器皿(1～5)、陶器甕(6)、五輪塔



A 1号溝

A'

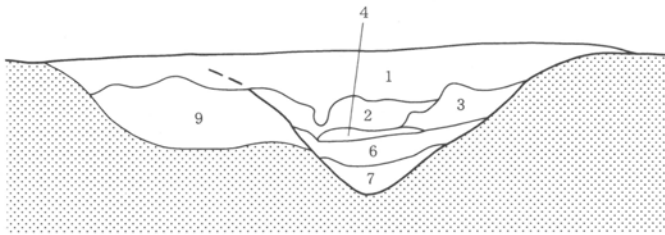


1号溝A-A'土層注記

1. 灰褐色砂質土 細かい白色軽石粒、砂粒を多量に含む。縮まり有り。
2. 黒褐色土 Hr-FP、As-Cと白色軽石粒を含む。
3. 砂と2層の互層
4. 砂と軽石粒を含んだ黒色土との互層
5. 砂の互層
6. 褐色土 砂壤土ブロックを含む。

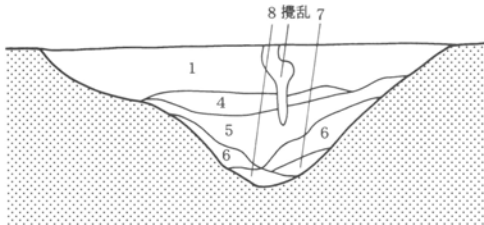
B

B'



C

C'



D

D'

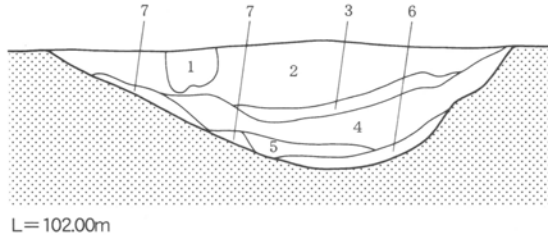


1号溝B-B'・C-C'土層注記

1. 灰褐色土 縮まり有り。細かい白色軽石粒、砂粒を含む。鉄分凝集も見られる。
2. 灰褐色粘質土 軽石粒をほとんど含まない。
3. 灰褐色粘質土 白色軽石粒を含む。
4. 砂層 ラミナ状に堆積。
5. 黒褐色粘質土 白色軽石粒、砂壤土粒を含む。
6. 灰褐色砂質土 白色軽石粒、砂壤土粒を含む。
7. 5層と6層の互層
8. 灰褐色粘質土 白色軽石粒を少量含む。
9. 3号溝埋没土

A 2号溝

A'



2号溝土層注記

1. 耕作土
2. 灰褐色土 鉄分凝集有り。白色軽石粒を多量に含む。
3. 灰色土 白色軽石粒を含む。やや粘質。
4. 灰褐色土 白色軽石粒、砂壤土粒を含む。
5. 灰色粘土
6. 灰褐色土 細かい白色軽石粒を含む。縮まり有り。
7. 褐色土 地山の砂壤土小ブロックを含む。



第72図 2区溝(1)

## 第2章 荒砥諏訪西遺跡の調査

(9・10)、石鉢(11・12)、砥石(7)、不明石製品(8)を出土している。(観P215・216)

**所見** 出土遺物の特徴から中世、14世紀後半前後の掘削と考えられる。

**2区2号溝** (付図1・第72・73・81図 P L 18・31・33)

**位置** Kg-7~Ke-13

**重複** 6号溝、11号井戸、11・233号土坑と重複する。

**形状** 東西方向の溝で、長さ33.47mを測る。東側半分は直線的に延びるが、西側は、5号溝との重複をさけるように北側に彎曲する。東端は、1号溝手前で立ち上がっている。収束する直前で北壁は6号溝に接している。西端は11号土坑と重複しており、その有様は不明である。東端から西側に15.60mの地点では、南側に若干広がり、底面が最大幅となっている。断面形は、上方に大きく開く逆台形状を呈しており、東側半分では底面から20~30cm上位に稜をなしている。底面は、平坦面をなしている。規模は、上幅1.51~2.68m、下幅0.58~1.22mを測る。残存深度は、1.18mを測る。

**方位** N-73°-W

**埋没土** 上層から中層に灰褐色土が、下層に黒褐色土が堆積する。

**遺物** 軟質陶器内耳鍋(1~6)、陶器常滑壺(7)、陶器徳利(8)、石製品石鉢(9)・石器磨石(10)を出土している。(観P216・217)

**所見** 出土遺物の特徴から14世紀後半から15世紀代の掘削と考えられる。

**2区3号溝** (付図1・第73・81図 P L 18・31)

**位置** Nq-11~Nr-4~Ke-6

**重複** 1・6号溝、1・3・13号井戸、1~4・28・88・167・210・224・245・250~252・254・258号土坑と重複する。

**形状** 長さ70.53mを検出した。東端は、1号溝と接する。ここから西方に、Ns-4グリッドにいたる間、約39.10mは、N-72°-Wの方向、ほぼ直線的に延びる。断面形は、上方に向かって大きく外傾する逆台形を呈している。上幅は1.50~2.95m、下幅は0.

34~0.85m、残存深度は0.60mを測る。底面は、東端から西側に向かって徐々に低くなり、中間以西は大きな変化はなくなる。Ns-4グリッドで大きく屈曲、南方向に走向をとる。南端までは長さ39.68m、西方向に弧状に張り出している。この部分では1~4号土坑と重複するが、いずれよりも後出である。上幅1.78~3.13m、下幅0.10~0.40m、残存深度0.70mを測る。断面形は、東西方向と同様である。底面は、南方向に若干低くなるがほぼ一定である。南端は立ち上がっている。

**方位** N-72°-W、N-26°-E

**埋没土** 上半には灰褐色の砂質土が堆積する。A-A'セクションでは下層に砂粒の堆積が観察されている。

**遺物** 土師質土器皿(1)、軟質陶器片口鉢(4・5)、陶器灰釉皿(2)・陶器常滑甕(3)が出土している。(観P217)

**所見** 出土遺物の特徴から中世以降の掘削と考えられる。

**2区4号溝** (付図1・第73・74・82図 P L 19)

**位置** Kc-5~Kc-8

**重複** 7号溝によって切られている。1・5・7・13号掘立柱建物、3・75・76・77・249号の各土坑と重複している。

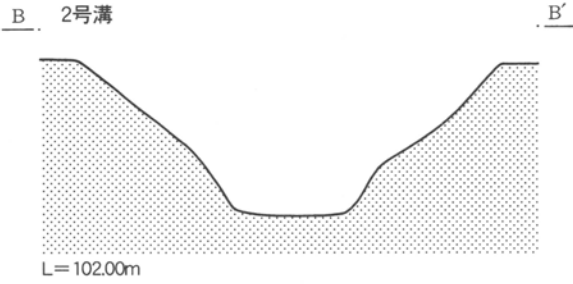
**形状** 走向は、2箇所屈曲、クランク状を呈している。総ての長さは27.64mとなる。西端は、3号土坑と重複するがここで立ち上がり、その西側を南北方向に延びる3号溝とは0.60mの間隔を保っている。ここからKb-6グリッドの屈曲点までは長さ0.76mである。ここで方向を南北に変え0.51m南方向に延びた後、再度、屈曲、東方向に約11.85mの長さが確認されている。東端も立ち上がっている。規模は、上幅1.60~1.78m、下幅0.45~1.12m、残存壁高0.47mを測る。断面形は逆台形状を呈する。

**方位** N-78°-W、N-1°-W

**埋没土** 砂壤土質の灰褐色土、あるいは暗褐色土が堆積している。

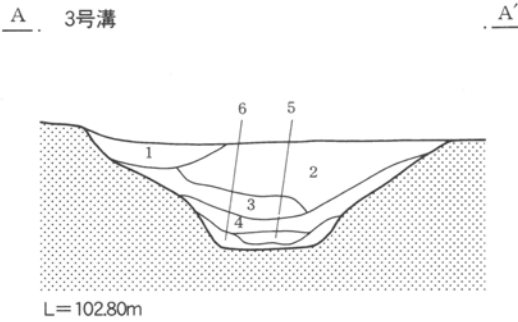
**遺物** 軟質陶器内耳鉢(1)、陶器大皿(2)を出土

第4節 中・近世以降の遺構と遺物



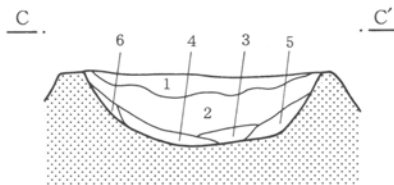
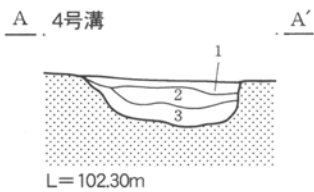
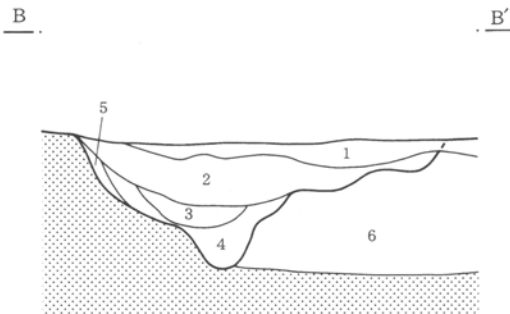
3号溝A-A'土層注記

1. 灰褐色土 細かい白色軽石粒を含む。縮まり有り。
2. 灰色粘質土 細かい白色軽石粒を含む。縮まり有り。
3. 灰褐色土 細かい白色軽石粒を含む。鉄分凝集が目立つ。
4. 黒褐色土 砂壤土粒、白色軽石粒を含む。
5. 砂層
6. 4層と砂層のラミナ



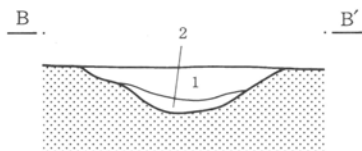
3号溝B-B'土層注記

1. 灰褐色砂質土 斑鉄の有る白色軽石粒を含む。
2. 褐色砂質土 直径3~5cmの砂壤土ブロックを多く含む。3号溝埋没土
3. 灰褐色土 直径3~5cmの灰白色砂質土のブロックと白色軽石粒を含む。3号溝埋没土
4. 黒褐色土 白色軽石粒を多く含む。縮まり有り。3号溝埋没土
5. 灰褐色土 地山の黄灰色砂質土の小ブロックを含む。縮まり無し。3号溝埋没土
6. 4号土坑埋没土

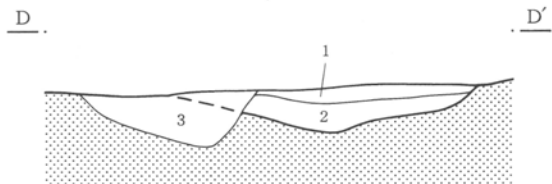


1. 灰褐色土
2. 灰褐色土小ブロックと暗褐色土との混土層
3. 暗灰褐色土
4. 暗灰褐色土 縮まり有り。
5. 暗灰褐色土 やや青色。
6. 暗灰褐色土 5層に類似。

1. 暗褐色土 灰褐色土粒を含む。
2. 暗褐色土 茶褐色土粒を含む。
3. 暗褐色土 青色味の有る暗褐色土を含む。



1. 灰褐色砂壤土
2. 暗褐色土と灰褐色砂壤土ブロックとの混土層



1. 灰褐色砂壤土
2. 灰褐色砂壤土 茶色味の有る土粒を含む。
3. 7号溝埋没土



第73図 2区溝(2)

している。(観P217)

**所見** 出土遺物の特徴から15世紀台の掘削と考えられる。

**2区5号溝** (付図1・第74・82図 P L 20・31・33)

**位置** Kc-2~Kf-9

**重複** 2号住居に後出する。101号土坑と重複する。

**形状** 南北方向の溝であるがKg-8グリッド付近で東方向に屈曲、2号溝の走向に沿うように若干曲線を描きながら東方に延びる。両端とも調査区域外に延びるため全様は不明である。長さ42.53mを検出した。規模は、上幅0.82~2.28m、下幅0.18~0.56m、残存深度1.09mを測る。断面形は、南北方向部分では上方に大きく開く逆台形で、幅狭い底面であるのに対し、東西方向では底面の幅を広げている。

**方位** N-80°-E、N-16°-W

**埋没土** 上層に灰褐色土、中・下層に暗褐色土を堆積する。最下層の暗褐色土中には砂粒を多く含入する。

**遺物** 軟質陶器焙烙(1)・内耳鍋(2)・片口鉢(3)、陶器常滑甕(4)、石製品砥石(6・7)、鉄製品不明(5)を出土している。(観P217・218)

**所見** 出土遺物の特徴から中世以降の掘削と考えられる。

**2区6号溝** (付図1・第74・75・82・83図 P L 20・31・34)

**位置** Nr-9~Ke-13

**重複** 12・15号掘立柱建物、2~4号溝、53・241~245・255~257号土坑と重複する。

**形状** Nr-10グリッドからKe-13グリッドまでは南北方向のほぼ直線を指向する溝である。Ka-11グリッドで東西方向の7号溝の端部と接する。長さ44.53mを検出した。南端は、2号溝と接するがその幅を減じ、掘り込みも浅くなる。この間の上幅は0.20~2.86m、下幅は0.06~1.34mである。残存深度は0.56mである。7号溝との接点から北側部分は土坑、小穴との重複が著しい。Ns-10グリッドで、その幅を減じ、極端に狭くなる。その後、Nr-10グリッ

ド付近で屈曲、左折するが255~257号土坑との重複により、形状が不明確のままNr-8グリッドで3号溝北辺と接している。屈曲部における上幅は1.84m、下幅0.34m、残存深度0.24mである。

**方位** N-5°-E、N-66°-W

**埋没土** 暗褐色土、灰褐色土が堆積、全体に砂質である。

**遺物** 陶器片口鉢(1・2)、石製品石臼(3~5)・石鉢(6~8)・砥石(9~11)、不明石製品(12)、縄文石器打製石斧?(遺構外117)、金属器板状鉄製品を出土している。(観P218)

**所見** 出土遺物の特徴から14世紀以降の掘削と考えられる。

**2区7号溝** (付図1・第75・83図 P L 19)

**位置** Kc-7~Ka-14

**重複** 4号溝・6号溝に先行する。56号土坑と重複する。

**形状** 東西方向の溝で調査時は4号溝との重複から、長さの短い溝とされていたが土層断面の観察からほぼ25mにわたり直線を指定する。Kb-11グリッドでほぼ90度屈曲、南方向約6.5mで立ち上がっている溝であることが再確認された。規模は、上幅1.19~1.90m、下幅0.40~0.86m、残存壁高0.57mを測る。断面形は、上方に向かって大きく開く逆台形で中位に弱い稜の認められた部分もみられた。

**方位** N-85°-W

**埋没土** 灰褐色土、暗褐色土が堆積する。砂壤土を多く含んでいる。

**遺物** 軟質陶器香炉(1)・内耳鍋(2)を出土している。(観P219)

**所見** 出土遺物の特徴から中世以降の掘削と考えられる。

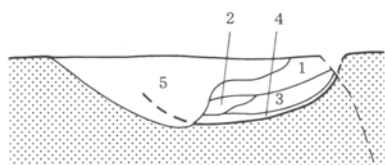
**2区8号溝** (付図1・第75図)

**位置** Kf-5~Kh-6

**重複** 2号住居に後出する。7号土坑とも重複関係にあった可能性があるが前後関係は不明である。

**形状** 南北方向の溝で8.80mを検出した。ほぼ直線的な走向である。断面形は、皿形、あるいは浅い台

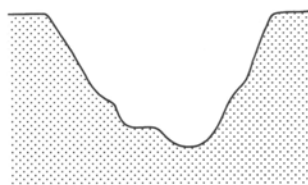
E 4号溝 E'



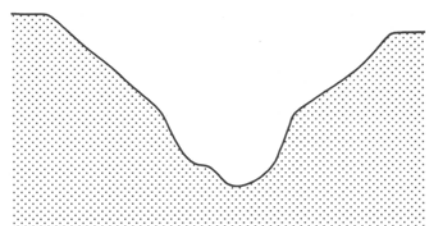
L=102.30m

1. 暗褐色土 灰褐色砂壤土を含み、茶色をおびる。
2. 暗褐色土 粘性有り。
3. 暗褐色土 灰褐色土小ブロックを混入。
4. 暗褐色土
5. 7号溝埋没土

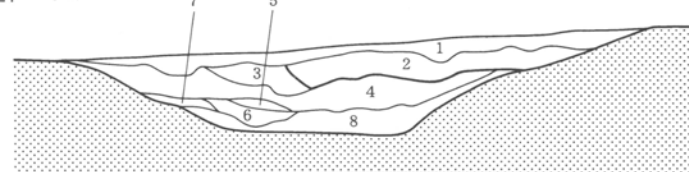
B B'



C C'

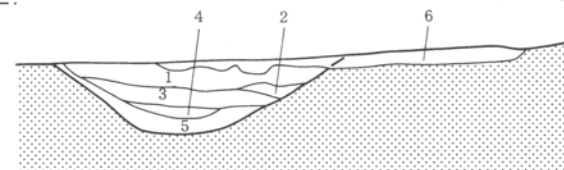


A 6号溝 A'

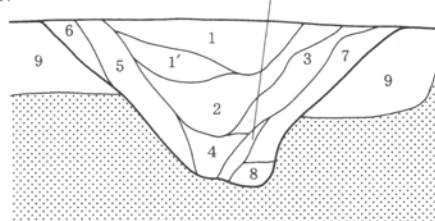


L=102.70m

B B'



A 5号溝 A'



L=102.50m

1. 灰褐色土 小ブロックの集合。茶褐色味有り。縮まり無し。
- 1'. 灰褐色土 小ブロックの堆積。縮まり無し。
2. 暗褐色土 茶褐色味有り。縮まり無し。
3. 暗褐色土 2層に類似。茶色味薄れる。縮まり無し。
4. 暗褐色土 灰色味有り。縮まり無し。
- 4'. 暗褐色土 細砂粒を含む。縮まり無し。
5. 暗褐色土 粒子荒い。やや縮まり有り。灰色をおびる。
6. 暗褐色土 粒子荒い。
7. 暗褐色土 茶色の小土粒を含む。第二次的に堆積。
8. 暗褐色土 砂粒を多く含む。第二次的に堆積。
9. 2号住居埋没土

D D'



1. 灰褐色土 鉄分凝集が著しい。
2. 暗褐色土 茶褐色土の小ブロックを含む。
3. 暗褐色土 4号溝埋没土
4. 暗褐色土と茶褐色土ブロックの混土層  
4号溝埋没土
5. 混土層 4層に類するが、やや黒色強い。  
4号溝埋没土
6. 暗褐色土 茶褐色土ブロックを含み、黒色強い。4号溝埋没土
7. 暗褐色土 青色味有り。灰褐色土をやや含む。4号溝埋没土
8. 暗褐色土 やや縮まり、青色をおびる。  
4号溝埋没土

1. 砂壤土と黄茶褐色土の混土層
2. 砂壤土 ブロック。
3. 砂壤土
4. 灰褐色砂壤土
5. 暗褐色土 やや粘性有り。
6. 暗褐色土 灰色味有り。砂壤土を多く含む。  
241号土坑埋没土



第74図 2区溝(3)

第2章 荒砥諏訪西遺跡の調査

形状である。規模は、上幅0.42～0.68m、下幅0.28～0.42mを測る。残存深度は、0.21mである。

方位 N-5°-E

埋没土 不明である。

所見 掘削時期は不明である。

2区9号溝(付図1・第75・83図 PL20・31・33)

位置 Nt-13～Ns-0

重複 1・10号溝と重複する。10号溝に先行する。

形状 北西端は、1号溝と重複するため詳細は不明である。Nt-12から約13.75mは、西北西から南東方向の走向であるが、Kb-15で大きく方向変換をし、東北東へ向かっている。規模は、上幅0.30～3.15m、下幅0.10～0.84mで、西端にいたりその幅を著しく広げている。残存深度は、0.14mである。底面のレベルは東から西に向かって低くなっている。

方位 N-80°-W、N-20°-W

埋没土 上層に黒色土、下層に灰黒色土・褐色土が堆積、最下層に砂・小礫の堆積があることから流水があったと考えられる。

遺物 陶器常滑壺(2)、石製品石鉢(5)・砥石(3・4)を出土する。(観P219)

所見 出土遺物の特徴から中世以降の掘削と考えられる。

2区10号溝(付図1・第75・76・83図 PL20・31)

位置 Nr-14～Ka-0

重複 9・13号溝と重複する。9号溝より後出で13号溝に先行する。

形状 南北方向の溝で、途中で2箇所、残存状況の具合か途切れる部分があるが、総長74.00mにわたって検出した。Ns-19からOt-0部分では底面が掘りかえし、あるいは流水による侵食のためか2段になり、西側が深くなり、最下層に砂礫が堆積する。この地点での上幅は1.23mであるが、他は上幅0.98～1.21m、下幅0.22～0.43m、深度は良好な地点で0.34mである。底面の比高は南北両端で1.03mである。

方位 N-12°-E

埋没土 浅間B軽石を多量に含む黒色土・茶褐色土

が堆積する。A-A'セクション地点の砂礫の堆積から流水があったことが確認される。

遺物 陶器常滑甕(1)を出土している。(観P219)

所見 出土遺物の特徴から中世以降の掘削と考えられる。

2区11号溝(付図1・第76図)

位置 Np-7～Nq-8

重複 4号掘立柱建物、202～204・206号土坑と重複する。前後関係は不明である。

形状 南北方向に4.27mを検出した。上幅0.68m、下幅0.50m前後、残存深度は0.26mである。

方位 N-2°-W

埋没土 黒褐色土・褐色土が堆積している。混入する軽石は浅間A軽石の可能性はある。

所見 土層の状況から江戸時代以降の所産である可能性も考えられる。流水の有無は不明である。

2区12号溝(付図1・第76図 PL20)

位置 Nn-9～Np-10

形状 南北方向に13.87mを検出した。走向は、1号溝に平行している。断面形は、皿状を呈している。規模は、上幅0.68～1.16m、下幅0.23～0.36m、残存深度は0.22mである。底面は南に向かって緩やかに傾斜している。

方位 N-12°-E

埋没土 灰褐色土が堆積している。

所見 詳細な掘削時期は不明である。流水の有無は不明である。

2区13号溝(付図1・第76図 PL20)

位置 Nm-14～Nn-13

重複 10号溝と重複し、これを切っている。

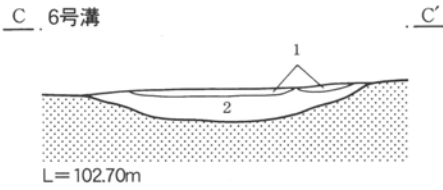
形状 東西方向に24.00mを検出した。東端、Nn-14付近ではややその幅を広げる他はほぼ一定の様相、規模である。上幅は0.34～0.96m、下幅は0.16～0.39m、残存深度は0.07mを測る。

方位 N-48°-W

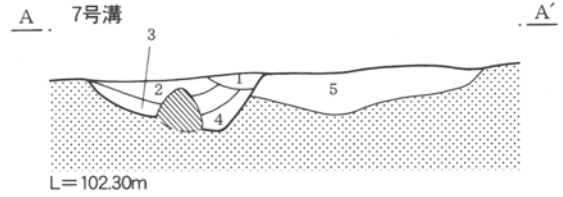
埋没土 褐色土が堆積している。

所見 詳細な掘削時期は不明である。26号溝と同一遺構の可能性も考えられるが断定できない。

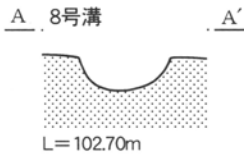
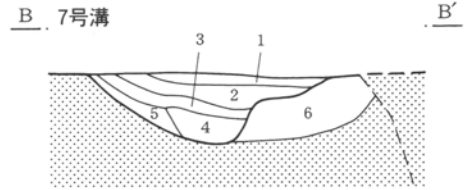
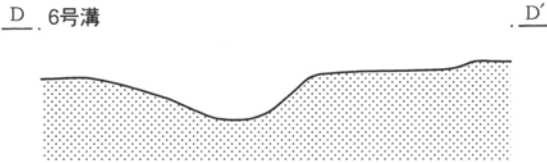
第4節 中・近世以降の遺構と遺物



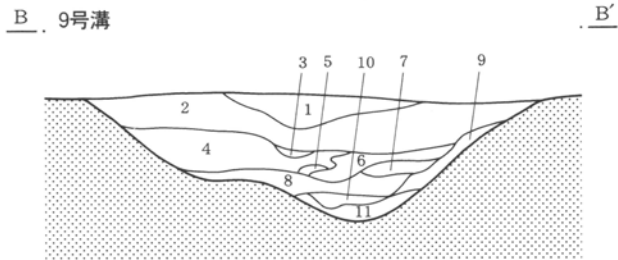
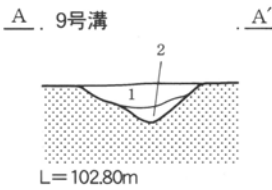
1. 黄茶褐色土 砂質。
2. 暗褐色土 茶色土粒を含む。



1. 灰褐色砂壤土
2. 灰褐色砂壤土と茶褐色土の小ブロック状の混土层
3. 2層に類する。2層と4層の中間層。
4. 暗褐色土を主体とした灰褐色砂壤土の小ブロックとの混土层
5. 4号溝埋没土

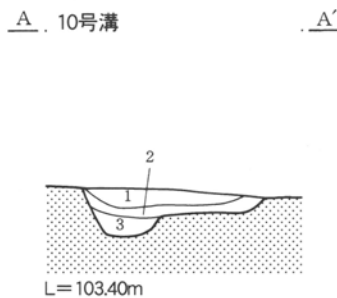
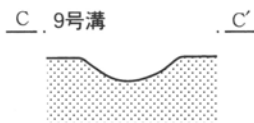


1. 灰褐色砂壤土
2. 灰褐色砂壤土 1層に似るが暗色。
3. 暗褐色土 砂壤土をわずかに含む。
4. 暗褐色土と灰色味の有る褐色土の混土层
5. 暗褐色土と灰褐色土の小ブロックの混土层
6. 4号溝埋没土

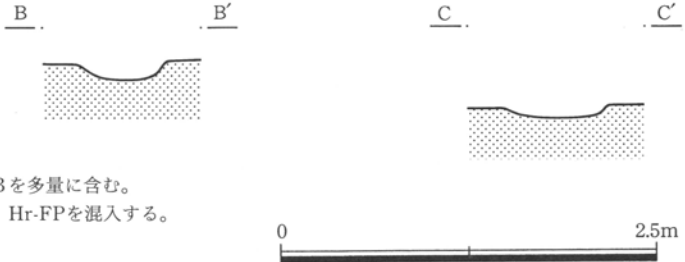


1. 黒色土 As-Cを多量に含む。締まり弱い。
2. 褐色土 褐色土の小ブロック、As-Cを含む。

1. 黒色土 As-Bを多量に含む。締まり、粘性をおびる。上位に鉄分凝集有り。10号溝埋没土
2. 黒色土 As-B、As-C、Hr-FPの軽石粒を多量に含む。締まり有り。9号溝埋没土
3. As-C、灰褐色質粘土のブロック 9号溝埋没土
4. 黒色土 As-C、Hr-FPを含む。2層より締まりはやや弱い、粘性有り。9号溝埋没土
5. 灰褐色土 As-Cを混入。ブロック状を呈す。
6. 黒色土 As-C、Hr-FPをわずかに含む。締まり弱い粘性有り。軽石と黒色粘土がやや互層に入る。9号溝埋没土
7. 灰黒色土 灰色土の微砂ブロック、As-C混じりの黒色土が乱雑に入る。9号溝埋没土
8. 灰黒色土 灰色細砂、As-C混じりの黒色土ブロックが入り乱れた層。9号溝埋没土
9. 黒色土 As-C混じり。粘性は有るが、締まり無し。9号溝埋没土
10. 灰黒色土 灰色粘質土ブロック、黒色土ブロック、As-C混じり黒色土のブロックが入り乱れた層。9号溝埋没土
11. 灰色砂礫層 砂層と小礫5mm程が入った層。9号溝埋没土



1. 茶褐色土 As-Bを多量に含む。
2. 褐色土 As-C、Hr-FPを混入する。
3. 砂礫層

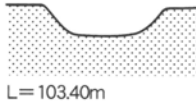


第75図 2区溝(4)

第2章 荒砥諏訪西遺跡の調査

D. 10号溝

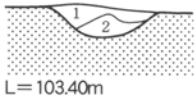
D'



L=103.40m

A. 12号溝

A'



L=103.40m

A. 13号溝

A'

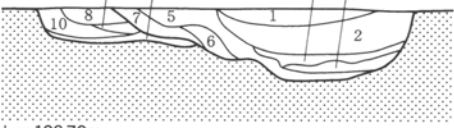


L=104.00m

1. 褐色土 As-B軽石、黄色土粒1mmを含む。縮まり強い。
2. 黒褐色土 As-B軽石、Hr-FP、黄色土粒を含む。縮まり強い。

A. 14号溝

A'



L=103.70m

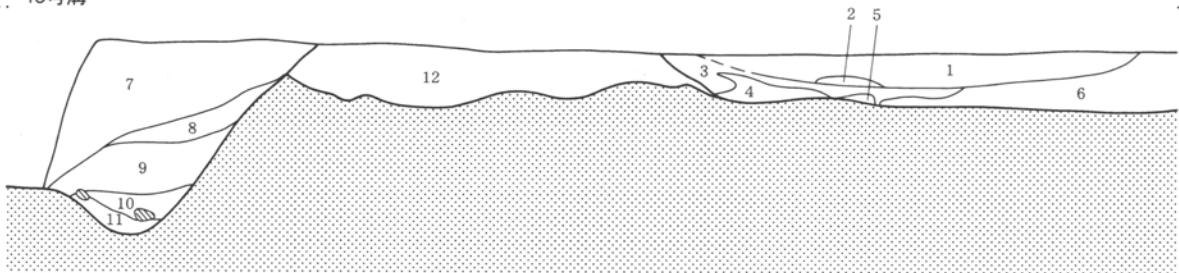
1. 茶褐色土 As-Bを多量に含む。砂質であるが縮まり有り。
  2. 褐色土 As-B、As-C、Hr-FPを含む。縮まり有り。
  3. 褐色砂質土 As-B、As-C、Hr-FPを含むブロックを混入する。
  4. 暗褐色土 黄色土ブロック、砂層のブロック、軽石粒混じりの黒色土ブロックを含む。
  5. 暗黄褐色土 黄色土ブロック、軽石粒混じりの黒色土を混入する。縮まり有り。
  6. 暗褐色土
  7. 暗褐色土 Hr-FPを含む。黄色土粒をわずかに含む。
  8. 茶褐色土
  9. 灰色砂礫層 小礫(0.5~1cm)を含む。互層をなす。
  10. 灰色砂層 細砂、粗砂がラミナ状に入る。
  11. 黒色土 As-C、Hr-FP軽石粒を混入する。
- 1~7 15号溝埋没土  
8~11 14号溝埋没土

B. B'



A. 15号溝

A'



L=103.70m

1. 暗茶褐色土 軽石粒を含む。
  2. 暗茶褐色土
  3. 暗茶褐色土
  4. 暗茶褐色土 黒褐色土を含む。
  5. 暗茶褐色土 黒褐色土を含む。
  6. 暗茶褐色土
  7. 暗茶褐色土 暗褐色土、黒褐色土のブロック、白色の軽石を含む。
  8. 黒褐色土 軽石粒を含む。
  9. 黒灰色粘質土と砂層の互層 ラミナ、水流有り。
  10. 暗茶褐色土 7層に類する。
  11. 暗茶褐色土 7層に類する。黒褐色の軽石を含んだブロックを含む。
  12. 黒褐色土 白色の軽石粒、軽石を含む。
- 1号溝埋没土  
1~6 15号溝埋没土  
7~11 大溝埋没土

B. B'



11号溝土層注記

1. 黒褐色土 軽石(As-A)を多く含む。
2. 褐色土 軽石を少量含む。
3. 褐色土
4. 黒褐色土
5. 204号土坑埋没土

12号溝A-A'土層注記

1. 灰褐色土 黄色味が有る。
2. 暗褐色土 やや粘性。

12号溝B-B'土層注記

1. 灰褐色土 軽石粒を多く含む。やや黄色を増す。
2. 灰褐色土 1層と同様に軽石粒を含む。

C. C'

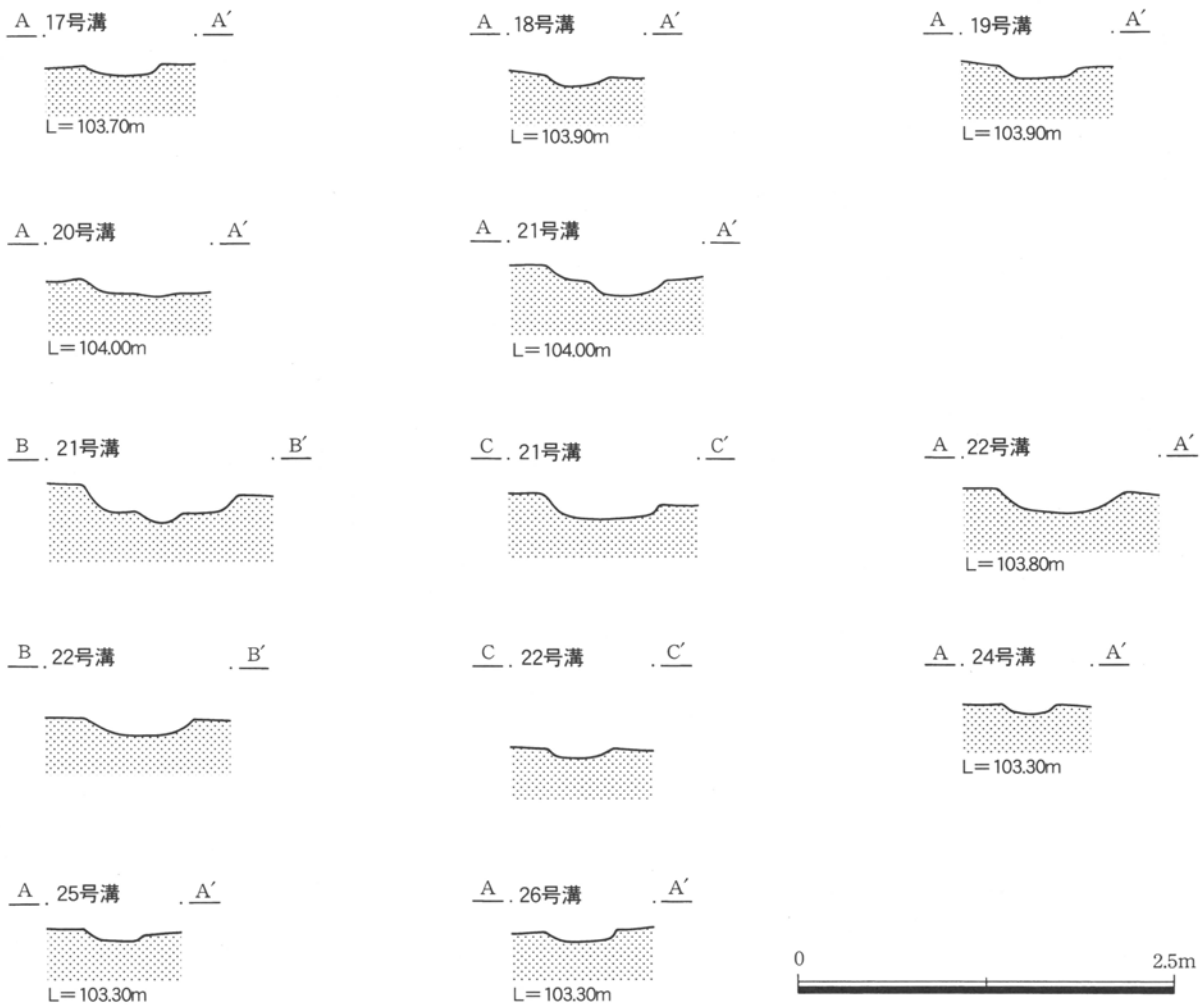


1. 茶褐色土 As-Bを多量に含む。砂質であるが縮まり有り。
  2. 褐色土 As-B、As-C、Hr-FPを含む。縮まり有り。
  3. 褐色砂質土 As-B、As-C、Hr-FPを含むブロックを混入する。
  4. 暗褐色土 黄色土ブロック、砂層のブロック、軽石粒混じりの黒色土ブロックを含む。
  5. 暗黄褐色土 黄色土ブロック、軽石粒混じりの黒色土を混入する。縮まり有り。
  6. 暗褐色土
  7. 暗褐色土 Hr-FPを含む。黄色土粒をわずかに含む。
  8. 茶褐色土
  9. 灰色砂礫層 小礫(0.5~1cm)を含む。互層をなす。
  10. 灰色砂層 細砂、粗砂がラミナ状に入る。
  11. 黒色土 As-C、Hr-FP軽石粒を混入する。
- 1~7 15号溝埋没土  
8~11 14号溝埋没土



第76図 2区溝(5)





第77図 2区溝(6)

2区14号溝 (付図1・第76図)

位置 N1-10~Nn-11

重複 北端寄りで1・15号溝と重複し、1・14・15号溝の順に掘削されている。5・6号畝に後出、200・264号土坑との前後関係は不明である。

形状 南北方向の走向であるが、途中、約14.5mの間がとぎれているが、形状、埋没土の状況から同一遺構と考えた。北側部分は13.73mを検出した。規模は、Niラインで上幅0.92m、下幅0.53m、残存深度0.15mを測る。底面は、北方向に向かって低くなっている。南側部分は、若干蛇行するが12.00mを検出した。規模は、上幅0.42~0.74m、下幅0.24~0.56m、残存深度0.14mを測る。

方位 N-5°-E

埋没土 北側部分で上層に茶褐色土、下層に砂層の堆積を確認している。

所見 掘削時期は不明である。

2区15号溝 (付図1・第76・83図 P L 20・31)

位置 Nh-13~Ng-15

重複 6号畝、1・14号溝に後出する。

形状 Ng-10からNh-10までは南北方向の走向であるが、ここからNg-15までは大きく彎曲、東端は東西方向を指向する。途中、約6.5mの間、途切れている。上端は、北端部分の幅が広い他、Nh-14付近も1.24mと広がっている。セクションA-A'の南側における上幅は1.30m、下幅0.34m、残存深度0.50mである。底面は、東西方向より南北方向の部分のほうがわずかに低い。

第2章 荒砥諏訪西遺跡の調査

方位 N-81°-W

埋没土 暗茶褐色土、茶褐色土が堆積する。

遺物 陶器常滑甕(1)を出土している。

(観P219)

所見 出土遺物の特徴から中世以降の掘削が考えられる。22号溝と同一の可能性が考えられるが断定するにたる根拠がなかった。

2区17号溝(付図1・第77図)

位置 Ne-15~Nd-18

形状 東西方向に13.60mを検出した。断面は、皿状を呈し、ほぼ一定の規模で掘削されている。規模は、上幅0.35~0.56m、下幅0.18~0.38mを測る。残存深度は、0.05mである。底面は、西端に向かって緩やかに下がる。両端の比高差は、0.17mである。

方位 N-82°-W

埋没土 不明である。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

2区18号溝(付図1・第77図)

位置 Nd-14

形状 長さ3.87mを検出したのみである。断面形は、皿状を呈する。規模は、上幅0.37m、下幅0.21m、残存深度0.07mを測る。

方位 N-81°-E

埋没土 不明である。

所見 詳細な掘削時期は不明である。19号溝と同一遺構の可能性も考えられるが断定できない。

2区19号溝(付図1・第77図)

位置 Na-0~Nb-14

形状 途中2.70mほど途切れるが、長さ10.53mにわたって検出した。直線的に延びている。規模は、上幅0.28~0.70m、下幅0.14~0.28m、残存深度0.10mを測る。底面の比高はほとんどない。

方位 N-81°-E

埋没土 不明である。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

2区20号溝(付図1・第77図)

位置 Nb-13~Nc-12

形状 長さ4.53mを検出した。19号や21号溝とほぼ

同一の走向をとっている。中位ほどにおける規模は、上幅0.62m、下幅0.32m、残存深度0.11mを測る。

方位 N-88°-W

埋没土 埋没土中に長軸0.20~0.50m前後の礫が含まれている。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

2区21号溝(付図1・第77図)

位置 Nb-14~Nc-12

形状 長さ10.80mを検出した。緩やかに蛇行する走向である。中位には底面が更に一段深くなる部分がある。規模は、上幅0.58~0.96m、下幅0.32~0.72m、残存深度0.29mである。

方位 N-87°-E

埋没土 不明である。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

2区22号溝(付図1・第77図)

位置 Nb-0~Ng-15

形状 途中、3.70mほど削平部分があるが、長さ34.67mを検出した。ほぼ直線を指向している。規模は、上幅0.28~0.86m、下幅0.06~0.62m、残存深度0.19mである。底面は、南西端に向かって徐々に低くなっている。

方位 N-77°-E

埋没土 不明である。

所見 掘削時期は不明である。走向は、15号溝の東端の方向を向くが同一遺構と断定する根拠がない。

2区23号溝(付図1)

位置 Kc-14~15

形状 東西方向に3.16mを検出した。規模は、上幅0.18~0.27m、下幅0.10~0.13mを測る。残存深度は0.08mである。

方位 N-87°-W

埋没土 不明である。

所見 掘削時期は不明である。

2区24号溝(付図1・第77図)

位置 No-12~Np-13

重複 3・5号畠と重複、これを切っている。

形状 南北方向に7.20mを検出した。上幅は0.30m

前後、下幅は0.10～0.20m前後である。残存深度は0.1mを測った。

方位 N-1°-E

埋没土 不明である。

所見 掘削時期は不明である。

2区25号溝(付図1・第77図)

位置 Nm-n-12

形状 14号溝の東側にほぼ同方向の走向で検出した。長さ3.89mを検出した。規模は、上幅0.14～0.36m、下幅0.05～0.16mである。残存深度は、0.08m以下である。

方位 N-8°-E

埋没土 不明である。

所見 形状は近接する5号畠のサク状溝と類似するが、埋没土の記載がなく畠とは断定できない。

2区26号溝(付図1・第77図)

位置 Nm-12-13

形状 東西方向に4.06mを検出した。規模は、上幅0.03～0.38m、下幅0.18～0.26m、残存深度0.07m以下である。

方位 N-45°-W

埋没土 不明である。

所見 走向が、13号溝と類似するが、同一遺構として断定できない。

2区大溝(付図1・第78・84～86図 P L 17・31・34)

位置 Ng-1～Nd-14

重複 1号溝と重複、これに先行する。

形状 東西方向に長さ66mを検出した。規模は、西端で上幅7.95m、下幅5.72m、残存深度1.30mを測るが、土層の堆積状況から一時期の規模はこれを下回ると考えられる。規模は、東側に向かってその幅、残存深度を漸次減じ、Nd-14で土壤攪乱により削平されている。東西両端における底面の比高差は1.15mである。底面には幅0.2～0.8m前後の流水による浸食の痕跡が細い溝状に4条認められるが、これを溝の最深部と考えれば少なくとも4回の掘りかえし、あるいは流路の移動があったことが推定される。それぞれの底面には流水時に形成された小穴が無数

に認められる。

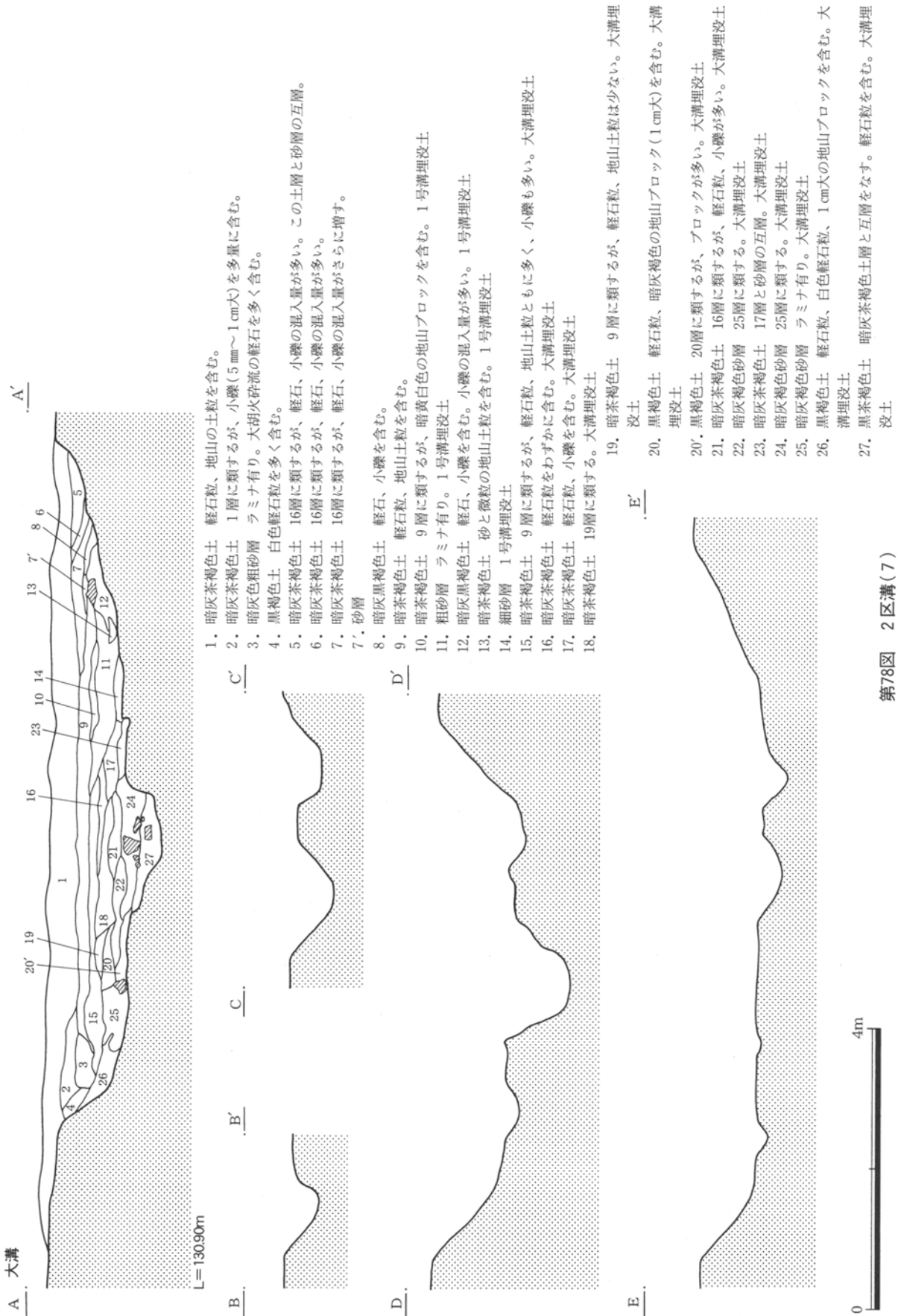
方位 N-71°-W

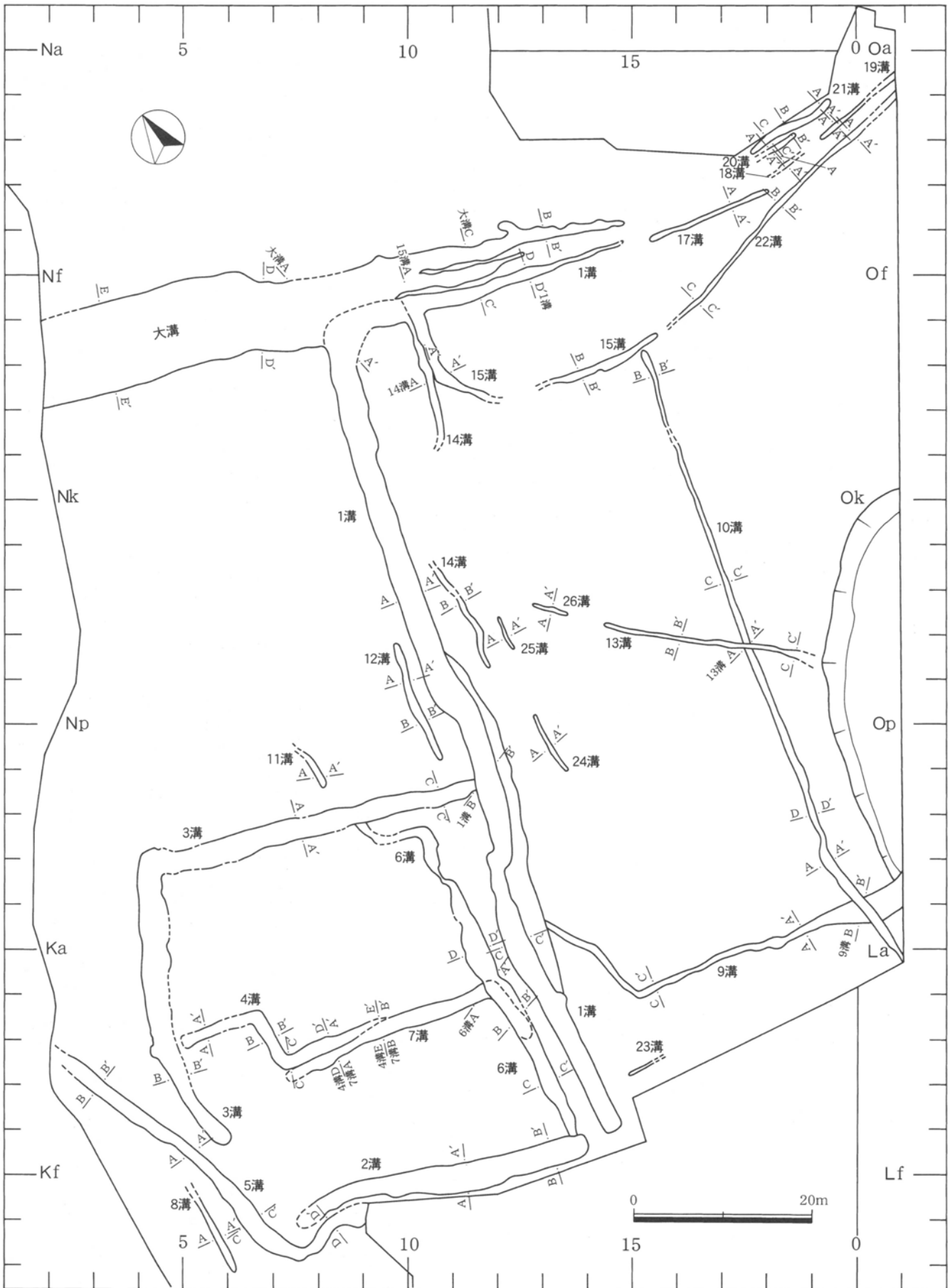
埋没土 主として暗茶褐色土・暗灰褐色土が堆積、下層を中心に砂粒、礫を多く含むことから水流があったことが確認できる。土層は、水流の移動に合わせて北から南に向かって順次堆積している。

遺物 遺物は、N9ライン以東、溝の東端との間に礫とともに多数が出土している。それは、陶器常滑甕(1～4)、軟質陶器片口鉢(5・6)・内耳鍋(7・8)、土製品円板(9)、石製品石臼(10)・砥石(11～14・16・17)・不明石製品(15)・板碑(18～20)・五輪塔(21・22)、古銭(23～25)、縄文土器(遺構外13～20・47～49・54～70・76・98)、縄文石器(123・125)である。馬歯出土の記録も残っている。

(観P219～221)

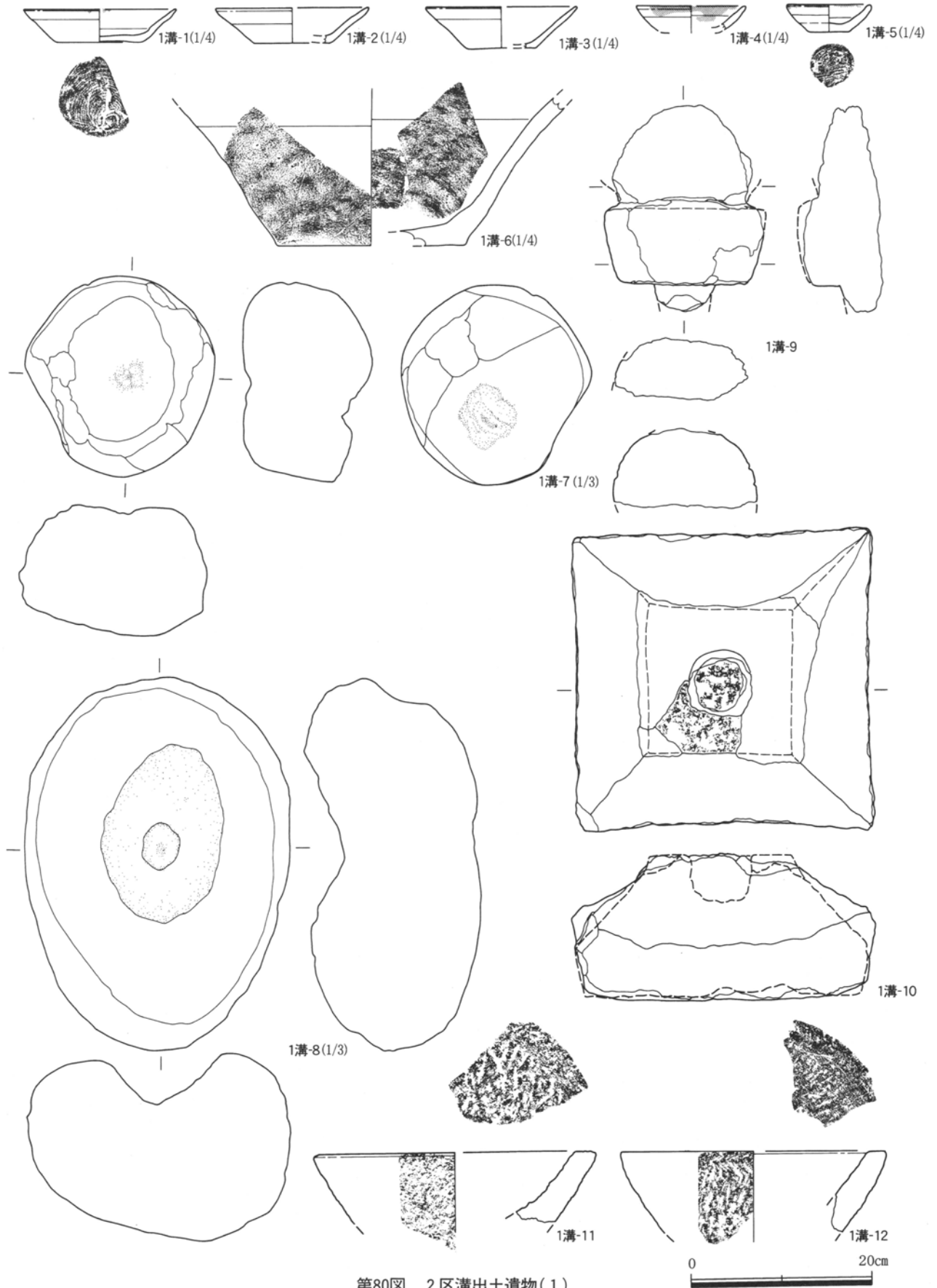
所見 出土遺物の特徴から中世以降の掘削と考えられる。その後の土地利用の地割にその痕跡を残している(第7図参照)。



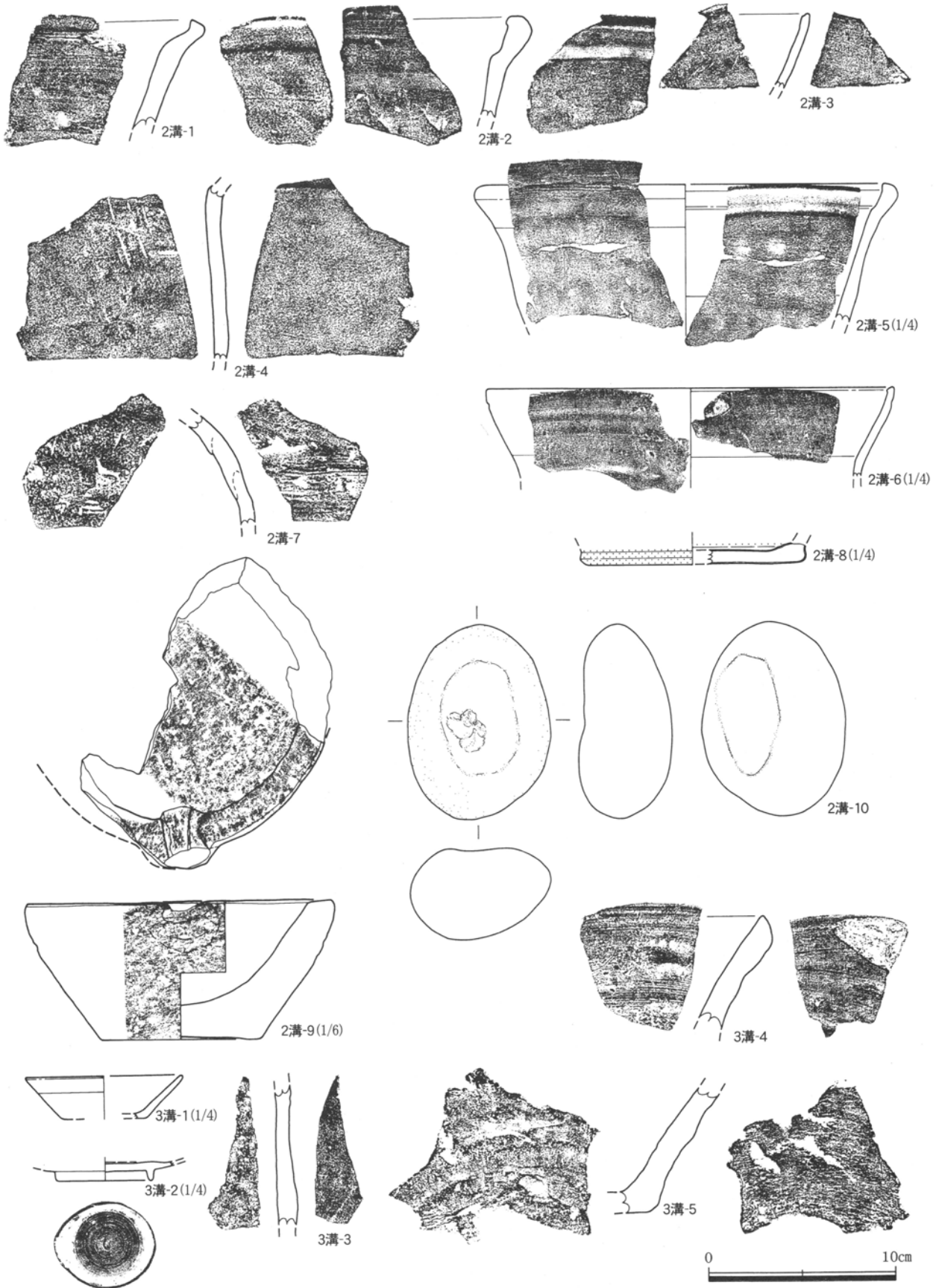


第79図 2区検出の溝

第2章 荒砥諏訪西遺跡の調査

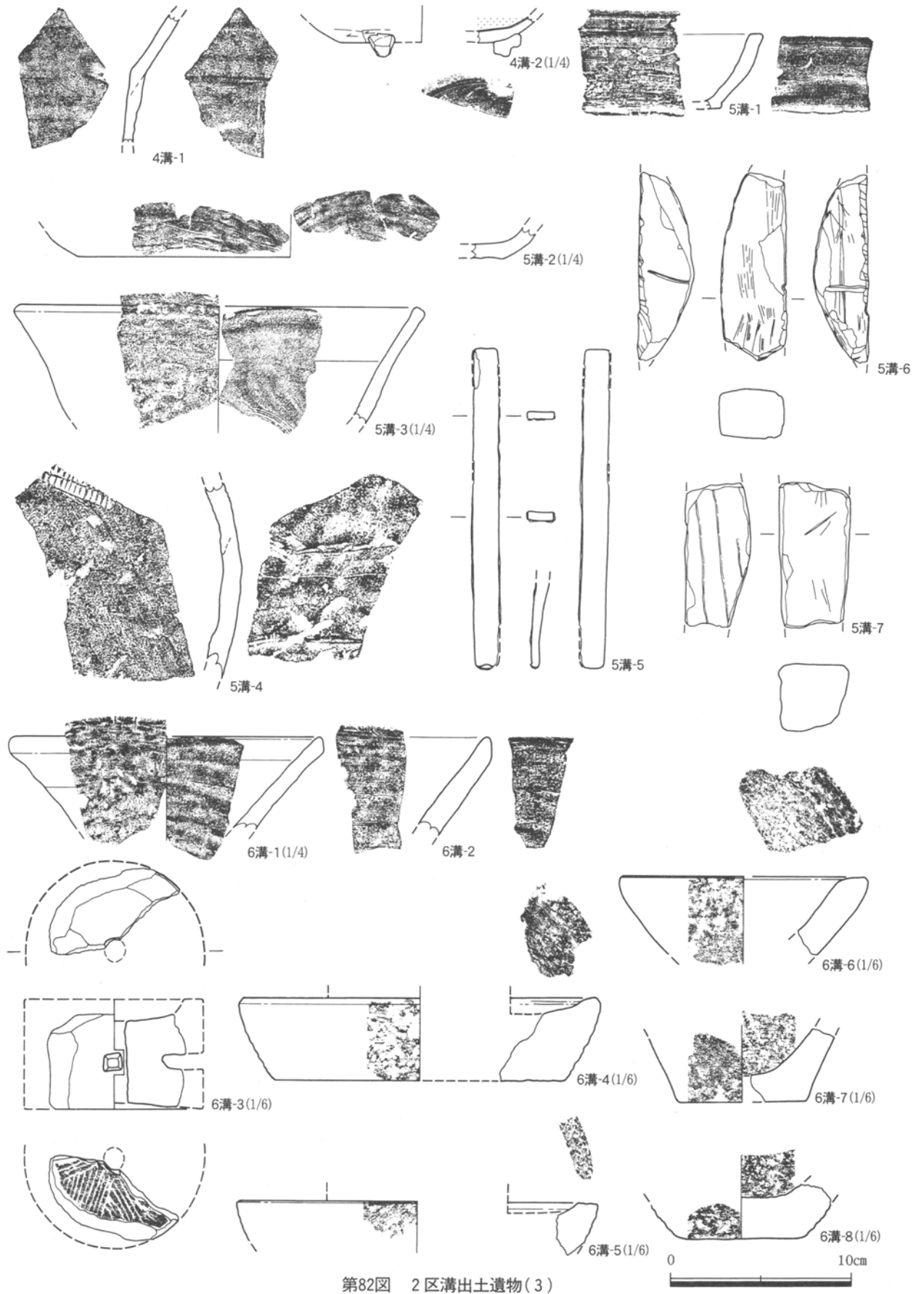


第80図 2区溝出土遺物(1)



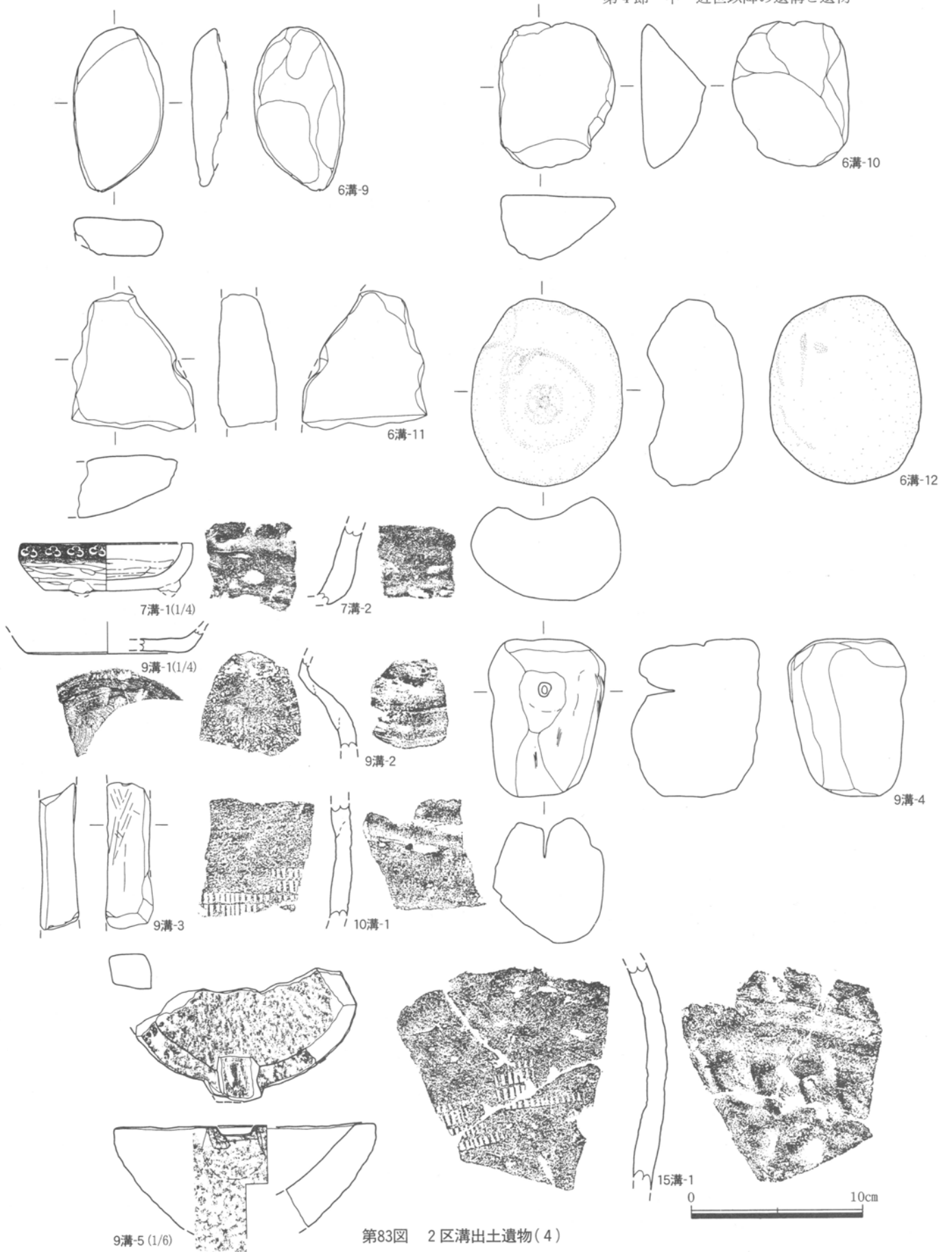
第81図 2区溝出土遺物(2)

第2章 荒砥諏訪西遺跡の調査

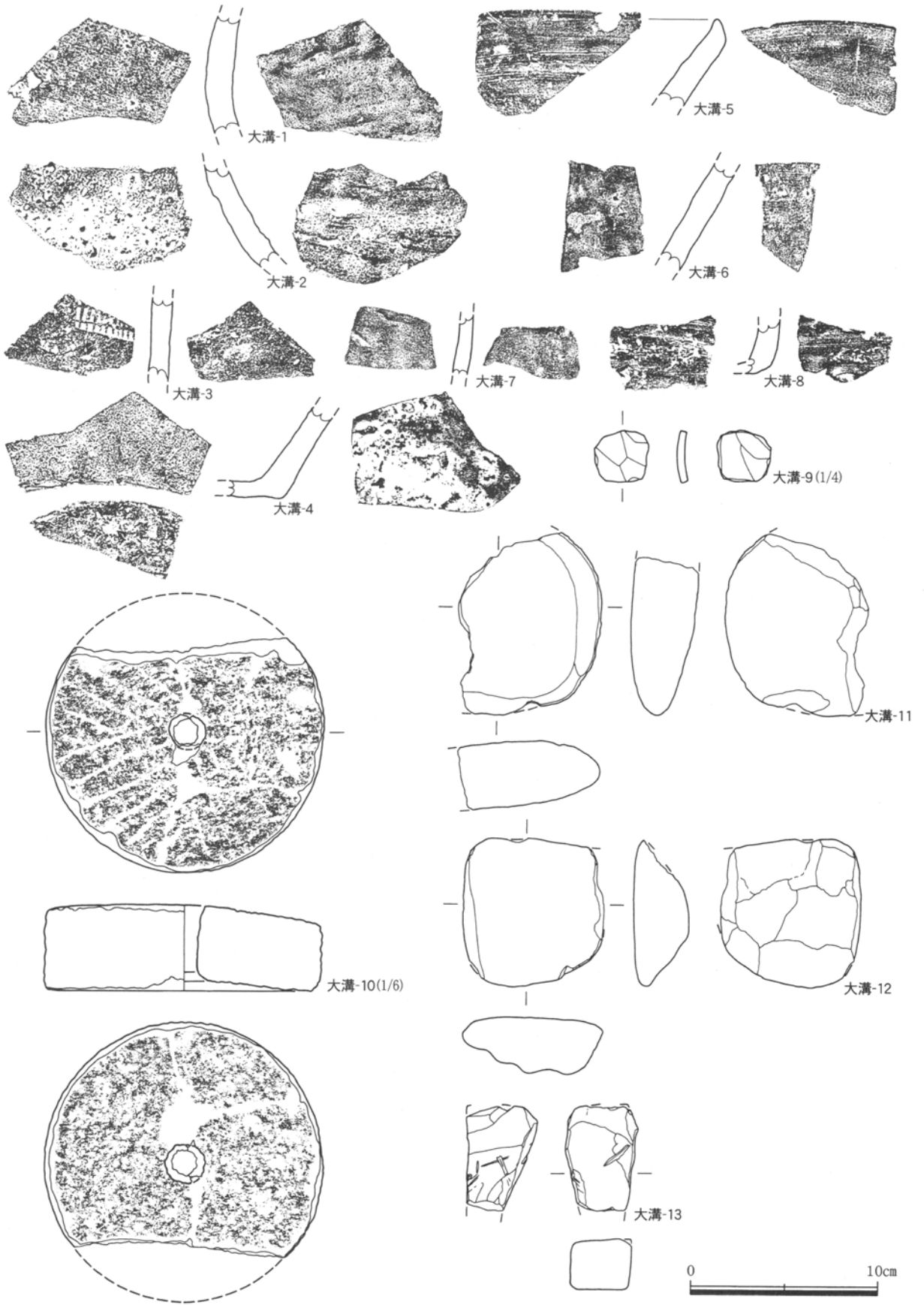


第82図 2区溝出土遺物(3)

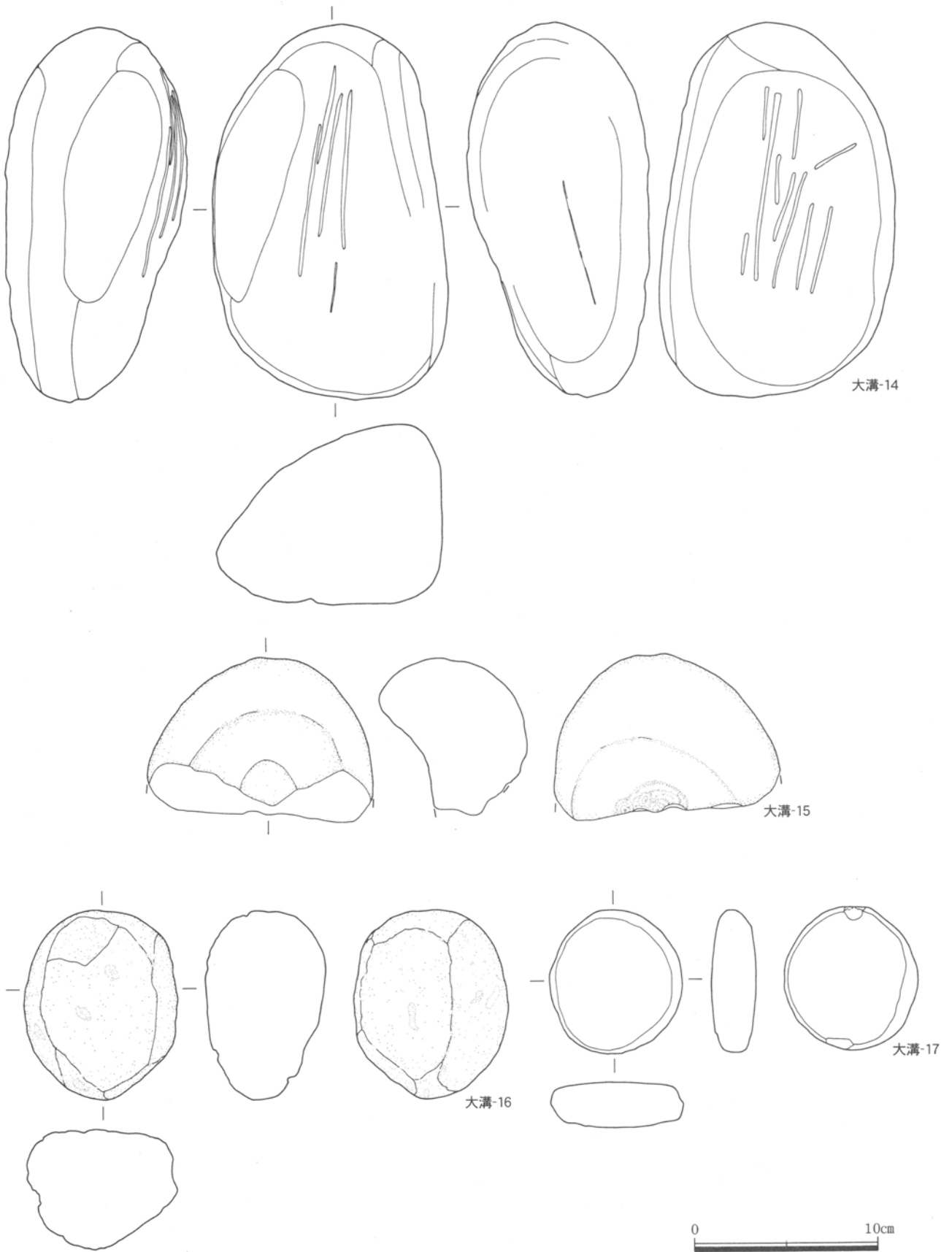




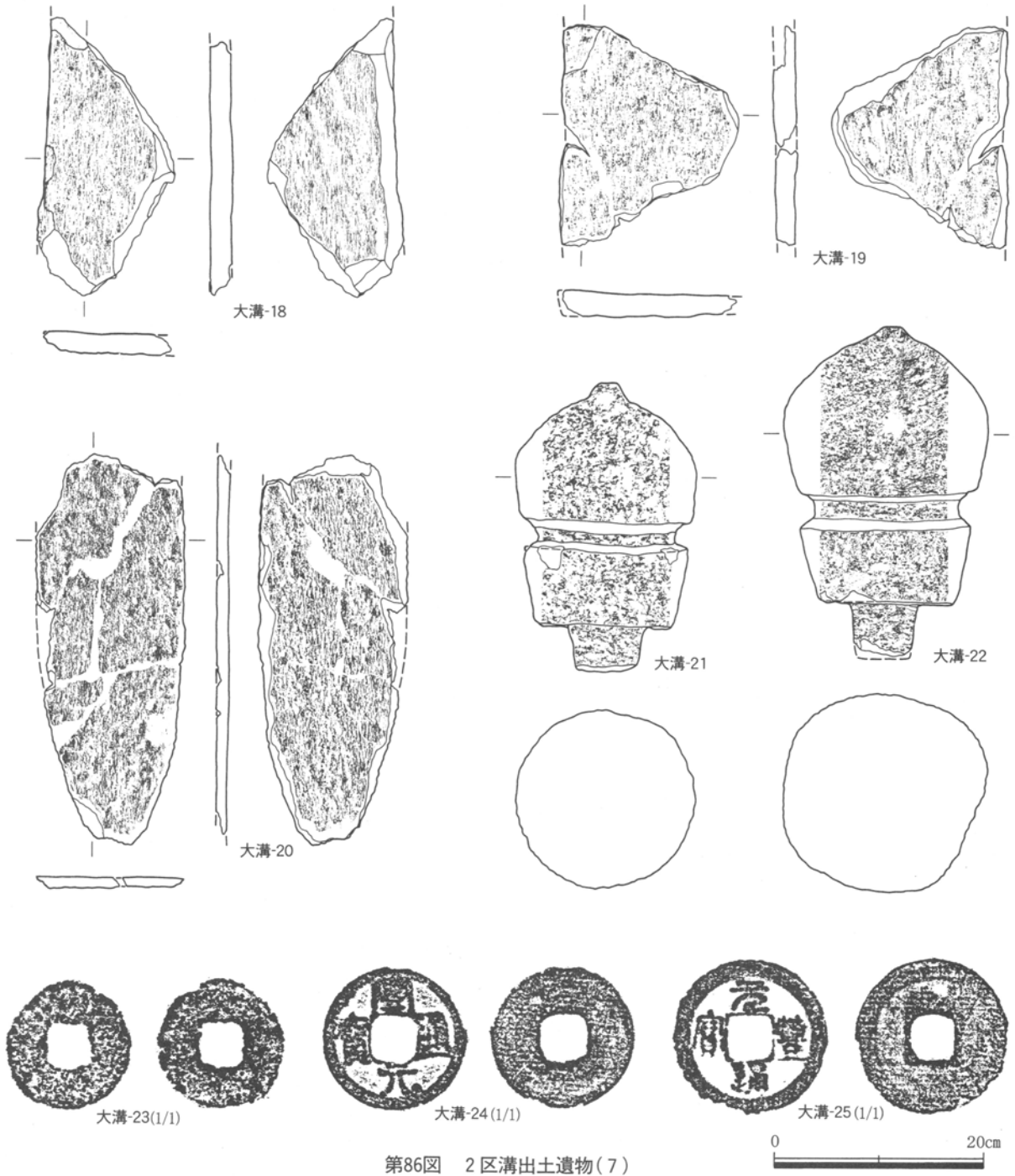
第83図 2区溝出土遺物(4)



第84図 2区溝出土遺物(5)



第85図 2区溝出土遺物(6)



第86図 2区溝出土遺物(7)

(3) 3区の遺構と遺物

掘立柱建物

3区1号掘立柱建物(第87図)

位置 Ph・i-17・18

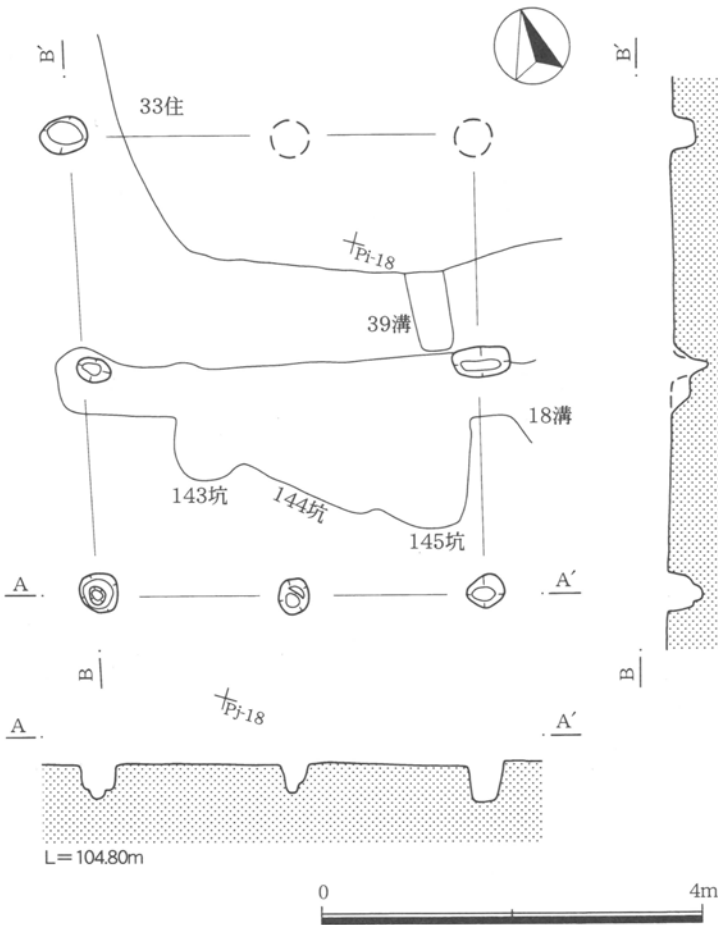
重複 33号住居、18号溝、143~145号土坑と重複する。住居に後出する以外の新旧関係は不明である。

形状 2×2間(4.81×4.11m)の南北棟であったか。桁行の柱間は、2.00~2.45mである。北辺の中央、北東角の柱穴は、33号住居埋没土内にあたり、検出できなかった。柱痕は確認できなかった。柱穴の平面形は、円形と考えられ、直径0.38~0.56mで、残存深度0.28~0.42mであった。

方位 N-15°-E

埋没土 不明である。

所見 詳細な掘削時期は不明である。



第87図 3区1号掘立柱建物

小穴(付図2)

3区において調査区のほぼ全域において小穴を検出した。その中を小区分ごとにみると確認検出数における粗密の差が著しい。小穴の集中箇所の中の1箇所目は、調査区の中央北寄りのPb~d-17~19グリッドの範囲である。該当グリッド内に約120本の小穴を検出した。平面形は、円形が大半で、直径0.30~0.40m前後が多数見られた。その中に1・2本方形の掘り方のものがみられる。残存深度は、0.09から0.80mまでみられる。深度0.10m台28本、深度0.30m台32本とやや多いものの、深度0.10から0.50m台がいずれも15本を超えている。

また、0.60m台4本、0.70m台4本、0.80m台1本と他の集中区に比べて深い小穴の存在が目立っている。

2箇所目は、調査区北東寄りのPc~g-2~4グリッドである。該当グリッド内に約120本の小穴を検出した。平面形は、円形で、その規模は、直径0.30m以下が多数である。残存深度は、0.08から0.72mまでであるが、0.20m台、0.30m台がほぼ3分の1ずつである。

最後、3箇所目は、調査区中央からやや南寄りのPn~g-0~5グリッドである。約170本の小穴を検出した。平面形は円形で、その規模は、直径30~40cm前後が多数見られた。残存深度は、0.05~0.67mまでばらつきがあるが、0.10~0.20m台と0.30~0.40m台の数値が多くみられる。深度を手掛かりに掘立柱建物の存在を検討したが遺構の存在を見出しえなかった。

他にも小穴が列状を呈して検出された部分もあるが具体的に遺構として把握するにはいたらなかった。小穴3本が、直線方向に一列に配列されるよう見られる地点もあるが、4本、5本と同一線上に延びるものはなく、柵列と認定できるも

## 第2章 荒砥諏訪西遺跡の調査

のも無かった。なお、1号掘立柱建物の周辺においては小穴群の分布はむしろ稀薄であった。これらの小穴については、1区の調査成果の部分でも述べたが建物の柱穴の他に耕作痕の可能性も考えられる。

### 井戸

3区では14基の井戸を検出した。遺物の検出は、1・14・15号井戸の3基でいずれも中世のものと考えられる。分布状況からは、他の遺構との関連性は見だし難いものであった。

#### 3区1号井戸 (第88・91図 P L 21・35)

**位置** Qo-5

**重複** 2号井戸、67号土坑と重複するが前後関係は不明である。1号畠は、これを切っている。

**形状** 2号井戸との重複のため平面形は不明である。長円形であったか。直径は1.74m以上を測る。断面の掘り込みは、1.26mまでを確認したが未完掘である。

**方位** N-31°-E

**埋没土** 不明である。

**遺物** 陶器の片口鉢が出土している。(観P221)

**所見** 片口鉢の特徴から14世紀後半から15世紀の遺構と考えられる。

#### 3区2号井戸 (第88図 P L 21)

**位置** Qo-5

**重複** 1号井戸、67号土坑と重複する。

**形状** 平面形は、長円形を呈していたと考えられる。規模は、南北方向で1.98m、東西1.25m以上を測る。掘り込みは1.25mまで確認したが未完掘である。

**方位** N-31°-E

**埋没土** 不明である。

**所見** 詳細な掘削時期は不明である。

#### 3区3号井戸 (第88図 P L 21)

**位置** Qo-0・1

**形状** 平面形は、隅丸長方形を呈する。規模は、長軸方向が2.58m、短軸方向が1.78mである。掘り込みは、深さ1.1mまで検出したが以下は未完掘である。断面形は、検出面下約0.4mで稜を有し、これより上位は傾斜、著しく漏斗状を呈する。変換点以下

は垂直に近い掘り方である。

**方位** N-77°-E

**埋没土** 灰褐色土の砂質土、暗褐色土が10~40cmの厚さで堆積している。

**所見** 詳細な掘削時期は不明である。

#### 3区4号井戸 (第89図 P L 21)

**位置** Qd-5

**重複** 5号井戸と重複、これに後出する。

**形状** 平面形は、長円形を呈していた。規模は、長軸方向が1.54m以上、短軸方向が1.50mである。掘り込みは、深さ1.82mまでを確認、以下は未完掘である。断面形は、確認面から約0.6mの地点に傾斜変換点を有し、これより上位は漏斗状に大きく外傾する。

**方位** N-38°30'-E

**埋没土** 灰褐色土、灰色土が堆積する。2層、5層には灰を含入する。

**所見** 詳細な掘削時期は不明である。

#### 3区5号井戸 (第89図 P L 21)

**位置** Qd-5

**重複** 4号井戸と重複、これに先行する。3号溝よりは後出である。

**形状** 平面形は、長円形を呈していた。規模は、長軸方向1.14m以上、短軸方向1.08mを測る。掘り込みは、深さ1.58mまで確認、未完掘である。断面形は、下位に向かってその径を徐々に狭めている。

**方位** N-38°30'-E

**埋没土** 黒褐色砂壤土が、堆積している。各層とも地山の黒褐色の砂質土を多く含み、人為的に埋め戻された可能性がある。

**所見** 詳細な掘削時期は不明である。

#### 3区6号井戸 (第88図)

**位置** Qd-6

**重複** 42号溝、小穴と重複する。

**形状** 平面形は、円形を基本としていたと考えられる。確認面における規模は、南北方向が1.44m、東西方向が1.24mである。掘り込みは、深さ1.27mまでを確認したが未完掘である。

方位 N-10°-W

埋没土 不明である。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

3区8号井戸 (第89図)

位置 Qp-1

形状 平面形は、東西方向に長軸を有する隅丸長方形を呈していたと考えられる。規模は、長軸方向で1.00m、短軸方向で0.86mを測る。掘り方は、深さ0.81mまでを確認したが壁面に大きな変化は無い。未完掘である。

方位 N-75°30'-E

埋没土 不明である。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

3区9号井戸 (第89図 P L 21)

位置 Qh-1、Qi-0・1

重複 10号住居に後出。18号溝との前後関係は不明である。

形状 平面形は、下位の形状をみると隅丸長方形と推される。規模は、東西方向が1.82m、南北方向が1.76m以上である。掘り込みは下位に向かって徐々にその径を狭めている。断面形は、深さ2.34mまで確認、底面はさらに1m以上下位である。未完掘である。

方位 N-73°-E

埋没土 褐色土、暗褐色土がレンズ状に堆積している。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

3区10号井戸 (第90図 P L 21)

位置 Pk-17

形状 平面形は、ほぼ円形を呈していた。南北方向に長軸を有し1.58m、短軸1.48mを測る。掘り方は、ほぼ垂直に掘り込まれており、1.14mまで確認した。

方位 N-73°-E

埋没土 褐色土が色調、混入物を変え、20~30cmの厚さで堆積している。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

3区11号井戸 (第90図 P L 21)

位置 Pj・k-18

重複 3号墳と重複するがこれに後出すると考えられる。

形状 平面形は、ほぼ円形を呈する。東西方向に長軸を有し、1.33mを測る。短軸は、1.26mである。掘り方の残存深度は、1.05mであった。

方位 N-76°30'-W

埋没土 黒色土、褐色土が5~20cmの厚さで堆積している。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

3区12号井戸 (第90図)

位置 Pm-17

重複 26号住居より後出である。

形状 平面形は、円形を呈していた。規模は、東西方向1.14m、南北方向1.10mである。断面は、深さ2.58mまで確認、未完掘である。

方位 N-88°-E

埋没土 不明である。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

3区13号井戸 (第91図)

位置 Pj-16

形状 平面形は、南北方向に長軸を有するものの円形を基本としている。規模は、南北0.94m、東西0.84mを測る。南壁の掘り込みは、他よりやや傾斜を有している。深さ1.29mまで確認、未完掘である。

方位 N-5°30'-E

埋没土 不明である。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

3区14号井戸 (第91図)

位置 Pf-0

重複 40号住居に後出する。

形状 平面形は、隅丸長方形を呈している。東西方向0.93m、南北方向0.88mを測る。掘り方は、ほぼ垂直の掘り込みで、底面に向かって徐々にその径を狭めている。深さ1.05mまで確認、未完掘である。

方位 N-78°-E

埋没土 不明である。

第2章 荒砥諏訪西遺跡の調査

遺物 軟質陶器の鉢(1)が出土している。

(観P221)

所見 鉢の特徴から中世の遺構と考えられる。

3区15号井戸(第91図 P L 21・35)

位置 Pd-19

重複 24号溝と重複する。

形状 平面形は、長円形を基本としていたか。規模は、東西方向で1.85m、南北方向2.28mである。掘り方は、中位に稜を有しながら擂鉢状に径を細めている。深さ2.6mまでを確認、未完掘である。

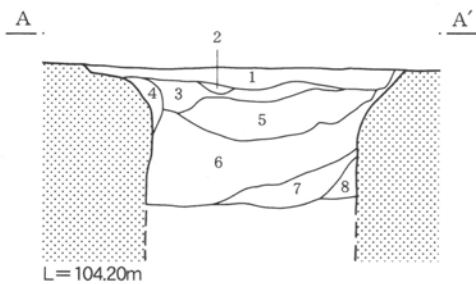
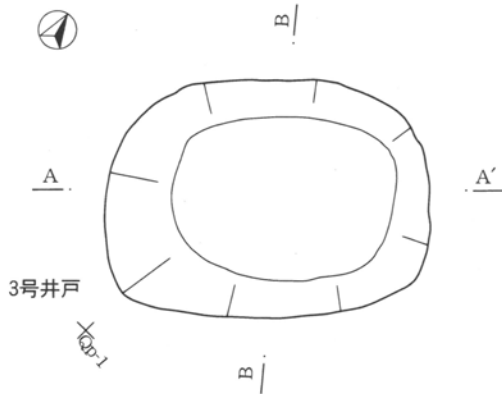
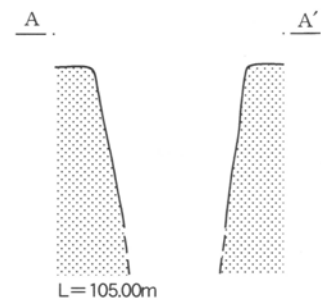
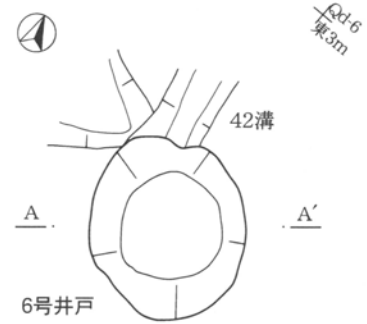
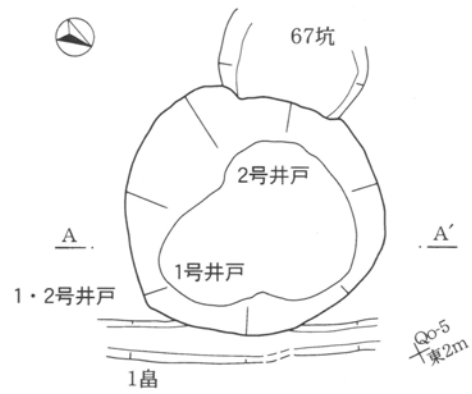
方位 N-53°30'-E

埋没土 暗褐色土が堆積、黄色土や褐色土のブロック、礫を混入する。人為的に埋め戻されている可能性も考えられる。

遺物 軟質陶器片口鉢(1)を出土している。

(観P221)

所見 片口鉢の特徴から14世紀後半の遺構の可能性はある。

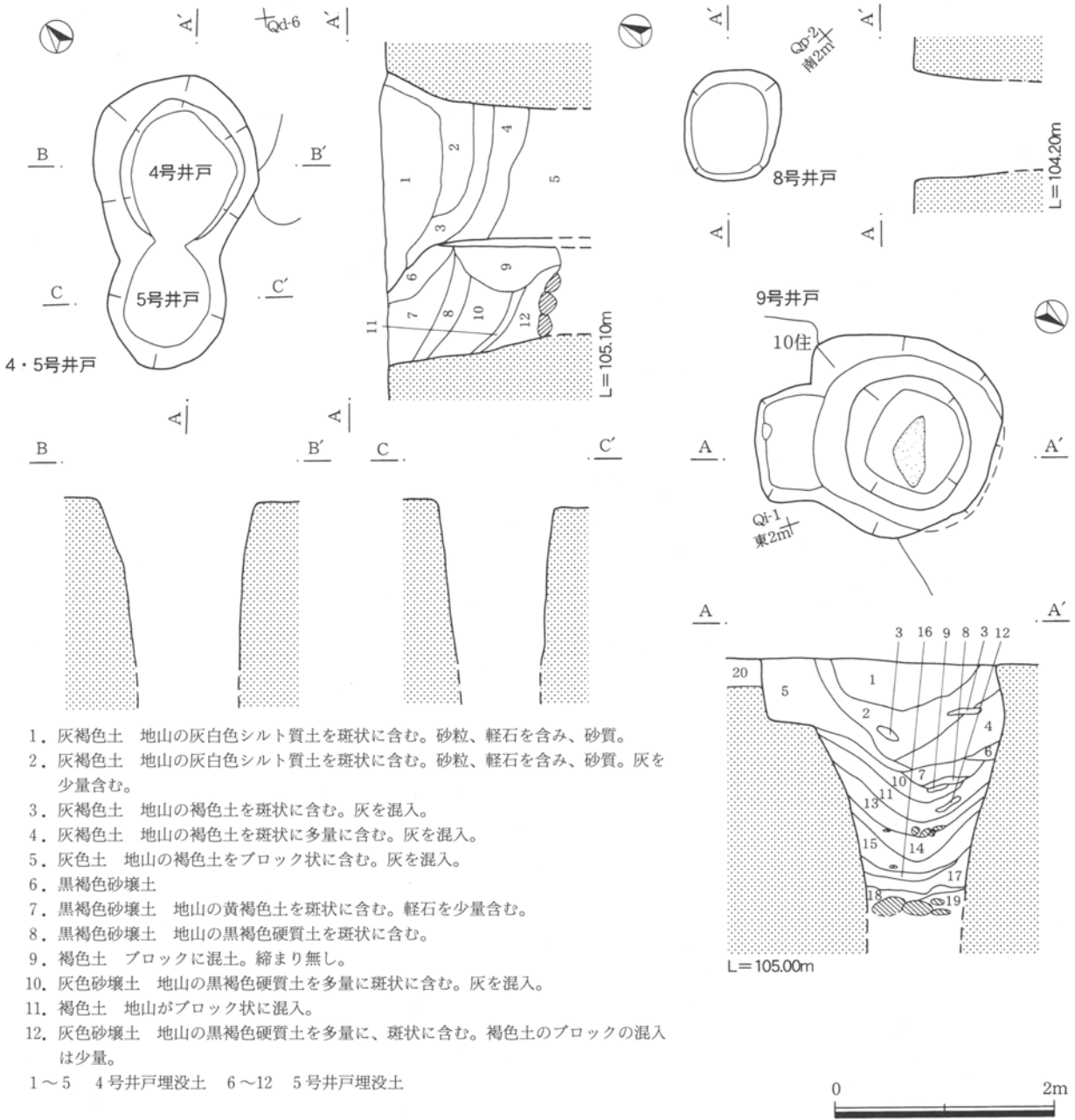


1. 暗灰褐色土 軽石をまばらに含む砂壤土。
2. 灰褐色砂質土 ブロック。
3. 暗褐色土 軽石を少量含む。
4. 灰褐色砂質土 ブロック。壁体の崩落したもの。
5. 暗褐色土と灰褐色土のブロックとの混土層
6. 灰褐色土のブロックを主体にした暗褐色土との混土層
7. 暗灰褐色土 灰色の細砂を含む。
8. 暗褐色土 やや青色味をもつ。



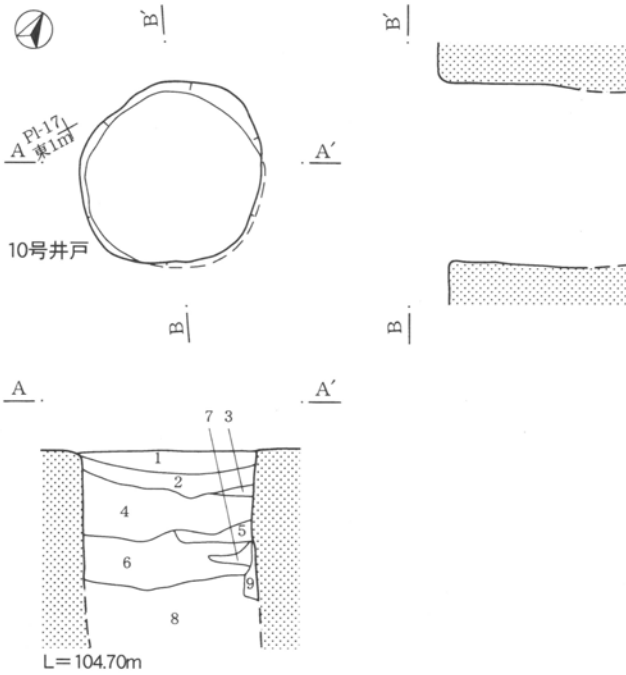
第88図 3区井戸(1)



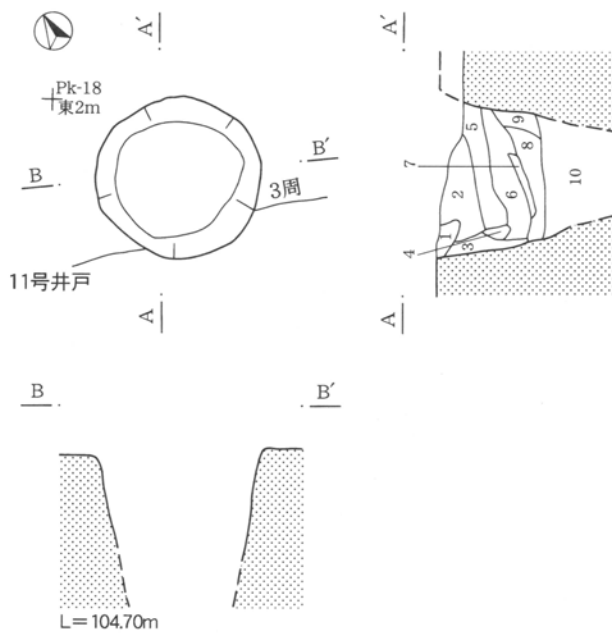


第89図 3区井戸(2)

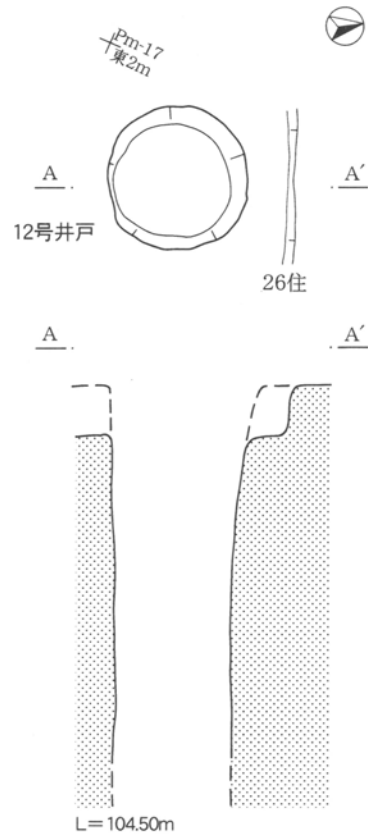
第2章 荒砥諏訪西遺跡の調査



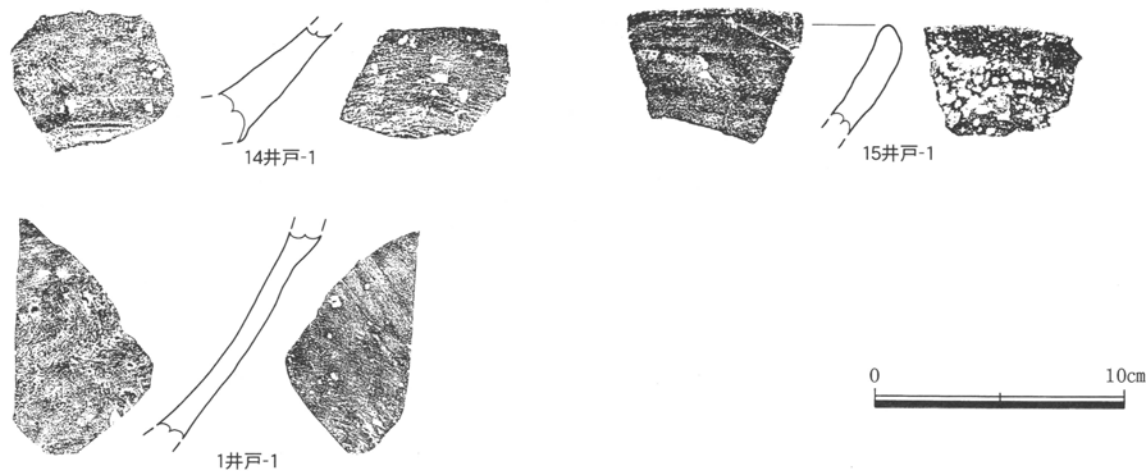
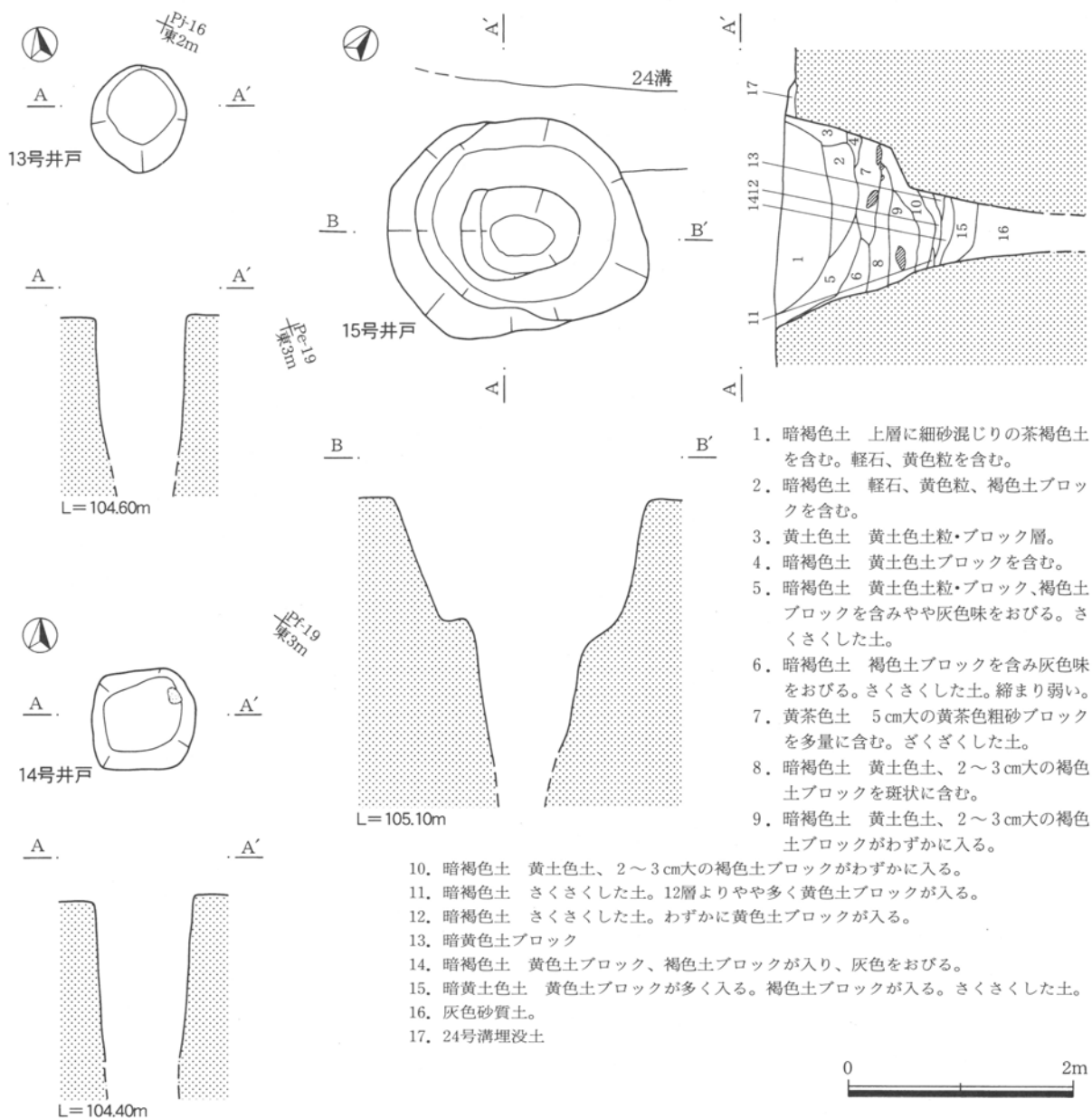
1. 淡黄褐色土 白色軽石粒、黄色土粒を含む。砂質で有るが締まり有り。
2. 淡褐色土 白色軽石粒を1層より多く含む。黄色土粒を含む。砂質で有るか締まり有り。
3. 褐色土 白色軽石粒を多く含む。やや砂質であるが締まり有り。
4. 淡褐色土 2層に類する。白色軽石粒、焼土粒、黄土粒を含む。Hr-FPを含む。ざらざらしている。
5. 淡褐色土 1層に似る。白色軽石粒をわずかに含む。黄土粒を含む。さらさらした土。しまり有り。
6. 褐色土 2~3cm大のHr-FPを含む。白色軽石粒、黄色土粒を含む。黒色土粒・ブロックを含む。締まり有り。
7. 淡褐色土 5層に類似する。
8. 褐色土 白色軽石粒を含む。黄色土粒・ブロック、黒色土粒を含む。締まり強い。
9. 淡黄褐色土 地山。さらさらしている。



1. 黒色土 淡黄色土粒を含む。さらさらした土。締まり弱い。
2. 淡褐色土 淡黄色土粒、白色軽石粒、焼土粒を含む。さらさらした土。
3. 淡褐色土 白色軽石粒を多く含む。さらさらした土。
4. 黒色土ブロック
5. 暗褐色土 淡黄色土粒、白色軽石粒(2~3mm)、焼土粒を2層より多く含む。さらさらした土。
6. 淡褐色土 淡黄色土粒、黒色土粒、白色軽石粒をわずかに含む。さらさらした土。
7. 黒褐色土 淡黄色土粒、白色軽石粒を含む。締まり、粘性もやや有る。
8. 淡褐色土 淡黄色土粒、白色軽石粒をわずかに含む。締まり、粘性もやや有り。
9. 淡黄褐色土 わずかに白色軽石粒を含む。さらさらした土。
10. 暗褐色土 3~4cm大の淡褐色土ブロックと3~5cm大の暗褐色土ブロックの混土層。締まり強い。



第90図 3区井戸(3)



第91図 3区井戸(4)と出土遺物

土坑 (第93~105図 P L 22~26・35・36)

3区では合計231基の土坑を検出した。分布状況には、若干の粗密の差は見られるものの、2区のような極端な差異は認められない。大溝をはさんで2区から続く調査区南側のグリッド部分内には空白部分が多くみられる。2・7・8・11・12号の各土坑は、長軸方向をほぼ等しくし、列状に検出されており、土地利用の区画線に則して掘削された遺構群の可能性が考えられる。

2区で多数みられた突出部付きの土坑は、3区でも7基検出されている。小穴が集中するPn~g-0~5グリッドの範囲では50・51号が重複、この南側に49号土坑が近接している。

3区では32・53・62号土坑に代表される大規模な遺構も検出された。これらは、他遺跡の報告で竪穴状遺構とされる遺構の範疇に入るものである。規模としては、古墳時代前期の35号住居や50号住居を上回るものの、炊飯施設や柱穴などは確認できない。壁面の立ち上がり、掘り込み面も明瞭さに欠くものであることから居住施設とは断定できなかった。

また、3区検出の土坑中には平面形が円形あるいは長円形を有するものが多数存在することは1・2区の状況と若干異なる点である。

埋没土は、1区・2区の土坑同様、灰褐色土が堆積するものが多数であった。

掘削時期については、2区同様、遺物を出土した事例が少数であり、その大多数の遺物が重複した竪

穴住居との関係をおぼせるものであり、時期の特定のできるものは極めて限られる。62号土坑から片口鉢の破片が、118号土坑から砥石が、122号土坑から陶器挿鉢の破片が、190号土坑から軟質陶器の片口鉢と景祐元寶1点が出土している。(観P 221~224)

墓坑

調査区の南西部分から2基検出した。調査時に墓と認識して墓坑と呼称したため報告でもこれを踏襲した。

3区1号墓坑 (第92図 P L 26)

位置 PI-11

形状 平面形は、南北方向に長軸を有する。長方形で長辺1.13m、短辺0.56mを測る。残存深度は0.23mである。底面は、長軸方向において北側がやや高く、緩やかな傾斜をもって南側に向かって下っている。

埋没土 黒褐色土が堆積、炭化物、骨片を含む。

所見 詳細な掘削時期は不明である。火葬跡の可能性も考えられる。

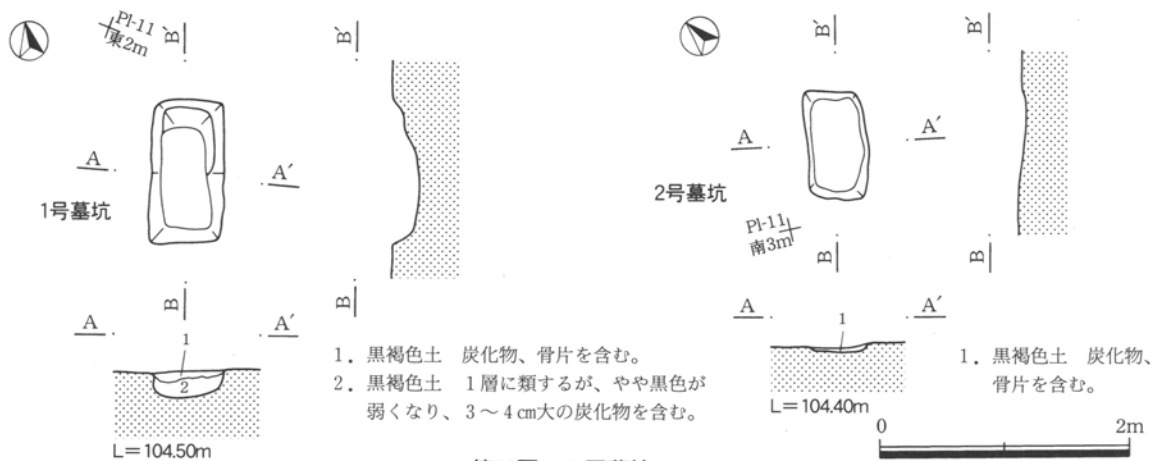
3区2号墓坑 (第92図 P L 26)

位置 PI-11 方位 N-46°-E

形状 1号墓坑の西側に位置する。やや歪んだ形状であるが、南北方向に長軸を有する長方形である。規模は、長辺0.85m、短辺0.48m、残存深度0.07mを測る。

埋没土 黒褐色土が堆積、炭化物、骨片が含まれる。

所見 詳細な掘削時期は不明である。火葬跡の可能性も考えられる。



第92図 3区墓坑

第6表 3区土坑一覧

No.	グリッド	平面形状	長軸方位	規模、深さ	出土遺物	備考	挿図	写真
1	Ne・f-3	長方形か	N-16°-E	144×90~113/63			95	
2	Ne-3	長方形	N-50°-E	144×96/78			95	
3	Ne-4	長方形	N-57°-E	213×94~115/45		15住		
7	Nc-3・4	長方形	N-56°-E	176×113/47			95	
8	Nb・c-4	長方形	N-52°-E	220×105/48		16住	95	22
9	Nb-2	円形	N-56°-E	79×78/11			102	
10	Na・b-2 ・3	不整形	N-66°-E	318×145~218/18		小穴		
11	Na-4	長方形	N-32°-W	115×86~111/47			97	
12	Na-4	長方形	N-58°-E	142×100/84				
13	Qt-2	長方形	N-50°-E	<164>×67/12		2住、小穴		
14	Qt-2	円形	N-45°-W	104×94/20			102	
15	Qs-2・3	長方形	N-78°-E	304×248/41			97	22
16	Qs-3	長方形	N-64°-W	104×82/11				
17	Qs-3	円形	N-88°-W	67×65/36				
18	Qt-3	隅丸長方形	N-66°-W	164×137/42			99	
19	Qs-3・4	長方形	N-68°-W	172×94/47		111坑		
20	Qs-4・5	長方形	N-21°-E	178×102/22		小穴	95	
21	Qt-4	長方形	N-60°-W	168×79/13			95	
22	Qt-4	不整形	N-66°-W	215×113/27		小穴		
23	Qt-6	不整形	N-42°-W	68×53/22				
24	Qs-5・6	隅丸長方形	N-63°-W	140×80~100/11			99	
25	Qs-7	不整形	N-85°-E	116×62~80/13		小穴		
26	Qs-7	不整形	N-49°-W	93×81/9				
27	Qs-7・8	長方形	N-47°-W	85×58/19				
28	Qs・t-7 ・8	正方形	N-59°-W	82×77/21			99	
29	Qs-8	長円形	N-88°-E	68×55/23			100	
30	Qq-0	不整形	N-78°-E	104×83/19		礫出土。		
31	Qq-1	円形か	N-6°-E	82×77/-				
32	Qq・q-1 ・2	隅丸長方形	N-55°-W	370~486×308~ 404/29.5			98	22
33	Qq・r-2	長方形	N-81°-W	144×100/45		小穴		
34	Qq-2・3	長方形	N-72°-W	120×105/38		小穴		22
35	Qq-2・3	円形か	N-5°-W	100×100/61.5		208坑		
36	Qp・q-3	長方形	N-60°-W	106×75/71				
37	Qq-3	円形	N-46°-E	58×56/33			102	
38	Qr-2	不整形	N-32°-E	88×77/17				
39	Qr-3	円形か	N-57°-E	97×88/18			102	
40	Qr-4	不整形	N-42°-E	68×47/14		小穴		
41	Qr-4	長円形	N-29°-W	83×64/10				
42	Qq・r-4	長円形	N-76°-E	82×66/27				
43	Qq-4・5 Qr-4	不整形	N-80°-E	108×58/38		小穴		
44	Qp・q-6	長円形	N-12°-E	91×80/14			100	
45	Qq-6	隅丸長方形	N-67°-E	97×70/13				
46	Qq-7	隅丸正方形	N-14°-W	73×72/19		小穴	100	
47	Qq-7	円形	N-43°-E	59×64/15			102	
48	Qp-3	不整形	N-20°-W	86×52~78/12	須恵器甕		101	
49	Qp-0・1	隅丸長方形か (突出部)	N-77°-E N-88°-E	230×220/105 60		46住→	93	22
50	Qn-0・1 Qo-0	隅丸長方形 (突出部)	N-4°-E N-60°-W	348×208/146 112	須恵器甕、土師器 甕	4住、51坑、3墳。主室部底面に 工具痕。	93	22
51	Qn-0	長方形 (突出部)	N-5°-E N-72°-W	414×224/151 113		4住、50坑	94	22
52	Qn・o-1	長方形か	N-14°-E	112×80/5				
53	Qo・p-1 ・2	隅丸長方形	N-63°-W	415×393/28.5		小穴	98	23
54	Qo-2	円形	N-49°-E	57×52/66				
55	Qo-2	不整形	不明	64×54/20		小穴		

第2章 荒砥諏訪西遺跡の調査

No	グリッド	平面形状	長軸方位	規模、深さ	出土遺物	備 考	挿図	写真
56	Q o-2	不整形	N-74°-W	76×60/21		小穴		23
57	Q o-2	不整形	N-63°-E	60×36/53.5		小穴		23
58	Q o-2・3	不整形	N-60°-E	66×54/69.5		59坑、小穴。長円形か？		23
59	Q n-3	長方形か	N-20°-E	200×140/85		58坑、小穴		23
60	Q n・o-3	長方形	N-30°-E	224×184/13.5		74・211坑、小穴	97	23
61	Q o-3	長円形	N-15°-E	85×62/17				
62	Q o-3・4	不整形	N-19°-E	330~430×340/ 22.5	陶器片口鉢	63坑、2溝、小穴	101	23
63	Q o・p-4	不整形	N-13°-E	246×190/14		62坑、小穴		
64	Q p-4	長方形	N-74°-W	167×120/32			96	
65	Q p-4	不整形	N-46°-E	61×46/23				
66	Q p-4	不整形	N-28°-E	113×68/18		131坑、小穴		
67	Q o-5	円形	N-67°-E	118×<80>/26.5		1・2井		
68	Q o-6	円形	N-12°-W	139×126/45			102	
69	Q p-5・6	不整形	不明	89~235×88~200 /36				
70	Q m-1	隅丸長方形	N-34°-W	93×68~91/16				
71	Q n-1・2	不整形	N-26°-E	232×138~206/19		9住、小穴		
72	Q n-2	隅丸長方形	N-21°-E	122×100/35			99	
73	Q n-2・3	長方形	N-7°-E	173×80/31			96	
74	Q n-3	不整形	不明	<78>×80/12		60坑、小穴		
75	Q n-4	長方形	N-22°-E	157×105/37		195坑、2溝		
76	Q n・o-4	不整形	不明	187×48~116/21		小穴		
77	Q l・m-3	隅丸長方形	N-27°-E	121×92/22				
78	Q m-3	長方形	N-64°-W	183×88~114/27				
79	P k-19	長方形	N-59°-W	150×91/21		171坑		25
80	Q l-1	不整形	N-77°-W	<116>×82/8		3墳、小穴		
81	Q l-2	長方形か	N-58°-W	168×97/24		7溝		
82	Q l-3	長方形	N-25°-E	180×82/16			96	
83	Q l-3	隅丸方形	N-71°-E	84×78/8			100	
84	Q l-4	長方形か	N-57°-W	192×94/37		37住、85坑		23
85	Q l-4	不整形	N-32°-E	<113>×145/37		37住、84坑		
86	Q l-4・5	長方形	N-51°-W	122×84/26			96	
87	Q l-7	長円形	N-20°-E	124×116/34			100	
88	Q k・l-7	円形か	N-44°-E	104×100/20				
89	Q o-1	長方形か	N-49°-E	87×64~84/6				
90	Q l・m-2	不整形	N-21°-E	304×200/39		小穴		
91	Q h-5	不整形	N-36°-E	102~132×82/21				
92	Q i-5	長方形か	N-40°-E	173×85/10		小穴		
93	Q i-5	長方形か	N-32°-E	110×92/14		小穴		
94	Q i・j-5	長方形か	N-41°-E	415×74~104/30		2つの土坑が重複か。	97	
95	Q g-2・3	不整形	N-53°-W	200×112~150/ 30		2坑重複か。	101	
96	Q f-3	不整形	N-71°-E	142×113/28		小穴		
97	Q f-2	長円形	N-3°-W	110×103/20		41溝		
98	Q e・f-2	長方形か	N-29°-E	228×148/26		小穴	96	23
99	Q e-2	円形か	N-3°-W	97×93/30			102	
100	Q d・e-3	隅丸長方形か	N-32°-E	294~330×146~ 192/51		12住、1溝、小穴	99	
101	Q r・s-0	長方形(突出部)	N-89°-E	233×143/135.5			93	23
102	Q j-0・1	長方形か	N-52°-W	138×102/27		5住→		23
103	Q p・q-3	隅丸長方形	N-23°-E	154×92/25		207坑		
104	Q p・q-2	長方形	N-65°-W	88×80/49		207・208坑		
105	Q p-3	不整形	N-4°-W	190×80/14		小穴		
106	Q c-2	不整形	N-54°-W	174×110/38		3畠		

第4節 中・近世以降の遺構と遺物

No.	グリッド	平面形状	長軸方位	規模、深さ	出土遺物	備 考	挿図	写真
107	Qm-2・3	長方形	N-20°-E	150×86/30			96	
108	Qf・g-6	不整形	N-69°-W	124×115/23				
109	Qf-6	円形か	N-86°-W	132×120/23			102	
110	Qf・g-1 ・2	隅丸長方形か	N-17°-E	91×88/24			100	
111	Qr・s-3 ・4	長方形	N-66°-W	<154>×93/8		19坑		
112	Qr・s-3	不整形	不明	104~248×104~ 170/37				
113	Qr・s-4	円形	N-22°-E	64×62/7				
114	Qr-4	不整形	N-17°-E	165×93/22				
115	Nb-10・11	長方形	N-62°-W	130×98/24			96	
116	Qr-1	長方形	N-20°-E	108×62/8			97	
117	Qr-1	長方形	N-8°-E	126×70/39				
118	Qd-4	長方形か	N-21°-E	160×<80>/52.5	砥石	6住、2溝		
120	Qg-1	円形か	N-13°-W	83×75/27		小穴	102	
121	Po-18・19	長円形	N-38°-W	126×117/90.5	土師器杯	25住→	100	
122	Pn-18	円形	N-84°-W	157×150/72	陶器播鉢、土師器 S字甕、不明金属 器	25住	102	24
123	Pj・k-17	円形	N-7°-E	166×156/44		3墳	103	24
124	Qm-0	長方形	N-77°-E	187×104/38	土師器埴・器台		96	24
125	Po・p-18	長方形	N-12°-W	240×84/42		3墳	96	
126	Po・p-18	長方形	N-78°-E	150×90/16		3墳		
127	Pp-18	不整形	N-16°-W	130×70/17.5				
128	Pq-19	長円形か	N-83°-W	132×122/65			100	
129	Pr-18	不整形	N-39°-W	80×70/6.5				
130	Ps-18・19	不整形	N-88°-E	160×140/50				
131	Qp-4・5	不整形	N-57°-W	<120>×85/23		66坑、3溝、小穴		
132	Pj・k-13 ・14	隅丸長方形	N-9°-E	134~168×110~ 133/88			99	
133	Pj・k-13	長方形か	N-1°-E	225~264×190/ 111.5		32住		
134	Pl-12	円形	N-83°-W	175×152/90	土師器長甕	31住	103	
135	Pk・l-13	不整形	N-18°-E	<180>×115/45		31・32住		
136	Qk-5	不整形	N-25°-E	102×72~93/24	土師器鉢・器台・ S字甕・台付甕	小穴	101	24
137	Pj・k-12	円形か	不明	125×<60>/25.5		32住		
139	Pi-16・17	長方形(突出部)	N-58°-W	335×128/110 78		15溝	94	
140	Ph・i-16	不整形	N-83°-W	118×112/32		14溝		
141	Ph・i-16	長方形か	N-28°-E	148~170×95/22			96	
142	Pl-18・19	円形	N-0°-E	171×168/55.5	土師器甔・甕、 石製品(不明)、石 器凹石	29住→、216坑、→7溝、4阜	103	24
143	Pi-17	不整形	不明	60×56/11				
144	Pi-17・18	不明	不明	130×90~120/31		144坑、18溝、1掘立		24
145	Pi-18	不整形	N-40°-E	160×115/39.5		143・145坑、18溝、1掘立		24
146	Pi-18	不整形	N-66°-W	87×80/23		144坑、18溝、1掘	102	24
147	Qj・k-3	隅丸長方形	N-48°-E	174×142/25			99	24
148	Qk-3	長円形	N-76°-W	118×104/17			100	24
149	Qc・d-5 ・6	隅丸長方形か	N-53°-W	198×120/30		39住、小穴。五寸釘と思われる遺 物有。		25
150	Pm-17・18	円形か	N-11°-E	138×124/20			103	
151	Pl-17	長円形か	N-25°-E	148×91/23				
152	Pp-19	長方形	N-70°-W	91×52/12			97	
153	Pp-19	不整形	N-13°-E	55×37/16				
154	Pg-12	不整形、長円形 か(上端では)	不明	100×90/80			101	25
155	Pg-12	長方形か	N-34°-E	107×99/88				
156	Pg-12	円形か	N-14°-E	83×80/20		小穴		

第2章 荒砥諏訪西遺跡の調査

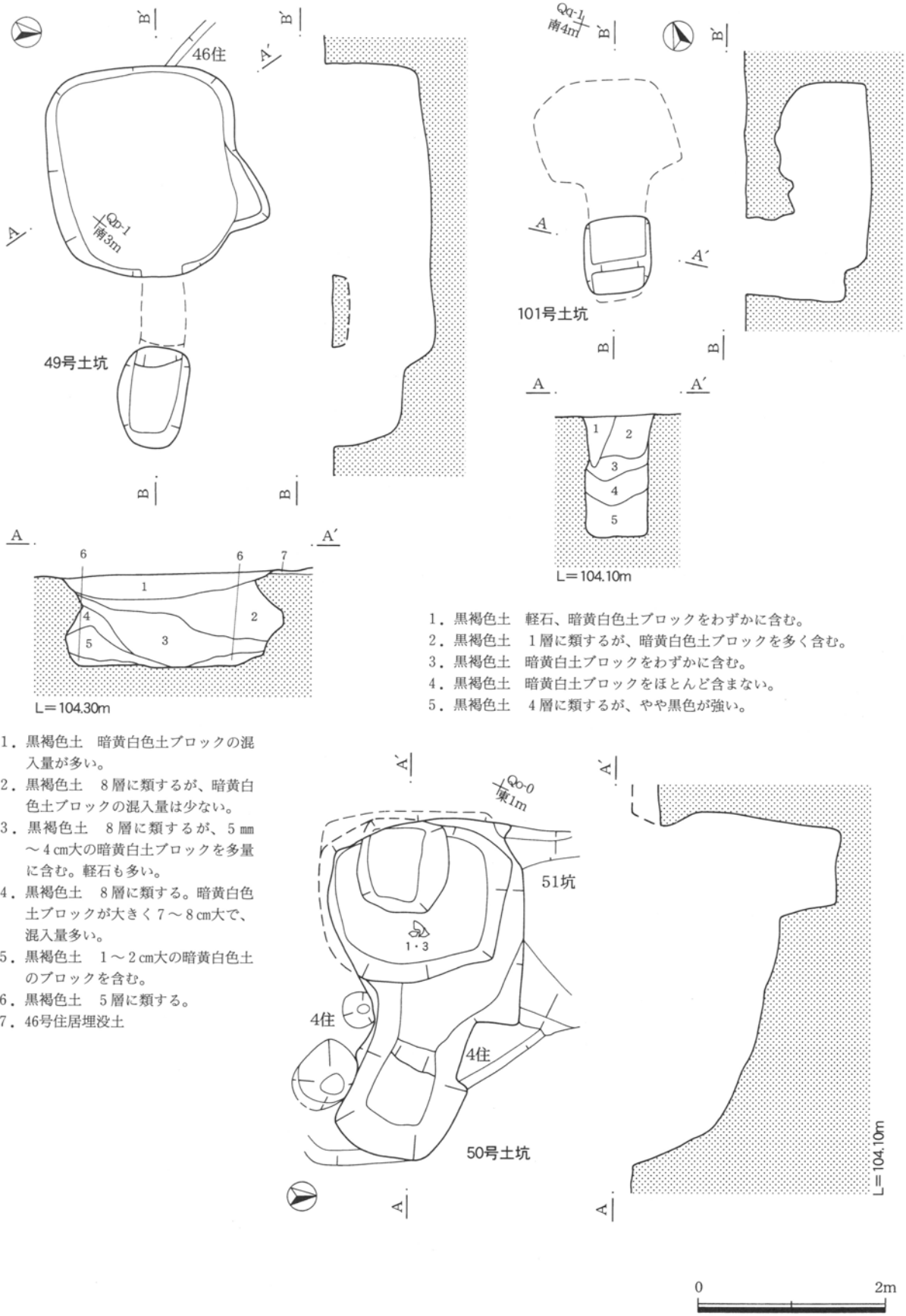
No	グリッド	平面形状	長軸方位	規模、深さ	出土遺物	備考	挿図	写真
157	P e-18・19	正方形か	N-59°-W	105×99/49		40住	100	25
158	P d-12 P d・e-13 ~15	不整形	N-45°-W	1370×612/79.5	須恵器、石器(器種不明)、縄文土器	197・234・236坑、11・12・31溝		25
159	P k・l-17	長方形	N-58°-W	172×90/45				
160	P l-17	長方形か	N-64°-W	216~242×76~110/58				
161	P j-16	長方形か	N-20°-E	238×62/26			96	
162	Q t-7・8	長円形か	N-63°-W	128×109/21			100	
163	P c-13 P d-12・13	不整形	N-18°-E	292×100/71.5	縄文土器	235坑		25
164	P g-15	長方形か(突出部)	N-25°-W N-64°-E	212×180/109 80	土師器ミニチュア		94	25
165	P g-16	不整形	N-82°-E	93×85/13				
166	P m・n-16 ・17	不整形	N-36°-E	94×68/40		26住		
167	P j-19	不整形	N-53°-W	72×55/28	須恵器甕			
168	P f・g-18	長方形	N-31°-E	132×110/62.5		3墳		25
169	P g-19	不整形	N-22°-E	117×86/23				
170	P h-19	長方形	N-52°-W	154×108/33		227坑、小穴		
171	P k-19 Q k-0	長円形か	N-73°-W	171×70~160/72	土師器杯・甕	79坑		25
172	P i-18・19	円形	N-2°-E	193×83/80				
173	P b・c-18	長方形	N-30°-E	136×103/85		222坑、10・18溝	97	
174	P c-16	長方形	N-28°-E	120×106/19.5				
176	P c-13・14 P d-14	長方形(突出部)	N-68°-W N-15°-E	310×245/130 92		47住 42住、234坑	95	26
177	P h-13	長方形(突出部付か)	N-14°-W	140~202×194/45	土師器甕・直口壺・杯	43住、13溝	95	26
178	P d-19	長方形か	N-10°-W	82~108×/7				
179	P c-19	長方形か	N-29°-E	178×106/23.5				
180	P c・d-19 Q c・d-0	長方形	N-45°-W	140×106/48		240坑、30溝 小穴		26
181	P b・c-17	長方形	N-57°-W	123×100/55				
182	P h-16・17	長円形か	N-4°-E	118×100/51		23溝		
183	P i-15・16	不整形	N-30°-E	120×104/36		20・38溝		
184	P h-15	不整形	N-3°-W	105×42/17				
185	P h-15	不整形	N-52°-W	115×75/22				
186	P f-12	長方形	N-55°-W	126×110/28			97	
187	P e-9	不整形	N-12°-E	<142>×100/159	土師器ミニチュア・壺			26
188	P c・d-10	不整形(突出部付か)	N-50°-E	220×177/154		48住、小穴		
189	P d-14・15	隅丸長方形	N-53°-E	86×60/45	人骨			26
190	P b-16	不整形	N-65°-E	296×174~258/127.5	軟質陶器片口鉢、古銭(景祐元寶)	233坑	101	
191	P b-15	不整形	N-51°-W	140×91/23	土師器(器種不明)			
192	P b-15	長円形か	N-7°-W					
193	Q n・o-1	隅丸長方形か	N-80°-E	176×73/10		41住、小穴		
194	Q p-1	不整形	不明	<96~130>×<108>/14				
195	Q n-3・4	長方形	N-59°-W	156×94/26				
196	Q l-6	長方形か	不明	92×72/15		75坑、小穴、2溝		
197	P d-13	長方形か	N-36°-W	165×58~82/22		4溝		
198	Q d-6	円形か	不明	<76>×118/75		158坑		
200	Q r-5	隅丸長方形か	N-30°-E	146×70/29		42溝		
201	P i-14	長方形か	N-55°-W	112×84/41		206坑、小穴 13溝		
202	N c-6	長円形	N-29°-W	146×76/-		焼土あり。	100	
203	N c-6・7	不整形	N-45°-W	110×78/17		小穴		
204	N b-4	長方形	N-10°-E	102×83/23		16住		



第4節 中・近世以降の遺構と遺物

No.	グリッド	平面形状	長軸方位	規模、深さ	出土遺物	備考	挿図	写真
205	Q t-4 N a-4	円形	N-70°-E	108×100/13		小穴		
206	Q r-5	長方形か	N-63°-W	83×54/35.5		200坑、小穴		
207	Q p・q-3	不明	不明	63×46/8.5		103・104・208坑		
208	Q p-2 Q q-2・3	不整形	N-24°-E	48~140×40~102/30		35・104・207坑		
209	Q r-0・1	長方形	N-32°-E	184×64/8				
210	Q r・s-0	長円形か	N-56°-W	106×88/44		19住		
211	Q n-2・3	隅丸長方形か	N-60°-W	<87>×86/13.5		60坑		
212	Q n-2	長方形か	N-12°-E	79×62/-				
213	P m-16	不整形	不明	225×112/48.5		26住		
214	P m-16	不整形	N-4°-W	148×83/61.5		3墳、27住		
215	P m・n-15 ・16	不整形	不明	<258>×285/65		3墳		
216	P l-18	長方形	N-27°-E	90×68/22		29住、142坑、7溝、4畠		
217	Q j・k-2 ・3	円形か	N-46°-E	79×73/12			103	24
218	Q k-1	不整形	N-27°-E	121×108/12				
219	Q i-2	長円形か	N-76°-E	116×95/12		円形周溝状遺構		
220	Q i-0	不整形か	N-38°-E	120×104/24				
221	Q i・j-0	長方形か	N-66°-E	101×85/25				
222	P i-18・19	長方形か	不明	240×<142>/27		172坑、10・18溝		
223	P i-18	不明	不明	160×73/14.5		10・18溝		
224	Q g-1	不整形	N-22°-E	92×84/18		小穴		
225	Q g-0・1	長方形か	N-58°-W	166×134/33.5		17・27溝、226坑、小穴		
226	Q g-0	不整形	N-56°-W	138×110/29		17溝、225坑		
227	P g-19	不整形	N-18°-E	88×56/40		169坑		
228	P c-18	不整形	N-36°-E	88×82/8				
229	P c-17・18	不整形	不明	140×105/14		小穴		
230	P d・e-19	長方形か	不明	142×<50>/28		40住		
231	P d-15・16	長方形か	N-20°-E	190×102/51.5		31溝、小穴		
232	P d-15	不整形	不明	<87>×<80>/5		31溝、小穴		
233	P b-16	隅丸長方形か	N-68°-E	82×<58>/29		190坑		
234	P d-14	長方形か	N-20°-E	<244>×<132>/136		158・176坑		
235	P d-12	不整形	N-2°-E	84×<65>/34		163坑		
236	P d-12	不整形	不明	78×<50>/8		158坑		
237	P i-12	不整形	N-21°-W	212×60~114/ 12.5		34住		
240	P c-19	不明	N-51°-W	<150>×50/9.5		179坑、16溝		

第2章 荒砥諏訪西遺跡の調査

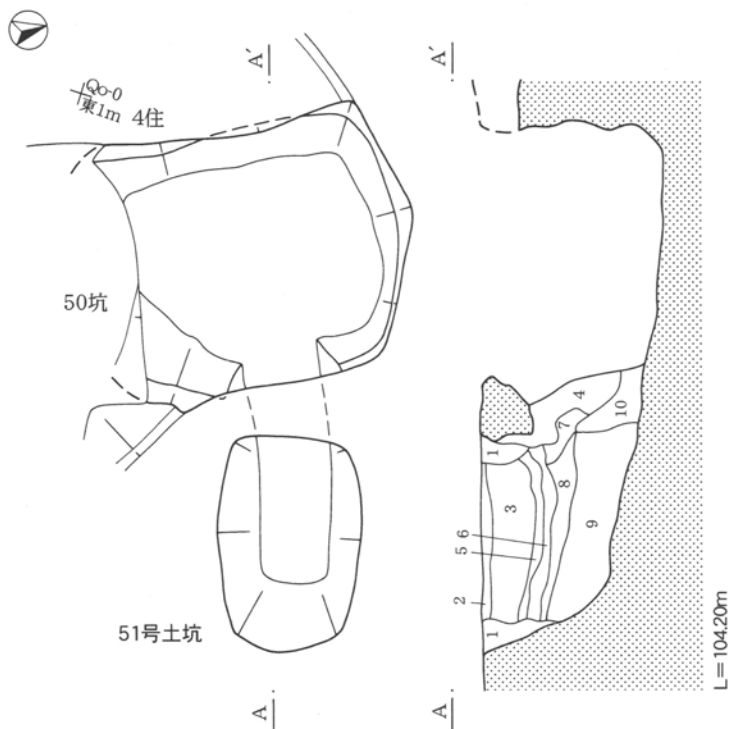


1. 黒褐色土 軽石、暗黄白色土ブロックをわずかに含む。
2. 黒褐色土 1層に類するが、暗黄白色土ブロックを多く含む。
3. 黒褐色土 暗黄白色土ブロックをわずかに含む。
4. 黒褐色土 暗黄白色土ブロックをほとんど含まない。
5. 黒褐色土 4層に類するが、やや黒色が強い。

1. 黒褐色土 暗黄白色土ブロックの混入量が多い。
2. 黒褐色土 8層に類するが、暗黄白色土ブロックの混入量は少ない。
3. 黒褐色土 8層に類するが、5mm～4cm大の暗黄白色土ブロックを多量に含む。軽石も多い。
4. 黒褐色土 8層に類する。暗黄白色土ブロックが大きく7～8cm大で、混入量多い。
5. 黒褐色土 1～2cm大の暗黄白色土のブロックを含む。
6. 黒褐色土 5層に類する。
7. 46号住居埋没土

第93図 3区土坑(1)

第4節 中・近世以降の遺構と遺物

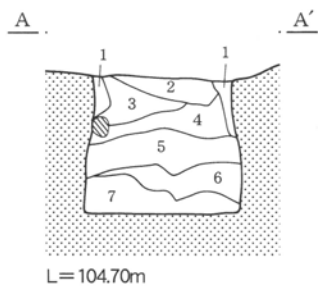
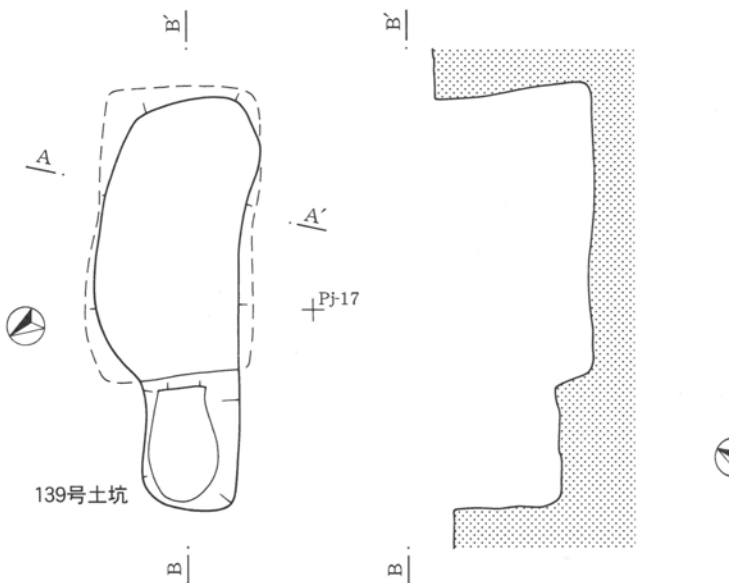


51号土坑土層注記

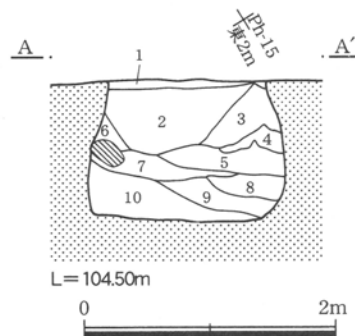
1. 暗褐色土 軽石を少量含む。
2. 黄灰褐色土 細砂質。
3. 黄灰褐色土と暗褐色土の混土層 葉理状に水平堆積。
4. 暗褐色土と5~10cm大の黄灰褐色土ブロックの混土層 黄色軽石粒を含む。
5. 暗灰褐色土 黒色強く、細砂質。
6. 暗褐色土を主体とした黄灰褐色土との混土層 水平に堆積する。
7. 暗灰褐色土 ブロック状。暗褐色土も混入する。
8. 暗褐色土を主体とした灰褐色土小ブロックとの混土層
9. 暗褐色土 灰褐色土小ブロックを含む。
10. 暗褐色土 9層に類するが、色調がやや薄い。黄色軽石粒を含む。

164号土坑土層注記

1. 淡黄色砂質土 1~3cm大の白色軽石粒を含む。
2. 暗褐色土 白色軽石粒、淡黄色土土粒を含む。縮まり無し。土器片、炭化物有り。
3. 暗褐色土 白色軽石粒、淡黄色土土粒を含む。茶褐色土粒を含む。
4. 暗褐色土 白色軽石粒、Hr-FP、As-C、淡黄色土土粒を含む。
5. 淡黄色土 白色軽石粒、軽石混じりの黒色土ブロック、多量の黄色土土ブロックを含む。砂質。
6. 淡黄色土 白色軽石粒、軽石混じりの黒色土ブロックを含む。砂質。
7. 暗褐色土 As-C混じり黄色土粒を含む。縮まり無し。
8. 暗褐色土 As-C混じり黄色土粒・ブロックを斑状に含む。
9. 淡褐色土 As-C混じり黄色土粒・ブロックを斑状に含む。
10. 淡褐色土 As-C、黄色土粒をわずかに含む。

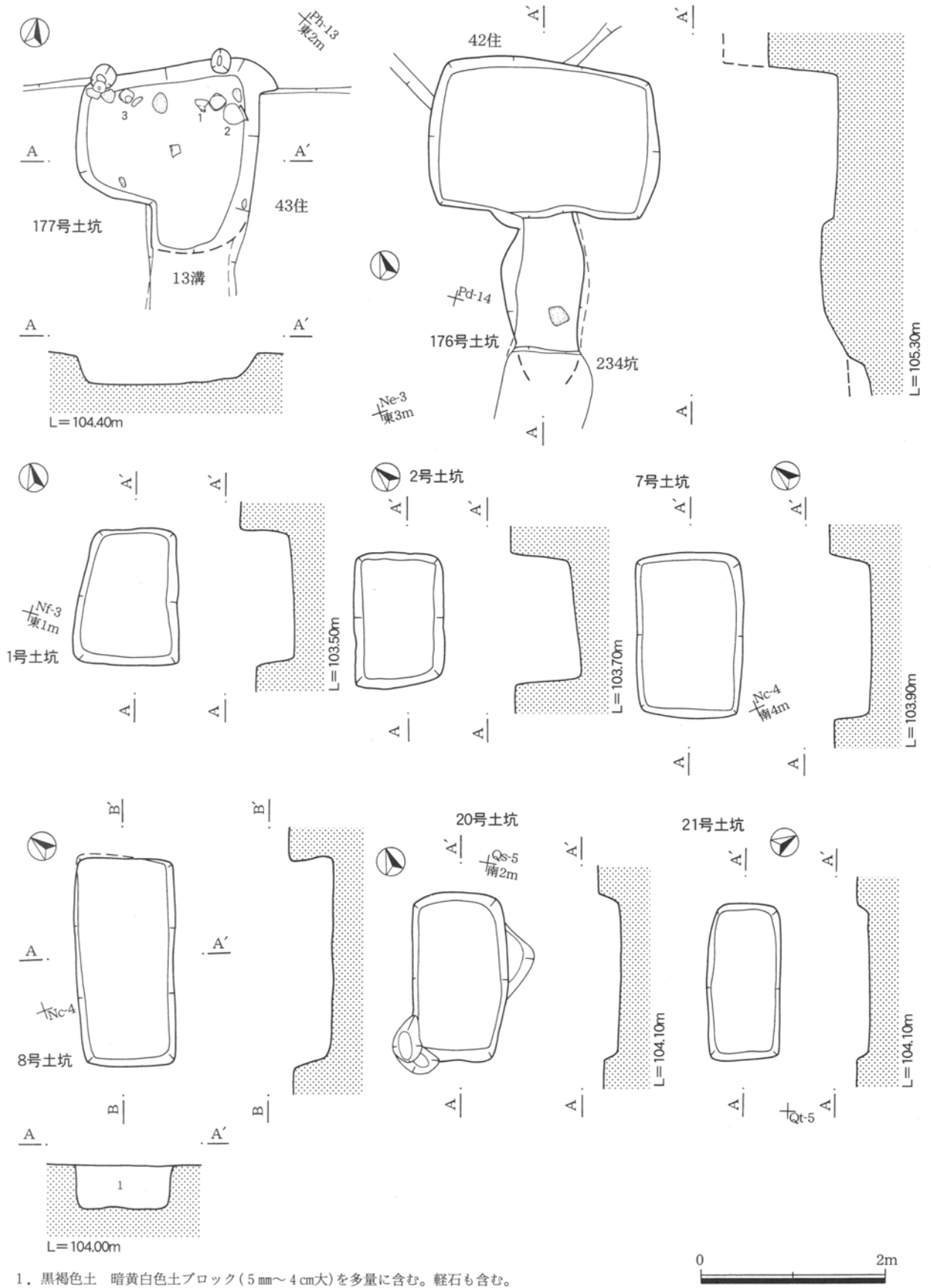


1. 灰黄色砂壤土 ブロック状に混入。
2. 灰褐色土 砂質。白色軽石粒を多量に含む。
3. 黒褐色土 白色軽石粒、砂壤土小ブロックを含む。
4. 灰褐色土 白色軽石粒、黄色砂粒を多く含む。縮まり無い。
5. 黒褐色土 白色軽石粒を含み、縮まり無し。
6. 灰褐色土 4層と6層がブロック状に混土。
7. 灰黄色砂壤土 天井の崩落土

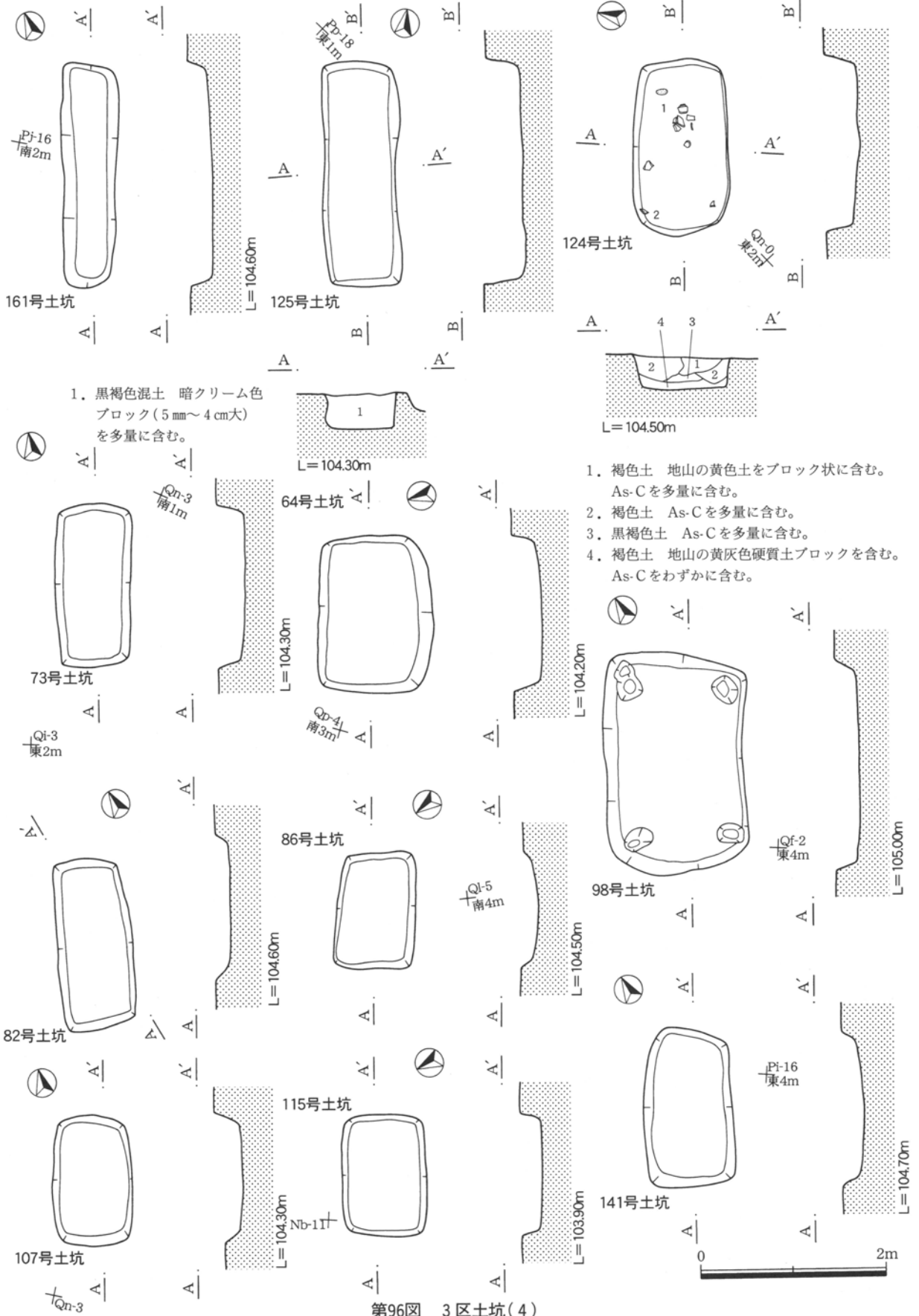


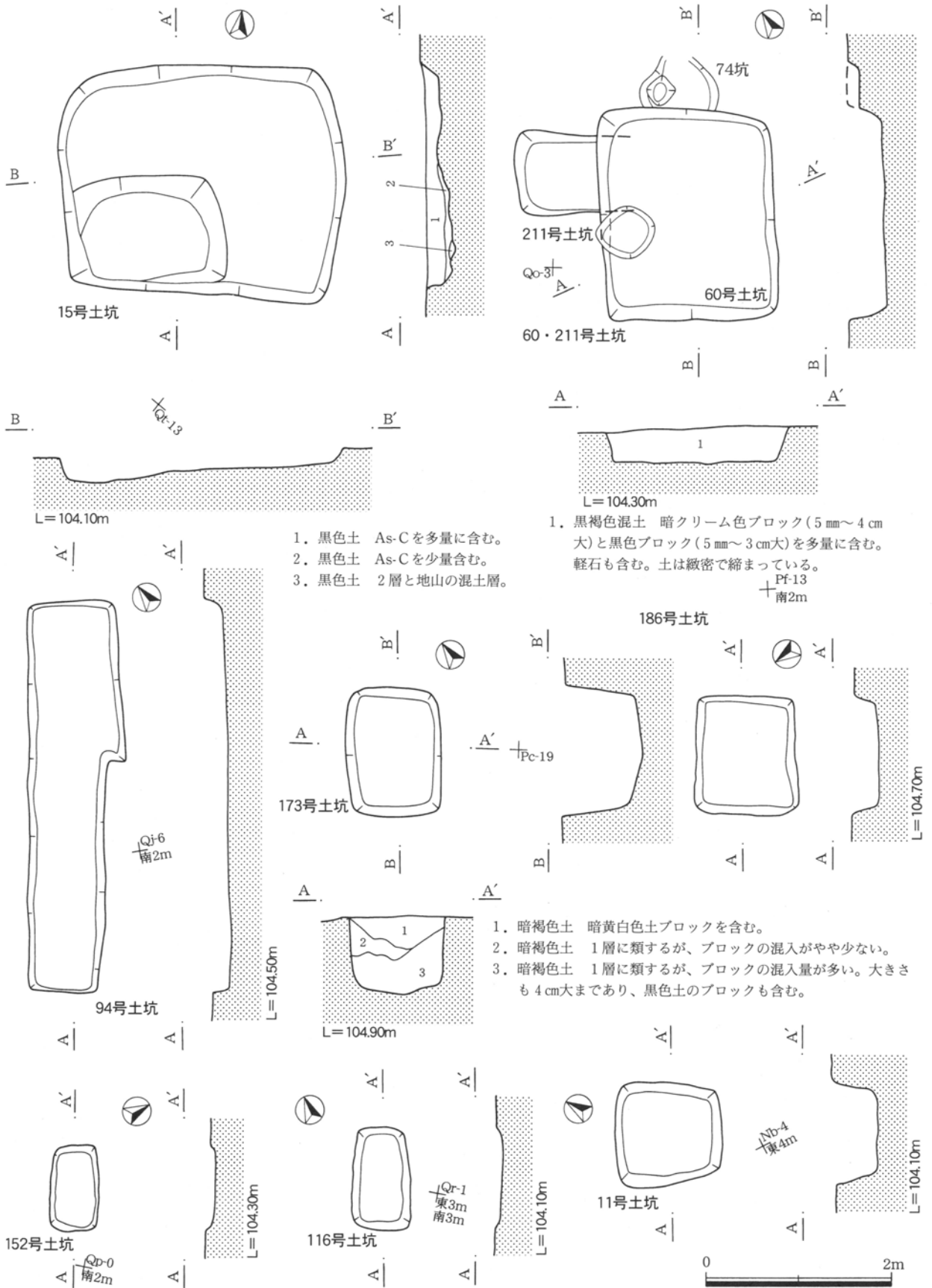
第94図 3区土坑(2)

第2章 荒砥諏訪西遺跡の調査

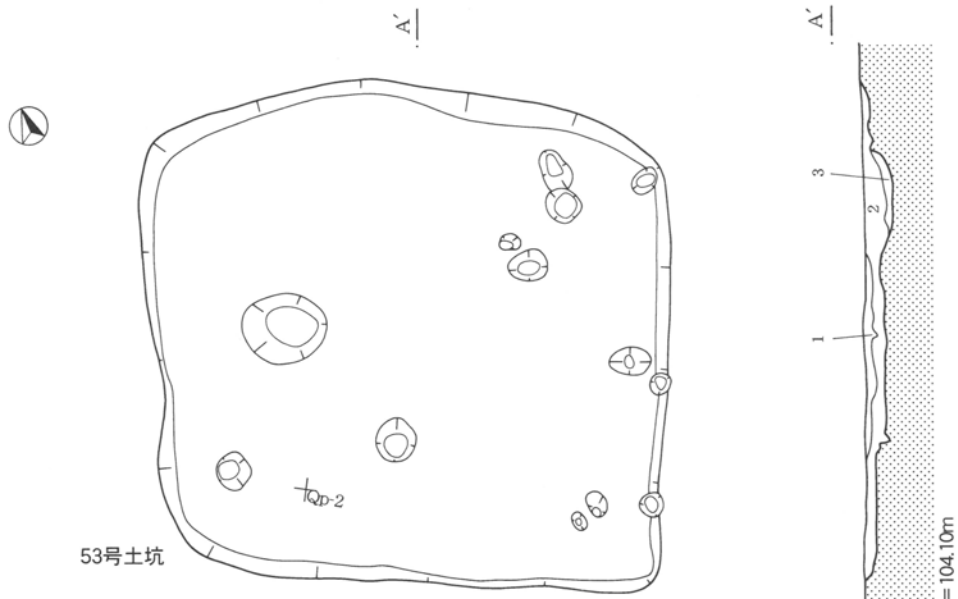


第95図 3区土坑(3)

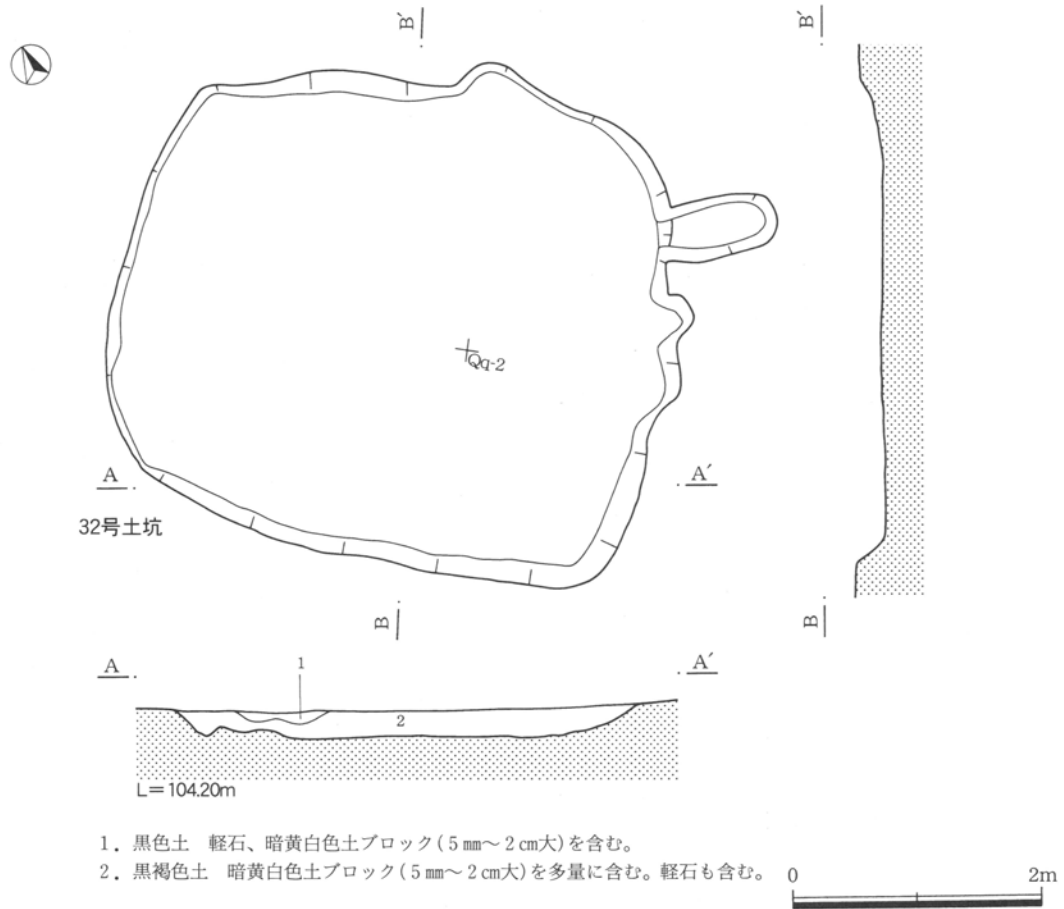




第97図 3区土坑(5)

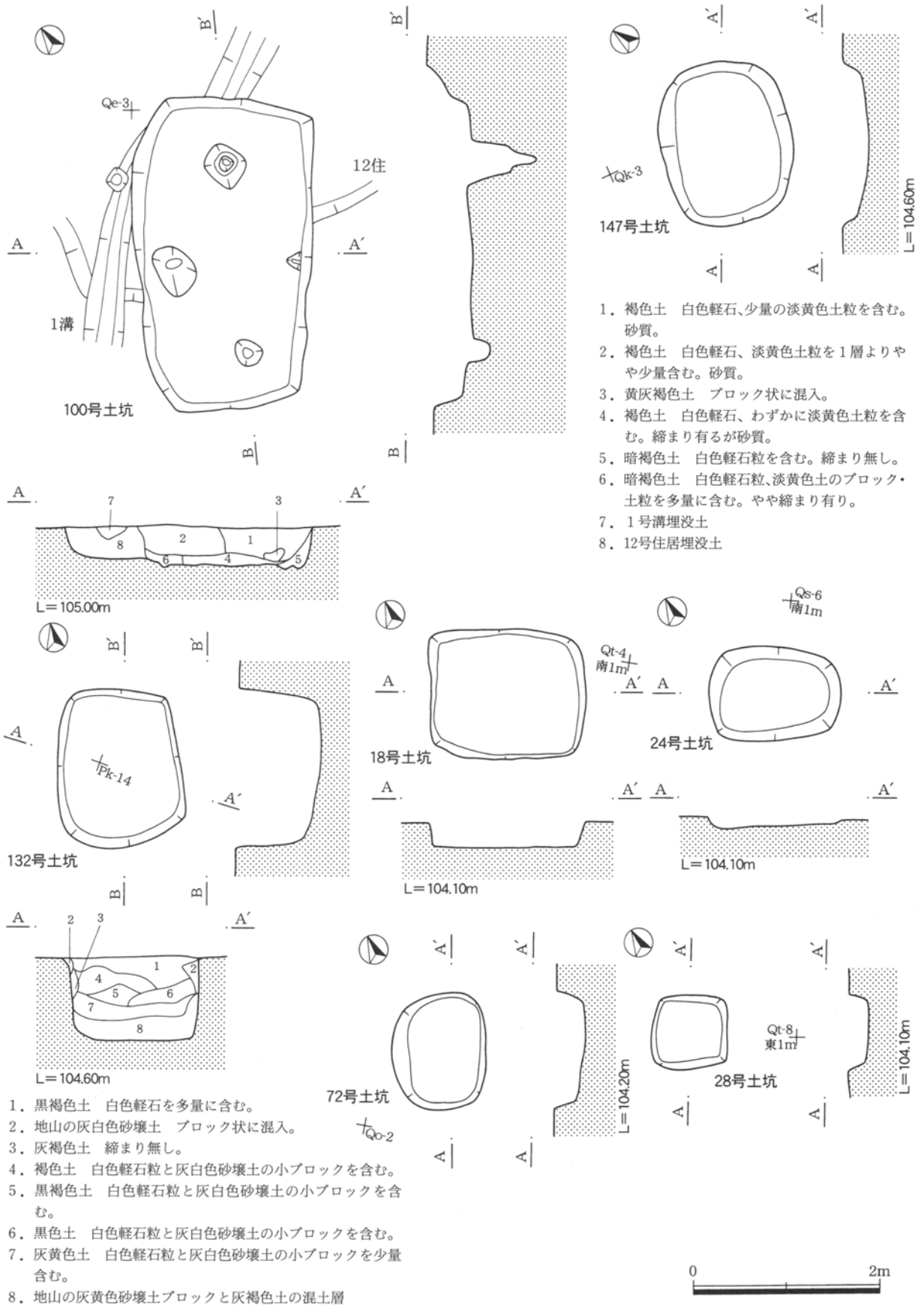


1. 黒褐色土 5mm~2cm大の暗黄白色土ブロックを多量に含む。2層との境目は床面状に固く、縞状の土層堆積がみられる。
2. 黒褐色土 1層に類するが、やや黒色が強い。
3. 黒色土 軽石粒を含む。



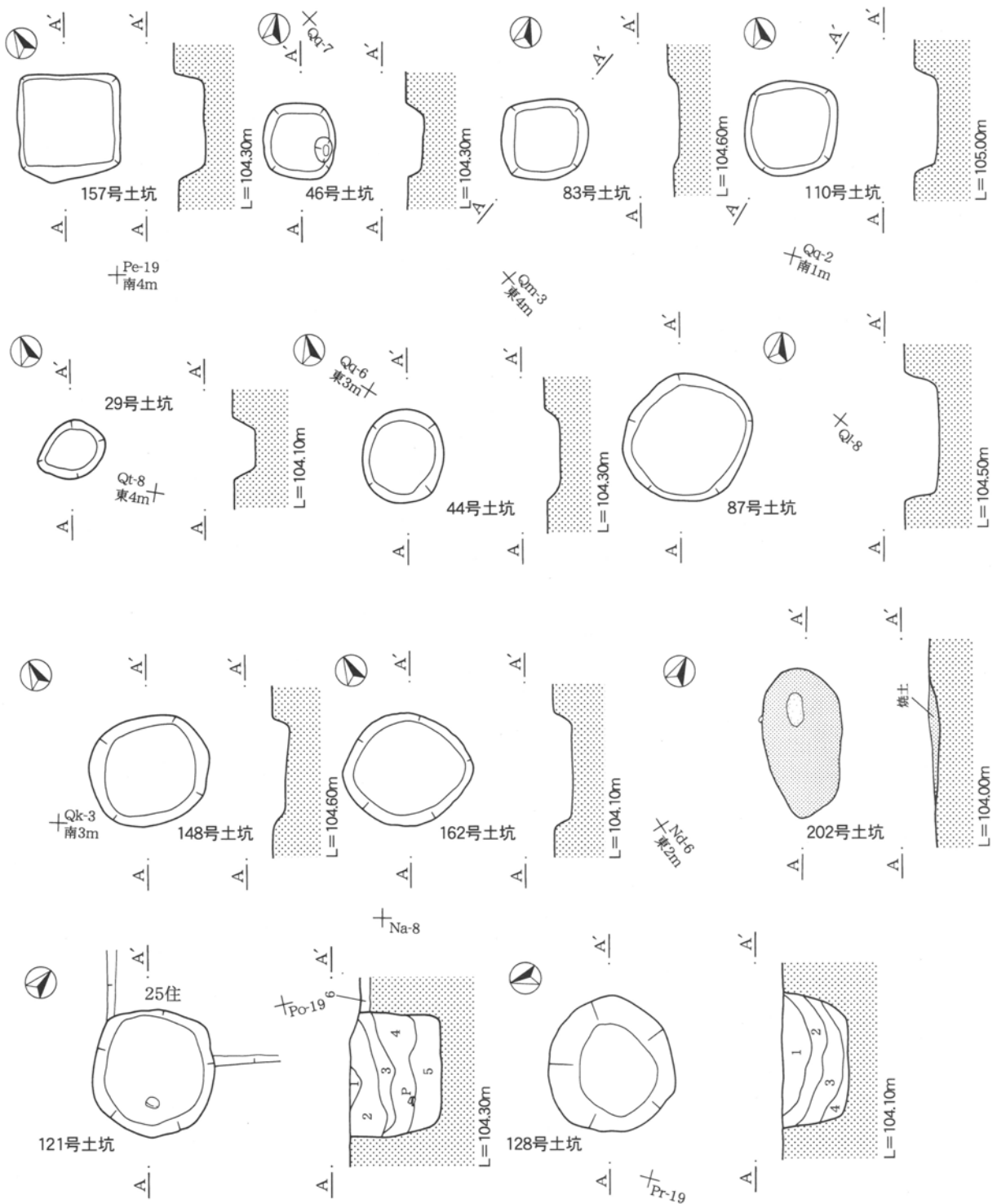
1. 黒色土 軽石、暗黄白色土ブロック(5mm~2cm大)を含む。
2. 黒褐色土 暗黄白色土ブロック(5mm~2cm大)を多量に含む。軽石も含む。

第98図 3区土坑(6)



第99図 3区土坑(7)

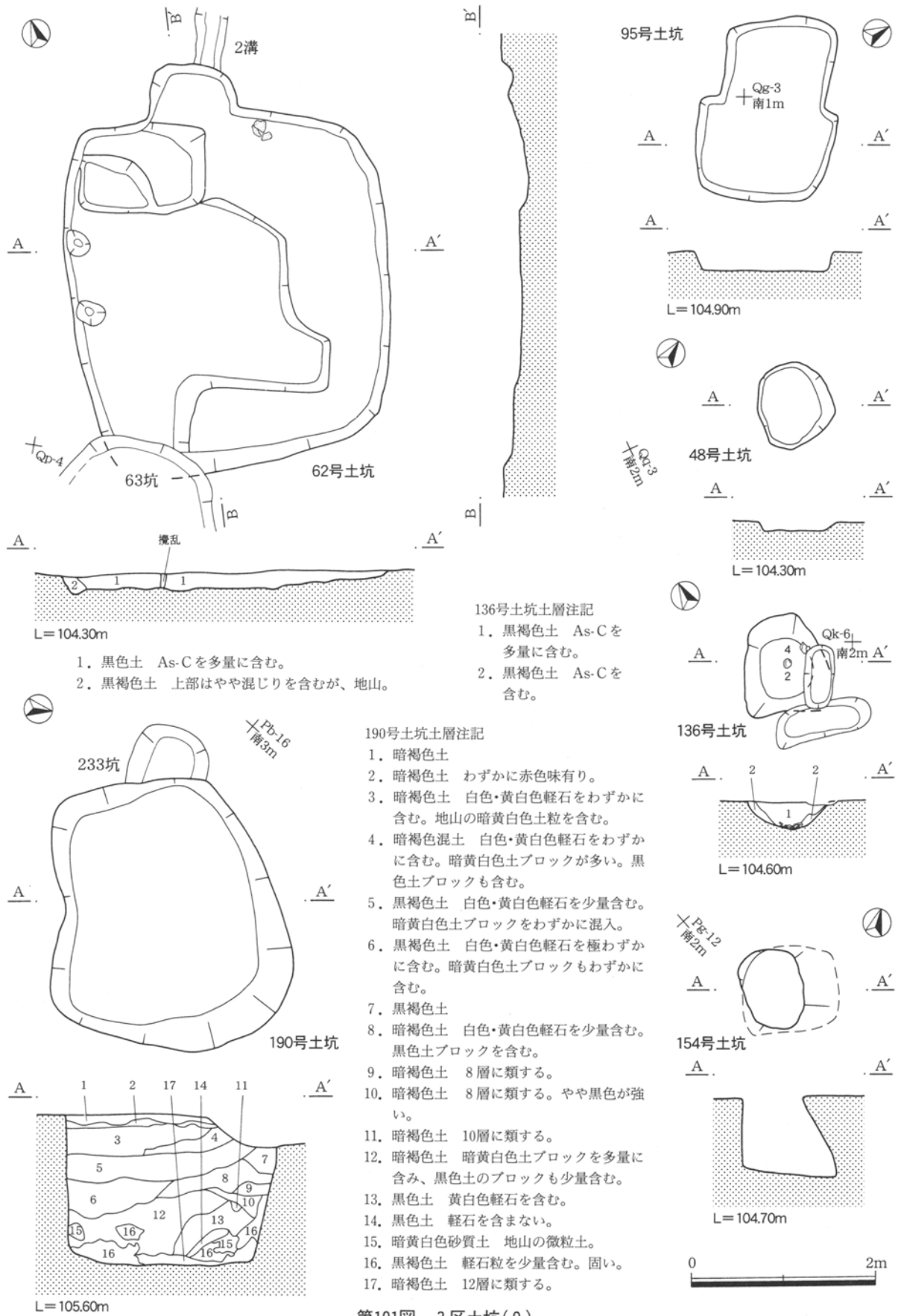




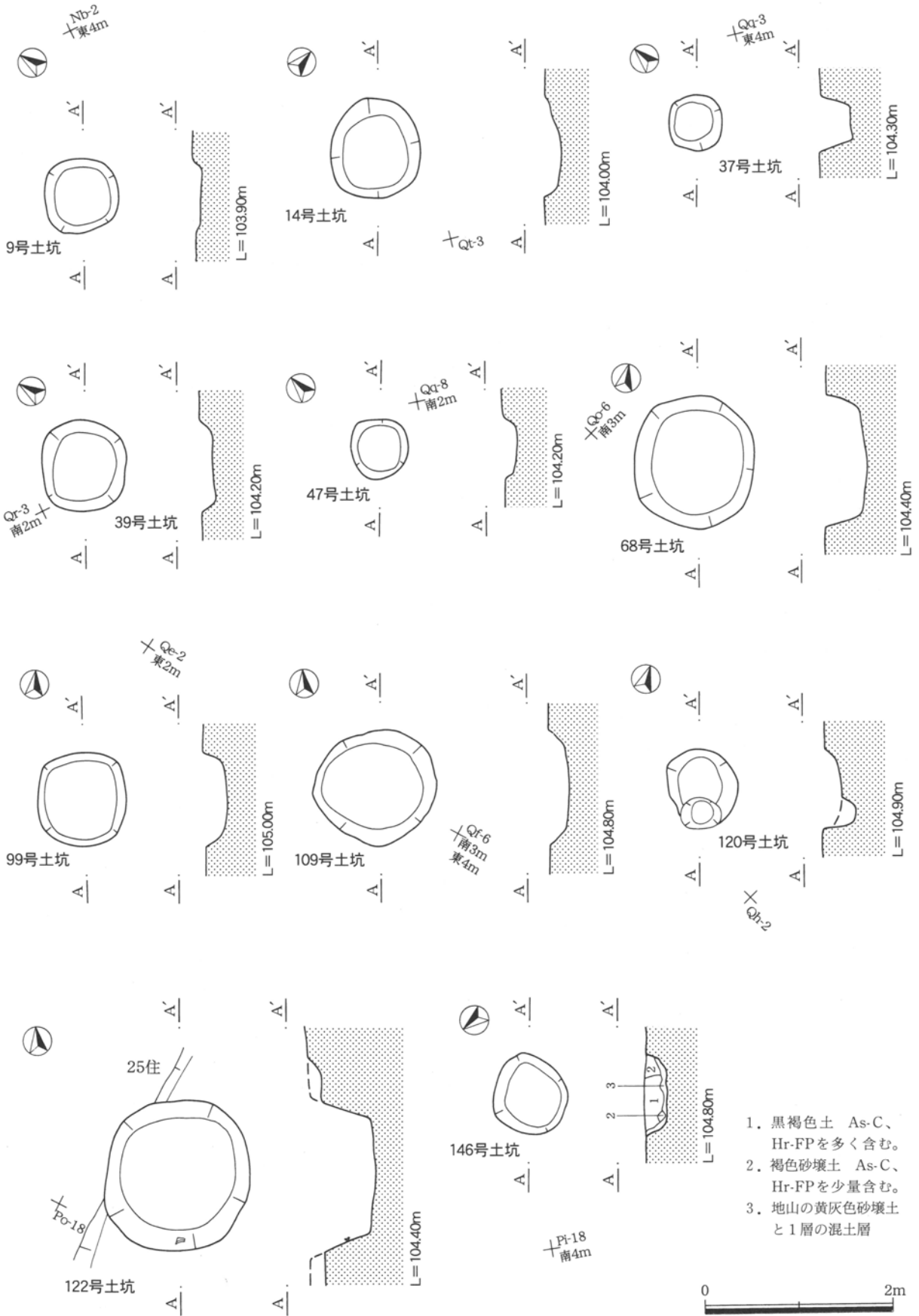
1. 褐色土 As-C軽石を多く含む。軟質。
2. 褐色土 地山の黄色土を斑状に多く含む。As-Cを少量含む。
3. 地山の黄灰色土と褐色土の混土層 As-Cを少量含む。硬質。
4. 褐色土 2層と同質だが、黒色が強い。硬質。
5. 褐色土 地山の褐色土を斑状に多く含む。As-Cを含まず、硬質。
6. 25号住居埋没土

1. 黒褐色土 黄白色軽石粒、As-C、Hr-FPを含む。FPは大粒のものあり。
2. 黒褐色土 軽石の量は少なくなる。炭化物、焼土粒を少量含む。
3. 黒褐色土 2層に類するが、軽石粒の混入量がやや多く、2cm大の暗黄白色土ブロックを含む。Hr-FPの大粒のものを含む。
4. 黒褐色土 3に類するが、軽石粒、ブロックともに少ない。

第100図 3区土坑(8)

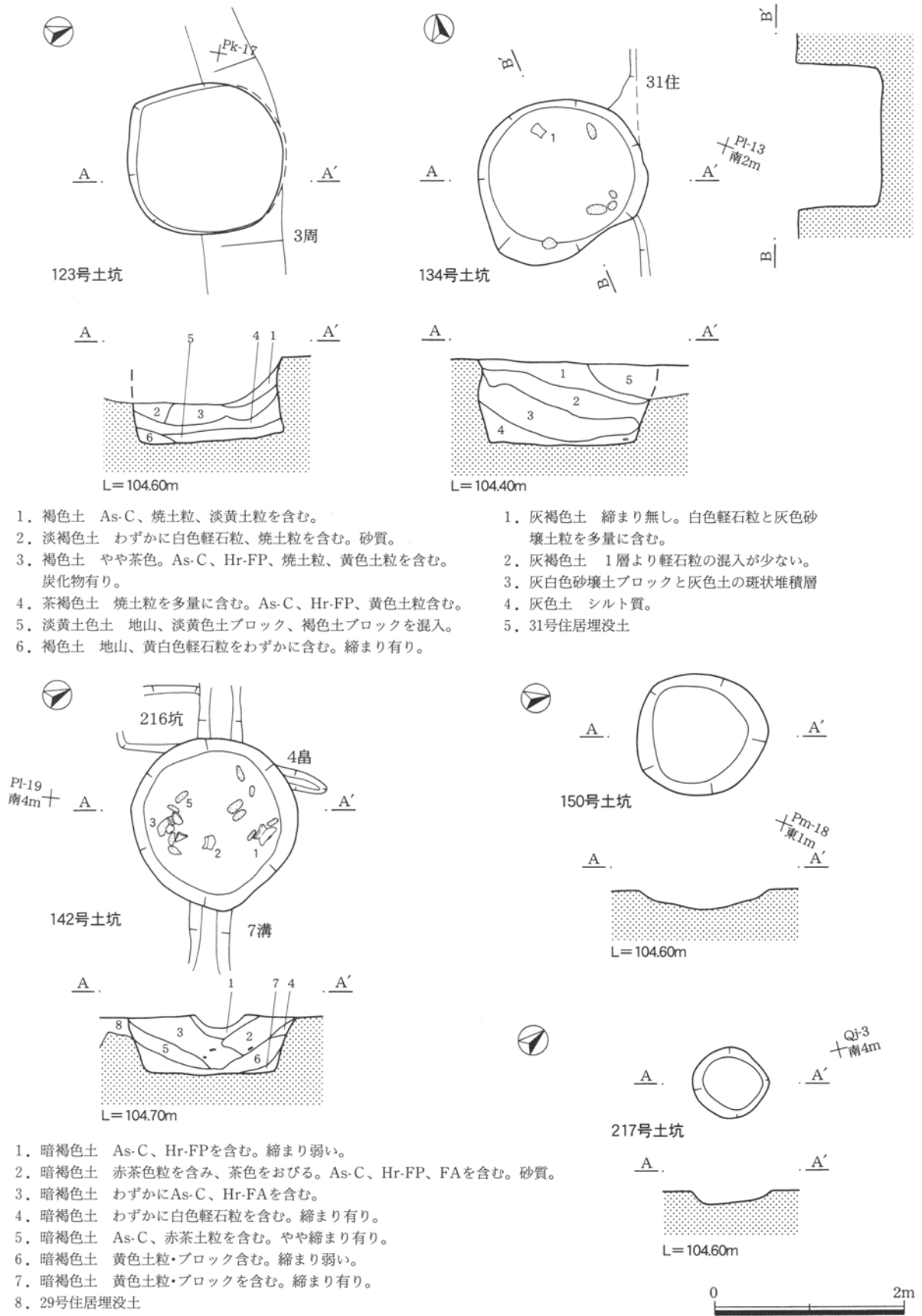


第101図 3区土坑(9)



第102図 3区土坑(10)

第2章 荒砥諏訪西遺跡の調査



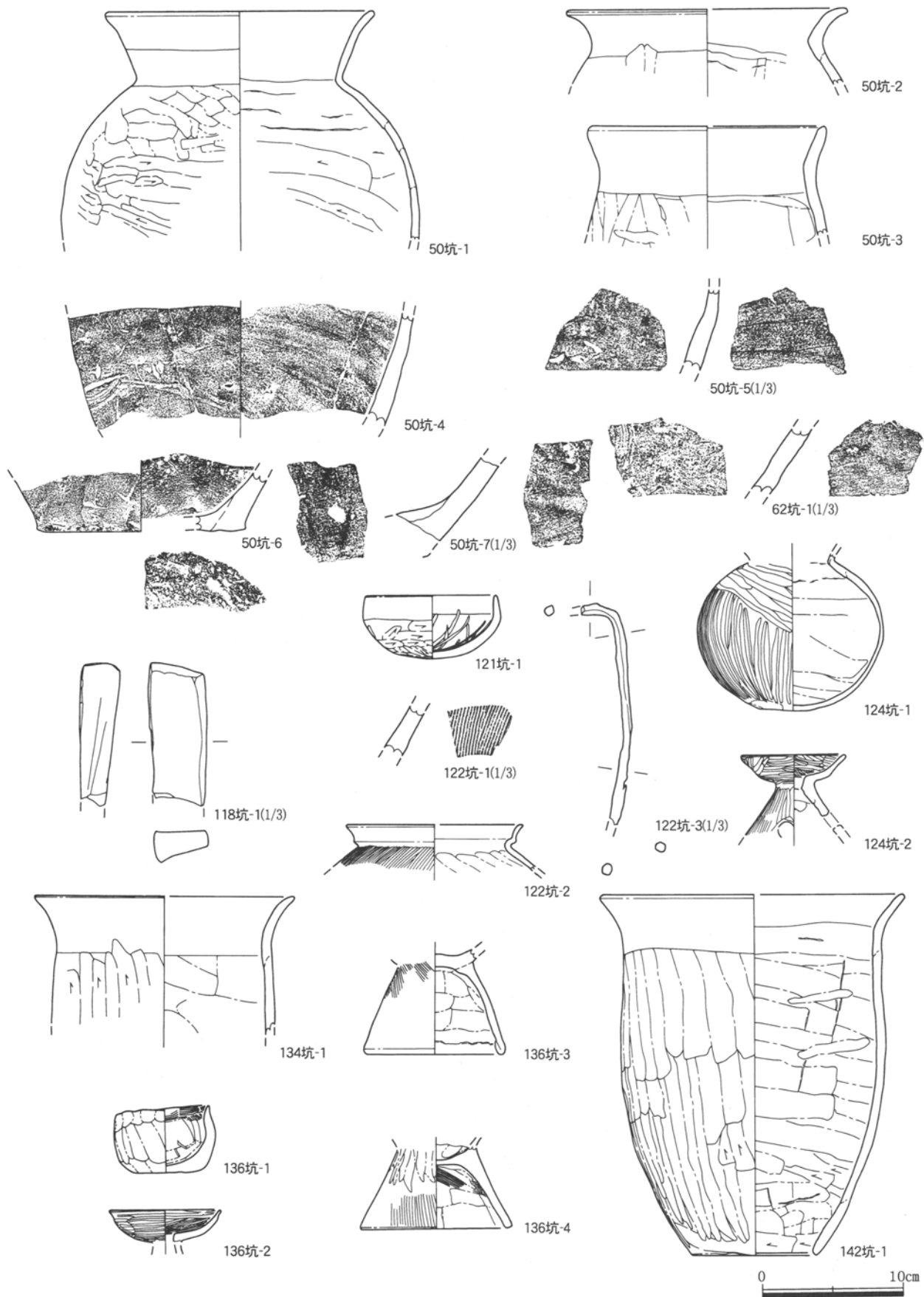
- 1. 褐色土 As-C、焼土粒、淡黄土粒を含む。
- 2. 淡褐色土 わずかに白色軽石粒、焼土粒を含む。砂質。
- 3. 褐色土 やや茶色。As-C、Hr-FP、焼土粒、黄色土粒を含む。炭化物有り。
- 4. 茶褐色土 焼土粒を多量に含む。As-C、Hr-FP、黄色土粒含む。
- 5. 淡黄土色土 地山、淡黄色土ブロック、褐色土ブロックを混入。
- 6. 褐色土 地山、黄白色軽石粒をわずかに含む。縮まり有り。

- 1. 灰褐色土 縮まり無し。白色軽石粒と灰色砂壤土粒を多量に含む。
- 2. 灰褐色土 1層より軽石粒の混入が少ない。
- 3. 灰白色砂壤土ブロックと灰色土の斑状堆積層
- 4. 灰色土 シルト質。
- 5. 31号住居埋没土

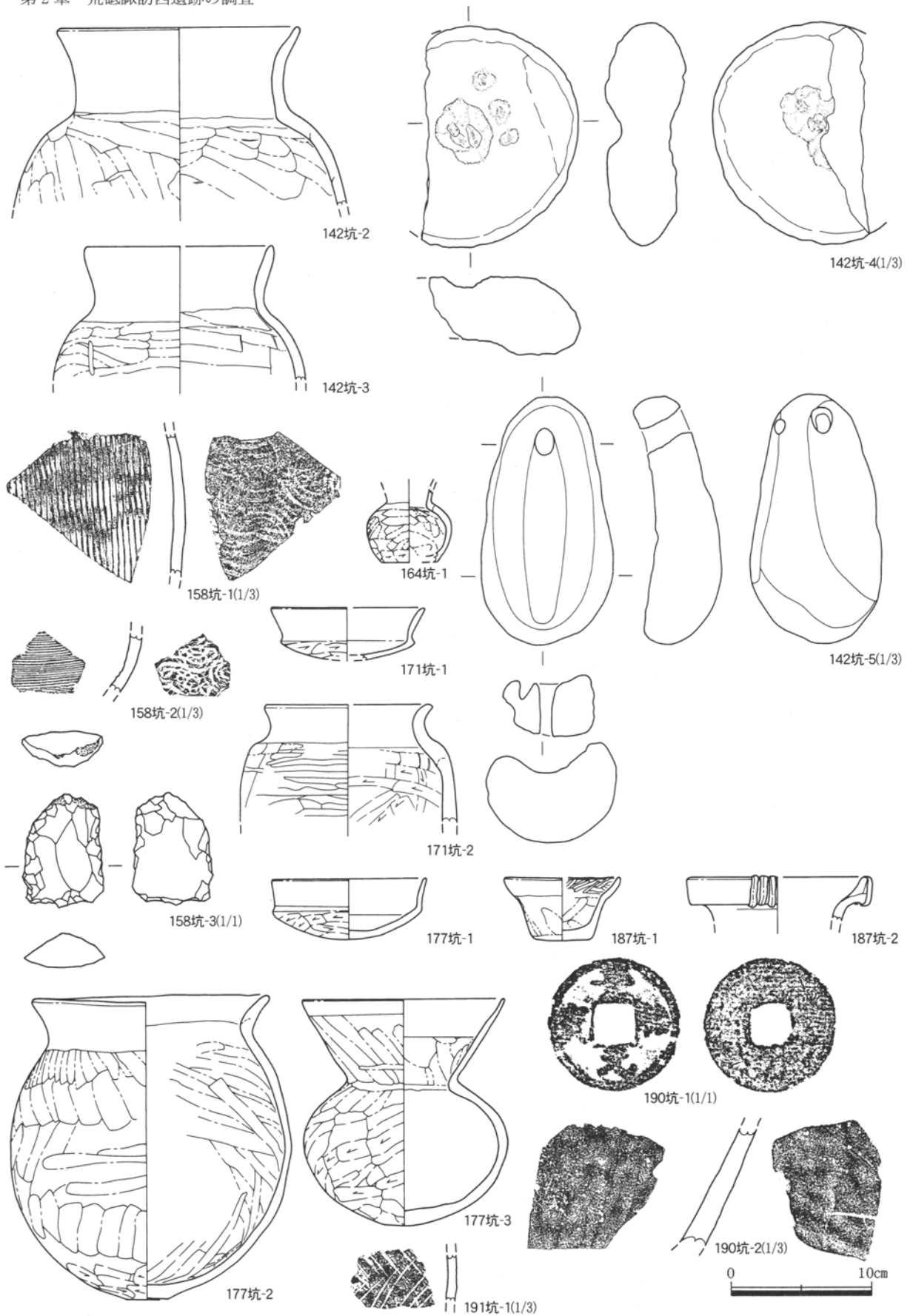
- 1. 暗褐色土 As-C、Hr-FPを含む。縮まり弱い。
- 2. 暗褐色土 赤茶色粒を含み、茶色をおびる。As-C、Hr-FP、FAを含む。砂質。
- 3. 暗褐色土 わずかにAs-C、Hr-FAを含む。
- 4. 暗褐色土 わずかに白色軽石粒を含む。縮まり有り。
- 5. 暗褐色土 As-C、赤茶土粒を含む。やや縮まり有り。
- 6. 暗褐色土 黄色土粒・ブロック含む。縮まり弱い。
- 7. 暗褐色土 黄色土粒・ブロックを含む。縮まり有り。
- 8. 29号住居埋没土

第103図 3区土坑(11)

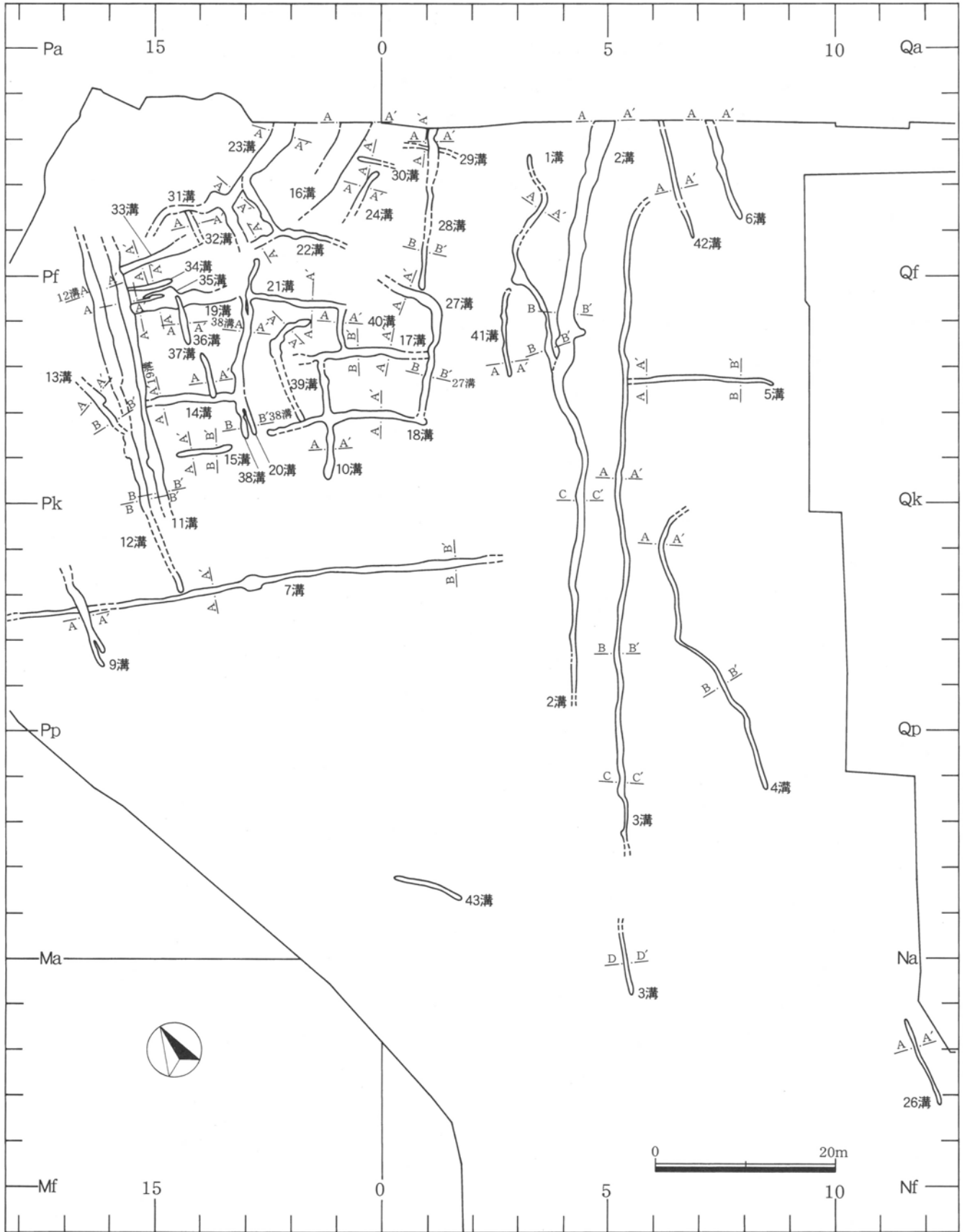
第4節 中・近世以降の遺構と遺物



第104図 3区土坑出土遺物(1)



第105図 3区土坑出土遺物(2)



第106図 3区検出の溝

溝

3区では41条の溝を検出した。調査時では28号溝までを認定していたが整理作業時に溝状を呈する遺構にも番号を付して追加、これらも含めて報告する。埋没土の観察が、全遺構においておこなわれていないが、2号溝、6号溝、24号溝の3条では埋没土中に砂粒の堆積が確認されており、流水があった可能性が高い。

2号溝と3号溝、11号溝と12号溝は、2条がほぼ平行する走向をなしている。2本が同時に存在したのか、時期をずらして掘削されたものかは断定できないが、これらの溝に沿って土地利用における区画の基本線が存在していたものと考えられる。

調査区のiライン以北には10号溝、あるいは18号溝以下、37条の溝が存在する。これらについても掘削時期の細別はできないが、埋没土の観察から土地利用時の区画溝と考えられる。

3区1号溝 (付図2・第107図 P L 27)

位置 Qb-3~Qh-3

重複 12号住居、100号土坑に後出する。2号溝に先行すると思われる。

形状 走向は、西側に向かって大きく弧を描いている。長さ20.67mを検出した。規模は、上幅0.26~1.55m、下幅0.10~1.35mを測る。断面形は、レンズ状を呈し、残存深度は、0.34mである。

方位 N-12°-E、N-50°-E

埋没土 浅間C軽石を含む黒褐色土が堆積している。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

3区2号溝 (付図2・第107・111図 P L 27)

位置 Qb-4~Qo-4

重複 各竪穴住居に後出する。62・75・118号土坑とも重複する。1号溝に後出すると思われる。

形状 南北方向の溝で、長さ63.07mにわたって検出した。北端は調査区域外に及んでいる。fからiグリッド内では西側にやや弧を描いている。全体の規模は、上幅0.32~2.28m、下幅0.18~0.62mを測るが、最大幅は、掘り返しによるもので、一時期の規

模は、上幅0.9m、下幅0.5mほどである。断面形は、逆台形を呈していたと考えられ、残存深度は0.49mである。南北両端における底面の比高差は0.35mで、南側が低い。

方位 N-35°-E

埋没土 黒褐色土、暗灰茶褐色土などが細かな層をなして堆積、一部であるが砂層の堆積が認められることから流水があったと思われる。土層観察からは少なくとも三度の流路変更、あるいは掘りかえしが確認でき、北端では西から東に向かって移動している。

遺物 陶器高台付椀(1)を出土する。(観P224)

所見 出土した高台付椀の年代から江戸時代の所産と考えられる。

3区3号溝 (付図2・第108図 P L 27)

位置 Qd-5~Na-5

重複 67・131号土坑、5号井戸、5号溝、1号畠と重複する。

形状 2号溝の東側を走る南北溝である。途中の未検出部分、約9.6mを含め、長さ77.20mを検出した。北側部分の長さは68.80m、南側部分7.33mである。規模は、上幅0.18~0.76m、下幅0.10~0.54mを測るが極端な差はない。残存深度は、0.20mと浅く、断面形は、レンズ状を呈する。北側部分の南北両端における比高差は0.78mで、南側に向かって低くなる。

方位 北側N-33°-E、南側N-22°-E

埋没土 不明である。

所見 出土遺物もなく詳細な掘削時期は不明である。

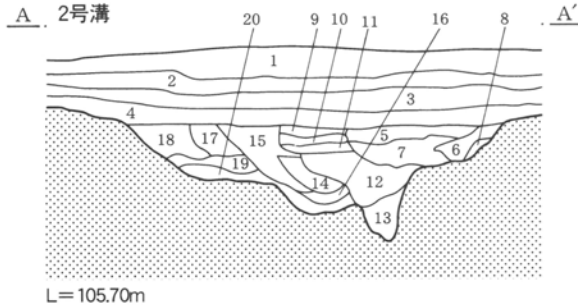
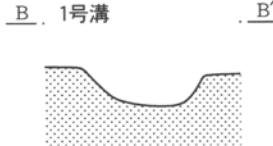
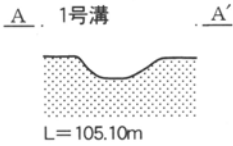
3区4号溝 (付図2・第108図 P L 27)

位置 Qk-6~Qq-8

重複 196号土坑、1号畠と重複する。

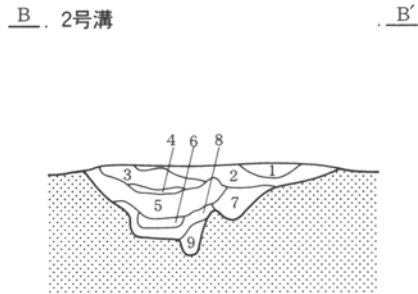
形状 南北方向の溝である。北側半分の走向は、弱く蛇行するが、Qn-6グリッドで大きく屈曲、その走向を南東方向に変えている。規模は、上幅0.25~0.54m、下幅0.10~0.34mを測るが、極端な変化は認められない。断面形は、浅い逆台形、あるいはレン



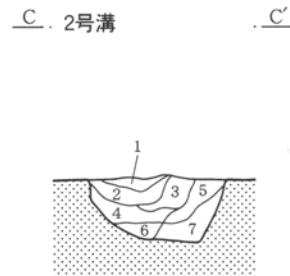


1. 表土
2. 黒赤褐色 As-Bを含む量が少ない。
3. 黒赤褐色 As-Bを含む量が少ない。白色軽石粒を含む。
4. 黒褐色土 As-C、白色軽石粒を多く含む。
5. 暗赤褐色細砂層 黒褐色の地山ブロックを含む。
6. 黒褐色土 暗黄白色土ブロック、軽石を含む。
7. 暗灰褐色土 細砂をブロック状に含む。
8. 黒褐色土 6層と地山の混土層。
9. 黒褐色土 軽石を含む。
10. 暗灰褐色砂層 暗黄白色の地山粒と微細砂層の互層。
11. 暗灰褐色粒層 暗黄白色の地山粒。

12. 黒褐色土 As-C、白色軽石粒を含む。
13. 黒褐色 12層に類するが、軽石の量は少ない。
14. 暗灰褐色土 2cm大暗黄白色土のブロックを含む。下に砂層。
15. 黒褐色土 少量の軽石を含む。
16. 黒色土 軽石を含む。
17. 暗灰褐色土 暗黄白色土を多く含む。
18. 17層に類するが、暗黄白色土に混入量が17層より多い。
19. 暗灰色砂層
20. 黒褐色土 16層より軽石の混入量が多い。



1. 暗灰褐色砂質土 中位は細砂層。
2. 暗灰茶褐色土 軽石を含み、暗黄白色土ブロックを多く含む。
3. 暗灰茶褐色土 軽石を含み、暗黄白色土ブロックを含まない。
4. 暗黄白色土ブロック
5. 暗茶褐色土 軽石・軽石粒を含む。
6. 暗灰褐色細砂層
7. 暗灰褐色砂層 軽石、小石を多く含む。ラミナ状を呈する。
8. 黒褐色土 軽石を少量含む。
9. 黒褐色土 軽石粒をわずかに含む。



1. 暗灰茶褐色土 軽石をわずかに含む。
2. 暗灰茶褐色土 暗黄白色土ブロックを多く含む。
3. 暗茶褐色土 軽石粒を含む。
4. 暗茶褐色土 軽石・軽石粒を多く含む。
5. 暗茶褐色土 3層に類する。
6. 暗灰色細砂層
7. 暗茶褐色土 3層に類するが、軽石粒は極めてわずか。



第107図 3区溝(1)

## 第2章 荒砥諏訪西遺跡の調査

ズ状を呈している。残存壁高は、0.28mである。底面は、全体的に南側に向かって低くなるが一定の割合ではない。

**方位** N-28°-E~N-20°-E

**埋没土** 不明である。

**所見** 出土遺物もなく詳細な掘削時期は不明である。

### 3区5号溝(付図2・第108図)

**位置** Qh-5~Qh-8

**重複** 3号溝と重複する。前後関係は判然としない。

**形状** 東西方向の溝である。長さ15.87mを測る。規模は、上幅0.27~0.56m、下幅0.11~0.36mを測る。残存深度は、0.12m、底面は東側に向かって徐々に下がり、東西両端の比高差は0.09mである。

**方位** N-57°-W

**埋没土** 不明である。

**所見** 出土遺物もなく詳細な掘削時期は不明である。

### 3区6号溝(付図2・第108図)

**位置** Qb-7~Qd-7

**重複** 小穴と重複する。西側5mに42号溝がほぼ平行に走る。

**形状** 南北方向の溝で10.67mを検出した。北端は調査区域外に延びている。規模は、上幅0.29~0.86m、下幅0.08~0.25mを測る。残存深度は、0.15mである。底面は、南側に向かって徐々に下がっている。

**方位** N-14°-E

**埋没土** 上層に灰褐色砂層が堆積しており、流水があったものと考えられる。

**所見** 遺物の出土もなく、詳細な掘削時期は不明である。

### 3区7号溝(付図2・第108図 PL27)

**位置** Pm-11~Ql-2

**重複** 7・27・29・38号住居、4号畠、3号墳に後出する。9号溝には先行する。81・142・216号土坑と重複する。

**形状** 3区中央部分を東西方向にほぼ直線に走る溝である。長さ53.07mにわたって検出した。規模は、

上幅0.35~0.76m、下幅0.15~0.54mを測る。残存深度は、0.24mで、断面形はレンズ状を呈している。底面は、全体的にみると東側から西側に向かって低くなっている。

**方位** N-64°-W

**埋没土** P1-16~18グリッド付近では中層から長さ10~20cmの礫が多数出土している。

**所見** 遺物の出土もなく詳細な掘削時期は不明である。

### 3区9号溝(付図2・第108図)

**位置** P1-13~Pn-13

**重複** 7・30・31号溝と重複するが、いずれの遺構よりも後出である。

**形状** 南北方向の溝である。長さ9.33mを検出した。30号住居との重複部分で分岐し、2本の溝となる。土層断面からは複数の遺構の存在した可能性も想定できるが、明確に遺構の識別が困難であったため、1遺構として報告する。規模は、上幅0.54~0.98m、下幅0.38~0.56mを測る。残存深度は、0.33mである。

**方位** N-11°-E

**埋没土** 黒褐色土、暗褐色土が堆積している。

**所見** 本遺構に伴うと思われる遺物の出土もなく詳細な掘削時期は不明である。

### 3区10号溝(付図2・第108図)

**位置** Pg-18~Pj-18

**重複** 33号住居、3号墳より後出である。172・222・223号土坑、17・18号溝とも重複するが前後関係は不明である。

**形状** 南北方向の溝で、12.67mを検出した。規模は、上幅0.60~1.08m、下幅0.22~0.54mを測る。残存深度は、0.36mである。

**方位** N-27°-E

**埋没土** 不明である。

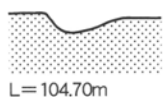
**所見** 詳細な掘削時期は不明である。

### 3区11号溝(付図2・第108図)

**位置** Pe-13~Pj-15

**重複** 28・44号住居、158号土坑、19・33号溝と重複

A . 3号溝 . A'



B . . B'



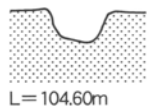
C . . C'



D . . D'



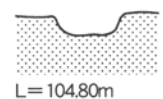
A . 4号溝 . A'



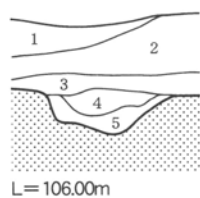
B . . B'



A . 5号溝 . A'



A . 6号溝 . A'

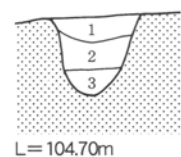


- 1. 表土
- 2. 黒赤褐色 As-Bを含むが量は少ない。白色軽石も含む。
- 3. 黒褐色土 白色軽石を含む。2層との境には赤褐色の斑鉄状の部分あり。
- 4. 灰褐色砂層 黒色土、暗黄白色土ブロックを少量含む。
- 5. 暗黄白色土 暗黄白色土、黒褐色土、砂層ブロックの混土層。

B . 5号溝 . B'



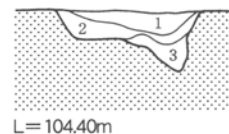
A . 7号溝 . A'



B . . B'



A . 9号溝 . A'

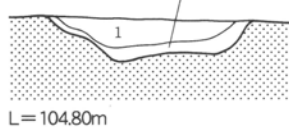


- 1. 黒色土 白色軽石粒を含む。砂質。

- 1. 黒褐色土 軽石を少量含む。
- 2. 黒褐色土 黒色がやや強い。
- 3. 暗褐色土 軽石を少量含む。

- 1. 暗褐色土 砂質。
- 2. 暗褐色土 1層よりも黒色強い。
- 3. 暗褐色土と黒褐色土ブロックの混土層

A . 11号溝 . A'

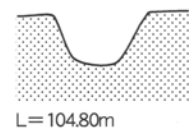


B . . B'

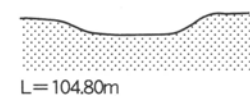


- 1. 淡褐色土 白色軽石粒を含む。砂質。
- 2. 淡褐色土 黄土色をおびる。わずかに黄土色土ブロックを含む。

A . 10号溝 . A'



A . 12号溝 . A'



B . . B'



第108図 3区溝(2)

## 第2章 荒砥諏訪西遺跡の調査

する。ほぼ平行して西側に12号溝が走る。

**形状** 南北方向の溝である。ほぼ直線的に延びている。長さ27.73mを検出した。規模は、上幅0.47~1.35m、下幅0.15~0.58mを測る。残存深度は、0.39mである。断面形は、逆台形状に近い形状である。底面は、全体的にみると北側から南側に向かって低くなるが一定ではない。

**方位** N-21°-E

**埋没土** 灰褐色土、黒色土、黄褐色土が薄い層をなして堆積する。

**所見** 詳細な掘削時期は不明である。

### 3区12号溝 (付図2・第108図)

**位置** Pe-13~Pl-15

**重複** 28・43・44号住居、158・201号土坑、13号溝と重複する。

**形状** 南北方向の溝である。ほぼ直線的に延びている。長さ38.93mを検出した。規模は、上幅0.72~1.35m、下幅0.25~1.02mである。残存深度は、0.22mである。

**方位** N-16°-E

**埋没土** 灰褐色土が堆積するが、流水の有無は確認できない。

**所見** 詳細な掘削時期は不明である。

### 3区13号溝 (付図2・第109・111図 P L 36)

**位置** Ph-13~Pi-14

**重複** 43・44号住居、12号溝、177号土坑と重複する。

**形状** 長さ6.37mを検出したが、43・44号住居との重複で残存状況は不良である。規模は、上幅0.71~1.27m、下幅0.25~0.56mである。残存深度は0.16mである。断面形は逆台形状を呈していたと考えられる。

**方位** N-5°-W

**埋没土** 灰褐色土が堆積する。

**遺物** 石製品砥石(4)・磨石(5)、土師器高杯(1)・鉢(2)・器台(3)を出土するが、砥石以外は混入品と考えられる。(観P224)

**所見** 掘削時期は中世と考えられる。

### 3区14号溝 (付図2・第109図)

**位置** Ph-14~Ph-16

**重複** 14号土坑、20・37・38号溝と重複する。

**形状** 東西方向の溝で、長さ9.73mを検出した。規模は、上幅0.72~0.86m、下幅0.41~0.71mを測る。残存深度は、0.24mである。断面形は、レンズ状を呈する。

**方位** N-61°-W

**埋没土** 淡褐色土、黄色土が堆積する。流水の有無は確認できない。

**所見** 詳細な掘削時期は不明である。

### 3区15号溝 (付図2・第109図)

**位置** Pi-15~Pi-16

**重複** 139号土坑と重複する。

**形状** 東西方向の溝で長さ6.00mを検出した。14号溝と走向をほぼ同じくしている。規模は、上幅0.28~0.49m、下幅0.17~0.31mである。残存深度は、0.26mを測る。

**方位** N-65°-W

**埋没土** 不明である。

**遺物** 埋没土中から縄文土器を出土したが他に本遺構に伴う遺物は出土していない。

**所見** 詳細な掘削時期は不明である。

### 3区16号溝 (付図2・第109図)

**位置** Pb-19~Pd-18

**重複** 240号土坑と重複する。

**形状** 走向は、弧状をなしている。長さ12.27mを検出したが、北側は調査区域外に及んでいる。南側は徐々に浅くなり、立ち上がりが不明瞭になってしまっている。北寄りの部分での上幅は3.02m、下幅は1.52mを測る。が、残存深度は、0.19mと浅い。

**方位** N-68°-E

**埋没土** 褐色土が主体となって堆積している。

**所見** 詳細な掘削時期は不明である。

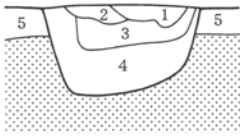
### 3区17号溝 (付図2・第109図)

**位置** Pg-18~Qg-1

**重複** 33号住居、225・226号土坑、4・10・27号溝と重複する。

第4節 中・近世以降の遺構と遺物

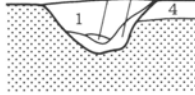
A. 13号溝 A'



L=104.70m

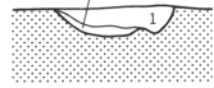
- 1. 灰褐色土 多量の白色軽石粒を含む。
- 2. 灰褐色土 多量の白色軽石粒と砂壤土小ブロックを含む。
- 3. 茶褐色土 As-Cを多量に含む。
- 4. 黒色土 As-Cを多量に含む。
- 5. 43号住居埋没土

B. B'



- 1. 茶褐色土 As-Cを多量に含む。
- 2. 茶褐色土
- 3. 黒色土
- 4. 44号住居埋没土

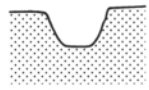
A. 14号溝 A'



L=104.70m

- 1. 淡褐色土 黄土色土ブロックを含む。縮まり無し。
- 2. 黄土色土 黄土色土ブロックを主体とし、わずかに1層が混じる。

A. 15号溝 A'

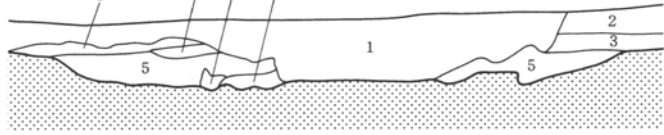


L=104.70m

B. 15号溝 B'



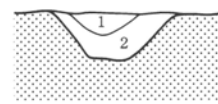
A. 16号溝 A'



L=105.50m

- 1. 表土 灰褐色砂質土。
- 2. 灰褐色土
- 3. 茶褐色土 As-Bを多量に含み、鉄分沈着がみられる。
- 4. 灰色土 さくさくしている。
- 5. 褐色土 As-Cを多く含む。黄色土ブロックを含む。
- 6. 黒褐色 As-C混じりのブロック。
- 7. 黄灰色土 As-C、淡黄土粒・ブロックを含む。

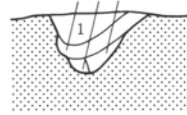
A. 17号溝 A'



L=105.00m

- 1. 暗褐色土 白色軽石粒を含む。黄色土粒がみられる。
- 2. 暗褐色土 黄色土粒・ブロックを含む。ふかふかした土。

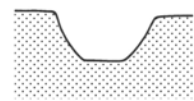
A. 18号溝 A'



L=105.00m

- 1. 暗褐色土 やや淡色。黄色土ブロック、白色軽石粒を含む。
- 2. 暗褐色土 わずかに黄色土ブロックを含む。
- 3. 淡褐色土 黄色土ブロックを含む。
- 4. 黄色土ブロック

B. 17号溝 B'

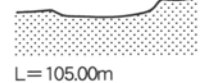


A. 21号溝 A'



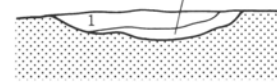
L=105.00m

A. 22号溝 A'



L=105.00m

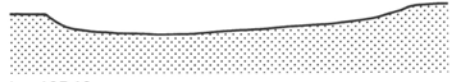
A. 19号溝 A'



L=104.80m

- 1. 淡褐色土 黄土色土粒を含む。さくさくした土。
- 2. 淡褐色土 やや黄土色に近い。黄土色土粒・ブロックをわずかに含む。さくさくした土。

A. 23号溝 A'



L=105.10m



第109図 3区溝(3)

## 第2章 荒砥諏訪西遺跡の調査

**形状** 東西方向の溝である。走向は、北側にむかって弧状に張り出している。西端は、33号住居と重複するため不明である。東端は、27号溝と重複する。長さ17.87mを検出、規模は、上幅0.54～0.86m、下幅0.18～0.43mを測る。残存深度は、0.41mである。断面形は、逆台形である。

**方位** N-60°-W

**埋没土** 暗褐色土が堆積するがあまりしまりがない。流水の痕跡は認められない。

**所見** 詳細な掘削時期は不明である。

### 3区18号溝 (付図2・第109・111図)

**位置** Pi-17～Qi-0

**重複** 143～145・172・222・223号土坑、9号井戸、10・39号溝、1号掘立柱建物の柱穴と重複する。

**形状** 東西方向の溝で、北側に向かって弧状に張り出した走向は、17号溝の走向に近似している。長さ17.60mを検出した。規模は、上幅0.50～0.81m、下幅0.12～0.40mを測る。残存深度は、0.38mである。断面形は、逆台形を基本としていたと考えられる。

**方位** N-62°-W

**埋没土** 暗褐色土・淡褐色土が堆積する。流水の痕跡は認められない。

**遺物** 陶器(播鉢?) (1)、瓦(2)を出土している。(観P224)

**所見** 出土遺物の年代から江戸時代以降の掘削と考えられる。

### 3区19号溝 (付図2・第109図)

**位置** Pf-14～Pf-16

**重複** 36号住居、11・35・36号溝と重複する。

**形状** 東西方向の溝で長さ11.07mを検出した。規模は、西端の土層観察によると上幅1.20～1.55m、下幅0.40～1.00mで、残存深度は、0.16mである。

**方位** N-64°-W

**埋没土** 淡褐色土が堆積している。流水の痕跡は確認できない。

**所見** 詳細な掘削時期は不明である。

### 3区20号溝 (付図2・第110図)

**位置** Pe-17～Pi-17

**重複** 36・50号住居、182号土坑、14・21・31・38の各溝と重複する。

**形状** 南北方向の溝である。長さ19.87mを検出したが、調査段階では38号溝と同一遺構として取扱った為に全様は不明である。規模は、上幅0.36～0.44m、下幅0.20～0.32mを測る。残存深度は、0.15mである。北端は、31号溝に接する。

**方位** N-34°-E

**埋没土** 不明である。

**遺物** 多孔石(遺構外124)を出土するが混入品と考えられる。

**所見** 詳細な掘削時期は不明である。

### 3区21号溝 (付図2・第109図)

**位置** Pf-17～Pf-19

**重複** 40・45号住居、20・38・40号溝と重複する。

**形状** 東西方向の溝で、西端は20・38号溝、東端は40号溝と接する。長さ9.87mを検出した。規模は、上幅0.46～0.70m、下幅0.22～0.37mを測る。残存深度は0.34mである。

**方位** N-51°-W

**埋没土** 不明である。

**所見** 詳細な掘削時期は不明である。

### 3区22号溝 (付図2・第109図)

**位置** Pe-17～Pe-18

**重複** 36・40号住居、23号溝と重複する。

**形状** 東西方向の溝であるが、走向は、北側に向かって弧をなしている。西端が36号住居、東端が40号住居と重複するためその先は不明である。長さ9.06mを検出した。規模は、上幅0.40～0.98m、下幅0.15～0.59mを測る。残存深度は、0.17mである。

**方位** N-47°-W

**埋没土** 不明である。

**所見** 詳細な掘削時期は不明である。

### 3区23号溝 (付図2・第109図)

**位置** Pb-17～Pd-17

**重複** 47号住居、181号土坑、22・31号溝と重複する。

**形状** 南北方向の溝であるが、北端は調査区域外に及んでいる。Pd-17グリッド北西隅で31号溝と接し

大きく走向を変える。この間の西側立ち上がりは不明瞭である。東側は緩やかに傾斜して立ち上がる。規模は、上幅0.50～2.35m、下幅0.26～1.30mを測る。残存深度は、0.14mである。

方位 N-81°-E、N-1°-W

埋没土 不明である。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

3区24号溝 (付図2・第110図)

位置 Pc-19～Pd-19

重複 15号井戸より先行する。

形状 南北方向の溝で、長さ6.00mを検出した。南端は15号井戸以南で掘り込みが不明瞭になってしまう。規模は、上幅0.48～0.70m、下幅0.14～0.36mを測る。残存深度は、0.10mである。

方位 N-61°-E

埋没土 主として黒褐色土が堆積、底面間近には砂粒の堆積がある。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

3区26号溝 (付図2・第110図)

位置 Nb-11～Nd-12

形状 南北方向の溝で長さ9.73mを検出した。規模は、上幅0.15～0.38m、下幅0.06～0.19mを測る。残存深度は、0.09mである。

方位 N-11°-E 埋没土 不明である。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

3区27号溝 (付図2・第110図)

位置 Qf-0～Qg-1

重複 40号住居、225号土坑と重複する。

形状 総長9.60mを検出した。西端は40号住居との重複部分内にある。これより東方向に約5m進んだ地点で南北方向に走向を変え、南端は18号溝に接している。規模は、上幅0.48～1.30m、下幅0.25～0.50mを測る。残存深度は、0.32mである。断面形は、底面が丸味をおびる形状である。

方位 N-40°-W

埋没土 不明である。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

3区28号溝 (付図2・第110図)

位置 Qb-1～Qf-0

重複 11号住居、27・29号溝と重複する。

形状 南北方向の溝で、北端は調査区域外に及ぶ。南端は、27号溝と接する。長さ17.73mを検出した。規模は、上幅0.40～0.57m、下幅0.10～0.34mを測る。残存深度は、0.14mである。

方位 N-39°-E 埋没土 不明である。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

3区29号溝 (付図2・第110図)

位置 Qc-0～Qc-1

重複 28号溝と重複する。

形状 東西方向の溝で長さ4.53mを検出したが、東西両端とも掘り込みが不明瞭となって終わっている。規模は、上幅0.68～1.20m、下幅0.09～0.30mを測る。残存深度0.20mを測る。

方位 N-45°-W 埋没土 不明である。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

3区30号溝 (付図2・第110図)

位置 Pc-19

重複 179号土坑と重複する。

形状 東西方向の溝で、長さ3.60mを検出した。規模は、上幅0.38～0.48m、下幅0.08～0.16mを測る。残存深度は、0.16mである。

方位 N-47°-E 埋没土 不明である。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

3区31号溝 (付図2・第110図)

位置 Pd-15～Pc-16

重複 158・231・232号土坑、23・32・38号溝と重複する。

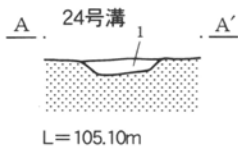
形状 東西方向の溝である。西端は158号土坑、東端は23号溝と接する。長さ11.20mを検出した。規模は、上幅0.96～1.80m、下幅0.48～1.52mを測る。残存深度は、0.18mである。

方位 N-80°-W、N-65°-E

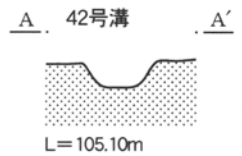
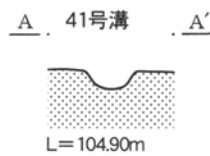
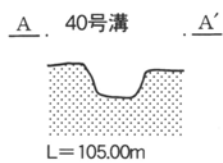
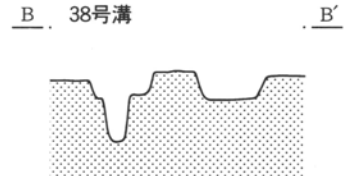
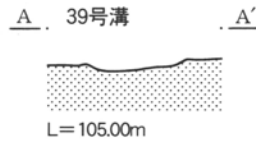
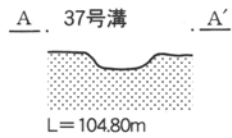
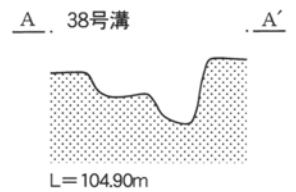
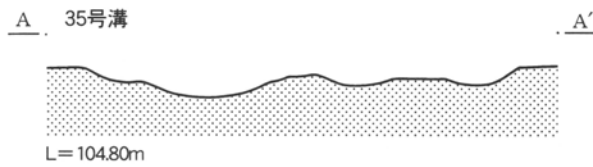
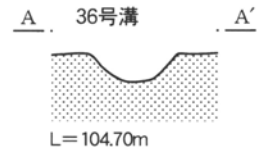
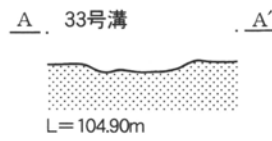
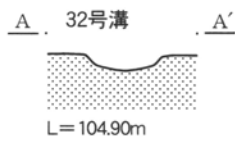
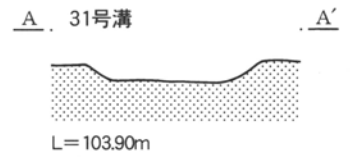
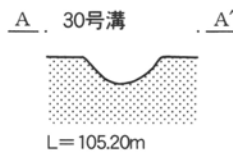
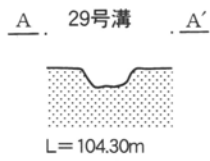
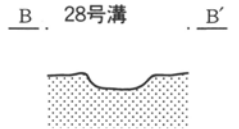
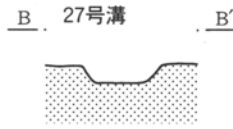
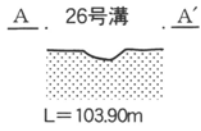
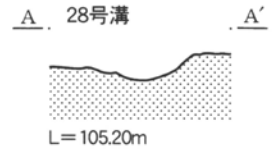
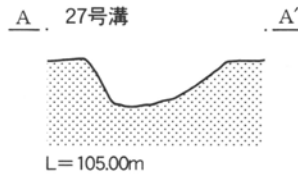
埋没土 不明である。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

第2章 荒砥諏訪西遺跡の調査



1. 黒褐色土 軽石、地山粒を含む。  
底部わずかに砂層有り。



第110図 3区溝(4)





3区32号溝 (付図2・第110図)

位置 Pd-15

重複 36号住居、31号溝と重複する。

形状 36号住居の北側で長さ2.00mを検出した。規模は、上幅0.43~0.54m、下幅0.22~0.41m、残存深度は、0.14mを測る。

方位 N-13°-E 埋没土 不明である。

所見 耕作痕の可能性もある。詳細な掘削時期は不明である。

3区33号溝 (付図2・第110図)

位置 Pe-14~Pe-15

重複 36号住居に後出、11号溝と重複する。

形状 東西方向の溝である。西端は11号溝に接する。東端は36号住居との重複により不明瞭となる。長さ8.40mを検出する。東端は掘り込みが広がる。規模は、上幅0.60~1.25m、下幅0.35~1.05mを測る。残存深度は、0.06mと浅い。

方位 N-78°-W 埋没土 不明である。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

3区34号溝 (付図2)

位置 Pf-14~Pf-15

形状 東西方向の溝である。19・35号溝とほぼ平行する走向である。西端は11号溝に接していたか。長さ4.80mを検出した。規模は、上幅0.36~0.59m、下幅0.17~0.30mを測る。残存深度は、0.16mである。

方位 N-72°-W 埋没土 不明である。

所見 耕作痕の可能性もある。詳細な掘削時期は不明である。

3区35号溝 (付図2・第110図)

位置 Pf-14~Pf-15

重複 東端は19号溝と重複するか。

形状 東西方向の溝で、34号溝と19号溝の間に走向をとる。東端は屈折して19号溝と接しているようである。長さ3.47mの検出である。規模は、上幅0.44~0.51m、下幅0.12~0.18mを測る。残存深度は、0.10mである。

方位 N-71°-W 埋没土 不明である。

所見 耕作痕の可能性もある。詳細な掘削時期は不明である。

3区36号溝 (付図2・第110図)

位置 Pf-15~Pg-15

重複 19号溝と重複する。後出か。

形状 南北方向の溝である。北端は19号溝に接する。長さ4.93mを検出した。規模は、上幅0.28~0.62m、下幅0.12~0.21m、残存深度0.20mを測る。

方位 N-22°-E 埋没土 不明である。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

3区37号溝 (付図2・第110図)

位置 Pg-16~Ph-16

重複 14号溝と重複する。

形状 南北方向の溝である。南端は14号溝に接する。長さ4.40mを検出した。規模は、上幅0.36~0.50m、下幅0.16~0.27m、残存深度0.10mを測る。

方位 N-18°-E

埋没土 不明である。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

3区38号溝 (付図2・第110図)

位置 Pd-16~Pi-16

重複 36・50号住居、182号土坑、14・20・21・31号溝と重複する。

形状 20号溝との重複関係にある。Ph-16グリッドで二枝となるがそれ以北はどちらの掘り込みとなるのかは判然としない。長さ25.73mを測る。規模は、上幅0.27~1.22m、下幅0.15~0.96m、残存深度0.31mを測る。

方位 N-11°-E、N-32°-E

埋没土 不明である。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

3区39号溝 (付図2・第110図)

位置 Pf-18~Pi-18

重複 33号住居、1号掘立柱建物と重複する。

形状 大きく弧を描く走向である。長さ13.73mを検出した。規模は、上幅0.38~1.42m、下幅0.09~0.75m、残存深度0.21mを測る。

方位 N-89°-E、N-11°-E

埋没土 不明である。

所見 耕作痕の可能性もある。詳細な掘削時期は不明である。

3区40号溝 (付図2・第110図)

位置 Pf-19~Pg-19

重複 40号住居、17・21号溝と重複する。

形状 17号溝と21号溝の間に位置する南北方向の溝で、走向は、弱い弧を描いている。長さ4.67mを検出した。規模は、上幅0.36~0.54m、下幅0.16~0.28m、残存深度0.22mを測る。断面形は、逆台形を呈する。

方位 N-31°-E 埋没土 不明である。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

3区41号溝 (付図2・第110図)

位置 Qf-2~Qh-2

重複 97号土坑と重複する。

形状 南北方向の溝で長さ9.47mを検出した。規模は、上幅0.20~0.64m、下幅0.06~0.22m、残存深度0.14mを測る。

方位 N-29°-E 埋没土 不明である。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

3区42号溝 (付図2・第110図)

位置 Qb-6~Qe-6

重複 198号土坑に先行する。6号井戸とも重複する。

形状 南北方向の溝で長さ11.20mを検出した。北端で198号土坑と重複するが、さらに調査区域外に及ぶものと考えられる。規模は、上幅0.31~0.58m、下幅0.06~0.34m、残存深度0.15mを測る。断面形は、レンズ状を呈する。

方位 N-16°-E 埋没土 不明である。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

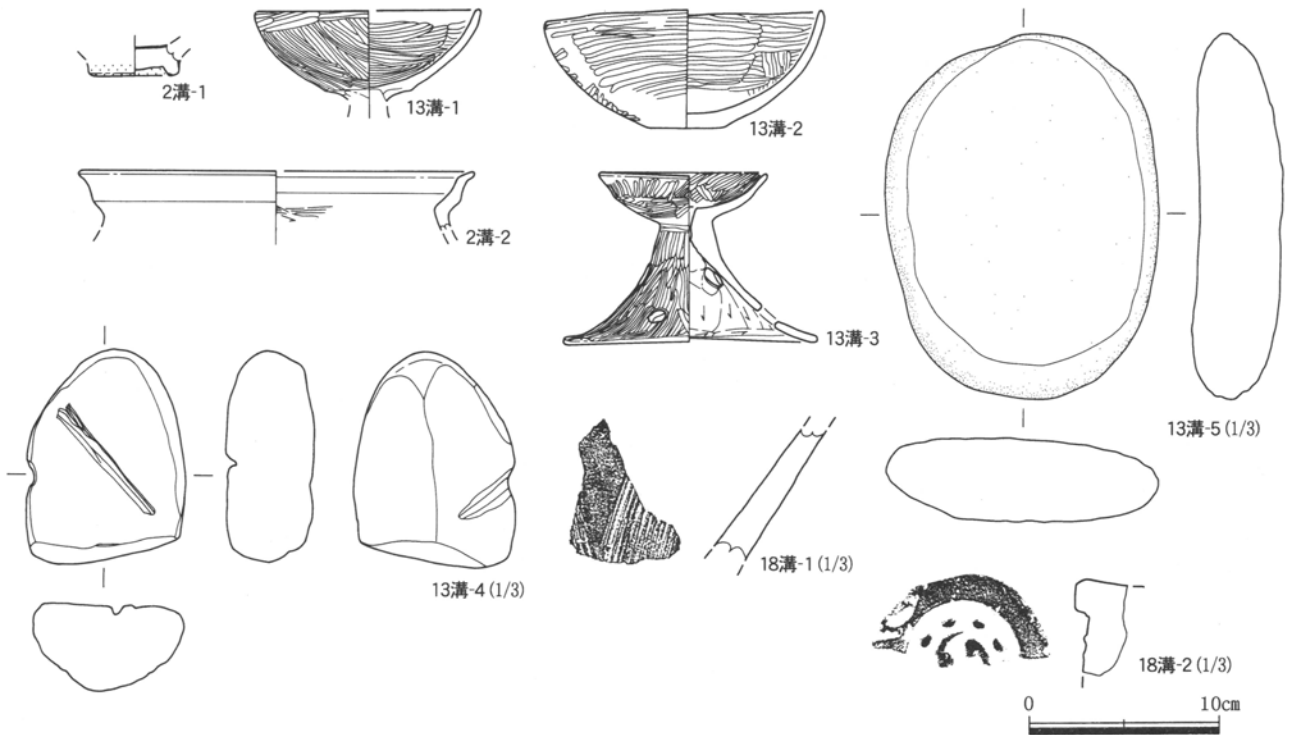
3区43号溝 (付図2)

位置 Qs-0~Qs-1

形状 東西方向の溝で長さ7.73mを検出した。規模は、上幅0.42~0.55m、下幅0.20~0.34m、残存深度0.07mを測る。

方位 N-41°-W 埋没土 不明である。

所見 詳細な掘削時期は不明である。



第111図 3区溝出土遺物

(4) 6区の遺構と遺物

溝

6区では浅間B軽石下水田の調査の他に15条の溝を検出した。調査区西端、Q9・10ライン部分で1～11号の南北方向の溝を11条を検出した。また、中央東寄りで13～15号の東西方向の溝3本を検出した。11号溝を除く14条の溝は水田に後出するものと思われる。

6区1号溝(第34・35図 P L 7)

位置 Qe-9～Qj-9

重複 2号溝に先行する。

形状 南北方向の溝である。南半部分の走向は、東側に張り出す弧状を呈し、緩やかに彎曲する。東縁は、Qg-9グリッド内で弱く枝別れ状を呈する部分が見られる。長さ26.84mを検出した。上幅は、0.58～1.10m、下幅は、0.24～0.54m、残存深度は、0.11～0.14mである。南北両端における底面の比高差は、0.21mである。徐々に南端に向かって低くなっている。

方位 N-30°-E

埋没土 浅間B軽石と砂粒・白色軽石を含む褐色土の混土層が堆積する。

所見 浅間B軽石に埋没した水田に後出する。詳細な掘削時期は不明である。

6区2号溝(第34・35図 P L 7)

位置 Qb-9～Qj-10

重複 1号溝に後出する。

形状 南北方向の溝である。長さ41.07mを検出した。緩やかに彎曲を描きながらも直線的な走向である。上幅は0.56～1.06m、下幅は0.20～0.42mである。残存深度は0.15～0.37mである。南北両端における底面の比高差は0.50m、北端から南方向に約12.0mの地点で一段低くなっている。

方位 N-29°-E

埋没土 浅間B軽石を含む褐色土、あるいは黒褐色土が堆積する。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

6区3号溝(第34図)

位置 Qb-10

重複 4号溝の西側にあり、これに切られている。

形状 南北方向の溝である。長さ6.72mを検出した。規模は、上幅0.32m前後、下幅0.12m前後を測り、残存深度0.08mである。

方位 N-26°-E

埋没土 不明である。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

6区4号溝(第34・35図)

位置 Qb-10～Qh-10

重複 3号溝に後出する。

形状 南北方向の溝である。28.67mを検出した。東側に緩やかに張り出す弧状を呈する。南端がやや幅を広くする他は大きな変化はみられない。規模は、上幅0.98m、下幅0.44m、残存深度0.08～0.14mを測る。南北両端における底面の比高差は0.22mである。

方位 N-29°-E

埋没土 浅間B軽石を多量に含む褐色土が堆積する。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

6区5号溝(第34・35図 P L 7)

位置 Qb-10～Qh-10

重複 12号溝を切っている。南方向2.2mに7号溝が存在する。北端から約9.6mの地点にもう1条別の溝が重複しているようにもみられるが判然としなかった。

形状 南北方向の溝である。長さ28.00mを検出した。北側半分はほぼ直線的に延び、南半分は緩やかな弧をなして彎曲する走向である。上幅、下幅とも南端に向かって徐々にその幅を狭めている。北端における上幅は、1.12m、下幅は、0.68m、残存深度は、0.05～0.17mを測る。南北両端における底面の比高差は0.32mである。

方位 N-33°-E

埋没土 浅間B軽石を多量に含む褐色土が堆積する。褐色土と砂粒が互層の状態をなす。

## 第2章 荒砥諏訪西遺跡の調査

所見 詳細な掘削時期は不明である。

### 6区6号溝 (第34図)

位置 Qg-10~Qh-10

重複 なし。5号溝の東側に位置する。

形状 南北方向の溝である。長さ4.13mにわたり検出した。両端は南北両方向に更に延長されるものと思われる。中位における規模は、上幅0.81m、下幅0.18m、残存深度0.08mである。

方位 N-31°-E

埋没土 不明である。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

### 6区7号溝 (第34図)

位置 Qh-10~Qk-10

重複 南端から南方向7・8mに10号溝が走向を同じくして位置するが、同一遺構と断定できなかった。

形状 南北方向の溝である。長さ11.47mを検出した。規模は、上幅0.28~0.72m、下幅0.08~0.38mを測る。残存深度は、0.04~0.07mである。両端の比高差は、0.2mである。

方位 N-29°-E

埋没土 不明である。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

### 6区8号溝 (第34図)

位置 Qj-10

重複 なし。7号溝の東側に位置する。

形状 南北方向の溝で長さ2.42mを検出した。規模は、上幅0.50m、下幅0.22m、残存深度0.03~0.08mを測る。

方位 N-0°-E

埋没土 不明である。

所見 詳細な掘削時期は不明である。水流の有無も確認できない。

### 6区9号溝 (第34図)

位置 Ql-10~Qn-10

重複 東側に10号溝がほぼ平行する。北側7.4mにはほぼ走向を等しくする2号溝が検出されているが、遺構の同一性を判断する根拠がなかった。

形状 南北方向の溝で長さ10.45mを検出したが、南

北方向は更に延長されると考えられる。規模は、上幅0.58~0.90m、下幅0.16~0.40mを測る。残存深度は、最深で0.15mである。断面形は、レンズ状を呈す。

方位 N-33°-E

埋没土 不明である。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

### 6区10号溝 (第34図)

位置 Ql-10~Qn-10

重複 浅間B軽石下水田の畦畔を切っている。西側に9号溝が位置する。

形状 南北方向の溝であるが、走向は若干蛇行している。長さ11.20mを検出したが、端部は、南北両方向に更に延長されると考えられる。中位での規模は、上幅中位で1.00m、下幅0.18mを測る。断面形はレンズ状を呈す。

方位 N-33°-E

埋没土 不明である。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

### 6区11号溝 (第34図)

位置 Qm-10~Qo-11

重複 浅間B軽石水田に先行して掘削されている。10号溝にも先行する。

形状 南北方向の溝である。長さ16.00mにわたり検出した。断面形は、レンズ状である。規模は、上幅0.32~0.58m、下幅0.08~0.38mを測る。残存深度は、0.09~0.13mである。北端から4.3mの地点でその幅を1.24mに広げ、長三角形を呈する。

方位 N-17°-E

埋没土 不明である。

所見 浅間B軽石降下以前の掘削であるが詳細な掘削時期は不明である。

### 6区12号溝 (第34・35図)

位置 Qe-10~Qg-10

重複 5号溝に先行する。

形状 東側の立ち上がりは全て5号溝によって削平されている。長さ約7.50mを検出した。上幅の残存は、最大で1.20mである。断面形は、皿状を呈し、

底面の広い形状である。残存深度は、0.1～0.16mである。

方位 N-34°-E

埋没土 浅間B軽石を多量に含む褐色土が堆積する。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

6区13号溝 (第34図)

位置 Qh-17～Qh-19

形状 東西方向の溝である。走向は緩やかに蛇行する。長さ6.22mを検出した。規模は、上幅0.28～0.46m、下幅0.06～0.14m、残存深度0.06～0.14mである。

方位 N-55°-W

埋没土 不明である。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

6区14号溝 (第34図)

位置 Qj-17～Qi-18

形状 東西方向の溝である。ほぼ直線的に延びる走向である。長さ4.50mを検出した。西側寄りにおける規模は、上幅0.44m、下幅0.18m、残存深度0.03mを測る。

方位 N-69°-W

埋没土 不明である。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

6区15号溝 (第34図)

位置 Qi-18～Qi-19

重複 浅間B軽石下水田の面を掘り込んでいる。

形状 東西方向の溝である。長さ4.24mを検出した。規模は、上幅0.48～1.28m、下幅0.38～0.52m、残存深度0.06～0.08mを測る。

方位 N-78°-W

埋没土 不明である。

所見 詳細な掘削時期は不明である。

### 第5節 遺構外出土の遺物

#### (1) 縄文土器 (第112～115図 P L 37～39)

縄文土器は合計109点を掲載した。個々の出土地点については第7表に記したとおりである。

1～70は、前期の資料である。1～24は、黒浜式に比定される資料である。1～8は、2区Kc-7グリッドの出土である。1・2は口縁部破片である。1・3では口縁部から胴部へ弱くくびれて移行する様子が確認できる。7は底部間近の胴部破片である。口縁部文様帯は、横位のRLと縦位のLRによる羽状縄文となっている。胎土中の繊維を含んでいる。15～19は、2区大溝からの出土で同一個体と考えられる破片である。器面が荒れているが、RL縄文を横位に施している。内面には縦位の条痕がある。10は、羽状縄文を、12・14はRL縄文を横位に施す。13は、横位のRL縄文と横位のLR縄文を施すことにより菱形の文様を形作っている。21はRL縄文を施文している。23はLR縄文を施文している。24は縦位のRLと横位のLR縄文を施文し、羽状縄文を形作っている。

25～28は、諸磯a式の資料である。いずれも縄文を施文するもので、25はRL縄文を横位に、26はLR縄文を横位に、27・28はL縄文を縦位に施文している。29～46は、諸磯b式の資料である。29～40は、浮線上に斜行あるいは矢羽根状の刻みを施した資料である。29は縄文地文に渦巻あるいは横方向の浮線文が巡っている。縄文はRL・LR縄文を横位に施文することにより羽状文を構成している。41～43は半裁竹管文を施している。44～46は、平行線文の一部に連続の刺突文を重ねており浮島式の範疇に入る資料と思われる。47～53も諸磯式の資料であると思われるが縄文施文のみの資料で細別はできなかった。

54～70は、五領ヶ台式の時期に比定される2区大溝出土の土器群である。文様は、類似するが、口縁部の形状からは複数の個体が存在する可能性も考えられる。器面にはR縄文が施されるが、これに伴う自縄結縛処理の原体開端部結節の痕跡が見られる。

71～104は中期の資料である。71は、加曾利E1から2式の比定される資料である。L縄文を施文する。72・73は、加曾利E2式に比定される。72はLR縄文施文後に2本の平行沈線文を巡らしている。73は、有孔の突起部が見られる。74～90は、加曾利E3式の資料である。78は大型の把手が付く。胴部には条線が施される。74・75・79も同様の資料である。その他の胴部破片には沈線による区画と縄文施文が多く見られる。80・81は、懸垂文施文後RL縄文を縦位に施しているが太さの異なる0段条を用いている点<sup>註</sup>が特徴的である。91～104は、加曾利E4式の資料である。91は口唇部は無文で、沈線により胴部と区画される。胴部は沈線区画による「H」字状文を配し、区画外はLR縄文により充填されている。

105～108は、後期の資料である。105と106は、称名寺1式に比定されよう。105は沈線による区画文と刺突を重ねた微隆起帯が見られる。107は、堀之内2式に比定される資料である。口唇部直下に微隆起帯を巡らし、刺突を連続して重ねている。以下は沈線区画内にRL縄文を施している。108は、加曾利B1式に比定される。沈線文がみられる。109は、加曾利B2から3式に比定される。縦横に沈線区画文が施文される。

110は、R縄文が施文されている。弥生土器の可能性も考えられる。

註 原 雅信氏(当事業団主幹兼専門員)の教示による。原氏はこの原体を「0段異束縄文」と分類した。

#### (2) 縄文時代の石器 (第115～116図 P L 39)

縄文時代の石器と考えられる資料は16点を掲載した。その内訳は、打製石鏃1、打製石斧8、剥片石器1、多孔石4、磨石1、敲石1である。他にも磨石等が出土しているが中・近世の資料との区別が困難なものはそれぞれの出土遺構あるいは中・近世の遺構外出土の石製品として取り扱った。法量、石材の種類については第9表に一覧を掲載した。

111は、有茎の打製石鏃で、先端、茎部とも欠損している。112～118は、打製石斧である。112・113・116は、分銅形を呈している。116は、上半が欠損し

ている。114・115・117・118は、短冊、あるいは撥形を呈する。119・120は、剥片石器である。121は、磨石兼凹石である。磨面は片面のみで、同じ面の中央に敲打によって生じたと考えられる小孔がみられる。122は、敲石である。小口の両端に敲打痕が明瞭に残されている。123～126は、多孔石である。123～125は、片面の中央部分に小孔が集中している。126は、表裏両面の中央に小孔が集中している。

### (3) 土師器 (第117・118図 P L40)

合計28点を掲載した。『荒砥諏訪西遺跡 I』で報告したとおり、本遺跡においては1～3区の調査で合計43軒の古墳時代前期の竪穴住居を検出した。本項ではこれらの住居とほぼ同時期の土器を中心に掲載した。出土位置は、第10表のとおりである。

3区Pk-18グリッド付近では台付甕(128)、壺(129)、甕(134)、鉢(133)、有孔鉢(132)、小型ミニチュア土器(130)が出土している。この地点は、3区3号墳周堀や11号井戸、4号畠が検出された地点で、3区28号住居が近接している。

3区のQグリッドからは壺(129・135・136)、埴(131・138)、有孔鉢(137)、台付甕(139・142)、甕(140・144)、台付甕(S字状口縁)(141)が出土している。Nグリッド出土の資料としては壺(143・145)を掲載した。

表採資料としては、Pグリッドで台付甕(S字状口縁)(127)を検出している。3-採-11は、3区出土の二重口縁壺、148は、小型高杯である。

146は、3区表採の壺の口縁部であるが、内面に焼成前の線刻による文様が描かれている。

149～151は、古墳時代後半の土器である。150・151は、須恵器杯蓋模倣の杯である。149の杯は、口縁部が内彎ぎみに立ち上がる。3区3号墳に伴う可能性も考えられる。151は、口縁部外面に線刻が施されている。

152は、5区から出土した高杯の口縁部破片で、下位に稜を有している。

153・154は、器種不明の資料であるが、3区3号墳周辺からの出土である。153は、外面に幅7～12mm

の黒色部分が5条認められる。154も黒色部分が2条認められる。(観P224～226)

### (4) 須恵器 (第118・119図 P L40)

20点を掲載した。155と172～191である。本遺跡における古墳時代後期の竪穴住居から出土した須恵器は、全くなく、『荒砥諏訪西遺跡 I』では古墳時代前期の3区28号住居に混入品の甕がみられただけである。本報告分では3区3号墳から甕の破片が多数検出されており、本項の3区出土資料の中にある出土地点の不明の資料にも当該古墳所属のものが含まれている可能性が高い。出土位置は第10表に記したとおりである。

172は、大甕の口縁部破片である。2条1単位の沈線が横方向に巡り、その下にタテ方向の工具痕が見られる。173～181は、甕の胴部破片である。184は、瓶の胴部であろう。187は、甕の破片であろうか。189は、甕の口縁部破片である。190は、無蓋の高杯の杯部破片である。155は、須恵質の甕の下半部である。(観P226～228)

### (5) 陶磁器 (第118図 P L41)

160は、2区出土の青磁高台付椀である。龍泉窯産で内面に文様を有している。巻頭に写真を掲載した248も青磁椀である。これも龍泉窯の系統と考えられ、外面に陰花文が施されている。

国産磁器では156の肥前産磁器がある。青磁の椀である。

157～159・161～166・171は国産陶器である。157は肥前産の椀、158は呉器手椀、159は高台付椀、161は椀、162は香炉、171は皿であり、いずれも瀬戸・美濃産である。163は常滑産の甕、166は丹波産の播鉢である。164は鉢と考えられる。いずれも江戸時代の所産と考えられている。165は徳利の底部である。

199は、3区出土の常滑産片口鉢である。

出土位置は第8表のとおりである。(観P226・227・229)

### (6) 土師質土器皿 (第118図)

167・168の2点を掲載した。いずれも小破片であるが、168が、口縁部の外傾が著しいのに対し、167

## 第2章 荒砥諏訪西遺跡の調査

は、口径に比して底径を有する形状である。

(観P227)

### (7)軟質陶器 (第120図 PL41)

192~198・200~209までの内耳鍋、あるいは片口鉢など17点を掲載した。各資料の出土位置は第8表のとおりである。

192~195は、1区1号溝の東側、Kj-14・15グリッドから出土した内耳鍋、内耳鉢である。198は、2区表採の内耳鍋、200・203は、3区表採の内耳鍋である。

201は、器高が浅く、焙烙状の立ち上がりを呈している。202の焙烙は、6区浅間B軽石下水田の調査の際の出土である。

205は、3区表採の火鉢と思われ、内面に印花文が押されている。

206は広口壺である。口縁部は短く立ち上がり、肩の丸く張る形状である。江戸時代の所産と考えられる。

207・208は瓦である。時期は判然としない。

209は焜炉の一部である。

(観P228・229)

### (8)石製品 (第121~125図 PL41~43)

遺構外出土の石製品としては砥石10、磨石2、勾玉1、石鉢3、石臼1、石鉢?1、軽石製品1、五輪塔14、宝塔2、礎石1、不明品2を掲載した。各資料の出土位置は第11表のとおりである。

216は、3区Qk-5グリッド出土の葉ろう石製の勾玉である。長さ1.7cmを測る。

210~215は、砥沢石製の砥石である。217・219は、安山岩製の砥石である。220も砥石である。218・221は、砥石あるいは磨石である。自然礫の表・裏面が磨耗により広い平坦を形成している。218は、両平坦面に筋状の削痕が強く残されていることから鋸器を研主体とする砥石であると考えられるが、221は、縄文時代の磨石である可能性もある。

222は、直径20.7cmの円礫の片面中央に上端径11.0cmの擂鉢状の凹部を有する石製品である。反対面にも直径6.0cmの凹面がみられる。敲打によって生じた

ものであろう。石鉢のように使用されたのであろうか。

223は、3区3号墳出土の軽石製砥石である。4面に使用面が認められる。224も、軽石製品である。片面は中央が擂鉢状に窪んでいる。反対面も若干の窪みが認められる。

225、226は、2区出土の石鉢の未製品である。粗成形の段階で加工は中止されている。227も、石鉢の未製品、あるいは石臼の下臼はんぎり部分未製品の破片と考えられる資料である。

228は、1区表採の石臼、上臼の一部である。供給孔の一部が残存しており、穀物用の石臼である。229は、直径22.4cm、厚さ15.1cmの円板状を呈している。断定はできないが、石臼の下臼未製品の可能性が考えられる。

230~243は、五輪塔の各部位である。いずれも表面に梵字は確認できなかった。3区出土の231を除いて2区の出土である。石材は、235・237・240・243・245が凝灰岩、他は安山岩である。230~235は、空風輪である。234は他の資料に比べ小型であることから五輪塔ではなく他の石造物の一部である可能性もある。236~238は、火輪と考えられるが、236は、上位平坦面に空風輪の柄を受ける孔が穿たれていないことから、未製品あるいは他の塔を考える必要もあろうか。239は、水輪である。240~243は、地輪である。240、243は、欠損著しい資料である。

244と246は、宝塔の一部である。244は、笠部資料で上位が欠損している。246は、相輪の一部残存である。

245は、五輪塔の火輪の一部である可能性を考えたいが判然としない。

247は、石造物の礎石あるいは台座と考えられる。上面の幅は32.4cm、高さ18.5cmを測る。上面の中央に柄孔状の小孔を穿っている。(観P229~232)

### (9)金属器 (第118図 PL43)

170は、1区小穴出土の銭で、洪武通寶である。169は、3区40号住居出土の釘である。(観P227)



第7表 遺構外出土の縄文土器一覧

No	種 別	出土位置	No	種 別	出土位置	No	種 別	出土位置
1	前期黒浜式	2区Kc-7	39	諸磯b式	3区30号住居	77	加曾利E3式	3区Qj-7
2	黒浜式	2区Kc-7	40	諸磯b式	3区33号住居	78	加曾利E3式	3区表採
3	黒浜式	2区Kc-7	41	諸磯b式	3区27号住居	79	加曾利E3式	3区表採
4	黒浜式	2区Kc-7	42	諸磯b式	3区28号住居	80	加曾利E3式	1区1号溝
5	黒浜式	2区Kc-7	43	諸磯b式	3区30号住居	81	加曾利E3式	2区3号土坑
6	黒浜式	2区Kc-7	44	諸磯b式(浮島系)	3区32号住居	82	加曾利E3式	2区表採
7	黒浜式	2区Kc-7	45	諸磯b式(浮島系)	2区表採	83	加曾利E3式	2区表採
8	黒浜式	2区Kc-7	46	諸磯b式(浮島系)	3区Pm-14・15	84	加曾利E3式	2区8号住居
9	黒浜式	2区3号土坑	47	前期諸磯式	2区大溝	85	加曾利E3式	2区2号住居
10	黒浜式	2区95号土坑	48	諸磯式	2区大溝	86	加曾利E3式	2区8号住居
11	黒浜式	2区95号土坑	49	諸磯式	2区大溝	87	加曾利E3式	3区表採
12	黒浜式	2区95号土坑	50	諸磯式	3区27号住居	88	加曾利E3式	6区浅間B軽石 下水田
13	黒浜式	2区大溝	51	諸磯式	3区28号住居	89	加曾利E3式	6区浅間B軽石 下水田
14	黒浜式	2区大溝	52	諸磯式	3区30号住居			
15	黒浜式	2区大溝	53	諸磯式	3区33号住居			
16	黒浜式	2区大溝	54	前期末五領ケ台	2区大溝	90	加曾利E3式	2区表採
17	黒浜式	2区大溝	55	五領ケ台	2区大溝	91	中期加曾利E4式	3区P1-18
18	黒浜式	2区大溝	56	五領ケ台	2区大溝	92	加曾利E4式	3区表採
19	黒浜式	2区大溝	57	五領ケ台	2区大溝	93	加曾利E4式	3区Qg-8
20	黒浜式	2区大溝	58	五領ケ台	2区大溝	94	加曾利E4式	3区Qk-3
21	黒浜式	2区2号住居	59	五領ケ台	2区大溝	95	加曾利E4式	3区表採
22	黒浜式	3区158号土坑	60	五領ケ台	2区大溝	96	加曾利E4式	3区Qo-7
23	黒浜式	3区158号土坑	61	五領ケ台	2区大溝	97	加曾利E4式	3区Qj-7
24	黒浜式	3区163号土坑	62	五領ケ台	2区大溝	98	加曾利E4式	2区大溝
25	前期諸磯a式	2区1号土坑	63	五領ケ台	2区大溝	99	加曾利E4式	3区171土坑
26	諸磯a式	2区9号土坑	64	五領ケ台	2区大溝	100	加曾利E4式	3区P1-18
27	諸磯a式	3区Qj-7	65	五領ケ台	2区大溝	101	加曾利E4式	3区Pg-19
28	諸磯a式	3区Qj-7	66	五領ケ台	2区大溝	102	加曾利E4式	3区Pk-19
29	前期諸磯b式	2区3号土坑	67	五領ケ台	2区大溝	103	加曾利E4式	3区Qh-8
30	諸磯b式	3区9号溝	68	五領ケ台	2区大溝	104	加曾利E4式	3区Qg-8
31	諸磯b式	3区15号溝	69	五領ケ台	2区大溝	105	後期称名寺1式	3区表採
32	諸磯b式	3区表採	70	五領ケ台	2区大溝	106	後期称名寺1式	3区4号住居
33	諸磯b式	3区27号住居	71	中期加曾利E1~2式	3区5号住居	107	後期堀之内2式	3区28号住居
34	諸磯b式	3区28号住居	72	中期加曾利E2式	3区42号住居	108	後期加曾利B1式	3区表採
35	諸磯b式	3区28号住居	73	加曾利E2式	3区11号住居	109	後期加曾利B2~3	3区28号住居
36	諸磯b式	3区28号住居	74	中期加曾利E3式	3区表採	110	弥生系?	3区表採
37	諸磯b式	3区28号住居	75	加曾利E3式	3区表採			
38	諸磯b式	3区30号住居	76	加曾利E3式	2区大溝			

第8表 遺構外出土の中・近世土器一覧

No	種 別	出土位置	No	種 別	出土位置	No	種 別	出土位置
156	青磁皿	3区Pg-14	171	陶器皿	6区浅間B軽石下水田	202	軟質陶器焙烙	6区浅間B軽石下水田
157	陶器椀	3区Qe-1	192	軟質陶器内耳鍋	1区Kj-14・15	203	軟質陶器内耳鍋	2区表採
158	陶器椀	3区表採	193	軟質陶器内耳鍋	1区Kj-14・15	204	軟質陶器片口鉢	3区Qq-4
159	陶器高台付椀	3区36号住居	194	軟質陶器内耳鉢	1区1号住居	205	軟質陶器火鉢か	3区表採
160	青磁高台付椀	2区表採	195	軟質陶器内耳鉢	1区Kj-14・15	206	軟質陶器壺	3区表採
161	陶器椀	3区表採	196	軟質陶器内耳鍋	1区Kj-14・15	207	瓦	3区Qh-1
162	陶器香炉	3区40号住居	197	軟質陶器内耳鉢	1区Kj-14・15	208	瓦	3区26号住居
163	陶器甕	3区4号住居	198	軟質陶器内耳鍋	2区表採	209	軟質陶器焜炉	3区26号住居
164	陶器鉢か	3区4号住居	199	陶器片口鉢	3区グリッド	248	青磁椀	6区浅間B軽石下水田
165	陶器德利	4区表採	200	軟質陶器内耳鍋	3区表採			
166	陶器播鉢	3区14号住居	201	軟質陶器焙烙か	3区16号住居			

第2章 荒砥諏訪西遺跡の調査

第9表 遺構外出土の縄文石器一覧

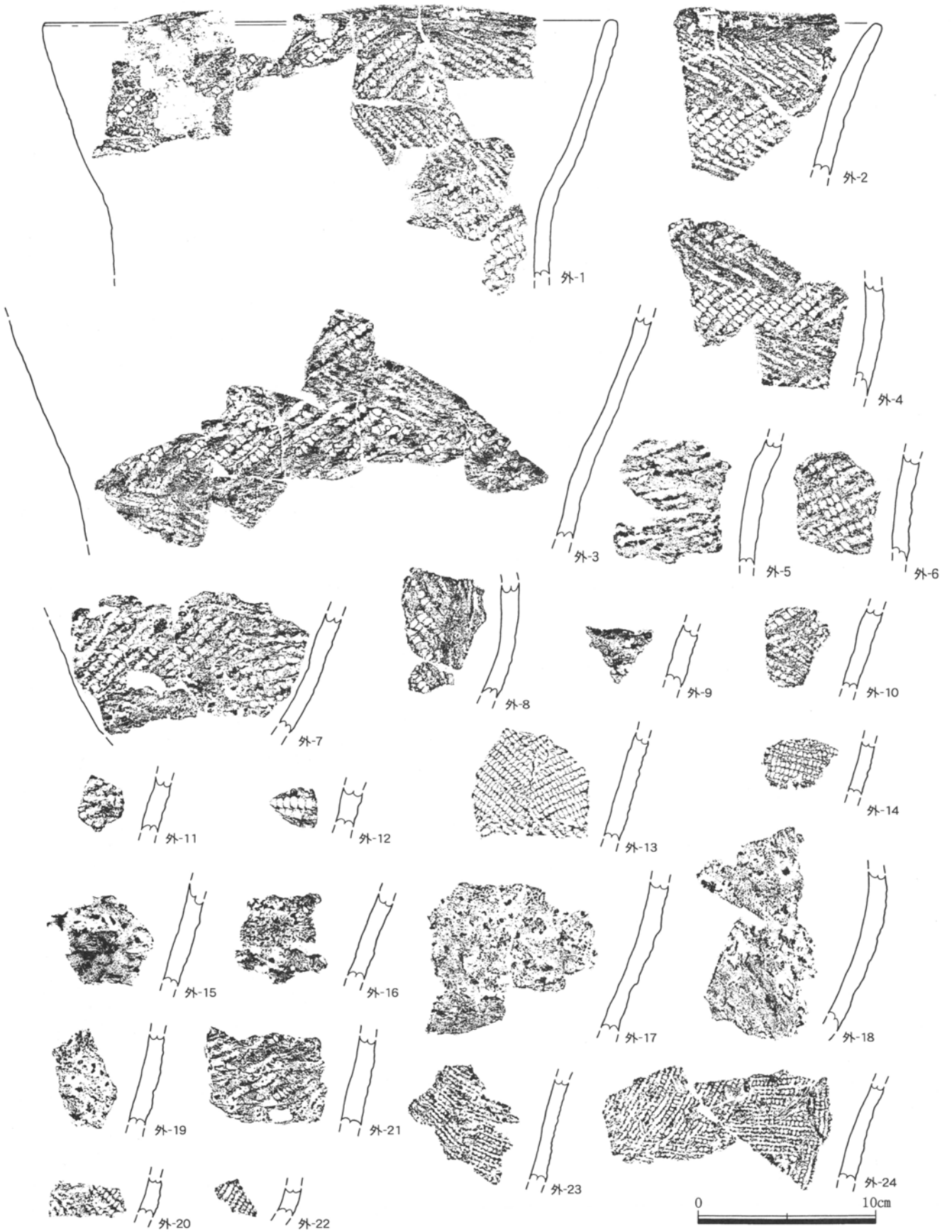
No.	種別	出土位置	全長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	種類
111	石鏃	3区Q h-2	5.6	3.1	0.9	2	黒色頁岩
112	打製石斧	3区Q e-2	9.1	5.9	1.6	93	黒色頁岩
113	打製石斧	2区203号土坑	7.6	6.3	1.8	81	砂質頁岩
114	打製石斧	6区浅間B軽石 下水田	9.4	4.2	1.6	70	珪質頁岩
115	打製石斧	2区110号土坑	11.8	5.3	1.6	119	黒色頁岩
116	打製石斧	6区浅間B軽石 下水田	5.7	6.5	1.3	54	粗粒輝石安山岩
117	打製石斧?	2区6号溝	5.2	4.8	1.1	34	珪質頁岩
118	打製石斧?	2区K c-16・17	5.3	3.5	1.6	35	黒色頁岩
119	剥片石器打製石斧?	1区1号溝	4.1	3.8	1.0	19	粗粒輝石安山岩
120	剥片石器	2区表採	6.4	8.1	1.7	90	黒色頁岩
121	磨石	2区表採	9.6	7.8	4.7	311	粗粒輝石安山岩
122	敲石	2区2号住居	13.4	6.9	5.8	896	輝緑岩
123	多孔石	2区大溝	17.6	14.5	7.3	1,735	粗粒輝石安山岩
124	多孔石	3区20号溝	14.3	14.4	6.9	1,403	粗粒輝石安山岩
125	多孔石	2区大溝	24.2	17.6	7.9	3,379	粗粒輝石安山岩
126	多孔石	2区Q k-6	17.2	14.0	7.5	1,761	粗粒輝石安山岩

第10表 遺構外出土の土師器・須恵器一覧

No.	種別	出土位置	No.	種別	出土位置	No.	種別	出土位置
127	台付甕(S字状口縁)	3区P g-9	140	甕	3区Q i-3	173	大甕	3区表採
128	台付甕	3区P k-18	141	台付甕(S字状口縁)	3区Q k-6	174	大甕	3区表採
129	壺	3区Q k-3	142	台付甕	3区Q k-3	175	大甕	3区表採
		3区P k-18	143	壺	3区N c-5	176	大甕	3区表採
130	ミニチュア	3区P l-18	144	甕	3区Q e-1	177	大甕	3区表採
131	埴	3区Q k-3	145	壺	3区N b-5	178	大甕	2区大溝
		3区P k-18	146	壺	3区表採	179	甕	1区K j-6
132	有孔鉢	3区P k-18	147	壺	3区表採	180	甕	2区表採
133	鉢	3区P k-18	148	高杯	3区表採	181	甕	2区大溝
134	甕	3区P k-18	149	杯	3区3号墳	182	甕	3区Q d-5
135	壺	3区Q i-3	150	杯	3区グリッド	183	甕	3区48号土坑
136	壺	3区Q l-5	151	杯	3区表採	184	瓶	2区大溝
137	有孔鉢	3区Q l-5	152	高杯	5区R g-18	185	甕?	3区グリッド
138	埴	3区Q i-3	153	不明	3区8号溝	186	甕	3区167号土坑
139	台付甕	3区Q k-7	154	不明	3区3号墳	187	不明	2区8号住居
		3区Q k-4	155	甕	2区表採	188	瓶?	1区1号溝
		3区Q e-4	167	皿	3区表採	189	甕	3区表採
		3区Q q-8	168	皿	1区K j-14・15	190	無蓋高杯	3区43号住居
		3区Q g-4	172	大甕	3区表採	191	不明	3区158号土坑

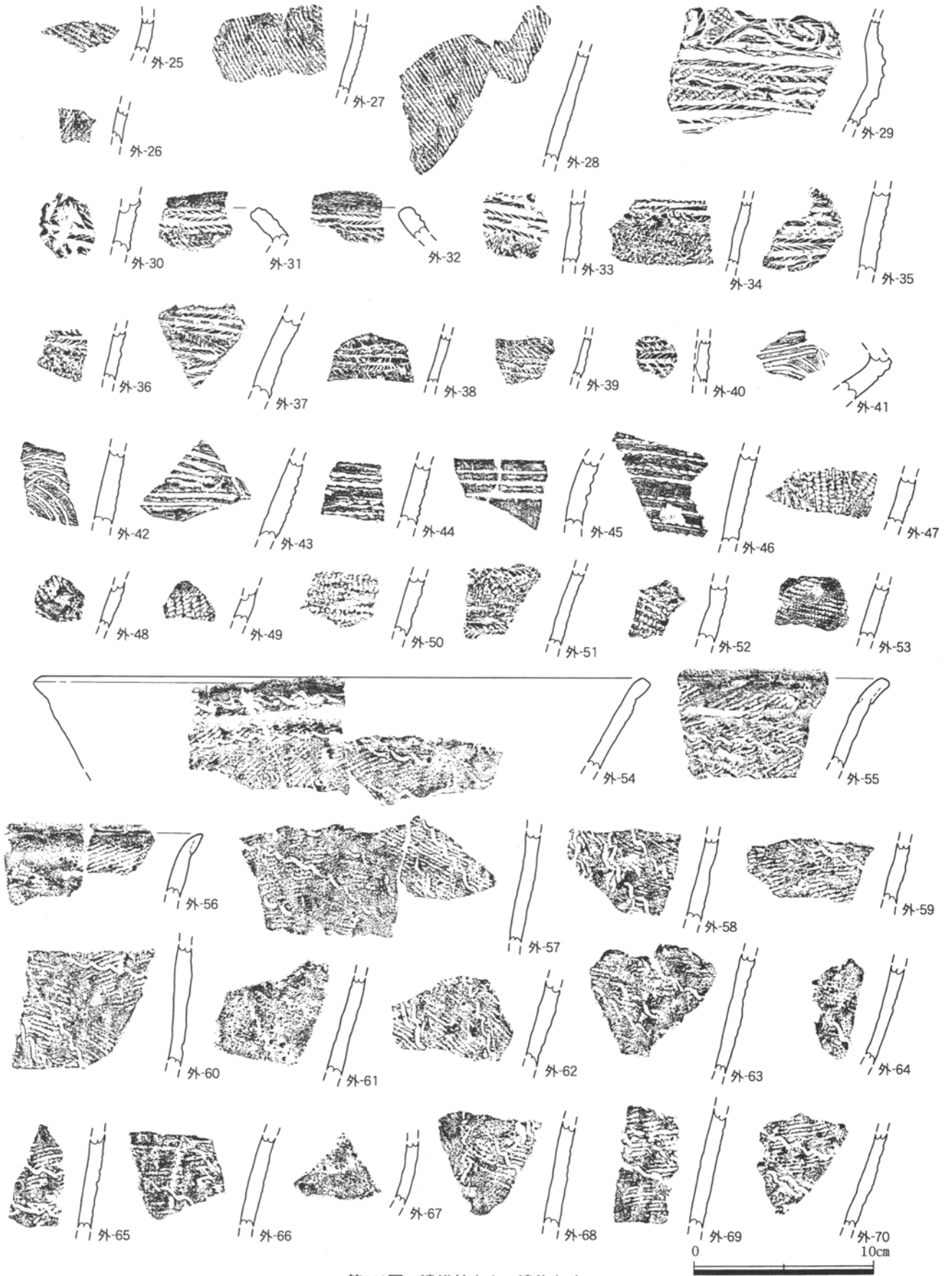
第11表 遺構外出土の石製品一覧

No.	種別	出土位置	No.	種別	出土位置	No.	種別	出土位置
210	砥石	3区表採	223	砥石	3区3号墳	236	五輪塔火輪	2区表採
211	砥石	3区表採	224	軽石製品	3区Q i-1	237	五輪塔火輪	2区表採
212	砥石	3区Q h-1	225	石鉢	2区表採	238	五輪塔火輪	2区表採
213	砥石	3区表採	226	石鉢	2区2号住居	239	五輪塔水輪	2区表採
214	砥石	3区表採	227	石鉢	2区表採	240	五輪塔地輪	2区表採
215	砥石	3区表採	228	石臼	1区表採	241	五輪塔地輪	2区表採
216	勾玉	3区表採	229	不明	2区表採	242	五輪塔地輪	2区表採
217	砥石	2区表採	230	五輪塔空風輪	2区表採	243	五輪塔地輪	2区表採
218	磨石	3区表採	231	五輪塔空風輪	3区表採	244	宝塔	3区表採
219	砥石	2区表採	232	五輪塔空風輪	2区表採	245	不明	2区表採
220	砥石	2区表採	233	五輪塔空風輪	2区表採	246	宝塔	2区表採
221	磨石	3区表採	234	五輪塔空風輪	2区表採	247	礎石	1区K k-7
222	鉢?	1区K k-7	235	五輪塔空風輪	2区表採			

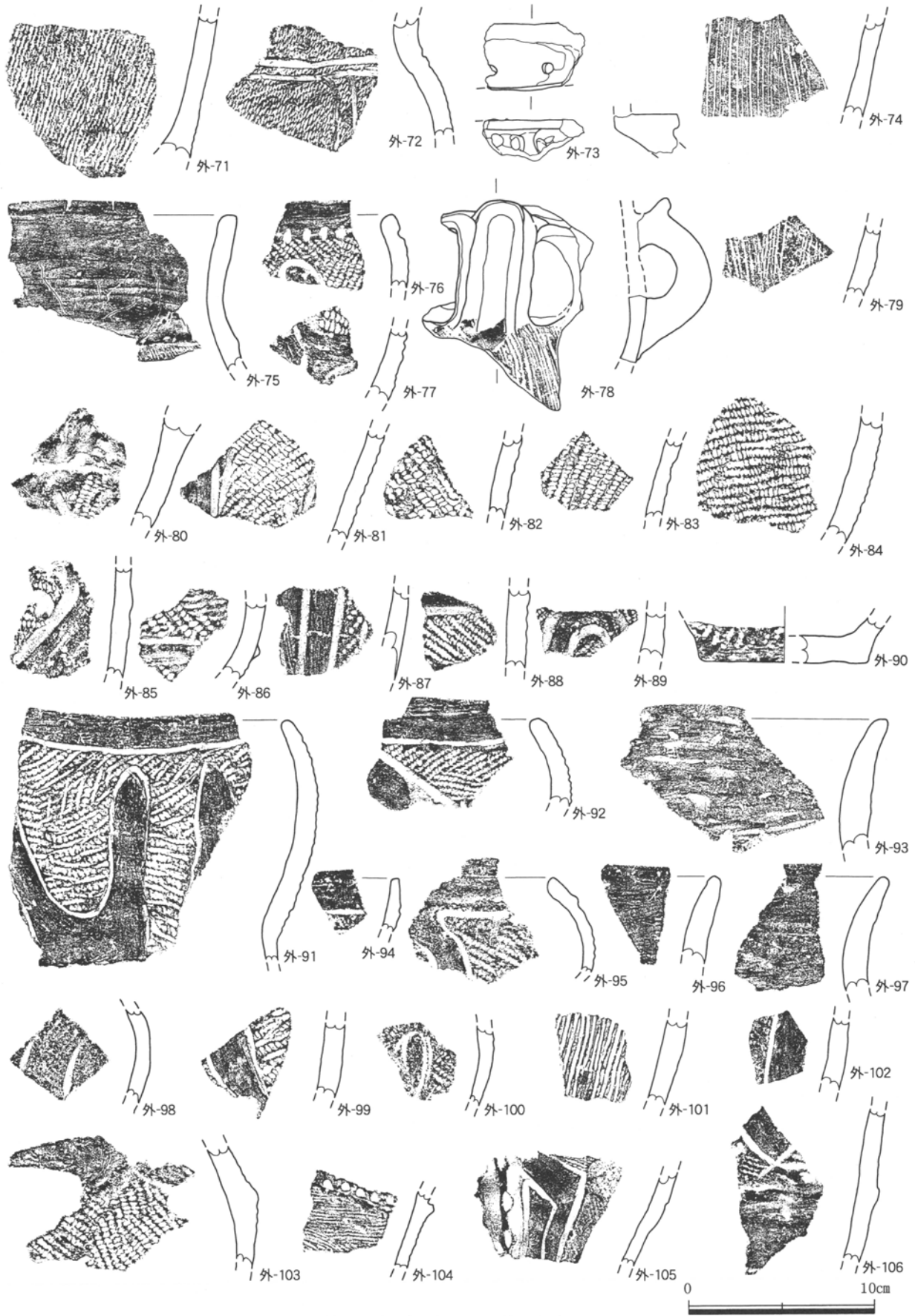


第112図 遺構外出土の遺物(1)

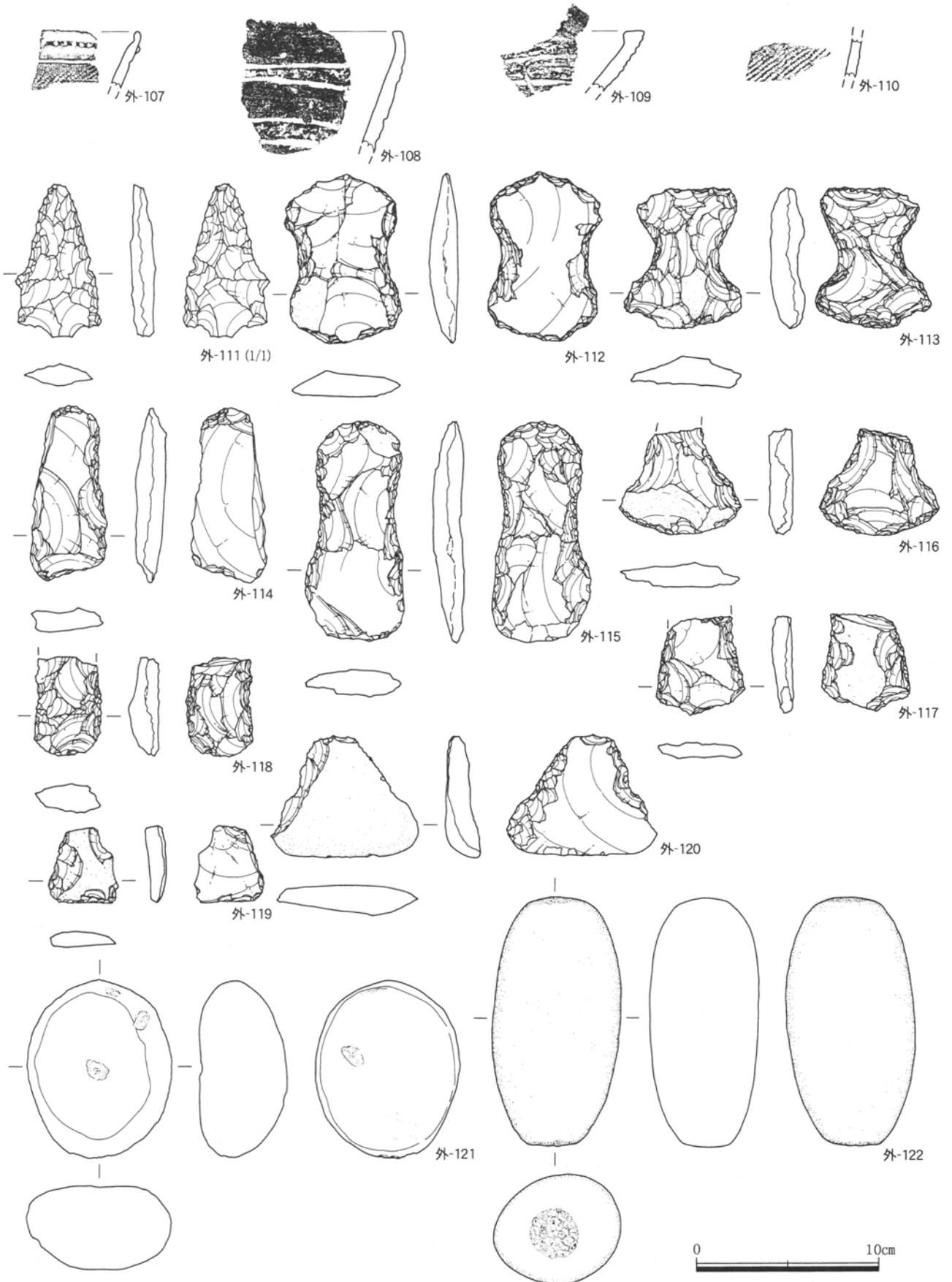
第2章 荒砥諏訪西遺跡の調査



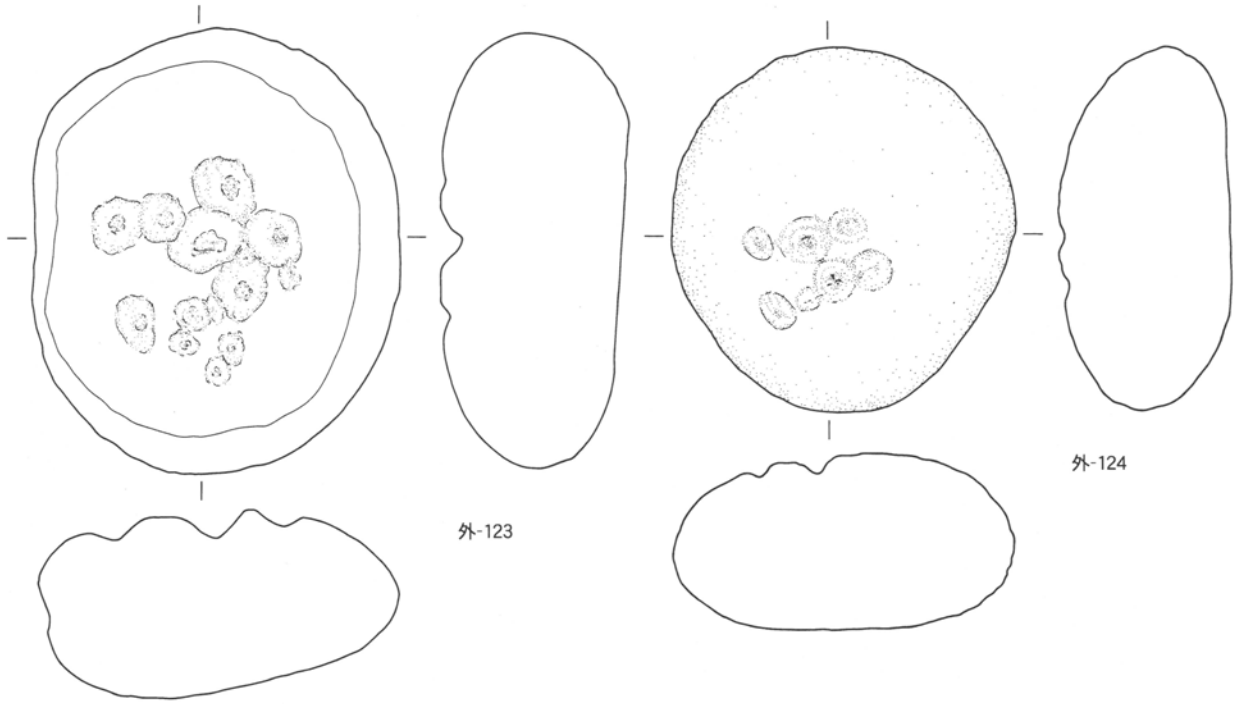
第113図 遺構外出土の遺物(2)



第114図 遺構外出土の遺物(3)

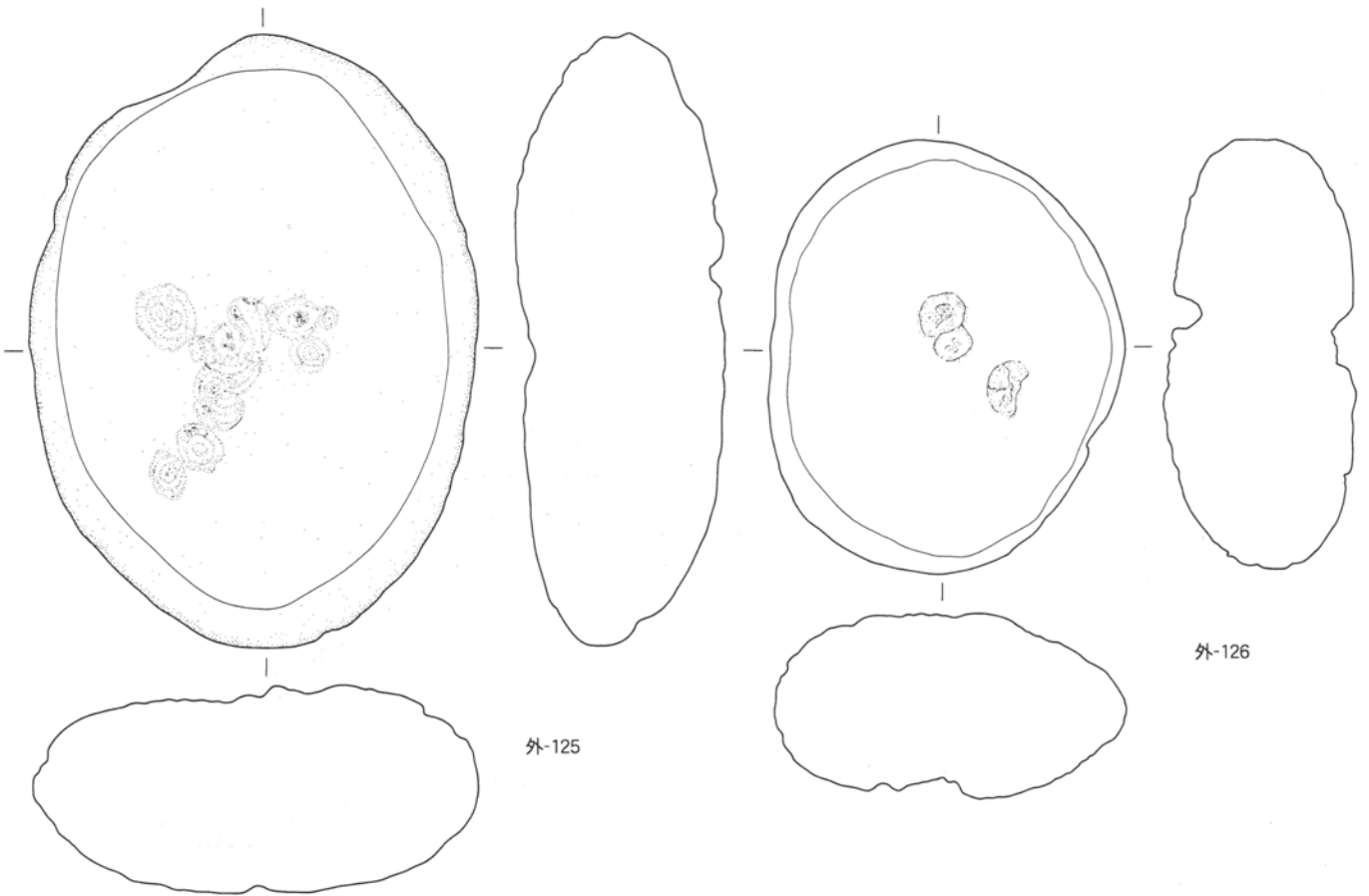


第115図 遺構外出土の遺物(4)



外-123

外-124

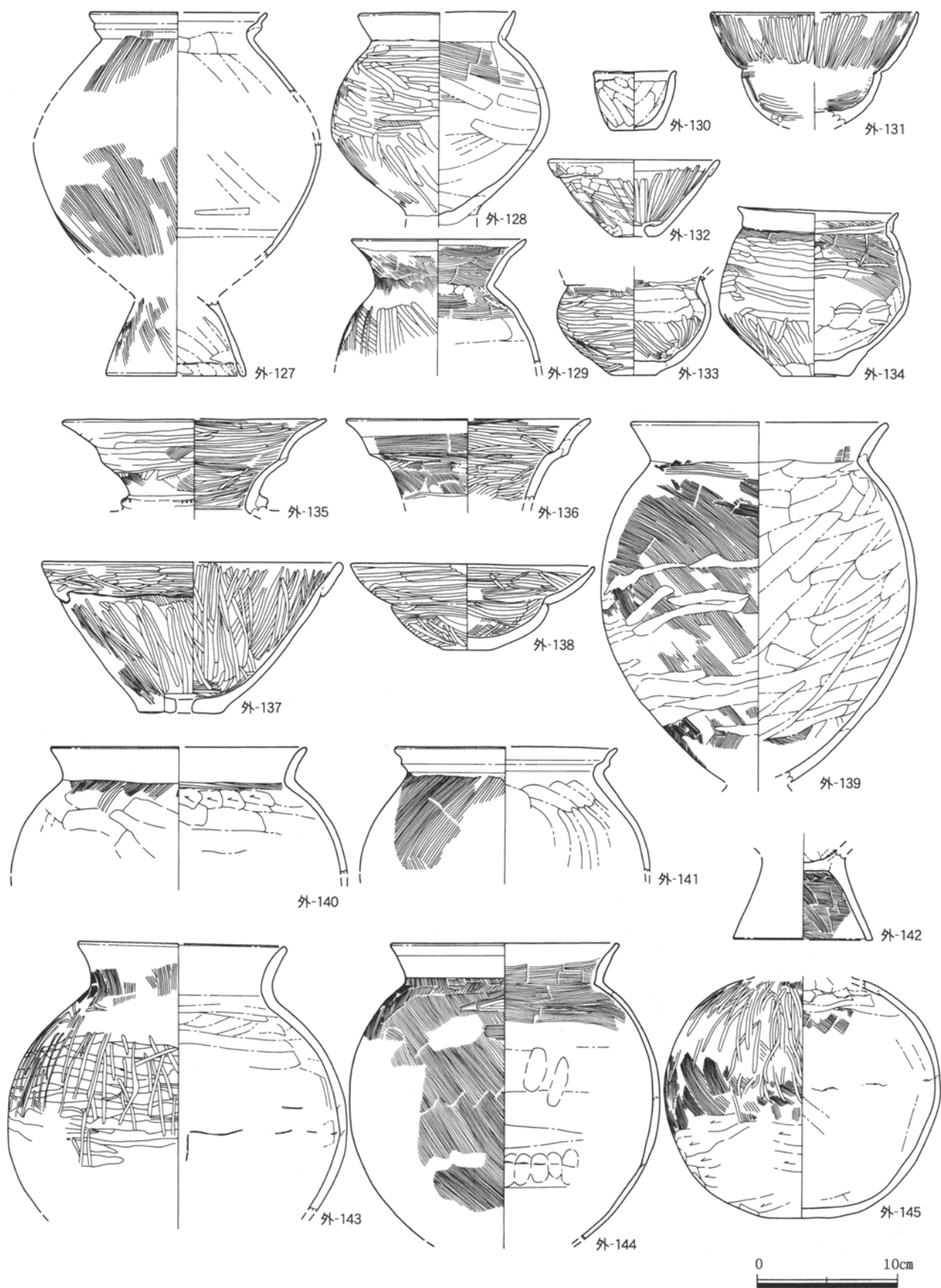


外-125

外-126

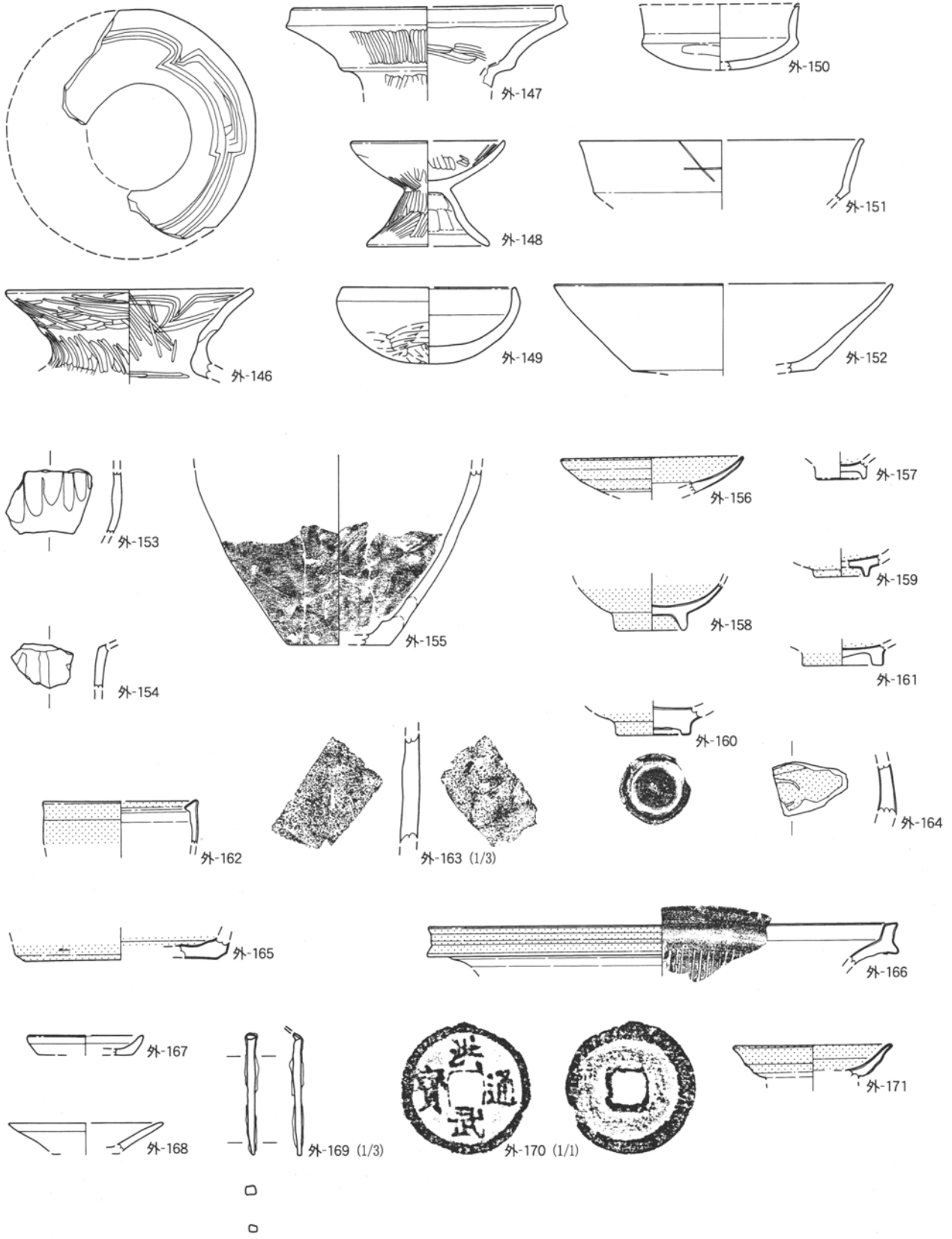


第116図 遺構外出土の遺物(5)

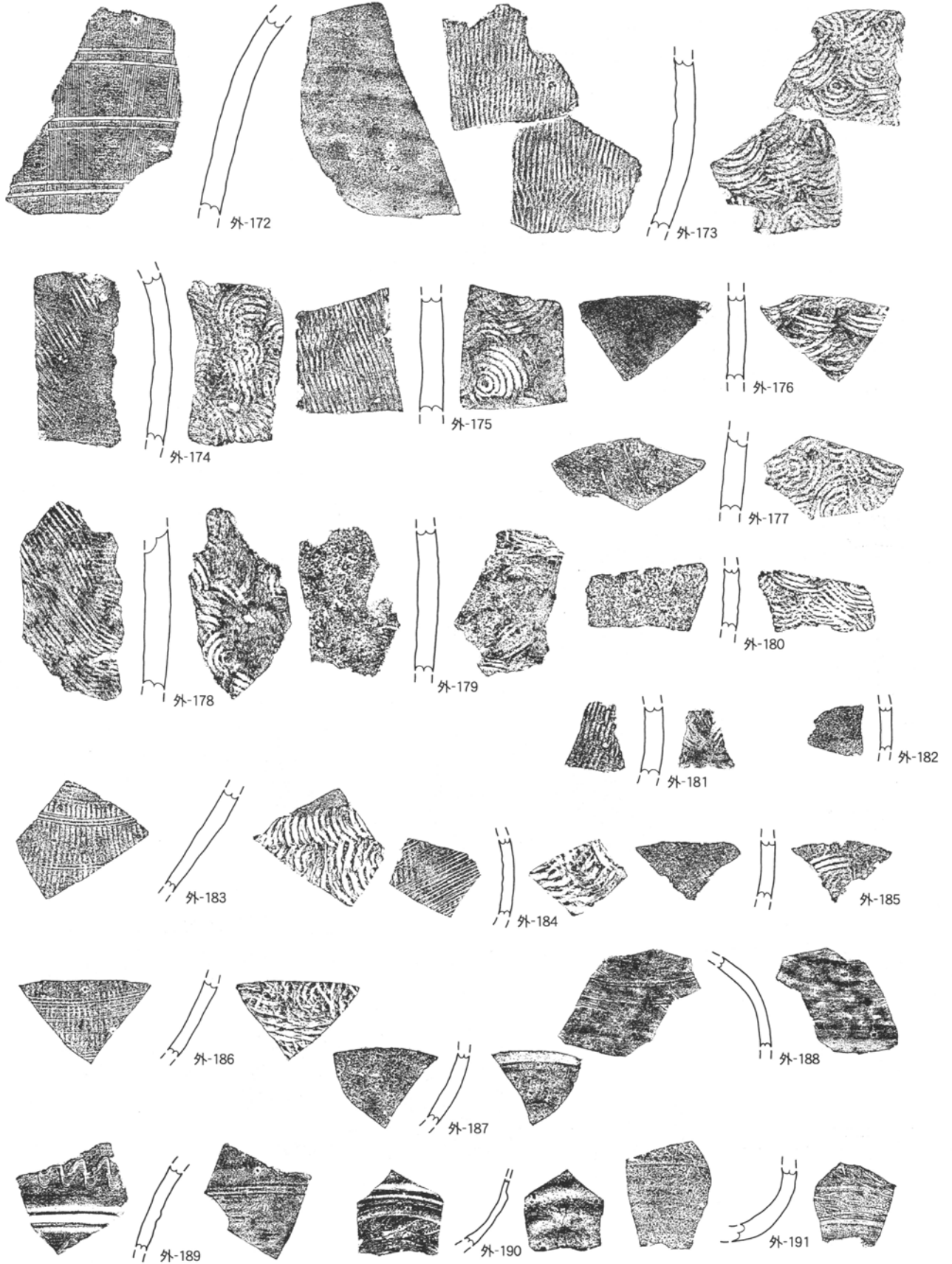


第117図 遺構外出土の遺物(6)



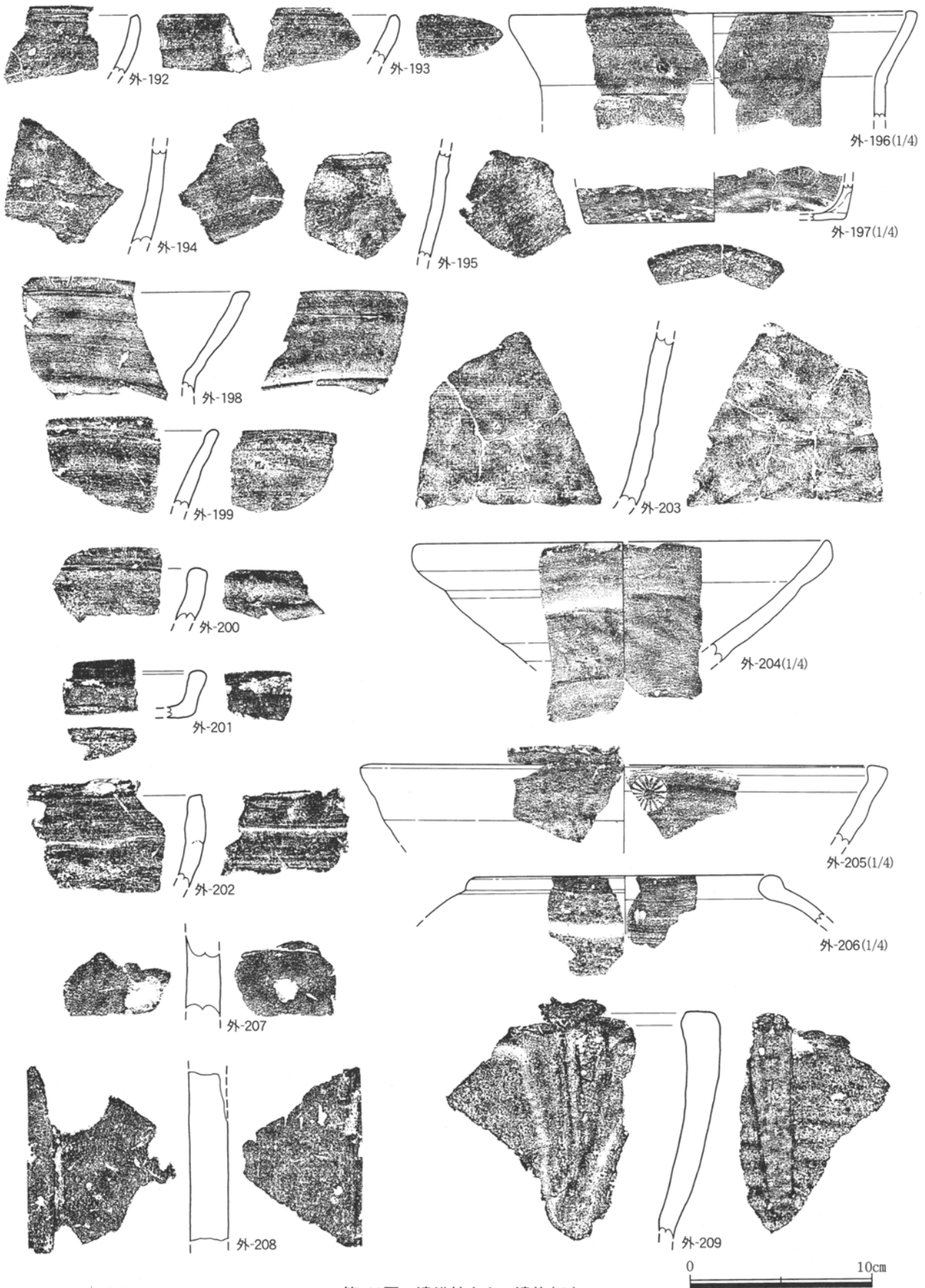


第118図 遺構外出土の遺物(7)

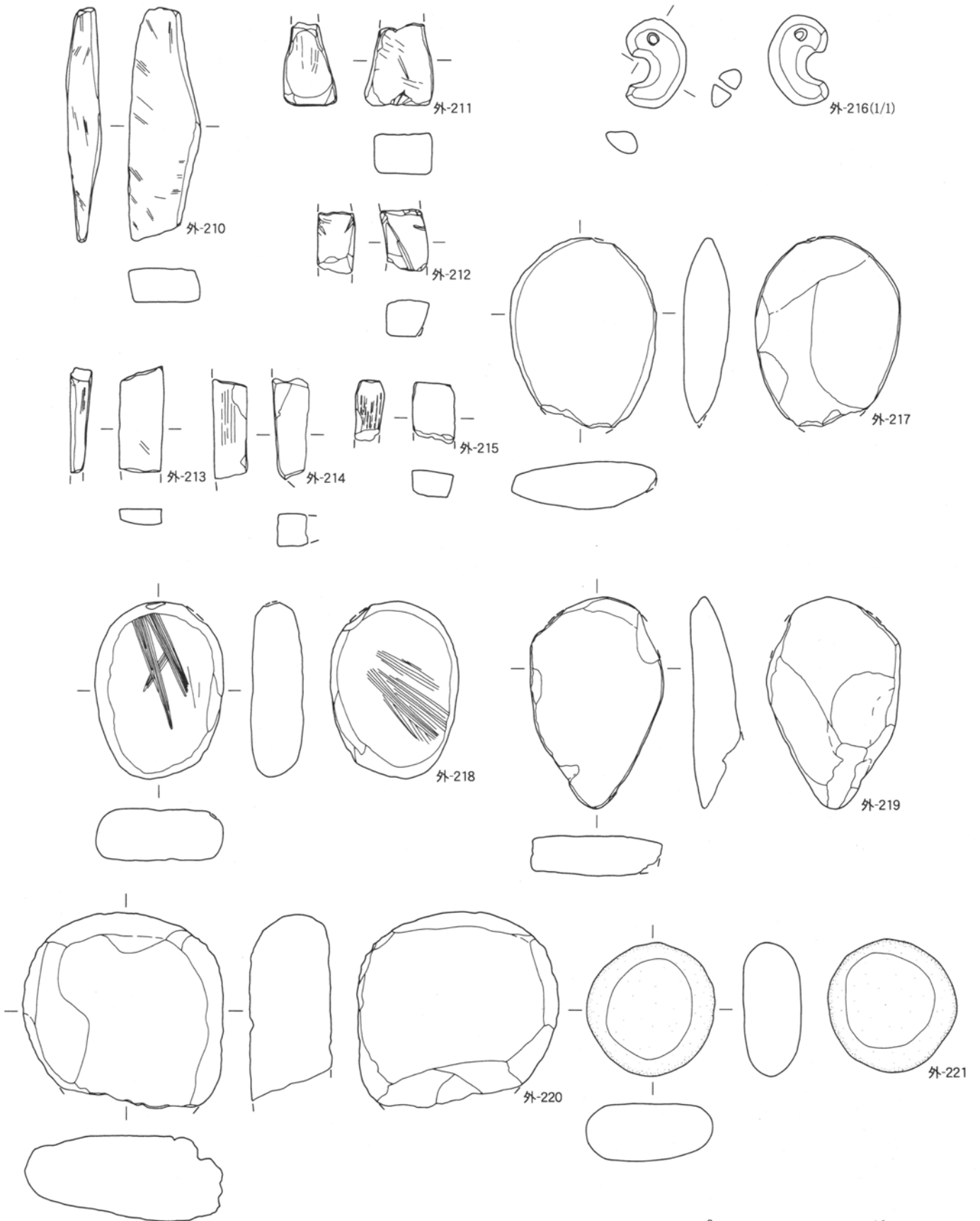


第119図 遺構外出土の遺物(8)

第5節 遺構外出土の遺物

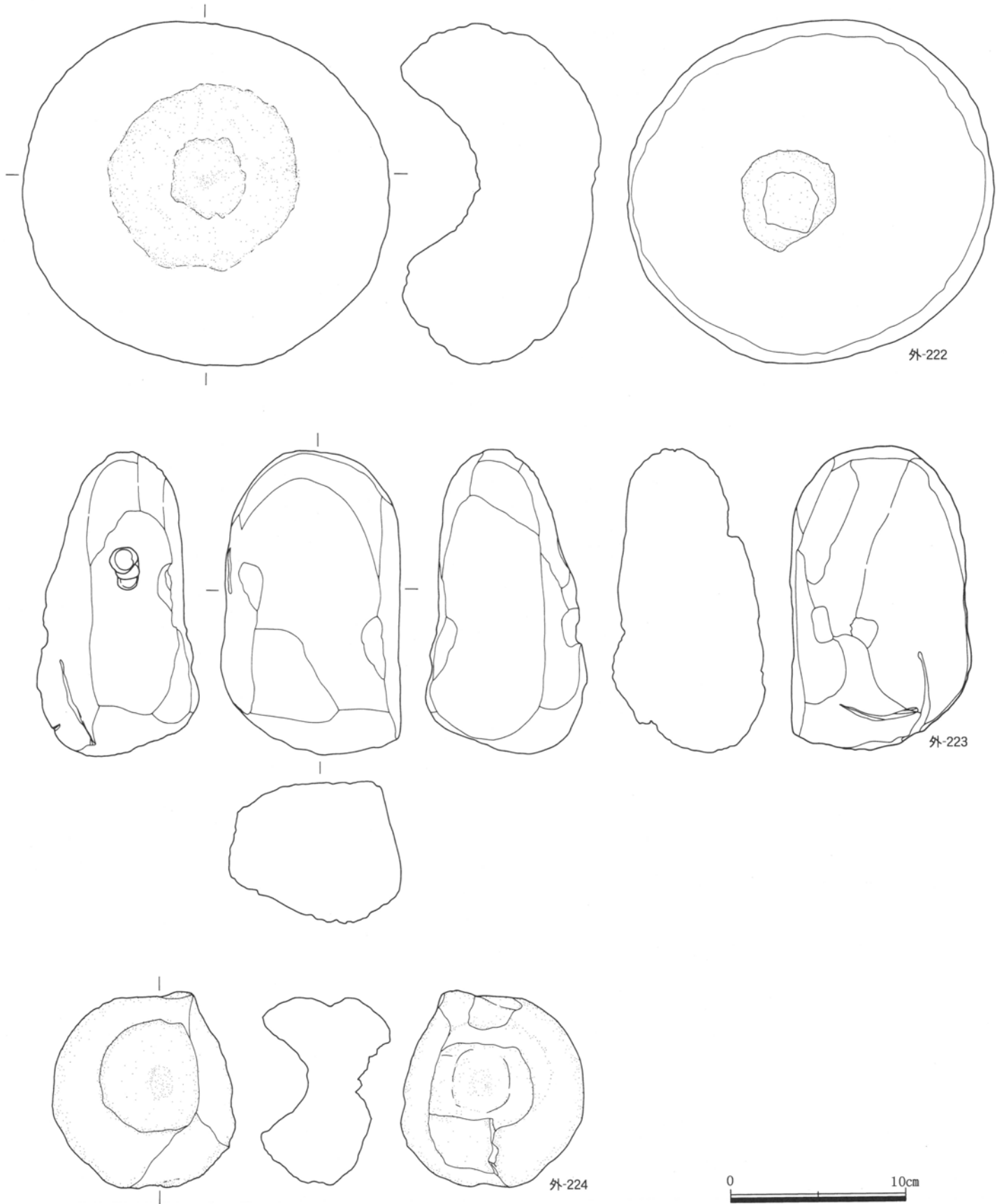


第120図 遺構外出土の遺物(9)

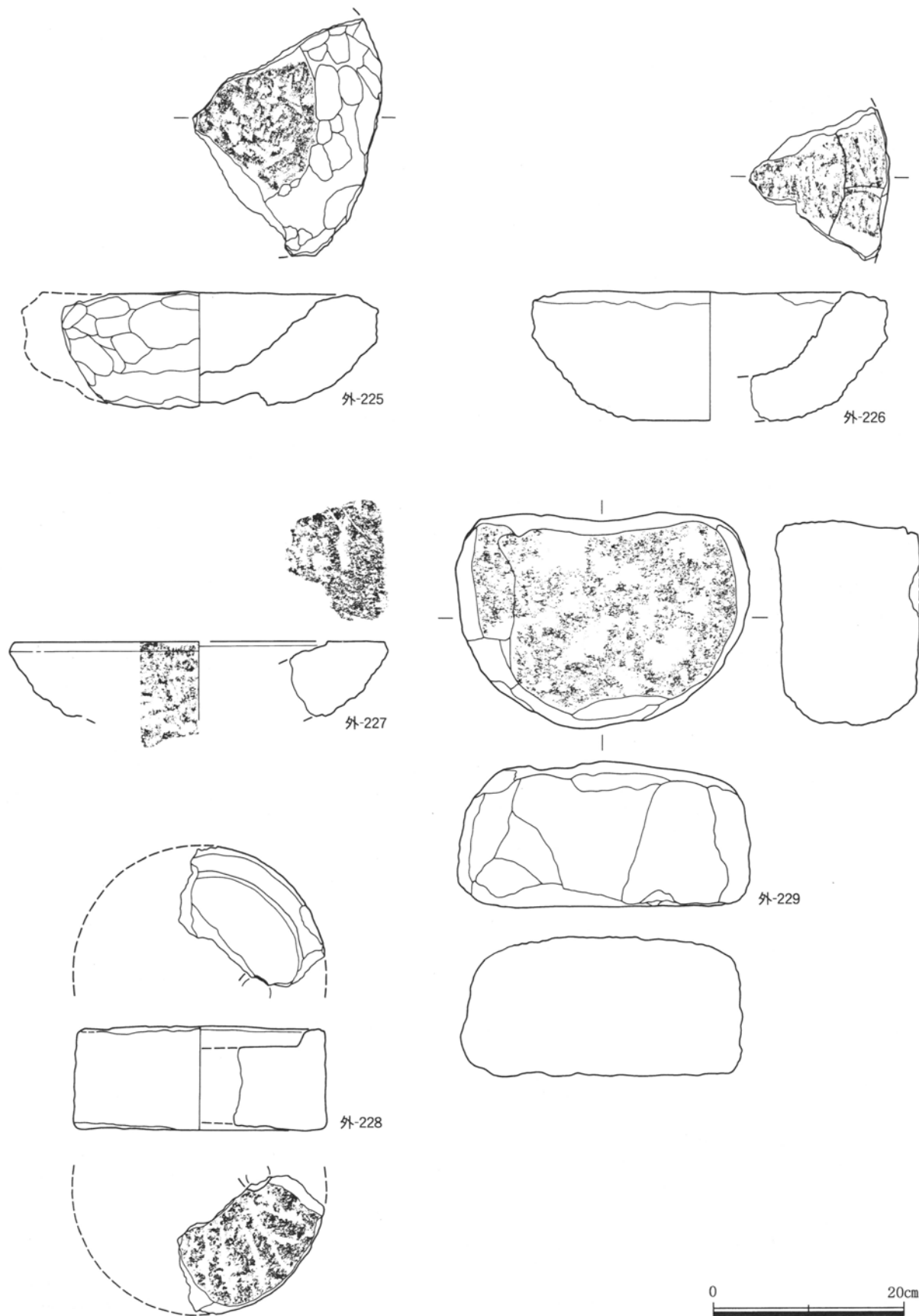


第121図 遺構外出土の遺物(10)

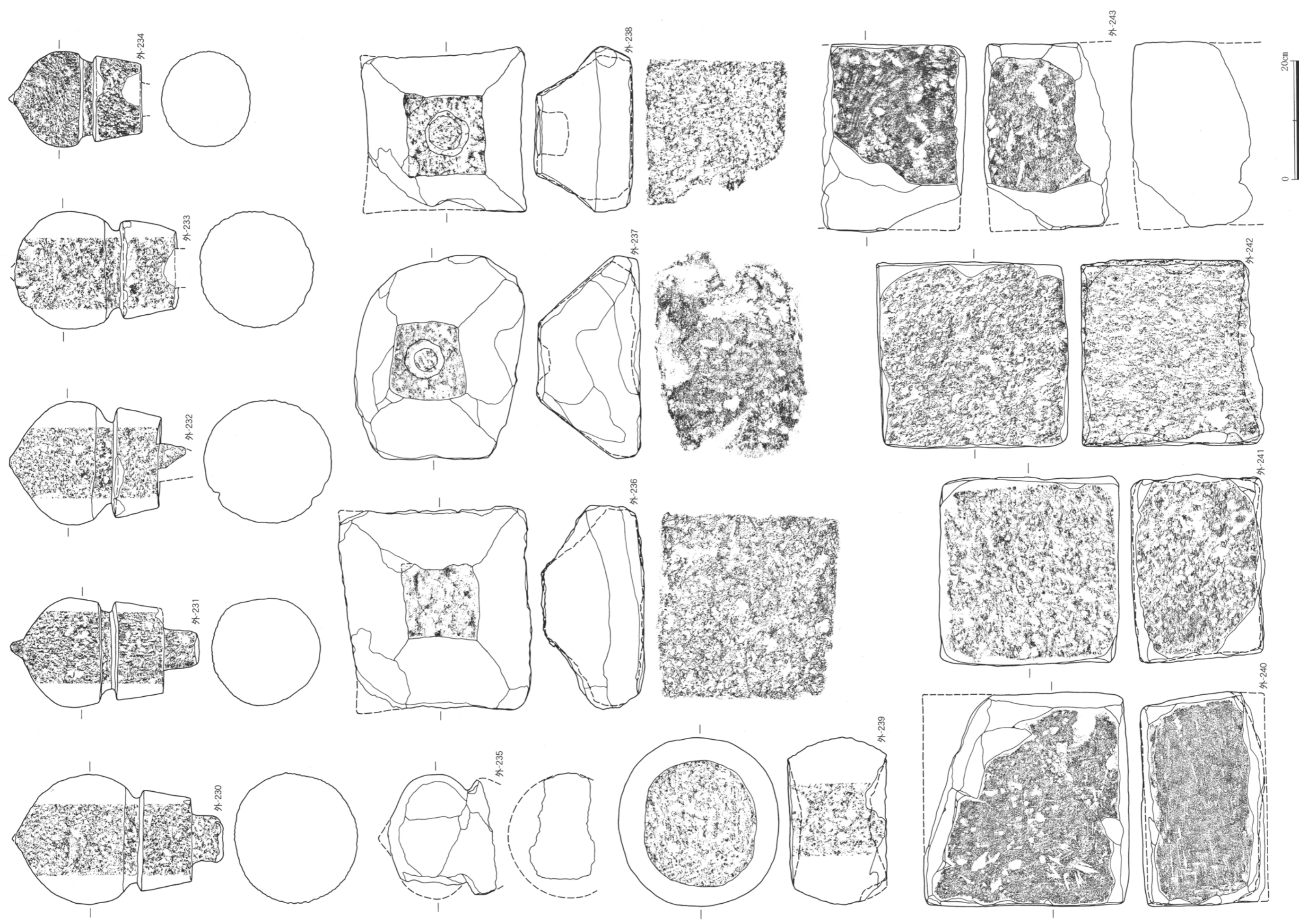
0 10cm



第122図 遺構外出土の遺物(11)



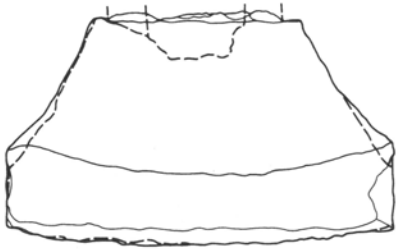
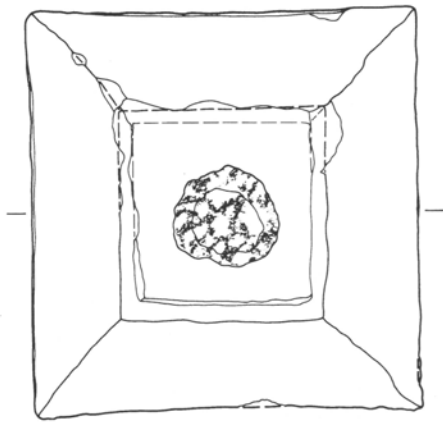
第123図 遺構外出土の遺物(12)



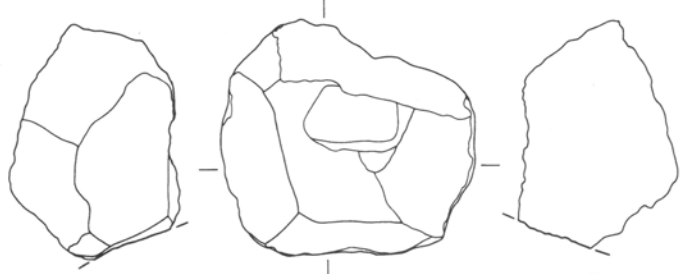
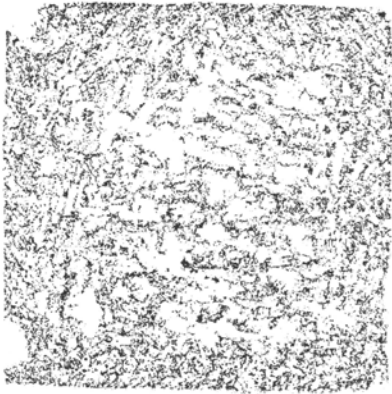
第124図 遺構外出土の遺物(13)



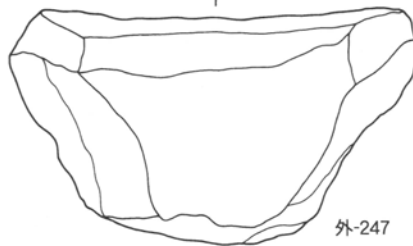
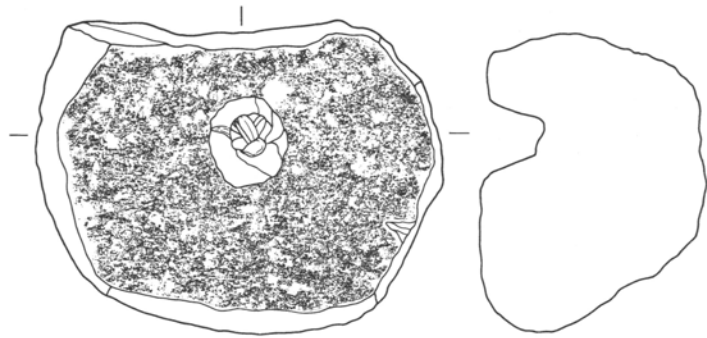
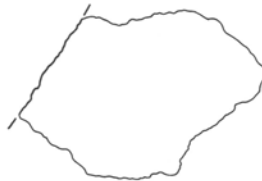
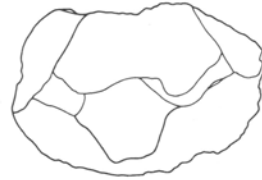




外-244



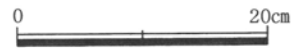
外-245



外-247



外-246



第125図 遺構外出土の遺物(14)

第6節 古墳時代竪穴住居出土の遺物

(第1分冊補遺)

既刊の『荒砥諏訪西 I 遺跡』においては古墳時代の竪穴住居について報告し、住居に伴うと考えられる遺物について掲載したところである。が、これに漏れたものがあることが判明したので、ここに補足しておく。

(1) 2区1号住居出土砥石 (第126図 PL43)

2区1号住居は、Ns-11・12、Nt-11グリッドに位置する古墳時代前期の竪穴住居である。その規模は、南北5.9m、東西5.4mである。掲載した砥石は貯蔵穴の西方向、南壁際から出土、床面から5cm離れて出土した。共伴する土器は、土師器壺、S字状口縁台付甕である。(観P233)

(2) 3区29号住居出土土師器 (第126図 PL43)

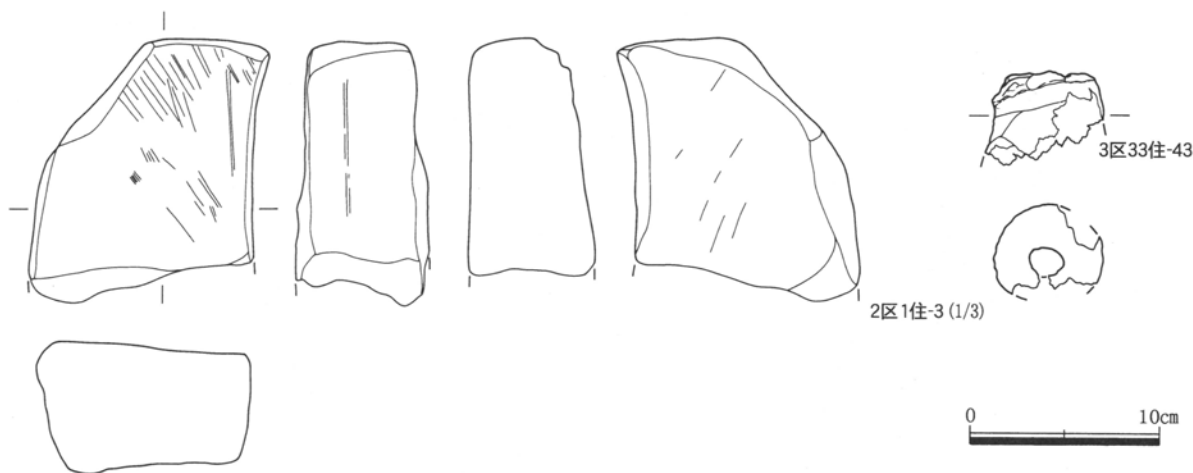
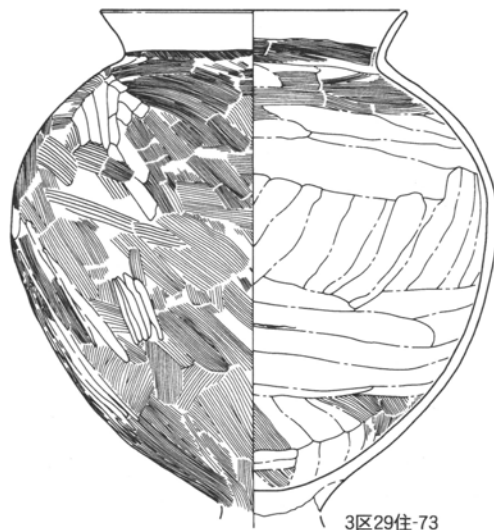
第29号住居は、Pl・m-18・19グリッドに位置する古墳時代前期の竪穴住居である。その規模は、南北5.2m、東西4.5mを測る。掲載土器は、北西隅から東に2.0m、南に1.0mの地点で床面から20cm離れて出土した台付甕である。胴部外面の調整には単位の細かい刷毛目が多様されており、工具は、同住居出土

の61に類似する。この他に土師器鉢・埴・高杯・器台・壺・甕・台付甕が、埋没土中を含め、多数出土、既刊報告書では71個を掲載した。(観P233)

(3) 3区第33号住居出土羽口 (第126図 PL43)

3区33号住居は、Pg・h-17・18グリッドに位置する古墳時代前期の竪穴住居である。その規模は、東西・南北6.1mを測る。掲載した羽口は、大型の砥石(42)の北東50cm、床面から8cm離れた地点から出土した。共伴する遺物は、土師器手づくね・鉢・有孔鉢・器台・壺・埴・台付甕・甕である。

(観P233)



第126図 古墳時代竪穴住居出土遺物

### 第3章 荒砥諏訪遺跡の調査

#### 第1節 発掘調査の方法

##### (1) グリッドの設定

グリッドの設定については荒砥諏訪西遺跡、荒砥宮田遺跡で採用した内容と全く同様の設定を行った。調査区全体を一辺100mの方眼でカバーし、個々に大グリッドの名称を付した。遺跡を検出した大グリッドはT～Xの5区画である。

大グリッドの設定の基点は調査区南西寄り、新設道路支道25号とこれに交差する支道30号の交点の北西隅に置いた。支道30号の北縁の方向を東西の基本線とし、基点上でこれと直交する線を南北の基本線とした。南北基本線と国家座標の南北ラインとの偏角は東に約4度である。荒砥諏訪西遺跡の基本線の方向とは異なっている。

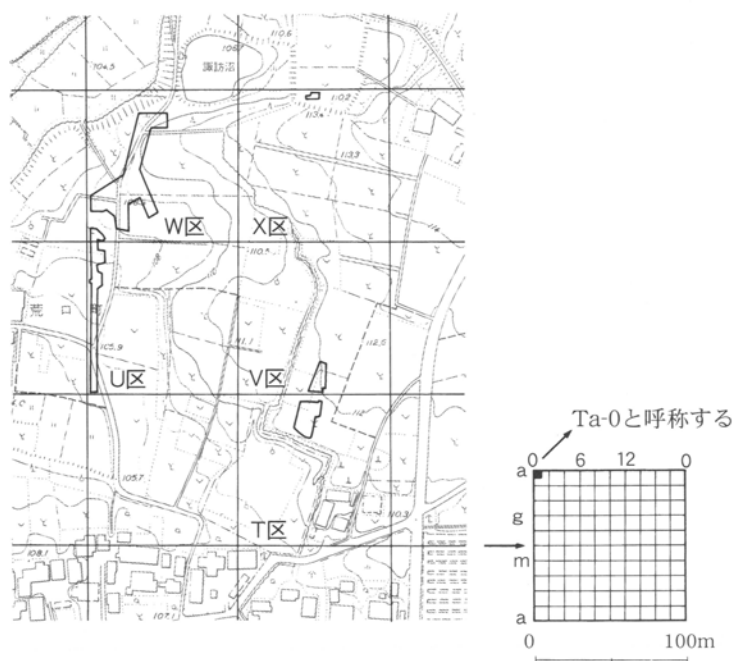
大グリッドの中には一辺5mの方眼を設定、これを小グリッドとした。グリッドの呼称は荒砥諏訪西遺跡と同様で、北西隅に基点を設定、その点をa-1とし、東西軸にアラビア数字を付し、西側から0か

ら19まで、南北軸にアルファベットを付し、北側からaからtまでとした。呼称は第6図の凡例と同様、Wn-1である。

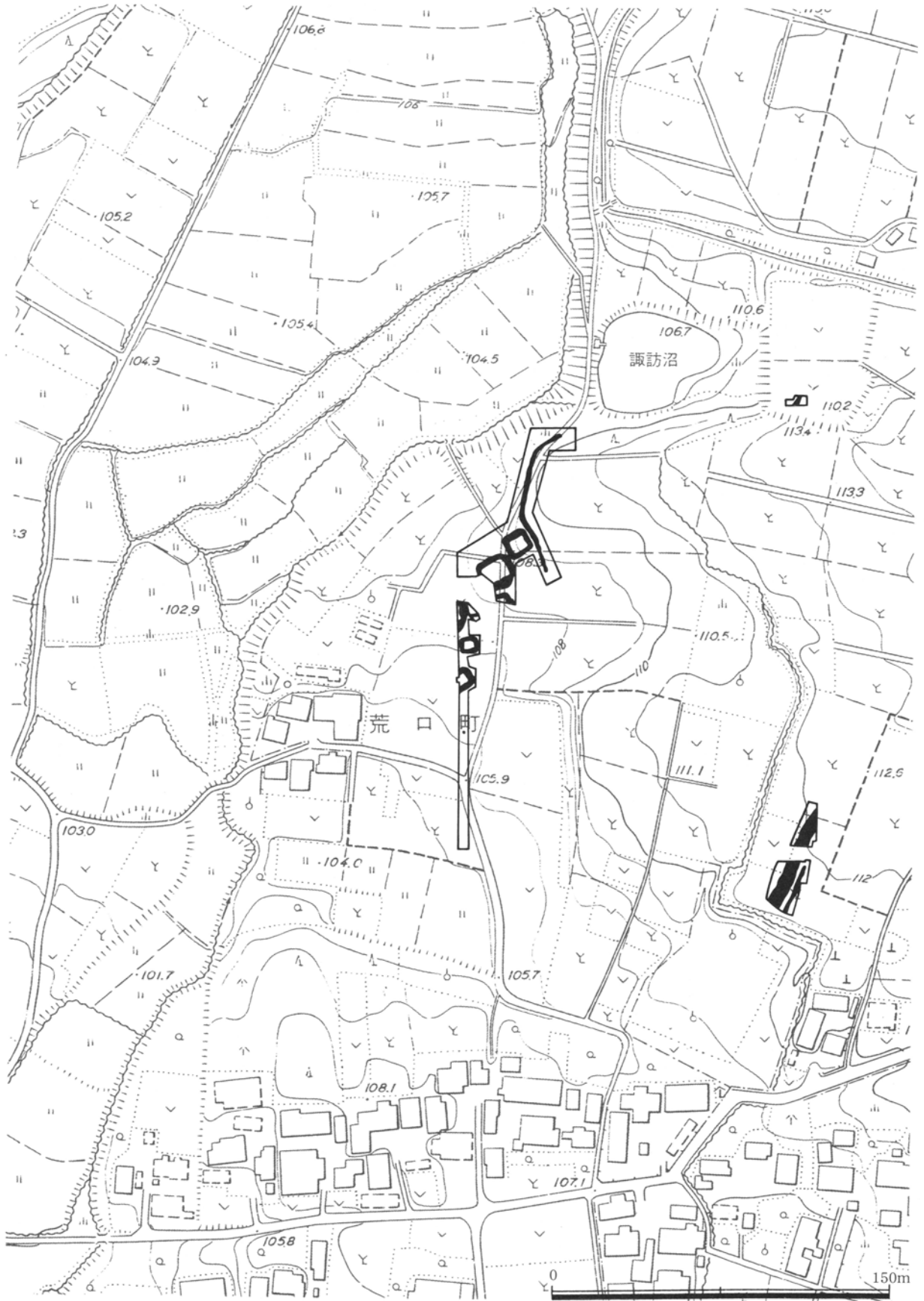
##### (2) 調査の経過

荒砥諏訪遺跡の調査は第1章に記したよう、荒砥諏訪西遺跡、荒砥宮田遺跡と平行して実施された。圃場整備の設計に基づき新設の道路建設用定域切土部分を中心に試掘調査を実施し、遺構の存在の確認できた部分の表土を大型重機で掘削、遺構の精査で実施した。遺構の調査は、10月28日から12月15日にかけて集中して実施され、新設の支道25号設置部分では3～5号方形周溝墓と1号土坑を確認、一部調査区を拡張して遺構を検出した。また、W区では1・2・6号の3基の方形周溝墓と5号溝を検出、調査した。排水路支排8号部分の試掘調査では1・2号溝の存在を確認、その南北に限定した調査区を設定、1～3号溝の調査を行った。また、遺跡の北東部分では4号溝の存在を確認した。

2・3月に荒砥諏訪西遺跡、荒砥宮田遺跡ともに



第127図 荒砥諏訪遺跡調査区の設定



第128図 荒砥諏訪遺跡調査区の位置（調査時）



第129図 荒砥諏訪遺跡調査区の位置（現状）

図面類の基本的な整理作業、遺物の水洗作業を行った。

(3)遺跡の名称

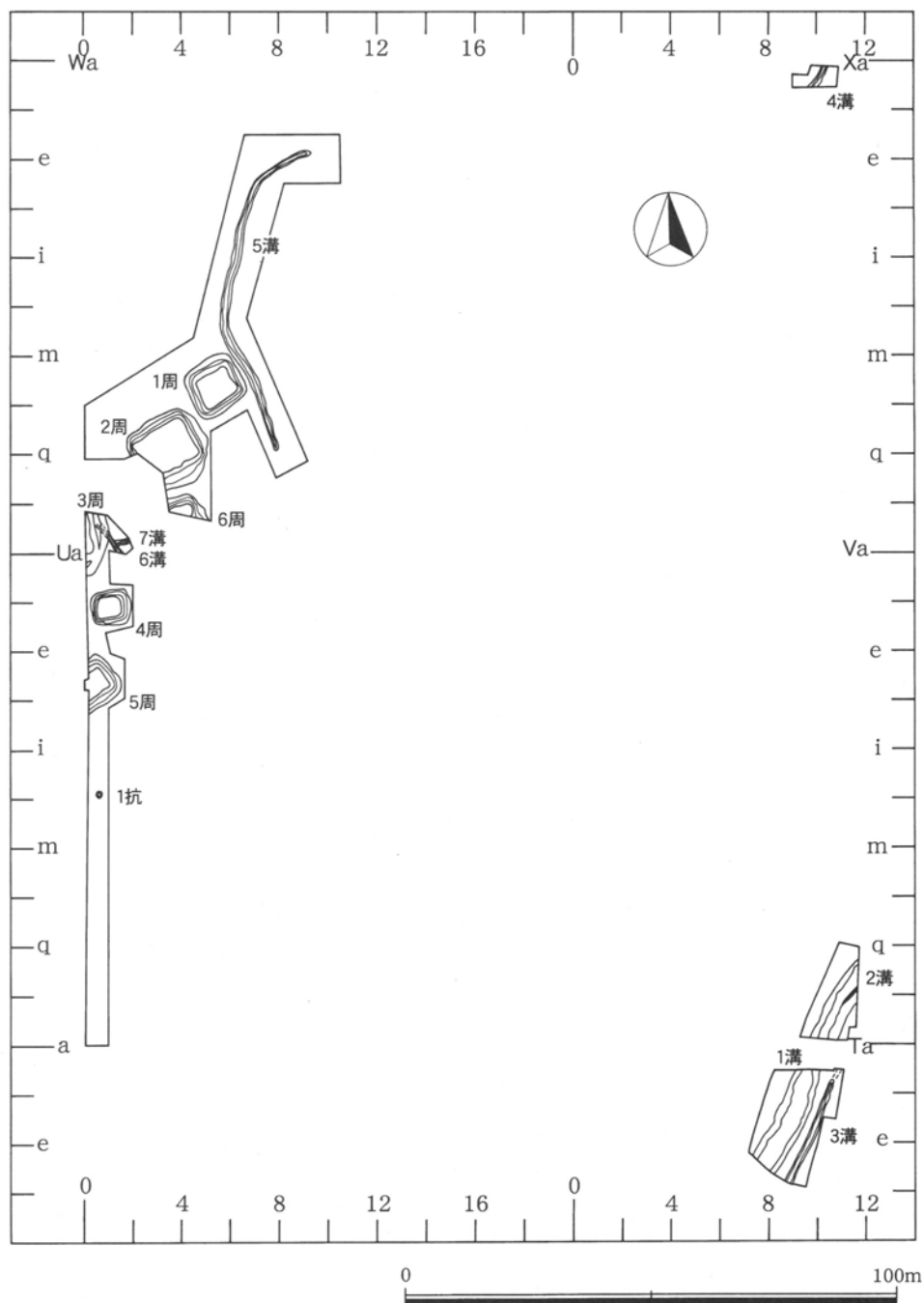
調査は、前橋市荒口町字諏訪726番地を中心に実施された。このため、遺跡の所在する荒口町の旧村名の荒砥と字名の諏訪をあわせ「荒砥諏訪遺跡」と命名したことは例言にも記したとおりである。

なお、荒口町字諏訪には荒砥諏訪遺跡と同年度に群馬県教育委員会によって調査が実施され、3地点から方形周溝墓7基、溝5条が検出された諏訪遺跡がある。南側の地点は、本遺跡の1～3号溝検出地点に東接している。また、1984（昭和59）年度には鶴谷団地造成に伴い、前橋市教育委員会、前橋市埋蔵文化財発掘調査団によって調査され、2地点から土坑1基、溝4条、炭窯1基が検出された諏訪遺跡もそれぞれ存在する。

第2節 検出された遺構と遺物

(1)検出された遺構と遺物

今回の荒砥諏訪遺跡における調査で検出した遺構は方形周溝墓6基、溝7条、土坑1基である。方形周溝墓は、南北方向に延びる支道25号の新設部分とこれに続く切土部分から検出した。検出状況から台地の東西方向にその分布が広がる可能性は充分考えられる。また、近接して、5～7号溝、1号土坑を検出、調査した。



第130図 荒砥諏訪遺跡検出の遺構

(2) 方形周溝墓

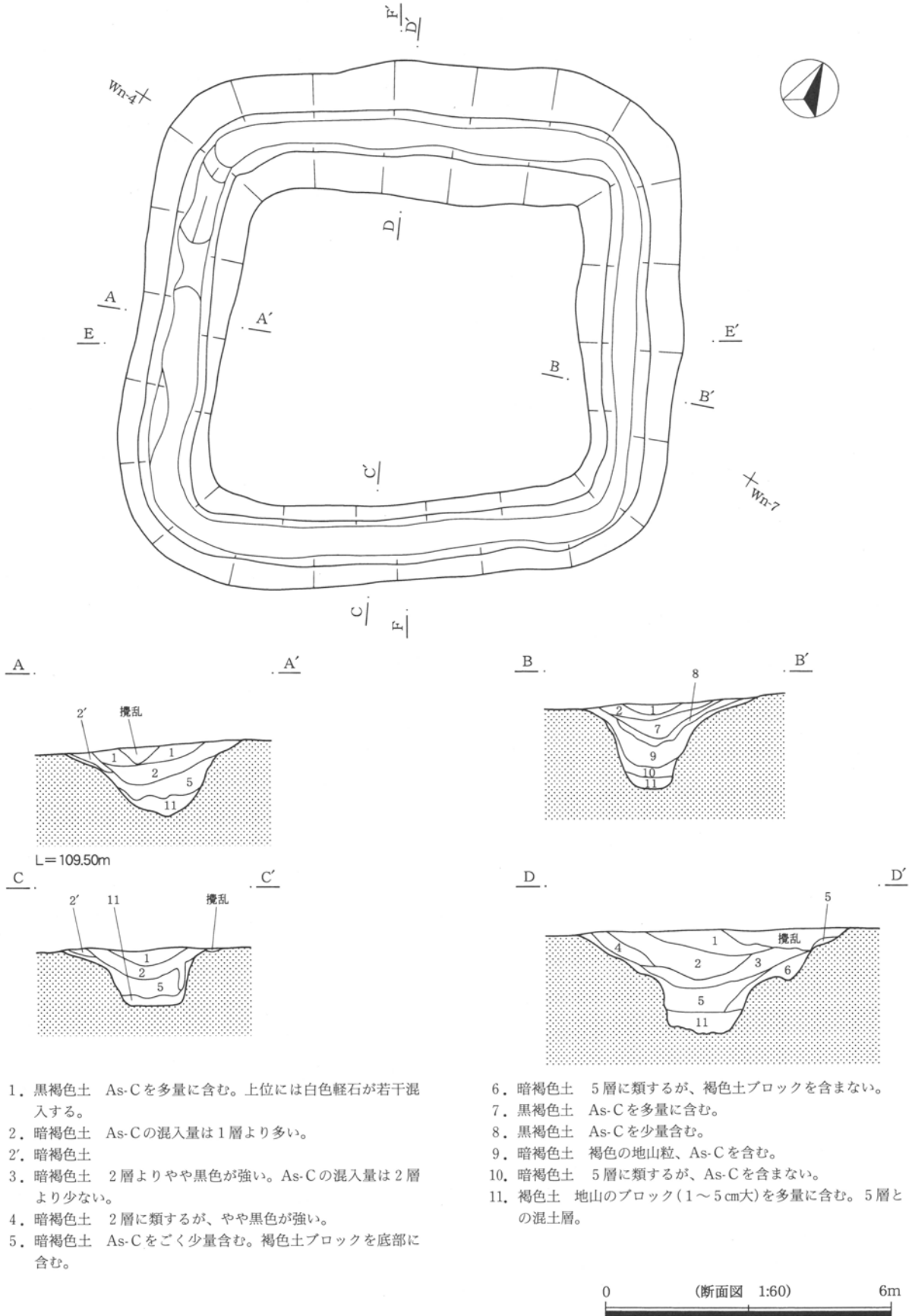
1号方形周溝墓 (第131・132図 P L 44)

位置 Wm・n-3・4を中心に位置する。

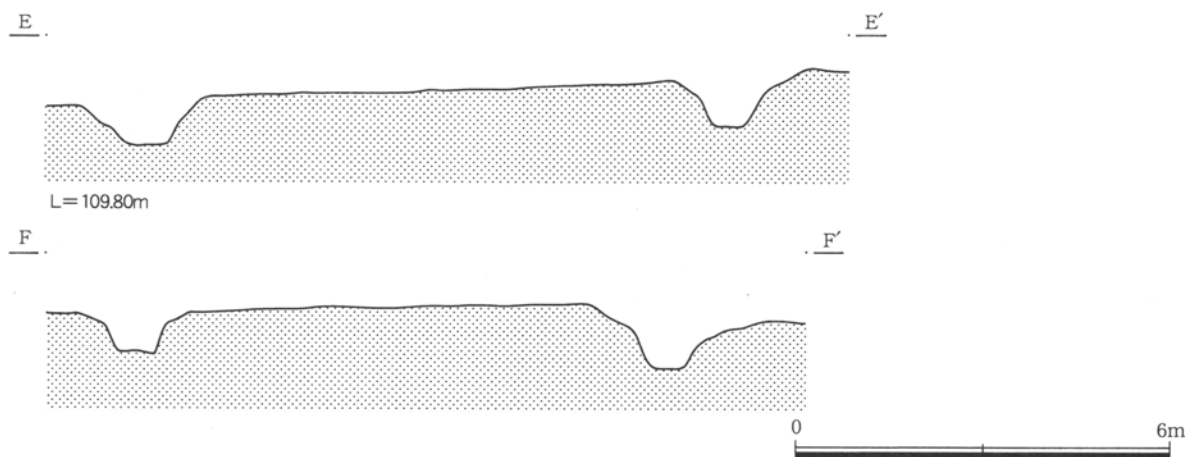
形状 周溝を含めた規模は、南北11.12m、東西11.83m、台状部は、南北6.63m、東西7.95mを測った。台状部の盛土、主体部は、確認できなかった。平面形は、周溝外縁の四隅がやや隅丸を呈する。各辺とも台状部南西隅がやや鋭角を形成する他は直線を指

向し精美である。周溝の掘り込みは浅くなっていた。周溝の断面形は逆台形で、外縁側の上半がやや緩やかな立ち上がりであるのに対し、内縁側はやや急な傾斜であった。残存幅は、南辺中位で上幅1.62m、下幅0.61mであった。北側の傾斜は、他と比較して緩やかであった。内縁の残存壁高は、北辺で1.06m、東辺で0.83mを測る。

方位 N-26°30'-W



第131図 1号方形周溝墓(1)



第132図 1号方形周溝墓(2)

**埋没土** 暗褐色を主体とし、部分的に黒褐色土が堆積する。上・中層に浅間C軽石を多量に含むが純層は存在しない。土層の堆積は、内外縁の一方に片寄ることなくレンズ状に堆積している。

**所見** 遺物を出土していないが、古墳時代前期の遺構と考えられる。

**2号方形周溝墓 (第133・134図 P L 44・45)**

**位置** Wp-3を中心に位置する。

**重複** 東辺の外縁上面に浅間B軽石が堆積する溝状遺構が重複している。北辺外縁は、攪乱を受けている。

**形状** 西辺の南半から南西隅周辺は未調査である。周溝を含めた規模は、南北15.46m、東西15.07mである。台状部は、南北9.22m、東西11.62mを測り、東西に長辺を有する長方形を呈する。平面形では南辺外縁から弧状に大きく張り出しているが、東・北の両辺は基本的に直線を指向している。周溝の掘り込みは、各隅部分の幅が狭くなると同時に浅くなっている。断面形は、内外縁の傾斜が外側に比較して内側が急な状況である。周溝の規模は、北辺中位で上幅2.03m、下幅0.49m、残存壁高1.09m、南辺中位で上幅3.86m、下幅1.53m、残存壁高1.40mを測る。 **方位** N-28°30'-W

**埋没土** 黒褐色土、黄褐色土、灰褐色土等が堆積する。浅間C軽石の純層はない。

**遺物** 南辺の中位の土層中から埴が出土している。

他に埋没土中から壺(1・2)が破片の状態で出土している。底面からの距離は0.43mである。(観P 233)

**所見** 古墳時代前期の遺構と考えられる。

**6号方形周溝墓 (第133・134図 P L 45)**

**位置** Ws-4を中心に位置する。

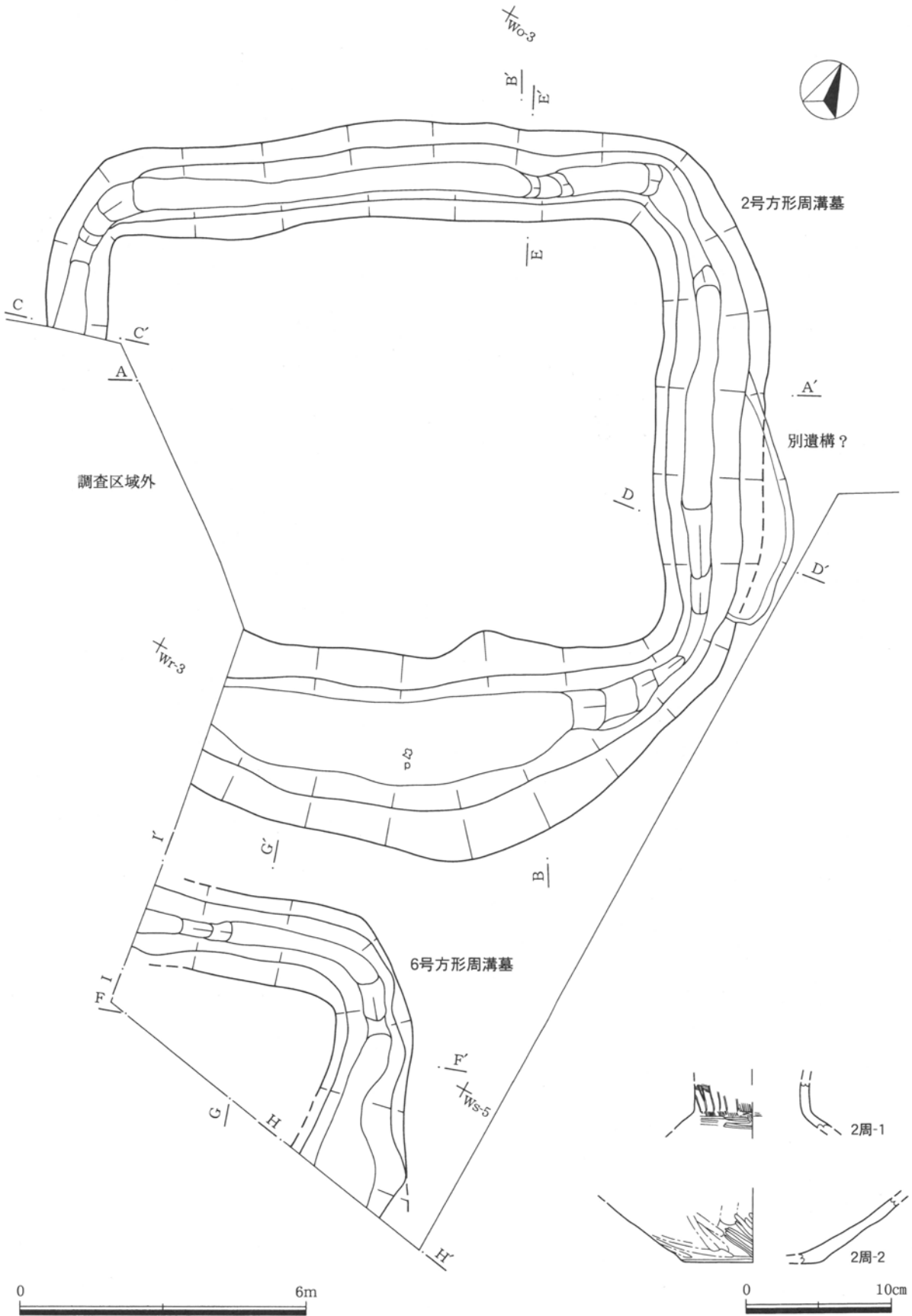
**重複** 2号方形周溝墓の南側に位置する。重複関係はないが、北辺の形状の歪みは、2号方形周溝墓南辺の張り出しを避けて周溝が掘削されたことに起因する可能性がある。6・7号溝調査地点で遺構の一部分が検出されていないことから、周溝を含めた東西方向の規模は約16m程と推定される。

**形状** 北東隅とその周辺を検出した。周溝を含む残存長は南北5.06m、東西5.55mを測る。周溝の幅は、北辺で上幅1.78m、下幅0.43m、南辺で上幅1.80m、下幅0.46mを測る。底面の掘り込みは、北東隅が最も浅く、ここから南辺、北辺の各中位に向かって徐々に深さを増している。断面形は、内外両縁とも緩やかな傾斜である。残存壁高は、北辺で0.82m、東辺で0.35mである。 **方位** N-13°-W

**埋没土** 上層に浅間C軽石、榛名ニツ岳伊香保テフラ軽石粒を多量に含む黒色土が堆積する。浅間C軽石の純層は堆積していない。黒色土、暗褐色土を主体とする。

**所見** 遺物の出土をみないが古墳時代前期の遺構と考えられる。





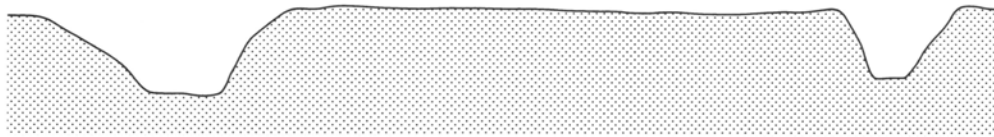
第133図 2・6号方形周溝墓(1)と出土遺物

第3章 荒砥諏訪遺跡の調査

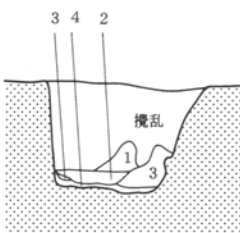
A. 2号周溝墓



B. 2号周溝墓



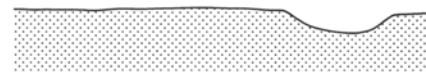
C. 2号周溝墓



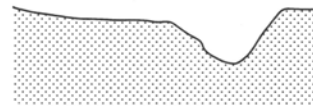
C-C'土層注記

1. 暗褐色土 軽石粒を含む。軟質。
2. 暗褐色土 5mm~1cm大の褐色土ブロックを含む。
3. 暗褐色土 軟質。軽石粒を含まない。
4. 褐色土 1~3cm大の褐色土ブロックを多量に含む。

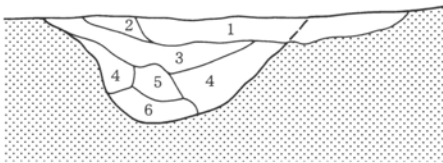
F. 6号周溝墓



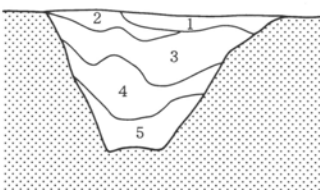
G. 6号周溝墓



D. 2号周溝墓

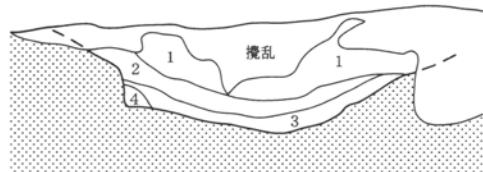


E. 2号周溝墓

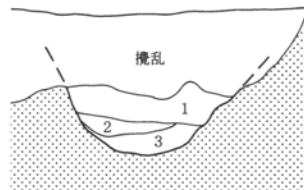


L=109.10m  
(A~E)

H. 6号周溝墓



I. 6号周溝墓



L=108.50m  
(F~I)

D-D'土層注記

1. 黒色土 炭化物・炭を多く含む。As-Cを混入。
2. 黄褐色土 白色軽石粒を混入。
3. 黒褐色土 締まりのない黄褐色土を斑状に含む。
4. 黄褐色土小ブロックと黒褐色土小ブロックの斑状堆積
5. 黄灰褐色土 白色軽石粒を含む。
6. 灰黄褐色土 ロームの小ブロックを含む。

E-E'土層注記

1. 黒色土 白色軽石粒、褐色土粒を多量に含む。
2. 黄褐色土 白色軽石粒を含む。
3. 灰褐色土 As-Cを含む。
4. 灰黄褐色土 締まりがない。
5. 灰黄褐色土 ロームの小ブロックを含む。

H-H'土層注記

1. 黒褐色土 As-Cを多量に含む。上部にHr-FPを含む。
2. 黒色土 As-Cを含むが混入量は多くない。
3. 黒褐色土 As-Cを少量含む。
4. 3層に類する。

I-I'土層注記

1. 黒褐色土 As-Cを多量に含む。
2. 暗褐色土 褐色土のブロックを多量に含む。
3. 褐色土 明褐色土のブロックを多量に含む。強く締まり、粘質。

0 (断面図C~E・H・I 1:60) 6m

第134図 2・6号方形周溝墓(2)

3号方形周溝墓 (第135図 P L 46)

位置 Wt-0 を中心に位置する。

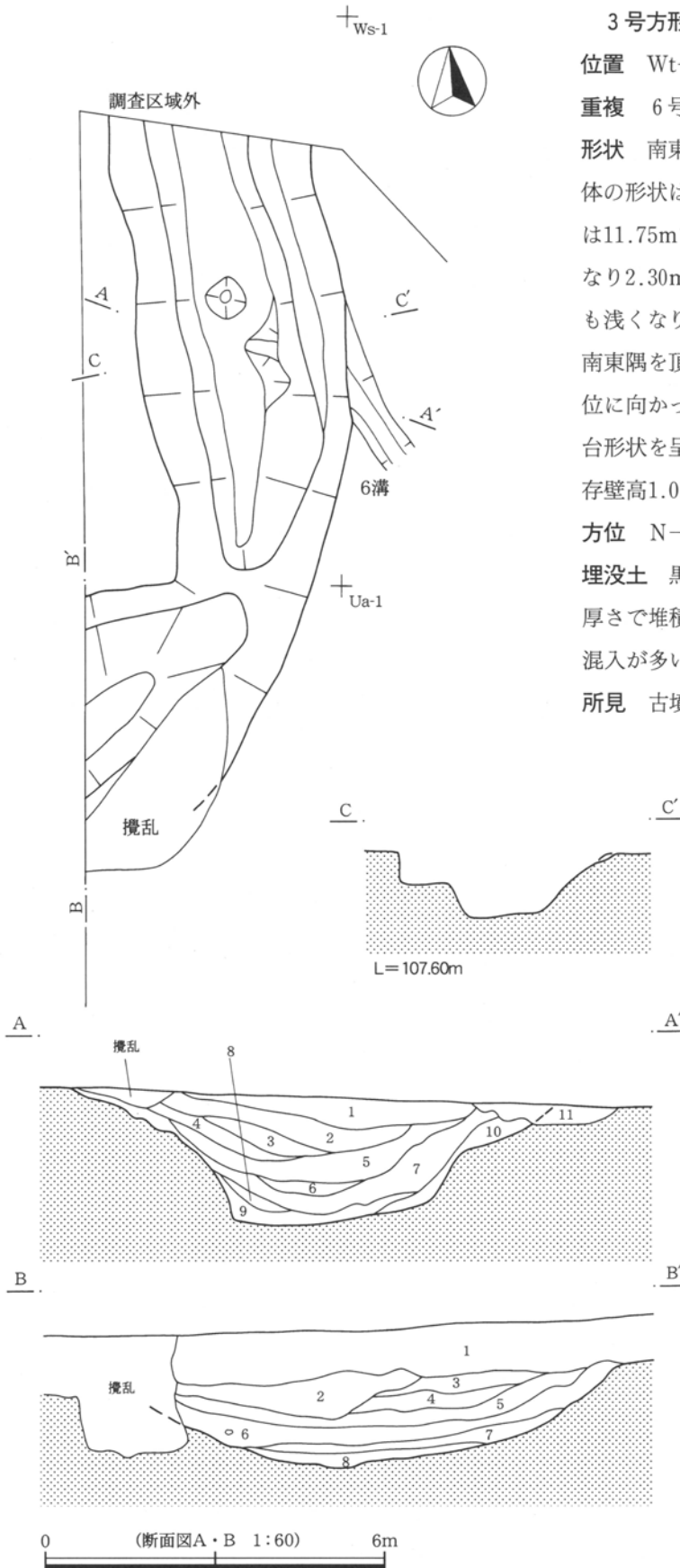
重複 6号溝によって切られる。

形状 南東隅とその周辺の検出にとどまったため全体の形状は不明である。外縁における南北の残存長は11.75mである。隅部は、平面的にはその幅が狭くなり2.30mを測る。それとともに、底面の掘り込みも浅くなり、残存壁高は0.58mであった。底面は、南東隅を頂部に北方向あるいは西方向と各辺の中間位に向かって深さと幅を増している。断面形は、逆台形状を呈し、東辺は上幅3.47m、下幅1.26m、残存壁高1.01mを測る。

方位 N-5°-W

埋没土 黒褐色土、暗褐色土が0.10~0.15mほどの厚さで堆積する。中位の黒褐色土中に浅間C軽石の混入が多い。

所見 古墳時代前期の遺構と考えられる。



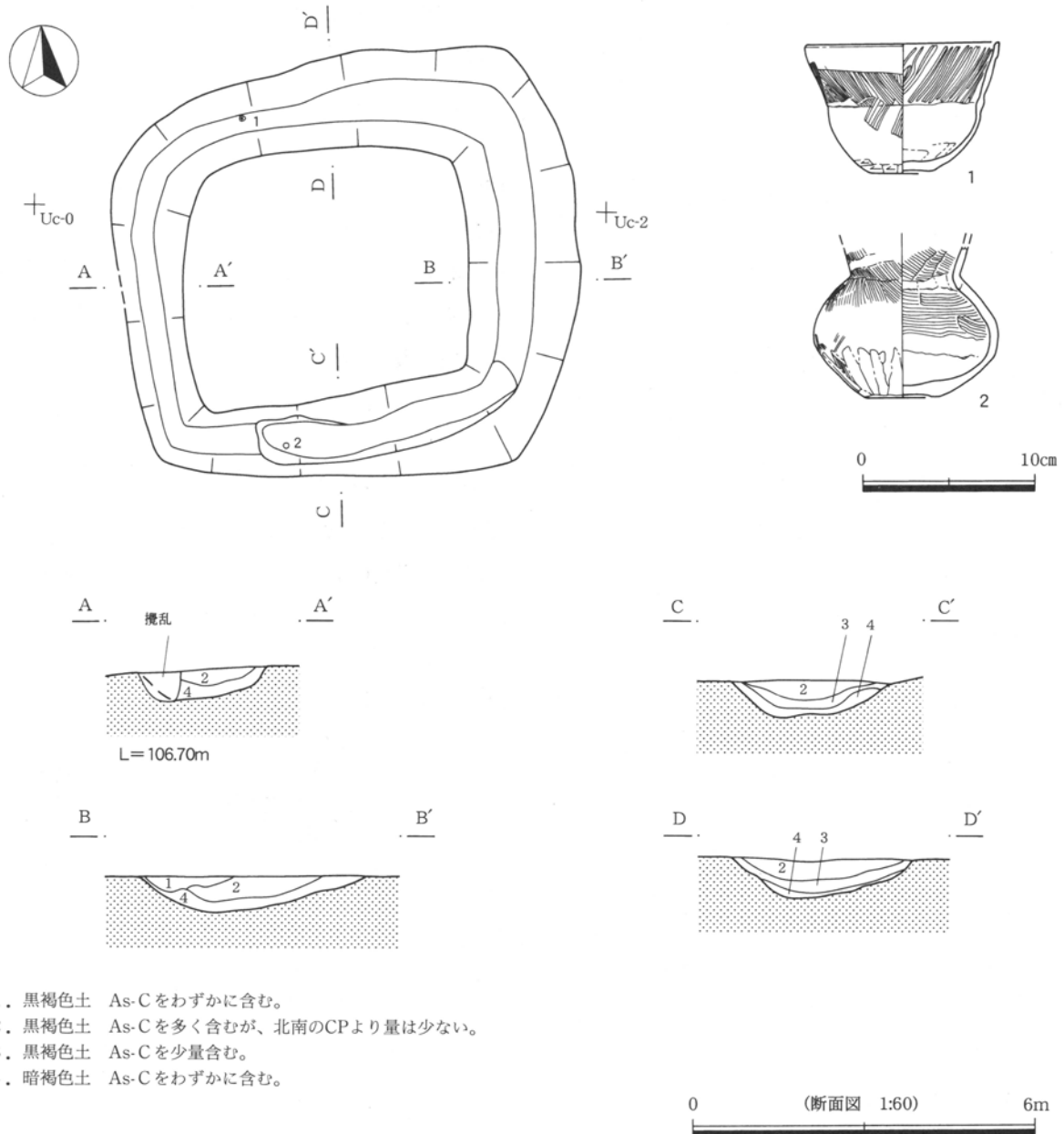
A-A'土層注記

1. 黒褐色土 As-C、Hr-FP(大は3cm)を含む。上位にはAs-Bと思われる軽石が入る。
2. 褐色土 軽石粒を含み、やや固い。
3. 暗褐色土 As-Cを少量含む。
4. 暗褐色土 As-Cの混入量が3層より多い。暗褐色土のブロックが入り、斑状。
5. 黒褐色土 As-Cを多く含む。暗褐色土のブロックが斑状。
6. 暗褐色土 4層に類するが、As-Cの混入量は少ない。
7. 暗褐色土 4層に類するが、As-Cの混入量は6層よりさらに少なく、褐色土のブロック(2~5mm大)が入る。
8. 暗褐色土 4層に類するが、黒褐色土の細かいブロックが入る。
9. 褐色土 褐色土のブロック(固い)(1~3mm大)を多く含む。
10. 明褐色土 やや粘質であるが軟らかい。
11. 6号溝埋没土

B-B'土層注記

1. 表土
2. 黒色土 Hr-FP、As-Cを少量含む。
3. 暗褐色土 As-Cを少量含む。
4. 暗褐色土 2層に類するが、やや黒色が強い。
5. 黒褐色土 As-Cを多く含む。
6. 暗褐色土 As-Cをわずかに含む。
7. 暗褐色土 As-Cをわずかに含む。褐色のブロック(1~3cm大)を多く含む。
8. 明褐色土 褐色土のブロック(1~3cm大)を多量に含む。固い。

第135図 3号方形周溝墓



1. 黒褐色土 As-Cをわずかに含む。
2. 黒褐色土 As-Cを多く含むが、北南のCPより量は少ない。
3. 黒褐色土 As-Cを少量含む。
4. 暗褐色土 As-Cをわずかに含む。

第136図 4号方形周溝墓と出土遺物

4号方形周溝墓（第136図 P L 45・48）

**位置** Uc-1 を中心に位置する。

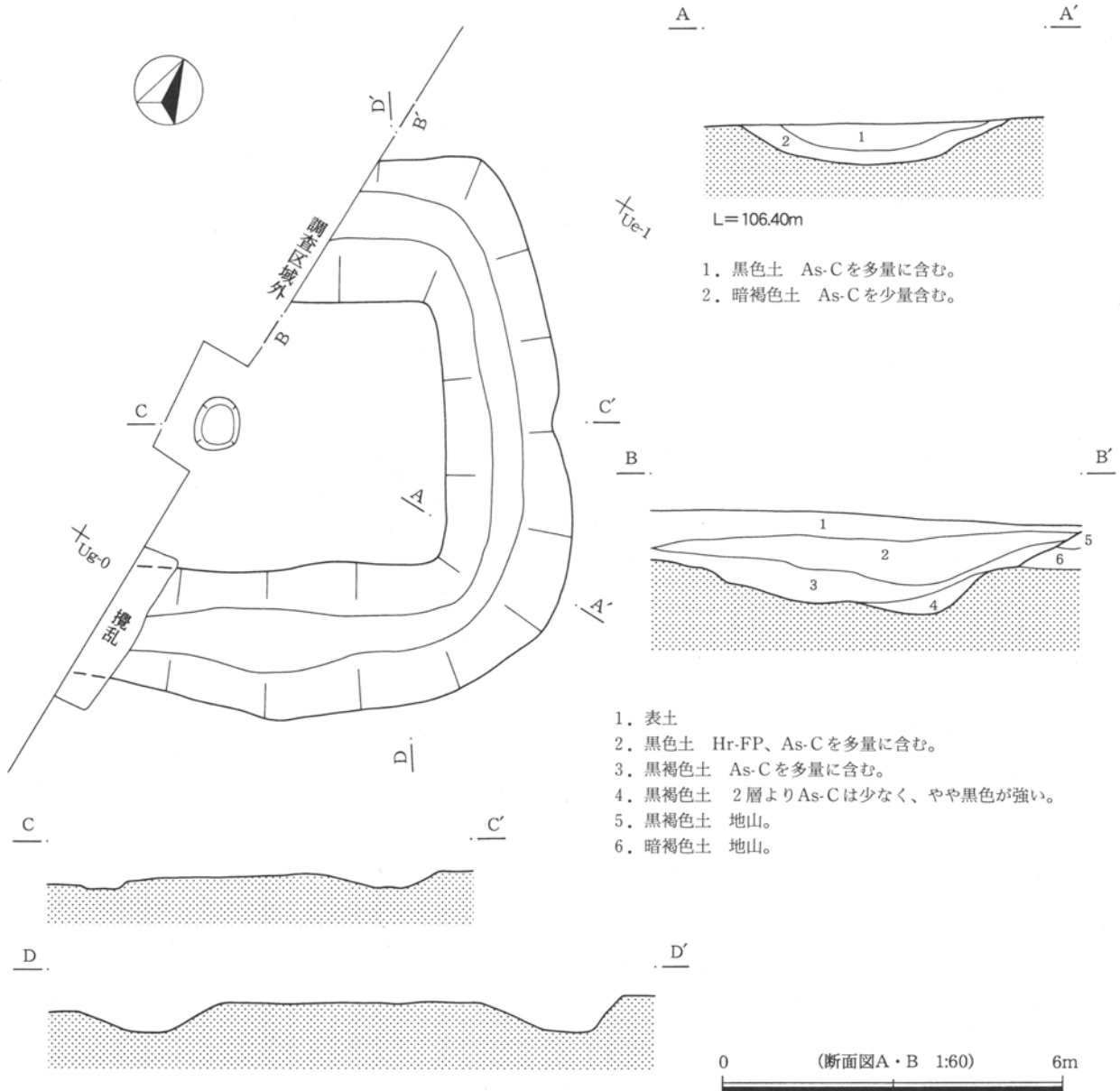
**形状** 周溝を含めた規模は、南北7.55m、東西8.22mを測る。台状部の確認規模は、南北5.80m、東西4.98mである。平面形は、台状部南西隅の残存が鋭角をなす他はやや丸みを有している。掘り込みの幅は、西辺で狭く、他はこれを上回っている。断面形は、削平が進行したためか、皿状を呈し、東辺の外縁が比較的緩やかな立ち上がりである。規模は、東辺中位で上幅1.96m、下幅0.65m、西辺中位で上幅

0.99m、下幅0.39mを測った。残存壁高は、東辺で0.32m、西辺で0.26mを測る。溝の掘り込みは、南辺の底面が他辺のそれより一段深く掘り込まれていた。 **方位** N-1°-W

**埋没土** 黒褐色土、暗褐色土が堆積する。上層に浅間C軽石を多量に混入する。

**遺物** 南辺溝中から埴（1）が、底面から0.06m離れて、北辺溝中底面から0.10m離れて埴（2）が出土している。（観P233）

**所見** 古墳時代前期の遺構と考えられる。



第137図 5号方形周溝墓

5号方形周溝墓 (第137図 P L 46)

**位置** Uf-1を中心に位置する。

**重複** 南西部分は攪乱を受けている。6基の中で最小規模である。

**形状** 東辺をはじめとした東側の2分の1ほどを検出した。規模は、南北9.47m、東西の残存長8.15mである。台状部の規模は、南北4.69m、東西4.71mを測る。平面形は、東辺、南辺とも外縁が弱く弧をなす程度で比較的整備な形状である。周溝の残存状態は、良好とは言い難い。全体の断面形は、皿状を呈し、内外縁とも緩やかな傾斜で立ち上がっている。

周溝の規模は、東辺中位の上幅は2.21m、下幅は0.55m、残存壁高0.33mを測る。台状部の中央からやや西側寄りに、平面長円形の土坑を検出した。黒褐色土が堆積していたが主体部と断定するには至らなかった。その規模は、長径0.93m、短径0.81m、残存壁高0.10mを測る。

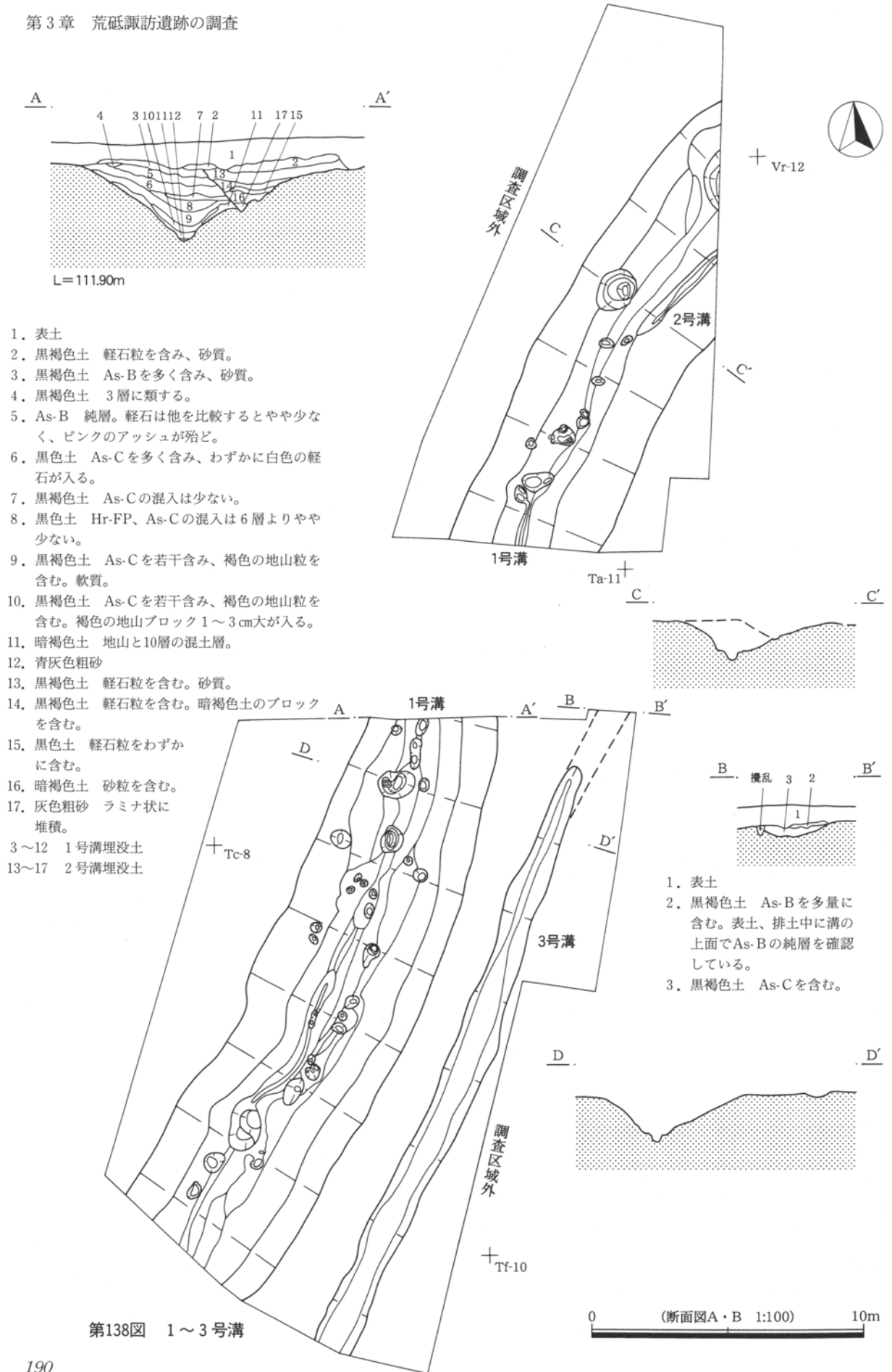
**方位** N-29°-W

**埋没土** 黒色土、黒褐色土、暗褐色土が堆積する。

**遺物** 縄文土器片を出土した。

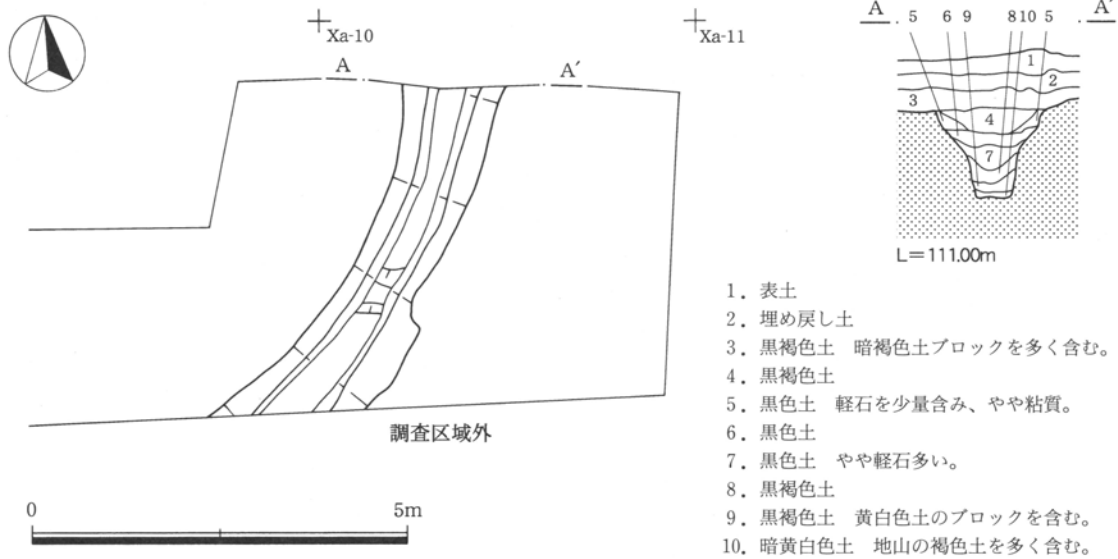
**所見** 古墳時代前期の遺構と考えられる。

第3章 荒砥諏訪遺跡の調査



1. 表土
  2. 黒褐色土 軽石粒を含み、砂質。
  3. 黒褐色土 As-Bを多く含み、砂質。
  4. 黒褐色土 3層に類する。
  5. As-B 純層。軽石は他を比較するとやや少なく、ピンクのアッシュが殆ど。
  6. 黒色土 As-Cを多く含み、わずかに白色の軽石が入る。
  7. 黒褐色土 As-Cの混入は少ない。
  8. 黒色土 Hr-FP、As-Cの混入は6層よりやや少ない。
  9. 黒褐色土 As-Cを若干含み、褐色の地山粒を含む。軟質。
  10. 黒褐色土 As-Cを若干含み、褐色の地山粒を含む。褐色の地山ブロック1~3cm大が入る。
  11. 暗褐色土 地山と10層の混土層。
  12. 青灰色粗砂
  13. 黒褐色土 軽石粒を含む。砂質。
  14. 黒褐色土 軽石粒を含む。暗褐色土のブロックを含む。
  15. 黒色土 軽石粒をわずかに含む。
  16. 暗褐色土 砂粒を含む。
  17. 灰色粗砂 ラミナ状に堆積。
- 3~12 1号溝埋没土  
13~17 2号溝埋没土

第138図 1~3号溝



第139図 4号溝

(3) 溝

1号溝 (第138図 P L 46)

位置 Vq-11~Tf-8

重複 2号溝に重複、これに先行する。東側に走向をほぼ同じくする3号溝が掘削されている。

形状 中位に約7.2mの未調査区を含め、南北約43.7mにわたり検出した。断面形は、角度を有する逆台形状を呈しており、西縁の立ち上がりは約36度の傾斜を有している。2号溝の掘削により破壊された東縁も同様の傾斜であったと仮定するとその上幅は4.24m以上であったと考えられる。残存壁高は、1.38mである。掘削面には流水のために生じたと考えられる小穴が多数検出され、その埋没土には砂粒が堆積していた。最下部には立ち上がりに稜を有し小溝状の流水痕が確認できる。南北両端の底面の比高差は1.58mである。

方位 N-29°-E

埋没土 上層に浅間B軽石の純層が堆積している。底面直上に砂粒が堆積しており、流水が確認できる。

遺物 打製石斧、剥片石器が出土しているが遺構に直接伴わないものと考えられる。

所見 埋没土の上層に浅間B軽石の堆積が認められることからこの軽石降下以前の遺構と考えられるものの詳細な掘削時期は確認できない。

2号溝 (第138図 P L 46)

位置 Vq-11~Tf-8

重複 重複する1号溝が完全に埋没した後に掘削されているが走向はほぼ同じくしている。

形状 中位に未調査7.2mを含む南北42.2mを検出した。1号溝と同時に調査進行させたため西縁の掘削面を検出できなかったが、土層確認面では断面逆台形を呈していたことが確認された。上幅は、約1.66m以上、残存壁高は、0.77mである。底面最下部には流水のため小溝状の落ち込みが西側寄りから検出された。

方位 N-29°-E

埋没土 黒褐色土、暗褐色土が0.05~0.10mの層をなしている。底面直上に砂粒が堆積しており流水の確認ができる。

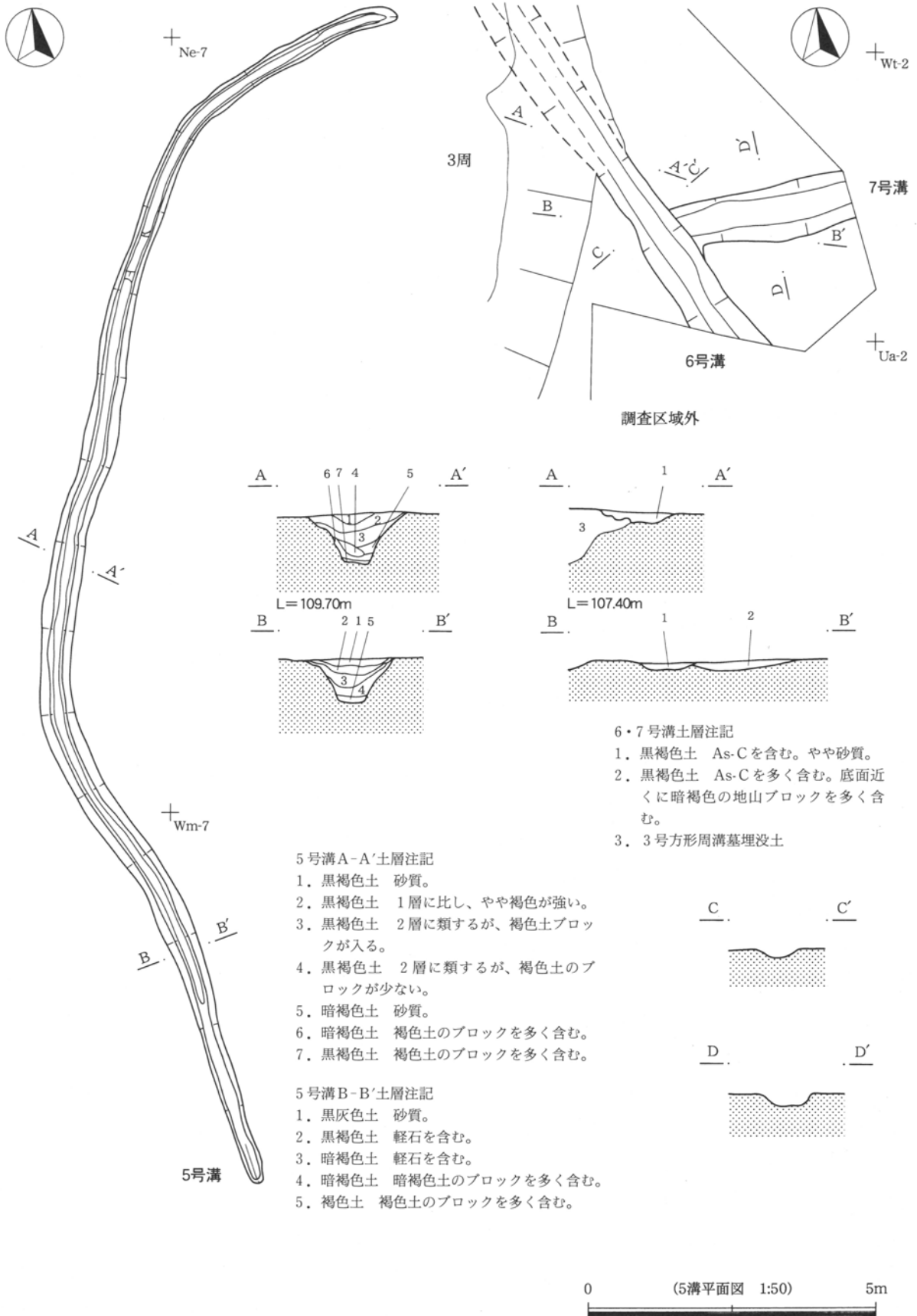
所見 埋没土に浅間B軽石の堆積がみられることからその降下以前の遺構であるが、詳細な掘削時期は不明である。

3号溝 (第138図 P L 46)

位置 Tb-8~Tf-8

重複 西側に1・2号溝が走っている。

形状 南北23.1mを検出した。上幅1.29m、下幅0.62mを測る。断面形は、浅いV字状を呈していた。掘削深度は、0.14mである。南北両端の底面におけ



第140図 5～7号溝



る比高差は0.54mである。

方位 N-30°-E

埋没土 表土掘削中に本遺構の上位において浅間B軽石の純層が堆積していることを確認したとの調査記録がある。

遺物 凹石、縄文土器が出土しているが本遺構に伴うものではない。

所見 掘削時期は、浅間B軽石降下以前であるがその詳細は不明である。

4号溝 (第139図 P L 47)

位置 Xa-10~Xb-9

形状 南北11.49mにわたって検出した。走向は東縁が張り出す弧状を呈している。上幅0.94~1.32m、下幅0.28~0.40mを測る。断面形は、底面から0.6mほどの中位に稜を有する逆台形状を呈するものである。中位に他より0.07mほど深く掘り込まれた部分がある。残存壁高は、1.20mを測る。

方位 N-32°-E

埋没土 黒色土、黒褐色土を主体とする。

所見 深堀から引水しており1952 (昭和27) 年まで使用していたとされるが近世には既に存在していた可能性も考えられる。

5号溝 (第140図 P L 47)

位置 Wd-9~Wp-8

形状 走向は、西側に大きく張り出す曲線を描く。南北両端ともさらに延長されると考えられる。延べの長さは70.40mを測る。検出時の上幅は1.79~1.92m、下幅は0.50~1.35mを測る。断面形は、中位に弱い傾斜変換点を有する逆台形を呈する。残存壁高は、0.80mである。南北両端における底面の標高差は、約0.3mであるが、その変化は一律ではない。

方位 N-14°-E (中位)

埋没土 黒褐色土、暗褐色土が堆積する。流水の痕跡は認められない。

所見 掘削時期は不明である。

6号溝 (第140図)

位置 Ws-0~Ua-1

重複 7号溝、3号方形周溝墓と重複、7号溝にも

後出する。

形状 長さ4.41mを検出した。断面の規模は、上幅0.84m、下幅0.30mを測る。壁面の残存は不良で、残存壁高は0.25mである。断面形は、皿状を呈する。

方位 N-31°-W

埋没土 黒褐色土が堆積する。

所見 掘削時期は不明である。

7号溝 (第140図)

位置 Wt-1

重複 6号溝に先行、3号方形周溝墓に後出する。

形状 長さ3.1mを検出した。断面の規模は、上幅0.96m、下幅0.45mを測る。断面形は、皿状を呈している。壁面の残存は不良で、残存壁高は、0.29mである。

方位 N-82°-E

埋没土 黒褐色土が堆積する。

所見 掘削時期は不明である。

(4)土 坑

1号土坑 (第141図 P L 47)

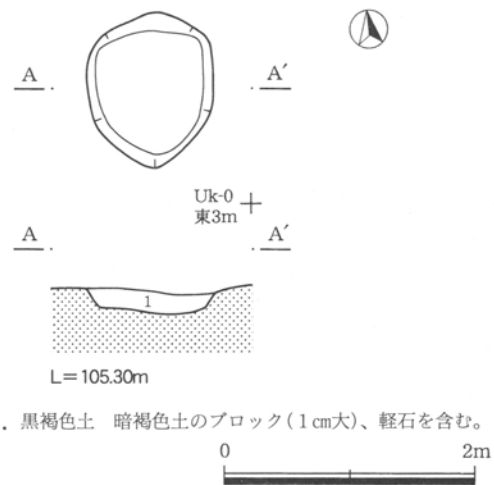
位置 Uj-0

形状 長円形に近似する。平面の規模は、長径1.23m、短径1.00mを測る。残存壁高は、0.20mを測る。

方位 N-5°-E

埋没土 ほぼ同一内容の黒褐色土が堆積する。

所見 掘削時期は不明である。



第141図 1号土坑

第3章 荒砥諏訪遺跡の調査

(5) 遺構外出土の遺物 (第142・143図 P L 48)

本節では荒砥諏訪遺跡の調査において、遺構に伴わない遺物を掲載した。

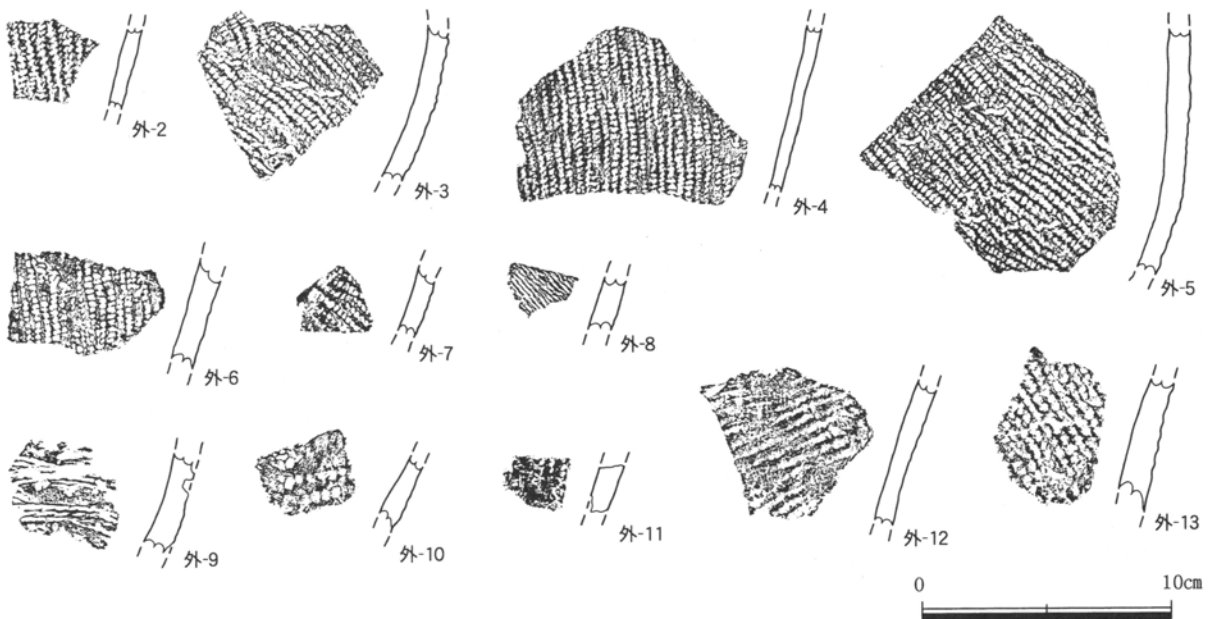
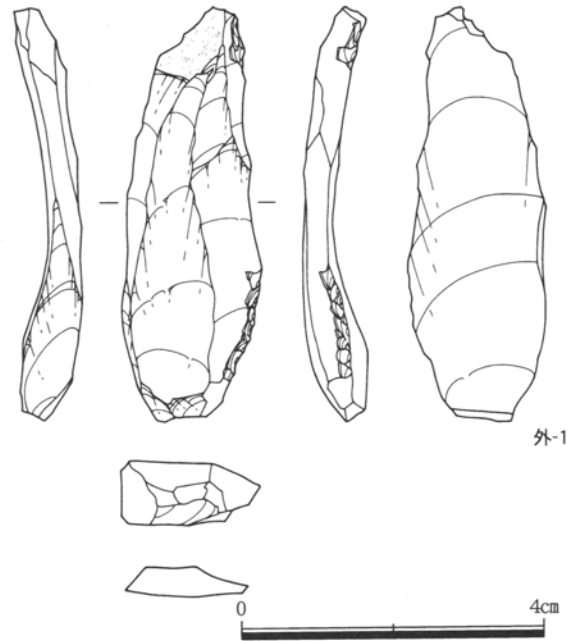
1は、旧石器時代のナイフ形石器である。2号方形周溝墓の東側周溝調査中に埋没土中から出土したものである。本遺跡は安定した洪積台地上に立地することから旧石器時代の遺物の出土が他にも想定されたが圃場整備事業の進行との時間的制約から実際的な調査を実施できなかった。

先端の一部は欠損する。全長5.4cm、最大幅1.8cm、厚さ0.8cm、重量7gである。石材の種類は黒色頁岩である。縦長剥片を素材に右側縁下半に調整加工を施している。

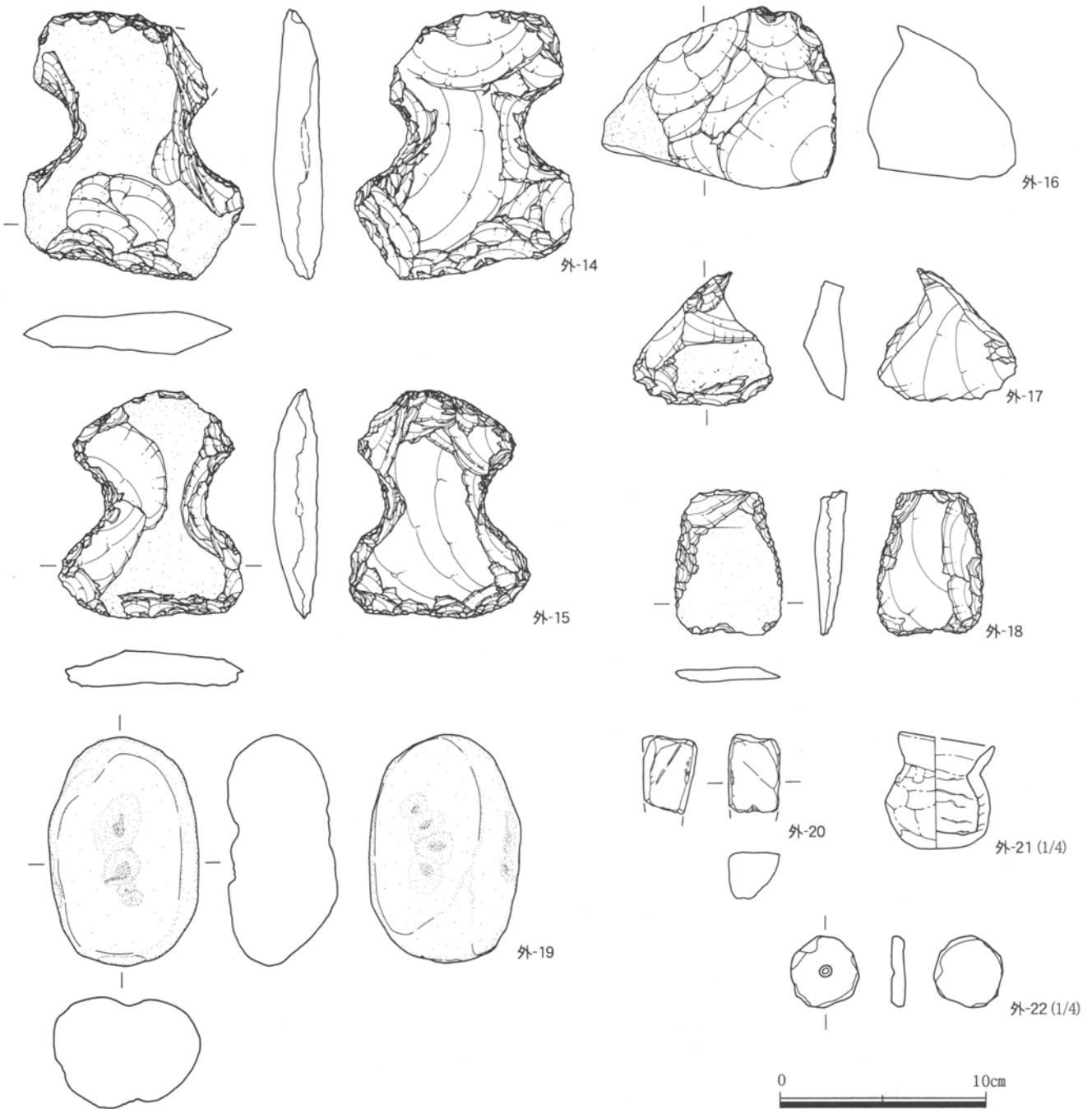
2～13は、縄文土器である。3・5・6・8号方形周溝墓からの出土、他は表採である。9・10・13は、前期黒浜式に比定されよう。胎土中に繊維を含んでいる。2～6・13はRL縄文を横位に施文している。8はLRの縄文を、9はRの撚糸を施文している。

14～19は、縄文時代の石器である。14・15・17は、打製石器で分銅形を呈している。14は、諏訪沼南側からの表採資料で、全長12.9cm、最大幅10.6cm、厚さ2.3cm、重量336gである。15も、表採資料で、全

長10.9cm、最大幅8.8cm、厚さ2.0cm、重量209gを測る。17は、1号溝の埋没土中からの出土である。2分の1ほどの残存で、残長6.3cm、最大幅11.3cm、厚さ1.9cm、重量72gを測る。18も1号溝の埋没土中からの出土である。短冊あるいは撥形を呈する打製石斧で、上端は欠損している。全長6.9cm、最大幅5.0cm、厚さ1.3cm、重量51gを測る。16は、石核である。



第142図 遺構外出土の遺物(1)



第143図 遺構外出土の遺物(2)

全長8.7cm、最大幅11.3cm、厚さ6.8cm、重量657gを測る。表採資料である。19は、凹石で、全長11.0cm、最大幅7.2cm、厚さ5.2cm、重量503gを測る。両面に敲打痕が見られる。3号溝埋没土中からの出土である。石材は、19が粗粒安山岩である他は黒色頁岩である。

20は、砥石である。小型品で中位で欠損している。残長3.8cm、最大幅2.5cm、厚さ2.3cm、重量30gを測

り、砥沢石製である。4号方形周溝墓出土である。

21は、古墳時代前期の土師器埴で、4工区E工事区からの出土遺物である。22は、表採資料で、土師器片を二次加工した円板状の土製品である。直径4.5cmを測り、片面の中央には途中で穿孔を中止したような浅い凹部がみられる。

(観P233)

## 第4章 分 析

### 荒砥諏訪西遺跡出土人骨

檜崎 修一郎

#### はじめに

荒砥諏訪西遺跡は、群馬県前橋市荒口町に所在し、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団による発掘調査が昭和58(1983)年4月～昭和59(1984)年3月まで行われた。本遺跡の3区1号墓坑及び2号墓坑より火葬人骨が、また3区189号土坑より土葬人骨が出土したので、以下に報告する。

#### 1. 3区1号墓坑出土火葬人骨

##### (1) 出土人骨出土部位

5mm～15mmの破片が、約80片出土している。その中でも、右上顎骨(第2切歯部～第2大臼歯部)・右側頭骨頭頂縁・右側頭骨(乳突切痕部～茎状突起部)・右側頭骨岩様部の4点が同定できた。人骨の残存状況は非常に悪く、恐らく、丁寧に取骨された後であろう。このような取骨状況は、現代に続く、ほとんどの人骨を取骨する東日本タイプの取骨方法であろう(檜崎、2002)。

##### (2) 火葬方法

火葬人骨の色は、明灰色から白色を呈しているの、火葬の際の温度は約900°C以上であろう。また、火葬人骨には亀裂・ゆがみ・ねじれが認められるので、白骨化させたものを火葬したのではなく、死体をそのまま火葬したと推定される。

##### (3) 被火葬者の個体数

火葬人骨の出土部位は少ないが、明らかな重複部位は認められないため、被火葬者の個体数は1個体と推定される。

##### (4) 被火葬者の性別

右上顎骨片を見ると、犬歯部の歯槽骨が小さく短い。この犬歯部で歯根長を計測すると、約12mmであつ

た。現代日本人の平均歯根長は、男性15.19mm・女性14.27mmである(権田、1959)ので、女性である可能性が高い。また、右側頭骨の岩様部の大きさも小さい。このどちらも、火葬による収縮を考慮してもなお小さいため、被火葬者の性別は恐らく女性と推定される。

##### (5) 被火葬者の死亡年齢

右上顎骨片を見ると、切歯縫合は癒合しているが、正中口蓋縫合は癒合していない。切歯縫合は、約30歳代～40歳代で消失し、正中口蓋縫合は、約50歳代になると消失する傾向にある。従って、被火葬者の死亡年齢は約30歳代～40歳代と推定される。

#### 2. 3区2号墓坑出土火葬人骨

5mm～10mmの破片が、7片出土している。破片が小さいため、同定できた部位はなかった。人骨の色は、明灰色から白色を呈しているの、火葬の際の温度は約900°C以上であろう。出土部位が少ないために、白骨化させたものを火葬したのか死体を火葬したのかは不明である。同様に、被火葬者の性別及び死亡年齢も不明である。但し、このように丁寧に取骨する状況は、東日本タイプの取骨方法であろう(檜崎、2002)。

#### 3. 3区189号土坑出土人骨

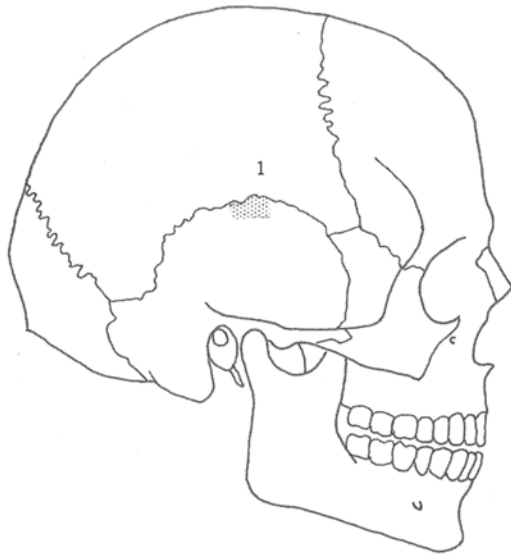
約5mm～15mmの人骨片が、多数出土している。人骨には、火を受けた痕跡が認められないので土葬であろう。約14cmの長さの人骨は、長骨恐らく上腕骨と推定されるが、緻密質が剥がれ落ちており、計測及び観察が不可能である。この上腕骨の大きさが比較的大きいので、被葬者の性別は恐らく男性であろう。被葬者の死亡年齢は不明であるが、恐らく成人であろう。

まとめ

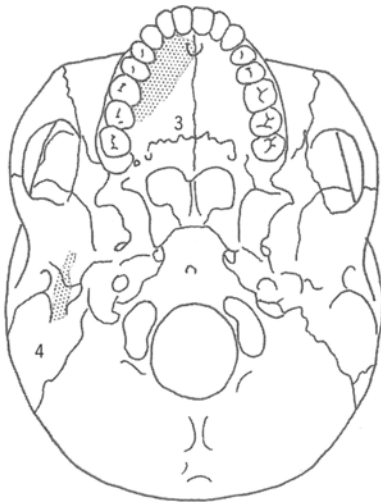
荒砥諏訪西遺跡の3区1号墓坑・2号墓坑・189号土坑より人骨が出土した。1号墓坑と2号墓坑は、火葬人骨である。1号墓坑の被葬者は、死亡年齢約30歳～40歳の女性が1個体と推定された。2号墓坑の被葬者の性別及び死亡年齢は不明である。189号土坑の被葬者は、成人男性と推定された。

引用文献

権田和良 1959 歯の大きさの性差について、「人類学雑誌」、67(3):47-59。  
檜崎修一郎 2002 下小島神戸遺跡出土火葬人骨、「群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要」、20:43-50。



[頭蓋骨右側面観]

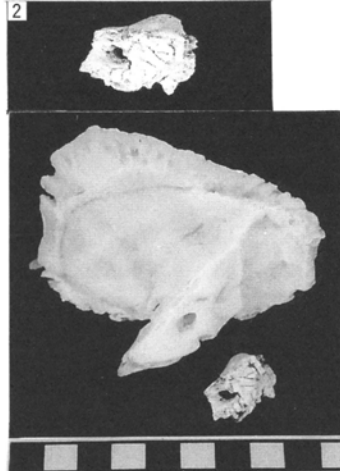


[頭蓋骨下面観]

CM



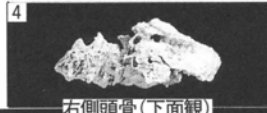
右側頭骨頭頂縁(左:外面観、右:内面観)



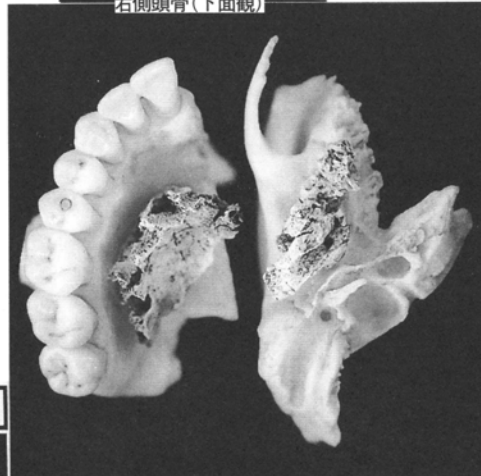
右側頭骨岩様部(上:内面観、下:右側頭骨標本との比較)



右上顎骨(側面観)



右側頭骨(下面観)



左:右上顎骨標本との比較、右:右側頭骨標本との比較

図版2 3区1号墓坑出土火葬人骨

## 第5章 調査成果と整理のまとめ

### 第1節 調査の成果

#### (1) 荒砥諏訪西遺跡の調査成果

##### 畠について

今回の調査においては2区、3区から畠のサク間と考えられるサク溝の集合を11地点で検出した。耕作物は、土壌の花粉分析やプラントオパールといった科学的分析を行っておらず、不明である。本遺跡においては古墳時代前期の竪穴住居42軒、後期の住居18軒の合計60軒を検出した。住居の立地は微高地西側寄りに南北方向に占地する傾向が見られる。これに対し、畠は住居群の東側に広がり、3区3号畠が古墳時代前期の3区29号住居と重複する他は住居との重複関係はない。

畠のサク溝は、2区3号畠と4号畠に代表されるようその方向を全く違えながらもサク溝同士で重複する地点は無い。このことは、これらの遺構がほぼ同一時に存在した可能性を示していると考えられる。

サク溝の埋没土は、浅間C軽石を多量に含む黒褐色土である。耕作の時期を具体的に証明する資料は得られていないが、これらの畠は、古墳時代前期の遺構である可能性が高いものと考えられる。もしそうであれば、古墳時代前期の荒砥諏訪西遺跡においては、微高地西側を居住域にして、竪穴住居群が形成され、その東側、微高地中央寄りを畠として生産域が占める農耕集落が存在していたものと理解することができる。調査では居住域に対応する水田の検出はなかったが、5区、微高地東側の沖積地の調査においては浅間C軽石の堆積が確認されている。また、微高地東側の洪積台地上、荒砥諏訪遺跡の調査で検出した6基の方形周溝墓群は、荒砥諏訪西遺跡の集落の墓域として対応する可能性が高い。

##### 古墳について

第2章で記したよう、荒砥諏訪西遺跡においては3基の古墳を検出、調査した。1・2号墳は、小型

の無袖式横穴式石室を主体部としていた。3号墳は、江戸時代には主体部の削平が進行していたと考えられ、周堀のみの検出であった。いずれも副葬品などの出土は少量で、古墳の構築時期を断定することは困難であったが、埴輪の出土が見られないことからいずれも7世紀代の築造と考えたい。その中、3区3号墳は南北の直径29mを測る円墳で、7世紀代の古墳であるとすれば当該地域においては比較的大型の古墳の範疇に含まれる。また、地山を掘り込んだ掘り方が見られない点も他と異なる。

本遺跡周辺における古墳の分布は、近接する荒砥宮田遺跡、北原遺跡をはじめきわめて散在的であり、群集状況を呈するのは泉沢谷津遺跡周辺や今井神社古墳周辺に知られるだけである。この状況は、荒砥地域東側寄りの江竜川流域や神沢川流域の古墳分布とは対照的であることは既に指摘されている。何に起因するかについては、居住域、生産域のあり方を含めた包括的な分析が必要であり、今後の課題としたい。

本遺跡においては、6世紀前半から中頃にかけて、微高地西側寄りに集落が形成されていたが、その後、一定時間の空白期間の後、7世紀に至り、居住域であった部分の一部が墓域に変化している。古墳に対応する住居群は、検出されていない。本遺跡と同様に、遺跡地が居住域から墓域に移行している事例は、泉沢町泉沢谷津遺跡で5世紀後半から6世紀前半の集落が7世紀に古墳群に、飯土井町荒砥二之堰遺跡で6世紀後半の集落が7世紀に古墳群に、赤堀町下触牛伏遺跡でも6世紀後半の集落が7世紀以降古墳群に変化している。集落の形成・継続期間がいずれも古墳の築造開始直前ではないことから強制的な移住とはすぐには断定できないものの、生産域との係わりから耕地拡大に伴う居住域の移動があったものと考えられる。7世紀中頃以降、古墳築造に対する占地に一定の規制が働いたか否かは、荒砥地域以外

の遺跡動向も含め今後検討する必要がある。

#### 浅間B軽石下水田について

今回の調査においては、微高地東側の6区で浅間B軽石下に埋没した水田を検出した。検出した水田の面積は、5,060㎡に及んだ。アゼは、小アゼのみの検出に止まっており、水田は、微高地東側を中心に、調査区の周囲にもその範囲が広がっていた可能性は大きい。調査区内では取水あるいは配水方法についての手がかりは得られなかった。調査地点は、圃場整備事業との調整の中で、水田面以下については遺構を保存することが確認されたため下層の調査を実施していないが、西側3区の調査内容からは、古墳時代前期、あるいは後期に居住域であった地点に灌漑施設が整備され、微高地上を開田したものと考えられる。開田の時期については不明であるが、この調査区に接する4区の調査で水田面より下層から水路が検出されていることからこれらの溝群の掘削、埋没以降となろう。

荒砥地域では多数の遺跡で沖積地内に堆積した浅間B軽石の下層から水田を検出している。微高地上での水田検出は、その後の耕作の継続性と関係するためか本遺跡のみにとどまっているが、本遺跡の水田の検出は、平安時代後半から末期においては、水田耕作地の拡大が、沖積地内をほぼ水田化し、沖積地周辺の可耕地にまで開田の志向が及んだことの証左となる資料と考えられる。

#### 土坑について

土坑は、1区から3区までで合計511基を検出した。平面形状等は各区の報告部分にその概要を記したところである。

出土遺物を伴う土坑の中で人骨を出土した3区189号土坑は遺体を直葬した墓坑と考えられる。2区50号土坑にも人骨出土の記録がある。1区23号土坑からは寛永通寶を含む古銭が出土しており、江戸時代の墓坑であろう。3区1・2号墓坑は、2基とも小型で、平面長方形を呈しており、埋没土中から焼骨とともに炭化物が出土しており、火葬墓あるいは火葬跡と考えられる。これ以外にも遺物を出土した

土坑が45基ある。2区では古墳時代前期の埋設土器(2区185号土坑)があり、その他にも古墳時代の土坑が存在する可能性も考えられるが、埋没土の観察からの区別は困難であり、出土遺物の共伴性も確定することが困難であった。3区142号土坑は、平面円形で土師器の甑・甕・不明石製品を出土しているが、これが古墳時代前期の遺構である可能性がある。

各形状の土坑が検出された中、入口施設を有する土坑が1区で4基、2区で13基、3区で7基の合計24基存在する。2区の土坑は、調査区南半で、3号溝の走向に合致するように南北方向に列状に分布している。いずれも入口部分を東側に置き、主軸を東西方向に向けた配置で検出されている。これらの土坑群のあり方は、同時存在あるいは近接する遺構の存在を意識した時間幅の中で土地利用があったためと考えられる。埋没土の観察からは3号溝よりも前出である。2区3号土坑からは中世の土師質土器皿や軟質陶器片口鉢が、4号土坑からは14世紀代の陶器片口鉢が出土している。他に2区12号土坑、2区51号土坑からも陶器片口鉢が出土しており、これら一連の土坑が中世に掘削された可能性を有している。

機能としては、従来から墓坑あるいは貯蔵施設等が考えられているようであるが本遺跡の調査からはそれを特定できるような事実は確認できていない。

構造についてみると、入口部はこれに続く接続部分の天井がトンネル状に地山を掘り残した通路を通過して主室部分と接続するものである。3区101号土坑は、主室部の天井部分も全て地山を掘り残している事例であるが、全ての遺構の天井部分が地山を掘り残した構造であったと考える必要は無く、板材等を天井に高架させた上を土砂で覆ったことも考えられている。

その他、各部位について観察すると細かな相違点が存在することが確認できる。まず、入口部と主室部の接続であるが、3区50・51号土坑のように入口部が長くトンネル状の通路を介して主室部に接続するものと入口部の突出が短く、通路を介さず入口部

## 第5章 調査成果と整理のまとめ

から直接主室部に入入りする構造のものに大別される。次に、入口部から主室部への移行は、底面が平坦であるもの、やや傾斜を有するもの、段を有するものがある。段を有するものには1区17号土坑のように階段状のものもある。1区18号土坑や2区225号土坑では入口部と主室部の間に仕切状の細い溝が見られた。主室部の形状は、2区171号土坑のように隅丸方形を呈するものもあるがその大半は四角形で、正方形、入口に対し縦長長方形、横長長方形を呈するものが見られる。形状と規模の大小には直接の関係は見だし得ない。掘削深度は、天井部の存在していた3区101号土坑で0.95mを測った。その他では残存深度が1m前後の事例が多数であるが、1区22号土坑、3区50号土坑、3区51号土坑のように1.4mを越える事例もあった。

ただし、これらの形状に表出した差異が、遺構の形式的な推移等に起因するものとは考えられない。

### 溝について

2区1～7号溝は、方形区画を成す溝である。出土遺物の状況から中世、14・15世紀の館あるいは屋敷地の一部を構成していたものと考えられる。

2区と3区を東西に横切る2区大溝は、圃場整備前の地割りにその痕跡を残す遺構である。微高地を南北に分断し、流水が確認されることから、区画の溝で有ったのと同時に本遺跡の西側沖積地への引水が掘削の目的の一つであったのであろうか。

4区で検出した1から3号の3条の溝は、浅間B軽石降下以前の水路であり、浅間B軽石下の水田開田以前に微高地上を掘削、上流域からの引水を本遺跡東側沖積地の下流域に送水することを目的としていると考えられる。

### (2) 荒砥諏訪遺跡の調査成果

荒砥諏訪遺跡の調査においては、方形周溝墓6基、溝7条、土坑1基を検出した。

本遺跡の立地する洪積台地は標高105～112mで、西側、荒砥諏訪西遺跡の占地する微高地との比高は5m前後である。検出した7条の溝の内1・2号溝は、底面に流水の痕跡が確認される水路である。掘

削の時期は、埋没土中からの遺物の出土が無いことから詳細は不明であるが、浅間B軽石の純層が覆土として堆積していたことから1108年にはほぼ埋没していたことになる。

本遺跡に近接して前橋市埋蔵文化財発掘調査団が調査を実施した諏訪遺跡第1地点でも上層に浅間B軽石が堆積した3条の溝が検出されているが、その内の1号溝が2条のabの溝が重複する状況、流水の痕跡の存在などから本遺跡の1・2号溝と同一遺構である可能性が考えられ、二つの調査地点の間の距離は、約120mとなる。

さらに本遺跡より北側、群馬県教育委員会が調査した諏訪遺跡では長さ220mにわたり最大上幅2.2mの溝が検出され、これにも浅間B軽石が埋没土最上層に堆積していた。ただし、これには流水の痕跡がないことから大規模な区画溝であったものと考えられる。

調査が部分的であり、洪積台地上の居住域の動向は全く把握できないが、以上の3地点の調査の内容から台地上に多くの開発の手が入っていることが確認できた。

本遺跡検出の1・2号溝は、洪積台地上を掘削した水路である。調査が一部分であるためその取水点、送水先については断定できない。送水先の一つとしては、本遺跡から南南東約1kmに位置する鶴ヶ谷遺跡西側の沖積地が考えられる。谷頭までの距離は約200mである。この沖積地は、谷頭に湧水が存在するものの、本来、小河川を伴わないものである。圃場整備前は、本遺跡北側に存在した諏訪沼からの引水が行われていた。この沖積地は、鶴ヶ谷遺跡の南端で東側を南流する宮川に伴って広がる沖積地と合流している。本遺跡検出の1・2号溝は、この鶴ヶ谷遺跡西側の沖積地への用水供給、および鶴ヶ谷遺跡下流への送水を目的に掘削が行われたものと考えられるが、周辺における調査遺跡の動向からはこれを証明できるだけの遺跡動向の資料は得られていない状況にある。



## 第2節 荒砥諏訪西遺跡2区

### 中世屋敷に関する予察

飯森 康広

#### (1)はじめに

本遺跡が旧時に発掘調査された都合で、筆者は実見していない。掘立柱建物跡も図上復元に過ぎないため、その限界を考慮しなければならない。また、本遺跡南方約300mに所在する荒砥宮田遺跡も近時調査報告されることから、詳しい検討も次期を期すこととし、本稿は予察としておきたい。

#### (2)屋敷建物の変遷

柱穴群の分布範囲と溝群の走向を考慮して、1・2・3号溝に四方を囲まれた範囲を屋敷として扱う。建物は全て掘立柱構造で、屋敷内に14棟、屋敷外北側に1棟が認識できた。このうち、13・14・15号建物は溝を意識した分布でなく、他の建物群と区別しなければならない。残る12棟は主軸方位の違いから、以下のとおり4～5つに分類できた。

①1・2・3・4(屋敷外)号建物

②5・6号建物

③7・8号建物

④9・10・11号建物

⑤12号建物

これらは主軸方位が異なるとともに、重複関係にあることから、時期差を示すと考えられる。各時期の傾向として、屋敷内部では⑤を除いて建物は2・3棟で構成される。建物の分布をみると、①・②・③・⑤は4号溝以北に所在する。また、前三者の主要建物は屋敷中央西側に集中し、4号溝と重複することから、この溝と共存しないことが判明する。⑤は屋敷の北東に偏在しており、単独存在よりはむしろ、①・②・③いずれかの時期に併存していた方が理解しやすい。一方、④は主要部分が4号溝以南にあり、建物の主軸方位と溝の走向方向がほぼ一致することから、4・6号溝と同時期の遺構として認定したい。したがって、屋敷内部の利用状況は、主要建物を屋敷中央西側において、北半分を建物敷地、

## 第2節 荒砥諏訪西遺跡2区中世屋敷に関する予察

南半分を空き空間としていた時期と、4号溝によって屋敷地を南北に分割し、南半分を主要な建物敷地、北半分を空き空間としていた時期に分けることができる。ただし、この屋敷変遷の新旧は判断しにくい。④の建物群を規制する4・6号溝と屋敷全体を囲繞する1・2・3号溝との新旧関係を決めることも難しい。状況として、1・3号溝が2区全体あるいは立地する微高地全体の土地利用を規制する広域的な区画溝であるのに対して、4・6号溝が微高地の南端の屋敷のみを細分する溝である点を考慮すれば、自ずから屋敷を分割する段階を後出とするのが妥当と推測する。

#### (3)建物の特徴

前項建物分類の各時期には、1棟以上大型の建物が存在する。建物の平面形は複雑だが、構造として近世の民家建築ほどには発展していないと言える。2号建物は、南北5間で北に庇、東西に3間をとる規模を持っており、妻側を3間に拡大して屋根を大きく懸けた印象を持つが、南から2間めと4間めの柱が存在していない。これらの柱上に桁材を架設するのは不自然だろう。桁側ではなく、妻側が2つ並んでいる方が理解しやすい。つまり、1間×3間の東西棟を、1間幅の間隔を開けて南北2棟並べて、両者を連結したものと考えられる。この場合、東から見ると屋根の棟が2つ並んでいる分棟型を呈することとなる。更に、南に近接する1号建物も同じく東西棟で、2間×3間の東西両側に庇を設け、桁側柱間が2号建物より長いことから、かなり東に長く突き出す形になっている。しかし、屋根の間を埋めれば、これも一体の建物として使えることとなる。結果としてこの2つの建物は、東から見ると棟が3つ並行して並ぶ一体の建物として見えることになる。この他、12号建物も同様な構造と言える。

建物を大型化するため、桁側を単純に長くする構造も採られている。11号建物は桁側7間の東西棟で、妻側は1間となっている。西から2間には仕切があり、そこを境に南北別々に庇を設けて、別の部屋として使っている。こうした構造は、規模の違いはあ

## 第5章 調査成果と整理のまとめ

るが、5号建物も採用しており、東西両側に庇を出すことによって広さを生み出している。更に7号建物では、南側に広庇、孫庇を出しており、結果として妻側を3間半まで広げることに成功している。

以上、2つの大型建物の形態をみると、妻側2間の軸組が基本であり、上屋柱の間隔を3間まで広げたものはない。屋根も小さく、小屋組構造も簡易なもので良かった。一方で、主屋を大きく広くして、居室空間を充実し、機能の多様化を図っていかうとする欲求も読みとることができる。

### (4) その他の関連遺構

1・2・3号溝で囲繞された範囲は溝内側の上端距離で南北約48m、東西約47mを測る。4・7号溝はこの区画北側を南北約27m、南側を南北約20m幅に分割している。4号溝西端部は北側にクランクする。こうした構造は入り口を伴うことが想像される。クランク部分の東西両側、7号溝南上端に沿って、

塀を思わせる柱穴列が並んでいる。4・7号溝と併存する建物は、④に分類される建物群であり、9号建物がこのクランクに面している。入り口は9号建物西面を通過して4号溝を西に渡る経路だったかもしれない。

本屋敷では建物周辺に土坑も多く分布する。細かな分析は後日を期すとして、注目されるものに屋敷西端の地下式土坑がある。1～4号土坑は全て3号溝に重複しており、併存する可能性は低いが、入り口状の張り出しが建物側を向いている。関連性も全く否定できるわけではない。

### (5) 荒砥宮田遺跡考察への課題

荒砥宮田遺跡でも大型の掘立柱建物跡と地下式土坑が多く出ている。同一地域に所在することから、両者を比較しながら柱間構造など細部の検討を予定しておきたい。

## 参考文献

- 群馬県『上毛古墳綜覧』1938
- 山崎 一『群馬県古城址の研究』上巻 1971
- 前橋市教育委員会『富田遺跡群・西大室遺跡群・清里南部遺跡群』1979
- 前橋市教育委員会『富田遺跡群・西大室遺跡群』1982
- 前橋市教育委員会『鶴谷遺跡群発掘調査概報』1980
- 前橋市教育委員会『鶴谷遺跡群発掘調査概報II』1981
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団『横俵遺跡群I』1990
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団『横俵遺跡群II』1991
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団『横俵遺跡群III』1991
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団『横俵遺跡群IV』1992
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団『柳久保遺跡群I』1985
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団『柳久保遺跡群VI』1988
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団『柳久保遺跡群VII』1988
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団『横俵遺跡群VI』1993
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団『小稲荷遺跡』1987
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団『地田栗III遺跡』1994
- 大胡町教育委員会『天神風呂遺跡』1981
- 大胡町教育委員会『中川原遺跡群小林・山神・大畑遺跡』1992
- 大胡町教育委員会『中川原遺跡群上ノ山遺跡』1992
- 大胡町教育委員会『西小路遺跡』1994
- 大胡町教育委員会『上大屋南部遺跡群上大屋下組遺跡・上大屋中組遺跡・上大屋天王山遺跡』1999
- 大胡町教育委員会『茂木山神II遺跡』2001
- 群馬県教育委員会『群馬県の中世城館跡』1988
- 群馬県教育委員会『山崎遺跡・寺東遺跡・寺前遺跡・東前田北遺跡・東原西遺跡・新山遺跡』1984
- 群馬県教育委員会『堤東遺跡』1985
- 群馬県教育委員会『舞台・西大室丸山』1991
- 群馬県教育委員会『富士山I遺跡1号古墳』1991
- 群馬県教育委員会『丸山・北原』1992
- 群馬県教育委員会『下境I・II』1996
- 群馬県教育委員会『西大室丸山遺跡』1997
- 群馬県教育委員会『諏訪西遺跡・諏訪遺跡・柳久保遺跡・川籠皆戸遺跡・向原遺跡』1998
- 群馬県教育委員会『上西原遺跡』1999
- 群馬県教育委員会『村主遺跡・谷津遺跡』2000
- 群馬県教育委員会『北田下遺跡・中畑遺跡・中山B遺跡』2001
- 群馬県教育委員会『山王遺跡・大道遺跡・阿弥陀井戸道上遺跡・元屋敷遺跡』2002
- 群馬県企業局『萱野・下田中・矢場遺跡』1991
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団『荒砥洗橋遺跡・荒砥宮西遺跡』1985
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団『荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡』1986
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団『荒砥天之宮遺跡』1988
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団『二之宮宮下東遺跡』1988
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団『荒砥北三木堂遺跡I』1991
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団『今井白山遺跡』1993
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団『荒砥宮川遺跡・荒砥宮原遺跡』1993
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団『二之宮宮東遺跡』1994
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団『荒砥大日塚遺跡』1994
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団『今井道上遺跡』1994
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団『笕井八日市遺跡』1994
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団『小島田八日市遺跡』1994
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団『荒砥上ノ坊遺跡I』1995
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団『今井道上・道下遺跡』1995
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団『荒砥上ノ坊遺跡IV』1998
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団『荒砥下押切II遺跡・荒砥中屋敷II遺跡』1999
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団『荒砥荒子遺跡』2000
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団『年報19』2000
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団『年報20』2001
- 古澤学『群馬県古墳関連碑文雑記』『東国史論』第17号 2002



# 遺物觀察表

# 凡 例

- ・土器とそれ以外の遺物の観察表については同一体裁となっている。そのため、各項目中の表現がやや不自然な部分が生じている。
- ・出土状態の項中の+数値は遺構の底面からの出土高を示す。
- ・表のNo.は、挿図・写真図版中のNo.と一致する。
- ・法量の項の口は口径、底は底径、高は器高を表す。( )のあるものは復元値を表し、〈 〉のあるものは残存長を表す。

# 目 次

## 荒砥諏訪西遺跡

3区島出土の遺物	207
2区土坑出土の遺物	207
3区古墳出土の遺物	207~209
6区浅間B軽石下水田出土の遺物	209
4区溝出土の遺物	210
1区土坑出土の遺物	210・211
1区溝出土の遺物	211・212
2区井戸出土の遺物	212・213
2区土坑出土の遺物	213~215
2区溝出土の遺物	215~221

3区井戸出土の遺物	221
3区土坑出土の遺物	221~224
3区溝出土の遺物	224
遺構外出土の遺物	224~232
古墳時代竪穴住居出土の遺物	233

## 荒砥諏訪遺跡

方形周溝墓出土の遺物	233
遺構外出土の遺物	233

## 荒砥諏訪西遺跡

## 3区畠出土の遺物

No.	種類 器種	出土状態	残存状況 法量(cm・g)	①胎土②焼成 ③色調④材質	成・整形の特徴	備考	挿図No 写真No
3区-1	土師器 壺	サク溝内	残 口縁~胴 部上位 1/2 口 13.8	①粗砂②酸化 ③にぶい黄橙	口縁部は外面上半が磨き。下半が刷毛目。 内面は横方向の磨き。胴部外面は縦方向の 磨き。内面はていねいなナデ。	古墳時代前 期。	第14図

## 2区土坑出土の遺物

No.	種類 器種	出土状態	残存状況 法量(cm・g)	①胎土②焼成 ③色調④材質	成・整形の特徴	備考	挿図No 写真No
185土坑-1	土師器 壺	埋設	残 胴部破片	①粗砂少量② 酸化③灰白	外面、斜縦方向の刷毛目の上に磨きを粗雑 に重ねる。横方向の刷毛目に斜横方向の磨 きを重ねる。	古墳時代前 期。棺の蓋 か。	第19図 P L 28
185土坑-2	土師器 壺	埋設	残 口縁部欠 損	①粗砂少量② 酸化③にぶい 橙	外面、数回に分け斜縦方向の磨きを施す。 内面は下位に刷毛目を残す他は横方向のヘ ラナデ。	棺か。	第19図 P L 28

## 3区古墳出土の遺物

No.	種類 器種	出土状態	残存状況 法量(cm・g)	①胎土②焼成 ③色調④材質	成・整形の特徴	備考	挿図No 写真No
1墳-1	金属器 鉄 鎌	石室内 床面床	残 一部欠損 長 4.3 最大幅 2.1 厚さ 0.1		柳葉形を呈し、無茎。茎底部は大きく逆刺 形を呈する。鎌身部の中央先端から2cmの ところに径3mmの穿孔がみられる。両面に 木質が残る。		第23図 P L 28
1墳-2	金属器 鉄 鎌	石室内 床面床	残 1/2 長 3.1 幅 1.8		1と同型を呈する。下半は欠損する。木質 の付着が認められる。		第23図 P L 28
1墳-3	金属器 刀子	石室内 床面床	残 一部欠損 全長 12.3 厚さ 0.1		全長12.3cm。茎尻、切先ともわずかに欠損 する。茎は幅1.0~1.2cm。目釘を一箇所に 設ける。茎尻は栗尻。刃部への移行は背・刃 側とも関は流れる。鎌は幅0.8cmの環状を呈 すると思われるが佩裏側は欠損する。長径 1.6cm。刃部幅は7.6cmを測る。刃部長は関 寄りで1.5cm、背の厚さ0.3cmを測る。		第23図 P L 28
1墳-4	金属器 小 刀	石室内 床面床	残 一部欠損 全長 39.9 茎長 10.0 刃部長29.9		茎部は茎尻が欠損している。端部に向かっ て徐々に細くなる。刃部寄りで幅1.9cm、厚 さ0.7cm、一部に朽木残存する。茎尻寄りに 目釘を残す。刃部への移行は、背側は直角 関に近い。刃側も直角関と思われる。刃部 は切先に向かって徐々に幅を狭める。切先 はややふくらを有する。刃部幅は鎌寄り で2.8cm、背側の厚さ0.7cm。切先寄りに一 部朽木残存。鎌は幅1.8cmの板を環状にした もので、長径3.3cm、径2.5cmを測る。 頂部は板が抜けているが方頭状の柄頭と考 えられる。佩裏から刃部側にかけて布が付 着しており、現在は錆に置換している。内 面に一部木質が付着している。 柄頭の端部に2分の1ほどが残存着して いる。柄頭より一回り大きい。		第23図 P L 28
	柄 頭	石室内 床面床	長さ 4.5 長径 2.8~ 3.0 短径 1.6				
	黄金具	石室内 床面床					
2墳-1	金属器 刀子	石室内 床面上	残 茎部欠損		残存長は12.9cmを測る。茎部は欠損著しい。 刃部への移行は、背側が直角関、刃側はや や流れている。刃部幅は柄寄りで1.6cm、厚 さ0.4cmを測る。鎌は佩裏側が残存する。 幅1.4cmを測る。		第28図 P L 28

3 区古墳

No	種類	出土状態	残存状況 法量(cm・g)	①胎土②焼成 ③色調④材質	成・整形の特徴	備考	挿図No 写真No
3 墳-1	金属器 直 刀	3 区26住 埋没土	残 破片		直刀の残片である。残存長14.8cmを測る。刃部は刃側が全て欠損している。残存幅3.0cm。背側の厚さ0.6cmである。1・2は同一個体と考えられる。		第30図 P L 28
3 墳-2	金属器 直 刀	3 区26住 埋没土	残 破片		直刀の残片、切先部分である。残存長10.7cm。刃部幅は2.3cm、背の厚さ0.6cmである。轡の引手の一部で、残存長10.1cmを測る。	3～5は同一個体の可能性がある。	第30図 P L 28
3 墳-3	金属器 馬 具	3 区26住 埋没土	残 引手破片		引手壺は一部の残存に止まるが、環体がくの字状に屈折した一体造りである。環径は2.4cmに復元できる。引手は、右回りに振られている。現状は錆ぶくれが著しく、径1.1cmを測る。		第30図 P L 28
3 墳-4	金属器 馬 具	3 区26住 埋没土	残 銜破片		轡の銜の一部である。残存長9.1cmを測る。原形は断面円形を呈していたか。直径0.9cmを測る。銜先環は外径3.2cmを測る。断面はやや長円形。口卸は外径2.1cmに復元できる。		第30図 P L 28
3 墳-5	金属器 馬 具	3 区26住 埋没土	残 鏡板破片		轡の環状鏡板部分である。立間部分は欠損著しいが鉸具造り立間と思われる。環も欠損著しいが長径6.2cm、短径4.2cmと推定される。断面はやや横長の円形で0.9cmを測る。3・4と同一の轡を形成していた可能性あり。		第30図 P L 28
3 墳-6	須恵器 甕	3 区26住 埋没土	残 口縁部破片	①白色鈳物粒 ②還元③灰	先端は内外両面が肥厚。外面の端部に波状文を配す。		第31図 P L 29
3 墳-7	須恵器 大 甕	Qm-1	残 口縁～頸部破片	①白色鈳物粒 ②還元③灰	外面、弱い沈線の上下に波状文2段がみえる。		第31図 P L 29
3 墳-8	須恵器 大 甕	3 区 5 住 埋没土	残 口縁部破片	① 白色 鈳 物 粒・緑青色鈳物粒を含む。 ②還元③灰	外面、縦方向に板目状の調整。この上に3本1単位の沈線が2段めぐる。		第31図 P L 29
3 墳-9	須恵器 大 甕	3 区28住 埋没土	残 口縁部破片	①白色鈳物粒を含む。②還元③灰	外面、間隔を開けて縦方向の刷毛目。口縁部の上に2条1単位の沈線をめぐらす。		第31図 P L 29
3 墳-10	須恵器 甕	3 区28住 埋没土	残 胴部破片	①白色鈳物粒 ②還元③灰	外面、叩き目。内面、当て目をナデ消す。		第31図
3 墳-11	須恵器 甕	3 区26住 埋没土	残 胴部破片	①白色鈳物粒を含む。②還元③灰	外面、叩き目。内面、ナデ。		第31図
3 墳-12	須恵器 大 甕	周堀埋没土	残 胴部破片	①白色鈳物粒 ②還元③灰	外面、叩き目。内面、当て目をナデ消す。		第31図
3 墳-13	須恵器 大 甕	3 区26住 埋没土	残 胴部破片	①白色鈳物粒 ②還元③灰	外面、叩き目。内面、ナデ。		第31図
3 墳-14	須恵器 大 甕	3 区 4 住 埋没土	残 胴部破片	①白色鈳物粒 ②還元③灰	外面、叩き目。内面、当て目の上にナデを施す。		第31図 P L 29
3 墳-15	須恵器 大 甕	Pm-16・17	残 胴部破片	①白色鈳物粒 ②還元③灰	外面、叩き目。内面、当て目をナデ消す。		第31図
3 墳-16	須恵器 大 甕	周堀埋没土	残 胴部破片	①白色鈳物粒 ②還元③灰	外面、叩き目。内面、当て目をナデ消す。		第31図 P L 29
3 墳-17	須恵器 大 甕	Pm-16・17	残 胴部破片	①白色鈳物粒 ②還元③灰	外面、叩き目。内面、当て目をナデ消す。		第31図 P L 29
3 墳-18	須恵器 大 甕	周堀埋没土	残 胴部破片	①白色鈳物粒を多量に混入。②還元③灰	外面、叩き目。内面、当て目。		第31図 P L 29
3 墳-19	須恵器 大 甕	3 区27住 埋没土	残 胴部破片	①白色鈳物粒を含む。②還元③灰	外面、叩き目。内面同心円文状の当て目。		第31図 P L 29



No	種類	出土状態	残存状況 法量(cm・g)	①胎土②焼成 ③色調④材質	成・整形の特徴	備考	挿図No 写真No
3墳-20	須恵器 大甕	3区26住 埋没土	残 胴部破片	①白色鉾物粒 を含む。②還元③灰	外面、叩き目。内面、当て目、一部同心円文状。		第31図 P L 29
3墳-21	須恵器 大甕	周堀埋没土	残 胴部破片	①白色鉾物粒 ②還元③灰	外面、叩き目。内面、当て目をナデ消す。		第31図 P L 29
3墳-22	須恵器 甕	3区26住 埋没土	残 胴部破片	①白色鉾物粒 を含む。②還元③灰	外面、叩き目。内面、同心円文状の当て目。		第31図 P L 29
3墳-23	須恵器 大甕	3区28住 埋没土	残 胴部破片	①白色鉾物粒 を含む。②還元③灰	外面、叩き目。内面、当て目。		第32図 P L 29
3墳-24	須恵器 大甕	3区26住 埋没土	残 破片	①白色鉾物粒 を含む。②還元③灰	外面、叩き目。内面、当て目。		第32図 P L 29
3墳-25	須恵器 大甕	3区26住 埋没土	残 胴部破片	①白色鉾物粒 を含む。②還元③灰	外面、叩き目。内面、当て目。		第32図 P L 29
3墳-26	須恵器 甕	3区4住 埋没土	残 胴部破片	①白色鉾物粒 を含む。②還元③灰	外面、叩き目。内面、当て目。		第32図 P L 29
3墳-27	須恵器 甕	3区48住 埋没土	残 胴部破片	①白色鉾物粒 ②還元③灰	外面、叩き目。内面、当て目をナデ消す。	注記の誤り か。	第32図 P L 29
3墳-28	須恵器 瓶	3区48住 埋没土	残 胴部破片	①黒色鉾物粒 ②還元③灰	外面、叩き目。内面、当て目。	注記の誤り か。	第32図 P L 29
3墳-29	須恵器 甕	3区28住 埋没土	残 胴部破片	①白色鉾物粒 微量②還元③灰	外面、叩き目をナデ消す。内面、当て目。		第32図
3墳-30	須恵器 瓶	3区48住 埋没土	残 胴部破片	①黒色鉾物粒 微量②還元③ にふい橙	外面、叩き目。内面、当て目。	注記の誤り か。	第32図 P L 29
3墳-31	須恵器 甕	3区5住 3区26住 埋没土	残 胴部破片	①黒色鉾物粒 微量②還元③ にふい橙	外面、疑似格子目状の叩き目。内面、当て目。		第32図 P L 29
3墳-32	須恵器 瓶か	3区48住 埋没土	残 胴部破片	①黒色鉾物粒 微量②還元③ にふい橙	外面、疑似格子目状の叩き目。内面、当て目。	注記の誤り か。	第32図 P L 29
3墳-33	須恵器 甕	3区4住 埋没土	残 胴部破片	①白色鉾物粒 を含む。②還元③灰	外面、カキ目。内面、当て目。		第32図 P L 29
3墳-34	須恵器 瓶	3区26住 埋没土	残 胴部破片	①白色鉾物粒 微量②還元③ 灰	外面、カキ目。内面、当て目。		第32図 P L 29
3墳-35	須恵器 瓶	周堀埋没土	残 胴部破片	①白色鉾物粒 微量②還元③ 灰	外面、カキ目。内面、当て目。	天地不明。	第32図 P L 29

## 6区浅間B軽石下水田出土の遺物

No	種類	出土状態	残存状況 法量(cm・g)	①胎土②焼成 ③色調④材質	成・整形の特徴	備考	挿図No 写真No
浅間B軽石 下水田-1	須恵器 高台付椀	埋没土	残 高台部 1/2	①赤色粘土粒 微量②還元③ 橙	ロクロ成形。	平安時代。 内外面とも 器面磨滅。	第33図
浅間B軽石 下水田-2	須恵器 杯	No40水田上	残 底部 底 5.1	①細砂少量② 還元③灰	右回転ロクロ成形。底部回転糸切り離し後 無調整。	平安時代。	第33図

4 区溝・1 区土坑

4 区溝出土の遺物

No	種類 器種	出土状態	残存状況 法量(cm・g)	①胎土②焼成 ③色調④材質	成・整形の特徴	備考	挿図No 写真No
2 溝-1	金属器 釘	埋没土	残 完形		断面四角形を呈する。原形は長さ12.4cmほどと推定されるが屈曲している。頭部は幅0.9cm、厚さ0.9cmを測る。先端はやや尖る。		第39図 P L 28
3 溝-1	土師器 甕	底面	残 口縁部一部残存、 胴部3/4 口 (20.7)	①粗砂②酸化 ③にぶい橙	口縁部横ナデ。胴部外面はていねいなヘラナデ。内面は下半にヘラナデ。部分的に指頭圧痕。	古墳時代。	第40図 P L 28

1 区土坑出土の遺物

No	種類 器種	出土状態	残存状況 法量(cm・g)	①胎土②焼成 ③色調④材質	成・整形の特徴	備考	挿図No 写真No
9 土坑-1	石製品 石 臼	埋没土	残 一部欠損 全長 <26.8> 幅 <26.3> 厚さ <9.2> 重量 7,340	④粗粒輝石安 山岩	上臼である。上縁部は全て欠損するが幅3cm前後と考えられる。供給口は、くぼみ側の径が3.7cmである。挽手穴は欠損著しいが径2.5cm以上で、側面から約5cmほど削りこんでいる。供給口の反対側に位置している。磨り合わせ面は6分画、副溝は4・5本である。片減りが著しい。芯棒受の径は4.3×4.0cm、深さ2.2cm。		第47図 P L 29
18土坑-1	土師器 埴	埋没土	残 口縁部 3/4欠損 以下完存 口 (7.8) 底 4.0 高 7.7	①粗砂②酸化 ③にぶい黄橙	胴部外面の最下位に刷毛目が残る。	古墳時代前期。器面磨耗著しい。	第47図 P L 29
23土坑-1	古 銭	埋没土			元豊通寶。	墓坑出土と考えられる。	第47図 P L 29
23土坑-2	古 銭	埋没土			寛永通寶。		第47図 P L 29
23土坑-3	古 銭	埋没土			開元通寶か。		第47図 P L 29
25土坑-1	軟質陶器 内耳鍋	埋没土	残 口縁部破 片	①細砂・白色 鉍物粒②還元 ③灰	先端、外面、丸く肥厚。内外面とも横ナデ。	在地系。中世。	第47図 P L 30
25土坑-2	軟質陶器 内耳鉢	埋没土	残 胴部破片	①細砂②還元・軟質③にぶい橙	内外面ともナデ。横ナデ。	在地系。中世。	第47図
25土坑-3	土師質土器 皿	埋没土	残 口縁部 3/4欠損 口 8.2 底 6.1 高 1.7	①粗砂～細砂 ②酸化③にぶい黄橙	口径に比して底径が大きい。右回転クロロ成形。底部は回転糸切り離し後無調整。	器面は磨耗している。中世。	第47図 P L 29
25土坑-4	軟質陶器 内耳鉢	埋没土	残 破片	①片岩の礫②還元・軟質③灰	外面、ナデ。内面、横ナデ。	在地系。中世。	第47図
25土坑-5	軟質陶器 内耳鉢	埋没土	残 胴部破片	①細砂・白色 鉍物粒②還元・軟質③灰	外面、ナデ。内面、横ナデ。	在地系。中世。	第47図
25土坑-6	軟質陶器 大 甕	埋没土	残 破片	①礫・粗砂②還元③灰白	外面、弱い刷毛目。内面、ナデ。	常滑。	第47図 P L 30
25土坑-7	土師器 手づくね	埋没土	残 口縁部 1/2、以下 完存 口 4.3 底 3.3 高 4.6	①粗砂・細砂 ②酸化③浅黄	内外面とも指頭によるナデ。	13~14C。	第47図 P L 29

No	種類 器種	出土状態	残存状況 法量(cm・g)	①胎土②焼成 ③色調④材質	成・整形の特徴	備考	挿図No 写真No
25土坑-8	軽石製品 不明	埋没土	残 1/2 全長 < 8.8> 幅 < 5.5> 厚さ 5.5 重量 113	④軽石	原形は片面に大きな割り込みを有し、カップ状を呈していたと思われる。上端及び側面には成形が施されている。		第47図 P L 29

## 1区溝出土の遺物

No	種類 器種	出土状態	残存状況 法量(cm・g)	①胎土②焼成 ③色調④材質	成・整形の特徴	備考	挿図No 写真No
1溝-1	土師質土器 皿	埋没土	残 底部 底 6.4	①粗砂・細砂 ②酸化③明赤褐	右回転ロクロ成形。底部系切り離し後未調整。	中世。	第47図
1溝-2	土師質土器 皿	埋没土	残 底部 底 4.5	①粗砂・赤色粘土粒②酸化③にぶい橙	右回転ロクロ成形。底部は回転系切り離し後無調整。	中世。	第47図
1溝-3	軟質陶器 内耳鍋	+20	残 口縁部破片 口 (31.0)	①細砂多数②酸化・軟質③灰	口縁部は内側にわずかな稜をなした後、外傾の度合を変えている。先端は平坦面をなす。内外面とも横ナデ、ナデ。	15C。	第47図 P L 30
1溝-4	軟質陶器 内耳鍋	+10	残 口縁部破片 口 (31.0)	①細砂・雲母・黒色鉱物粒②還元・軟質③灰黄褐	内外面とも横ナデ。	在地系。15C。	第47図 P L 30
1溝-5	軟質陶器 片口鉢	埋没土	残 破片 口 (30.6)	①細砂②還元・軟質③灰	器形は斜め上方に向かって立ち上がる。先端は尖る。内外面ともナデ、横ナデ。内面は使用により弱い磨耗痕あり。	14C後半。	第47図 P L 30
1溝-6	軟質陶器 内耳鉢	埋没土	残 口縁部破片	①細砂・黒色鉱物粒②還元・軟質③灰	内外面とも横ナデ。	在地系。中世。	第48図 P L 30
1溝-7	軟質陶器 内耳鉢	埋没土	残 口縁部破片	①細砂少量②還元・軟質③灰	内外面とも横ナデ。	在地系。中世。	第48図 P L 30
1溝-8	軟質陶器 内耳鉢	底面	残 胴部破片	①細砂多数②還元・軟質③灰	内外面ともナデ。横ナデ。	在地系。中世。	第48図
1溝-9	須恵器 不明	埋没土	残 胴部破片	①白色・黒色鉱物粒少量混入②還元③灰	内外面ともロクロによる調整。		第48図
1溝-10	鉄製品 板状製品	埋没土	残 破片 長 < 3.7> 幅 2.8 厚さ 0.3		器種は不明。横幅がほぼ一定する板状品。孔は無い。		第48図 P L 30
1溝-11	石製品 砥石	埋没土	残 完形 全長 11.3 幅 7.5 厚さ 3.3 重量 272	④粗粒輝石安山岩	長軸方向の断面は山形を呈する。片面は使用により広い平滑面が形成される。端部寄りには面が弧状を呈する。		第48図 P L 30
1溝-12	石製品 砥石	埋没土	残 完形 全長 6.5 幅 8.0 厚さ 2.5 重量 158	④粗粒輝石安山岩	各面に使用面が形成される。表面は周縁でその角度が変わるものの平坦な面をなす。側面小口面には小さな使用面が作られ稜をなす。		第48図 P L 30
1溝-13	石製品 砥石	埋没土	残 一部欠損 全長 < 6.6> 幅 5.8 厚さ 2.7 重量 127	④粗粒輝石安山岩	小口面を除く各面に使用痕が認められる。		第48図 P L 30